

# 奇譚クラス

●新しい風俗文獻誌



11

成人向

NO!



作六鬼団



決定版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

|| 客号『花決定版』 || 定価一、〇〇〇円 (送200円) ||

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

△ 内容主要見出し一覧 △

第一章 発端 第二章 人探し 第三章 麗人 第四章 援手 第五章 救済 第六章 餓魔 第七章 恐怖 第八章 淫蛇 第九章 美姉 第十章 色事 第十一章 落室 第十二章 密室 第十三章 脱走 第十四章 華やか 第十五章 地獄 第十六章 翻弄 第十七章 一千万円の身代金

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄図 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すさまじいシヨ一の展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇シヨ一 第五十三章 華々しきシヨ一の展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい穢の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなく汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。  
〒558 暁出版株式会社宛



# 女性モデル募集

## 勇敢な女性の出現を望む

▽規定△

入選作品の

一、以て御承知おき願います。  
一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。たとえ未発表の作品でも他社へ投稿されたものはお断りします。作品の中に他人の作品を引用する部分がありましたら、出処（作者、書名など）を明記して下さい。  
一、原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙に記します。

紙をご使用下さい。枚数は四百字詰換算にて三十枚以上三百枚まで。三百枚以上に亘るときは一応事前にご照会願います。一、締切日は毎月十五日、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載致します。一、懸賞応募作品は一般の原稿、読者原稿と區別するため第一頁に「懸賞」とお書き下さい。ペンネーム、匿名はご自由ですが、住所へ連絡先、氏名は必ずお書き願います。応募者の氏名を公開したり他へ洩らしたりなどは絶対に致しませんから御安心下さい。一、ご投稿された原稿は原則として返戻は致しません故、若しご入用でしたらコッピをとっておいで下さい。一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第41号、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種郵便にて）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断り致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

◎誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さい願います。御都合に依つて分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真と同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先Ⅱ 大阪市住吉郵便局私書箱第41号

曉出版株式會社編集部宛



[illegible]

Osaka Japan

11月号 ¥350



# カメラハントとカメラポの美女たち

## 沖縄美人の明子嬢

本誌十月号のカメラポで塚本鉄三氏が沖縄出身の肉美人座間明子嬢の責め緊縛に成功し、その麗筆にて詳細の経緯を発表した。明子嬢は、その責め緊縛の成功を、その麗筆にて詳細の経緯を発表した。明子嬢は、その責め緊縛の成功を、その麗筆にて詳細の経緯を発表した。

## 妖麗な縛られぶり

座間明子嬢の妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 股間縛りの痛さか

座間明子嬢の股間縛りの痛さを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その股間縛りの痛さを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 悶える厳しい縛り

座間明子嬢の悶える厳しい縛りを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その悶える厳しい縛りを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 椅子で演ずる痴態

座間明子嬢の椅子で演ずる痴態を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その椅子で演ずる痴態を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

座間明子嬢の身体に、その妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 観念して身を任す

座間明子嬢の観念して身を任す姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その観念して身を任す姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 縄は柔肌をくびる

座間明子嬢の縄は柔肌をくびる姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その縄は柔肌をくびる姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 美しさ抜群の正面

座間明子嬢の美しさ抜群の正面姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その美しさ抜群の正面姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 飼育女性好美夫人

座間明子嬢の飼育女性好美夫人姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その飼育女性好美夫人姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

座間明子嬢の身体に、その妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 悦虐にむせぶ美貌

座間明子嬢の悦虐にむせぶ美貌を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その悦虐にむせぶ美貌を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 責められて恍惚境

座間明子嬢の責められて恍惚境姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その責められて恍惚境姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 足挙げと開股縛り

座間明子嬢の足挙げと開股縛り姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その足挙げと開股縛り姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 超羞恥責めの極致

座間明子嬢の超羞恥責めの極致姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その超羞恥責めの極致姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 股縄は知っている

座間明子嬢の股縄は知っている姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その股縄は知っている姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

座間明子嬢の身体に、その妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 鼻責めの悦楽境地

座間明子嬢の鼻責めの悦楽境地姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その鼻責めの悦楽境地姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 鼻を愛撫する責め

座間明子嬢の鼻を愛撫する責め姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その鼻を愛撫する責め姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 蠟燭責めと臀打ち

座間明子嬢の蠟燭責めと臀打ち姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その蠟燭責めと臀打ち姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

## 喰い込む股間縛り

座間明子嬢の喰い込む股間縛り姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その喰い込む股間縛り姿を、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。

座間明子嬢の身体に、その妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。明子嬢は、その妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラポで詳しく紹介した。



## 本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
として編集しておりますが、青少年の保護  
育成に関する条例には抵触しないよう、十  
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの  
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
めの努力はいたしません。



## 奇譚クラブ

△第二四巻 第十一号・通刊第二七二号△

(昭和四十五年) 十一月号 目次

### △本 文△

扉で一言△縛り▽の目的……………	丘	久志……………(9)
「奴隷妻」に魅せられて『胴鎖あれこれ』……………	柴	利好……………(10)
谷山久美子に想う プレイの一線……………	吉井作一郎……………	(17)
懸賞入選△性犯罪入門▽進化都市……………	牧	麗子……………(18)
SM随筆 あるM的妊婦の告白……………	佐野みさ子……………	(38)
女責め図絵の系譜『人身御供の女』……………	南	彦造……………(40)
連載小説△大噴火△(第二十六回)……………	千葉	青鬼……………(42)
創作・Mストーリー『マリオネット』……………	せとよしや……………	(50)
懸賞入選 誘惑△ある女教師の犯罪▽……………	島	青二郎……………(66)
九月号読後感△久美子讃△……………	須坂	旭……………(75)
SMカメラ・ハント△村上喜美の巻▽……………		
『豊満女体猥ら書き』……………	辻村	隆……………(76)
連載・Mの傾斜 壺中の園(7)……………	真砂十四郎……………	(98)



奇クサロン

232

SMの花盛りに想う	久保田 暁
夫婦プレイ報告「カラーで妻を写す」	東京ET生
女房ユルセ「銀座狐」	広島 一騎
我が主観 縛りの美学(五)	ロマン派生
漫画・マゾミちゃん「あざ」	九美 淳
女体緊縛と羞恥責	名古屋S生
渡部好美夫人を想う	国川 東一
サロン楽我記(第七十七回)	辻村 隆
イメージ画「かたつむり」	小川 茂正
イメージ画「正邪いずれの刃」	神戸狂四郎
(九月号の読者通信を讀んで)「縄の長さ」	早木 夢二
夢は夜ひらく	丸出駄目夫
イメージ画「仄か美」	堀 真彦
愛妻をモデルに	渡部 光雄
編集部だより	編集部
カメラハン万歳	アダムS好
ふんどしの効用	間和志締男
イメージ画「あと一押」	妙花 山人
女斗フアンの弁	雄松比良彦
公園に拾う「あたりまえ」	青井 松造
美少女無惨面秘帖「竹籐の怪」	桐原 紫門
夫婦交換プレイの提唱	松井 寛
短信往来 辻村隆さまへ	仏山 逸富
東京ETさまへ	鈴木 Y容
「鼻責め」願望	東京・Y Y
あるマジメ「心理的SM世界」	須渾 朔
なたわごと	志羽 利也
イメージ画「屈辱」	岡田 康彦
縛り映画鑑賞 私の採点	岡田 康彦
イメージ画「どうしてやろうか」	宇都宮 広

希求願望 妊婦の羞恥責め	高野 原美	(107)
美女緊縛作法『八重垣流秘聞』	風流極道軒	(108)
連載・アブ紳士行状記「M派交友録」	鬼山 絢策	(124)
創作 涙のラン・ウェイ	長谷田亀治	(134)
被虐の旅シリーズ「仙人掌の夢」	由利美千子	(142)
耽美と醜惡の谷間 ママの饗宴	浅羽やすし	(150)
体験告白「散歩道の拾い物」	舟山 和夫	(163)
水田真紀子「オフィス・ガール」	水田真紀子	(166)
習作シリーズ「オフィス・ガール」	水田真紀子	(166)
カメラ・ルポ『惑溺の周辺』	塚本 鉄三	(174)
夫婦相撲 妻の挑戦	椿 寿郎	(187)
長篇連載『花と蛇』	団 鬼六	(190)
創作 光り煌く鞭(その一)	宇光 仙	(196)
懸賞入選「男の市場」	曾務 厳矢	(206)
創作 六人目の女	戸塚 一鬼	(218)
体験的小説『盛夏の詩』	雉子田美夫	(224)
読者通信	編集部選	(252)
読者ギャラリー「貢物の報酬」	岡たかし・「思春の嵐」	室井亜砂路
「恥辱の木馬」	豪城二・「即席運搬車」	宮城昌子
目次カット	「シユーズ台」	岡 たかし
扉カット	「超 美食」	日本武士



☆北欧系の金髪碧眼の美女を緊縛する

六月号誌上にて、うら若き白人の女性を「純日本式縛り」にて縛り上げたポルノ金髪碧眼の美女を縛るVを発売しました。鮮明な写真に、紙に焼けた極めの要望に、たはしといふマニアの望に、文獻的に分譲することにし、資料だと思ひます。お早い目でお申し込み下さい。お申込は、大阪市阿倍野局私書箱第14号、天星社宛前金にて願います。

首縄高手 小手縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
生れて初めて縛られる首縄高手。小手縛りの全裸の肢を言われる。ままた動かし床の間の飾り物のように白い肌を晒すのだった。

縄の痛さに耐える

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
ぎゅうぎゅうと力まかせに締めつける縄は、柔肌に驚くほど喰い込んでは、その苦痛に耐えようとする。彼女の表情に一段と迫力を増す。

股間縛は凄く締る

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
きびしい高小手縛りに加えて、首縄、更に埋れるような股間縛り。で肌を割り不自然な姿態を強要すれば、美しい顔面が忽ち紅潮する。

卓上の裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
テーブルの固い板の上に正座させられた白人の美女が縦横に縄を掛けられて二つ折りになっているのを正面側面背面から狙った。

両手吊りの全裸像

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
シーラ嬢の美しい容貌とすらりと伸びた肢体とが両手を吊られて拘束されることによって諦めきった被虐美を最高に發揮している。

投げだした被縛体

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
縛られた彼女の心の中にマゾの芽が芽ばえていくかどうかかわからないが、全裸で縛られたこのポーズの中に諦めきった相が見える。

麻縄は女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
ドス黒い麻縄は情容赦なく白肌に埋まり青い目を曇らせて、この異様な緊縛に耐えようとする。

縛られるのはいや

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
つぶらな青いひとみを見開いて何をするといいかたげに責手を見る目には可憐な拒否がある。

私の裸を見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
多分彼女は今まで人前で裸の肌を晒したことがないだろうに、今は後手に縛られて前をかくす。さえずなく喘ぎ悶えるだけである。

日本式縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
すうらりと伸びた長い脚、しなやかな足掻きを見せるに過ぎない。日本式縛りの厳しさが、今こそ彼女の骨身にこたえるのだ。

白人をいたぶる手

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
責めのイケエとなつた哀れな彼女。悪魔の触手によって身動きも出来ない縛られの肢をさんざんに、いたぶられるのであった。

金髪美女も台なし

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
房々とした金髪、格好のよい高い鼻、平常は男性を尻目に高慢だったか知らないが、このように縛られると裸を羞らう哀れな女だ。

被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
高小手乳房縛り首縄に責めあげたシーラを様々にいじめ、其の表情をアップで狙いをつけた。

美しき緊縛の姿

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
彼女の顔の美しさ、肢体の美しさを縄を用いることによって、このように最大限にまで高めて、この出来たのは大成功であると思う。

逆エビ責めの外人

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
長い足を逆に折り曲げてエビ縛りにすれば、流石にスタイルの良さを誇るだけあって、まことに優美な肢体を輝くばかりに開陳した。

雁字搦目で椅子に

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
あるだけの縄を使って、シーラの白い肌に狂ったように掛けた結末が、このようになつてしまった。縛りとポーズになつてしまった。

落花狼藉のしとね

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号Aい  
ビール瓶、コップ、食べ散らかした寿司の器、その中で麻縄で縛られた彼女は、疲れきった全裸体を長々とびたように横たえた。





日 本 武 士 ・ 画

### △縛り△の目的

『縛る』ということは、本来自分が相手方の意に反して様々な『責め』を強行する為に相手方の自由を拘束する為の手段である。即ち△緊縛△はあく迄手段であり、目的はその後に於ける責めにこそある。人間は弱い者に対しては、尚意地悪く痛めつけ悲鳴をあげさせ、而もそれに対して何らの反抗も出来ず、苦痛と恥辱にのたうちまわる相手を見る時、そこに残酷な喜びを感じる心を、誰しも内心秘かに持っている。

同情などというものも、自分がそのような被害者でない者が感じる優越感の一種であり、嗜虐美を感じる気持と一枚の紙の表裏である。従って、縛った以上はその後の責めがなければ画竜点睛を欠くものであり、Mの側に於いても誠に物足りなく感ずる筈である。

然るに『縛る』だけに終って、即ち手段のみで本来の目的である△責め△の伴っていない写真が多いのは一体どうした訳なのだろうか。勿論、本来手段であったものが何時の間にか、それ自体が目的に転化するということとはあり得る。女体緊縛という場合にも美しい女体が縛られること自体に美しさを感じる事は、それなりに意味はある。

(丘 久志)



.....「奴隷妻」に魅せられて.....



## 胴鎖あれこれ

柴 利 好

カット・あらいかず

「奴隷妻」という魅惑的な言葉を初めて知ったのは、片矢薫氏のお作だったと記憶しています。この作中の女性は不幸にして夫の緊縛嗜好に耐え切れず、遂に家出してしまうのですが、この時、既に彼女は被虐生活を懐しむ女になっているのです。白い表紙の、随分昔の号だったのですが、茶の間でエビ縛りに喘ぐ女の挿絵を、今でもはっきりと思い出すことができます。

まこと夫の意のままに被虐の生活に耽溺し切っている奴隷妻の姿こそ、SM愛好者の理想的な姿といえましょう。

「奴隷妻」の語義を明確に規定するのは難しいことですが、常々牛馬のようにこき使われ

肉体的過重労働に泣き続けるとか、精神的虐待に絶えず呻吟するとかいう態の悲境の妻は私の憧憬する「奴隷妻」の概念とは明らかに相違していることは、お分かり戴けると存じます。

そこで「奴隷妻」のイメージですが、これは当事者の性向や嗜好によって十人十色といえましょうが、少なくともS・Mプレイがその日常生活に採用され、それが当然そうあるべき姿として融合していることが、重要な条件であることは問題ないといえましょう。

夫から妻に対して与えられた行為が、妻にとって不適合の場合、つまり肉体的でも性的にでも耐えることができなかった場合は、

その生活内容自体は「奴隷妻」のそれであっても、そこにはただ暴虐の存在があるのみであって、悦虐のない奴隷的境遇に泣く妻でしかありません。理想的には夫の行為を一途に受け容れ、苦痛や屈辱を愉悦の快感にまで昇華できた妻こそ、本当の意味の「奴隷妻」であると思います。

「奴隷妻」なるもののイメージで、私の理想とする典型的事例として一、二を挙げるならば……四月号の渡部好美夫人の告白には、胸を激しく打たれるものがありました。

『私は、どうしてこんな女になってしまったのでしょうか。結婚して六年、主人によって飼育され、教えられて……しばりの責めに何と



もいようなない興奮をおぼえ、もう私からロープのない生活など考えられなくなってしまいました』

こういう書き出しで始まるこの手記は、挿入された彼女自身の全裸の緊縛写真とともに「オシバリ」と名づけて、被虐の日常生活を満喫しておられる夫人の性を、充分に窺うことが出来る思いがしました。

SMカメラハント「乱倫の生態」のヒロイン滑川幾代夫人は、長い航海から帰国されたご主人の滞留期間中というものは、ご主人のために、文字通り身体が目茶苦茶になるほどの責め折檻を甘受し、陶酔の被虐生活を続けておられるようですが、このような夫婦の異状な日常生活が出来得るのも、こうした行為が全て夫婦という一心同体的結合体としての深い理解と信頼と愛情とによって裏付けされているからなのでしょう。仮にこの夫婦の情感が欠損して、尚かつ行為のみ存続したとしたら、そこには奴隷妻としての真の姿は失われ、ただ荒涼たる惨虐性のみが残るということになると思います。しかも、本当に愛しているからといって、如何なる暴虐も許されるべきものかどうかは問うも愚かなことでしょう。何年か前の「憎縄記」論争に俟つまでも

なく、善良な市民として、良識ある公人として幸福な日常生活を目標とする限り、その限界の判断に迷うことは、まずあるまいといえるのではないのでしょうか。

○

「奴隷妻」といっても、日常生活では一定の時間、一定の期日を限ってのことでしょう。そうしなければ本来の夫婦生活、家庭生活及び社会生活を総て犠牲にしなければならぬ訳ですから、これは当然のことです。しかしこうした「奴隷妻」の生活にあつては、このような特定の時期を限定することなく、奴隷として主人に総てを捧げ尽した、「奴隷妻の証<sup>あかし</sup>」を、絶えず持ち続けていたいという（逆の立場からすれば絶えず持ち続けさせたいという）願望が生まれてくることは、充分考えられます。先ず形式的には「奴隷妻誓約」がその一つの現われでしょう。これが更に進んだとき、その証を肉体に直接うける方法が採られて来るのだらうと思います。

この証の最も顕著で普遍的な例として刺青の実態が挙げられるようです。そのデザイン刻まれた文言、施術部位などによって、女の主人に対する献身度を知ることさえできそうです。在大阪の某女性が全身に刺青を入れ終

った時「初めて男のものになり切ることができたという安心感で満たされた」という告白は、M女性の隷属性を如実に示す好例でありこの心情こそ「奴隷妻」の偽りない真姿であろうと思うのです。

しかも、奴隷という観念を私に与えてくれる女性の隷属生活とは、右の刺青施術もさることながら「鉄鎖で縛られ続ける惨めな生活の実践」こそ最もふさわしいのではないかと思えるのです。私のこの夢想通り、鉄鎖による緊縛を絶え間なく肌身に感じながら、実際に日常生活を送っておられる女性の存在を誌上で発見したときの驚きと嬉しさ。このことについては既に今田、山本両夫人に対する讃仰文として詳さに申し述べたことがありますから、ご記憶の方もあるかも知れません。

山本夫人のその後については、拙稿に対する返答文の形式で委細拝承しております。鎖ブラジャーも、鎖パンティーも初めの頃より鎖の数が増え、一層複雑に柔肌深く厳しく喰い込んでいる有様を写真の上で明白に知りました。夫人は一生このお姿の俤でお暮しになりたいとお覚悟の程、感動を以て承ったことでした。

○



一方、今田夫人の消息は杳として杜絶え、お案じしておりました処、先号でご主人からの久々のご投稿によって益々お盛んな趣を知って安堵した次第です。奴隷妻第一号として誌上を飾られてから既に三年も経過しているのですが、その間、夫人の胸にハンダづけされた鎖は「一度もはずしたことがない」とのお言葉は、嬉しい限りです。

実は夫人のこの鎖がどんなもので、それがどんな風に嵌め込まれているものか、誌上では写真が不鮮明で、その実態を理解できずにおりますが、しかし鎖を嵌めたため、腰の線が取り立てて変化しているとも思われませんので、鉄鎖それ自体は特に厳しく締めつけているとは思われません。それにも拘らず私の心を打った理由は、鎖がハンダで嚴重に接着されてしまっているために、夫人の意志では絶対に外すことができないという隷属性にあるのでした。錠止めされた鎖ブラジャーについては触れられていませんから、多分、時折は、取り外しが行なわれているのでしよう。

要らぬおせっかいかも知れませんが、このハンダ付けされた鎖について、私としては一つ残念に思われることがあるのです。それ

は隷属性の象徴として讃えた「一度も外されたことがない」ということが、逆にご夫妻のプレイ内容をマンネリ化する一因になっているのではないかとも思われる点です。この言葉をもそのまま解釈すると、ハンダが一度も取られたことがなく、従って鎖の長さが三年間全く、同寸法で保たれていることを意味します。当然、鎖の緊縛度も不変であると解されます。先にも一言したように鎖は、さして厳しく締め込まれてはいない様子です。これは鎖装着の意義が、夫人に対する肉体的苦痛や実生活に対する行動制限にあるのではなく、多分に隷属性を強いるメンタルな要素を持つものと理解できます。勿論、そのことにSM的意義のあることはよく判りますが、余りに勿体ないような気がしてなりません。

何故ならば人体で、特に女性の胸ほど人為的に変形可能な部位はありません。その意味で夫人の胸が三年間、同じサイズのまま止まっているということが私には惜しまれるのです。そこで一つ勝手な提案を述べることをお許し願って、鎖の改竄と改良をなさっては如何でしょうか。少なくとも三年間、同じサイズの鉄鎖で締め続けられておれば、胸の皮肉はその緊縛と感触に慣れ、既に鎖を嵌め

られているという特殊な被虐的感覚が失われてしまっているのではないのでしょうか。締めれば締めるだけ細く小さくすることのできる夫人の胸を、いつまでも原形維持のまま放置なさるよりは、一時期を限って少し緊縛度を強めて行かれては……と思うのです。それがためには、締め直しの都合上、ハンダ付けをし直さなければなりません。このことは、「鎖を嵌め切り」の意義を失わせるものではないと存じます。

夫人にして見れば、それだけ肉体的感覚が強まり被虐の感情がより以上に昂まって、それが日常生活の中に深く沈潜し、融合するものになれば、プレイマンネリ化の懸念を解消さす一助となりはしないでしょうか。胸の締めつけが厳しくなればなるほど鎖の環数は減って行き、長さが短くなります。初め細腰の体線に添って巻かれていた鎖は、締めつけが進むにつれて胸中に深々と喰い込んで、やがては腰肌深く陥没するでしょう。ウエストの正常の曲線が全く変形して、上下に張り出した厚い肉棚を繋ぐ一筋の条溝と化し、僅かに背面で腰椎骨のために陥没を妨げられた箇所だけに漸く、鎖を認めるほどになる筈です。普通の体質の女性ならば、ウエスト・サ



イズは訓練を続けければ正常围の三分の二くらいに細く締められるといわれます。事実、西欧では両掌を細腰に回して、指先が届くほどの細さが男性の女性に対する理想であり、そうなることが女性の願望でもあった時代さえあったそうです。仮に二十四吋のサイズとすれば八吋細めて十六吋の細腰を作ることができる訳です。

今田夫人に今直ぐ、かつての西欧風の十六吋ウエストを望むのは無理でしょうが、こうした変化をお求めになることによって、SM生活は新しい境地を拓くことが出来るのではないのでしょうか。以前のご投稿では、胸鎖に補縄して股縛りにしたりなさるとのことですが、胸鎖は今でも緊縛の基点として様々に利用されておられると思われまします。胸鎖の下方臍部、下腹部なども胸鎖と同じ鉄鎖で締めつけ、別の補鎖によってそれらを縦に斜めに連縛し、股間や高腿まで鎖の締めつけが進むとヒップ全体を包む鎖パンティーが完成されます。胸鎖はもとより、これら鉄鎖の締めつけが恒常化すれば、夫人の白い柔肌には内出血に伴う色素の沈着が進みます。これは恐らく刺青の施術より以上に素晴らしい奴隷妻の証として終生、消えることなく定着することでしょう。

よう。ただし、締めつけの強化は必然、肉体的苦痛の増大を来たしましょうから、常々夫人の健康第一と思召し、決してご無理なさらずぬことを、提案者としては呉々も申し添えた気持です。

○

昨年の九月号で、鎖による胸締め施錠を日常生活の内に取り入れておられる橋本八重子夫人の実録を写真と共に非常な興味を以て拝見しました。不躰ですが、あなたを鎖施錠の奴隷妻「第三の女」と、呼ばせて戴きましよう。

ご主人の説明によれば、小さな南京錠で繋がれた鉄鎖のT字帯は、長さ二メートルとあります。二メートルの鎖を鎖尻を余さずキツチリ身体に合わせて襠状に締めるには、胸鎖を二筋にするか縦鎖を二筋にするかしなければならぬ筈です。お見受けする限り、夫人の場合は後者による方法が採られている様子です。これは生理の必要性からも当然と解釈できます。「心理的な羞恥責めが目的で他意はない」といわれている点からも、縦縛りに重点が置かれていることが判ります。

夫人は、この鎖のT字帯を締められたその上から、さらに別の縄で酷しく縛られて外出

なさるそうですね。しかも縄目はT字帯の部分だけに止どまらず、全身にも及んでおり縄付のままでご主人のコートを着せられて深夜映画を見に出掛けたりなさること。これは私の勝手な想像ですが、この時になさる全身緊縛は、胸や腹などの胸部ばかりではなく、両腕までも縄掛けされる場合もありはしないのでしょうか。もしかしたら両手首までも前手か後ろ手に嚴重に縛り上げられ、コートも着せるのではなく、後ろから羽織ってボタン掛けしただけの姿ではないのでしょうか。何れにしても、こうした行為は小竹夫人の事例に酷似した日常であるといえましよう。

さらにまた、二年の飼育期間に剃毛五回とありますし、複数プレイの期待もお持ちの様子です。これらの点では安井夫人のM性とも近似しています。いわば八重子夫人は、最近の誌上を飾った奴隷妻の集大成的資質を早くも顕わしておられる貴重な存在と申せましよう。

そこでマニヤたる私から、奴隷妻として成長していただきたいためのお願いを並べてみましょう。

一、T字帯の緊縛度、特に胸鎖の締めつけを一段と強められたいこと。これは今田夫人







のですが、胴鎖の常時着帯は「定時制奴隷」をして「全日制奴隷」に転化させることを意味するのです。

この胴鎖は、ロープによる緊縛の時以外には、昼夜の別なく四六時中、着用を強いられるべきだと思います。縄縛りの時にも外さずに置くことはM女性にとって、なお更、結構なことではないでしょうか。和田平助氏のご夫人なども、ロープと鎖の二重苦を受けておられます。ただ全裸の肌を縄だけで縛られる風情を愛撫したい場合もありましょうから、そんな時には鎖を外した方が情緒的でしょうけれど……。

縄下着や鎖下着は、それを着用している間だけが奴隷タイムであり、奴隷妻としての意識下の生活であったのでしょうか。それがこの胴鎖を常時着帯することによって、奴隷タイム以外の自由に解放された時間さえも、常に奴隷妻としての証を肌身に感じ、その意識下に陶醉し続け得ることになるのです。時偶この胴鎖が解き放されることがあっても、それは決して自由を許された訳ではなく、その時こそ「奴隷タイム」として本番の耽溺が待ち受けている仕組みというのはどうでしょう。

○

素肌の胴に鎖を締める風習が、一般的風俗として西欧では存在していたと信じられる光景を「世にも怪奇な物語」と題するオムニバス映画で見ました。この映画の第二話で、アラン・ドロン扮する軍人に賭博で負けたブリジッド・バルドー扮するプレイ・ガールが、その弁償として鞭打たれることになります。B・Bはドレスを脱ぎ、下着の背を上げ、腰骨まで裸に剥いだ背面を晒して鞭を受けるのですが、なんとその彼女の細腰にネック・レイスのような金の細い鎖が嵌められているのです。このような全く人目につかない部位でした。このような全く人目につかない部位まで鎖で飾る習慣が、どれほど行なわれていたかは知りません。が、比較的時代考証にやましい外国映画の演出ですから、この胴鎖はB・Bに限られたものではなく、恐らく前世紀の一時代に特殊な婦人の間で行なわれていたものと解釈しても差支えありますまい。何れにしても、全く予期しない光景でしたので、印象的でした。

ミニ・スカートの流行に伴って、アクセサリの一つとして、鎖や金属片によるベルトが現代の若い人達に使われています。それはそれとして、衣服その物にまで鎖と金属片を繋ぎ合わせた品物が市販されているのを新宿

の伊勢丹で見て、いささか呆れました。小竹兄も指摘されていましたが、一つのショールとか試作品として製作されているのならまだしも、これが既に立派に商品として販売されているのですから。ヴェスト（一万二千円前後）スカート（三万円前後）が一組になっていて、人形の着付の様子では上衣は僅かに乳房をおおう程度、スカートは超ミニです。一体誰が、何処で、どんな時にこれらの品を着用するのでしょうか。この鎖衣裳を、タイトに改良して若干、手を加えれば、SM専用の責め衣の代用に使えることは確かだと思ったものです。

○

四月四日の午後、モダン・アートに行きました。その舞台で図らずも前記の品物、即ち鎖ヴェスト、鎖スカート、それに鉄製貞操帯の実物に接する機会を得ましたので、ご報告しておきましょう。

舞台では、毎度の例で数名の踊り子のソロで日舞と洋舞のストリップ・ティーズが演じられましたが、中で最も魅せられた一人の踊り子がありました。その理由は彼女の良く発達した肢体美もさることながら、その衣装にあったのです。素肌を手首から足の爪先まで



連繋した黒い網目の薄いコンビネーションでピッチリと包んだその踊り子の腰には、鉄製の貞操帯が嵌められており、更に鎖ヴェストと鎖スカートを着けていたのです。靴は甲が透明プラスチック製のハイ・ヒールでした。

この鎖ヴェストと鎖スカートは、正しく前に記した伊勢丹に飾られていたものと全く同じ製品で、銀色をしていました。この製品をこんな早く、こんな近くで発見できようとは夢にも思いませんでしたので驚きました。若い女体にまつわりついた金属衣裳は、やはり人形の着付とは全然違った趣があります。伴奏が進むに連れて、ヴェストが脱ぎ棄てられ、スカートの外され、舞台の袖に投げられます。その度にジャラジャラという独特の金属音が異様な雰囲気会場内に盛り上げます。黒い網目のコンビの下に息づく踊り子の肌には、銀色に輝く鉄の貞操帯が残るのみです。この貞操帯が何処で誰によって造られ、何処で購われたものか、踊り子の自前なのか借り物なのか……何も知りません。風俗文献、写真、映画、TVなどで知識として知ってはいましたが、その実物を見たのは初めてです。それも只そのものが置かれているだけのものではなく、姿の良い若い肉体美の踊り子の腰

に嵌め込まれているのですから興味も一入というものです。

やがて踊り子は客席に降りて観客に話し掛けます。「これ外して下さいませんか？ ウツカリして錠が外れなくなっちゃったのよ。誰かこの錠を外して下さい」前の鉄板の右上縁の辺りで数字合わせの錠前で取りつけられた貞操帯は、素人の手で簡単に外せる筈はありません。それでも観客達は懸命に数字を合わせて錠を外そうとしますが元より外せないまま時間切れとなって、踊り子は暗転した舞台の奥に消えて行きました。

カブリツキの愚生もこの貞操帯に触れる機会に恵まれましたが、初めから錠前が外れないことが分かっていましたので、興味は専ら貞操帯そのものの構造に集中していました。前当の鉄プレートは相当の重量があり、二重にした太めの鎖によって臀部の上の胴鎖に結合されていました。胴鎖は巾一センチ半、厚さ二ミリ位で細い鎖を編んだ鎖バンドです。この鎖バンドの両端が鉄板の両上隅に繋がれており、錠前は鉄板の右端近くに嵌められているのでした。鉄板や鉄鎖は銀色にメッキされ、これらを接続しているリングや止め具の類は皆すこぶる嚴重で、常人が力一ぱい引張

っても到底、外れない、しっかりした構造を備えていますので、錠前が開かない限り、この貞操帯を外すことはできそうもないと思ったものでした。

貞操帯が市販されていることについては、もはや衆知のことですが、このようにストリップの舞台に利用されたのを見たのは初めての経験でした。お蔭様で貞操帯そのものが、如何に素晴らしい官能的な代物であるかを、知ることができました。その発明、発達の経過は良く承知しておるつもりですが、それが今日まで永く支持されている理由は、少なくとも現代では単なる貞操保護の域を脱して、SEXプレイの道具として活用されているのではないかと思われれます。少なくともこのショーに使われた物は、プレイ用に相違ないと確信できます。

以上「奴隷妻」への憧憬と、その証としての「胴鎖着装」の女性達の実在に羨望しながら取り止めもなく書き綴りました。本稿に例筆させて戴いた諸兄姉には、或はご迷惑な点多々ありましたでしょう。けれども全ては筆者の無責任な独断的放言であり、単なる自慰的作文とお汲み取りのうえ、ご寛容賜りたくお願い致します。

(完)



志羽利也・画



谷山久美子出現に想う

## プレイの線

吉井作一郎

カメラ・ハント「マゾヒスチック・アニマル」を読んだ私の第一感、SMプレイ或いは夫婦プレイなどという「お遊び」とは、根本的に異なるということであった。いうなれば真のSMと、SMの真似事の違いである。真剣での戦いと、竹刀に防具をつけた試合の差といってもよい。

かねがね私は、真のM女性はいないと思い、又そう聞いていた。私の見、聞いたSMは、皆プレイであり遊びであった。私自身がそうであったし、プレイはお互いに示し合わせた芝居であったのだ。だから必然的にその責めは、責めの形をとっているものの、真実に苦痛の中から湧き上る快楽にむせぶ女性を発見することはなかったといっている。

ところが今回、「マゾヒスチック・アニマ

ル」は生存していたことを知ったのだ。責められれば責められるほど、被虐の鞭を求める女、まさにアニマルである。柔よく剛を制するという言葉がある。責めても責めてもなお求める真のM女となると、さすがの山本章氏が筆を折ったというのも分かるのである。主客が転倒し、責める側の方が音をあげる。逃げ出すのは、縛られている女性でなくて責める男性、こんな女性に出会ったら、SM人士を口にする大方の人達が、やはり恐れをなやであろう。

人間の欲望は際限なく、エスカレートする傾向を持っている。もし真実、SとMの男女が結びついたら、カメラハントの文中にもあるように、それは死にまで達するかも知れない。それは最早プレイなどという生易しいも

のではなく、地獄の業火に己が身を滅すことになり兼ねない。快楽の追求は、そこまで行つては一般的社会的には存在の理由を失う。やはり、一線を画して、とどまらねばならない。

恋の結実とは肉体の結合にあるが、異なる結合ではなくて、精神的な愛の結びつきが重要であるように、SMプレイも、単に苦痛を与え、与えられることから快楽を得るのではない。プレイの重点は、やはり性行為に置かれており、その手段とされるべきであろう。たとえそれが、真のSMでなくともよい。むしろ真のSMでない猿芝居の方が、余裕があり複雑な楽しみもあるのではないか。団氏もいわれたように、空想の世界に遊ぶことは楽しい。現実と空想は、まるっきりその感覚を異にすることが多いのだ。

夫婦プレイの後で、妻の腕にくっきりとついた縄の跡を一生懸命、擦って消そうとしたりするのは考えて見れば馬鹿な話のようだがそれも妻を愛しているが故の所業である。

兎も角、谷山久美子の出現は、私のSMについての認識を、改めて判然とさせてくれたことは確かである。と同時に彼女の存在は、私の夢を更に拡大させたことも確かである。



懸賞入選作品

カット・室井亜砂路



小説・性犯罪入門

## 進 化 都 市

牧 麗 子

……(一)……

終着駅！

重い荷物を両手に提げて、元気良く、ホームへ降り立ちます。噂通りの大変な人混み！午後六時といえば、恰度ラッシュ時に当たっているのでしょうか。人の流れは突如としてホームを埋め尽し、あたりの空気を黄色っぽく濁らせてしまうほど続いた後、たちまちその数が減って、信じられないくらいひっそり途絶えてしまいます。そんなひっきりなしの

生き生きとした繰り返しでした。しばらくの間、あたしはどこへ行ったら良いのか見当もつかず、そして、物珍しさも手伝って、この雑踏に見とれていたのです。

——さすがに、統況とうきようの女の人は素敵！それに、男の人たちの覆総ふくそうが大胆で、楽しそうなこと。……でも、一体、何でしょう？ あれは……。

目の前を、薄青い木綿の長袖の上衣に、同じ生地の上のズボンをはいた女の人が通りました。古びて、シミだらけで、おまけ

に汗の臭いがムツとくる、不潔な威覆いふくなのです。今どき、どんなひどい下請け工場へ行つたにしても、こんな形の女工さんはいないでしょう。しかし、あたしは彼女一人の覆総ふくそうに驚いたわけではありません。——濃青色、黄土色、茶黒色、濃緑色、……色はとりどりののに、皆、なんて冴えないんでしょう！形もさきよう詐恐威さきようだけでなく、ワンピース、コート、マント、……などがありました。どれも恐ろしくシャチホコ張って、肌の露出が全然なく五十年前にあったという伝説的な水着以上に



閉鎖的なものなものでした。中には、深いマスクをかぶっていて、目のまわりだけしか見せない人さえ、ちらほらいました。彼女たちは一言で評価すれば、すべて、不快な印象なのです。その上、華やかに美しく着飾った女性と比べると、これらの陰鬱な女性の数は遥かに多くて、ですから、ホーム全体が、臭いの強いスモッグに覆われているようなものなものでした。

彼女たちは、必ずしも、年取っていたり、普通以下の容姿だったり、というわけではありません。良く良く顔を見ると、中にはうっとりするほどきれいな人もいるのに、この人たちは、皆、汚れほうだいで、<sup>めず</sup>目脂や鼻糞を一杯付けている人さえいるのです。

……汚奇無猥<sup>おきなわ</sup>の貧民街にだって、こんなみっともない女の人はいないわ。……しかも女だけのね、男の人はずっとサッパリした覆総<sup>ふさう</sup>なのに、どうしたっていうんでしょう？ あんな恰好で気分悪くならないのかし？

ひょっとして、これが大都市統況の、最新ファッションなのかもしれない……。

そんなことを考えていた時、あたしは横から、不意に肩を叩かれました。

「ヨウ、君！ なかなか美人だねえ。仲良く

しないかい？」

振り返って見ると、二十才前後の若者が、にやにやしながら、あたしを見詰めています。薄紫の半袖シャツに、同じ色のストラップをはいていて、小柄で青白く、ガリガリに瘠せているのです。顔は割とハンサムなのに態度がねちねちとイヤらしくて、そのために鳥肌立って寒気がしたくらいでした。

「ホウ、随分、毛深いんだね。それに、こんがり焼けていい色だ。ちょっぴり堅そうでも何とも言えないね、エエ？」

そう言いながら、いきなり、両手であたしのお乳を握んだのです。

「何するの！ やめてったら！」

男の手を振り払って、逃げだそうとしました。ところがこの時、ホームはひどく混雑し始めて、一歩も進まないうちに人の流れに押し返され、男のからだにぴったりと押し付けられてしまったのです。

「ホラホラ、何も逃げることはないだろう？ かわいい顔してるくせに」

そう言いながら、頻りに、あたしのお尻を撫でさすり始めました。

「誰か、助けて！ 痴漢よ！」

混乱と騒音の中で大声を張り上げ、もがい

たのです。すると、どうでしょう！ 周りにいる人々は一斉にこちらの方へ顔を向け、さも面白いものでも見るように、ざわざわと笑い始めたのでした。中には、あたしのお乳に手を伸ばしてくるような、不届きな人さえいるのです。

「お願い！ 黙って見てないで、助けてください！」

その時ひどく乱暴に左頬を打たれました。「うるさいぞ！ ギャアギャア騒ぐな。お上品ぶりやがって！」

男の下品な声が耳の中まで響き渡るやいなや、あたしは太股の内側を力一杯、抓られて今度こそ本当の悲鳴を上げてしまいました。それでも、かすかな期待に促されて周りの人々に向かって助けを求め続けます。しかし結局は同じことでした。不思議なことに彼らはこの男のしている、みだらな行為を応援し、あたしの顔を見ては、無情な女だと、あざ笑うのです。そうしているうちに、腹が立って腹が立って、目の前が白く霞み始め、頭がくらくらしてきました。

この時、混雑が急に解けてきたのです。とたんに、男は自由になった両手を素早く動かして、あたしのミニスカートの下に潜り込ませ



ると、一気にガードルとショーツを膝まで降りしてしまいました。その間じゅう、あたしは急に力が抜けてしまい、黙ってされるがままになっていたのです。

男はそれを終えると、自分のスラックスのファスナーを引き降ろしました。あたしはそれを見て、身震いし、気を取りなおしたのです。元々、男なんか嫌いだというのに、こんな所で、こんな相手に自由にされたりして、たまるもんですか！ 男の目が逸れ、あたしのからだを掴まえている手が緩んだ時、今だと思いました。思い切り、膝頭で彼の内股を蹴り上げてやったのです。

「ムーッー」

穢らわしい唸り声を上げて、男は大袈裟に引っくり返り、両手であたしの蹴り上げてやったところを必死に押えながら、からだを締めました。あたしは咄嗟に、膝まで脱がされてしまったいた下着を引っ張り上げると、後をも見ずに逃げだしたのです。

必死になって、群集をかき分けかき分け走り続け、漸く改札口から抜け出た時、初めて後ろを振り返りました。あの男は追ってきません。やっと一息つくことができました。その時、聞き馴れた声が遠くから聞こえたので

す。

「知子！ 遅かったじゃないか」

兄です。兄が改札口の横側から、ゆっくりと歩いてくるころなでした。あたしは急に嬉しくなって夢中で駆け寄り、その厚い胸にしっかりとしがみ付きました。

「おにいちゃん！」

と詰まった声が漏れたとたん、どうしようもなく涙が溢れ出てきて、とうとう泣きだしてしまいます。

兄はちょっとびっくり驚いたようでしたが、優しくあたしを抱いてくれ、そのまま、動揺が治まるまで、静かに待っていてくれたのです。

そのうちに、漸く涙が止まりました。あたしは、たった今起こったことがらを、要領悪く長々と話し、統況人とうきやうじんの意地悪さを頻りになじりました。すると兄は何とも意味ありげな感じの悪い笑い方をしたのです。

「なるほどね。……それで、荷物はどうしたんだい？」

あたしは、それをホームに置き忘れて来てしまったことに気付きました。

「じゃ、僕がちょっと行って取ってこよう。

それまで、ここで待ってなさい」

「イヤよ！ 怖くって、とても一人じゃいら

れない。……でも、ホームと一緒に戻るのも恐ろしいし……」

「じゃ、こうしよう」

兄はあたしを、女子用トイレに連れて行っただです。恰度、空いていたボックスを見付けてドアを開き、こう言うのでした。

「この中で、大人しく待っているんだ。僕が外から呼びだすまで、シッカリと鍵をかけているんだよ。……いいね？」

あたしは素直に同意して、中に入り、錠を下ろしました。すこしホッとして、そこで始めて気が付いたのです。

——もっと、ましな場所に、すれば良かったわ。ここは、なんて汚いんでしょう。衰潜式すいせんしきだっていうのに……。

白い陶器のへりには焦げ茶色の運去うんこがこつてりと強張り付き、床はじとじと湿っぽくて紙屑や汚れた色とりどりのショーツが足の踏み場もないほど、たんまりと捨ててあるのでした。だから、異臭がムンムンするのです。

壁には、猥雑な絵や告白的な文章がひしめき合い、手垢で黒々と光っていました。

……ひどい所！ これじゃ、あたしの住んでいる汚奇無猥おきなわの方が、ずっと清潔じゃないかしら。少なくとも、あんなイヤらしい男ども



は一人もいなかったわ。こんな所にいると、ますます、異性嫌いになりそう！ 帰ろうかな？……でもせっかくここまで来たのだから、もう少し、様子を見てからにしても良いのよね……

時折、両隣のボックスから、使用中のウンウン言う溜息や気体が勢い良く切れ切れに飛び出してくる音などが、ハッキリ聞こえてくるのでした。

——賑やかなこと！……

それらを聞いているうちに、あたしも催してきたのです。兄が戻って来るまでまだまだ時間があるだろうと思い、下着をソツと降ろして、陶器の上にしゃがみ込みました。長い間、我慢していただけあって、気持ち良いくらい、小疾己おしっこが勢い良くほとばしります。珍しいことに、色は薄くてほとんど透明でした。

その時、ドアが荒っぽく叩かれて、

「おい、戻ったよ。知子、開けろよ！」

あたしは、びっくりして思わず腰を引き、もう少しで、床をびしょびしょに濡らしてしまふところでした。

荷物は、もうなかったそうでした。兄は黙ったまま車を運転し、そのまま、渋谷しぎやのマン

ションに、あたしを連れていってくれたのです。もう時計は七時を廻っており、あたりは漸く薄暗くなり始めていました。灰色の風景を見過ごしながら、あたしは早くも汚奇無猥おきなわの自宅を恋しく思い始めていたのです。

…… (二) ……

このあたりは大都市の囚濁街じゅうたくにふさわしく道路に添って、同じような作りの高層ビルディングが建ち並んでいるのでした。兄の囚掘じゅうきょは、その中でもひととき背の高い銀色の建物の四十八階にあるということなのです。少なくとも見かけだけは品が良くて豪華な玄関をくぐりますと、僅か一メートルほどの巾しかない狭苦しい廊下があり、その突き当たりにピカピカのエレベーターが見えました。この最新式の機械は思ったより快適で、ほとんど騒音も聞こえず、一分とたたないうちにもう目的の階に着いているのです。素晴らしいものだと思心しながら、後から従ってゆくと、廊下の突き当たりがその部屋なのでした。ドアの前で、兄は軽くノックしました。

「誰かいるの？」

「うん、友だちがね」

まもなく、覗き窓に人の影が現われ、ぱち

りとキーをはずす音がしました。ドアが開かれ、兄の後に続いてあたしも中に入ります。「いらっしやい。知子さん、と言うのでしたわね。よろしく。わたし、薬粧やしょうマリと言いますのよ」

そう言いながら、出迎えてくれたのは、とても美しい女の人。でも、あたしは咄嗟には挨拶の言葉が出ません。彼女は、真黒な申しわけ程度のショーツをふくやかな腰に着けただけの、なまめかしい姿だったので。あたしより背が十センチほど高く、少々太り気味なのですが、全身の均斉が好ましく、特に、お乳のふくらみと先端の色艶、そして、おなかのなめらかさぐあいには申し分ありません。昔はひどい堅物だった兄が、今ではすっかり墮落だらくしきってしまったにしても、この人が相手でしたら、無理のないことでしょう。

「駄目じゃないか！ 妹は田舎者だから、驚かしちゃいけない、と言っといたろう」

後ろでドアを閉めながら、兄が言います。

「あら、ごめんなさい。うっかりしてたわ。」

——今、覆かぶを着てくるわね」

そう言って、女は奥へ引っ込んでしまいました。

あたしは兄に案内されて、部屋じゅうを歩



き廻ります。六焦一魔、四焦半二魔、それにダイニング・キッチンとバス、トイレ付きの温かくて気持の良い囚徒なものでした。それにしても、壁じゅう、実物大のヌード写真が隙間なく貼りつけてあり、異様な雰囲気を感じて落着いた気分にはなれません。でも、客間のソファに坐って、兄と雑談しているうちに、漸く馴れてきました。

さっきの女が飲み物を持って来ます。今度は、ピンク地に青のペンタグラムを散りばめた面白い形のガウンに身を包んでいました。

「ごめんなさいね、知子さん。いつもは、わたしたち、あんな恰好なのです。生理日は別ですけどもね。……こんな生活には結構、良いものですから」

あたしは、さっき忘れて言わなかった挨拶を、改めてしました。

マリさんというこの兄の恋人は、年は二十五、六才で、話してみると、とても感じの良い人なのです。ここ半年ばかりの間、二人は一緒に暮しているということでした。一時間もすると、あたしはこの人をすっかり気に入ってしまい、自分の姉と話しているような錯覚に陥るほどにもなったのです。

「ところで、知子さん、予定よりは随分、遅

くなったのですね。何か、電車の事故でもあったのですか？」

「いいえ、そうじゃありません。実は……」と、統況駅での出来事を、すっかり話してしまいました。ところが、その話が終わらないうちから、彼女はクスクス笑い始め、それでもどうにかこらえていたようなのですが、兄と顔を見合わせたたん、二人で一斉に吹き出してしまったのです。あたしは、あっけにと取られてしまい、腹を立てる隙さえありません。

漸く笑いが静まり、兄が言いました。

「ごめん、ごめん。おまえは統況という所を全然、知らなかったから、そんなことになったんだね。来る前に、みっちりと教えとけば良かった。統況人から見れば責任は、むしろおまえにあるんだよ」

「どうして？ あたしは、その男を挑発したりしたわけじゃないわ」

「おまえの意志にかかわらず、実際には、けしかけていたんだ。今着ている、そのノースリーブのブラウスとひだ付きのミニスカートのあまりにも刺激的だ。それが汚奇無猥では日常着でも、ここ統況へ来れば誘惑着になってしまう。『誰でもいいから、わたしを襲っ

てください』と宣伝している様なものだよ。その男はこの都会の慣習に従っただけだし、野次馬にしたって、同じことなのだね。おまえだけがルールを無視してしまったのだから、気の毒なのは、むしろその男の方なのだよ」

あたしは、駅で出合った多くの女性が不快な覆総でいたことを、思い出しました。——すると、あの人たちは、男たちの極まりない欲情から身を守るために、わざわざ、あんな不潔な恰好でいたのでしょうか？ 統況ってそんなに、危険な町なのでしょうか……？

「明日、又、間違いを犯さないようにここでハッキリ説明しておこう。——いや、僕から話すよりも、これを読んだ方がいいかな」

そう言って、兄が本棚から持ち出してきたのは、小さな堅い布表装の本で、題名を見ると、『悶怖省推選児童教育図書、コドモは獄のタカラ』とあります。あたしにそれを手渡すと、二人は勝手にいちやつき始めました。何となく、イヤな臭いのする本でしたが、ともかく、中に目を通してみました。

『あるトコロに、勤多芳くんと禁視漏くんとというフタゴのキョウダイがおりました。フタ



リはウマれてからこのかた、ずっと、ナカヨクタビをツヅけていましたが、あるトキ、オトウトの禁視漏くんが、こんなことをイイました。

「ねえ、もうアルクのがとてもイヤになっちゃった。PCしながらアルクのは、もう、こりごりだよ」

フタリはテブラでアルいていたのでなく、ナニもカイてない、おおきなPPをカタテにモチ、もうイッポウのテで、ジメンにCCをばらまきながら、タビをしていたのです。

「ガマンするんだ。ナマけたら、恩資さんおじにしかられて、タベモノをもらえなくなっちゃうよ」

イチニチジュウこのシゴトをツヅけると、カオミシリの恩資さんおじがやってきて、フタリにゴチソウしてくれるのでした。ミソシルとゴハンとウメボシだけの、シッソなものでしたが、おなががすいているので、とてもおいしくタべられたのです。

「ナニもタベなくなたって、ヘイキだよ。イマまでタベたものを、これから、ダさないようにすればいいんだからさ」

そうイッて、禁視漏くんきんじろうはジブンのPPとCCのタバをホウリダして、ヒトリでかって

に、アルキはじめました。でも、勤多きんたろうくんはマジメなヨイコでしたから、あいかわらずハタラキながらアルキツツけたのです。

ジュウのミになった禁視漏くんきんじろうは、どんどんサキにアルいてゆくと、ミチバタで、アカいHHをコシにシメタ、かわいらしいオンナのコにデアいました。オンナのコは、キにいられようとオモイ、サカんにイロメをツカッてみせましたが、禁視漏くんきんじろうはイッコウにヘイキで、こうユウのです。

「ケガラわしいドウブツめ！ おまえなんかダイキラいだ。タニンのセワまでみてやるヒマはないよ」

そして、どんどんアルイテいってしましました。オンナのコはがっかりして、ミチバタにしゃがみこんでしまいましたが、シバラクすると、もうヒトリのオトコのコがやってくるのにキヅき、とてもヨロコんだのです。

そうです、勤多きんたろうくんがアセをフキフキ、アルいてきたのでした。オンナのコはコンドは、よりヨウジンブかくサソいをかけます。すると勤多きんたろうくんはスコシもためらわずに、「イッショにアルこうよ。ボクらはもう、オトナなのだから」

とイいました。そこへ、あの恩資さんがど

こからカイソいでやってきて、オンナのコのHHをハズしてあげ、そのバでケツコンシキをあげてくれたのです。オンナのコはアタラシいPPと、ヒトカカエのCCをモラって、とてもウレシそうでした。

ヨルになれば、フタリはナカヨクからだをくつつけあって、ツカレにまかせて、ぐっすりネムリコみます。ところが、ヨクアサになると、アカちゃんがヒトリ、ウマれていました。勤多きんたろうくんはコマッてしまいました。というのは、コドモをソダてるためには、ジブンたちのシヨクジをへらさなければならないとオモったからです。

「このコ、いっそのこと、コロしちゃいましょうか？」

オクさんにそうイわれて、勤多きんたろうくんは、きっぱりとハンタイするのでした。

「いや、いや。これからうんとハタラいて、このコをリッパにソダてるんだ」

でもナカナカうまくはゆかないものです。ヨクジツになると、もうヒトリ、ヨクヨクジツになると、サラにヒトリ、というふうに、ツギツギとアカちゃんがウマれてしまったのです。フタリはほとほとコマッてしまいました。すると、トツゼンあの恩資さんおじがやって



きて、こうイッてくれるのです。

「よし、よし、タイヘンそうだから、そのコはワタシがアズかって、ジョウブにソダててあげよう」

この恩資<sup>おじ</sup>さんはオカネモチでしたから、コドモをソダてるくらいのは、ナンでもないのでした。

ツギのヒから、勤多<sup>きんたろう</sup>くんフサイは、フタバビ、ゲンキハツラツとして、タビをツツけることにしたのです。フタリがイチドなかよくするたびに、アカちゃんがヒトリずつウまれるのでした。勤多<sup>きんたろう</sup>くんがダイハッスルして、オクさんがゴカイもヨロコンだトキにはヨクアサになると、イツツゴがウまれていたのです。フタリは、このオオゼイのコードモたちが恩資<sup>おじ</sup>さんのもとでソダてられて、シヨウライ、お獄<sup>く</sup>のためにヤクダツニンゲンになることをオモウと、とてもとても、シアワセにオモったのでした。

そのコロ、オトウトの禁視<sup>きんじろう</sup>漏くんは、おなかをへらさないために、ダすものもダさないでいたので、からだじゅうがムラサキイロにむくんでしまい、もう、 IPP もアルけませんでした。そして、ミチバタでヒックリカエッて、ヤスんでいると、あのシンセツな恩資<sup>おじ</sup>

さんがトオリかかったので、こうイッたのです。

「おネがいです。ボクにナンか、タベモノをクダさい」

すると、恩資<sup>おじ</sup>さんはアイカワらずやさしいカオで、

「このPPをモッて、キョウイチニチ、アルいてごらん。そしたらゴチソウをあげよう」といい、セナカにショッていた、マッシロなPPをジメンにオいて、どんどん、アルイッてイッてしまいました。

禁視<sup>きんじろう</sup>漏くんはタチあがって、いわれたとおりにしようとしたが、からだがゆうことをききません。そうして、あせっていたトキまたまた、ジブンのおニイさんがトオくからアルいてくるのを、ミツけたのです。

勤多<sup>きんたろう</sup>くんは、マエより IPP ソウおおきくテリッパなPPをもち、ジブンのオクさんと IPP ショに、CCをチカライ IPP パイばらまきながら、アルいてくるのでした。そして、そのアトからは、ゲンキのよいワカモノたちがそれぞれのPPとCCをもちながら、そろそろツツいてくるのでした。これらは、フタリがウんだコードモなのでした。アカちゃんらは恩資<sup>おじ</sup>さんのテにヒキトラれて、インスタント

・シヨクヒンをタベさせてもらったために、たったイチニチで、もう、オトナになってしまったのです。

この IPP カのシアワセそうアセをミて、禁視<sup>きんじろう</sup>漏くんは、ワガミをつくづくナサケなくオモうのでした。だから、このヨにもうミレはなくなったとケッシンして、ズボンのベルトをユルめ、おなかにチカラをイレたのです。そのとたん、ブブブツというすごいオトがして、ハゲしいイキオイで、タクサンのオブツが、フキデたのでした。かわいそうに、禁視<sup>きんじろう</sup>漏くんは、そのカタマリのナカにすっぽりツツミコまれて、イキがツまってしんでしまったのです。

勤多<sup>きんたろう</sup>くんフサイとそのコードモたちは、このキョウイテキなバクハツオンにキヅいて、ゲンバにイソいでカケつけました。みると、うずタかくツまれたホカホカとユゲのタツチャイロのコヤマと、なまぬるいキイロのイズミがあるではありませんか。それがナニであるのか、さっぱりワカリませんでしたので、「きつと、アタらしいカザンだろう」

などと、カンガえざるをえませんでした。 IPP カは、このコヤマからハツするかわったカオリをタノしみながら、 IPP パクしまし



た。そして、ヨクジツになると、  
「イッタイ、オトウトの禁視漏は、どこまで  
イッてしまったのだろうか？」  
などとカンガエながら、マタ、PPとCC  
をもちながら、ぞろぞと、ハテしのないタビ  
にデかけるのでした」

本から目を放して、顔を上げると、恰度、  
兄と目が合います。

「どうだい？ 面白いだろう」

そう言いながら、二人は相変わらず、いち  
やついていました。

「何となく解るような気もするけれど、……」

これは、只の童話でしょう」

「いや、謝害科の副教材だよ」

「ええ？」

兄は、あっけに取られてるあたしの顔を  
見て、急に真面目な顔をしました。

「じゃ、現実的な話をしよう。おまえは、自  
分の子供を欲しいと思うかい？」

あたしは咄嗟に返答ができませんでした。

「赤ちゃんを産むことと、子供を育てること  
とは、全然、別のことだね。でも、どちらに  
したって、今日では自由にコントロールでき  
るんだ。つまり、傾罪的な請渴が苦しくなっ

てくると、捨子が信じられないくらいに増え  
それを防ぐための避妊方法がもてはやされる  
ことになる。……三年前に、浅秘新聞社が、  
全獄的な意識調査を行なった。この時、子供  
をほしくないと言う女性が、都市では五八パ  
ーセント、地方では一二パーセントもいたと  
いう。これが去年の調査になると、都市では  
八九パーセント、地方では六二パーセントに  
も増えてしまった。尤も、地方といっても、  
汚奇無猥のような極端な田舎では、相変わら  
ず、何百年も前と同じような、保守的な人間  
が、ウヨウヨしているけれどね。……女性と  
比べて男性は、と言うと、彼らはもっと極端  
だ。多くの男どもは、全身が請渴にすり切れ  
てしまったために、そして、素朴な考え方を  
やめてしまったために、もはや、子孫のこと  
まで考える余裕はなくなってしまうんだ」  
「そんなに、請渴が苦しいの？」

あたしがちょっと口を挟むと、兄は顔色が  
真青になり、いきなり立ち上がって、部屋か  
ら出ていってしまいました。あたしは驚いて  
マリさんに問いかけます。

「いつもの癖なの。ドアの鍵をかけ忘れてい  
たのよ」

そう言いながら、ニコリ笑いました。

一分とたたないうちに、兄は戻り、さっき  
の続きを始めました。

「だからこそ人口がどんどんへって行って、  
我獄は深刻な傾罪的ピンチに立たされた。つ  
まり、労働者がいなくなっちゃったのさ。僕  
らが毎日を楽しく過ごせるのは、この傾罪力  
のおかげだ」

「でも、請渴が苦しいんでしょ？」

「その通り。請渴と獄家傾罪とは、あまり関  
係はない。請渴意識といったものは、その物  
質的な内容がどんなであるにだって、いつ  
でも苦しいものに決まっているんだ。だから  
こそ昨年の春、獄界で与野党の一致によって  
獄家育児法案が可決された。これにより、獄  
立の養育センターが各地に、特に都市に多く  
設立され始めた。同時に、夫婦に対しては、  
出産を奨励するために、胎内管理手当を支給  
することになる。……産まれた子供はその親  
が育てても良いし、あるいは獄家に預けても  
良い。多くの子供たちは悶怖省の管理の下で  
全寮制の愛獄教育を受けることとなる。……  
このままうまくゆけば、一組の夫婦ができあ  
がってから壊れるまでの間に、二十人以上の  
子供が産まれることになる。五十年後には我  
獄は、人口密度だけでなく、人口総数につい



でも、世界一になるに違いないんだ。……

こうして夫婦というものは将来残っても、親子というものはなくなってしまう。親は自分の産んだ子がどれだか解らないし、又、子供も自分の親を知らない。親子の間柄は、焼<sup>やく</sup>庶<sup>しよ</sup>の文書記録のみしか知らない。逆に言えば我獄<sup>く</sup>全体が一つの家族になってしまふわけだね」

「という、個人というものが完全に平等になって、社会主義が始まるわけなの？」

「とんでもない。資本制傾罪<sup>けいざいしやかい</sup>謝害はますます強化されてゆく。封建的な相続、つまり、親が実子に財産を譲り渡す、という制度がなくなってしまうだけだから、個人は完全にバラバラになってしまう。財産というものは、価値を認め合った二人の間でのみ、受け渡しされるんだ」

「だったら、夫婦なんて、なにも意味ないでしょう？」

「もちろんそうだ。だから最近では内縁や乱交がどんどん拡がり始めた。女性は妻になることはできないから、これからは一生、働かなければならないだろう。只一つ、女にとって働くことから遁れることのできる道は、おなかを大きくふくらませることだけだ。見て

ごらん、マリのからだを。この若さの割には意外と腰が太いだろう。もう、三人も赤ちゃんを産んでいるからなんだよ」

そう言われてみれば確かにそうなのです。あたしのからだと比べて全然、違うんです。

「性行為は、もはや、大衆の面前で堂々で行われなければならないになった。隠れた所でこれを行うカップルは、常に、罪惡觀に襲われるようになったのだ。こうして、一組の性欲は次々と新しい性欲を目覚めさせて、たちまち統<sup>とうきよう</sup>況中を制覇した。……ところが、慎ましい女性や、からだの傷んでいる女性にとってこの新しい風習は耐えがたかった。彼女たちは、街を歩くとき、電車に乗る時、いつ見知らぬ男に掴まって犯されるかと少しの油断もできなかったのだ。だから、自らの魅力を必要だけ消そうと努め始めた。その結果、ファッション界に、あの忌むしいブームが起ったのだ。モットーは、『より醜く、より汚く、より目立なく』と言われ、各人各様の墓<sup>ほ</sup>老<sup>らう</sup>と言われる威覆<sup>いふく</sup>を着始めたのだ」

あたしは、それで……と思い当りました。「この流行が一般的になると、逆に、少しでも魅惑的な覆<sup>ふく</sup>総<sup>そう</sup>の女性というものは、男からの攻撃を求めているのだ、というふうに思わ

れることとなった。だから、交りが好きな女性<sup>いふく</sup>は街を歩くとき、今まで通りの派手な威覆<sup>いふく</sup>で出かけるか、あるいは、更に挑発的な覆<sup>ふく</sup>総<sup>そう</sup>で出かけるかするようになったんだ。ある終<sup>しゆう</sup>欲<sup>かんし</sup>誌<sup>し</sup>によれば、透<sup>とう</sup>け透<sup>とう</sup>けニットのワンピースに下着ゼロ、といった出で立ちの勇敢な女性が一時間禁罪<sup>きんざい</sup>の通りに立っていたところ、三百五十八人の男性と二十四人の女性からイタズラされ、そのうちの十七人の男に、路上でそのまま犯されたそうだ。……しかし、女と

いうものは多くの場合、独りよがりになりがちだから、誰でも、あの墓<sup>ほ</sup>老<sup>らう</sup>を一着は用意していなければならぬ。……これで、おまえが駅<sup>えき</sup>のホームで乱暴されたことの理由が解つたろう」

あたしの心は激しく揺れ動いていて、兄の話をどこまで信じて良いのか、全く解かりませんでした。それでも、こんな質問だけは、どうにかできたのです。

「おにいちゃん、よく、女の人にイタズラするの？」

「ああ、毎日一回はする。仕事に張りが出るし、健康にも良いからね」

そんなことを、マリさんの前で平気で言うのです。そして、当惑しているのは、あたし



だけなのでした。

「マリにしたって、同じことさ。墓老ぼろを着てゆく日は別として、その他の日は、通勤の途中で毎日五、六回はイタズラされるっていうね。そのうち半分ぐらいは、ドッキングされるそうだよ。ね？」

彼女はニッコリほえみました。

「おまえは、まだ信じられないといった顔をしているね。しかしこれが真実なのだよ。性の自由が今ほど公然としている時期はない。いや、性だけじゃない。個人の自由はすべて軒なみに拡がりつつある」

あたしはポカンとして、兄の口を見詰めるだけでした。

「それでも、競殺けいさつといったものは何をしているのか、とおまえは言いたいんだろう。確かに、一方的な性行為というものは民主主義的ではなく、だから少なくとも取り締まられるべきなんだ。しかし、競殺けいさつという組織は、現在集団を追うのに忙しくて、個人を追っている暇はない。誠思せいし的な犯罪人を追うことに必死で、とても痴漢にまで手を廻している暇などはないんだ。その上、性欲の自由は素晴らしい、満足感と結び付くから、痴漢の増加せいふは獄家こっかの安全弁の増加に連なり、これは現誠せいふ富

の意図でさえある。……競殺官けいさつがたとえ暴行の現場に居合わせたとしても、彼は、ちょっと声をかけて『自粛してくださいよ』と言うだけで、かえって、少し離れた所から、見物して楽しんでいるくらいだ。彼の役割は、それだけで充分なんだ。僕がさっき、慌ててドアの鍵を閉めに行ったことだって、つまりはあらゆる請渴せいかつについて、個人的な盗みが多くなっているからなんだ」

もう疑う余地はありませんでした。夏の休暇を利用して、せっかく、兄がいる統況とうきように遊びに来たというのに、一体、なんということなのでしょう！ これじゃ、一步も、一人で外出することさえできないんだわ……。あたしは後悔し始めていたのです。

「知子さん、そのうちにここに馴れて、ずっといたいと思うようになりますわよ。それまで外出する時には、わたしの墓老ぼろを貸してあげますから……元氣をおだしなさいな」

マリ、というこの美しい人は、精一杯、優しく、あたしを慰めてくれるのです。

「でも、頭がおかしくなってしまうそう……あなたは、この統況とうきように長く住んでいて、何ともないんですか？」

「そう、もう五年になりますけれど、今では

とても楽しい所だと思っています。あなたにしても、子供を一人でもいいから産んでしまえば、きっとこの町が好きになりますわよ。女にしたって、始終、たった一人の男の人としか付き合えないなんて、つまらないんじゃないかしら。わたしたちは、最近の若い人たちのようには乱交をしていません。でも性請渴せいかつは二人だけのものでは、ないのですから。……お互いに外出中の出来事を話し合うのは、面白いものですわ」

頭が痛くて、もうこれ以上、話を続ける気にはなれませんでした。時計が十二時を廻っていたので、兄がもう寝ようと言います。あたしも同意しました。

寝室に入ると、気持良さそうなベッドが二つあり、あたしはそのうちの一方を使うように、言われたのです。

「あたしはいいけど、マリさんと、おにいちさんはどうするの？」

「僕たちはこっちで、一緒に寝るのさ」

「知子さん、気にしないで、ぐっすりお休みなさいね」

二人はそう言うと、すぐさま威覆いふくを脱ぎ捨ててベッドに飛び込んでしまいました。あたしが目の前にいるというのに、彼らは一向に



平気で、楽しそうにからみ合って愛技を始めたのです。しかたなく、あたしはマリさんから借りたパジャマに着替えて、明りを消し、床に入ります。

でも、隣がいつまでも悩ましい音をたてるので、気にかかって、とても眠れたものではありません。そのうち、あたし自身のからだも熱くふくらんできましたので、太ももを静かにすり合わせてモヤモヤした気持を発散させました。うっとりした気分になると、何もかもが気にかからなくなり、そのまま、ぐっすりと眠り込んでしまったのです。

…… (三) ……

窓からの強い光に顔を叩かれて、起き上がったのは七時頃でした。兄がブラインドを開けたのです。ガウンに身を包んだまま、彼はしばらくの間、窓から外を眺めていました。

でも、この辺は高層ビルが乱立していて、おまけに、空は時たま太陽が見えるだけの灰色で覆われているので、少しも良い景色ではありません。それでも、強い日射しを肌に受けると、目の底が透き通って、さっぱりした気分になりました。

「もう、支度しなよ。今日も、暑くなりそうだね」

ふと、反対側のベッドを見ると、マリさんがいません。

「マリはね、もう会社に行ったんだ。ここから二時間もかかるんで、早く行かないと間に合わないわけだ。僕も、いつもは一緒に、出かけるんだけどね」

あたしは、兄がいつまでもそこに立ったままなので、こう言いました。

「……ちょっと、おにいちちゃん！ 着替えるんだから、あっちへ行行ってよ」

「何言ってるんだい、おまえ。そんなことじや統況とうきように一時間とられないよ。さっさと脱いじまいな、ほら、これがマリの墓老ぼろだ、着方は解るね」

そう言って、動こうとはしません。しかたなく、あたしは兄の見ている前でパジャマを脱ぎ、受け取ったコート状の墓老ぼろを身に着けます。裾が踝まで届きました。臭いは、ほとんどしません。

「おまえも、しばらく会わないうちに、随分と女っぽくなったね。今まで、男と何回ぐらい交渉したことがあるんだい？」

「全然、ないわよ」

「じゃ、恋人でもいるの？」

「あたしは、男は嫌いなよ」

「ふーん、かわいそうに。早いとこ経験しといた方が、間違おきなわいらないと思うけれどね。……ま、しかし、汚奇無猥おきなわに帰るんだから、処女でいた方が、より高く売り付けられるかもしれないな。さ、食事しよう」

あたしは、これ以上、頭を混乱させるのが恐ろしかったので、少しぐらいのことだったら、何も考えないことにしました。……兄がこんなに変わってしまったなんて、残念なことです、しかたありません。

朝食は、パン、バター、牛乳、野菜、果物と洋風です。あたしはいつもは御飯と味噌汁なので、この食事には馴染めませんでした。

兄は、銀色の半袖シャツに黒革のネクタイそして白のスラックス、という気持の良い出で立ちなのです。女って損なのだわ、とつくづく感じました。

「さあ、これを持って行く方がいいよ」

見ると、黒く塗られた木の鞘に収った無腐ないふでした。長さが二十五センチ、刃渡りが十五センチ程もあります。金色の長い鎖が輪になって結び付けられていました。あたしは不安になって、



「こんなもの、何に使うの？」

と訊くと兄は落着いた声で答えるのです。

「護身用だ。もし、よからぬイタズラをされたら、それで追っ払うんだよ」

「……あたし、統況見物はやめて、もう帰りたいくらいなのよ。マリさんに迷惑をかけどおしだし、それに、とっても怖いわ……」

「大丈夫、僕が付いてるよ。マリにしたって話相手ができて、かえって飲んでるくらいだし、お金のことにしたって心配することはない。——それは、こう付けるんだよ」

兄は、あたしの墓老を一度、脱がせてしまふと、無腐の付いた鎖をスリップの上から、首から肩に纏掛けにぶら下げました。その上から、墓老を着ると、もうすっかり隠れて、見えません。

部屋から一歩外へ出ると、そこはもう無法地帯なのでした。あたしたちは車に乗って、十分もたたないうちに、どぎつい色と形のビルディングに着きました。駐車場がなくて、車が道路一杯にゴった返っていて大変な混雑です。あたしたちはこのビルの中に入り、統況交案内センターという広い部屋に入ったのでした。

「おのぼりさん用の、都内欲交コースを頼みます」

受付の若くきれいな女ガイドに、兄がそう伝えると、彼女は豪華なカタログを揚げながら、こう言いました。

「只今の時刻ですと、次のようなものがごございます。……まず、慎食外苑の乱交見物、血営胎区の孝慮見物、怠閑区惨八のスラム街見物、泣惱区の競殺大学校での猿を使った競殺実習の見学、それに、午後からですと、痺野公園での野外残酷ショー、娯可愛刑務所での死刑公開などがございます」

あたしは、すっかりドキドキしてしまい、口もきけません。彼女は穏やかな態度で、説明を続けます。

「とりわけ、本日の見ものは、娯可愛刑務所の死刑公開でございます。これは、一カ月前の獄界で絞首刑制が廃止になり、旧来の残酷刑が復活したたもので、それを記念いたしまして、これから毎日、一回に十人以上の死刑を行なうものなのでございます」

「ほう、それは、どんな方法でやるの？」

兄が目を輝かせました。

「一カ月以上前から、患制葉書に希望する死刑名を書いて、リクエストいたしまして、多

いものから順に決めてゆくのです。このたびは大変な人気でございまして、連日十五万通もの葉書が殺到して、死刑公開事務局では大わらわだということです。……本日、予定されておりますのは、獄門、皮剥ぎ、車裂き、切腹、串刺し、鉄板焼き、釜茹で、蒸し焼き……などでございまして、それぞれ、男女二名ずつが同時に、処刑されるそうなのです。第一回を記念して、本日は百名の執行を行なう予定でございます。……これになさったらいかがでしょうか？ お客さま」

あたしは、頭がどうしようもなく混乱してそして胸がムカムカして、とても返事などできませんでした。兄が、代わって言います。

「他には、どんなものがあるのですか？」

「各地区の公害被災地、特別保存公園がございます。その他、随時に甘情高速道路での自動車、事故見物などもございます。それと、時刻はハッキリとは解りかねますが、学生と危盗隊との市街戦が雌黒区である予定です。本日はそうとう大規模なものになる見込で、その筋の評論家先生方によりまして、死榮隊が出動するかもしれない、ということでありまして、大変、見ごたえのある……」

あたしは、とうとうたまりかねて、こう叫



んでしまったのです。

「そんな、そんなひどいものじゃなくて、も  
っと……こう……人間的な、楽しいものはな  
いんですか！」

「楽しいものと申されますと、只今申し上げ  
たような種類のものでは、お気に召さないの  
でございますか？」

「そうよ！ そんな残酷な、穢らわしいもの  
のどこが楽しいのか、見当もつきませんわ！  
もっと正常なもの、もっと明るいもの、清ら  
かなもの……」

すると、彼女は首をかしげて、こう言った  
のです。

「失礼でございしますが、お客さまのおっしゃ  
っておられますことの意味が解りかねます。  
ここは田舎ではなく大都市統況とうきようなのですから  
さきほど申し上げたようなものしか、ないの  
でございます」

兄が、それに付け加えました。

「その通りだ。統況とうきようといったところは、そん  
なものだよ。汚奇無猥おきなわにあるような、緑や澄  
んだ空気があるわけじゃないか。おまえ  
は素朴な美しさ、偽善的な美しさだけしか知  
らないから、この統況とうきようのエネルギーな素  
晴らしさが解らないのだ。……それでも、も

っと大人しいものと言うのだったら——そう  
だ、笑添街しやうてんでも廻ってみようじゃないか寝熟しんじゆく  
にでも行ってみようよ」

「そうでございしますね。あそこでしたら、別  
に何もありませんから。でも、退屈でござい  
ますよ」

「いいんだよ、どうもありがとう。——さあ  
知子、行こう」

そう言って兄は、あたしをせき立てます。  
ガイド嬢はお世辞たっぷりの笑いを振り撒い  
て、ぺこりと頭を下げました。あたしは、そ  
の頭のとっぺんを、思い切り睨み付けてやり  
ます。

車に戻った時、兄がこう言いました。

「馬鹿だな、おまえ。あんなに興奮して、み  
っともないよ。統況とうきようについては、きのう、詳  
しく説明したじゃないか」

「だって、それにしても、ひどすぎるじゃな  
い。……あまりにも性的で、露骨だわ」

「これが、事実なんだよ。人間は、いわば、  
年々進化しているんだ。そして、都会の人間  
は地方の人間よりも、その度合が激しい。彼  
らは神経系統が退化していて、並大抵の刺激  
は受け付けなくなっている。しかし情緒だけ  
は高度化して、どんなささいなことでも、エ

ロチックに見做してしまう。このようにして  
都会の人間は、ますますエッチになり、死刑  
を見ても残酷だ悲壮だという印象よりも性的  
な印象を、より強く感じるようになる。だか  
ら、これらの見物はすべて乱交につながって  
ゆくのだ。歓楽かんらく席せきには、必ずと言って良いほ  
どマッドレスが敷き詰められている。……結  
局、これらの歓交かんこうコースを人並みに楽しめな  
いということは『私は冷感症です』と暗に示  
しているようなものなんだ。現代では、『勤  
良きんりやう』という単語ほど不潔な色合いをした言葉  
はない。だから今後は口を慎しみなさい」

兄の言うことに、多少、腹が立ってしまし  
たが、もう、あえて口論しようとは思いませ  
ませんでした。反抗したって、何にもならないの  
です。馬鹿馬鹿しいじゃありませんか、いつ  
までも、一人ですねているのは。せっかく、  
統況とうきようまで来たんだから、少しは楽しい思いを  
しなくちゃ……。

それに、こんど行く寝熟しんじゆくというのは笑添街しやうてん  
なのだそうですから、それほどひどい退廃は  
ないでしょう。ともかく大都会での買物とい  
うのは……尤も、お金はいくらも持っていな  
いのですが……田舎出のあたしにとってはと  
ても魅力的なものでした。



道路は相変わらず混雑していて、目的地まで行くのに一時間あまりも、あたしたちは狭い車内で過ごさなければなりませんでした。

…… (四) ……

この一角は、車の行列が完全に閉めだされていたのにもかかわらず、蒸し暑くて、空気が色付いて見えることには変わりありませんでした。黄色っぽい気体が、空からじわじわとビルの谷間に覆いかぶさってくるのです。通行人の目は血走っていて、只やたらと道巾一杯に広がって足早に歩いているのでした。

確かに、都会のお店は素敵です。田舎と違って、めずらしいものが、あとからあとから気を引きまします。あたしはそれらに見とれ、ほしくてたまりませんでした。その価格を見ると、一遍に諦めがついてしまいました。……どれもこれも、何て高いんでしょう！これじゃ、自分のことだけで精一杯で、子供を育てる余裕がなくなってしまうのも、無理なことね……。

その時、兄があたしの頬を小突きました。「おい、知子、見てごらん」

喧嘩です。中年の労働者風の男の人が一人、数人の店員風の若い男たちに囲まれて、殴る

蹴る、の乱暴を受けていました。

「一体、どうしたのかしら……？」

「なに、掻払いだろう。きっと運悪く見付かったんだよ。かわいそうに」

中年の男の人は、しばらくすると、地面に倒れたまま、ピクリとも動かなくなっていました。それでも、若い人たちは寄ってたかって、面白半分になぶり続けるのです。通行人はチラチラ片目で見ながら通り過ぎるかあるいは、ほんのちよっと手を出して、被害者のからだを踏みつけたりしました。

「……誰も、止めようとはしないの？」

そのうちに彼らは、やっとリンチを止めました。あたしはソッと近付いて、この被害者の様子を覗きます。口から血を吐き、恐ろしい表情のまま、目をトロロンと見開いて、傷だらけになっているのでした。

「あ、死んでるわ！ この人！」

怖くなって、思わず兄にしがみ付きます。ところが、

「いつもあることだよ。寝熟では、毎日、二十人以上の死人が出るんだ」

と、兄は平気で言うのです。

「……あの暴力をふるった人たちは、平気な顔で笑売しょうばいを続けているわ。目の前に、自分た

ちが殺した人間の死体があるというのに」

「良く気をつけて見てごらん、知子。あの店  
は他の所よりも繁盛し始めた。そのわけは、  
あの死体が通行人の関心を捉えて、購買心を  
そそるからだ。人を殺すということと、品  
物を買うということは、共に、性的な心に通  
じる。彼らは笑魂しょうこんたくましいから、あの死体  
が腐って不快な臭いを発散させるようになる  
まで、あれを利用し続けるだろう。今頃は、  
まだ暑いから死体は長くもたないけれども、  
真冬にもなると、この辺一帯は十メートルお  
きぐらいに、ずらっとならべられるようにな  
る。大きな笑店しょうてんでは、死体作りの名人、つま  
り殺人の名人を、最低一人は雇っているそう  
なのだよ」

「……でも、競殺けいさつは？……」

「競殺は、いつでも、大きなことしか追わな  
い。都民が何人殺されようと、それが個人的  
な閉じた犯罪であるならば、たとえ、犯人が  
ハッキリ解っている時でも、殺人罪といった  
ものは成立しない。これらの人殺しは、すべ  
て正当防衛なのだ。……正当防衛というの  
は、あらゆる個人的な殺人について当てはま  
るんだね。都会人の身边は常に危険に満ちて  
いる。彼らは、ちょっとしたことで人を殺し



たり、殺されたりする。しかし、そんなこまごまとしたことまで、獄家<sup>こくか</sup>は干渉できないし又、すべきでもない。法的には、彼らは一律に、正当防衛だとされ、その行為は、むしろ奨励されている。……結局、個人的な争いごととに於いては、なんでも良いから、相手に勝てば良いのだ」

兄の話が終わらないうちに、この道路のすぐ近くで、第二の事件が起こっていました。婦女暴行です！ 背の高い瘠せた、ちぢれ毛の女の人が、髭<sup>ひげ</sup>ぶらの中年の男に掴まって、往来の真中で、立ったまま犯されていたのです。真紅なひだ付きのスカートがチラチラ揺れていました。

「きれいな人だね。嬉しそうな顔してるじゃないの」

確かに兄の言う通りなのです。彼女は歓喜の表情を全身に現わし、暴行者に激しく抱き付いて、やがて路上に崩おれたのでした。男は平気な顔つきで見降ろしただけで、そのまゝ後をも見ずに、どんどん歩いて行ってしまいました。そして、女の方も又しばらくして起き上ると、ユックリときらびやかな威覆<sup>いかく</sup>を正し、何ごともなかったようにスタスタ歩き去ってしまったのです。

彼らに目を注いでいたのは、あたしたちだけなのでした。都会人にとっては、これらの事件は少しもめずらしいことにはならないのでしょう。当事者同志にとっても同じことなのでしょう。あたし自身は、少なからず不快感を感じていましたが、それと同時に、からだじゅうがどうしようもなく昂<sup>あがり</sup>ぶってくるのが解りました。自分ながら、なんと適応しやすいからだなんだろう、と感心するくらいなのです。統況<sup>とうきやう</sup>に於いて、まだ二日目だというのに……。あたしはどこへ行っても、そこに平気で住みつくことができるような、自分のない人間なのでしょう。身も心も、どんな文法にでも無差別に馴れ切ってしまうような性質なのでしょうか？ だったら、いっそのこと、ここで自分を試してみるのも良いかもしれない。……そうです、あたしはこの町にいる間だけでも、うんとワルになってやろうと考<sup>かん</sup>え始めたのです。どこへでも、行けるところへ行行ってやろう、と思いました。

この時、たまたま都合の良いニュースを耳にしたのです。雌黒<sup>めくろ</sup>区で市街戦が勃発し、現在、交戦中だということなのでした。あたしが兄に、連れて行ってくれるようにせがむと彼はすぐに承諾してくれました。

「おまえも物解りが良くなったじゃないか。良<sup>よ</sup>心<sup>しん</sup>がけだ。少し危険だけれど、じゃ、行ってみるか」

車<sup>くるま</sup>が雌黒区に入ると、道路は大変な混みよ<sup>めくろ</sup>うで、それ以上は、とても進めません。すぐ近くから硝煙<sup>しょうえん</sup>が見え、爆音が聞こえてきました。予想を遙かに超えた迫力です。赤ん坊の頃に経験したはずの戦争は全く記憶にありませんが、なんとなく、自分が昔の世界に戻りつつあるような気がしました。人々は車の通行を諦め、道路へ降りてゾロゾロ歩き始めます。面白いことに、彼らは内乱の現場から逃げ去ろうとするのではなく、まさに、その中心に向かつて進もうとしているのでした。

「皆、好奇心が強く、こうしたことが大好きなんだね。さあ、僕らも車から降りて、歩いてゆこう」

そのうちに野次馬の数は、どんどん増えてゆきました。あたしたちは、はぐれないように手を繋いで足早に歩きます。まるで、獄電<sup>ごくでん</sup>のホームの、出口へ向かって競い合う群集の中にいるような気分でした。十分もたつと、あたしたちは現場のすぐ近くにいたのです。戦況<sup>せんきやう</sup>といったものは、何が何だか解りま



ん。地面がひっきりなしに揺蕩し、まっすぐに立つことさえもできないのです。耳がジンジン鳴りっぱなしで、次々と炸裂する爆音が一続きの巨大な塊になって、感覚を締めつけました。突然、気味悪い引きつり音を上げながら、流れ弾がこちらの方へ飛んできて、すぐ近くで炸裂し、十数人の見物人が一度に血まみれになって倒れました。

「ここは危ない。あのビルに入ろう」

それは防波堤のように物々しい建物です。気が付いてみると、この大通りに面したビルディングは、どれもこれも驚くほど堅固そうで、窓はとても小さく、そのくせ、最上階の数階は総ガラス張りで、皆、展望室になっている、ということなのでした。

あたしたちは、そのうちの一つの建物の中に、逃げ込むようにして駆け込みました。エレベーターで一息に上まで登り、目的の部屋に着きます。ここは喫茶店風の傾栄がなされていて、次のような立て札が、入口に下がっていました。

『只今、特別歓乱時間中に付き、左記の特別料金をお支払いいただきますよう、お慮様にお願い申し上げます。』

高 費 一 万 円

好痴夜	一 万 円
孝孝愛	一 万 円
交 裸	一 万 四 千 円
操墮水	一 万 円
隷悶酢渴趣	二 万 円

他に、御食事も御座います。……

料金前払い制なので、愛好高費のチケットを兄が二枚買ってくれ、中に入りました。

部屋の片面は総ガラス張りで、天井が極めて低く床には足首まで沈む黄金色の絨毯が敷き詰められ、華やかなお慮で一杯なのです。彼らは椅子に、あるいは、直接に床に坐り込んだり寝そべったりし、飲物をすすりながら戦いを見物し、同時に同伴の愛人と戯れ合っていた。けたたましい笑い声を上げているのでした。素裸になってピッタリ抱き合ったまま少しも動こうとはしないカップルも数組がありました。

あたしたちは、これらの人々をかき分けかき分け、洞窟の出口に向かって歩くような気分、漸くガラス窓の前まで辿り着くことができたのです。

外と内とは、三重の防弾ガラスによって完全に遮ぎられ、爆音は少しも聞こえません。そのため、市街戦のようすが良く解れば解る

ほど、かえって喜劇的に見えるのでした。室内を満たしていた雅楽は、この雰囲気につたりで、生々しさは完全に消えうせ、映画を見るような気安さの中に、あたしたちは腰を降ろしたのでした。

道路はここから五十メートルほど下方にあり、硝煙の切れ間から戦う人々の黒い動きがはっきり見えるのでした。学生の人気は全部で五十人前後でしょうか。彼らは色とりどりのヘルメットに模様入りの詐恐威を着て、拳銃や猟銃、そして手投げ爆弾を使い、道路の中央に破壊した自動車の楯を築き、精一杯、抗戦していました。それに対して、危盗隊は全身を鋼の鎧で包んだような重装備で、青色のユニフォームの背中には、輝かしい朝日のマークが鮮明に印刷されているのです。この高所から見ると、戦いはしごくのんびりしたものでした。彼らは互いに進んだり戻ったり、長い間、均衡状態を、保っていました。死傷者はほとんど見あたりません。この楽しいゲームは二時間あまりも続き、あたしはすっかり、それに魅せられてしまったのです。

やがて、雲の切れ間から、飛行機が数機、現われました。



「いよいよ終わるよ。死じえいたい隊の戦闘機だ。もう結着がつく」

兄の言った通りでした。銀光にキラキラ光るおもちゃのような飛行物体はグングン大きくなり、道路に添って低空飛行に移ったかと思えるまに、地上掃射を始めたのです。もう、ひとたまりもありませんでした。地上は一瞬にして赤黒く染まり、学生たちは次々とひっくり返っては、崩れたからだをヒクヒク動かししているのです。運悪く、危きどうたい盗隊の一部の人たちも、この流れ弾に当たったのでした。

次の瞬間、生き残ったこれら朝日マークの人々は、一斉に突撃をかけ、降服の意志表示をしていた学生たちを、ひとり残らず撃ち殺してしまいました。その上、彼らは腰から、煮にほんとう奔討をサッソウと引き抜くと、死者の首を次々と刎ね落とし、それらをズック袋に集め始めたのです。更に使用可能の武器などを拾い集めると、彼らはジープに乗り込んで、さっさと引き上げてしまいました。後には、学生たちの首無し死体と、危きどうたい盗隊員のまともな死体と、その他のがらくた類が散らばっているのです。

「もう少し、見ててごらん」

兄がそう言い終わらないうちに、遠くの方

から救急車がゾクゾクと三十台ばかりもやってきました。現場へ来て止まると、看護人が忙しそうに飛び降りて、死傷者を担架に集め車に収容します。彼らはほんの十分ばかり作業を続けた後、仕事を中断して、どんどん帰ってしまいました。結局、危きどうたい盗隊員だけが収容されていったのです。

「救急車は獄くのものだから、他の管理下にあるものまで助けるようなことはしないんだ」

そのうち古ぼけた大きなトラックが一台、救急車の立去った方向と反対側から、乱暴な運転でやってきました。ペンキで絵や文字がやたらと書き殴られている車です。中から、ヘルメット姿の若者が数人飛び降りると、学生たちの首なし死体をついで次々とトラックの荷台に放り投げてゆくのでした。それが終わると彼らは、さっさと帰ってしまいます。しかし、それでも、まだ百体近い死体が、あちこちに転っているのです。

「あれらは、この事件に巻き込まれた野次馬どもだよ。今に、都の道路清掃トラックが来て、様々な残骸と一緒に収容してゆくだろう……さあ、もう行こうか？」

あたしは、すっかりのぼせ上った頭を、兄の落着いた声で醒まされたのでした。

ビルから外へ出ると、硝煙の臭いが鼻を突き、生々しい傷跡が道路や笑しょうてん添街に一面にひっついていくことが解りました。でもどういふわけでしょう。あたしは、ほとんど怖さといったものを感じません。

「周りの笑認しょうにんどもはね、この市街戦を当地の欲交名物として、かえって自慢しているんだよ。これによる収益は大したものだ。壊れた道路やビルディングは瞬く間に復興される。プレハブ施行だから、一週間もたたないうちに、元に戻ってしまうんだ」

あたしたちは、車を置いてきたところまで歩いて帰らなければなりません。帰り道はすいていましたが、しかし、行きと違って、とても道のりを長く感じるのです。歩き馴れないことを自慢していた兄は、途中でへばって、舗道の片隅に坐り込んでしまったのでした。その時、あたしは聞き覚えのある声に、不意に背中から襲われたのです。

…… (五) ……

「オッ、このまえのお嬢さんじゃないか！」

丸いサングラスに、真白なシャツとスラックスをはいた、小柄で瘠せ気味の、青白い若



者でした。突然のことで、誰だったか思い出せません。

「この前は、ひどい目に会わせてくれたな。なんだい、今日のそのかつこうは！」

そう言って近付いてくるやいなや、あたしの墓老に手をかけ、引きはがそうとしたのです。

「あッ、この前の痴漢ね！」

「痴漢はおまえのほうだ。こんどこそ、うんとかわいがってやるから、覚悟しな」

あたしは兄に助けを求めました。ところが彼は地べたにしゃがみ込んだまま、ニヤニヤしながら、こう言ったのです。

「知子、がんばれよ！ にいちゃんが見ててやるからな」

もはや、誰にも頼ることはできないのでした。次の瞬間、あたしは顔を殴られ、脚を蹴られ、大地に突き倒されてしまったのです。男の熱い息が迫ってきました。ふと、自分の胸に手をやると、威覆いふくの上から堅いものにさわりました。無腐ないふ！ あたしは夢中で墓老ぼろの前をはだけて、手を中に入れます。でも、討かたなはずっと下の方にあって、中々、そこまで届きません。その時、男の乱暴な手が、あたしの上着とスリッパをまとめて引き裂いてしま

いました。あたしは下着二枚だけの姿にされ、骨張った男の手から素早く逃げ廻りながら、無腐ないふを必死に引き抜きます。そして、切っ先を彼の方に向けると同時に、堅くごつごつしたからだがあたしの上に、勢い良くのしかかってくるのでした。

「アーッ！」

男は一瞬からだをぶるぶる震わせ、そしてひっくり返って、地べたに転がります。あたしは急いで起き上がって、相手を見据えしました。お臍の真下あたりに、無腐ないふが深々と刺さって、輝かしい液体がそこからシューシュー噴き出ているのです。

いつのまにか、野次馬が数十人、あたしたちの周りを取りまいて、盛んに、応援をしてくるのでした。きっと、女が男を刺すのはめずらしいのでしょう。あたしは、多くの人々の注目を一身に受けて、少なからず、誇らしい気持ちでした。ですから、この哀れな男を徹底的にいじめたあげくに、殺してやろうと思いはじめていたのです。

その時、相手は苦しさをこらえて、よろよろと立ち上り、この場から逃げ去ろうとしました。あたしは慌てて叫びます。

「誰か！ その男を掴まえて！」

群衆は一斉に、寄ってたかって、彼をなぶり始めました。あたしは急いで、止めさせます。他人に楽しみを奪われたくはなかったからです。しかし、男はもう立ち上がる元気さえありません。無腐ないふは傷口から抜き取られてコンクリートの上で、砂まみれになって転がっていました。

「この男を、裸に剥いて頂だい！」

野次馬はあたしの指図通りに、面白半分にあって、彼を丸裸にしてしまいます。露わにされた色白の肌は気味が悪くなるほど瘠せかけていて、あばら骨が大きく波打っているのです。それにひきかえ、燃えるような紅色に彩られたおなかの美しいこと！ 男はその裂け目を懸命に両手で押えているのでした。あとからあとから輝かしい香水が噴き出て、からだを伝って大地に注がれてゆくのでした。全身が更に青白く変化して、透き通った目であたしを見詰めるのです。もはや、助けを乞う気力はないようでした。

人々の目を意識しながら、あたしは残っていた下着をすっかり脱ぎ捨てて、さっぱりした気分になりました。一瞬、湧き起る溜息や歓声をうっとり聞き流しながら協力者どもに命じ、男を仰向けに寝かせ、両脚を大き



く拡げさせて、動けないように押え付けさせます。

もうなかば死に向かっているというのに、なんということでしょう、あたしの裸を見たたん、男の体に驚くほどの生気が溢れ、みるみるうちに変化したのでした。この変化にあたしはますます勇気付けられたのです。この生意気な男を暴行してやるんだ、という意識が、頭の中でぐるぐる廻転し始めていました。

彼の両足の間に片膝をつきました。深い傷を負った男とは信じられないほどの力強さが掌を通して狂暴な心を煽りたてるのです。あたしはもう一方の手でかさぶたの付いた無腐<sup>ないふ</sup>を拾い、その刃先を近付けました。

ざわめきが一斉に静まり、次の瞬間には歓声が湧き起こります。素晴らしい手ごたえでした。

討<sup>かたな</sup>は、ゆで卵を切るように抵抗なく動き、その切口からは暖かいトマトジュースが勢い良くはじけ出て、あたしのからだにシュウシュウ噴きかかります。左手を見ると、小さな肉塊が残っていました。これが、さっきまで力強い生命力を宿していたものだとは、とても思えません。

あたしは、これをコンクリートの上に置きママごと遊びのような楽しさで、丹念に切り刻んでやりました。ほどなく、砂粒にまみれた挽き肉の小山ができます。男を見ると、うつろな目であたしを見詰めたまま、既に、冷たくなっているのです。気のせいか、その目は底の方まで明るく光って、苦痛の影は少しもありません。トマトジュースは乾き始めていました。

あたしはまだ生意気な残り物があることに気付きました。早速切り離してやります。討<sup>かたな</sup>で拡げてみると、どうしたものか、中は血だらけでした。

コンクリートの上に置いて、裸足の踵で踏んでみます。ぬるぬるとした感触が奇妙にあたしの勝利感をかきたてました。

最後のしめくくりとして、すっかり乾いてしまった男の傷口に、思い切り無腐<sup>ないふ</sup>を突き立ててやりました。すると、それは柄のところまで入り込んでしまい、力一杯、引張っても抜けません。

あたしはそれで漸く満足して、立ち上りました。

群集が散らばり始めた時、不意に、あたしに話しかけてきた人がいます。髭面の好青年

でした。

あたしは、全身華やかに彩られた自分のからだを、今更、隠すことはかえって不自然だと思い、両手を腰に当てたまま応対します。

彼は、あたしが照れるほど丁寧な挨拶をし、名刺をくれました。

『統況<sup>とうきよう</sup>テレビ局、野性本能復活シリーズ、スタイリスト 舖<sup>ほ</sup>悩<sup>の</sup>耐思<sup>たいし</sup>』

とあります。

「それで?……」

あたしは、その名刺と髭面を見くらべていました。

「あなたは素晴らしいお人です」

彼は大袈裟な手振り身振りで、こう言うのです。

「いや、実に、美事なものです! 感激いたしました。ぜひ、私どものテレビに出演なさっていただきたいのですが、いかがなものでしょうか。……え、内容でございますか? 毎週一回、放送があるのでございますが、出演希望の男性が多いのに引き替え女性の出演者が少なく困っているのです。先週は、男性が女性を浴槽でバラバラに切り離して、その暖かい血液の中で完遂する、というものでしたが、今週は、逆に、元気な女性が弱々しい



男性を噛みちぎってしまう、という粗筋なのでございます。実は、殺される役を希望する男性は何百人といるのですが、殺す役を受けもつ女性が全然いなくて、ほんとに困り切っていたところなのです。撮影は、明日の午後一時の予定でございます。……そうです。もちろん、芝居ではございません。本当に相手を殺すのです。当番組は毎週視聴率を五〇パーセント近くも確保しておりますが、これが単なるドラマではなく、実演の忠実な記録だからであります。又、欲<sup>かんきやく</sup>虐に媚<sup>め</sup>びることを目的とした、過去のショー形式とも違います。演出というものは最初のきっかけと、大まかな進行の補助を成すだけでありまして、むしろ、出演者の全意欲、全能力によって行為が進展させられる、非常に良心的な一種の儀式であるのでございます。……もちろん、今日では、殺人は罪にはなりません。むしろ、立派な職業になりつつあるのです。犯罪というもののは、反体制的な行為についてのみ言われる名称なのですから。私たち放送人は、報道の自由と人間性の解放、そして、性欲の社会的地位確保のために全力を尽して、古めかしい請<sup>せい</sup>渴<sup>かつ</sup>慣<sup>かん</sup>習<sup>しやく</sup>や勤<sup>きん</sup>良<sup>りやう</sup>的な意識と闘っているのです。この考えに御共鳴くださいました

ら、ぜひとも、この仕事をお引き受けいただきたいのでございますが……」

あたしは面白そうだと思います。

「え、そうですか！ どうもありがとうございます。そうです。それでは、打ち合せがありますのでさっそく、当スタジオまでお越しいただきたいたのですが。はい、その通りでございます。できましたら、当放送局の専属になっていたいただきたいと思ひます。どうぞ、この車にお乗りください。……いいえ、そのままのお姿でよろしゅうございます。たいへん魅力的なおからだで、裸のままの方が宣伝になるものでございますから」

あたしは兄の方を見ました。彼は嬉しそうな顔をして、坐り込んだまま言ひます。

「上出来だ。良いタレントになるんだよ。おにちゃん<sup>おにちゃん</sup>が陰で応援しているからね。……うん、おにちゃん<sup>おにちゃん</sup>は、マリが待ってるからこのまま家に帰るけれど。行ってきなさい。頑張るんだよ」

あたしは兄と別れて、舗<sup>ほ</sup>悩<sup>なう</sup>さんの車に乗りました。

キラキラ輝くような銀色のボディ。今まで触<sup>ふ</sup>つてみたこともないような大きな乗物。豪華な室内。……あたしのからだはすっかり

乾<sup>かわ</sup>いておりましたので、車を汚す心配もなく安心して中に乗り込みます。シート・カバーのざらざらした感触が裸のお尻に当たって、とても気持ちの良いこと。

今は、恐ろしかったのが信じられないほど幸福<sup>こうふ</sup>！ 統<sup>とう</sup>況<sup>きやう</sup>がこんなに楽しい町だとは、少しも想像できませんでした。あたしは運が良かったのです。

もう、あの泥臭<sup>おきなわ</sup>い汚<sup>お</sup>奇<sup>き</sup>無<sup>む</sup>猥<sup>わう</sup>へなんか、とても帰る気がしません。ここに永住したい気持ち一杯なのです。それに男の人を毎週公然と殺せるとは、なんて素晴<sup>すば</sup>らしいんでしょ！ 想像しただけで、体中がゾクゾクしてくるようなのです。……それでも、もし、この生活がイヤになったら、田舎に帰るか、それとも、この番組に出演して、殺されちゃうのも良いかもしれません。それも、うんと素敵<sup>そてき</sup>なうっとりするくらいきれいな女の人に殺されたいのです。そう考えれば、気楽なものなのです。

あたしたちを乗せたこの幸運な車は、いつのまにか、統<sup>とう</sup>況<sup>きやう</sup>テレビ局の正面玄関に止まっているのです。





奇クファンの男性のみなさま。

私、佐野みさ子は、みなさまの女奴隷であります。みなさまに虐<sup>しい</sup>たげられながら飼育されてみたいという気持は、以前よりもますます強くなってまいりました。それも妊婦腹がだんだんふくれてくるに従って、強烈になってくるようです。

幸いにして八私とプレイをして飼育してみたいVと望まれる方々から、たくさんのお便りをいただきましたので、私はその気になりさえすれば、すぐにでもできます故、その点（相手になって下さる方）にかぎり心配はしておりません。しかし、私は人妻の身であり

## □ S M 随 筆 □

# あるM的妊婦の告白

——（妊娠七カ月になった私）——

佐 野 み さ 子

ますし、子供（まだおなかの中ですが）が出来た現在では、なかなか家をあけることすら出来ないありさまです。

ぜんぜんS気のない主人との毎日の暮しは私にはまったく味けのない生活でしかありません。生活の保障さえして下さるS的男性があれば、今の主人と別れてもいいと思っています。一人で無理なら、七、八人のグループで私を飼育して下さい。

生活の保障さえ得られるのならば、私は何人（グループ制）ものSMプレイのモデル、いわば奴隷になりたいと思っています。そして八花と蛇Vの静子夫人が受けたような特

訓を受けてみたいのです。

もともと私はフリーセックスを必ずしも悪い事とは思っておりませんから、SMプレイに並行したセックスならば、会員の方々とのセックスも辞さないからです。

私は奇ク的女性愛読者の一人として、また私にMのこよなき味を教えてくださいました奇クの文献資料性向のため、勇気をふるって、私の全裸ヌードをここに発表いたします。

羽鳥水江さん（八月号）をはじめとする奇クの妊婦マニアの方々は、私の妊婦腹をよく観察されて、今まで誌上に登場した妊婦、金原、中河、木戸さん等の妊婦腹と比較して、



その感想を発表して下さい。

昔、女は子供を産むただの道具にすぎないと思われた時代があり、そのため戦いにあけくれた乱世には敵方の手に捕えられた女のうち、特に妊婦は勝利軍の兵士たちのS的関心の対象にされ、面白半分に裸にされ、そのふくらんだ腹部を刀で十文字に割かれた事実のあったことを歴史書で知りました。

それ以来、私は自分が丸裸にされ、戸板の上に大の字に縛られ、白い丸々とした下腹を切り裂かれる夢をたびたび見ました。

これは私が真のM女性だからではないかと思っています。でも、現代では、そんなことをしたら、それこそ大変です。又そんな残酷なことは人道上、許される筈ありません。



場面です。

庖丁の刃（実は背）が下腹に触れた一瞬、ひやりとした、その感触は私にMの快感を味あわせてくれました。それはそれは素晴らしいものです。私の口では、とうてい言いあらわすことは出来ません。セックス時の快感など問題ではありません。そして、このプレイは私にとって最大の肉体的快感でありました。

私は出産後、またもとの、スマートな身体にもどったら、大いにSMを楽しみたいと思っております。たとえ、それが原因で主人と離別するようなことになったとしても。

でも、今、主人と別れることになれば、生活の保障がなくなることになるので、当分の間は、このまま特定の男性とのみプレイをや

でもプレイとしてなら、その真似事なら出ます。ここに発表する写真は、ずばりそれです。妊婦の私が全裸で縛られて寝かされ、その丸々とした腹部に、まさに庖丁がズブリと突き刺されようとする

って参りたいと思っております。それにしても、私を世話して下さいるS男性、又はSグループの出現を心待ちします。

こうしたS男性らのグループが出現したとき、私は始めて皆様の女奴隷になることが出来るのです。地下室のような密室に私を閉じ込めて、静子夫人のような厳しい特訓によって、私をSM界のスターになれるよう飼育して下さい。又、生まれ出る子供に責任を持って下さるのなら、再び妊婦にして下さっても構いません。

私は関谷富佐子さんを羨ましく思います。それは、ご主人と別れて自由にSMを楽しんでいられるからです。ポリュームのある白くて美しい肉体を、S男性の前に堂々？と晒しあくなき責苦を受ける関谷さんの写真を見ると、たまらなくなっています。

幸いにして、私はまだ関谷さんより若いので、今後私の前に現れるS男性の飼育方法の如何によっては、素晴らしいMモデルになれるかもしれません。私達の生活を保障して下さいるS男性或はSグループが出現してくれれば今の主人と別れてもいいと思っております。それほど、私はSMプレイが好きな女なのです。奴隷になって先ずやって頂きたいこと



は、下半身の剃毛です。(主人のある現在の身では、それは到底望めません) 先ず、電気バリカンで一通り刈ってもらい、その後で剃刀を使つてつるつるに仕上げをしていただきたいのです。そして私を椅子に開股縛りにして、その前に鏡台を置いて私自身にも、その作業がよく見えるようにして下さい。

その後でパイプ責めでも、なんでも貴男のお好きなようになさって下さい。先に、生まれてくる子供に責任を持って下さるのなら妊婦にでもなりますと書きましたが、これは私の本心です。女が一番心身共に動物的になる

のは、妊婦腹になる時ですから、私は妊婦腹を責めてほしいのです。

妊婦腹の切腹でも、大量浣腸でも、どんな責めでも甘受いたします。四つ這いになって大量浣腸されている私の姿を是非写真にとつて下さい。そして出産後は勿論のこと、末永く私を飼育して静子夫人以上のM女にして下さいませ。

これで私の告白は終わりますが、奇クの男性ファンのみなさま、奴隷志願の女、佐野みさ子を今後共よろしくお願い致します。

尚、私に対する良い飼育方法などのアイデ

アやご希望がありましたら誌上で意見を述べて下さい。出産後のSMプレイの参考にさせてもらうと共に、もし出来れば、その方法で強烈なプレイをやりたいのです。

#### 〔編集部 注〕

御送付下さったフィルム一本現像しましたがピンボケが多くて掲載出来るものが少なかったのは誠に残念でした。殊に庖丁のものは極端な後ピンで背後のカーテンに焦点が合い肝腎の被写体はボケていました。

### ……女責め図絵の系譜……

## 人身御供の女

絵と文

南

彦

造

昔から「一盗、二婢、三妾」と言葉があるのは周知のところだが、道徳的に手を出せない女性とか、貞操堅固な女性を陥落させる喜びが、男にとってなんともいえないのだ……

ということらしい。それは男のサディスティックな心理にもつながるし、女のマゾヒズムにも通じよう。云うべくして妙。昔の人は、うがった言を吐いたものだと感心する。

「人身御供」などという言葉も、好色な男どもにとってまことに都合のよい言葉で、何かと因果をふくめ、美女をものにするにはもってこいの論法だ。長いものには巻かれろ主義の封建時代にあつては、特権階級の、こうした魔力的な言葉にかかつて、貧しい者の妻女が好色の餌食になったものらしい。

文化の進んだ現代。しかし人類の生活は複雑になっただけで、好色心理は相変わらずで文明と逆行して人身御供の悲劇は形を変えて繰り返されているようである。

私の知っている世代に拾つても、農地解放





以前の小作人の悲惨さは酷いもので、小作賃代りに娘を提供させられたり、妻女を差し出させられたりした例はよく耳にした。

しかも、好色地主の餌食になった女性は、「お手がついた」として、心中では血の涙を流しても、地主に対しては笑顔で接し空世辞

を弄さねばならず、地主は地主で、屈辱と忍従の反骨精神をいやというほど感じとりながらも権力を誇示し、その心根を賞揚して屈伏こそ正道なりと横車を押す。

まったく以て身勝手なものだが、当時としてはノーマルだったのだから呆れる。現代の若者には到底理解出来る筈のものではない。「いやがる芸者の身請け騒ぎ」……これなどは典型的な人身御供で、承知しない芸妓を金力で縛り、動物的な楽しみに酔うという有産階級のヒヒ老爺の姿は現代にもある。

○

私は、ふとした機会に、さる遊女屋に婦人科の内診台にも似た形のベッドがあるのを見聞いた思い出があるが、二本の腕木が左右に羽根のようにのびたベッドは、たぶん犠牲者を大の字に固定するためのものに違いなく、遊女たちの血と汗が染みこんでいるように思えてならなかった。

また、ある芸妓置屋の「特別室」というのも見たが、密閉され、離れた一角のそれは、水揚げの場とされていたようだ。

そこは私の住居に近い場所だったが、古びた昔風の家屋が腐り始めたらしく大工が入り解体新築工事に取り掛かった際、運よくその

棟領大工と知り合いだった関係で、ひそかに見学出来たのだったが、部屋は、城の抜け穴もかくやと思われるつくりで外部とは隔絶されており、その設計の巧みさに驚愕すると同時に、そこで繰り上げられたであろう哀れな芸妓のさまざまな光景を想い浮かべて、ひどいショックに悩んだものであった。

棟領の話では、以前にも裏木戸の修理でこの家の内庭で仕事をしたことがあるが、悲鳴と共に雨戸が外れ、暗い部屋の中から白無垢姿の半玉が泣き声を挙げて駆け出してきた、すぐ追手の若い衆につかまり担ぎ上げるようにして搬び去られたのを見たという。想えば連れこまれたのがこの部屋であったのか？と撫然たる顔付で語ってくれた。

私はその話から、哀れにも痛ましい半玉の乱れた姿がほうふつとして悩ましかった。

戦後、男女の性生活はフランクになり、権力者の力づくというような時代は去ったようにも思われるが、現実には、そんなに生やさしいものではあるまいという気もする。

人身御供の女に、哀れさと同情を覚えると同時に、一面そんなサディスティックな情景に強い憧憬と羨望を拭いきれない想いに悩むのは、あながち私だけではあるまい。(終)





第二十六回

## カプセル

「どうなさいました。お疲れになったでしょうね」

明るくなったとき、エミー司令がやさしく声をかけた。

英国風の調度でドッシリと落着いた雰囲気のあるサロンだった。そのくせ、場違いである筈のエミー司令の戦闘服が、この空気に意外と調和しているのだった。美しい人は、どんな姿をしていても美しいのだし、美しい装飾にも「位負け」がしないからだろうと、

山本百合子は思った。反対に、エミー司令の方でも、みすばらしい未決服を恥かしげに着て、囚われの屈辱をジツとこらえている百合子を、——何と美しい人だろう。——と舌を巻く思いで眺める。

百合子の心理には、どうにもならないという、あきらめが徐々に定着しつつあった。それと反比例して、エミー司令に対する信頼と依頼感が次第に高まってくる。このひとも、かつては私と同じ立場だったと聞けば、何かこれから先、自分にふりかかって来る運命について、それに処するための有益なアドバイスが得られるかも知れない。薬を攪むような

前号までⅡ有明の王国に入荷した数百の美しい女囚達に対して容赦のない手続がはじめられた。ただし一等女囚の山本百合子については何故か拘束もせずにエミー司令みずから案内に立つ。二等女囚はジャンヌを含めて、五人ずつ首輪でつながれて番号順に予備審査を受けた。たとえば中国娘、張恵華の受けた判定はBAACEで銅クラスだったし、肉体番号F五五四といわれる白人の女性は、CAACfと判定されて鉄のクラスに入れられた。又、三等扱いの男囚の中には新津やホセの顔もあった。彼等は犬のように檻に閉じ込められていた。



気持で百合子はエミー司令にすがりついた。その気持は当然、百合子の態度にあらわれてエミー司令を満足させた。

ここでの女囚レセプション、つまり受入れのやり方には大別して二通りの方法がある。二等扱いの一般女囚の場合は既に書いて来た通り、潜水艦の中で最初から裸に剥いてしまい、セルの中に収容して拘束生活に入らせてしまう。急激な環境変化の結果として起こるショックは、医学的に解決できる。この点、ウィリー博士を中心とした研究グループは、豊富な生体実験の積み重ねによって、すぐれた予防的療法を確立していた。このような手法を併用すれば、漸進的な馴化を図るより、単に時間の節約になるばかりでなく、実質的な服従効果を高めるというデータが示されていた。勿論、若干ではあるが落ちこぼれの率が多いというマイナスがあったけれども、現実の要請には充分、応えることが出来たのである。

したがって、一等女囚に、きわめてスローな馴化手段をとるということは、実用的な意味ではなく、むしろ有明にその段階を楽しみたいという欲求がある場合に限られている。つまり、一等女囚は将来、有明のハレム

に収容される可能性のある要員だということになる。

山本百合子は正に最高の品質を持つ女囚だった。

約一時間に亘って見せられた映画は、この驚くべき王国のアウトラインを描写していたのである。もっとも漸進的馴化であるが故に映画の内容は暗黒面をわざと省いてあったのだが、そのような編集によるものであってさえ、百合子の想像を絶するものだったのである。

中でも強烈に印象づけられたことは、この国には有明という唯一、絶対者があって、すべての人間は、この人に服従し奉仕しなければならぬという点であった。

これは百合子が育って来た地上の常識とは真向から対立することである。百合子は自分を搜って来た強制的手段を憎むと同時に、そのような独裁者に征服されねばならない運命を呪った。と同時に、あまりにも比類のない悪の機構、この王国の壮大なスケールに圧倒されつつある自分を、どうすることも出来ない。彼女の有明に対する敵意は容易に服従心へ転回する性質のものであったが、ともあれこの時点での百合子は有明にせい一ぱい抵抗

し、心を堅く閉ざそうという以外、意思を持たなかったのである。

しかし、ひどく疲れた、と百合子は思う。肉体的な疲労はそれ程ではないにしても、周囲の激変は応接する暇もなかった。どこかわからないけれど、ここがもう、日本を遠く離れてしまっていることだけは、間違いないことであつた。

疲れただろう——とエミー司令にいわれたときに、彼女は思わずポロリと一滴の涙を落とした。涙の滴は美しい頬を伝わり、豊かな胸を辛うじて被っていた未決服の上に落ちて布地に滲んで消えた。

「可哀そうに」

エミー司令は相手をはげまそうとするかのように、その両手をとった。

「でも、あなたにはパティシペイトする以外に道はありません。この国の正しい一員となれば、きっと日本へ帰れる機会も出来るでしょう。お逃げになつては駄目です」

「でも、どうしたら早く自由になれるのですか」

「それはマスターの、お心次第です。あなたとして当面、努力しなくてはならないことは



心からマスターを好きになり服従することです。そうすれば、きっと道が開けてきます」「そんな……。急に好きになれとおっしゃっても無理ですわ」

「そう、無理ですね。でも、はじめから無理に連れて来られたのですから、無理は承知の上のことじゃありませんか。あなたはマスターを好きにならなければならぬのです」

圧倒的な権力が次第に百合子に作用しつつあった。それは彼女を諦めさせるというよりもっと強く、彼女を何者かが駆り立てるような効果だった。もし自分がエミー司令のような立場になれるのなら、そんなに悪いことはないじゃないの——そんなことさえ、ふっと想念の中を過ぎるようになってしまったのである。

「マスターはパレスエリアで、あなたをお待ちかねです。さあ、少しも早くまいりましょう」

しばらくしてエミー司令が立ち上ると、百合子も何か催眠術にでもかかったように腰を浮かすのだった。

途方もなく長いエレベーターだった。東京タワーの頂上へでも連れて行かれたような気がした。

そこは何か手術室めいた部屋になっていて真中に白いシートで被われた細長い寝椅子が置かれている。

「この国ではパレスエリアとポートエリアは嚴重に遮断されています。少数の有資格者以外は自由に出入りすることを許されておりま

せん。たとえアマゾンの兵士たちでも、あなたと同じことです。ただ一つだけ、あなたに選択の自由を与える様に命じられています。それは、わかりやすく申しますと、この入口は、隔絶感を心理的に強調するため、急激な落下ショックを経験するような構造になっております。マスターのおっしゃるには、あなたはそれに挑戦なさいますか、それとも、怖ろしいなら睡眠薬を飲んでいただいて、知らない間に通過するようにしてあげてもよろしい、とのことですよ。でも、これは本当に異例のことなんですよ」

痺れ切ったような思考の中で、それでも百合子は選択に迷う。

はかりしれない高さからどんな風に投げ落とされるのだろうか。たしかに不安である。

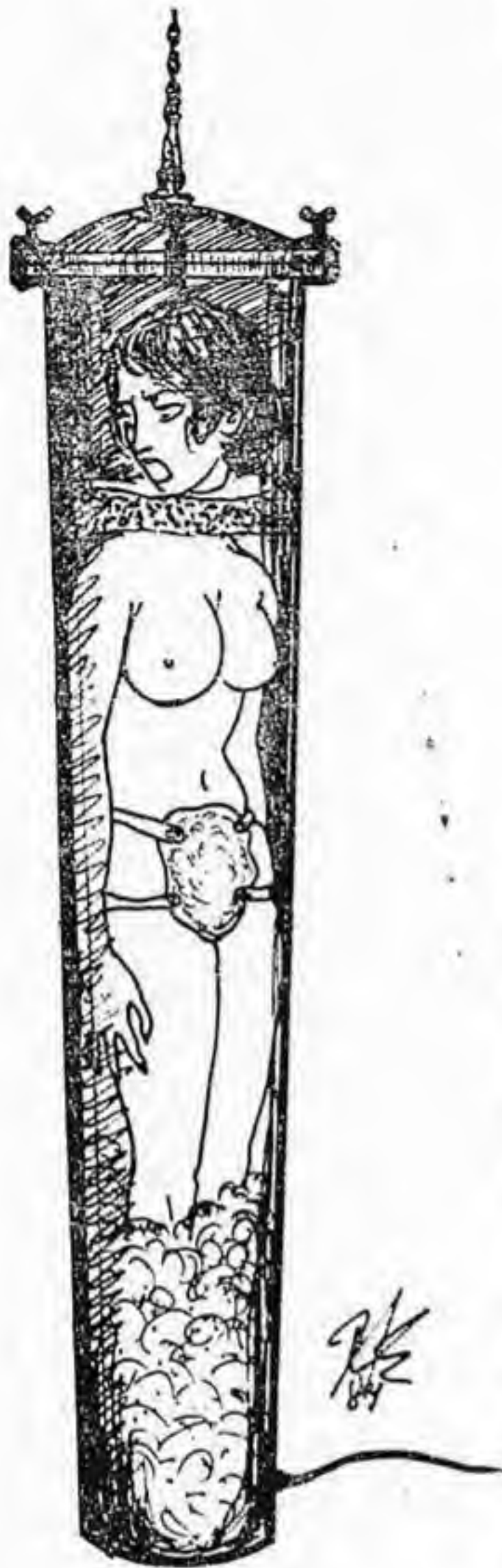
おそろしい。さりとて、又もや眠り薬で意識を奪われるのも嫌だ。眠っている間に何をされるかわかったものではない。

エミー司令は容赦なく決断を迫った。

「さあ、どうなさいます？」

笑顔ではあったが、キラリと光る瞳は百合子の逡巡を許さない。ペソをかけたようになつた彼女はシドロモドロに、

「いや、いやです。薬をのむなんて……」





「じゃあ、正気のまま『天国の門』を越えるんですね。ホホホ、勇気のある方ね」

といわれて、又、ひるんでしまう。でも、皆がそうしているのだから、死ぬようなことはあるまいとも考える。

「ええ」

消え入りそうな声が、われながら心細げに感じられた。

「じゃあ、裸になって、この上に横になって下さいませんか」

手術台のような寝椅子、そのシーツの白さが目にしみるようだった。その上に横たわった百合子の一糸もまとわない裸身は、造化の極致を示すかのように、完璧な美そのものと思えるのだった。舌をまく思いのエミー司令は、そのきめ細かな肌に、やさしく油薬を塗って行った。

「パッキングに使うスチロールが肌をいためるといけませんからね」

百合子には、何が何だかわからなかった。

そして、全身くまなく塗り終わると、

「ちょっと腰を浮かして下さい」

と、いいつけられる。

「アッ」

股の間を布切れが通った。手早く紙布製の

オムツが当てられたのである。それと知った百合子は恥かしさに総身を染めるのだった。

「十人のうち九人までは洩らしてしまうんですよ」

エミー司令は大人が幼児にいうような調子で説明した。

「腿を濡らすと、トツテも気持が悪いですから、こうしておいた方が安全ですよ」

直径四〇センチばかりの透明プラスチック円筒がスルスルと百合子の足下に近づくとアッというまに彼女の全身を呑み込んでしまった。寝椅子の真中の部分十五センチ巾が、フォークリフトの爪のように彼女を宙に浮かせ、円筒の中に差し込んだからである。何のことはない、透明な棺の中に百合子は、ミイラのように横たわっていた。

首のまわりに柔らかいウレタンの鍔がハメ込まれた。その上で頭部の開口部が別の円盤で密閉される。その円盤の真中には、吊り金具がとりつけてあった。天井からさがって来た鎖をそれにつなぐと、忽ち百合子のカプセルはタテに吊り上げられてしまった。

エミー司令がカプセルの下端についていたノズルに床下からの高圧チューブを接続する

と、百合子の足もとから白い発泡スチロールの泡がムクムクとあがってきて、数秒の間に彼女の全身を包んでしまった。首から上は例のウレタンの鍔で、さえぎられていたけれども、その他はスチロールが固まって行くにつれて、ピッタリしたパッキングとなって、身じろぎさえできない。

カプセルは吊り金具で懸垂されたまま静かに横に動いて行く。

自由を奪われた百合子は、恐怖で身体のシンまで凍ってしまいそうだった。

しばらくして移動がとまると、真下に丁度カプセルが通り抜けられる位の丸い穴がボカリとあいた。カプセルはユックリと下降してその下端を穴の中にさし込んで行く。

百合子の耳もと近くエミー司令の声が響いた。ワイヤレス・マイクロフォンが装置されている。

「歯を喰いしばって、シッカリ下腹に力を入れるんですよ。そうすれば多少は、しのぎやすいから。いいわねこれから切り離すわよ。

一、二、三」

.....

フックを外された百合子のカプセルは、まっしぐらに落下して行った。



## 熱 療 法

イーラは高熱に、うなされていた。

ホンコンで麻薬シンジゲートの魔手から奪い返されたのはよかったのだけれど、それはイーラにとり狼が虎に変わったにすぎない。

交転きわまりない境涯から来るショックはこの十九才の生娘には、あまりにも強烈だったといわなければなるまい。原子力潜水艦ネプチューン号に収容されて以来の彼女は、半ば発狂したに等しかった。精神の平衡を支えている神経の束がズタズタに引きちぎれてしまつて、わずかに数本の糸が支えて、彼女を狂人と区別しているといった方がよさそうである。このような症状に対する療法は、有明のスタッフが世界中で最もすぐれているといわなければならない。何故なら、豊富な生体実験が許されていたし、また対象となるべき患者にも事欠かなかったからである。

パレスエリアに直行した彼女は、一切の手続を省略して病院に収容された。ウィリー博士といえども、パレスエリアに入ることを許されていなかった。つまり、この病院は「現役者」で運営されなければならない。そして

患者も「現役者」に限られる。もっとも特別な重症者は、許可を得た上でポートエリアのウィリー博士のもとに送られる場合がある。

畜人以下、男奴などが病気になるれば、先ず実験材料にされるのが当たり前のことである。すべてがポートエリアにある生体実験場で処理されて病院へは入れられない。その点で畜人以下と以上とは、南アの白黒より、もっとハッキリした区別がつけられていた。

したがって、女囚たちは先ず畜人の境遇から脱して奴隷になることを無上の目的として必死に努力しているのが実状だった。しかしその門は狭く、はげしい競走があった。

イーラには、ある種の療法の一環として高熱を与える方法が採用されていた。四〇度を越す高熱にイーラは滅茶苦茶に揉みぬかれていた。その刺激を利用して彼女の神経を、もとに返そうというのである。

イーラの病状は素直にいつて、パレスエリアの病院では荷が勝ちすぎているように思えた。病院長として重い責任を負わされている佐野絹代にしてからが、まだ二十七才に過ぎぬ。たしかに才色兼ねそなえた優秀なスタッフが揃っている。とはいっても、経験の不足

は如何ともし難い。そこでポートエリアのウィリー博士との間に有線テレビが特別に許可され、それを使って博士の積極的な治療参加がはじまっていた。

佐野絹代がここへ来たのは、もう二年前のことだった。学部卒論が博士論文に匹敵すると評価された彼女は、勿論、国家試験も悠々とパスし、母校のK大附属病院で最も将来を嘱目されながら、外科医局に勤務していたのであった。それだけの学才がありながら、少しもギスギスしたところがなく、仕事以外の場所では花も恥じらうといいたくなるような日本の美女なのだから、大変な評判をとったのも当然のことである。マスコミにも度々顔を出すことになったし、第一、彼女を見ようとして、わざわざ診療を受けに来るといった物好きも少なくなかった。彼女の所属する医局は門前市をなすような盛況を示していた。

だから、彼女が台湾でYS-11の事故のため焼死したと聞かされたとき、この薄倖の美女を見舞った運命は、最も多くの人々に悲しまれたといつていいであろう。YS-11は中華航空の国内線で台北に着陸しようとして旋回中、豪雨のため目標をあやまって山腹に激



突炎上したもので、屍体は焼けて仲々識別が困難だったが、血液型、所持品等で確認されたものである。

それにしても、僅か数日の休暇を、なぜ台湾くんだりまで死に行ったものか、まったく悪魔にでも魅入られたようなものだ、ボーイフレンドたちは切齒して残念がった次第であった。

その通り、彼女は有明という悪魔に見込まれてしまったのである。

そもそも、彼女の運命を決定的にしたのは整形外科を専攻していた彼女が、ウィリー博士の論文に目をつけたことにはじまる。もともとその頃、博士はすでに「シャバ」にいなかった。しかし、彼は有明の王国に入っても、その研究成果を匿名で発表し続けていた。それも各国、各地の大学に分散して、夫々異なるペンネームでペーパーされたから、あまり目立たなかったけれど、その場所では常に驚きをもって迎えられるような内容だった。佐野絹代は、それらの論文とウィリー博士とを結びつけた、数少ない人間の一人だった。彼女は未亡人と接触しようとした。そして、それを果したとき、逆に蜘蛛の糸にかかってしまったのである。絹代の聡明さと美貌



はウィリー夫人を驚かせた。それは直ちに有明に伝えられる。有明の強大な組織は佐野絹代捕獲のための、オペレーションを命じられた。結論として、佐野絹代を獲得するためにはY S 一が墜落したといっただけであろう。もっともそれに同乗していた二十二才の美し

いタカラジェンヌも、ついだに捕獲されてしまったから、このオペレーションの収獲は二名だったわけである。

佐野絹代とて、例外は認められなかった。一等扱いにされたから、有明自らが調教にあたったのだけれど、素裸に剥かれて、ありとあらゆる拷問を受けた。そして、殆どの女囚たちがそうなるように、被虐の極致からのコペルニクスの転回によって、知らず知らずのうちに有明を愛するようになり、この国のなり立ちを容認するようになり、かえって積極的なスタッフに変容した。そして、その専門の故に、僅か二年にして新設されたパレスエリアの病院で、その責任者の地位についたのである。

彼女の周囲には、似たような経過をたどった数名の女医が協力していた。すべて日本女性ばかりで、あのジョセフィーヌ・フリーエールのような白人は、それがどんなにすぐれた、女医であっても、全く問題にされなかった。哀れなジョセフィーヌの現状は、巻を追って紹介することになるであろう。

それにしてもイーラは、なかなか厄介な患者だった。通常の処置では全く効き目がなか



ったからである。有明もそれを聞いて、ある日、その病室を見舞った。

高熱にゲッソリ瘠せこけたイーラの裸身はそこに死の影すら見えるようだった。

「しっかりしなさい。元気を出すんだよ」

久しぶりで聞いた男の声に、イーラはドンヨリとした瞳を有明に向けた。しかし、誰彼を識別できる状態ではない。

不意に有明の姿が、懐しい新津謙介に見えてきた。

彼女の両眼が光りを増し、起きあがろうともがきながら、

「ああ、新津さん。とうとういらっしやって下さったのね。イーラは、イーラは……」

あとは言葉にならず、ただ唇をふるわせるばかりである。

有明には、すべてがわかった。

彼女を正気にかえらせるためには医学的療法よりも、もっと手っ取り早いものが彼の手中にあることを思い出したのである。

半時間ほどのうちに、有明はポートエリアに姿を見せていた。新津謙介に会うためであった。

新津の処遇は、まだ決定していなかったの

で、未決檻の独房に入れられている。

独房といっても六畳ほどのガランとした個室の真中に、畳一枚やっと敷ける位の鉄檻があった、新津は後手錠のまま、そこに投げ込まれていたのである。

猛獣を入れるような鉄檻、それでも糞尿に漬け込まれた壺の中の生活や、ネプチューンの三等扱いよりは格段に衛生的であり、快適だったと感じている。そういう風に感じるからこそ、洗滌の第一段階なのである。苦痛といい、刺戟というのも、共に比較の問題にかすぎない。いきなり、こんな動物のような扱いを受けたら、それこそ自尊心を傷つけられて大変な苦痛を覚えたであろうが、もっとひどい待遇を苦しみ抜いてきた現在では、かえってホッとするような気がする時があるのも不思議なくらいだった。

もっとも、ここへ来てから施療的には到れりつくせりの処置を受けて、あの皮膚病もカブレも殆ど全快していたから、多少、考え方も、柔軟性をとり戻しつつあったのである。それと同時に、誇り高い国際捜査官としての自覚が、いかに惨めな目にあってもジッと忍耐して窮極の勝利を待つという信念と相俟って、現状を客観視するという余裕を作り

出していた。

有明が入ってきたのは丁度そんなときだった。白い寛衣をまとった有明の姿をみて、さすがに歯がみしたい程の憤怒がコミあげてくるのを、ジッとこらえながら、わずかに身をちぢめて、有明を無視する態度に出た。

「どうかね、元気になったようじゃないか」  
有明が問いかけても、フンといった風にソッポを向くのがせめてもの抵抗だった。

「すっかり、きらわれたもんだな」

乾いた声で有明は嗤った。

「君は深入りをしすぎてしまった。それでも麻薬シンジゲートの手から救ってあげたことになるんだぜ。彼等の手に陥るよりも、ここに来た方が、まだしも幸せと思わなくてはならぬまい」

「ウソをつくな」

憤然として新津は叫んだ。

「僕をとらえたのは、お前じゃないか。蔡樹理とお前が同一人物だということは、とっくにわかっていたんだぞ」

「それは、ご明察」

有明は、わざと馬鹿丁寧に礼をいった。

「青帮の頭領にして貰って誠に光栄だが、実は蔡樹理は確かに別の人間だよ。時に私が名



前を盗んだことはあるが、レッキとした実在人物に間違いないよ」

「そんなことは、どうでもいい。いつまで僕を、こんな目にあわしておくのだ。勳りものにされるくらいなら、いっそ一思いに殺してくれたら……」

「まあ、まあ、そんなにセツカチになるものではない、新津君」

下心のある有明は怒りもせず快活に話しかけた。結局、無視してしまおうと考えた新津

が、いつの間にか会話にひき込まれてしまった程の話術のうまさだった。

「私が君を生かしておいたのは、君のためじゃない。君を愛しているイーラさんのためなんだよ」

「えっ」

さすがの新津も声を呑んだ。あるいはとう期待が心の片隅にあったけれど、それと聞いて心の波立つのを、どうしようもない。

「イーラさんは、どこにいるんだ。まさか、

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

まさか、お前が、ひどい目に会わしているんじゃないだろうな」

「勿論さ、大事なお客さまだからね」

有明は、なにげなく答える。

「ただ、今は病氣なんだ。彼女は君の助けを望んでいる。どうだ、会ってやりたいとは思わないか」

「会いたいとも」

口ごもりながら、若い男は叫んだ。

「その姿でか」

有明がアザ笑う。赤裸の後手錠に気づいた新津は思わず、たじろいでしまう。

「わたしの国へ来たからには、生きて逃げることは不可能だ。警官意識を止めて、わたしの部下にならんかね」

以前、唾を吐きかけたと同じ質問だったが今度はイーラときいて躊躇せざるを得ない。しばらく沈黙がつづいた。そのあげく、

「負けた」

新津は力なく答えた。

「わたしの部下になるんだね」

答えはなく、うなずくだけだった。

「ホントかウソか、すぐわかることだ。しかし、その前にイーラに会わせてやろう」

有明が檻の錠を開いた。

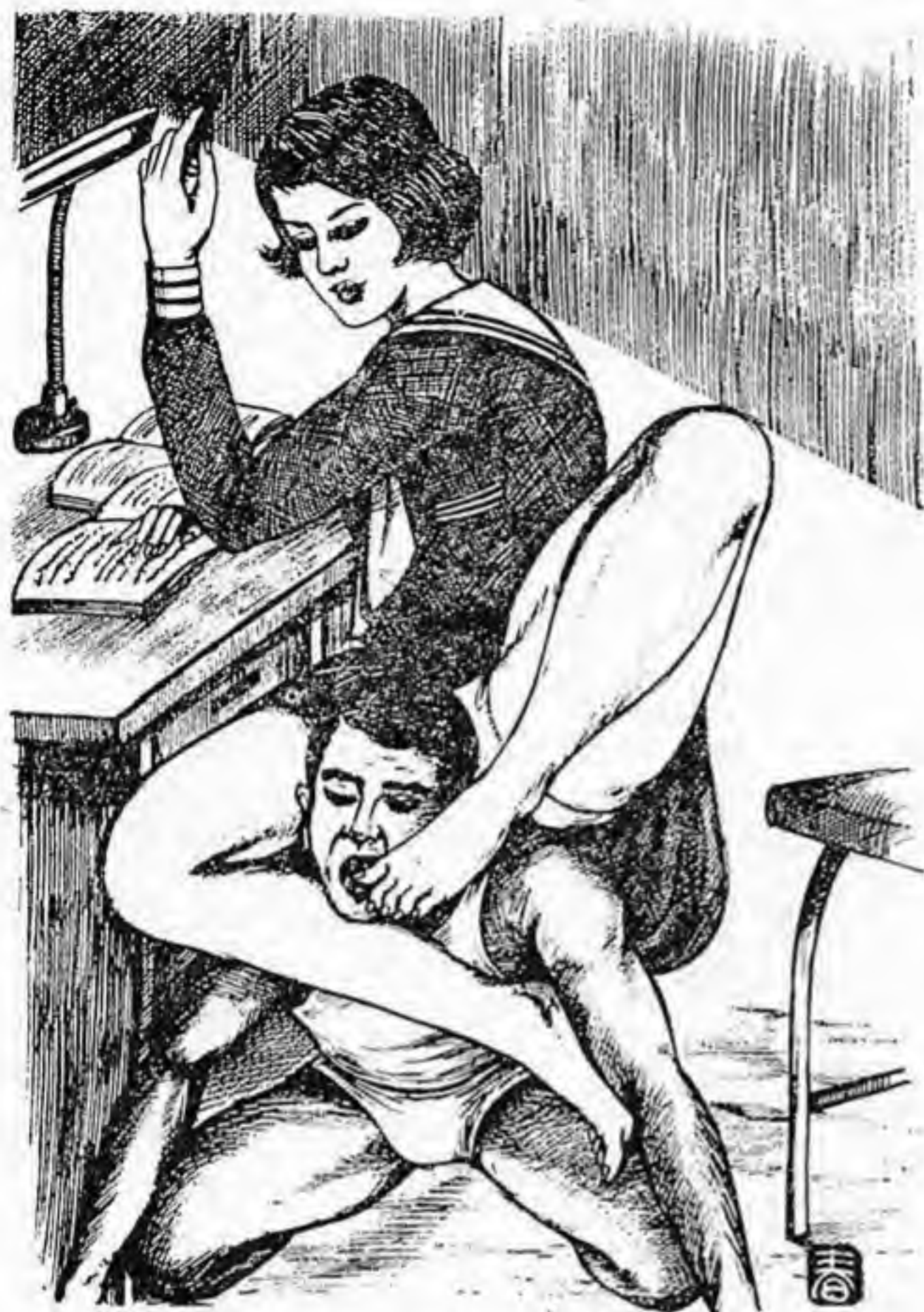
(未完)



創作・Mストーリー

## マリオネット

せと・よしや



カット・春川ナミオ

時に宏（ヒロシ）十九才、受験地獄も早や過去のもの、天晴れ大学一回生、ダークグレーの春にもようやく陽光よみがえり、砂噛む日暮らしにハニーレモンの香りがほのずっぱく漂い始めた頃だった。

夏季休暇のつれづれに小遣い稼ぎなど思い立ち、家庭教師のアルバイト、とある閑静な高台の、些少ふるめかしい感じだが可成り豪華な邸宅で、西に開いた窓に涼風の舞う朝のひととき、徒然なるまま娘の相手。

その娘、玲子というのだが、これがまた、その名の通り玲瓏たる美少女、まさにニンフで、げに願ったり叶ったりの上得意、まだあげそめし前髪の、とって十五は百合の花。

この年頃の娘はみんなそうなのか、顔と躯がとんとチグハグで、無雑作に肩に垂らした如何にも清楚な緑髪に加えて童女の面影とどめた派手造りの稚な顔、そのくせ女を匂わす軀つき、胸のふくらみこそ今ひとつのマネキン並のAカップだが、それだけにこんもりと形よく盛り上がり、ことさら瑞々しさを浮き上がらせ女を強調したあくまでもまろやかなウエストライン・ヒップラインの豊かなカーブには、馥郁たる香気芬々として熟れた女の媚が滲み、お辞儀すると白いヴェールに包まれた、キュッとした恰好いいヒップが丸見えになっちゃうほどのミニスカートからによっきりスナリ生え出た伸びやかな二肢は、宏が今迄に邂逅したどの女のそれより素晴らしく、さながら、大理石



の門柱を髣髴させる艶やかさ、逞しさ、美しさ。思わず脚もとにひれ伏し、砕け散るほど踏みしだかれたい衝動に駆られることしきりの宏だった。

そもそも被虐嗜性なるものは、ノイローゼになれる程度の、ちょっと上等な人間ならば多少なりとも持ち得るもので、フランソワ・ド・サドは情操低き蛮的心理の狂人だが、ザッヘル・マゾッホは感情豊かな天才的芸術家的変質者であり、ホモ、レズ、サディズムの類は、児童心理で次元の低い子供の遊びの延長だが、マゾヒズムこそは大人の心理、それを快楽に結びつけて習慣化し異性を対象として執着する処に、異常性というか偏執性というか、いわゆる変態性欲者で、並びの幼児セックス愛好者と同じレットテルが貼られるのだが、本来の被虐使性は至って摯実なものであり、感情豊かで情操高い人間以外の持つあたわざる変態心理によるものなんだと、我田に清水を引く宏。

思えば宏の裡にマゾの芽生えしそもなれせめは、よく在る処の、外界の刺激に馴致されたものでも幼小児期の想い出によるものでもなく、遺伝因子を考慮の他にすれば、些かの受験ノイローゼによる現実からの逃避であり

不満解消の内罰的反応とでもいうか、不満の原因を全て自己の責に帰した拙い手段の悪しき結果であり、その時点に於ては巷間にあつて快楽を貪り食らう酔生夢死の狂人どもとはこと変り、我身にムチ打つ摯実な殉教の徒だった筈なのだが、今さら思索しても始まらないし、当たらないし、結果からみればどうでもいいこと、彼もまた快楽原則、と言ってもこんなものは有り得ないが、ともかく自己のリビドーにのみ溺惑し服従しようとする徒輩であり狂人であり、それで世渡りできれば、それで、何も言うことなかった。

如何に体格が良く色気が大人まがいだとして所詮は中学生の玲子のこと、あまつさえ自惚放恣の一人娘、頭の方は明敏伶俐、自他ともども認める夙慧で、うっかりすると宏の方が教えられるほどの才媛だが、性格的には少しく粗野で甚だ短気、熱しやすく醒めやすく、集中力に欠けるきらいがあり、良く言えば女に少ない水平思考のはしりで、悪く言えば思考散漫タイプ。妙な大人の薄気味悪いミラル・ボイスなどとはまた違った少女らしいハイ・オクターブの愛くるしい声で「ワンス・アポンナ・タイム——」聞こえていたかと思えば、アトラスなど広げ「シェフィールドは

刃物の都市ね」およそ風馬牛のことを口走り「三角形の一边は、他の二辺より小なりき」など唱えつつ、机のヘリでピアノのけいこ。

それら仕種が如何にも大胆、奔放、傍若無人で、思わずがりつきたくなっちゃうくらい。それでも職務上、勇を決してたしなめた宏だったが、流石にさかしい娘で、宏の器量すでに見てとったか、ふっくら色艶やかな頬に利発そうな唇をへの字に結んでフンと小鼻ふくらませ、それが魅力の眉毛さか立て上眼使いに睨視され、なまじ口応えしない処に、若い娘らしからぬ陰に窺った凄味が有り、思ひもかけぬ出足払いを食った宏、脳天から踵まで焼け火箸一氣に刺し込まれたようなショックを受け、と同時に、それとは齟齬撞着して、言いようのない寒気がスコールのように背筋を走り被虐的な畏怖感に襲われ、顔あからめて握りこぶしにコホンと一つ呟いて取りつくろい、犀利な視線をはずすのがやっとだった。

爾来、当然乍ら玲子ペースのしたい放題、諸事雑般ノンセクションのクエスチョンに、おっかなびっくり応えるのみの家庭教師。その心、知ってか知らずか放縱三昧の挙句、吸い込まれそうな深い瞳に欠伸涙を泛かばせて



回転椅子をキイキイ鳴らし、当てこするような眼つき表情で「あーあ、つまらない、飽きちゃった」これには宏はとほと困り、一週五日の一日二時間が玲子のママとの契約だったのだ。

恰幅よく鷹揚で気立てのいい未亡人ママはパパの遺した貴金属店の取締役だから既にお出かけで、当邸内にましますは玲子と宏、二度まみえたハタチ前後と見受ける小柄だが洗練された端正な容姿の色白美人、逝ったパパの遠縁だとかいう、メイドまがいの同居人洋子と、庭の芝生を散策する忠犬タローの玄関番で、セクレタリー・スクール・タイプ教室通いの洋子は宏と相前後して留守だから、エスケープ決め込み開店休業、早じまいした処で苦情の出る憂いはないが、ママの泰然とした愛想いい顔を偲ぶにつけ、契約不履行は気がひける、さは言えど無理強いして我儉娘の機嫌損じたくもなし、否、実の処は機嫌を損ねてくれた方が快いのかも知れぬが、それ以前に無理押しするのは何とも性に悖るしそんな勇氣も既がない、で、思いついたのが旨く行けば一挙兩得、ロデオごっこは荒馬ならしの気分転換法。

世に謂うお馬さんごっこというのは相手が

よほど幼稚な人間か、はたまた稚氣あるドミネーターでなければ通用しない、はたと思いつきしが此のロデオごっこ、可成りルールの厳しいハイクニックスのお座敷遊戯、ロデオだから馬上豊かな美女を振りきればいいのだが、馬の動作に制約をつけ、上下運動一切禁止、這うか走るか前後左右に揺するかどうか骨折り損で効うすく、綱はタイミングのみ。

もとより跳ねっ返りはバスケケットボール部所属の玲子のこととて一も二もなくOKで、因数分解などはそっちのけになる始末。

宏にあっては尚更で、ただ玲子の視線を頭上に頂き、有るか無しかのスカートからスナリ伸びきった脚もとに這いつくばただけで被虐感に酔い痴れて、カッと頭に血が駆け上がり身が慄え気が遠くなるほどだから、沉んや柔らかく肉満ち弾む重圧ドスンと背中に感じ受け、パンティ露わに惜し気もなく剥き出した肉欲そそる太腿に、脇腹など搔い挟まれてヒシと締めつけられれば最早抵抗の術もなく、タオル捻じって咬まされた手綱しぼられ只管に呻き、のけぞるばかり。

「どうしたのよオ、だらしないわね」叱咤されて氣を取り直し、件の瘦馬、何とか無体な調教師を振りきろうと、無暗に這い、矢鱈に

走り、遮二無二、身体ゆすってみるに、玲子は大柄、宏は小柄、手綱邪険に曳き絞られてはクツワの痛さに四肢も萎え「ほらッ、シッカリなさい！」ハッシと一ムチ拍車入れられカーペットの縁が、揺れて近づき、かぶさった。

「もう、ああ、もうダメです、参りました」「フン、弱虫ねえ。もう一度、立つまで降りてやんない」「いえ、もうダメです、もう立てません」「いや降りない。さあ、グズグズ言わずタオルくわえなさい」荒調教師は武者然として驚馬を組み敷き喜色満面、しっとり艶やかな玉の肌を晒け出し、悩ましく開脚膝立ての勇姿で宏を圧し潰したまま、否応なくクツワ咬ませてグイグイ絞り「ほら、立ちなさいよオ」盛んにハッパかけるが、桂馬の高飛び歩の餌食、既に無駄な足掻きで力を捨てた定跡知らずの頓馬な馬は、立ち上がるどころの騒ぎではなく、手綱曳かれて飛び跳ねられては乱れた息差し整えるのさえおぼつかずさればと言って赦しを乞うにもクツワが許さず「早く立ちなさいってば、意気地なし！」いくら叱責されても馬の耳に念仏で「ダメねえ、ヒーンすりゃ鈍するって、このことね」「この頃の男のコってホントにだらしない



んだから、あたしなんかクラスで最高の発言権があんのよ」「何やってんのよオじれったいわねえ、立つまでは絶対に赦して上げないわよ」手綱グイグイ、重い軀をドスンドシんかさにかかった罵詈雑言に、クツワの隙から悲鳴と歓喜とばしり、右の眼には喜悦の涙、左の眼からは苦痛の涙が滲み出た。

玲子の裡に既に加虐を好む要素があったかどうかは知らぬが、日増しに横柄な口吻、粗暴な態度をなすようになり「何よ今頃ノコノコと、七分も遅刻よ」「すみません、途中で友達に会ったものですから」「それがどうしたのよ、言い訳なんか聞きたくないわよ、二度と遅れないようお仕置きしてやるから、お坐り」堅い床に端座させ、鉛筆の尻で所嫌わず小突いたり膝の上を踏みにじったりしつつ「いい、これからはあたしのことを玲子さんなんて気やすく呼ぶんじゃないわよ、お嬢さんて呼ぶのよ。いいわね！」「あッ、はい」「よし。じゃ、今日んところはカンペンしてやる」いっぱしの支配者ぶりで、もちろん宏の方でもそうなるように仕向けた訳なのだが、玲子にすれば命令一下で意の尽になる宏を見るにつけ、色気づいた娘の直感「この人あたしが好きなんだわ」ピタリ肯綮をつき、その

女心の自惚に加うる処の、児童心理というか大人と子供の境界人の不安定な情緒が故に、すっかりのぼせて女王様きどり。

根が飽きっぽい娘のこと、より新鮮な体験へと、勉強どころではなくなり、気分転換に勉強するといった按配で、家庭教師の宏にすれば断乎赦されざる背信行為だが、やってもやらなくても大差ないし、いまだ解雇の沙汰なき処をみるに、どうやら主犯玲子が官憲ママに黙秘を行使し暗中飛躍を図っているらしい、それとも従容自若なママが黙認しているのか、だとすれば快いことだが。とにかく玲子のドミナぶりは板につき、宏の消極的受動的薰陶よろしく相俟って「いいものあげるからアーンして」「何ですか？」「何だっていいじゃないか、厭だって言うの」「い、いえそうじゃないですけど——」「早くやんなさいってば！」「はッ、はい——」「ウフフ、吐き出したら承知しないわよ」語気さわやかで頼もしい命令形がクレッシェンドに連発するようになり、挙句、手足をキリキリ縛りつけては「さあ、もうお前は囚われの身よ、フフ、今から面白いことしてやる」娘心の獵奇をもって凌辱したり、手間ヒマかけてじっくり痛めつけたりの狂態ぶりで、宏の悲鳴が

聞こえるのも屢次の乱行。

それだけでなくも打った張ったの蛮的行為を好まぬ宏、よしや好んだ処で度を越えた苦痛は苦痛でしかなく、悲鳴の一つも出ようというもので、程度を知らぬ娘に「何さ、自分から言い出したクセして」「でも乱暴は嫌いです」「フフ、あたしは弱虫を見ると余計に虐めたくなるのよオ」「わあッ、もうカンペンして下さい」「うるさい！。それでも男なの」皮肉るような眼で射られ、ピシヤリはられて決めつけられれば泣きなくなっちゃう。

若く初心なサディスチンは消極的加虐、すなわち女体構造に則した受動的エゴ行為を知らず、ひたすらアクティブな責めに走り、遡る宏を無理無体に縛りつけ、無抵抗状態に緊束したうえ思いつくまま乱暴狼藉、苦悶に呻吟する顔を覗き込んで悦に入るといったぞっとする様な暴行魔で、たまらぬ宏が涙まじりに哀訴する迄は決して解放しなかった。

人のいいママとの雇用契約は一日二時間の筈だったが、底意地悪いフェアリの気分次第で超過勤務は屢々往々、その点では至って真摯な家庭教師だった。

女は身体髪膚あまねく性感帯だそうで、逆三角形の各頂点はもとよりだが、背中、髪



毛、耳孔耳朶とその周辺、手足の指の股間、手の掌中央、足の裏等々に、より敏感な反応を示し、息を吐きかけられただけで失禁するほどの官能を訴えるとかいう、出来た女がいるような。生まれつきのものなのか、やっぱり学習反応によるものか。

一般に下等動物の適応のメカニズムを支えているのは本能であり資質だといわれるが、人間の場合は全てが学習で、ひな鳥は教わることなしに歩き本能的に餌をついばむが、幼児は学ぶことなしには最も簡単な生活行動すら行なえず、感覚機能は全て無感覚に近い状態になり、アヴェロンの野性児にみる如く、人間特有の知性や感覚を失った人間は多くの動物にも劣るという、むしろ人間特有の知性や感覚は人間社会の文明、とりもなおさず学習のたまものだとしており、人間にとって生活とは学習であり、生活の全てを学習を通して身につけ、学習によって知性や感覚機能を錬磨しパーソナリティーを形成してゆく。一卵性双生児でも違った環境に育てば、凡そ異なった生活態度様式をとるようになる。況してや性生活に於てをやで、人間にとって資質などは有って無きが如し、学習が資質なるものを薫育し、或は凌駕するのだろう。

概して女の肌は外界から刺戟を加えられると、初めはくすぐったさしか感じ得ないが、徐々に性的な快感を伴い、やがてはそれによって変わるものらしい。生娘や純情娘が軀に触れられることを、ことさら厭悪し悲鳴をあげるのは、未開の処女地が故に他ならず、世の愚かしくも賢明な男どもが、無垢の伴侶を得たがる最大の理由は己の好みの色に染め易いという処にあるのかも知れぬ。

玲子も当初は「いやッ、バカ、何すんのよオ、ヘンなマネするとギリギリ巻きにして踏みつぶしちゃうわよ！」まるで取りつく島とてなかったのだが、宏の折りにふれての啓発に次第に反応を示すようになり、その分だけ宏の軀が休まった、とは言え相手はまどうかたなき乙女のこととて、そうそう下衆な行為を許す由はなく、両手の自由は常に全く掠奪され、些かの御機嫌損じでも「こいつウ怒ったわよ、今日はムシャクシャしてんだから」間髪容れず、硬いベルトの雨が降り、二本足の犬の宏が泣く泣く奉仕をやらされるのは平素に露わな部位がやっつとで、犬の方には残り一枚のみの半裸を強い「優越感」にひたりつつ、自分の方は殆ど残し、禁男の処女地などは金城鉄壁の堅固を極め、決まって白無垢の

薄ぎぬにピッタリ隠蔽されたまま。

それでも御機嫌うるわしき折り、惕々翼翼としつつも胸ときめかしてそっと背後におすがりし、堅く食い込んだ要塞無視して柔らかく弾む豊かな峽間に、やんわり埋めてみた時には、真に桃花源は無可有の郷を訪ねたような夢うつつ。

薄い遮蔽物を透してはのぼの伝わって来る淡いぬくもりと、化学繊維の硬い匂いに密かに混じった親しい香りが、阿片のように脳髓のヒダの間を甘くよぎり、粘っこくまつわり鋭く突き刺し、根深く浸み込んで、だがその痺れるような陶醉は、五体全軀がトロけて崩壊しそうな幸福感ではあったが、何かしら苛立たしい焦燥感でもあった。

女王様も幾らか感じられてか「ヒヤッ、ヘンな犬ね、くすぐったいじゃない、いやアな感じ」言いつつも、特に拒まず手も振り挙げず、腕こまねいて仁王立ちで、嬉しくなった不具の犬は、まばゆいばかりの脚下に窮屈そうにぬかずいて、運動神経の良さを忍ばす甲高で土踏まずの切れ込み深い色艶やかな足にじゃれつき、むしゃぶりつき、御機嫌をつないだつもりだが「調子にのるんじゃないわよ！」短気でアクティブな女王様にはうつつ



しくみえたか、いやというほど首根っこを踏みつけられ「さあ、シゴいてやるからヨタヨタしないで、お立ち」と、又もやプロレスさながらの美容体操の御所望で、五分と五分でもどうだか分からぬ跳ねっ返り娘を相手に、両手なしのハンディキャップ背負わされていて勝算などあろう筈はなく、身を護るには相手にしないのがせいぜい最善の策で、されるが俥に搏たれ蹴られ組み敷かれ、鼻を抓られ耳ひっぱられ、挙句の果てにベッドの上に四肢を晒けてつながれて、おまけに声まで奪われて、異様に光る眼に迫られ「フフ、やっぱしこの方が面白いわよ、ゆっくり料理してやる」もとの木阿弥。

だが、宏の慎み深くも倦くなき追求に、やがて形勢逆転し、玲子の方から「しつっこいコねえ。よし、もう容赦しない、死んじやうほど舐めさせてやる」腹立ちまぎれに金城湯池もかなぎり捨てて、陽灼けした健康なこがね色とは相反し、そこだけがホウロウ仕上げの鉄器のように白くまぶしい双球あらわに「さあ、どうだ、参ったかッ」打ち跨がってグイグイ挑んで来るようになり、そんな時宏は、めくるめく被虐の深淵にのめり込み、金泥の中を這いずりまわり、このまま命果てて

もいいと思ったくらい。

学問を教える家庭教師としては初手から失格の宏も、女王様を陶冶する教師としては嘴矢から成功したようで、もっとも玲子の方が独学で既にその才を多分に身につけていたようだが、日ならずして、教師である筈の宏は教え子である筈の玲子の前では全くの奴僕、もの言う玩具となり果てた。

安普請六畳一間の下宿ガタピシあとにしてローンで買った七〇CCバリバリ吹かして十五、六分、門をくぐって猛犬タローにピュイピュイ愛想ふりまいて、勝手おぼえた他人の屋敷へノソノソ無断侵入、踊り場の有る凝った階段トコトコ昇り、コツン、コツンと貧乏ノック、剝々たる音に「はい、どオぞ」と耳馴れた玲々咬々たる声あれば、ドアをギイヒラあけて身をかわし、一揖しつつ後手にバチヤリと締める、そこまでが人間宏。

その、三年前迄はパパの書斎だったとかいう、和室にすれば十畳くらいだろうか、跳ねっ返りといってもやっぱり女、えもいえぬ芳香が芬々と漂い、奢侈な調度が点在し、きちんと整頓された瀟洒なたたずまいの部屋に這入った途端、宏は畜生に変わり、物体と化したのだ。

だがそれは、あくまでも玲子本意の奴僕であり玩具であり畜生でしかなかった。

「本当に飲みたいのか？ 本当に」「はい、飲みたいです」「ウーッ、バッチイわねえ」「はいバッチイです。でもお嬢さんののはきたくないです」「どうしてよ」「あなたはばくの御主人様ですし、ぼくはあなたが好きですから」「へーえ、そうやって何時も縛られて意地悪ばかりされてんのに、まーだコリずに好きなのオ。気違いめ！」「わあッ、もちろん嫌いな時もあります、けど、やっぱり好きです」「ウフフ、無理しちゃってるわ。怒らないから正直に仰有い」「ですから、部分的には嫌いなところがありますが、総体的には大好きです」「ヘンなの——それで好きだったらどうだって言うのよ」「好きな人のものはきたくないんです」「フーン、ふたたびヘンなの」「ヘンじゃないです、ベーゼと同じです」「ベーゼ？」「キスです、セップン、クチヅ——」「分かってるわよ、けどキスは口じゃないか」「でもバイ菌は同じです。寧ろ口の方がきたないです」「嘘おっしやい！」「うッ、嘘じゃないです。キスはセックス以上の意味を持つんです。嫌いな人とは絶対できませんし、できても感じません



「意味が悪いだけです」「セックスだってそうじゃないか」「ええ、でもセックスは愛情などなくとも感じます。男女の交りに於てセックスは完全無欠なものです。神様が人間をお造りになられた時、この最高芸術品が何時迄も滅びませんようにと願ひ、そうお造りになったんです」「フン、何が神様よ、幼稚園児め。お前ケーケンあんのか」「え、いえ、そういう話です。ぼくは恥ずかしいですけど高村光太郎です」「何よそれ?」「——ドウテイです」「ウフッ、いいじゃない可愛くて。今、そういう男のコ流行ってんのよ」「ええマア、それにお嬢さんのように声の綺麗な人は凡そ大丈夫ということですよ」「何がおよそなのよ」「はい、いえ、あの、とにかくキッスもオシッコも同じですよ」「何がとにかくよオ、元家庭教師なんだから、もっと正確に言え!」「あーッ、もうカンベンして下さいよオ」「フフ、あたしが何も知らないと思つてたら大間違ひよ。いくら言つてもオシッコはオシッコよ、フケツだよ」「それは先入観念ですよ」「だったらどうしたのよ、文句あんの」「いえ、ありません」「人間は先入観念が生きてるようなものなんだから。お医者さんの診断なんて先入観念もいいとこよ。先入

観念を沢山持つてる人ほど識者なのよ」「そうとばかりは——」「言えるわよ!」「はッはい言えます、でも識者と賢者仁者は全然別のもので、学者と偉人英傑は全く異なります。愚かな才人もいます」「だまれ、こいつウ!」「わあッ、ごめんなさい」「昔からきかないとされてるものや、今現在きたないとしてゐるものをきたないと思わない人間はバカか氣違いよ。心身の平衡を失つた者の感激生活は健康者の平凡なるに如かず、病み疲れた頭でする理解は健やかな者の無自覚にも及ばないっていう理法を知らないの。お前みたいな氣違いが喜んだり考えたりすることなんか、マトモな人達から見れば取るに足りないお笑い種よ。どんな場合でも何処かピンボケで氣違いじみてるものよ。そんな一人よがりて蒙昧な詭弁邪説に常人世人が首肯くとでも思つてんの」「い、いえ、思つてません、マッタク、おみそれしました」「何がオミソレよ、氣違いドレイのぶんざいで!」「あーッけど、お嬢さんだってえ」「あたしが何よ」「いえ違います」「何が違うのよ、はっきり仰有い!」「いッ、何でもありません」「早く言わないとだんだん痛くなるわよ。ほーらウサギさんになっちゃうよオ」「いーッ、言

います、言いますから、は、はなして」「さあ何よ」「——あなただって他人に乱暴して喜んでるから氣違いかも——」「そんなこと知らないわよオ。玲子タンはきたないものはきたないと判つきり思つてゐるわよ——そうねえ、お前を縛ったりイビったりするのは、いけないことだワ、可哀想だワ、と思ひ乍ら面白いし愉しいし氣持ちがいいからやつてんのよ。つまり良否是非善惡を無視して、好きか嫌いかよ」「でしたら、ぼくもオシッコを飲むのは、いけないことだ、きたないことだと思ひつつも、面白いし愉しいし氣持ちがいいから、好きですよ」「氣違い」「——お互い様です。ぼくの方はパッシブで人畜無害だから社会に害を及ぼす憂いもなく、遙かにマシですよ——」「何ですってえ」「いえ、でも、だけどウンチを食べる人だっています」「きゃあ、バツカみたい。モーレッツバカのJISつき氣違いよ」「ええ、政府登録国家推奨の氣違いです。でもクモやゴキブリやムカデを氣違いみたいに好んで食べる氣違いだっています」「嘘よオ」「本当です。そんなのに比べれば少しはマトモです」「フン、何がマトモよ」「だって手当たり次第食べるのは別として、愛する人のものには不浄感を憶えなくつ



で当然なんですから、それが情緒ある人間です」「そんなことないわよ」「そんなことあります、大人になれば分かります」「何さ偉そうに、あたしが子供ならお前だって子供じゃないか、もう一度ゆっくり考えながら言うてごらん!」「ひゃッ、ごめんなさい、失言です、取り消しです、あーッ、おゆるし、失言カンベンして下さい、ワァッ! タスケテ死んじゃう」「二度と言ったら、ただじゃ済まさないわよ」「は、はい——二度と申しません」「それにサア、もし不潔じゃないとしても飲んだり食べたりすることないじゃないか、その辺が気違い沙汰よ」「でもオシッコやウンチには栄養があるんです」「だからどうなのさ、栄養ならハムやチーズやミルクやジュースの方がずっと多いしおいしいわよ。動機や原因や過程なんか問題外よ、結果一つが狂ってれば全て気違いよ、生まれつきの気違いも自動車事故での気違いも、その時点に於ては気違いに変わりはないわ。大体そんな愚にもつかないことをワザワザ持ち出す処が気違いじみてるのよ、自分に都合のいいようなことばかり言うんじゃないってのにイ」「いえ別にそんな、ただ栄養があるんだという、お話です、豚は人間のウンチだけでも育ちま

すし、犬は犬同志ウンチの食べっこをするから暗くても眼が利くんです、タロー君だってきつとそうです」「嘘よオ」「え、ええ、犬の方は知りませんが——」「嘘だよオ」「はい、タロー君は——」「嘘だと言ってるのが分かんないのか!」「いッ、いえ、はい嘘です、みんな嘘です、デタラメです」「いい加減な事言ううと承知しないわよ、黙って聞いてやってれば勝手なことばかり言ってる。余計な事言えないように口も縛ってやる」「いいやです、それだけはお赦し下さい、もう言いません」「いや赦さない、あたしは、おしとやかだから、やっぱし静かなお前の方が好きよ。余計なこと言えないようにしてやる」「もう言いません決して、誓います」「いい加減なことばかり言うからよオ」「いい加減じゃないです、飲みたいって言ったのは本当です」「まーだ言ってるわ、しつっこいコねえ。よし、今度いっぱい取っというて、死んじゃうほど飲ませてやる」「ダメですよオ。お嬢さん直ぐ、そんな無茶言うんだから、そういう処が嫌いです」「何だってえ、も一度言っごらん」「いッ、いえ、でも、そんなのは厭です」「何よ今さら」「自分のツバでも一度吐き出せば容易に口へ戻せないのと同

じで不浄感が先立ちます、キスする人はいとも他人の吐き出したツバを舐める人はいません」「フン、何言ってるのよ、あたしのを舐めたのは誰よ」「あれは舐めたのではなく舐めさせられたんです」「ン? 聞こえなかったわ、ふたたび言っよ」「はい——いいです」「何がいのよッ」「すみませんごめんなさい、でも、あれは直接いただいたので、舐めたんじゃないありません」「同じことよ」「いいえ違います、キスのバリエーションのようなものです、謂わば一方的間接キス——」「へえ、そう、いい事聞いたわ、じゃ、今度からは、なるだけバッチイ所へ吐き出してから舐めさせてやる」「いえ、もう結構です」「何がケッコよ、ふざけるんじゃないわよ!」「わあッふざけてなんかいません」「あたしのものならウンチでもきたくない筈よ、あたしは御主人様よ、愛する人のナンとかカンとかはどうしたのよ」「ですから尚更なんです、軀から離れて一旦地に果てば単なるツバです、オシッコも同じです、ましてアンモニアを放つようになれば、もうお嬢さんの小水ではなく何処にでもある汚水です」「だったらどうだって言うのよ、御主人様がいいと言っただからそれでいいじゃ



ないか、絶対服従よ、ジタバタしても手遅れよ、お前の希望通りゆくとでも思ってたの」

「いいッ、いえ、そんなこと夢にも思ってたません」「当然だよオ」「はい、当然です、ですから忠誠を誓う意味からも御主人様のを拝受したいと思っただけです」「フン、旨いこと言ってもダメよ」「本当です、旨いことじゃないです、ふたたび誓います」「何がフタバビよ、こいつウ」「わあッ、ごめんなさいでも本当です、神かけて誓います」「フン、旨いこと言って——じゃ、どうすればいいのよ」「はい——ダイレクトが特級酒なら直後のものは焼酎で、燗ごましはもうダメです」「何よそれ？ 何ですって！ だんぜん赦せないわ、あたしのオシッコするとこ見ようって言うの」「ち、ちがいます、そうじゃないです、甚だしき誤解——」「おだまりッ！ よくも時間をかけて、ブジョクしてくれたわね。よーし、もう絶対に赦さない、テッテイ的にシゴいてやる」

宏はあくまでも「玲子本意」の奴僕であり玩具であり畜生でしかなかった、が、それが奴僕の奴僕たる所以であり宿命であって、もはや宏は玲子の掌裡から出奔することを意図しなかった、否、それ以前に玲子がそれを許

さなかったのだ。

その日の私刑は無法を極めた。既にブリーフ一枚、半裸でキリキリ面縛ともども脚もついでに犇々縛られ転がされ、これまた縞模様サマーセーターとパンティ一枚、べったりトンビ脚スタイルで打ち跨がった玲子の、五〇キロを優に越えるグラマラスな軀に組み敷かれ、話の合間々々に所嫌わず搏たれ、抓られ、弄ばれていた宏だったが、玲子やにわに立ち上がり、傲慢でお天気屋の我俥娘にはよほど癪にさわったとみえ、童女のように愛らしい明眸皓齒豊頬を鬼女の如き凄じい形相に並び替えて気色ばみ「子供だと思ってバカにしてんのね、今にみてらっしゃい、コドモの怖さを思い知らせてやる！」言い捨てパイと背を向けて、ただごとではないと悟った宏の必死の謝罪むなしく弁明を尻目に、部屋の隅の洋服箆笥プチンと開き、手にした布きれ二つ三つ「さあ、暫く大人しくして貰うわよ」言いながら、瑞々しく張りきった太腿からスナリ伸びた、いみじき脚線ことさら誇示するようにして振り、まぶしくも胡坐かいて坐り込み、両手に振りかざしたそれは、薄汚れた白いソックス一對と、何とも不思議なシミの

散った懐かしい薄衣ヒラヒラさせ、すなわち特別衛生用品で「ほら、大きくアーンしなさい」と、宏の鼻先へ押しつける。

甘栗のように芳しい、それでいて妙に甘ずっぱく生臭く、チーズのような異様な腐臭を放つそれらを顔を背けていなし、最後の抵抗を試みる宏は、俥ならぬ身をよじってあらがい「カンベンして下さい、子供だなんて思ってもいませんよオ、お願いします」オロオロ哀願し「フン、今迄は可哀想だと思って控えてたけど今日からは別よ。ほら、あたしのものはきたくないんでしょ」言われても、特にそれを口に含むのがおぞましいというより先に、声を奪われた後に来る怖さを知悉しているだけに、頑として口を閉ざして半べソ顔を背けるばかり、が、所詮は甲斐のない抵抗でしかなく「御主人様の言うことが諾けないっていうの」「いえ、もう決して言いませんカンベンして下さい」「しつっこいコねえ、あたしは一度やると言ったら絶対にやるのよオ」業を煮やした短気な娘の、逞しくも艶やかな膝小僧にミゾオチしたたか踏みにじられれば畢竟「ワアッ、き、諾きます」「御主人様の命令は絶対よ、分かったかッ」「はい——分かりました」分かってても分からなくても、





読者ギャラリー 「貢物の報酬」 岡 たかし

今の宏の立場では如何なる無法な苛令にも従わざるを得なかったのだ。

「ウフフ、綺麗に洗濯して頂戴ね」愉しくって仕方がない、といった風情の玲子は、サデイスチックに眼をキラつかせ、宏の泣きベソ表情うかがいつつ、故意に緩慢な手つきで、「ひとオツ——ふたアツ」音吐朗々、のどかに勘定しながらグイグイ捻じ込み「フフ、ど

う才御主人様の味は、おいしいでしょ、どうなのよ、何とか仰有い！」無理難題をふっかけ無垢の乙女の移り香を、あんどろ口一杯に頬ばり恐怖に青ざめ頬こわばらせ、窮鼠ながら目玉キョトキョト慄えあがって畏懼している宏の、鼻を捻じ上げたり耳を引っばってみたりしてためし、苦渋を眉根に刻んで咽喉の奥で叫ぶのみのデク人形に満足したか「そ

のままにしてんのよ、吐き出したら命がないわよ」決めつけて、宏が持って来たものか玲子自身が買い揃えたものなのか、リアルグリーンのカーペットにアブストラクトな模様を描いて繚乱したロープの細目の一本拾い上げ呻く宏の坊ちゃん刈りのヘヤー驚擱んで、どっこいしょっと上体ひっぱがし、口を割ってギリギリ巻きに力まかせに締め上げるといった、全く無茶なサルグツワをかませてジロジロ覗き込み「ウフッ、ヘンな顔、ちよっぴりミゼラブルな感じね、フフフ、どうだ、苦しいか」いくらか優しさの甦った眼でニヤニヤ訊ね、赦してくれると思った宏が狂ったように呻き顎ひき、どんどろりマナコで頷けば、待ってましたと言わんばかりに「フン、お前が悪いんだから仕方ないよ、たっぷり苦しめばいいのよ」にべもなく、再び蹴り倒して打ち路がり、サルグツワもろともバシッバシッと小気味よく両手往復ビンタ食らわせて「さあ二度と余計なこと言えないようにしてやる」だから、時すでに、宏の哀訴する眼には涙が薄く滲んでいた。

顔虐め、ムチ責め、五〇センチぎしの三十棒などに始まった玲子言う処のシゴキとやらは、ひきもちらずに続けられ、白堊の壁にか



かったボンボン時計の二つの針が、ランデブーして真上を指す頃、宏は玲子のふくよかな腿の中で、名状する能わない、まさに絶命寸前、無間地獄の責苦にうちのめされていた。

髪を驚掴みされて、その豊艶で弾力ある太腿に曳きずり込まれてどれほど経ったか、意識は白濁として時間の感覚とてなく、うべなるかな、女の軀では股の力が最強だというのがネックブロークは玲子のオハコ、バスケットボール仕込みのしなやかな脚に若い潑刺たる力が籠もるたび、まるで大ダコにでも、万力にでも絞めつけられたかと思うほどに頸部が圧迫され、頸静脈が止まり、鼻の周りが重くなり、失神を恐れ息をつめてもがき苦しみ根比べ、うとうと気持よくなり軀が萎え、あわや失神という処で僅かに弛み、無慈悲なサルグツワさえなければ深呼吸の一つも出来ようが凡そ叶わず、唯々鼻孔を精一杯拡げて濁った空気を取り入れるのみ、が、それだに満足に許されず、二、三度ヒューヒュー鼻を鳴らしたかと思えばグイと頭が押さえつけられ、女王様らしさを意識してか、近頃とみに着け始めた年令不相応な、コケティッシュなフレイッシュョートがスッポリ柔らかく顔面おい尽し馥郁たる体臭が否応なく鼻にまつわる、そ

れがとめどなく繰り返されるのだから、その苦しみ如何ばかり。顔を真赤に、力の限り呻きのたうち、泣きはらした眼で弱々しく訴えかけるのがやっとの宏。

玲子の方とは見てあれば至って吞気、恬然で、床に片肘などつきハミングまじり、まるで自慰でもしているかのように、宏の顔を力一杯絞めつけてはひねり、激しく揺さぶり、もがき苦しむ宏を眺め降ろしてニンマリ冷やかにほくそ笑み「これくらいでやめると思ったら大間違いよ」尚も力を込めるといった残酷さで、宏は三途の河原を行きつ戻りつ、生きた心地がしなかった。

「マア、どうしたの、いったい」洋子の驚くのも宜なること、何時も決まって、お昼まだア、と催促する筈の健康優良児が、何時まで経っても降りて来ない、どうしたことかと知らせに来れば「あ、洋子さん、ちょっとお這入んなさいよ」の気のいい返事、何時もなら部屋に這入る事を忌み嫌う玲子が、と更にいぶかりドアを開けば、部屋の中央、露わな出立ちで陣取った玲子、ウフフツと悪戯っぽく笑いかけ、それだけなら驚くに当たらぬが、よくよく見れば玲子が腰を降ろした椅子が椅

子にあらず、与謝蕪村のパロディーでもあるまいに、エビ責めや脚はアグラに手はセナに縄目キリキリ縛り上げられた男が豊かな重みを背に受けて、額を床の、極限までの屈曲を強いられ、玲子の軀の弾むに合わせ、息も絶え絶え呻いているのだから、吃驚するのが道理の沙汰。

「ほんとにどうしたの、玲子ちゃん」切れ長の魅惑的な眼を拡げて玲子と宏をこもこも見やり、アルト調のしっとりしたセクシュアルな声に驚愕と好奇とをなймаぜて質す洋子に平然と腰を上げた玲子は「うん、こいつ玲子のこと悪戯しようとしたの」「イタズラ？」

でもさあこの人、家庭教師なんですよ」「そうよ、とんでもない家庭教師よ、だから制裁加えてんのよ、あなたも手伝ってよ」出まかせ言って、たばかり、いきなり宏の肩先を思いきりよく蹴り上げたからたまらない、無理な屈曲に馴れた軀を急に開いた時に起こる、あの、マグネシウムが燃え尽きるような峻烈な痛みが腰から脚と背筋へ走り抜け、宏は魂切る悲鳴を咽喉の奥へ還元しつつ、諸処方々に惨憺たる責めの面影残した軀がざまに仰向けざまに転倒し、だが、そんな苦痛も非情を責め手の窺い知る処ではなく、況してや洋



子なる観客を得て、うたた勢いついた玲子、ここぞとばかり馬乗りになり、顔と言わず軀と言わず、小突き、抓り、ひっぱたき「ほらもっと大きな声で判っきり泣いてごらんよ」徹底したシゴキぶり、宏は悲鳴でコールユニブンゲン。

すでに、乱暴な縄目無残にいましめられた手足は痺れきり、感覚神経は半ば麻痺し、意識は濁濁しきっているが、苦しさ哀しさ口惜しさが、空白の脳裡を淬（オリ）のように渾然としてたゆたい、涙ばかりが溢れ出た。

茫然自失の面持ちで佇立し、由々しき惨劇しばし傍観していた洋子、遂に見かねたか、「玲子ちゃん、もう赦してあげなさいよ、泣いてるじゃないの、もう充分お仕置きしたんでしょ」玲子の出まかせ真に受けてか正当な台詞でとりなし、その、乾いた空気に浸み透るような柔らかく潤んだ声に、はじめて洋子の存在をみとめた宏は、同じ年頃の娘の前にしどけない屈辱的ポーズを強いられ晒している自身に気づき、天地に踟躕する慙愧の念にさいなまれ、しかし、こと此処に至れば最早見栄も体裁もなく、一刻も早く苛烈な折檻から遁がれたい気持が先立ち羞恥を駆逐淘汰して、ゆくりなくも現われた救援者の、その優

にやさしき物腰、たおやかな姿態、爽やかな容色、涼しげな明眸に僥倖を得た思いで、たまらない懐かしさ親しさを憶え、啞者の如く赤子の如く臨終の人さながらに、苦しみに枯れ果てた呻き声と、切なく溢れる涙に曇った眼のみで、必死に哀訴し、救いを求めるのだった。

だが、却ってそれが玲子の心証いたく害し火に油を注ぐ結果となった。反抗期の我儕娘にいくくんぞ下手な仲裁が通ずるや、況してやお門違いの謝罪が通じる由はなく、声援を期待していた観客からは体よく諫められ、のみならず宏までが洋子に傾き、そのジェラシ―もさりながら、自分一人が邪悪者扱いされていることに憤激し、そうなるともう手のつけられない自慊気尽なミドル・ティーン。「何よ、こいつウ、甘ったれるんじゃないわよ！」色をなして、狂ったようにビンタ食わせて跳ね降り、手近のロープ拾い上げ、ひと重二重に折りたたみ、洋子への面当ても手伝って「もう絶対に赦さない、あたしが赦さないと言ったら絶対に赦さないのよ！」青白い気魄をこめ火花のような勢いでビシリ打ちさま甲走り、いとど盛んに打擲を加え始め、胡

坐組まされ厳しく搦められている宏、床を転げて避けるはおろか身じろぎ一つも憚ならず容赦なく打ちくれる縄ムチもろに受け、一打ちごとに呻きのけぞり、眉目ばかりで号泣し押し殺された阿鼻叫喚を示すのみ。

「玲子ちゃん、カンニンして上げなさいよ。もう充分でしょ、死んじゃうわよ、気が狂っちゃうわよ」見かねた洋子、再度の調停、だが、やたけに逸った娘には所詮及ばず、返って来るのは青白い炎ばかり「いいわよ、こいつはもともとこの気違いなんだから」「キチガイ？」「そうよ気違いよ、気違いドレイよ、玲子の言うことなら何でも諾くわ、オシッコまで飲みたいって言ったのよ」「まさか、そんな——」「ほんとよ、はっきり言ったのよオ！いいわ今、証拠を見せて上げる」息差し乱してあららぎ、得意満面で言い放った玲子は、頬に乱れた凡そこの場の空気には溶け込まない清らかな緑髪ヒラリと耳の後に搔きわけ撫でつけて、頭の中には一つことしかないといった、もののけに憑かれたような物狂おしい眼差しで瀕死の宏ひっぱがし、自分が施した、いとも厳しいサルグツワ苛立たしい仕種でもどかしく解き放ち、汚れ物を引き出された宏は、思わず激しい嘔吐を憶えた。



口の中はカラカラに渴き、無い唾を空呑みするたび吐き気を催し、それでも空気のうまさ有りがたさ、九死一生起死回生、蘇生の思いであった。

「さあ、お前の希望を叶えてやる、どうだ、うれしいだろ」「は、はい、うれしいです」「よし。その代り一滴残らず飲み干すのよ、でなかったら、今度こそひどいわよ、いいわね」「はい——」洋子に助けを求めても空しいと悟った宏は、ひたすら玲子の機嫌を回復すべく、男泣きにオイオイ哀咽しつつも鞠躬し、と言っても雁字搦目の胡坐縛りでは端座も出来ぬが、ともかく玲子の気分を害さぬよう、古雑巾のように、敗け戦さの軍旗の様にポロボロに草臥れ果てた全神経を縫い繕って神妙に振舞い、洋子の瞠然として見守る中、眼前接触圏内にVネック爽やかなポロセーター一枚、まだ生えそめし前髪の、どころではなく、しかと大人であるという実に郁々青々豊饒艶冶な物的証拠を鮮やかに提示して、雄々しくも仁王立ちに立ちはだかった玲子の居丈高な「いいわね、こぼしたら最期よ」絶対命令に応える間もなく、刈りたての干し草のようなかぐわしい飛沫しとどにほとばしり、

命令に叛くことを惧れて根かぎりの努力払いしがおぼつかず、つとに租父からそぞろに聞いた、女が男より劣っているものの一つは、ユバリで文字が書けないことだ。なるよしなしごとを、ふと想起し、その諧謔を真理として体験し、事実、健康な娘の沛然たる溪流飛瀑には溺死するかと思つたほどで、気を取り直した時には篠つく雨も既にやみ、玲子の神酒はしよっぱかった。

「いやねえ、ちよっぴりこぼしちゃったじゃないのよオ、玲子タンまたまた怒ったわよ」「すみません、お赦し下さい」「ダメ、赦さない、あとでたっぷりお仕置きしてやる。さあ、その前に、御主人様のを綺麗に清めるのよ」「は、はい——」「ヒヤッ、バカ、くすぐったいじゃない、もっと、そつとやれ」好き勝手なことを言つて、いたぶり、「さあ、どんなお仕置がいいかしら、何時かみたいハリツケにしてパチンコで撃っちゃおかなア、それともホットジャズを気が狂っちゃうほど聞かせてやろうかなア」新たな体験で急転直下に機嫌を取り戻した玲子は口吻軽く、破顔一笑、つぶらな瞳に笑みを隠しきれず、ウフツと吹いて失笑し、さはあれ威厳を保つべく、悠然として仁王尊の擬態くずさず、そ

の正に大理石のアーチを髣髴させる豊艶で潤沢な柱間に、頭をつつ込むように首うなだれて頻りに吃逆り、鼻すすり上げている宏の濡れそぼった顎へ、つと手を伸ばし人差し指などツイと引っかけ邪険にグイとのけぞらせ、顔を作つてわざとらしく睨み降ろし、爾後の成り行きを安じて齒の根も合わぬほどおののいている宏の胡坐縛りの内腿に、断わりもなく片足のせて、又ぞろなぶりにかかる。

「どうだ、ヒロシ、満足したか」「——はいしました——」「声が小さい！」「いッ、はい、満足しました」「まだ小さい！」「わあッ、しました、満足しました」「フフ、それでどんな味だった」「はい、しよっぱくて、ピリッとして、それから——」「それからどうなのよオ」「あッ、はい、あの、いい香り、それから——コクがあつて」「へえ、コクがあつたの、ウフフ、よかったわねえ、そうやってイイコにすればひどいめに会わずに済んだのにイ。苦しかったでしょ、ゴメンネ」「はい」「何がハイよ！」「いいッ、いえ、お嬢さんが悪いんじゃない、ありません」「当たり前前のタカラクジよ、いい気になるんじゃないわよ！」「わあッ、ごめんなさい、当然の報いだと思つています」「当然の報い



「だけじゃ分らない」「おッ、お嬢さんを、御主人様を侮辱した罪です」「そうよ、殺されても文句は言えない重罪よ、これくらいのお仕置きは当然でしょ」「は、はい、当然です」「よし、分かればよろしい。じゃ、ホウビとして今日から毎日、イヤというほど飲ませてやる、文句ないわね」「はい、ございません——仕合せです」「ウフッ、シアワセだってさア」ケラケラ笑いこけ、竦然と佇み瞳若するばかりの洋子に、「どうオ、分かったでしょ、こいつはドレイなのよ、玲子の命令なら何だって諾くんだからア。ギニョールよパペットよ、マリオネットの操り人形よ」ビクビク宏のオドオド頭パシ平手の打音で伴奏しながら、したり顔でいきまく。

洋子の存在を思い出した宏は、好奇と侮蔑の視線つき刺さるほど背に感じ、全身に湧き出た汗に火がついたような思いで玲子を振り仰ぎ、すくと峙立した柔硬な円柱に頬をすりつけるようにして「お嬢さんお願いです、もうお赦し下さい、ほどいて下さい」曇った眼に精一杯の悲哀を泛かべ、しゃがれた声をうちふるわせて畏憚しつつ訴えたが、意地の悪い小悪魔には一向に届く様子もなく、ヤブをつつき、責めの口実を与えただけ、愛らし

い眼もと口もとにニヤリと一つ残忍な、凄艶な笑みを滲ませ、再び酷薄無情の踵をのせてきた「フーン、ほどいて欲しいの、けど、ほどいたって又すぐ縛られるんだから同じことよ、お昼が済んだら改めてゆっくり虐めてやる。こういう風に」「いいッ、いやです、もう厭です、カンベンして下さい、もう帰して下さいよオ」「フフ、今日はよく泣くわねえそんなにひどいことしてないのにねえ、泣くな、こいつウ」「あーッ、泣いてなんかいません」「泣いてるじゃないか!」「わあッ、ごめんなさい、もう、もう泣きません——」「大人しくしてたらヒヤッと涼しいシャワーでキレイキレイさっぱりして、洋子さんの作ったドヒヤッとおいしいお食事バッチリ食べさせてやろうと思ってたのに」「すみません、じゃ、一寸だけでも弛めて下さい、苦しくて、もう手も足も動きません」「うるさいわねモウモウと、それがどうしたって言うのよ、動けないよう縛ってんだから動かなくて当然よ」「そうじゃないです、きつくてシビレて——」「おだまりッ、御主人様が、わざわざ力をこめて縛ってやったのに文句を言うの。よーし、もう絶対に帰さない、ふたたび口も動けなくして何処かに、永久に縛りつ

けといてやる」「そんな——」「うるさい黙って聞け。ウチには空いてる部屋が沢山あるんだから、今は使っていないけど地下室だってあんのよ、そこへ永久にカンキンしといて毎日友達いっぱい呼んで来てメチャメチャにしてやる、威しじゃないわよ、玲子は一度やると言ったら必ずやるのよ」「い、いえ、もういいです、この僥でいいです、弛めて欲しくありません」「フフン、お前は動くところが少ないほど素直なんだから、ほんでもって、ふたたび虐めたくなるのよ、この気持ち分かるウ」「いいッ、分かります」「フン、お前に分かる筈ないわよオ」「わッ、わかりませんごめんなさい、わかりません」「フフ、どっちななのよ」「はい、分かりません」「そう、じゃ、分かせてやる」「分かります、わッわかりました、わあッ、わかりました。もういやですよオ」「フフフよく泣くコねえ、嬉しくなっちゃうわ、あたしの怖さがやっと分かったようね。お礼に此れから毎日五回以上必ず泣かしてやる、いいわね」「——」「どうなのよ!」「あッ、はい——すみません」「何言ってるのよ。こいつ、御主人様の話を聞いてなかったのかッ!」「いいッ、いえ、はい、そうです——仰有る通りです」「フフ



ッ、バカ、何が仰有る通りよ、お前を虐めると本当に退屈しないわねえ、やっぱし地下室にカンキンしとこうか、ためしに一週間ぐらい何も食べさせないでテッテイ的に虐めてみようか」「い、いやです、絶対に厭です」「何が厭なのよ、お前のあたしへの忠誠なんか唯の面従腹背に決まってるわよ、だからテッテイ的に虐め抜いて絶対服従を誓わせてやる」「いえ、もうとっくに、もう何でもお嬢さんの仰有る通りしますからもう乱暴しないで下さいよオ」「ほんとにうるさいわねモウモウ、ワアワアと、あたしがいつ乱暴したっていうのよオ」「いーッ、いえ、ごめんなさい」「いや、断然赦さない、罰として、この脚ふみつぶしちゃう、ほら、もっと叫んでごらん」「いいッ、あッ、あーッ、おゆるし、ワアッ！ あ、あ——」内腿中央付近を、踵を支点に全体重をかけられ踏みにじられたのだから、膝ばかりではなく、全身の筋肉がズタズタに引き裂かれたかと思つたほどで、宏は絶叫一つ、泣くことさえも忘れて激痛の余韻にしばし呻吟していたが、哭声にわかに、子供のように泣き出した。

おかしなもので、一度泣きを見せれば相手が譬え子供だろうが女であろうが、泣くとい

う行為には何等の抵抗も羞恥心も無くなり、その時の心理は如何なる英傑といえど全く子供と同じ、痛ければ苦しければ悲しければ只管に泣いて苦痛を声で吹き飛ばし悲哀を涙で洗い流し、泣けば赦してくれるかも、の類で宏の痛哭また然り、それでも玲子の怖さが今や身に沁みている宏、渾身をもって哀号する。だが、当の玲子には余り通じず、哀れにも広い部屋の真ン中で両手後に胡坐組まされ嚴重に縄かけられたまま流れる涙ぬぐいも出来ず大口あけて泣き吃逆る宏を冷やかに眺め降ろし、既に宏を一個の男として見てないらしく、臆面なく濃艶な裸の腰を悩ましくくねらせ宏の泣き声ふさぎにかかり、所得顔でニヤニヤヘラヘラ嘲けるばかり。「フッフフそんなじゃさア、地下室監禁は一先ず赦してやる。けど、お前ほんとに可愛いとこあるわねえ、ますますハッスルしちゃうわ、ほんでもって今日は一日帰さない、ゆっくり可愛がってやる」げに女なる生きものは、いと恐ろしきものなりで、五つ六つの娘でも五〇、六〇の男を指して「可愛いわね」などとうそぶくことがある。△ジュームス・ボンド▽や△唐獅子牡丹▽の男伊達を見れば男なら先ず、スゴイとかカッコイイとか思うものだが、女の

中には「あら、可愛いわね」などと平然とたたまうのが多々いるそうなの、これは女の見栄か銜気か、はたまた母性本能か、何にせよ女に生んで貰って育て貰った男などには到底測り知れない女の強さ逞しさで、凡そ動物の世界に牝より強い牡などいやしない。人間の牝の根底に流れるものを仮にサドとマゾで分けるとすれば、しかとサドの血であり、いわゆるマゾと称される女も全て標榜上の皮相なマゾでしかなく、そのマゾ性は昂進すれば必ずエゴに取って変わる、女はあくまで肉体的エゴイストだからだ、肉体的なエゴの前には仮りそのマゾ心理など間もなく後形もなく崩壊する、笑うのは常に女であり男は虐げられるのみなのだ。当節、女性上位時代とか男性墮落時代とか、女が愈々世に飛び出し、それだけが男より劣っていると云われる事象事柄を平たく見る眼さえ養い備われば、その時こそ名実ともに女上位の御世となるだろう、今やそれは加速度に進行中で、既に下手な男どもよりは平凡な御婦人連の方が実のあることを為し、理にかなったことを口吟む。玲子と宏とでは、玲子の方が判っきり上位のようだった、時に宏十九才、玲子十五の夏だった。「あーあ、お腹すいたわね、お昼、たべさす



のどうしようかなア。こいつのことだから、どうせまたワアワア泣くに決まってるし面倒だから、やっぱし地下室へ放り込んでこか。

それともお昼の代りに今度は洋子さんのを飲ませてやろうか、洋子さんは大人だし料理がバツグンだから誰かさんのよりも、しょっぱくって、ピリツとして、コクがあって、おいしいかもよ。それとも、御主人様の、大きい方のがいいかしら——どうオ、どれにする、

御主人様としてはお前の説を尊重して最後のがいいと思うよ、お前は大事な大事なドレイだから栄養たっぷり取って何時もニコニコ元気なコで居なきゃ、ウフフ、そうでしょ——どうしたの余り嬉しすぎて口が利けないの。早く返事しないと玲子タンお腹がすいてんの

〔伝言板〕 ○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

よ、お腹がすくと怒りっぽくなるっていうけど本当ね、誰かを思いっきりメチャメチャにしてやりたくなるわ——こらヒロシ、何とか言いなさい——あ、そう、洋子さんのが飲みたいのね、ほんでもってスネてんのね、そんならそうと早く言えばいいのに、洋子さんは親切だから直ぐに飲ませてくれるわよ、何も駄々をこねることないじゃない、ほら、ペロペロバア、ウフフ——

汗と涙でクシャクシャに汚れた顔を覗き込まれ、頬をつつかれベラベラニヤニヤクスクス嘲弄され、背後では洋子までがグスリグスリ失笑しているようにさえ感ぜられ、一しきり真赤に灼けた恥辱がジリジリ脂汗のようにとめどなく湧き、しかし、玲子のそんな底意

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載していないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社へ願います。

地悪い揶揄や素振りにも最早口惜しさや憤りは毛ほども憶えず、愧羞と苦痛の他にはいくばくかの哀感が漂うのみで、寧ろそうした陰険なるも外柔な言葉仕種がこの上なく懐かしく思え、嗚咽しつつもいさぎよい面差しさやかに、やおら玲子を仰ぎ見れば玲子もそれを察知してか、なまめかしい感情がつけし瞳の黒にオーロラの如く華やかに溶け流れ、大人のように練れた媚愛が眼のヒダにしみ長い睫毛の一つ一つにおさおさしく映えて、その短い沈黙の応酬が激しいシクロネとなって宏の心緒を飄忽震蕩し、玲子がとてつもなく大きく雄々しく逞しく、また自分より遥かに年嵩の女にも見え、須叟の嵐よぎれば夙に垂乳根の母に見た安らぎを憶えて宏はホッと嘆息し、玲子に心服した己を悟り、玲子さえ希うなら畢生その身にまつらい、パペットもよし操り人形も厭わず、如何なる苛令にも甘んじ苛責をも凌ぐことを心の隅にそっと誓うのだった。

おりしも、その情景を忘我に打ち守っていた洋子の涼しげな眸の底に、妖しい閃光がキラと駆け抜けたのを、玲子も宏も、そして洋子自身も気づかなかった。

（各位のイメージに頼みつつ）





誘

(ゆうわく)

惑

ある女教師の犯罪

島 青二郎

惑 誘

事件は、加害者からの通報によって発覚した。昭和四十一年十一月の第三日曜日、午後四時半頃であった。N町派出所の卓上電話がけたたましく鳴った。同僚のK巡査と雑談をしていたY巡査が何気なく受話器を取ると、「警察ですか?」と女の声。続いて「私……今、人を殺しました」

と、思いもよらない言葉が聞こえて来た。

「なんだって?!」

「私、N中学校の黒木淑子でございますが」

「場所?」

「N中学の宿直室……」

「殺した相手は?」

「私の教え子で、石上志津夫と申します」

その声には、妙に信憑性がもっていた。

Y巡査は受話器をもったまま立ち上がった。

「で、あなたは今、N中学に?」

「はい」

「すぐにそちらに行きますが、それまで必ず

待っていてくれますね?」

「お待ちしております」

すっかり観念でもし切ったかのような、落

ち着いた声が答えてきた。

受話器を置くと、側のK巡査が緊張した面持ちのまま、首を振った。

「コロシだなんて……こんな真っ昼間に。いたずらじゃないですか?」

「でもなさそうだな。N中学の黒木という女の先生だ」

「被害者がですか?」

「いや、犯人だそうだ」

「益々怪しいじゃないですか」

「とにかく現場を確認して来る。一応、本署



に連絡しておいてくれ」

言いながら早くも玄関を走り出て、Y巡査はオートバイに飛び乗った。

黒木淑子という女は、確か二年ばかり前に街の中学校から転校して来た教諭で、毎日、町外の自宅から通勤している筈であった。四角張った、いかにも勝ち気そうな面立ちに、Y巡査は見覚えがあった。しかし、その相手の石上志津夫という男には思い当たるところがない。記憶する限り、N町には△石上▽という苗字はなかった。

人気のない運動場を横切って、N中学校の職員室の前の玄関に近づくと、そこにまぎれもない黒木教諭が、蒼ざめて立っていた。

「本当に……殺ったのですか？」

「嘘じゃございません」

しかし、このときY巡査は、いち早く別棟の宿直室の方へ走った。

宿直室のドアを開けた瞬間、Y巡査の眼に飛び込んで来たものは、仰向いた二十四、五才の男の硬直した顔だった。Y巡査は流石にはっと息を呑んだ。男の躰の上には、きちんと毛布が掛けられており、六畳ひと間きりの宿直室の中は整然としていた。

Y巡査は蒲団の側にかけ寄って、男の手首

を取った。脈はなかった。閉ざされた喉を指先で開いて覗いてみると、瞳孔もすでにその活動を完全に停止していた。

両膝をついたまま、なおも些細に男の死顔を観察しているうちにY巡査は、その血の気の失せた顔に、ややむくみがあり、喉に嚢血した痕と、僅かに血のにじんだ爪痕があるのを発見した。

「首をしめたのです……」

背後で、黒木淑子が言った。

「何故、どうしてこんなひどいことを、やったんのです？」

「何故か——よく分かりません。夢中だったのです。でも、殺意はなかったのです……」

動きのない表情で立ちつくしたまま、黒木淑子がそう答えた。

× × ×

(問) 弁護士として立ち至ったことまでお伺いしますが……ご結婚なさったのは？

(答) 私、晩婚でして……二十八才の時でございます。

(問) 何か特別な理由があったのですか。

(答) 家庭が貧しかったのです。父母も歳老いていましたし、二人の弟たちを大学にやるにしましても、長女である私が大黒柱と

なって働かざるを得なかったのです。そんな訳で、つい婚期を逸してしまいました……

(問) ご主人とは、どんなご縁で？

(答) 当時、私はM中学校で教鞭をとっておりましたが、その時の教頭から私と同様に中学校の教員をしていた今の夫を紹介されたのです。一度、見合いをしたきりで……もったも、それまでに研究会などで、顔は二、三度、見かけてはいたのでございまして……

(問) 見合いをなさって、すぐに決心がつきましたか。

(答) いいえ。正直に申しまして、私、その頃一生、独身で過ごしても構わない、という心境だったのです。それに、すでにその当時から、夫は組合運動に熱中し……そんなこと、私好きじゃなかったのです。

(問) それじゃ何故、結婚なさったのですか

(答) 先方が、かなり積極的だった事と、多分、教頭が世話上手だったせいでしょう。それで、なんとなく結婚してしまった、というのが実情なんです。

(問) ご主人とは、うまくいっていませんか

(答) そうですね、可もなし不可もなしというところでしょうか。結婚した当時から、



ずっとそうなんです。

(問) はっきり言って、ご主人に対して愛情をおもちなんですか。

(答) 強いて愛情という程のものをもっている訳じゃございません。夫婦って、みんなそんなものじゃないでしょうか。

(問) もっとぶしつけな質問をしてよろしいですか。

(答) ……？

(問) しかし案外、これは事件のポイントになるかも知れませんから、私も弁護士としては是非お尋ねしておきたいのです。どうか正直におっしゃって下さい。あなた方ご夫婦の性生活についてなんですが……その点はうまくいっていましたか。

(答) それは……多分、ごく普通の……。

(問) それだけですか。

(答) そうとしか、お答えしようがありません。とり立てて申し上げる程のことともございせんから。

(問) 分かりました……それで、あなたが石上志津夫の担任になられたのは、彼が中学の二年生の時でしたね。

(答) その通りです。私は二十五才でございました。

(問) 彼の学業成績は如何でしたか。

(答) 目立った存在とは言えませんでした。八中の上Vクラスという所でしょうか。

(問) 性格も、よくご存じですね。

(答) 一人っ子だったせいか、無口で、ひ弱な、一見、女々しい感じでございました。

(問) 特にあなたを慕っていた、といったふうな素振りには。

(答) 特に慕われていたかどうか……。

(問) 当時、あなたの方は彼に対して、どんな感情をおもちだったのです。

(答) 他の生徒と別段、異った感情は、もってはいませんでした。それは教師という立場上から言っても当然のことです……。

(問) 常識的なことを伺っているのじゃないのです。あなたご自身、彼に対して実際どうだったのですか。

(答) ……。

(問) 正直におっしゃって下さい。

(答) ——只今、申し上げたこと、実は、嘘なんです。本当は……ふとしたことがきっかけで、ある時期から私は彼を意識するようになったのです。

(問) それは、どういうことなんですか。

(答) ちょっと不思議な事があったのです。

× × ×

黒木淑子が石上志津夫の担任になった年の二学期のことであつた。ある時、志津夫は、どうしたのか淑子が担当している理科のテストに、かなりぶざまな成績をとつた。休憩時間になり、他の生徒が外に出て行つた後、淑子は志津夫一人を残して問い質してみた。志津夫は俯向いたまま、はっきりとは答えなかった。その、妙に煮え切らない態度に、淑子は無精に焦立つて来た。そして思わずピシヤリと彼の頬を打ってしまったのだった。

もとより、教員の暴力沙汰が厳禁されていることは十分、承知であつた。しかし、その時の淑子は、一瞬、冷静さを失つた。しかも——叩いてしまったことで、淑子の中にこの時、不思議と残酷な快感とでもいったものが充ちて来た。淑子は続けざまに二、三度、平手打ちを喰わせていた。

石上志津夫は俯向いたまま、齒を喰いしばって立っていた。が、不意に不思議な変化が起こつたのは、その直後であつた。志津夫の堅い表情が崩れ、たちまちその眼の中に、何か、夢みるような恍惚とした色があふれて来るのを淑子は見た。

「先生、ばく嬉しいんです。もっとぶつて下



さい……」

志津夫が、低く、喘ぐように言った。淑子は息を呑んだ。

それに似たことが次のテストの時にも起った。もっとも、淑子には、すでにその予感があった。むしろ正確には淑子が密かに期待していたことでさえあった。

石上志津夫は殆ど白紙同然の答案用紙を出していた。

「解らなかつたんです、頭がぼうつとなつてしまつて……」

志津夫は、そう弁解した。

「嘘おっしゃい。わざと書かなかつたのでしよう?」

「嘘じゃないんです。本当に解らなかつたんです……」

一瞬、その頬に烈しい平手打ちが鳴った。

顔全体が醜く歪み、叩かれた志津夫の頬にはたちまち赤い筋が浮き上がった。恐怖におののいた眼が見上げた時、淑子の中を更に残酷な快感が過った。続けざまに数度、前よりも一層、烈しい平手打ちの音が二人きりの放課後の教室の中に響いた。

「先生、もっと、もっとぶつて下さい……」  
声を押し殺して、喘ぎながら懇願する志津

夫のその眼が、みるみるうちに恍惚とした潤いを湛えて来るのを淑子は見たのだった。

× × ×

(問) 非常に興味のある、お話ですね。ちょっと常識的には理解し難いところもありますが……要するところ、石上志津夫には、その当時から、すでにマゾヒズムの傾向があった訳ですね。

(答) おそらく、そうでしょう。

(問) 当時、あなたとの間に、そんなことが再三あったのですか。

(答) そうですね。その後、同じようなことが三度ばかりあったと思います。ともかくその後、彼は私の前で何かにつけて失態を演じようとするのです。それも他人には決して気づかれないように……。

(問) 意識してそんなことをやっているってことが、勿論あなたには、ちゃんと分かっていた訳ですね。

(答) そうです。彼と私との間には、いわば秘密の盟約とでもいったものが、いつの間にか出来てしまつて……そんな訳で、私も彼というものを他の生徒とは異った、特殊な存在として意識せざるを得なかつたのです。

(問) 当時、彼とそんな関係にあつて、あなたには罪悪感、ありませんでしたか。

(答) それは……冷静になった時、ひどくしろめたい気持ちになるんです。でも……それにもかかわらず、何となく妙に惹かれるものがあつて……。

(問) これまたぶしつけな質問ですが、ご主人との性生活において、あなたご自身を異常だとお考えになつたことはありませんか。

(答) それが、夫に関しては私自身、変態的であると感じたことはございません。ごくノーマルなんです。

(問) ご主人の方から何か変わった感化を受けられたということもないのですか。

(答) ありません。

(問) つまり、あなたの中に潜んでいるサディズムが発揮されるのは、石上志津夫に限られていた、ということなんですね。

(答) ……。

(問) 話題を変えましょう。石上志津夫が卒業して以来、お逢いになつたことは?

(答) 彼の卒業と同時に私は他の学校に転勤になりました……それから四年ばかり後にクラス会に招待されて、その時、少しばかり話しました。それ以来、このたびまで



一度も逢ってはおりません。もっとも、年賀状のやり取りくらいは致しておりましたので、高校卒業後、彼が学用品の卸し問屋をしている自宅の手伝いをしているということは存じていました……。

(問) それでああなたが現在、N中学校に奉職していらっしゃるのですが、彼にも分かってた訳ですね。ところで、彼が卒業して以来お逢いになったのは、このたびは別として僅か一度きりということなんですが、逢いたいというお気持ちはありませんでしたか。

(答) 先程来、申し上げました通り、他の生徒と比較して確かに特別な意識をもってはいましたけれど、それは矢張り愛情じゃなくって……何か、もっと異質の感情で……強く印象に残ってはいいても、逢わないことでそれが昂じて来るとか、そんなものじゃなかったのです。

(問) その彼が、突然あなたの前に姿を現わした、という訳ですね。

(答) あの日……午後の三時頃だったでしょう。それは全く思いがけないことで、私本当に驚いてしまったのです……。

「驚いたわ」と黒木淑子は言った。「本当にびっくりしたわよ。私が日直をしているってこと、よく分かったわね」

「偶然だったんです。商用でこの前を通りかかって、もしかすると先生が……ふっとそう思っけて寄ってみたんです」

「運がよかったのね。私が日直をするのは一カ月に一度あるかないかくらいなのに……」

淑子は机を隔てて坐っている石上志津夫の背広姿を見つめていた。

「すっかり見違えたわね」

「もう二十四になるんです」

「そうね、早いものね。ご結婚は、まだ？」

「……」

「ガールフレンドは？」

「そんなもの……」

「同級生のうちでも、もう結婚している人、かなりいるんでしょう？」

「でも男の人は、まだほんの四、五人です」

淑子は机の上の書類を閉じ、それからまず石上志津夫の顔を見つめた。

淑子の中に妙な感慨があった。それは、十年前の教え子の一人が訪れてくれたという単純な欲びではなかった。もっと異質のものであった。淑子の何よりの驚きは、玄関の逆光

線の中に立っている突然の来訪者が石上志津夫であったことだった。確かにそれは非常な驚きであった。

石上志津夫であることを知ったせつな、淑子の中に十年前の記憶がよみがえり、その、石上志津夫との秘密めいた記憶が、いまだになまなましく自分の中に潜んでいることを知って更に驚かされたのだった――

「この辺りは静かですね」

石上志津夫が言った。

「永いこと教員をしていると、いろんな処へ廻されるのよ」

「こんな田舎もいいじゃありませんか。日直というのは、いつも一人きりですか？」

「小さな学校ですもの、一人で十分よ」

何故そんなことを訊くの、と言いかけて、

淑子は今、この学校の建物の中にいるのは石上志津夫と二人きりであることに、あらためて気づいた。二人きりであるという意識が、再び、秘密めいた十年前の記憶を鮮かに呼び起こした。

外観上、何の変哲もない、その石上志津夫の中に、今も、あの虐げられることを求める異常なものが潜んでいるのか。十年前のあのことを、もう忘れてしまっているのか。淑子



は今一度、志津夫の恍惚とした潤んだ眼を見たいと思った。そして今一度、志津夫を虐待し、そうすることで陶醉する己の不思議な欲びの中に溺れることを希った。

——この時であった。石上志津夫が額に手を当てて、俯向くような恰好になった。

「どうしたの？」

淑子は驚いて立ち上がった。志津夫は眉を寄せ、顔をしかめていた。

「どこか、具合でも悪いの？」

「いいえ、別に……大したことじゃないんです。唯、ゆうべから風邪気味で、少し頭痛がするんです……」

「それはよくないわ。大丈夫？」

「大丈夫です。本当に大したことじゃないんです」

「そう……でも、用心しなきゃあ。ひどく痛むようだったら、宿直室にでも行って少し横になっていたらどう？」

淑子は石上志津夫の側に歩み寄り、肩越しに覆いかぶさるように顔を近づけて言った。

× × ×

(問) ——それからあなたは、石上志津夫を宿直室に連れて行ったのですね。

(答) そうです。

(問) その時のあなたの心理状態ですが、風邪気味であった彼を労わろうとする気持ちと誘惑しようとする気持ちと、どちらが主体だったのですか。

(答) 誘惑だなんて……その時の私に、まだそんな、はっきりした計略があった訳じゃないんです。

(問) しかし、たとえ計略的とは言えないとしても……あの時のあなたに、十年前にもった彼との秘密の経験を再現してみたい、そしてその機会をつくろうとする意識が働いていたことは否定出来ませんね。

(答) ……。

(問) 彼は素直について来ましたか。

(答) 横から彼の体を支えるようにして連れて行ったのですが……わりと素直でした。

(問) 宿直室というのは、職員室の裏側にある別棟の、六畳ひと間きりの部屋ですね。

(答) そうです。

(問) その部屋に入った時、彼は何か言いましたか。

(答) 別に……唯じっと、私の為すままにしておりました。

(問) その時の様子を、もっと詳しく説明して下さいませんか。

(答) 押し入れの中から敷蒲団を出して寝かせてやったのです。その時、私は彼の額に手を乗せてみました。

(問) 熱はありましたか。

(答) 大した熱とも思えませんでした。彼は顔をしかめ、ひどくきつい様子でした。

× × ×

「どう？ ひどく痛むの？」

淑子は、仰向いている石上志津夫の上に顔を近づけて言った。

「いいえ……」

「お薬、飲んでみない？ 職員室に常備薬があるわ」

「いいですよ、薬なんか。それより……ぼく

寒いんです」

「寒い？」

「とっても寒い……どうしたのかな」

淑子は慌てて立ち上がった。それから押し入れの中の毛布を取り出すと、それを志津夫の足の先から両肩にかけて、そっと包みこむようにしてやった。

「震えているじゃないの」

「寒いんだから、仕方がない……」

淑子は今度は志津夫の側に横になり腕を伸ばして毛布の上から震えている肩を抱いた。



「こうしていると、少しは温まるわ」

「先生……」志津夫が熱っぽい眼を向けた。

「ぼくを……しっかり抱いて下さい！」

淑子は躰を密着させて、腕に力をこめた。

「もっともっと、きつく抱いて下さい！」

志津夫の眼差しは、淑子に決して拒むことを許さない、必死の気色を滾らせていた。

その志津夫が、毛布の下から淑子の躰を抱くように腕を伸ばした。同時に、淑子の躰の奥深いところから、制し難い欲望があふれて来た。淑子は、みずからのスナップを外すとそのまま毛布の中に、すべり込んだ。志津夫の胸の烈しい動悸が分かった。

この時、淑子は低く押し殺した、しかし、ひどく熱っぽい石上志津夫の、絶え絶えしい喘ぎを、すぐ耳の側で聞いた。

「先生……力いっぱいしめて下さい……お願いです。ぼくの首を……しっかり……力いっぱい、しめて下さい……お願いです！」

× × ×

(問) それで……あなたが気づいた時、彼はもう絶命していたということなんですね。

(答) そうです。

(問) 後悔しましたか。

(答) そうと気づいた一瞬というものは、後

悔などというものじゃなくって……呆然と

なり……しばらくして、ひどい恐怖に襲われて……後悔と罪悪感とが混然と湧いて来たのは数分も経ってからだったでしょう。

(問) そのあなたの罪悪感について何ですが……そう感じになる根拠は何ですか。

(答) それは矢張り、殺人という……。

(問) しかし、首をしめるように要求したのは明らかに石上志津夫の方でしょう。

(答) 無論そうには違いありませんが……。

(問) 私流に解釈すると、あなたの罪悪感の根源は殺人そのものじゃない。殺人という結果に対してじゃなくて、問題はむしろ殺人に至る過程にあるのじゃありませんか。

具体的に言えば、先程のお話にもあった通り、石上志津夫を宿直室に連れて行く時、

あなたの中には密かに、彼を誘惑しようとする下心があったのです。宿直室に入ってからのは、もうことの成り行きというべきでしょう。しかしあなたは、もしあ

の時、石上志津夫に宿直室に行くことを勧めていなかったら——と、後悔なさったのじゃありませんか。つまり、別の表現をすれば、あなたは、あくまでも誘惑の主導性は自分にあったのだ、とお考えになってい

るのですね。

(答) さあ……いいえ、本当はそうかも知れません。

(問) ——だとすれば、ここにまた、ちょっと問題があるのですよ。確かあなたは、石上志津夫がわりと素直に宿直室について来たとおっしゃいましたね。

(答) はい。

(問) 何故でしょう。わざわざ離れた宿直室まで行かなくなっちゃって、例えば職員室で椅子でも並べてその上に横になるとか、机の上に俯伏せになって休むとかいった方法もあったでしょうにね。

(答) それは、彼がマゾヒストであったためということに尽きるものではありませんか。

(問) 勿論、根本的にはそうですが……。

(答) あの日、彼はふと思い立って学校に立ち寄った。すると幸運にもそこに私が居たそして話し込んでいるうちに前夜来の風邪が昂じて来た……。宿直室に入ってからのこととがことの成り行きとしても、それまでに彼には——マゾヒストである彼には、私に誘惑されたい、という潜在意識があったに違いないのです。その場所が欲しかったのです……。



(問) やっぱり、あなたはそう信じこんでいらっしゃる……。

(答) ……？

(問) 彼がやって来た時、そこにあなたがいらっしやったことが全くの偶然だと信じていらっしやるのでしょうか。

(答) それ、どういふことですか？

(問) 偶然じゃないのです。あなたは、そこまでご存じなかったようですが、当日、あなたが日直をしていらっしやる事を、あらかじめ彼は、ちゃんと知っていたのです。

(答) そんな！

(問) 商用で通りかかった、というのも口実に過ぎなかったのですよ。

(答)信じられません。

(問) それでは、お教えしましょう。事件当日の数日前——ちょうど授業中に、県の教職員組合の者だかと、N中学校に男の声で『切手代用』送金についてのお知らせ  
○七月号広告でお断りとしておりましたが、当方の整理も一応つきましましたので、御注文の際の『切手代用を再開』して受付けます。但し『一割増』は従前通りです。よろしくお願いいたします。  
尚出来るだけ、『現金書留』『小為替』『振替』等の方法にてご送金下さることをお願い申し上げます。

市外電話がかかっているのです。その電話を用務員のEさんが受けています。電話の用件というのは、目下、教職員の宿日直について実態調査をしており、N中学校について、在職中の教職員が一カ月のうちに一体どの程度の宿日直を担当しているものかを知りたい。については十一月の月始めから月末までの宿直者と日直者の氏名を知らせて欲しい——ということだったのです。で、Eさんは別段、不審にも思わず、あなたもよくご存じの職員室にある宿日直の予定表ですね、あの黒板に書かれている名前と日割りを読み上げて報告したのだそうです。その中に無論、当日——第三日曜日の日直者が、あなたに予定されていることもちゃんとあった訳ですね。警察当局は、この度の事件を調査する段階で、Eさんの証言から、その電話があったことを知ったのです。ところが奇妙なことには——Eさんの証言にもとづいて更に調査してみると、県教組で目下そんな調査を行なっている形跡はなかったのです。しかもN中学校へ、そんな問い合わせの電話をかけた者すら居なかったのです。

(答) それでは……。

(問) そうです、石上志津夫の仕業だったのです。彼には、あなたがいつ日直に予定されているかを知る必要があったのです。

(答) 何故そんな……？

(問) そう……それが肝心ですね。ですが、それをご説明する前に、もう一つ、あなたがびっくりなさる事をお教えしましょう。石上志津夫は、あの一カ月ばかり前、実は結婚していたのです。

(答) ？

(問) もっとも、その結婚は、周囲の者が半ば強引に決めてしまったようなもので、彼はあまり乗り気じゃなかったらしいのです。が……ともかく新妻は、ちゃんと籍も入っていますし、一週間ばかり九州方面へ新婚旅行にも行っているのです。新妻は非常に優しい感じの申し分のない女だそうです。しかし、その彼女にとって不幸なことには夫である石上志津夫が極端なマゾヒストだったということです。いや、不幸といえば石上志津夫についても、同じことが言えます。何故なら——これまた新妻の証言で明らかにあったのですが、彼は結婚早々から、その新妻にサディスティックなプレイを行なうことを強いたのだそうです。その



ことが新妻にとって、どれほどのショックであったかは想像に難くありません。事実結婚後、僅か一カ月ばかりの間に、彼女は何度、実家へ逃げ帰ろうとしたか知れないというのです。このことからして一方の石上志津夫がその一カ月を、どのような心理状態で過ごしたかも、容易に想像されるのです。充たされない性的な欲望、その欲求不満から来る焦燥感と絶望感——恐らく彼は、こうしてあの一カ月間、悶々とした日々を送っていたのではありますまいか。

その彼が、悩んだ末に一つの光明を見出したそれが、あなた——サディスチックな傾向をもったあなたと、あの、遠い昔日の、あなたと二人きりの秘密めいた記憶を脳裏に甦らせたとしたらどうでしょう。いや、ことによれば、あなたとの奇異な経験は、永い間、彼の脳裏に絶えず、鮮烈な記憶としてあり、あなたこそ、彼にとっては無二の密かな理想像であったかも知れませんが、ね。

ともかくも、彼はあなたの中に救いを見出そうとしたに違いないのです。今一度、十年前の、あなたによって得られた、めくるめくような充足感を再現しようとして、

彼は、密かにあの電話の工作をしたのでしよう。なにしろ、あなたと二人きりになれる機会といえば、あなたが一人きりで日直していらっしゃる時ほど適当な時はほかにないでしょからね。

如何です、お分かりですか？ もとより彼が商用で通リかかったと言ったことは偽りです。風邪気味であると言い、その素振りを見せたことも、彼の演技にほかならなかったのです。

中学の二年生の時、あなたの関心を得ようとして何かにつけて失態を演じた。そうした性癖をもった彼が、十年後、性的な充足感を求めてあなたを誘惑するために、巧妙な工作と演技をしたとしても、何ら不思議はないではありませんか。

そうです、確かに彼は、あなたを誘惑したのです。誘惑の主導者は、あなたではなく、実に彼の方だったのです。

このことは、あなたが事件の直後、電話で自首なさったことと思ひ合わせて、裁判において間違いなく、あなたに有利な条件となる筈です……。

(答) ……。

(問) ところで、一方あなたのことなんです

が……あなたは、ご主人との性生活においては何ら異常はなかった、とおっしゃいましたね。そのことは——ご主人は、左翼的な思想をもった、行動的な、いわば闘士であり、そうしたアクティブな性格の異性の前では、あなたのサディスチックな性格は発揮される余地はなかった——そうは解釈出来ませんか。そしてあなたの本性は、マゾヒストである石上志津夫によってはじめて喚起され、彼によってこそ、より高度の性的充足感を得ることが出来た——そうは考えられませんか。

このように考えて来ると、サディストであるあなたと、マゾヒストであった石上志津夫との結びつきは、私にはごく自然の成り行きのように思われてならないのです。あるいはあなた方のつながりは、宿命的でさえあったとも思われるのです。

それ故にこそ——客観的な事実とはともかくも、ある意味において、あなた方二人こそ選ばれた、至福の人たちであったといつて、決して過言ではないとさえも、私には思われて来るのですがねえ……。

——(了)——



九月号読後感

## 久美子 讃

須坂 旭

(文と絵)

むって思い出してみても、九月号の中ではこのSMカメラ・ハント「マゾヒスチック・アニマル」一篇だけが強烈に浮かんできます。

辻村氏の筆力もさることながら、なまの、実在する、最も激しく、最も美しい、このSMドラマが二十五葉のフォトに表現されて、私をしばらくは想像を超えた果てしない世界へ、Sの桃源境へ案内してくれ、まるで夢遊病者のようにさまよわせてくれました。

一〇五頁の久美子の恍惚とした表情が脳裏にやきついて離れません。あらゆる拷問に、責め苦に喜々として立ち向かう久美子の人間常識も超越した文字通りの「アニマル」は、かなりのものには驚かないいつもの私をして手に汗を握らしめ、幾度も幾度も頁をくり直させてしまったのです。

私は一〇八頁の強烈な屈曲責めフォトに惹かれ、自分の画帖に、面倒な白ラインを取り



除いて描き写し、そこに私の革鞭を握った腕を描き添え、今しも柔肌にふりおろす想念をこめて、コレクション用のイメージ画に加えただけです。一一一頁の久美子には2mもの鞭を叩きつけて乳房を締めつけてやったし、一一五頁の彼女には足に荒縄を巻きつけて開股逆吊りにしてやったのでした。

誌上の久美子には、自由国日本にして未だ許されない無情の白ラインがありますが、私の画帖にはそんな制約はないのです。長らく願望しながらも、私はまだ本当に裸身にムチの当たたるのを見た事はありません。ピンク映画にそれらしきものはあっても所詮映画は映画。全裸で吊り下げられている柔肌を実際にいやむしろ要求されてムチ打ち得る辻村氏始め各氏に、私はイメージ上だけしか許されなただけに強い羨望を禁じ得ず、尽きぬ想いを馳せているのが実情です。しかし前半の山本氏の責めには何かついていけないものを感じました。私自身が表面上に現われた美を重視する、いわば辻村流のSであるためでしょうか。

私は、久美子と同年であるという親しみとこれほどにMに憑かれた女の哀れさを感じ、こんなにまでハントモデルに慕情を覚えたことはありません。しかし仮に機会があったとしても、私にはこれほどの責めは出来ないことでしょう。バカな久美子よ、何故そんなにまでして鞭を、縄を、苦痛を求めるのか。哀れな女、久美子よ……。

いつもの習慣で、まず動画のようにパラパラと頁をめくる手が思わず止まりました。そして見直してみても、ただ驚きに終始したのが辻村氏のハント、久美子の記事でした。

以前にも、関谷夫人の登場や、左近さんの登場にそれぞれ感激を覚えたのですが、それらも過去のものとして印象の薄らいだ今、ドカーンと一発いきなり本塁打を打たれた投手のように、初めてK誌をみつめて夜半までむさぼり読んだ時のように、新しい驚きをもってひき込まれてしまいました。今、目をつ



~~~~~MSカメラ・ハント~~~~~村上喜美の巻~~~~~

# 豊満女体猥ら書き

~~~~~辻~~~~~

村

~~~~~隆~~~~~

六月初旬の頃であつたろうか、芦屋に住むH氏からひょっこり一葉の葉書が舞い込み、以前から体を大分悪くしていたが、半月許り前から、急に衰弱がひどくなり、現在阪大の附属病院に入院中で、心ばかりは逸れども体が思うに任せず残念の極み。命あらば今ひとたびと希う。こんな私を笑うでしょうかと走り書してあつた。

H氏とは、もう数年来の交友で、その出会いは、刺青の山原清子の座談会に二度ながら出席して、故意か偶然か、いつも私の傍らに席を占められたのである。あの座談会に出席された同好者の中には、或いは御存知の方もあ

で、年齢は私より一まわり半も上の方で、性格もM性であるが何となく気が合い、所用にかこつけては、折々私宅を訪問され、彼自身も数度SMのプレイの経験をしていて、その報告が楽しみでこられるようであつた。私も亦、所用の時などに暇をみつけては、

芦屋で下車してお立寄りしたものである。やはり梅雨どきの氣候に病状が悪化したのだらうかと、お年もお年だし、フト虫の知らせを感じて気になり、仕事の合間をさいて、阪大病院の病棟にお見舞いに参上した。予告もなく、突然訪れた私に、H氏は一瞬わが眼を疑ごうように、まじまじと私をみつめていたが、そのドンヨリとした凹んだ眼に、急に

生気が蘇ってくると、「本当によくたずねて呉れましたネ。私はもう会えないものと諦めていたんですよ。あなたは情誼の深い方だ。嬉しいですよ。ああ、こんな嬉しいことはない」

と、かすかに涙すら泛かべて、細いしなびた手を差し出し私に握手を求めるのであつた。

H氏の性向を御存知のない、上品な奥様が傍らに附添っておられて、SM談は何も喋れなかったが、飲物を求めに病室から出てゆかれた機会に、H氏はそそくさと枕の下からメモをとり出し、

「家内には未だに秘密なんです。文化サークルの友ということになっていきますから、その





つもりでお願いしますよ。早速ですが、あなたに一度会って欲しい人がいるんです。今迄隠していたわけじゃないんですが、家が近過ぎて、一寸気が咎めたのです。元気になったら、ゆっくり話そうと思っていましたが、恐らく私のわずらいは長びくと思いますので、死土産という縁起でもありませんが、是非会ってほしいのです。肥満タイプの女性は、あなたのお好みに合わないかも知れませんがまるで古代の天平美人のような上品な奥さんです。あるフトした折、その女性がM性であることを知ったのです。実は詳しく説明しないと分からないのですが……」

そこまで喋った時、夫人が静かに戻ってきて、私に冷えたコーラを奨めてくれた。H氏は、ピタッと口をつぐみ、話は中断してときれ、何かいいたげに、しきりに眼が訴えるが、再び、機会は戻らなかったのである。

H氏自身は、脾臓障害と胆のう炎だといっていたが夫人の悟りをひらいた様子では、どうやら脾臓ガンらしく、それももうどうにもならぬところまで進んでいるらしいかった。H氏の蒼白い顔に、諦観の念が泛かび上り、私は心残りのまま、メモを、そっとポケットにしまいこんで病室を退去しようとした。

「奥様にもよろしく——ああそれから、お願いしました件、御面倒でもひとつ……」

未練な精一杯の彼の言葉であった。廊下に出てメモを開くと、乱れた鉛筆書きでたった一行、村上喜美と、女性の名を横書きし、芦屋局の電話番号が書かれてあった。H氏の思いつめたような真剣さにうたれ、

私は病院の市外公衆電話から、すぐさまメモの電話番号のダイヤルを廻す。

すぐに、若い女の声が「ハイ、村上でございますが……」とつげる。

「村上喜美さん、いらっしゃいますようか」

「ハア、奥様は生憎と神戸までお買物に出られまして、御留守でございますが……あの失礼でございますが誰方様でしょうか？」

丁重なお手伝らしい人の声である。

「じゃあいんです。御近所のHさんから、一寸頼まれましたのですが、又いずれ……」

そそくさと切って、じつとりと泌み出た汗を拭く。パーバリズムの私には、この種の芦屋夫人の家庭は、どうも苦手であった。

この日の訪問が、ついにH氏との最後になった。七月の中旬、H氏夫人と嗣子の連名のH氏死去の告別式の通知を受取り、私は暗然たる思いにかられたのである。恐らく死の間際まで、彼は一つの心掛かりと、今ひとたびの生への執着の未練を抱いていたに違いないかったであろう。銀行マンとして停年まで只管に孜孜営々として働き通し、晩年になって、やっと思い叶った積年の執念のSMプレイに心を燃やした時、既に死期は近づいていたのである。死去の報に接し、私の心をフトよぎ



ったのは、彼がなれぬ手付でものした数百葉のプレイフォトである。過去、家人に暗密裏に収積した膨大な奇クや同類の雑誌、絵画、分譲フォト、稀小価値の文献などと共に、その処置はどうしたであろうか。己れの死期を悟って始末したのならいいが、或いは生への執着の未練の俛に筐底深く蔵していた場合、夫人の驚愕ぶりが思いやられて、黒枠の葉書のウラを様々に推測しては、撫然たらざるを得なかった。

若しあなたならどうする？ H氏が主客転倒して、死期近づく私にきいた場合、私とても過去数十年に亘る、この辛苦の結晶を、あつさりと焼き捨てられるかどうか——。いつかは考えざるを得ない問題である。

その日その日のなりわいに心奪われ、病室を訪れたあの日電話して、不在を告げられて以来、村上喜美夫人のことは、心ならずも忘却の彼方にあった。死相を漂わした老人の、必死のあがきに似た願いを思い出し、私の心はフト痛み、思わず受話器をとり上げ、再度の電話を試みてみたのである。

かなりの長い間ベルがなり、やっと、  
「あ、もしもし、村上でございますが……（私にはゴザーマスときこえた）」

先日のお手伝いの声ではない、しつとりと落着いた、つやのある声が流れてきた。

「村上喜美さんでいらっしゃるんですか？」

「ハイ、私でございますが、誰方様で……」

「私、辻村と申す者ですが、実は先日おなくなりになったHさんから、是非一度、奥様にお目にかかって欲しいと頼まれましたので」

「まあ、Hさんが……」

声が、しばし途切れた。

「あのう、辻村様と申しますと？」

「ええ私、つまらぬ雑文を書いていまして、生前のHさんと親しくしていた者です」

電話の声は又、しばらくの間シーンと途切れた。私はじつと返事を待つ。数十秒も経過したであろうか。

「あのう、Hさんが何か私のことにつきました仰有いましたのでしょうか？」

「ええほんの少し……くわしく仰有ろうとしたら、Hさんの奥さんが戻ってこられて、その俛になりました。それでただ、お名前と電話番号のメモだけ頂戴したのです」

「ヘンですわね、何ででしょうかしら……」

「私にも分かりません。ただ……」

「えッ、何と仰有いました？」

言おうか言うまいか、咄嗟に迷ったが、こ

れではキリがない。或いはH氏の独り角力かとも思ったが、ダメでもともとと思い切って「唯、H氏がフト洩らされた言葉に、奥様はいじめられて、そのことに飲びを感じられるお方だとおききましたのです。若し間違っておりましたら、お許し下さい」

電話の彼方で、ハッと息をのむ気配がし、又数十秒も声が途切れる。やがて、微かに震えをおびた、やや取乱した声が流れてきた。

「私、何だかさっぱり分かりませんが、亡くなられたHさんともお親しくしておりましたことですし、それじゃ、ともかくお目にかかることにいたしますしう。何処がよろしいででしょうかしら？」

「私は何処でも結構です」

「わたくし、なるべく芦屋近辺でない方が……。およろしいなら大阪まで出向きますが」

「じゃあホテル阪神のロビーの喫茶ででも」

「ハイ、存じております。明後日のおひるの二時頃にでも参ります。ではそのように」

「奥様の目印は？」

「黒地の縞の和服に鰐皮のバッグをさげて参ります、あなた様は？」

私も大体の特徴と服装を知らせて電話をきった。総てが未知のデートが一つ、まるで無



から有を生じるように、ポツカリと浮かび上った。想像のしようもない女人の姿に、幻想を走らせる余地もなく、H氏のいった、肥満タイプの天平美人という言葉で、女優京塚昌子の、福々しい童顔にダブらせて、そこはかとなき思いを走らせるのみであった。

× × ×

黒革のプレイ袋一つ念のために提げ、地下鉄で揺られ、どんよりと空気の濁った真夏の舗道を歩いて、汗びっしょりの体に、クーラーのよく効いたホテル阪神のロビーは快かった。未知の、芦屋マダムに会うという緊迫感が、私の心を軽い不安におのかせていた。それというのも、H氏からほんの一言、M性だと告げられただけで、彼女の素性動向は何一つ分かってはいないからであった。私にとっては、甚だ扱いにくい女性の範疇に、入りそうである。さりと



て別段ひけめがあるわけでもなしいつもの調子で当たって砕けるまどと、腹をきめると幾分気がラクになって、コールコーヒーを一息にのみほす。

約束の二時過、背後に人の気配がして、足音もなく静かに私のテーブルに坐った女性がいた。軽く会釈すると、

「失礼でございますが、辻村様でしょうか」

柔らかい口調で訊ねてくる。

「ハア、お暑いところを、わざわざ来ていただきましたよ」

「いいんでございますのよ」

薄い透きとおる黒地の着物が、彼女を上品に淑かに見せていた。

H氏のいう天平美人は軽く唇にハシカチを当てて微笑んだ。真丸い顔、細い眼ざし、みかづきの下り眉、福々しい頬、おっとりとした物腰にかたて加えて、豊満な肉付

——京塚昌子には程遠くても、こ

れは正に天平美人の様相である。見ようによつては、飾り気のない平凡な髪型にも、どこ

となしに沁み出る育ちの良さが、村上夫人の全貌に溢れていた。

私にとっては、数年前カメラ・ハントに書いた、岐阜の水野弘夫人以来の肥満タイプの女性であるが、SMの対照の女人としては、凡そその片鱗だに窺えない、何かそうした話を持ち出すことすら憚られるような感じを受け取ったのである。とはいえ、人の心の奥底に潜むものまでは分からない。とも角、儀礼上、名刺を差出して、自分の素姓を明らかにした上、話は極く自然に、私と夫人の共通の話題の、今は亡きH氏の懐旧談になっていった。話半ばから、H氏とは同好の士としての交遊のあったことを持ち出してゆくと、村上夫人は、さして驚いた風もなくうなずいて、

「実は私も、或いはそうした趣味をお持ちじゃないかと、薄々は感付いていたのでございますよ。でも反面、あの謹厳そのものの、堅人で通されたHさんが、まさかと思ったりもしてみたのですが、矢張り人間の本心とは、そのようなものなのでございますね」

「Hさんと奥様のお知合いは、御近所という以外の、何か特別の繋がりでもおありで？」

「あの方は停年退職なさって以来、いろいろの文化サークルの御世話になさっておられま



して、私も地区の婦人団体の役員などいたしておったものでございますから、時々は公共の場所などでお目にかかるうち、御近所のせいもございまして、追々とお親しくして参りましたのです」

私は、いよいよ核心をつく質問に入った。

「こんなことを無躰けに質問いたしましたして恐縮なのですが、Hさんが、どうして奥様の変わった御性格を御存知になったのです？」

「それは……」

夫人はしばし絶句して、脳中で言葉を整理するようであったが、ややあって、

「Hさんは私のプライバシーに関して、どの程度までお話なさったのでしょうか？」

と逆に訊ねてきた。

「それが、単に奥様にM性があると、それだけなのです。あとは何一つ……」

「ホホ、じゃあ申し上げますわ。この様な話題に話を持ってゆかれたのは、実はHさん御自身からなのです。私のように閉ざされた生活をしている者にとりましては、近頃の風潮について、矢張り興味ある関心を示すものでございます。何かのお話から、偶々、北欧のフリーセックスやアウトセックスが話題になり、最近のいよいよエスカレートしてゆく性

の乱脈ぶりに話がいたりしました時、私は自身の見解で、女の立ち場を申し上げておりましたらあの方の仰有るには、最近の女上位時代で、女性が総ての点で強くなってきたと仰有られ、冗談のように、

——それでも、奥さんの様な方から虐められるのなら、女上位大歓迎です——

など仰有ったのです。だから私も冗談に、

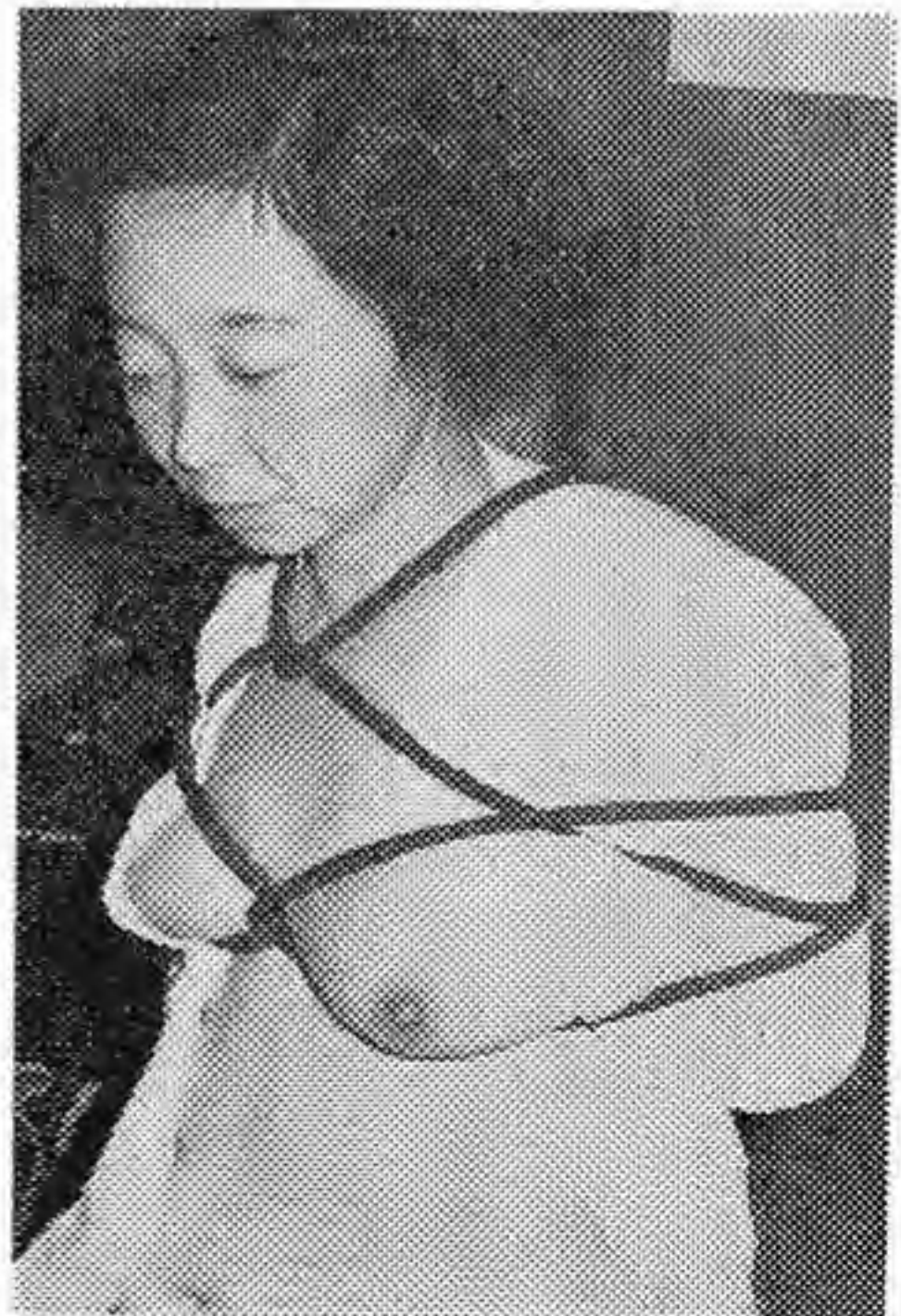
——いいえ、私はそんな女じゃございませんわ。古風で、むしろ殿御から、強い力で虐められる方がずっと嬉しいんですの——

と申し上げたのです。それがきっかけで、お話が何か奇妙な方向へ外れまして、やれサシズムだの、マゾヒズムがどうだのと、およそ私の思いもかけなかったことを、いろいろとお話なさったのでした」

「その時、Hさんと何かお約束でも？」

「いえ別に——ただ私その時、

——若し本当にプレイとかで割り切れる男性がおられたら、虐められてみたいですわ——と、冗談めかして申し上げました。でも何



だか弱々しげなあのHさんからは、およそ、そうした興味は覚えませんでした。Hさんは——そのうちに、奥様のお氣に入るような男性を紹介してあげましょう——

と真顔で仰有いましたので、成行き上、——愉しみにいたしておりますわ。心のモヤモヤを払って下さるようないい方をね——

と、いくばくかのアバンチュールめいた気分浸ってお返事したのでございます」

夫人は私からチラリと視線を外して、最後の言葉は呟くように語尾が消えていった。H氏のいう氣に入る男性とは、私を頭に描いて言った言葉であろうか。H氏も夫人もM性なれば、MとSを陰と陽に例えた場合、陰と陰



では所詮プレイの成立はむづかしかった。

H氏は夫人に想いを走らせたものの、己れの性向を知って、私に振り向け、あわよくば乱れそめにし夫人の赤裸々な様相を、私の口から、あからさまに聞き出したかったのではなからうか。今はもの言わぬ故人のH氏ではあるが、そうした考えが最も妥当のように思われるのであった。夫人も或いは、私に、そうした対象の男性を感じてみるとみて間違いない様であった。伏眼になった色に出にけりがそれを表わしていると見たは私のヒガ眼であらうか。私が黙っていると、夫人は間をおいて語りつないだ。

「それから数日後のことでしたが、Hさんがひょっこりとお見えになりました、これを一度読んでごらんないと、デパートの包紙で表紙をカバーした数冊の雑誌をもってこられました。奇譚クラブ、風俗奇譚という雑誌でございます」

「お読みになりましたか？」

「ええまあ、拾い読みさせていただきましたが、何か、理解出来ない面が随分ございますし、又、本当にこうした世界もあるのだろうか、めくるめくような気分に襲われたりもいたしました」

「私はその奇譚クラブという雑誌に、下手なルポを書いたりしているのですが……」

「何だかお名前に記憶がございます。Hさんにすっかりお返ししまして、どの様なものをお書きになったかは覚えてはおりませんが」村上夫人の細い瞳が、キラリと妖しく光った。退屈を持て余している芦屋マダムが、フ



ト好奇心にかられて、実直なH氏を面白半分にからかったようなフシもあり、それでいて今日こうしてわざわざ芦屋から出向いてきた処を見ると、万更悪戯心ばかりでもなさそうであった。或いは、ひとときのめくるめくような痴戯に酔いしれて、秘かにアバンチュールをたのしんでもみたいという、潜在的な心がなかったとは、誰も保証出来なかった。それでいて、果して彼女の本心は奈辺にあるのだろうかという戸惑いが、ともすれば私の心を躊躇させるのであった。

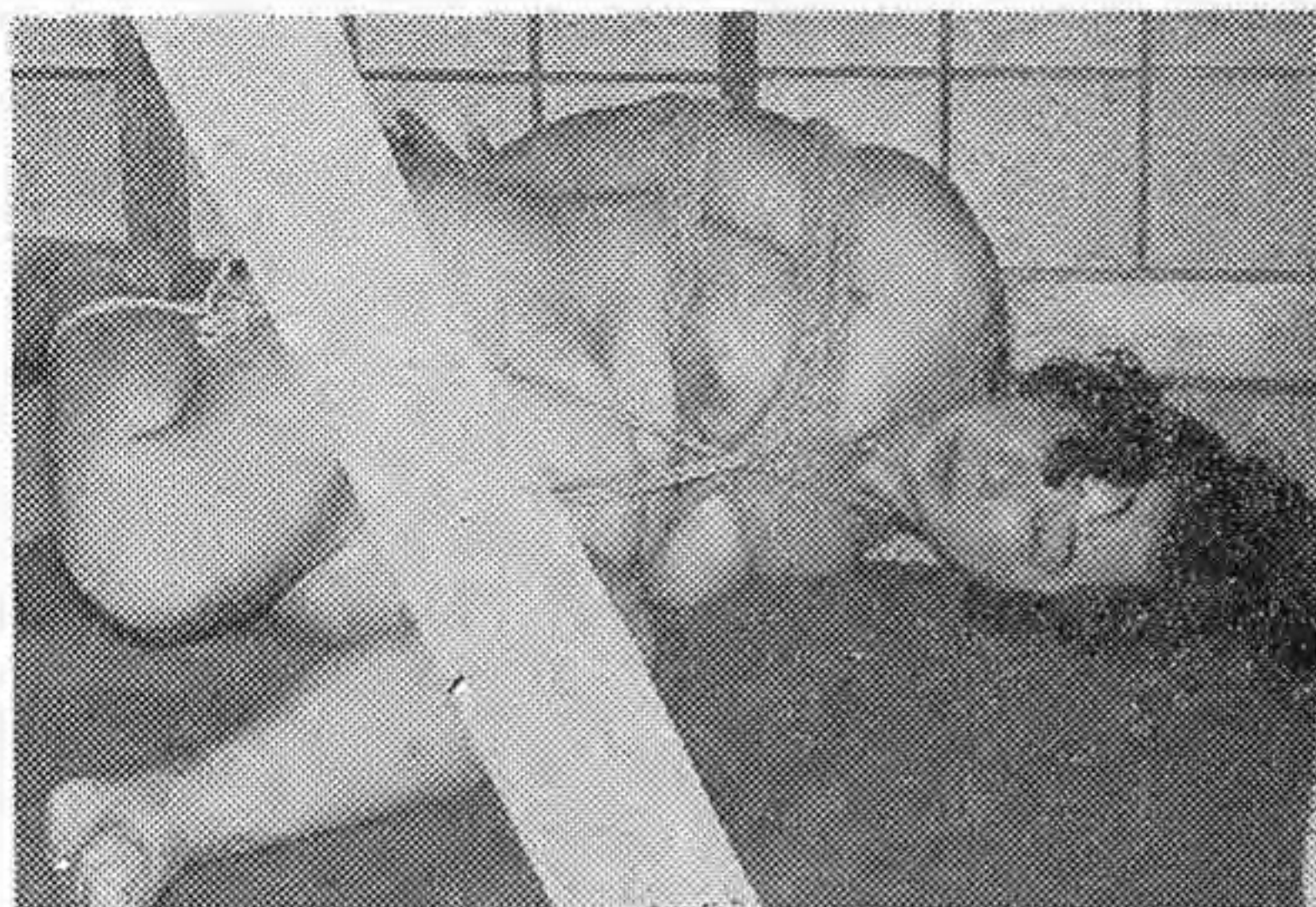
私が、カメラ・ハントという、ややリアルな、ノンフィクションに近い、女性ハントのルポを書いているのだがというと、まあという風にマジマジと私をみつめ、

「そうでしたの。カメラハントというのは三篇ばかり、面白く、読ませていただきましたわ。どれも皆、真実なのでございましょう」

と、夫人は急に関心を持ち始めたようであった。フォト挿入のそうした読物は読んでいても、筆者にまで心を留めて、記憶せぬのは当然であった。そこで私の名を見覚えていたに過ぎぬとしても、それは単に読み流した人としては無理からぬことであらう。

虚々実々、かくかくしかじかと、程々に虚





構を混えて話すと、あきらかに反応がかえって、いつしか夫人はふくよかな頬を、うっすらと桃色に染め、切長の細い眼は、しっとりとうるんでキラキラと輝き始めていた。

「実を申しますと、今日こうして奥様にお目にかかりましても、或いはハント出来はしないかと、大いに期待を抱いてきたのですよ」

「まあ、とんでもございませんわ」

一言のもとに軽くないなして、夫人はメツという風に、艶に悪戯っぽく睨むと、

「第一、私のような女に、貴男様がハントなさるほどの魅力ございませんでしょ。よく肥えておりますし、それにもう、若くも、美しくもございませんし……」

「ということは、奥様は御自分を卑下なすつて、お断りなさったというわけですね」

「いえ、そればかりでもございませんけど、とても羞かしうございますし、何だか空恐ろしくも存じますのよ。何の証拠も残らない、ほんのひとときの愉しみなり慰さめなら、又話は別でございますけど」

いい切って、夫人ははしたない自分の言葉に、ハッとしたように眼を伏せた。それは案外、夫人の本心であったかも知れない。

社会的に地位名誉ある村上夫人としては、それは当然すぎる危惧である。しかしその言葉のウラに、私は村上夫人が、SMのプレイに対して、並々ならぬ関心を持っていることを、判っきりと察知したのである。もう一押しすれば、夫人は虚飾をかなぐり捨てて陥落しそうな気配であった。

「では私達仲間という言葉の、単なるプレイ

ならいいと仰有るんですね」

「ええ、でも……それもいいざとなると……」

今日初めてお目にかかったばかりなのに、こんなことやはり無駄けでございますわ。あたしくよく考えてみまして、又お返事することにいたしとうございます。余りあたくしなどを、当てになさらないで下さいまし」

ここというところで、理性が働いたのか、追いつめた獲物は、サラリと体をかわして逃げに走り、チラリと腕時計をのぞくと、それをシオに、

「私、これで失礼させていただきます。孰れ又お電話でも差上げますわ」

いたずらめいた微笑をうかべて、そっと立上ると、さりげなく机上の伝票を握り、チラリと意味ありげな眼眸を送って、ロビーへと立去っていった。

ポカンとして夫人のうしろ姿を見送っていた私は、マンマと夫人の好奇心の対象にされたピエロの間抜けさをぐっと噛みしめ、してやられた思いで苦々しく立上った。不貞腐れた心に無駄になったプレイ袋がやけに重い。思わず舌打ちすると、（こん畜生！あの白豚め！）と、罵言を心の中で吐きちらしていたのである。



× × ×

所詮は縁なき衆生と、思いきりよくあつさり諦めていたのに、十日後のおひる前、思いもかけず村上夫人より電話がかかってきた。

「およろしかったら、手づくりのお夕食を差上げたいと存じますが、お遊びにお越しになれませんかしょうかしら？」

芦屋マダムは誘惑の仕方からして、どこことなく優雅である。思わずニタリとして、

「ハア、そりゃ有難いですが、御家族の皆様と御一緒じゃ、何者だろうかと、不審に思われるのがオチでしょう。とてもその勇氣はありませんよ」

「ホホホ、勿論あたくし一人きりでございませすわ。主人は昨日から九州の支局へ出張いたしました。明日の午後より後を追って子供の処へ参りますが、唯今は、一人ぼっちでございませすのよ。どうぞ御安心してお越し遊ばせ」

「いいのでしょうか、一対一で夕食を御馳走になっても……」

「そのつもりで、時間をつくったのでございませす。貴男様に、いろいろと楽しいお話をお

伺いしとうございますもの」

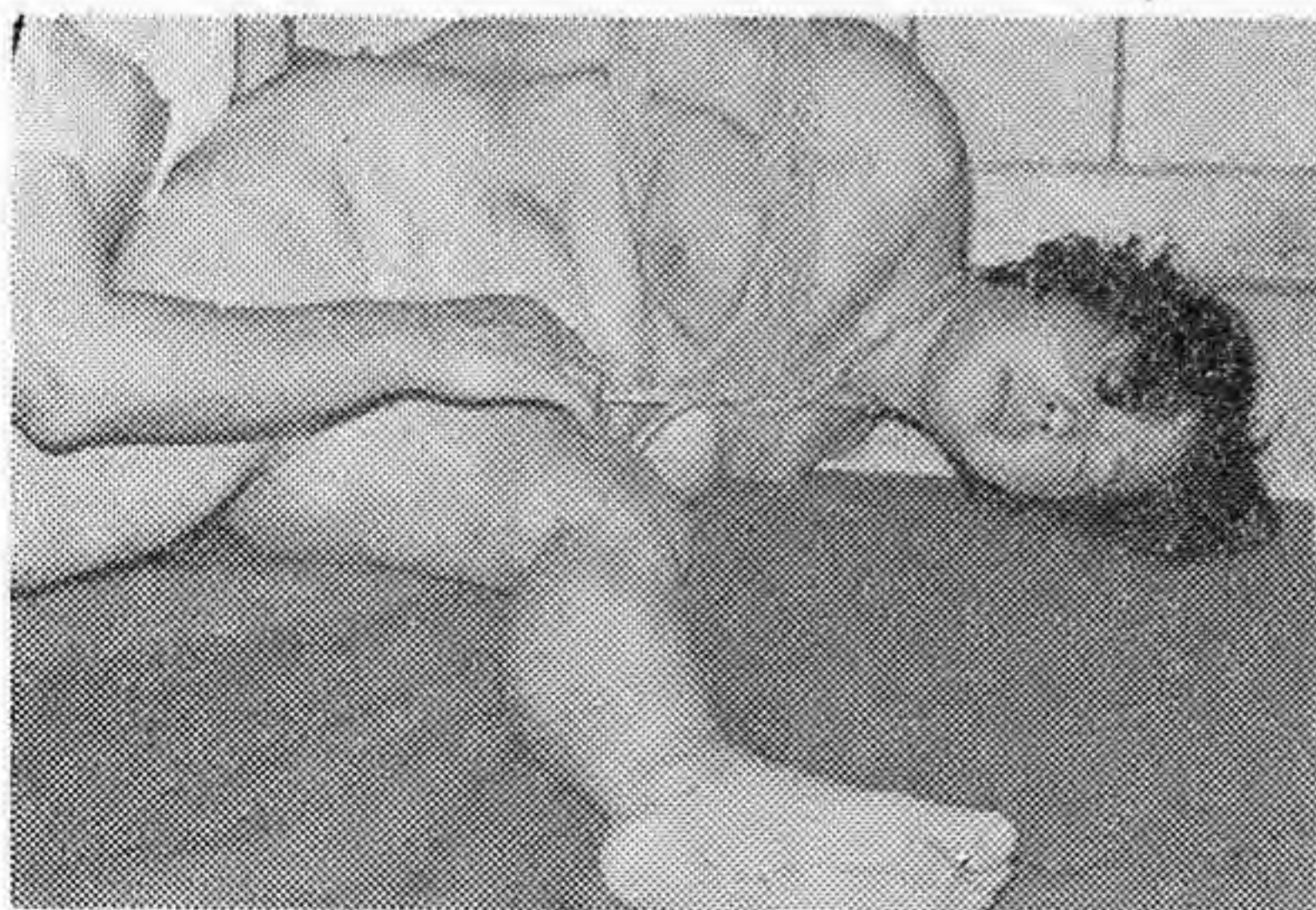
「いや、光栄です。それでは七時頃にでも」

「お待ち申し上げます。なるべく御近所に気付かれませぬよう、お気をつけてお出で下さいませね」

ちゃんとぬかりなく釘をうって、艶っぽい電話の声は、道順、目印などを詳細に知らせて切れた。(白豚奴!)と心の中でののしつた自分に恥じいり乍ら、私の心は大きく弾んでゆく。正に豹変とは、この事であろうか。猟奇を求めて夫人は、わざわざ空白の一夜をつくり私を迎えようとしているのであった。食事のあと、どの様なハプニングが起ころうとも、その時はその時のこと——。芦屋夫人とても、一皮むけば、ただの刺激を求める女性に過ぎない筈である。いや、むしろ有閑マダムだけに、その可能性は、一般女性にくらべて確率は高かったかも知れない。

或る筋からの話では、芦屋夫人にコリー犬を飼う人が多いそうで、従順な大型犬のコリー種の牡が、ゴルフや交際や二号と、外出勝ちの夫の留守の間の、愛玩の対象となっていて、これは暗黙の事実で、夫不在中の、対人関係のよろめきの浮気よりも、後腐れもなく、ものいわぬコリー犬の方が遥かに安全だとい

う声が、それからそれへと囁かれている土地柄であった。コリー犬相手のオアソビに夢中の最中、いきなり御用聞の不意の闖入に、あっと驚いた奥さんが突然変異を起こし、コリー犬もろとも、そのハレンチな姿を車にのせて婦人科を訪れ、ワギニズムの治療をうけたという話が、マコトしとやかに伝わってもい





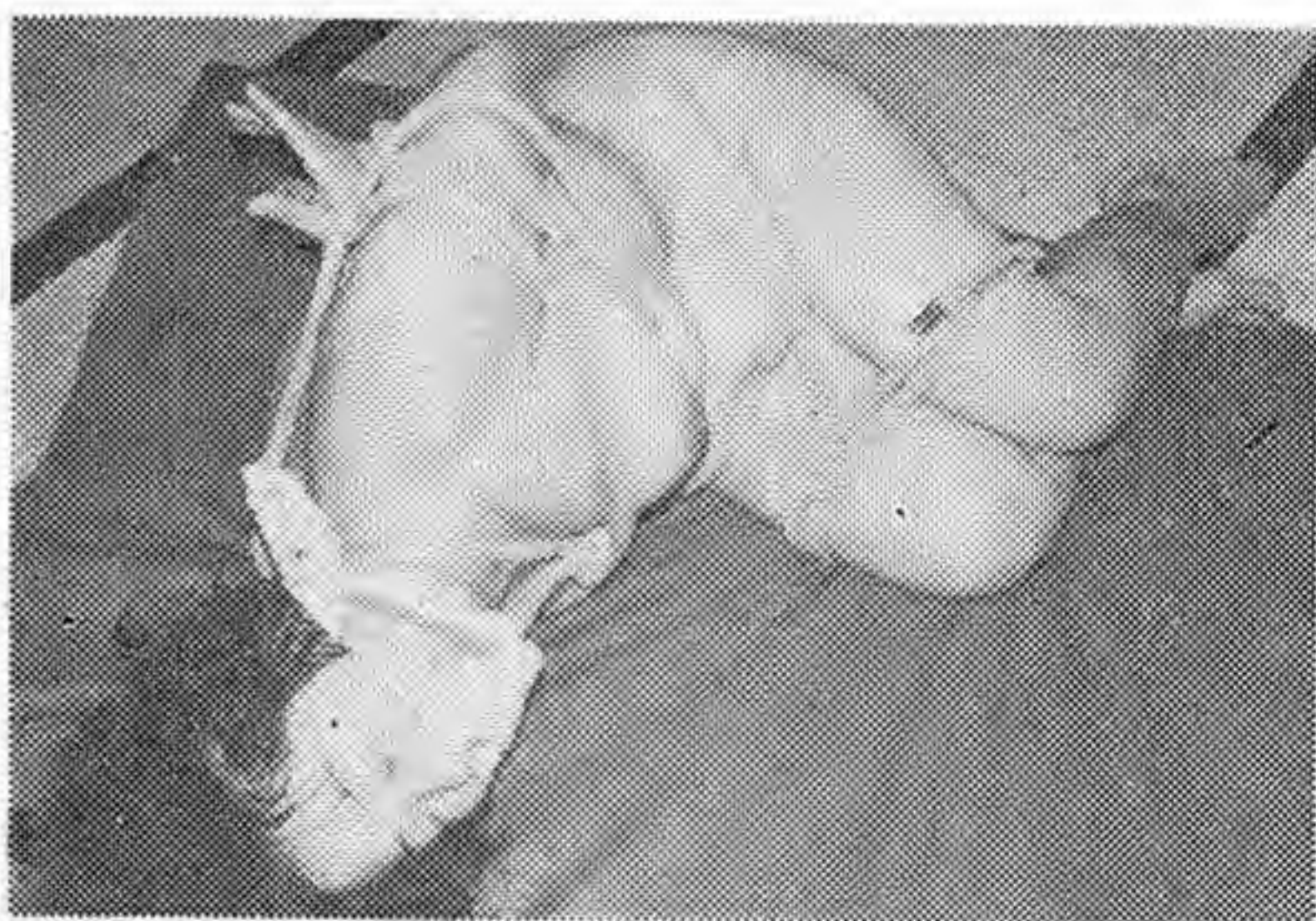
た。

今宵一夜、村上夫人は、猥らなハナシを私から惹き出して、心をそぞろに濡らし、或いは燃えるつもりなのかも知れない。独りになった時、女はむしろ男より大胆になるものである。ひそかに私を呼びよせようとする魂胆の裏に、口には出さねど、乱れようとする夫人の心が、ありありと息づいている様であった。

今夜も亦、無駄になるかも知れないと思いつつも、それが習性となってまるで執念のよう、プレイ袋に数種の縄や大人の玩具、カメラ、ストロボ、十段折りの三脚などをつめこんで、そそくさと夕暮れ前の巷に飛出す。車は駐車しておくと思立つので、梅田より阪急電車に乗り込むと、教えられた通り、芦屋の次の岡本駅で下車して、頭に叩き込んだ目標を頼りに、ダラダラ坂を昇ってゆく。

ようやく暮れなずむ邸宅街は、人影も疎らで、夕餉の食慾をそそる匂いが、邸のどこから流れてきて空腹の鼻腔をくすぐる。慾ばって、はちきれんばかりにつめこんできたプレイ袋の重味が、徐々にこたえてくる。

目指す村上夫人の家は、大邸宅とはいえなかったが、庶民のそれにくらべると、やはり



格段の違いをみせた大きな構えであった。

インタホンのボタンを押すと、忽ち反応があつて、夫人の声が流れてくる。

「誰方でしょうか？」

「辻村ですが……」

「ハイ、すぐに開けます。ちょっとあたりにお気をおつけになって下さいませ」

いわれて左右に眼をやる。幸い人通りはなし、私は早く潜戸の開くのを待ちかねた。半開きの扉の奥から、夫人の顔が覗き、私をそつと眼顔で招き入れた。

庭伝いにゆくと、桐若葉が大きいのかかり、あじさいの紫が大きく満開し、くれなずむ夕闇にほんのりと浮かび上って、打水の置石を歩く私の緊張した心を、フト和らげてくれるのであった。

手をとるようにしてダイニングルームへ案内すると、ホツとした笑顔になった夫人は、

「大胆でしょう、あたくしって」

と、早くも気をそそるようにいって、そつと両手で胸を抱えてみせ、安堵を示した。

「おどろきましたよ」

「独りぼっちになると、急に辻村様にお目にかかりたくなりましたの。御無理いってお呼びしたりして御免なさいましね」

「いえ私の方こそ、のこのこ御邪魔して、御迷惑じゃないんでしょうか。事実、今日の突然のお電話は意外でした。まるで狐につままれたみたいです。正直いって、もうダメだとあきらめていましたから……」

「悪いこととは存じましたが、辻村さまのこをすぐ出入りの興信所に調査させました。」



安心出来る方と知りましたので、すぐお電話差上げました」

私は啞然として、夫人の、一見のほんとした菩薩のような顔をみつめるばかりであった。おっとりしているようであってやはり夫人は、素姓の分からぬ男性との接触を懼れ、一応時を稼いだ上、用心に用心を重ねて、このひめごとのひとときをつくっていたのであった。

「御免なさいね。勝手に貴男様を調査したりいたしまして」

「いや、いいんですよ。その方が反って、私も気がラクですよ」

口でそうはいったものの、私は少なからず夫人の用心深さに舌を巻いていた。この上流夫人は、あの日即答を避けて、チャンと打つ手をうった上で、今宵ひとときに総てを托しているようであった。

「用意は出来てございますのよ。ビールも冷やしておきました。お口に合うかどうか分かりませんが、どうぞ御遠慮なく——。それとも先にお風呂お召しになられますか？」

気味悪いぐらい至れり尽せりである。既にダイニングルームの卓上には、二人分のとりどりの料理が色彩も華やかに並んでいた。チ



キンの腿焼き、エビフライ、とりの唐揚げ、蟹酢、グラタン、生野菜サラダなど、すべて手作りなのであろう。汗をかいていたが、折角の料理をこれ以上、待たせても気の毒と、先に食事を頂戴することにした。

テーブルに向かい合って座を占めると、心眩い思いでビールをついでもらう。まるで夢のような展開に、何かポカッと大きな陥穽が

待ちうけているような、軽い不安と、尻こそばゆい想いにかられ乍ら、ビールを口に運んでいった。

夫人も少しはのめる方であった。やりとりするビールの応酬で、いつしかほんのりと眼のふちを染め、湯上りの匂いこぼれる着流し浴衣の胸のほだけから、ムッチリと肉づきのよい肌が、仇っぽく覗いて、それが夏の宵を一入になまめかしくさせ、ムンムンする女体から発散する薫香が、あたり一面に漂っていた。空腹をこらえた旺盛な食慾が、次々と料理を片付けてゆき、鰯腹のんで喰って、差出す御飯一杯、やっとの思いで茶と共に流し込んで、もう私は陶然たる飽和状態になっていた。空腹にのんだビールが快く体内を巡り、軽い眠りすら襲ってくるのであった。

「お酔いになりましたのね」

「ええ、余りのおいしさに、すっかり度を過ぎてしまいました」

「まあ、お口のお上手でいらっしゃること」

艶ながしめがこぼれて、ソファによりかかり、煙草をくゆらす私にヒタと寄り添うように坐ると、挑発するように夫人の手が私の肩に触れた。それは夫人の方から求めてきた求愛のポーズであった。まるまるとした柔ら



かい指を、酔いに托して、ぐっと握りしめると、指先の力が掌に撥ね返ってきて、喘ぐように耳許で囁く夫人の唇は妖しく乱れた。

「御免なさいね、ウソをついたりして。あたしくし、本当は貴男様のことを、Hさんから精しくおききしていましたのよ。いつか機会があれば、貴男様にいじめて頂きとうございましてわ。だけれど、生活環境もありますし、もう若くも美しくもなく、こんなに肥えていますでしょう。それだけに自信が持てませんでしたの。でも、やっと今夜は思いが叶いまして、本当に嬉しうございますわ。このようになあたくしでも、お相手して下さいますか？」

「そうですか——」  
いきなり、ぐっときつく抱きしめ、はだけた胸に手をさし込み、豊かにたゆたう乳房を揉みしだいて、乳首をひねると、須臾にして夫人の呼吸は切迫し、鼻息が荒くなり、濡れた大輪の花弁が、仄かにビールの香を漂わせながら私の唇を求めて近づいてきた。

一瀉千里とは、このことであろうか——。  
いつしか夢中で、探るようにして解いた夏帯をシュルシュルと抜き去ると、薄い下着の下にポツテリとした白い肌がぬめついで、はだけた胸から足許へかけて、いきなり一糸まと

わぬ裸身が、さながら私の情熱をかきたてるが如く、これみよがしに飛びこんできたのであった。

「本当に縛って、虐めてもいいんですね。やるとなると容赦しませんよ」

「ええ、お好きな様になさって。

あたたくし、いつかこんな日が、きつとくると信じていましたのよ。

ああ早く……」

喘ぎ喘ぎ夫人はぐっと体をのけぞらせた。ゆるやかに這ってゆく私の指先に

悦虐の期待でぬめついた女体が、欲びに打震えて大きく悶えを現わしていた。

× × ×

一度崩れた女体はもう虚飾を捨て、めくるめくような悦虐の世界に、只管に耽溺しようとしている。果してこの女人は、真性のMなのだろうか——。それとも、かりそめのひとときに、忘我の境にあって、そうした被虐の行為によって、強烈な刺激の悦楽を求めようとしているのであろうか。

私は村上喜美夫人の、マゾ性の告白は未だ聞いてはいない。唯、激情のおもむく俛、ひたぶる惑溺に没入しようとする夫人に引きず



られて、縛り、虐めるS的行為をこれから試みようとしていたに過ぎない。

久し振りに接する、肥満タイプの女性の緊縛に、しばしとまどい乍ら、私は準備してきた縄を捌き始めた。

私の軽い、いたぶりで、既に陶醉の境地をさまよった夫人は、どっしりとたゆたう全裸を、惜しげもなく眼前に曝し、天平美人さながらの、丸い童顔の眼を更に細めて、ソファにゆったりと寝そべって、私の縄を持つ手をボンヤリと、みつめていた。握っていた縄を一旦足もとに置くと、黙って私はカメラをとり出し、ストロボの装填を始めた。  
「お撮りになりますの、やはり」





「いけませんか——」

「構いませんわ。私のようなものでもお気に召されるのなら、どうぞお好きなようになさって。でも……カメラの方にばかり心を走らせてはイヤでございますよ」

語尾に生々しい羞恥があった。大きくうなずいて、占めたとばかり準備を済ませると、夫人に、やおら近づく。緊縛プレイは、いきなりダイニングルームで、幕をきっておとした。

背後に回って、ぐいと両手をねじ上げると椅子の背で合わせて縛る。いや椅子の凭れが

邪魔をして、組み重ねられない手首を、何とか連絡させて、動けないようにしてしまうと

更に椅子ごと、ぐるぐる巻きに喜美夫人の体を縛りつけてゆく。これだけの行為で、心の熟しきった夫人は、早くも喘ぎを洩らして、ボツテリと垂れた両乳房が、激しく浪打ち始めている。これからのプレイの進行を想像して、初体験の女心は綾に乱れて濡れているようであった。豊満な上体を縛り終わり、女の羞恥を幾らかでも私の視野から避けさせるべく、部屋の片隅にかかっていた日本手拭で眼隠しをすると、思い切って、ぐいと浴衣の胸

をはだける。膨大な乳房が惜しげもなくはみ出して、眩いようなその白さが、私の眼を奪った。尖端をグリグリとねじり廻すと、えもいわれぬ恍惚の呻きが大きく夫人の口をついて流れた。

浴衣の裾をはだけてゆくと、脂肪太りのやたるんだ肌が露呈し肥満タイプ特有の、か

なり深い彫りがくっきりと、腹部に二、三条の溝をつくっていた。じわじわと、私の手は徐々に下降線を辿っていった。喜美夫人の、こらえようもない、ときめきの声は一段と昂まり、やがて歓歌をともなった陶醉の呻きが激しく私の耳朵をうった。

「どうですか、奥さん。もうこれで総ては私の思いのままですよ。痛めつけようと、体を自由に騷ろうと、奥さんはただされるが尽ですからね」

「ああ、あたくしこんなこと始めて……体中が疼くようです。もう、何をされてもいい気持……お好きなようになさって——」

官能の疼きに押し流されて、夫人はうわ言のように、きれぎれに叫んだ。

「いいんですね」

「ええ、どうにでも」

ハアハアと大きく喘ぎ、純金のネックレスを震わせて、夫人の豊かな五体は昂ぶりに動揺していた。

「奥さんはもう、私の奴隷ですよ。何をされても文句をいえない」

「申しませんわ」

「ウンと羞かしい姿にしてあげますからね」

「ああ……」



もう声もなく夫人は、これからの我が身のはずかしめを想像して、欲望の虜になり果てて、女体をくねらせていた。

私は最早、斟酌しない。プレイ袋をはたい、すべての縄をドサリと床に投げ出すと、夫人の両脚を、股も裂けよとばかり、水平になるまで一杯に左右に開き、まるで憑かれたように、雁字搦目にソファに縛りつけていった。犇々と肌に喰い入る縄目の痛みに、微かな苦悶の呻きをあげながらも、時には歯をぐっと喰い縛って、彼女は私の縄目を甘受していた。

不図、意地悪い発想が湧く。

「どうですかね、奥さん。これ以上、愧ずかしいポーズはありませんよ。この浅ましい剥き出しに縛られた姿の俤放っておいて、そろそろ帰るとしましょうかね」

「いや、いや、お帰りにならないで——お願いです。意地悪なさらないで」

「御用間に電話して、この部屋に入ってもらいましょうか。誰かが、奥さんのこのハレンチな姿を発見した時、さて何と弁解なさいますかね」

眼隠しされた顔面が、わなわなと震えた。「まあ、どうしてその様な残酷なことを仰有

いますの。あたくしは貴男様を信じて、すべてを許しておりますのに」

じっと眺めている私自身ですら気愧かしくなる極限の痴態を、明るい灯下のもとにさらけ出して、夫人は微かに五体を顫わせ、怨ずるように唇をわななかせた。

「ハハ、冗談ですよ。可愛い奥さんを、どうして他人の眼になど、曝させるものですか。でもこの際、私は判っきり聞いておきたいんです。奥さんは本当に虐められて欲びを覚えるのでしょうか。それとも、そうしたプレイの雰囲気、ただ上流夫人の好奇心だけで、一度味わってみたいと思われたのじゃないんですか。一体、どうなんです。判っきりと仰有って下さい」

「あたくし、自分の心が自分で説明出来そうにございません。確か最初のうちは好奇心を持ちました。でもあたくしの心の奥底には、そうしたものを絶えず希んでいる、あたくし自身に氣付いたのでございます。力強い男性に、思いきり虐め

られてみたい。揉み苦茶にされ、うんと辱かしめられて非道い仕打ちをうけてみたい。力づくでズタズタに犯されたらどうだろうかと思ったりいたしますと、体中がカッと熱く燃えて参りました、もう眠れないのでございます。夫ある身でそのような不貞なことを考える私自身、ひどく自己嫌悪に陥ったりした挙句、そのような男性に巡り合うことなど、所詮は見果てぬ夢に過ぎぬと、いつも妄想をかきめぐらせて、独り悩んだり憧れていたのでございます。Hさんのお話、数々の雑誌、貴男様の存在など知りまして、このような私の不逞な想像も、或いは万に一つ実現するかも







知れないと、一縷の望みが出来た思いでございました。Hさんがとりもつ御縁で、まさかこうなろうとは、信じることも出来ませんでした」

「では、七月の中旬、初めて電話いたしました時、私という人間は御存知の筈だったのでしよう」

「咄嗟には誰方かと思いましたが、すぐ分かりました。どの様に嬉しうございましたか」

「わざとトボけておられたのですね」

「貴男様が怖かったからでございます」

「御主人は、どのような方なのですか？」

「私より十六才年上でございますが、大事にしてくれます。でも単に平凡な、よき夫に過

ぎませんわ」

「じゃあお二人の生活に、S M的なプレイは介在しなかったと仰有るのですね」

「勿論でございます。貴男様には、今夜のようなことは、ゆきずりのよくあることでございましょうが、私にとりましては生まれて始めての、恥かしい経験でございます。すごく気愧かしいくせに、気の遠くなるような、疼くような、それでいて永年の夢が叶えられた嬉しさ……この気持、貴男様なら分かっていただけるはずでございますわ」

「分かりますよ。じゃあ一言、縛って虐めて欲しいと云って下さい」

「ハイ、縛って虐めて下さい。貴男様のお好

きなように」

私は黙って夫人の眼隠しを解いてやった。眩しげにまばたいた彼女、フト怯える表情になったが我が身の浅ましい緊縛にチラリと視線をやると、急に身も世もあらず体をよじって、強く、眼を瞑った。一文字に開脚した肢態のわが身を、夫人は逸早くさととり、そうするより手段はなかったのである。

数個の大人の玩具をとり出すと、夫人の官能を狂奔的に操るべく、私は目的に向かって膝を折る。

鈍い響きが迫り、女の快楽を翻弄すべく、それは容赦なく作動した。忽ちめまぐるしく変化する喜悦の様相に向かって、私の冷酷なカメラは、しきりに閃光を走らせていた。所詮はカメラ・ハント外の、門外不出のあられない痴態の数々であった。

激しい唸りがダイニングルームを圧し、軟欺の吸りあげる喚きが耳朶をつらぬいた。恍惚めざして、夫人はひたすらにかけ上っていた。介添する私の胸は熱くときめき、女獣の欲喜にのたうつ悶絶寸前の表情を、息を嚙み眼を血走らせて見守っていた。

× × ×

薄い下着の上から丸い黒縄で簡単に縛り、縄尻を握って、ダイニングルームに続く茶の間へと移動する。

快楽からさめた表情に、ものうげな虚脱が走り、夫人のうるんだ下脛から頬へかけて薄黒い隈がうき上り、淫らに泣き叫んだ、ひととき前の名残りを、うっすらと留めていた。

この肥満体を思う存分ギリギリと縛り上げて牝犬のように扱ってみたい黒い欲望が、ム



ラムラと湧き上ってくる。放心状態の夫人は懼らくもう、何をされても私の意の尽であつたろう。

恍惚のさなか、喘ぐ女の唇に、我知らず唇を寄せた時、危うく舌を噛み千切れそうになつたことをフト思い出し、悦虐にのたうち狂う凄まじさは、日頃教養の矜持と理性で押えているだけに、むしろ反動的に一旦こうなると、最早堰をきつたように凄まじい限りであつた。

ボンヤリと、茶の間の中央に佇立する夫人の黒縄をとくと、両手を背後に合わせた俣、彼女は私の次の行動を待っている。太縄は肥



満体にふさわしいが、めり込むように肉に喰い込む細引も、女体をしめつけるには捨てがたい味がある。以前、金原奈加子に使用して以来、ここしばらくは使わなかった細引の登場である。かなり念入りにギュウギュウと締め上げてゆくと、夫人のぶよつく肌に、細引は面白い程喰い込み、まるで風船かタイヤを紐で縛つたように、白い肉はくびれにくびれて、全身にポコリポコリと起伏が重複していった。

股縄はすっかりその姿を没し、肥満女体特有の、腿の肉ずれでやや赤らんで爛れた皮膚に、細引のきつさが痛むのか、夫人は丸く大きな腰をゆすって、何とかその苦しみから遁れようと、果敢ない努力を試みていた。双臀の縄も、ポツテリとした豊かな臀部に圧迫されて姿を没し、やっと尾骨の辺りから現われた縄が、夫人の後手にしっかりと繋がる。

体を抱えてその場に転がすと、芋虫さなが

らくくびれをつくってうごめき、ポクリと盛り上った肉のあちこちをぐいと押えると、手応えもなく、まるでゴム人形を押すように、指先深く沈んでいった。

「苦しいかい？」

耳朶に唇をよせて囁きかけると、

「いいえ、いい気持。苛めて、もっと」

と、熱い吐息が還ってくる。自分の肥満を独り愧じて、相手にされないと諦めていた女体に真剣にとり組む私に、夫人は感激したようであつた。日頃の取り澄ました芦屋夫人の表情は、ここにある彼女からは微塵も感じられず、唯ひたむきに官能の昂ぶりに悶えるMの牝犬の姿のみが激しく息づいていた。

それでいいのだ。プレイに没入した今、徒らに遠慮したり気兼ねすることが、折角燃え上った愉悅に水をさすことになることを、彼女は全身で嗅ぎとっているようであつた。

「この浅ましい姿のフォトを、ハントにのせてやるからね、覚悟するんだよ」

「ああ、それだけはゆるして」

「ダメだ、それならもうやめた——」

「だってエ……」

「だってクソもあるか」

「ハイ、いいですわ。でもあまり本当のこと



書かないで下さいね」

「ああ、適当にボカして書くよ。さあ、苛めてやろう、ポツポツと」

牝犬には、粗暴な言葉がむしろふさわしいのだ。うなだれる夫人の足首の縄を握って、ぐっと歪曲させると、ヒューッと苦しげに呻く。肥満の腹部が異常に圧迫され、細引が思いがけず強く締まった故為であろうか。体ごと投げすてるようにボンと手放すと、仰向けになった女体を、ぐいぐいと足先で踏み躪りむれて軽く異臭の放つ足指を、夫人の唇に押しつけてしゃぶらせようとした。顔を振ってイヤイヤし、ぐっと堅く閉じる唇に、小癪なとばかり

「口を開くのだ。しゃぶれ、しゃぶるんだ」と猛り狂って、意地にも拇指を押しつけてゆく。この行為は私の好むところではなくとも、彼女の矜持を蹂躪するプレイとして、ふさわしかった。怨めし気に私を見上げて、辛うじて唇を開くと渋々そっと口先に含む。「舐めって綺麗にソージするんだ。出来ないというのかね」

「……」

「どうなんだ」

「ハイ、いたします」

泣きべそを掻いてペロペロと

舐める。擦ぐったい情感が全身をぞくりとつらぬき、たっぷり唾液を吸い込んだ拇指を思わずスポッと抜くと、その褒美に、ローソクをとり出し、銜えさせて火を点じる。鼻をつまみあげ乳首をひねり、頬を抓ったりして散々いたぶったあと、縄束で軽くピシャピシャと全身を叩いてゆく。アウッアウッと悲鳴が洩れて、蠟芯がユラユラとゆらめく。口辺に蠟涙がこぼれて、白い牝豚は、ウワウワと泣き叫ぶ。

ゴロリと俯伏せにすると、腰の辺りに馬乗りになり、モクモク盛り上った臀部に、縄束のムチにかなりの力を籠めて、パシリパシリと叩きつけていった。白い双丘が、ムラをつくってたちまち桃色に染まってゆき、圧迫される胸部の息苦しさから、夫人は一打ちするごとに、ヒイヒイと派手な悲鳴をあげて、馬乗りの下でのたうち廻った。

谷山久美子のような、強烈なM女性に対する加責にくらべると、このプレイはまるで初歩に近いようなものであっても、初体験の夫



人にとっては、余りにも強烈すぎる刺激であったかも知れない。

辺見マリの歌う「経験」の文句ではないが

うわ言のように彼女は、

「あッ、やめて……ああ、もうおよしになって。く、くるしい」

と息もたえだえに、とぎれとぎれに叫んでいた。やっと重い腰を挙げると、私はノロノロと細引を解きだす。縄目が固く締まって肌に喰い込み、解体作業に、かなりの時間をとられる。縄が細いだけに、きつく締まった結びめは、ほぐすのに骨だった。

全身に赤い縞目が鮮かに、くっきりと烙印されている。それに眼を落として、いとおし



そうに夫人は腕や胸を撫でさすっていた。

「少しきつかったようだね」

細引を丸めながら、笑ってみつめると、全裸をくねらせて、

「心が痛い方へばかり走りまして、余りよくはごさいませんでした。あたくしまだまだダメなんでございましょう。やはり、先程のようになさって下さる方が愉しうございます」

「先程のと仰有ると？」

もじもじと、真赤にうなじを染めてうつむき、片手で顔を蔽うと、一方の指先がダイニングルームに転がっているパイプレーターを羞かし気に指さしていた。女の欲びは、やはりそれに尽きるということらしい。

あながち糖尿のせいでもあるまいが、暑さの中で独りバタバタしたので、しきりにノドが渴く。のみ残しの、生ぬるくなったビールを一杯、一気にあけて生気を取り戻すと、今一息、責めつづけるべく私は再び太縄を握りしめた。

無抵抗の上体を締め上げて、やつこらさと横倒しにすると、いつもの斑ら紐を首から片足にかけて、こころもち吊り上げるようにする。贅肉の塊りにも似た女体探険には、こうしたポーズも一つの手段であった。

先日、北陸へ妻と旅行した折、東尋坊タワーのピンクショップで買求めた中が空洞になった生ゴムこけしをとり出すと、小型パイプをすっぽりとそれに嵌めこむ。表だっては、交通安全マスコットのゴムこけしであるが、一コ千円のこのシロモノ、恐らく誰一人、

車内にぶら下げる者もないだろう。先程のプレイの経験で、夫人にとって小型パイプがやや物足りないことを私は察知し、流石に肥満女体は、その振幅程度も違うものだ、妙なところで感心して、マスコットの登場になったのであった。

好奇と物珍しげな視線が私の手許に流れ、夫人はそれを目敏く見て取っていた。既に次の行為を予測して女体が火照るのか、抱きかかえた肌は汗ばみ以上に夥しく粘り、全身に媚を湛えて、夫人は私の行動を待ち望んでいるようであった。広い邸内はシンとして、ヒソとの物音もなく、夫人の歓喜の声は、懼らく邸一杯に、隅の隅まで伝わるのではないかとすら思われる静寂であった。

快い振動音が伝播し、攪乱につれて、果して忽ち起こる夫人の呻きは、羞恥のベールをかなぐり捨てて一きわ高く、部屋の空気をふるわせて流れ始めた。

夫人にとって緊縛や、それにつながる一連のいたぶりは所詮アクセサリーに過ぎず、本命は官能の燃焼にあったことを、私はまざまざと感じた。今、女体は蘇ったかのように燃えている。燃えつきてぐったりとなったのも束の間、恍惚の谷間を逍遙し、再び激しく火





をふく活火山は、私の執拗な継続で、幾度となくのたうち廻り、煮えたぎる陶酔の悦楽はいつ果てるとも知れなかった。それは譬えるならば、体の中を吹き抜けてゆく、突如、襲った暴風雨のようなものであった。

これは最早SMのプレイではないかも知れない。夫人にとってSMのプレイは前戯ではなく、快楽を更にエスカレートさせる手段として受取っていた。それはエクスタシーの際の、愛咬にも通ずる快虐に外ならない。

その間——、ギョッギョッと有り余る肌を擱んで、雀るようにひねり上げて、パチパチと平手で強く臀部を叩いても、夫人にとってはそのすべてが、たまゆらの快楽につながっていた。去来するエクスタシーに、忘我の境をさ迷い、牝犬はしばしば喜悅に絶句して皓齒をキリキリと噛み鳴らした。

かなり長い奉仕に草臥れた私は、しばし責め手を休める。ぐっしより汗ばんだ体に、どす黒い疲労が蔽いかぶさっていた。

太縄で足首まで縛り、猿轡をして転がしてみたが、夫人は度重なる陶酔の果て、まるで魂を天外にとばしたかのように、余香をかみしめて深く眼をつむっていた。さも愉しげに転がっている夫人をみると、ムラムラと、も

っと虐めたい気持が湧き起こってくる。

この肥満体では、嘸かし苦しいに違いないだろうと思う海老責めをやってみる気になって、女を抱き起こすと、あぐらを組ませて、両足を縛り、ぐいぐい押えつけて、胸で結びつける。肉のたるみが腹腔を圧して、ハアハアと夫人は息も苦しげである。カメラを構えて、このポーズをかなり撮り納める。転がし押えつけ、壁に添わせて後に倒し、海老責めのさまざまなポーズがカメラに納まった。

「どうだ、苦しいかい」

微かに、うなづく。

「ハントの女性なら、朝飯前の緊縛だが、肥えているから苦しいのだろう。私は汗をかいて縛っているのだ。縛って貰えて有難うと、礼のひとつもいえよ」

「……」

流石に無言で唇を噛むのをみて、頬を数度ピシャピシャ叩くと、女は痛いともいわず、苦悶の熱い吐息を洩らしていた。

パッと足蹴にすると、激しい呻きと共に、ドスンと音を立てて横倒れになる。縄を握って仰向けにさせる。両手首に体重のかかる痛みで、呻き声が一入、高まっていった。あぐらに組んだ両脚が、太く逞しく空に躍ってい

た。機をみてうごめく私の責め手に、牝犬は一際高いいななき、けたたましく咆哮した。

マスコットの響きと共に、背後からポンと押して、元の姿に戻してやると、既に形相を変えて、再び牝犬は忘我の恍惚境へと没入していった。

煙草をくゆらせて、その独りよがりを感じとみつめる私の心に、フト空しい虚脱感がしのび込んできた。好き放題に、こうして女体をなぐさみものにしていくものの、喜悅するのは夫人だけで、手を束ねている自分が何だかバカバカしい存在に思えてくる。私が一方的に選んだ女体責めの手段とはいえ、何か物足りない不満がじりじりと憂積していた。その原因が奈辺にあるかを私自身の肉体が一番よく知っているくせに、こうした様々の冒瀆のプレイにもかかわらず、肝心のポイントが一向にハッスルしないのは、暑さと疲労と酒気がミックスし、加うるに、既に慢性化したプレイへの狂れが、私をかくも不感症にしまったのであろうか——。

誰憚ることなく、たった一コの玩具で燃えに燃えている夫人の痴態に眼をやり、陶酔の感興をさまさせてやりたい意地悪さがムラムラと胸に突き上げ、



「オイ、暑いから風呂へ入ってくるよ、何処なんだ？」

と乱暴に訊ねても、しばしは返事もかえらない。こんな小道具に酔い痴れて、そんなに夢中になれるのかと、自分で与えておき乍ら業腹になって、荒々しくマスコットを取り上げてやり、パシリと頬を打って陶酔からさめさせ、

「きこえないのか」

と強い口調でいうと、ハッとしたように、「あッ、あたくし、何だか気が遠くなっただみたいで……御免なさい。何でございましょうか」

「入浴するといってるんだよ」

「あッ、それでしたら御案内いたします。ひよっとすると、もうさめているかも知れませんか」

「いや、暑い時だからぬるくていいよ。じゃあ案内するんだ」

「あのう、これでは……」

苦しげに身悶えするのになずき、足の紐をといて立たせてやると、

「さあ、先に立って歩くんだよ」

私はタオルとマスコットを握って、夫人を押し立てるようにして茶の間を出た。

廊下の突き当たりを折れ、トイレの右側の戸を開くと、こじんまりした脱衣室があった。

「さあ、ここでゆっくりと愉しむがいい。風呂につかりながら見物するからね」

ニヤリと笑って、マスコットを鼻先に近づけ、どさりと転がすと、マスコットが独り歩きしないよう、紐尻をつかって縛った。

夫人はもはや従順そのものであった。芦屋マダムの見識や矜持はかけらもなく、一匹の牝獣化した女体だけが、脱衣室の床を這いずり廻っていた。

女の生々しい痴態がよくみえるように、仕切の扉を開いた俣タイル張りの浴室へ入る。ここにはまぎれもない夫人の体臭が、そこはかとなく漂っていた。

独り酔い痴れている夫人の、あられもない姿を眺め乍ら、ややぬるくなったポリバスにどっぴりと身を沈め、さてこれから何をなすべきかと、不逞な嗜虐の想念が、あれこれと私の脳裡をかけ巡った。

かずかずの緊縛を試みる前に、私は余りに



も夫人に対し、快楽の恩恵を与え過ぎたようである。加うるに敵陣へ乗り込んでのプレイが、私の心をかなり気疲れさせていた。今こそ夫人が、一人のM性の女として、思いの尽になっていても、それまでの迂余曲折や、私の信用調査までした行為に俄にムラムラと面憎さを覚え、夫人のプライドを思い切りふみにじり、日頃の虚栄をズタズタに引裂いて、殊更に夫人が露聲しそうな行動をとりたい思いにかられ出してきた。

フトある一つの思索に到達すると、我にもなく、ニタリと独り笑い、湯から出て、体を洗い乍ら脱衣室の夫人に眼をやる。

女はやや蒼褪めて、悶絶したように声もな





く横倒れになった俵、肩で息をしていた。寸秒も休まず責め立てる玩具の攻撃に、今は喜悅も癡痺して爛れ果て、力尽き果てた忘我の終極の姿として私の眼に映じたのである。微かにくぐもって響いてくる振動音が、さながら性魔の化身の囁きのように、執拗に私の耳を妖しく擦った。

× × ×

さきほど夫人に言いつけて、絵具と筆と水洗コップを持ってこさせると、審かる彼女にそれとはいわず、私は次の行動に逸早く移っていった。

ダイニングルームの椅子を茶の間へ運び込んで、全裸の夫人をそれに縛りつける。両脚

を開かせて、左右の椅子の脚へ縛り、いよいよ猥らな作業は始まろうとしていた。むき出しの下半身は、ハントのフォトの場合、手拭でもかけて蔽うより仕方ないだろう。

三脚にカメラを据えて、セルフタイマーを使って女体ペインティングの準備は出来た。

正直いって、私に絵心は皆無である。学生時代から、書道の方は好んでやっても、絵の方となると苦手で、いつも課目中、最低であった。未だに絵画の趣味には乏しく、久しく描くことなど試みたことのない私が、今筆をとって、この女体に何を描こうというのであるのか。私にとって描くなんていう大それた望みは更になく、何とはなく猥ら書きして、女体を醜惡に汚してやりたかったというのが、偽らざる本心であった。

「どうなさいますの？」

怪訝そうに夫人は、チューブから絵具を押し出し始めた私に問いかける。

「体一杯に絵具をなすりつけてドロドロに汚してやるんだよ」

「まあ、愧かしい」

「ああ、その愧かしがるのをみ

たくてね。うんと猥らに正視出来ないようにしてやる」

情けなそうな顔になって、夫人はマジマジと私をみつめる。瞳の底が悲しげに、私の行為をなじっているようであった。しかし、諦めたのか、視線が落ちると、夫人は静かに眼を閉じた。

濃い赤をニルニルと押し出すと、筆に水をしめし、たっぷりねとつく赤絵具をつけて、先ず両腕に太々と眼隈を入れ始めた。観念したように夫人は眼を閉じて、私の為すが俵に任して身じろぎもしない。ついでピンとはね上げた太い眉――。描く私には何の想念もなく、唯浮かぶが俵に、夫人の顔を次々と汚して行く。大きく口辺を彩り、やや広めのひたいに、ピョッコリと二つの眼らしきものを書いて、鼻梁に一本の線を引き、鼻髭ならぬ、奴胤のように、頬にくるりとはね上げて弧円を描く。天平美人の貞淑な様相は忽然と掻き消され、中国芝居の、悪の面相の如き真紅の毒々しい、わけのわからぬ怪奇な容貌が浮かび上ってきた。

別の筆に緑を溶いて、その隙間を埋めるように、ふくよかな顎のあたりや、鼻翼に、緑青を点描してゆく。



浴衣の腰紐を鉢巻代りにして、夫人の頭を巻き、余った紐を首に巻きつける。

一変した奇怪な様相が、私の幻想を更に遅くしてゆく。豊かな女肌は無惨にも、原色のわけの分からぬ殴り書きによって、次々と穢されていった。乳首を芯に花片を散らし、臍窩を中心に、男性記号の矢印が聖なるふるさとを指している。双房の谷間に一つ目小僧が目をむき、猥らな落書は次第に下降していった。両の太腿に殴り書きしたあと、最後の仕上げをなすべく、絵具は蛇のようにのたかっていった。

前身を七彩に書き殴った姿に眼を落として夫人は、気愧かしげにヒソと笑い、彩られた顔をそむけた。もうここまで書き続けると、私の猥らに狂った筆はとどまらない。縄を解き放つと、両手をうなじで縛り直し、椅子に跨らせて背面を向かせる。赤や黒や茶褐色をまぜ合わせて背一面にデカデカと描いたものが何であるかは、各自の御想像にお任せしよう。双臀に余った絵具で無駄書きして、やっと、このばかばかしいペインティングは一段落した。この猥ら書きに、何らの意味もなければ目的もない。唯、刹那の衝動にかられて描きたいから描いたに過ぎない。

全身絵具で穢された女体を屹立させると、

改めてマジマジと前後左右から、この肥満の白い柔肌をみつめる。私の命令に従って、夫人はカメラに向かい、さまざまのポーズをとった。赤、緑、青などの絵具に彩色された物の怪じみた顔から細くのぞく眼は、何故か悲しげにまたたいていた。それは行き過ぎの汚穢行為を責めたい気持を辛うじて押えているといった、切なげな眼の色であった。

「もうよろしうございますかしら。あたくし自分をみつめるのが羞かしくって……」

「ダメダメ、その姿で椅子に逆さに縛りつけて、最後にローソクの洗礼をするのだ」

軽く溜息をつき、素直に私の言うが儘に、夫人は椅子に逆さに跨がって、じりじりと腰をすり上げていった。両足が椅子の背面で宙に浮き、両腿の猥ら絵が、左右から中心をねらうてうごめいていた。両手を椅子の脚に固定すると、怪奇な顔がガクリと逆さに落ちて白いのがピクピク苦しげに震えた。

ローソクを屹立させて点火すると、ところからわず縄むちをふるい始めた。既に恍惚からさめて、被虐の欲びから遠ざかった夫人にとって、それは苦痛以外の何ものでもなかったに違いない。

必死に苦悶をこらえようとして、尚且、苦

痛の呻きが唇をついて、時折つんざく悲鳴がしじまを裂いて部屋に流れた。忘我の境からさめた夫人にとって、それはもはや何らの悦楽を伴わぬ、いわば私一人の嗜虐の行為に過ぎなかった。はかし切れぬ大脳神経の命令がこんな形になって夫人の体に炸裂していた。ヒイヒイ泣き喚く夫人の髪を握りしめ、尚も縄ムチをふるう私の姿は、恐らく地獄の悪鬼さながらに見えたことであろう。

ジリジリと芯を焼くローソクの焰は、打擲につれてメラメラと揺れ動き、ポトポトと敏感な柔肌に落下して、それが更に夫人の苦しみを倍加していった。

数々の夫人に対する奉仕の報酬は、こんな思いがけぬ形となって現われたのである。毒々しい彩色が揺れ、ミシミシと椅子はきしみ垂れ下った顔は苦悶にひきつっていた。

もうここらが限度であろうと、縄束を投げ捨て、ローソクをフツと吹き消すと、縄を解いてゆく。猥ら絵の肌を抱きかかえ、椅子より引きずりおろそうとして、女の重味に負けてドサリとたたみに転がる。横転した二つの体が纏れ絡まり、その刹那、恐ろしい気魄をこめて、夫人の手が私のノドを締め上げ、俄



破と重石がのしかかるような力で蔽いかぶさってきた。醜悪奇怪な羅刹の顔が、思いつめたように私の顔にぐんぐん近づき、

「く、くるしい、はなしてくれ——」

と叫ぶ私の口を、真赤な耳まで裂けた唇が強い力で塞いでいった。

× × ×

裸身が二つ浴室を圧して、情痴の汗と脂の匂いが、ただよっていた。

湯を浴びた夫人の全身は、どろどろのドス黒い滴をしたたらせて、白い柔肌を穢しに穢していた。洗っても洗っても、洗面器の湯が忽ち変化してゆく。三原色が融けあって、喜美夫人の顔は、無惨としかいいようのない、幽鬼のような仮面におおわれている。流しても流しても彩色は消えず、ポタポタと混合の色滴がしたたり落ちていた。それでも夫人の表情には、みち足りたあとの安らぎと満足感がそこはかとなくにじみ出ている。

肥満の体を小さくして、どっと激しく湯の溢れたポリバスの中へ、しっかり抱き合ってしまった時、

「あたくし、やはり、たのしうございましたわ、お会いして良かったと思います。貴男様は？」

と、囁くように訊ねるのであった。

「ええ私も——でも随分、乱暴した様です。」

お許し下さい」

「いいんです。苦しいとも思いましたが、やっとプレイの持つ味が分かりかけた様な気がします。でも、あたくしのような者で、さぞかし御満足いただけなかったのじゃないかと何だか申しわけなくて」

「とんでもない。私は思う存分、奥様を冒瀆しましたよ。でも、すべて快く受け入れて下さった寛大さに、心から喜んでいなのです」  
「そう仰有って頂けて嬉しうございますわ。機会があれば、又お呼びさせていただきますのでよろしいでしょうか」

「ええ喜んで……」

「こんな、あたくしでも？」

「姿、かたちじゃありません。心ですよ、すべては——」

夫人は私を強く抱きしめると、みずから熱い唇を押しつけてきた。彼女の手が私の腰の辺りでそろそろと、遠慮がちに何かを求めて遊弋していた。

「ねえ、一つだけ、お願いをきいて下さいませんか？」

「何でしょうか」

「お分けして、いただきたいのです、あれを……」

「あれっていうと？」

「分かっていらっしゃるくせに——。独り寝の夜のなぐさみに。ねえ、お願い」

「ああ、あれですか。いいです、進呈しますよ。でも余り使い過ぎると、今度お目にかかった時の刺激が薄いんじゃないかな。あッ、痛ッ——」

湯の中で、夫人の指先が、したたかに私の尻をひねり上げた。ポツと耳朶を染めて、夫人は大きく喘いだ。その快楽を思い出して、肌の疼きを覚えたのであろうか。

茶の間の時計が点鐘を始め、微かに聞こえるボンボンという音を数えて、午後十時。絵具でうっすらと色づいた湯に浸りつつ、さて帰るべきか、それとも夫人の囁きに負けて泊まるべきかと、去就に迷いつつ、いつ迄も豊満な女体を抱きしめていた。

その時、死期の近づきを予知して、こうした事態を逸早く察知していたH氏の、やや恨めし気な蒼白い顔が、フツと私の脳裡を幻のようによぎり去って消えていった。

——(おわり)——





カット・春 川 ナミ オ

連 載 ・ M の 傾 斜

## 壺 中 の 園

(7)

真 砂 十 四 郎

って放っておくでしょうか？

「あなたは私の女神です……だってサ。笑わせるじゃないの。あたしに惚れるより、郁ちゃんに惚れたらよさそうなものなのに。だいたい十九や二十の若い男ってのは、年上の女がいいらしいのよ」などと、あざ笑っていた玉枝ですが、しかし浮気ごろの強い女ですから、ひょっとしたチャンスが仮にあったとしたら、どんなことになるかわかったものではありません。場所と時と機会の、所謂PTOの条件さえととのえば……そのPTOは玉枝の気分次第で、いとやすくお膳立てできるのです。

亭主の私？……など、問題外です。お尻に

敷いて「文句があるの」ときめつけたら、文字通りたちまち「文句はありません」と屈服してしまうことがわかりきっているのですから、玉枝にとって、こんな気尽天国はないわけです。

ほんのつまみ喰い程度の気まぐれだろうがこれはつまみ喰いするまでの段階に必ず進展する——と私は見ました。しかし、清水さんとの仲は強引に私に承服させた玉枝も、この少年との逢引きは、浮気遊びというほかに理屈のつけようがありませんし、いくらなんでも私にあからさまには言いかねるでしょう。食べもののつまみ喰いがそうであるように、このつまみ喰いも「ちょっと内緒で」するに

22

加納敏夫という十九才の青年……青年ともいえません、少年です。その十九才の少年は玉枝に惹きつけられて、そっと彼女にラブレターを手渡したそうですが、玉枝はこれを黙



ちがいありません。

ではその、ちょっと内緒で……を、いつ、何処でするか？

私は玉枝の気配を注意深く観察しながら数日をすごしましたが、ははあ、これはあやしいな”と思われる玉枝のそぶりに、それから間もなく接したのです。

それは店の休業日の前の晩でした。

「あんた、長瀬の桜、見に行きたいって言ってたでしょ。あした行ったらどう？ ちょうど盛りの頃よ」

「うん、そろそろ満開だろうな」

「ねえ、あんた行ってらっしゃいよ。たまにはのびのびと、田舎の空気を吸ってくるのもいいものよ」

「うん……。君は？」

「あたし？ あたしは、そうねえ、いつも寝不足でつかれてるから、昼寝でもしてるわ。」

あんたが出て行って、あたしは一人で、のんびりと休養ってとこネ」

「そうだなあ、それじゃひとつ、行ってみるかな」

「そうしなさいよ。で、何時ごろ出る？」

「別に急ぎもしないんだから、昼すぎごろ出るか」

「昼すぎ？ それじゃ遅いわよ。向こうへ着いたら夕方になっちゃうじゃないの。十時ごろ出なきゃダメよ。向こうまで何時間ぐらいかかるの？」

「そうだな、二時間半ぐらいかかるかな」

「だったら十時に出るとして、向こうへ着くのが十二時半か一時でしょ。それから二時間見物するとして三時。うちへ帰ってくるのが五時か六時ね。それがいいわ。十時に出なさいよ」

「うん、それでは十時ごろにするか」

「それがいいわ。じゃア、それにきめた」

玉枝はホッとしたような顔をして、流行歌を口ずさんでいます。

おやおや、これはおかしいな……。私は何となく引つかかるものを感じました。いつも時間など気にしたことのない玉枝が、私の出発の時間、帰宅の時間など、念入りにとりきめて安心した様子は、私を出した留守に、私がいては都合が悪い誰かが来る……ということではないでしょうか。

郁子や矢沢が来るのでしたら、私が外出しようとしまいと問題ではありませんし、むしろ私がいた方が、いろいろ用事もいっつけられて便利なのですから、わざわざ私を外に出

すという手はないでしょう。清水さん……はいつも行きつけの場所で情事を重ねているのですから、いくらなんでも昼日なか、この家へ逢引きにくるとは考えられません。とすると、きょう店へ来ていた加納敏夫……。あの十九才の少年がやってくるのではないでしようか？

か、どうかわかりませんが、これは、もう一度、あした私が出て行くまでの玉枝の態度を念入りに観察して、様子をうかがう必要がある……と、私は内心、明日の段取りをあれこれと思索したのでした。

翌朝——。果して玉枝の態度が、いつもと違います。十時に私が出て行くのですから、そのころは玉枝はまだ床の中で寝そべっている時間です。ところが、きょうはまた、私と一緒に起床して、顔も洗って……という具合に、すべて行動がひとけた、早いのです。

化粧して、着物を着かえて、などの時間も折りこんで、もし誰かがくるとしたら、これは十一時から正午あたり——と考えながら私は家を出ました。

地下鉄の駅まで行って、さて、どうしようか？ 私は迷いました。誰が来ようと阻止できる力は私になし、いずれにしても玉枝の気随



気ままな思ひようにしかならないのですから私は一人のんびり桜でも見に行っていた方がいいようなものですが、しかし、来るとしたら誰がくるのか、私の想像どおりの、あの少年か……。やはり一応、知っておくにこしたことはありません。まず十一時から正午までの一時間ほどの辛抱——と私はみて、思いきって張込みを試みることにしたのです。

約一時間、駅附近の小道を、ぶらぶらと散歩して、私はまた家の方へ引返しました。家の入口が見える路地に身をかくして、休業の日のバー「タマエ」のドアをあけるビジターを私は待ったのです。

十一時三十分——。若い男が「タマエ」の入口の前へ来て立ちどまりました。ドアをあけて隙間から中を覗いているようでしたが、またその場をはなれて一、二歩、道の方に戻って何やら思案している模様です。家の中に入るのを躊躇している様子がよくわかりますが、同時にその訪問者が誰であったかはっきりとわかりました。予想したとおりの十九才の少年、加納敏夫だったのです。

彼は再び意を決したようにドアの許に引返して、こんどは思いきり強く押してドアを開き、中へ姿を消しました。

やはりあの男だったのか。昨夜、店でそつと玉枝から誘われて、きょうの訪問を約束したのでしよう。

「こんにちは……」

「あら、いらっしやい。よく来たわね」

「……」

「待ってたのよ。誰もいないから、こっちへおあがんなさいな」

「はあ……」

男は口がこわばって、ものも言えず、身も震える思いで立ちすくんでいるにちがいない。

「さあ、おあがんなさいよ。約束をまもってよく来てくれたのネ。あたし一人で、ほかにだあれもないから、遠慮はいらなくてよ」

玉枝は店へおりてきて、彼の手をそっと握り、クスツと笑って、彼が入ってきたドアの鍵をカチリとかけてしまいます。二人きりの密室になってしまって、彼はますます身が固くなり、動くこともできません。

「ほほほほ、純情なのね、加納さんは」

玉枝は挑発するように敏夫のそばに寄りそって、からだをびったりと彼のからだに密着させます。そして両手を彼の首へからませてぎゅっと抱きついて、にっこりほほ笑んで、

赤い唇を彼の口許のすぐそばまで突きだしてうっとり目をつぶります。

ここにいたって若き少年の熱情は完全に爆発して、首にからんだ玉枝の両手の下から玉枝のからだをしっかりと抱きしめると同時に、思いあてがれた玉枝の唇に、火の如く燃えた自分の唇を合わせる……ことでしよう。

これは私の想像ですが、その手順や動作に多少の差こそあれ、こういう経過をたどるとは、万に一つ、間違いはありません。

私はこのまま家へ引返してやろうかとも思いましたが、「不義者見つけた。そこ動くな」という思いは、さらさらありませんし、三人三様の気まずい思いが残るだけで、その後はお互いが、いがみあって暮す結果になるだけです。そういう方法はとりたくありません。私の知らないことにして、姿をあらわさない方が上策。ただ訪れる男が誰であるか知りたかっただけのこと……と思ひ直して、私はその場を立ち去りました。

しかし、これからのこのこと長瀬くんたりまで行くのもおっくうになって、どうもその気になれません。いっそ、郁子の家へ遊びに行ってみようか……。かねてから行きたい、行きたいと思っていた私です。行ってみて郁



子が留守だったらそのまま他へまわるまで、とにかく行くだけ行ってみよう……と私は国電で五反田へ向かったのです。

「あんた、あたしが好きなの？」

「ええ、好きです」

「どんなところが好きなの？」

「どんなところ……って。何もかも」

「この前くれたレターに、あなたの美しい顔が目の前にちらついて、夜も眠れません……って書いてあったわネ」

「……」

「あたし、そんな美人かしら……」

「美しい……。とても……」

「夢の中であたしをしっかり抱きしめているのです……なんて書いてあったじゃないの」

「ごめんなさい……」

「あら、あやまらなくてもいいのよ。だけど、夢の中だけじゃつまらないでしょ」

「……」

「今は夢じゃなくてよ。あんたとあたしと二人っきり。すぐそばにあたしがいるのよ」

「……」

「ほほほほ、そんなに固くならなくてもいいのよ。あんたがじっと坐ってるんだっから……そうねえ、あたしの方からいこうかしら」

ら」

玉枝は立ちあがって、敏夫の前に寄り添い、こちこちに固くなって坐っている膝の上に、横からゆったりと腰をのせて、両手を彼の首にからませて抱きつきます。

「ごめん遊ばせ……。ほほほほ、可愛い坊やちゃん、あたしを抱っこして……」

敏夫はもう無我夢中になってしまします。

「ああ、ママさん、僕は……僕は……」

嵐のような勢いで玉枝にしがみつき、再びはげしい接吻をかわすのでした。

五反田までの電車の中で、そんな情景を想像しながら私はじっと目を閉じ、私の心の動きを見つめていました。

普通の男だったら、まず何をおいても「嫉妬」と「怒り」です。ところが私はどうでしょう。そのどちらも遠い彼方の感情で、何か私自身が内緒遊びにふけているかのような秘密の喜悦感で一ぱいになるのです。だからこそ、清水さんが玉枝のパトロンになっても「しかたがありません」と玉枝に屈服できる私なのでしょう。

郁子の家は去年、母親の葬式の時一度、

行ったきりでしたが、一階と二階別世帯の所謂文化住宅で、六畳と四畳半二間きりという安手の棟割ハウスですが、今は矢沢と郁子と二人だけのハニーホームです。

うまい具合に郁子は家にいてくれました。それも、すでに正午すぎという時間なのに、蒲団の中にだらしなく寝そべったままの郁子でした。

「よかった、郁ちゃんがいてくれて……。急に思いついて来たんだ」

「なにか用事が出来たの？」

「いやいや、用事なんてなんにもないんだ。

ただ、一ぺん行こう行こうと思っていたんだね。……きょうは矢沢君は？」

「出勤日。あたしひとりで悠々と昼寝でもしようと思つてるところなのに……」

「それは失礼しました。そのかわり、郁ちゃん、そのまま寝てたらいいいんだ。来たついでに用事は、みんな僕がしてやるから……」

「マスターがここへ来たこと、姉ちゃん、知ってるの？」

「それがね、内緒で来たんだ。お花見に行くって出たんでね。頼むから姉さんには内緒にしててな」



郁子は私の顔を、ちらりと流し見して、ふふんと、さげすむように笑いました。

「どうか内緒にして下さい……って、もつと丁寧におじぎして頼まなきゃダメ」

「はいはい……。これはこれは若奥様、どうか姉さんには内緒にして下さいますよう、お頼み申し上げますでございます」

私は蒲団の中で腹匍いになってタバコを吸っている郁子のかたわらにかしこまって、ペタリと頭を畳にすりつけて最敬礼のおじぎをしました。

「よし。そんなら内緒にしといてやるわ」

「そのかわり、なんでも僕にいいつけてくれよ。まず何をいたしましょうか、郁子さま」

久しぶりに郁子のご身边に侍ることのできた喜びで、わくわくと胸をはずませて私は郁子の命令を待ちました。

それにしてもどうしたことでしょう。玉枝が家へきて以来、私の「女神」の座には玉枝が即位した。だから神御一人は郁子でなく、玉枝なのだ……と、なんべんとなく自分にいきかし、自分でもその気になろうと努力したのですが、かつて私が襖をへだてて矢沢と同衾している郁子を礼拝したときのような恍惚感が、どうしても湧かないのです。

玉枝も郁子も、私にとってどちらも女神としましたら、郁子さまは最高位の天照大神として礼拝できるのに、玉枝の方は、せいぜい天宇受売命ほどの感興しか起きないのです。これは郁子と玉枝と、どちらが優れているとか劣っているとかの問題ではなく、致命的な理由は、玉枝は私の妻であり、お互いに肉体的関係があることによるのでしょう。

そこへゆくと郁子は高嶺の花であり、雲の上のお方です。理智も教養もない郁子のことですから、喫茶店時代に私が強引に口説いていれば、十中八、九は応じたであろう郁子ですが、自分の女にするより自分の女神にした欲求の方に惹かれて、郁子の足から下以外は指一つふれず崇め奉ってきたおかげで、今にいたっても郁子は私の手のとどかない高い玉座におわしきしているわけです。寝そべっている郁子の横で、両手を畳について平伏しながら、ぞくぞくとわきあがる感激のしびれは「ああ、なぜ私は玉枝と結婚して、郁子を遠くへ放してしまったのか」と後悔を感じさせるようなしびれでした。

「さあ、何からしようかな……。洗濯かい、お掃除かい？」

「そうネ、それよりおなががすいてきちゃっ

たから、ご飯焚いてよ」

「よしきた」

私は、すぐ次の間の台所へ急いで、お米や炊飯器の置場所をきき、さっさと炊事にとりかかりました。

「おかずは何するの？ 何かあるかい？」

「その冷蔵庫、のぞいてよ。何かある？」

「おいきた。ええと、タラコが一本と、あじの干物、それにお香々だな」

「マスター、あんたも食べるんでしょう？」

「僕かい、僕はどっちでもいいんだ。もっとも郁ちゃんの食べ残しがあつたら、お余りを頂戴してもいいけどね」

「マスター、市場へ行って、なんかお惣菜買ってきてくれない、見つくろって。なんでもいいから……」

「オーケー。ところで、その市場はどこにあるの？」

「家を出て左の方へ行くと通りへ出るから、そこをまた左へ一〇〇メートルほど行くと右側にあるわ。そこでなんでもいいから買ってきて」

「わかった。じゃあ、ひと走り行って買ってくるよ。ついでに晩の分もだが、矢沢君はきよう、どうなってるの？」



「六時ごろ、帰ってくるわ」

「よし。晩の二人の分も、ついでに買ってくるよ」

私は大急ぎで市場へ走って、インスタントで食べられるお惣菜を三、四種類、買ってきました。郁子は起きて、ネグリジェのまま顔を洗っていました。

「おや、起きたのかい。寝てていいんだよ」

「いいのよ、もう起きちゃったから……」

郁子が顔を洗ってお化粧している間に、ご飯ができました。私は茶碗や小皿をお膳の上に並べて、郁子が坐るのを待ちました。

「ネグリジェだけじゃ、寒いだろう。何か上に、はあったら……」

「そこにナイトケープがかかってるでしょ」

ピンク地に青い水玉模様の派出なシルキーガウンがハンガーにかかっています。

「あ、なるほど。……ハイ」

私はガウンを持って郁子のうしろへまわり背中へ着せかけました。郁子はうしろへ手を伸ばして両手を袖につっこみ、ぐっと腕を返してガウンをはおります。

「これがベルトだね。結んであげよう」

こんどは前へまわって跪き、腰紐のベルトを花結びに結んでやりました。郁子は無表情

に立ったまま、からだをまかせていましたが結び目の皺を、いつまでも念入りに直している私の手を腰でおしのけて、お膳の前の座布団に、どしんと坐ります。

「若鶏の蒸し焼ネ。おいしそうだね」

「切った方がいいだろうが、めんどくさいから、そのままだ。足のところを手で持って、かぶりついて食べるんだな」

「あんたのは？」

「僕はいいよ。もう一つ買ってきたけど、それは矢沢君の分だ。冷蔵庫の中にいれてあるから、晩飯に二人で食べてくれよ」

「あんた、食べないの？」

「食べるよ。食べるけど、まずお給仕、お給仕……」

私は郁子の茶碗にご飯をいれて郁子の前に差出します。ちょっと、けげんな顔をしながらも郁子は私に醬油をつがせたり、ご飯のお代りをさせたりして食事を終えました。

「もういいの？」

「ああ、おなか一ぱい。もういいわ」

「お粗末さまでした。さあ、それでは僕もいただきますか……」

「なにサ、あんた。これから食べるの？」

「郁ちゃんのお余りがあったら、いただくっ

て、さっき言っただろ。お茶碗は、このお皿で代用だ。若鶏だって、ホラ、こんなに残ってるじゃないか」

郁子が肉のところを食べたあと、骨のまわりにすじ肉が、まだだいぶ残っています。それに、あじの干物の尻尾の部分、ぼろぼろにほぐれたタラコの残り。そんなおかずをかき集めて食べるご飯の味は、神様に献上した昆布のおさがりや靈水をいただく信心家の気分と共通した、えもいわれぬ妙な味……と言いたいところです。

「変わってるわね、マスターは……。ケチ」

あきれたように私を横目で見下ろす郁子に私のために用意された山海の珍味を食べるより、女神のお召上りになった残りカスをいただく方が、どのくらいおいしいか、という私の心情を、よっぽど、あからさまに告白しようかと口の先まで出かかったのですが、まあまあと我慢しました。そのかわり「あははははは、この方が美味いんだよ」という冗談程度にとめておいたのです。

「さあ、郁ちゃんは、ゆっくり新聞でも読んでおくれ。僕はこれから郁ちゃんの命令で用事が一ぱいだ。まず、何からいたしましう？」



郁子からみても、夫の矢沢などくらべて私が「いかにも変わった男」であることには間違いありませんが、しかし喫茶店時代から私にいろいろ用事をさせていた習慣からも、こういう私の奇異な行為に対して、多分に免疫性がついていることも確かです。それに節度や、たしなみのない彼女のことですから、私の誘導にあまり抵抗もなく入ってくれるので、私にとっては、幸甚この上もないわけです。

「まず、お便所の掃除をしようかな。洗滌剤を買ってくればよかったけど、郁ちゃんところにあるかしら？」

「うん、トイレの中に置いてあるわ。あんまり使ったことないんだけど……」

「それはありがたい」

私はトイレの戸をあけてみました。小さな住宅なので、大小の区別なく、一か所で用をする形の、前の部分は陶器でかくされ、後の部分が丸い穴になっている和式の便器です。

水洗になっていまして、穴からのぞいてみますと、ひたひたに満ちた液体の中に、黒い固形物や白い紙が、ぬっとりと浮かんでいるのが見えます。

私はその暗い穴の中を、じっとのぞきこん

で、その形や状態を長い間、見つめていたのです。

「何してるのよ」

タイルの床に手について中を見ている私のすぐうしろで、郁子の声がしました。私は、あわてて手をあげました。

「あ、あるわ。それよ、洗滌剤……。長いこと使ってないので、効くかしら？」

「ああ大丈夫、大丈夫。この程度だったら、たいして効かない洗剤でも、すぐ落ちるんだから、これで結構」

私は破れた古雑巾を持ってきて、洗剤を布にしみこませました。前の方の白い陶器の部分も、長い間そのままとみえて、黄色いカスのような薄い汚れが一めんについています。

私は、たんねんにゴシゴシと雑巾でこすり落としてゆきました。黄色い汚れは二日や三日のものではありませんので、なかなか落ちませんでしたが、力をいれてなんべんもこすっているうちに、少しずつは薄れてゆきます。

遂にそれはピカピカ光る真白い陶器になってしまいました。私はバケツの水をかけて洗い流し、次いで周囲のタイルの床も丁寧に雑巾がけして、郁子さまのお便所から退出したのです。

「もう、お掃除すんだの？」

「はい、すんだよ」

「待ってたのよ、入っていい？」

「ああ、そうか。それは、お待ち遠さまでした。どうぞ、どうぞ」

郁子は急いで綺麗に洗ったばかりのトイレに入りました。

私はそっとあたりを見回して……。見回してといっても私と郁子と二人きりの家の中ですから、もちろん誰も見ているわけはありません。私はトイレの前のせまい床の上に土下座して、うすい板戸一枚をへだてた一メートルもはなれぬ、おそば近くに、うやうやしく両手をつき、御ほとばしる玉音をききながら頭を床にすりつけて、いま丁寧に掃除した便器に勢いよく流れる琥珀の泉に深い礼拝を捧げました。そして用のおすみになった気配と同時に、あわてて立ち上り、お手洗いのタオルを持って郁子さまのお出になるのを待ったのです。

「とても綺麗になってるわ。気持ちがいいわね」

「そうだろ。やっぱり十日に一ぺんぐらいは掃除しないとダメだよ。……十日に一ぺんぐらいだったら、これから僕がずっと来てやる



うか」

「……うん」

「そのかわり、姉さんには内緒だよ。なんのために郁ちゃんとこへ行くのかって、変に思われるからね。このごろは、店では、ろくろく話もできないだろ。ところが僕としては、たまには前みたいに郁ちゃんと無駄話もしたいってわけさ。ここの家の暮し……の方は、まあまあいってるのかい？」

「共稼ぎしてるから、なんとかやっていってるけど……」

「共稼ぎといえば、郁ちゃん、いくら貰ってるの？」

「あら、マスター、知らないの？」

「うん店の方は姉さんにまかせているだろ。姉さん、郁ちゃんにいくら渡しているか、実のところ知らないんだ」

「五万円よ。儲かったら、もっとくれるって言ってたけど、それ以上くれたことないわ。先月なんかひどいのよ。成績がわるかったからこれで辛抱してくれて、四万円よ。マスター、そんなのないわよね」

## ☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対ししても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

「ふーん、それは気の毒だったな。もっとも店の成績も悪いことは悪いんだがね。なにしろ場所が悪いからな。あんなところで儲けようってのが、どだい無理なんだ。喫茶店時代と同じくらいだもんな。労多くして益少しいってわけさ。……よし、それじゃ、これは姉さんに内緒だよ。僕が一万円おいてくから、郁ちゃんの小遣いにしておくれ」

私は財布の中に折りたたんでおいた一万円札を出して郁子に献上しました。

「あら、そんなことしていいの？」

「いいよ、いいよ。そのかわり、なんべんも言うようだけど、姉さんには絶対内緒だよ。知れたら僕がおこられるからね」

私が郁子の家を訪問するのを、歓迎しないまでも許可してくれた、ご気嫌のかわらないように、私にとっては、いわばその冥加金の一万円を郁子の前に差し出したのです。

「すまないわねえ。そんなら貰っとくわ」

郁子は、その一万円札をガウンのポケットの中にねじこみました。

それから私は部屋の掃除、小物の洗濯など次々にかたずけて、夕方の五時ごろでしようか、郁子の家を辞したのです。

もうそろそろ帰ってもいいだろう——。玉



校も目的を果たして加納を送りだし、私の帰りを待っている時間です。ふたたび五反田から国電に乗った私は、久しぶりに満ちたりた思いに胸をふくらませて、さて家の方の晩飯のおかずは何を買って帰ろうか、走る電車にころよく遥られながら、目をつぶって考えるのでした。

## 24

店へ帰りついたのが六時ごろでした。玉枝は長襦袢の寝巻姿のままでテレビを見ていました。

そのそばには、蒲団が敷いたままになっています。

「おや、蒲団を敷いたのかい？」

「あら、おかしいかしら？ あたしずっと昼寝しちゃったのよ。ついさっき、起きたところなの。よく寝ちゃったわ」

「それは休養になってよかったな。ところでおなか、すいたろ？」

「うん……すいたわ」

「駅前でカツレツ買ってきたよ。ご飯は、あるかい？」

「さあ……ちょっと見てよ」

「よしきた」

私は階下へおりて、お鉢の中をみますと、私が朝炊いたご飯が二人分、ぎりぎりに残っています。

「どうやら足りると思うんだけどな。それとも、これから炊くかい？」

私は気嫌をとる口調で、階下から二階に声をかけました。

「そうねえ、だったら、それだけでいいじゃないの」

「よし。じゃアそうしよう。ちょっと待っててな。支度するから……」

私は台所で、買ってきたカツレツを切ったり漬け物を出したりして、夕食の用意にとりかかりました。

ややあって、玉枝が二階からおりてきました。

「どうだった？ 桜……。満開だったでしょう？」

「え？ 桜……か」

私は、とたんにどう答えたものか、返事に迷いました。

「ああ、満開だった。とても綺麗で、人もいっぱいだったよ」

とうとう花見に行ったことにしてしまいました。あれだけ念を押してきたのですから、

郁子もまさか玉枝にはあからさまには言いませんまい。

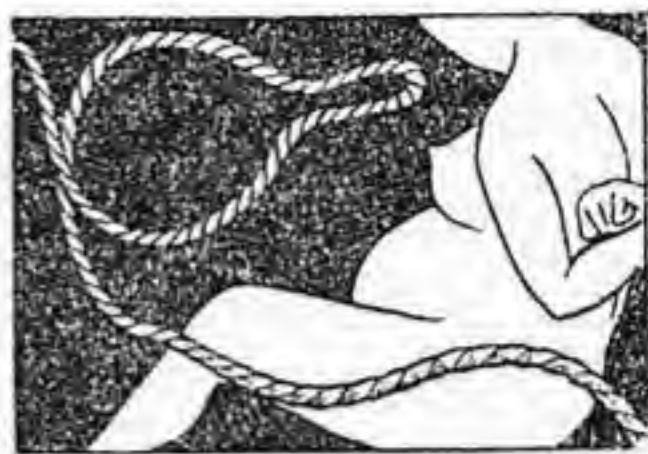
その夜、その敷いたままの蒲団にからだを横たえた私は、出してきた私の枕から一筋、私の髪の毛でない長い髪の毛を、発見しました。

さすがに、じーんと胸にこたえましたが、私は玉枝にわからぬように、その髪の毛をつまみあげて始末してしまいました。

知られたところで、たいしたことはない。あたしがちょっと手管を加えたら、尻尾を巻いて降参してしまう……という安心感が、玉枝の秘匿の神経を、にぶらせているのでしよう。ぬけぬけと、加納敏夫と同衾したその蒲団の中で、かりにも夫である私と同衾しているのです。

ずっと昼寝していたというくせに、さもなくたびれ果てたというように正体もなく眠りこんでいるその玉枝のからだを、私はうしろから、そっとかき抱くのでした。胸乳をかきいで、裳緒をほにおし垂れ、舞い踊って大ぜいの男神たちを喜ばせた天宇受売命を抱くような気持で……。





・ ・ ・ 希 求 願 望 ・ ・ ・

## 妊婦の羞恥責め

高 野 原 美

若々しく健康そうな妊婦の姿には、ミニスカートのムッチリした太腿を出した娘さんの姿とはまた別の意味の美しさを覚える。

奇ク誌上では、金原奈加子の逆吊りという快挙以来、妊婦モデルの姿は見られず淋しかったが、九月号で、十二月出産予定の佐野みさ子さんが名乗りをあげられ、大いに期待しているが、S男性とのプレイのみにとどまらず、辻村氏の「カメラ・ハント」モデルとして、九カ月といわず、七カ月ぐらいからのお腹の変化を見せてもらえないだろうか。

西欧のルネッサンスは人間性の解放を叫び豊かな肉体を讃美し謳歌した。そこから生まれてきたのは肉体文学であり豊満な女体を讃える絵画であり彫刻であった。そうしていま一つ忘れてはならないものは妊婦讃歌である。今日でも多くの孕めるビーナス像が残されているのを見ても、当時の人々がいかに妊婦の裸身を美しいものとして愛していたかが

窺えよう。

このあと宮廷の女達の間で浣腸が流行したということ、豊かな臀部をむき出しにして浣腸してもらっている美しい女性の絵も有名である。もっとも、当時は、現在美術館になっているルーブル宮殿にはトイレがなかったそう、貴族の女達はすべて庭園や街路樹の間で用を足したということであるから、生理的な営みも、女性にとっては窮屈で不便なものであったのだろう。そのため、便意を催しても辛抱する習慣が付き、自然に便秘となり、浣腸が愛用されることになったらしい。

当時の宮廷の貴族女性の書いた手紙が現在も残っているそうだが、それによると「排便ということが如何に楽しく快いものであることか。だから辛抱せずに、便意を催せば何時どこでも自由にやった方がいい」などという意味のことが書かれているそうである。

人間性の解放は、人間の持つ思想、肉体、

その生理的営み等、すべてのことに亘ってベールを取り除き、秘密をなくし、明るみに出すことから始まるのだと思う。

私は、辻村氏の「カメラ・ハント」の愛読者としての感想を別途に書いてみたいと思っているが、今増田みゆき夫人の双胎臨月腹を想起して空想の世界に遊んでいる。氏の得意とされる羞恥責めポーズの極端なものは、胎児を孕んだ膨満腹では難事かもしれない。過去にも、飯田カオルを海老責めにしようとして、アグラの足首にかけた縄を首に回し、ぐっと引き締めようとした時、カオルが苦しがつて叫んだという記事もあったが、膨らんだ腹では普通の場合と違った羞恥責めポーズが考えられねばならないようだ。それだけにまた別の楽しさがあるのだろう。

椅子を使った開股ポーズはよくお目にかかる構図だが、臨月腹の場合には、より前方にセリ出す膨満の曲線が偉大な独特の雄大美をかもし出して、さぞ素敵なことであろう。

木戸夫人の腹を突き出した立ち姿も見事だったが、妊婦の排泄ポーズは今まで撮られていないだけに垂涎ものである。

折角、自ら被虐を求めて名乗りをあげられた貴重な妊婦でもあり、マニアの夢を叶えてもらえそうな得難い機会である。佐野さんの妊娠裸身羞恥責めフォトが、現実のものとなってくれることを心から願う。



カット・小川 茂正



美女緊縛作法

## 八重垣流秘聞

(その二)

風流極道軒

## △お蘭就縛▽

「ねえ、あんたったら、待ってよう！ ねえ待ってたら……」

春にふさわしい、なまめいた声がする。

深川は、隅田川のほとり――。

さっさとさきに歩いていく若者をよびとめているのは、深川きってのお俠姐さん君香である。年の頃二十三、四か、いやひょっとするとこの仇っぽい色気からみて、七か八になっっているかも知れない。

「待ってよ、千さん。落差しおとしざの千次郎さあん

たら！」

どうやら痴話喧嘩でもしたらしく千次郎とよばれる男は、さっさと御舟蔵から、回向院に向かって曲がろうとする。

と、――

「千次郎さん」

柳のかげから現われたのは、人なつっこい四十がらみの男であった。

「おっ、又平、夢売ゆめうりの又平じゃあないか。いっつ、江戸に帰った！」

「ハッハッハッ……昨日、京で今日は江戸、あすは奥州、あさっては九州と、日本国中に夢を売って歩くこの又平のこと、深川にいた

とて不思議じゃあござんすまいよ」

「ちげえねえ。ところでまた何で俺に」

「実は……この夜桜のお蘭が」

と又平は、そばの女を指さしてから、

「大変ですぞ千さん。あんたの親父さんが」

と耳元でなにごとか、真剣にささやく。

きき終わった千次郎、

「知らねえよ、俺は知らねえぜ。八重垣大学なんてきいたこともねえ」

やけっぱちな声であった。

「意地をはるのも、いい加減にしなせえ。今あんたの父親の大学さまが、伊皿子の南蛮屋源左衛門の別宅で、ひどい目におあいになっ



てらっしゃるんですぜ。いくらあんたがぐれなさってるか知らねえが、実のてて親」

千次郎の顔が、くもる。千次郎の母の貞が死んだあと、八重垣大学が後妻として節をもらったことに反発して、勘当され、深川の町火消さ組の親分加島屋兵助のもとで暮らしてきた千次郎である。

「それに、お千賀さんも、いっしょに」

「な、なんだってえ……お千賀がまたどうして！ お千賀は朱房の重蔵の女房に」

「それが、重蔵親分が寝ついっちまってまさあ。お千賀さんもあんたに似て気が強えところがあるから、親分の代わりに、十手を握っていて、ひょんなことになっちまったにちげえねえんで」

「お千賀……」

千次郎がうめく。やっと追いついた君香が「お千賀さんがどうかしたの」

「いや、なんでもねえ。又平、御苦労だった

前号の梗概——八代將軍吉宗の埋蔵した百万兩の謎をめぐって、老中稲葉の配下黒鯨組や黒駒勝蔵が動く。勝蔵一味に捕えられた南町奉行所筆頭与力八重垣大学、妻お節、娘千春、笹川安女夫婦が、女岡っ引きお千賀とともに責められる。

な、礼を言うぜ」

「それで、どうなさるおつもりなんで、千次郎さん。まさか、このまま……」

呼びかける又平を振り向きもせず川の畔を駆けていく。

「待ってったら、待ってよう」

君香が、すそをはし、よるようにして後を追う。すっかりと新芽を出した柳の下で、二人を見送った又平は、

「知らせるだけは知らせとなくちゃあ……」

さあて、お蘭。一仕事、始めるか」

「あいよ、お前さん」

裾をさばいた又平のあとにお蘭がつづく。と、

「夢売又平、神妙にいたせ！」

「御用、御用！」

十人余りの捕手が木場の陰から躍り出る。

「へえ、しゃらくせえ。この又平さまが、手前らみてえな三文野郎にとっつかまってたまるけえってんだ。お蘭、いいな。今夜、例の所で待ってるぜ。あばよ」

又平もお蘭も、こんなことには、しゅっちゅう出くわしているのであらう。さあっと右左に別れると、一目散にかけ抜ける。

「御用、御用」の声だけが、新富座の舞台の

懸声よろしく隅田の川面に流れていった。

「へえっ、ざまあみろってんでい！」

小梅の隠れ家にもどった又平は、何喰わぬ顔でひと風呂あびると、お蘭を待った。

が、夜も、五つ半をすぎてもお蘭は、あらわれない。

「まさか、夜桜お蘭ともあらうものが、どじを踏むわけがあるめえ」

たかをくくって、次の朝まで待ったが、やはりお蘭は姿を見せなかった。

見せぬのも道理、その頃、お蘭は、老中稲葉美濃に直属する、黒鯨左弁の手に捕われていたのである。

老中稲葉美濃からの密命をうけた黒鯨左弁が加太の鑄銭以下六人の手下とともに、八代將軍吉宗の遺した謎の文句を解くために活動を開始してすでに六日。謎をとく糸口さえ見つからず焦っていたおりに、深川は御舟蔵のそばで、十数人の捕手を手玉のようにあしらひ、まんまと逃げていく女を発見。女すりか盗賊か、黒鯨組とは何の関係もない町奉行所の仕事なのだが、その逃げかたの美事さに、つい左弁が、こいつは並みの女ではない。ひっとらえてやろう——という気になったのが



夜桜お蘭にとって不運であつた。一日に二十里は行こうという夢売の又八ならいざ知らず夜桜と異名はとつていてもお蘭は女、伊賀者七人の男たちには到底、及ばない。

谷中にある黒鯨組の隠れ家のひとつ――。

表面は何の変哲もない小料理屋、実は、加太の鑄銭が七兵衛という名でいとなんでいる『螢火』の離れ座敷の欄間に、蜘蛛の巣にかつた蝶のように吊りさげられていた。

「おい、女、名は何という」

女には滅法手の早い名張の春宮が、大きな盃を口にしながらいった。

「いったい町奉行所の手のものでもないあんたたちが、どうしてこんな！」

「つべこべぬかすな。こっちは、ちつとばかり、ご機嫌が斜めなんでい！ 問われたことだけ答えりゃあいい」

「いやなこつた！」

お蘭は、男たちを見下ろして、ぐいっ唇をかみしめる。

「フッフッフ……こりゃあ、ちつとは骨がありそうだわい。気晴しにゃあもってこいの阿魔だぜ」

と春宮はいい、

「素っ裸にされる方がよいか、名を白状する

方がいいか。ええ、どっちだい」

こともなげに言い捨てる。

「す、す、つばだかだつて……恥知らず！ この夜桜のお蘭姐さんを、すっぱだかにするといふのかい！」

と、男たちが、どつと笑つた。

「そうかい。ああ、そうかい。夜桜のお蘭姐さんというのかい」

「さてよ。お蘭といえ、今、江戸の町で有名な義賊……夢売又平の……。そうかい、お前さん、あの又平の情婦かい。こりゃあ、面白えことになったぜ」

「もしかすると、組頭。この女……」

と言つたのは、並外れて高い鼻の持主である甲南の近衛であつた。お蘭の顔を、じろつと睨みながら、静かに口ずさんだ。

「男女ありて一双より九双に至る。男六双にして起ち女九双にしてすすり泣く……」

お蘭の顔が、動く。いくらか大きめの口のはしが、ぴく、ぴくとひきつり、十四の視線を受けとめかねて、瞼が、閉ざされる。

「や、やっ！ 甲南！ でかした！」

叫んだのは左弁。盃をおくとたち上り、お蘭の髪の毛をつかむと、無理矢理、顔を仰向させる。

「夜桜お蘭。かくしても駄目だ！ 言え！

この文句は、何だ！ 一体、何を意味する」

六日にわたる探索で糸口さえつかめなかつた謎が、いま偶然に解けようとしている。

七人の男たちがいっせいにたち上ると、お蘭の周囲にむらがつた。

「強情をはると、とんだ目にあうぜ」

「黒鯨流女責めの数々、もろにその躰にうけることになろうぞ、お蘭！」

お蘭は狼狽した。あの謎の言葉は、夢売の又平から、聞いている。それを、こんな所で問いつめられようとは――。余程、大切なことなのかわ。とすると……どうしても白状するわけにはいかない。又さん、安心おしよ。妾、どんなことがあつても白状なんかしないから。――お蘭は、自分に言いきかすと、ぐつと朱い唇を噛みしめた。

「フッフッフ……。お蘭、じゃあ、まず、

素っ裸になつてもらおうかの」

左弁の目配せで、春宮が高麗打ちの帯締めをすらりとぬきとる。つづいて、ぽかし染めの帯揚げに手をかけたのは、鑄銭であつた。同時に青山の郡司が、熊笹を染めあげた竜文帯に手をかける。くるくると廻つたのはお蘭の躰であつた。きつちりと二廻り半して阿山



の参議の前でとまる。

「よいしょ！」

と参議が、錦紗の伊達巻きをとき、くるくると廻す。

「今度は、俺だ！」

石部の班田が、花結びの腰紐をすらりと抜きとる。

あらい呼吸をしながらも、しっかりと臉を閉ざし、なされるままになっているお蘭であった。が、班田が、お蘭を欄間から吊っている縄をおろし、着物をぬがせるために、両手首のいましめを解いた刹那――。

お蘭の躰が、蝴蝶のように、宙に舞った。夜桜と仇名されるお蘭、むざむざとすっぱだかにされるはずはなからう。ものの五尺もとびあがると、甲南の近衛の胸元を蹴りつけ、その反動を利用して天井の一隅にとりつき、屋根裏へと逃げようとしたのである。

腰紐類をぬきとられた着物が、大きな輪を左弁たちの頭上で描いたとき、

「フッフッフ……俺たちを甘く見るなっことよ」

参議と鑄銭の手が、その裾をつかんだ。

「ア、アアッ！」

という悲鳴と、四君子模様の着物が、肩か

ら脱けるのと、お蘭が鈍い音をたてて、畳に落下するのが殆ど同時であった。

わらわらと二、三人がむらがっていく。

かぐわしい匂いが漂う。その名のように蘭の花を偲ばせる香りであった。

「な、なにを、なにをするのよお！」

春宮たちが、お蘭の躰から離れたときにはもう、お蘭の輝く上半身は、裸にむかれ、黒鯨流中陰縦十文字縛りに、がっちり縛りあげられていた。

男たちを見上げながら、後退りするお蘭の身をまもるのは、蘭の花を染め抜いた湯文字いちまいだけであった。

左弁が、ニタツと笑って近寄っていく。

「お蘭、どんな責めかたをすれば、白状してくれるかのう。……黒鯨流捕縄術には、陰に大中小あり、陽に大中小あり、縦・横・斜・交――それぞれ男女ありと、ある。さあ、どの縄捌きを所望する。どうだ、お蘭」

蜘蛛が、捕えた蝶を前に、八本の足を踏みならし、もてあそぶのにも似た声音である。

## △屈服するお蘭▽

お蘭は、みじめであった。

左手は腋の下をとって背後に、右手は右肩の上をとって背後に回され、その両手首を黒い縄でがっちり縛られた上、欄間から吊るされて中腰。もう僅かに腰のあたりと、むっちりした太腿のあたりをおおっているに過ぎない湯文字……むき出しの両膝が、畳の上で震えている。

「中陰女横六縛り……」

春宮がいい、参議と二人すすみでると左右からお蘭により添うようにして、むっちりとした乳房の上下に三本ずつ縄をかけていく。しめつけられた乳房は、いよいよ、はりきりかすかに静脈をうかせて男たちの眼の前につき出される。赤い菜実なみの実のような乳首がふたつ、（吸って頂戴ましな）と云わんばかりに、春の夕陽のなかで燦めく。

「白状しなよ、お蘭！」

春宮が、その乳首に、細い三味線の糸を、くるっくるつと二巻きしていう。

「云わねえと、しめあげるぜ」

「待て春宮。この女、ひと思いに責めあげる方が、よさそうだ。一挙に三陰責めと、いくか……」

左弁、自らがたち上ると、お蘭の鼻をふさぎ、喘きだした唇のなかから、ひょいと、舌



をつまみだし、割り箸をつかつて上下から押え、くるくると両端をつないだ。

「猿ぐつわじゃなく割箸ぐつわだ。お蘭、いつまで、その、フウ、フウという喘ぎがつづくかな」

白い歯並みの間から、割箸がはみ出し、そのまんなかから舌端がのぞいている。

「白状したくなったら、いいな。割箸ぐつわだ。声ぐらい出るだろう。班田、郡司」

指示されるより早く二人は、お蘭の身を守る最後の布きれを、さあっととり払った。

「ア、アウアウ……フニャ、ヤ、ヤメテ」

言葉にならない奇妙な声があがる。

「こいつは、すげえや。この女、情がこわ、さうですぜ、組頭」

郡司が、両膝を必死で合わせているもののもうかくしようもないお蘭の純白の内股辺りを一見するや、感嘆したように言う。

「なるほど、こういうのは情にも強いかな。さあ、お蘭。覚悟しな」

大の男が四人もかかれば、女を思いどおりにするのは、簡単なことである。

ぐいっ、ぐいっ——と引き裂かれて、両膝が畳の上で二尺近く離れてしまう。

額から、汗をながし、全身で、身悶えすれ

ばするほど、男たちは、奇声をあげ、淫らな笑いをとばす。

「てっとり早く、これにするか」

『螢火』の主人、六兵衛こと加太の鑄銭が持ち出してきたのは、大きな人蔘が三本に大根が二本。それに、何か黄色いねばねばした液の入っているすり鉢がひとつ。

双の太腿の肉に喰い込むほど強烈な縄をかけられているお蘭の内腿が、鑄銭の触手に慄え始める。

「フニャ……グウ……ヤ、ヤメ……テ」

お蘭の口から奇声があがる。

春宮が、同時に、右乳首へ廻した糸をひきしぼる。

「ウ、ウ、ウワッ……ウ、ウ……」

激しくとびあがろうとするお蘭であった。

その左乳首にも三味線の糸が巻きつき、ゆっくりと絞めあげる。お蘭はもう狂ったように左右に頭を振り、胸をふって、恥も外聞もなくなったように苦痛にのたうつ。

次に、近衛が、

「ほれ、春宮」

と手渡したのは、男の腕くらいもある人蔘であった。ニヤッと笑った鑄銭が、それをお蘭の目の前で、二度三度、振って見せると

すり鉢のなかの黄色い液をたっぷり塗りとけ始める。

「キイッ！ キヤッ！ ウウッ！」

それがどんな責め道具に化けるのかを悟ったお蘭の躰が、弓のように反り、肉づきのいい体を必死で可能な限り前後左右に振り、迫りくる人蔘を避けようとしたが、到底駄目であった。

苦痛にひきつるお蘭の顔をのぞき込みながら、鑄銭は次に大根を一本とりあげる。忽ちそれも責め具に変わる。

狂乱とは、お蘭の今の状態をさすのである。もう男たちに罵られる生きている肉塊にすぎないように、のたうち、玉の汗をながし全身を苦しげにけいれんさせる、お蘭。

俗にいう鉄砲責めの型に、手を背後で組まれ、小陰——黒鍬流のいう女の口、中陰——双の乳房、その上、大陰——女の急所、をこうも責められては、お蘭でなくとも懊悩の限りにのたうつに違いなかった。

小半刻もたった時であった。お蘭の口から

「ゆ、ゆるし……て」

という声に似た呻きが洩れる。

左弁がニヤッと笑う。

割箸ぐつわの小陰責めを解かれた舌端は、



麻痺したように白く乾いていた。その舌をいたわるような、ゆっくりとした口調で、

「八、八重垣流秘伝口決……」

と、呻いたお蘭は、がっくりと、左弁の胸元に一糸まとわぬ裸身を投げ込み、激しく泣きじゃくり始めたのである。

「夜桜のお蘭とよばれていても、やはり女よのう。可愛がってとらせるぞ。鑄銭、しばらくあずけておこう。逃がすでないぞ」

左弁は、そういいのこすと黒鯨組の残りの五人を率いて、『螢火』からとび出していった。八重垣流といえば、八重垣大学——南町奉行所の筆頭与力。その捕縄術の秘伝に、あの謎の文句があるうとは！

「迂闊だったな、左弁」

左弁は、自分に言いしかせると老中稲葉美濃守の邸に急ぐのだった。

春の夜のとばりが、江戸の町々に、とっぷりと降り、どこかで猫が泣いていた。

## △女八双とは▽

その頃——

江戸の町は、南外れ、伊皿子にある南蛮屋源左衛門の別邸では、これまた地獄のような

光景がくりひろげられていた。

麻醉薬のききめがきれて、我に返った八重垣大学は、目の前、二尺の所に、苦しげにゆれている女体をみた。

（節……お節……まさか！）

クワツと見開いた大学は、それがまぎれない妻の節であることに気づくと、叫ぼうとしたが声がでない。たち上ろうとしたが、起ち上れない。それも道理、猿ぐつわの上、がんじがらめに縛りあげられていたのである。

（おのれっ！）と憤怒で真赤になる。

「大学さん。お目ざめかね」

五十がらみの雲つくような大男であった。

「南蛮屋源左衛門、以後お見知りおき頂きますよう」

といってから、傍らの黒駒勝蔵以下を見廻して、

「ねえ、大学さん。どうしても吐いて貰いませんと、私、大変困るのですよ。男六双に、して起つとは何のことです……とおききしてもその猿ぐつわじゃ答えもできませんまい。そこで一番、あんたの目の前で、この美人の奥さん……フッフッ……どうやら、後添いの二番目の奥さんと思えますが、ともかくこの奥さまを責める。それに、隣では、この奥さん

の娘、あの千春さんとやらを、許婚の望月秀之進殿の前で女にしてさしあげる。どこまであなたが強情をはりとおせるか、面白いことになりましような」

「フッフッ……それに、南蛮屋さん。あの隠れ家からつれてきた同心の笹川妥女に、三代、女岡っ引きもいますぜ。どうです、ここへ連れてきちゃあ。妥女は、この大学の配下云わば子分でさあ。その子分の前で、上役に当たる大学の妻がスッ裸で責められるのも乙なものですぜ」

悪どさにかけては人一倍の勝蔵。そういいながらも、後手、中腰、六尺棒で両膝を開かされて、小用をたすときの恰好で、目にいっぱい涙をためているお節の、肌襦袢からとび出してゐる乳房を、ひょいと指でつつく。

（死にたい……）

お節は思う。夫の目の前で、こんな惨めな姿をさらすことは到底、武士の妻の耐えうる所ではなかった。が、ぽい、と手拭いをまるめて口に入れられ、その上を細引きで、頬がゆがむほどひきしめられている以上、呻き声ひとつだせない。

「黒駒の。そいつは面白え趣向だが、まあもう少したってにしましょう。さあ、この奥さん



まのお身体から、身につけているものを全部はぎとってさし上げなさい」

南蛮屋が、大きな鉄をとり出すと、ヨツカマリの辰五郎に手渡した。

「大学さん。私はあんたの顔を見ているよ。白状する気になりゃあ、すぐわかります」

南蛮屋は、どっかりと和蘭渡りの椅子に腰をおろすと、血のように赤い酒をギヤマンの盃につぎ、ちびちびと勝蔵と二人でのみはじめる。

辰五郎が、お節にちかよる。

「奥さん、強情な旦那を持つと、女房は損をするねえ……」

さらし木綿の肌襦袢の袖をジャキジャキと切りさき、肩をすばめて抗うのもかまわずに縄目からひきずりだす。三十七才とは思われぬ美しい肌であった。

肌の色を白いというのはあてはまらない。

肌色とか、肉色、桜色または薄牡丹色と形容するのが、女の肌を表現する最も適切な一般的表現であろう。お節のそれは、そのどれにも属さず、強いて云えば、鬱金色、淡い鬱金色に輝いているのである。

「いい肌色をしてるじゃあねえか、奥様」

ミズチヨボの狐六が、乳房の下をぴちゃぴ

ちゃとたたきながらいう。

「さあて……と、下のほうも、脱がせましょうか。しかしなあ、この恰好で素っ裸にひんむかれたら……。旦那さんよう、白状してやった方が……」

大学の顔が、苦痛にゆがむ。

（しめた！）と云う思いが南蛮屋の唇の端にうかんだ。案外、この分だと、簡単に、降参するかも知れぬ。

「大学さん、ちょっと」

辰五郎が湯文字の紐に手をかけたのを制した南蛮屋は、大学をひたてると、部屋の隅の格子窓を開いた。

「よく見なせえ、娘さんの姿を！」

格子に顔をすりつけられた大学は、そこに「大」の字に床に縛りつけられている千春に緊縛されたままで取りすがっている望月秀之進の姿をみた。

「あの娘さんも、奥さんのあとで素っ裸にむきあげる……よいですね。大学さん」

なさぬ仲——千春は、お節の前夫の娘であった。しかし、目の中に入れても痛くないほど可愛がっている娘である。その娘が、嫁入りを二カ月後にひかえて危難にあい、こともあろうに婿になる男の前で、見知らぬ男たち

に存分にもてあそばれる……大学の目に一層深い狼狽の色が走った。

「ハッハッハッハ……黒駒の。どうやら私たちの勝ちらしい。が、ともかく、あの娘さんを連れてきなさい」

高笑いをする南蛮屋——。

そのひびきのなかで、大学は、顔を振りたてて訴えた。その目は、はっきりと降参の色をうかべていた。

熊七に、猿ぐつわをとられた大学は、

「頼む、許してくれ。何、何でもいう。だから、娘と妻は、即刻、いますぐ許してやってくれい……」

「よかろうぜ。八重垣の旦那。一部始終をうちあければ、すぐに二人は助けてやるぜ」

勝蔵が、椅子から身をのり出して云う。

「女五双までは、あんたの弟子の笹川安女からさきとった。女六双とは？……おい、大学どんな意味だ！」

赤鯉丹波の片目が光る。

「水、水を一杯、くれい！」

馬吉のさし出す水を、ひと息にのんだ大学は、妻の惨めな姿をかばうようにしながら

「女六双とは、高手小手首縄に……」

「首縄のうえに、どこだ、どこを縛る！」



「股間……股間に縄を掛ける」

「股間か……ふうむ。男は！」

「男も同じ……」

顔見合わせる南蛮屋たち。

「すると、男六双にして起つとは……ウワッ

ハッハッ……そうか、そうだったのか」

南蛮屋、大声で笑うと、

「すると大学さん。男七双とは、どこを縛る

ね。……ほれほれ、早くしねえと、辰五郎が

お前さんの女房の湯文字を解きたがって、むずむずしてますぜ」

「高手小手、首縄・股間、その上に、肛門を

……肛門に責め縄を掛ける」

「ヘエッ……。そいつは、考えつかなかった

ぜ。女七双も同じかい、こいつは色気だいなしだな」

「違う！ 女は、舌を責める！」

「ホホッ……八重垣流ってやつは、女をどうやら大切に扱うらしいな。次！ 男八双はどうする！」

「その上に舌を責める」

「女八双とは！」

片目の丹波の問いに、ピーンとはりつめた空気が部屋中にみなぎる。

「大学、どこだ！ どこを責める！」

「ま、まってくれ！ ひといき入れたい」

大学がそう云ったのが、悪かった。

「そうかい。じゃあ、この奥さんを」

「待て！ 云う。女八双とは、七双から舌をのぞいて六双、その上に、両乳房を責めることだ」

と大学が叫ぶと同時に、お節の脇に迫った辰五郎は、とうとう、お節の身についた最後の一枚を、はぎとってしまった。

「卑、卑怯！」

ふり返りざま、大学が、辰五郎に体当たりを喰わせる。辰五郎が横転する。

と――、

その時である。

「だ、だんな！ た、たいへんです！」

番頭の多助が、走ってくる。その背後から五人の黒装束、一目で伊賀か、甲賀者と判るいでたちの男たち、一団となって乱入してくると、馬吉たちに当身を次々と喰わせ大学とお節をかつぎあげると、まるでつむじ風のように消えてゆく。

「追え！ 追え！ 追うんだ！」

洋燈らんぶの消えた部屋のなかで、南蛮屋の声が高くあがる。

「逃がすんじゃないぞ」

これは、勝蔵の絶叫であった。が、――

老中直属の黒鯢左弁以下七名の伊賀者。いくら狐六の足をもつてしても追いつけるものではなく、再び洋燈のついた南蛮屋の別宅からは、八重垣大学夫妻、それに笹川安女夫婦が、掠られていたのであった。

「くそったれ！」

地団駄踏む南蛮屋の前に、後を追っていた丹波と馬吉、それに狐六が帰ってきた。

「親分。すまねえ！」

あやまりながらも丹波たちは、一組の男女をしょっぴいてきたのであった。

「あいつらとは別組らしいが、裏の林でうろちふろしてやがったもんで……」

「こんな奴！ チェッ！」

勝蔵は、いきな芸者風の女の頬を思いきり平手打ちすると、

「畜生奴！ あの連中は、いったい、何者なんでい！」

赤鯢丹波が、怒った口調で、

「あれは、伊賀者。ひよっとすると、老中稲葉美濃の手のものかも」

「なんだと……すると、黒鯢者か」

「多分！」



丹波は、そういい、二人の男女に、

「お前たち、黒鯨組と何の関係がある！」

馬吉以下の男たちも、肝心の所で、玉に逃げられた憎悪をこめて二人を取りかこむ。

若い男は、落差し千次郎、そして、女はほかならぬ君香であった。

夢売の又平に、知らされた父の危難を、見捨てることができず、やってきた千次郎であったが、逆に思いがけぬ事態から捕われてしまい、（ついてくるんじゃあねえ）と云われながら、君香もあとを追ひ、いっしょに捕われてしまったのである。

「なにか、関わりがあるに違いねえ」

勝蔵が、きっぱりと言うと、

「この二人とお千賀、それに、千春と望月、この五人から、至急、なにごとか、つかみ出さなきゃあなるまいな」

南蛮屋が、真顔でいい、血のような酒を、ぐいぐいぐいとあおった。

一方――

隠れ家『螢火』にもどった黒鯨組も、

「しまった！」

と舌うちをした。戻ってみると、夜桜のお蘭の姿が見えなくなっていたのである。

夢売の又平は一日に二十里を駈ける。お蘭

の行方をさがしあて、黒鯨組の出かけたのを好機と救出したのであった。

「あんた、ほんとに助かったよ。一時はどうなることかと思って……」

「フッフッフ。……お蘭、お前にゃあ、ときどきあんな事のある方が面白えようなものよ。どうでい、あの姿は。よ、素っ裸で、どうか、お好きなようになさいまし……といわんばかりの恰好……」

「いやだよ！ あんた、バカ、バカ、バカ」お蘭は、さすがに顔を真赤に染めて又平にしがみついていた。

## 夫婦拷問

上野寛永寺から北東へ、奥州街道に沿って七、八町、千住のお仕置場も近い金杉の宿。

その宿外れに、こんもりとした森につつまれた一軒の家がある。

附近の人の噂では、日本橋のさる大店の旦那の妾宅だという。

その家に、八人の男が、四つの駕籠を自らかつぎこんだのは、もう四つ半を過ぎる頃であつたらう。夜露に濡れた庭の名もない草花を踏みあらして、建仁寺垣の奥に消えたが、

やがて一人だけ、もときた道を走り去る。

手燭をもって渡り廊下を歩く十人あまりの人影――

夜空には月もなく、野良犬であろうか、物憂く、ながながと吠えていた。

手燭が、突然消える。

が、い、返、し、であらう、吸い込まれるように人影が消えた。

階段をおりると地下倉――。

「八重垣大学だな」

中肉中背の猫頭布が抑揚のない声で云う。

「貴様を探してここ七日、いかい骨を折ったことよ、フッフッフ……」

黒鯨左弁であった。小料理屋『螢火』からお蘭が何ものかに救い出された以上『螢火』に集まるのは危険と、ここ、甲南の近衛の隠れ家へ移動してきたのである。

「なにやつ！ 名乗れ！」

大学は氣力を振るいたたせて叱咤した。

「南町奉行筆頭与力と知っての狼藉か！」

「いかにも」

冷然とした答えが返ってきた。

「八重垣流秘伝男、一、双より、女九、双に、至る捕縛作法を知りたい」

「ウ……う、ぬ、ら、も、またか……」



「聞かせて貰わずばなるまいな、八重垣」

近衛は、すでに、忍び刀を抜いて、笹川安女、三千代、お節、の三人に、その鋭い切尖を向けている。

大学は、七日ぶりで笹川安女の姿をみる。その妻三千代も、ともかくも無事の様子。お節ともども、あり合わせのであろう、男ものの緋の長着をつけている。

「何用あって我が流の秘伝を！」

「云う必要はない！ ただ教えればよい」

大学は、昨夜来の出来事を考える。

（あの南蛮屋一味といい、この正体不明の男たちといい、八重垣流の秘伝には、とてつもない秘密がかくされている……）

しかし、この男たちは、南蛮屋よりもはるかに殺気にみちている！

「教授申そう！」

高弟笹川夫婦や妻の生命には代えられぬ。

「娘、娘の千春のことは存ぜぬか」

一人がすすみでると、冷然として、

「あと三人ばかり捕われておったが、奪い出すことをしなかった。その用がない！」

大学は、千春と望月の身に、これから何がおこるのかを考えて慄然とした。一刻も早く自由の身となり、救出に向かわなければならぬ。

ぬ。

「教えれば解き放ってくれようのう」

「フッフッフ……念には及ばぬ」

猫頭布が、心地よさそうに笑った。

（よし……）ほぞをかためた大学は、男一双から女九双に至る秘伝を語り始めた。

男六双に至ったとき、

「まことかどうか試みてみたい、その男」

左弁の目配せで、班田と郡司が、安女に飛びかかると有無を云わさず、素裸にむきあげ男五双に縛り、六双にかかる。

「あ、あなたあ！」

三千代が悲痛な声をあげたが、猿ぐつわをかまされた安女はただ、激怒に両眼を血走らせるだけであった。

「まっ、こと！ 奇妙じゃ！」

左弁は、杖をもち出すと、六双の効験を、つづいて、高々と笑う。

「女六双も試してみとうなった！ どちらにする。年増か、若い方か、それとも二人いっしょに縛られるか」

「お、おくさま。八重垣さま……」

三千代が忍び刀の下をくぐるようにして、お節に抱きついて行く。

「試す必要はない！」

後手に縛られて胡座したまま大学が叫ぶ。

「フッフッフ……慎重にことを運ぶのが我等のつとめよ。早くせい、どちらだ！」

「わ、わたくしが……」

三千代を抱きかかえながらお節が云うと、

「……わ、わたしが、奥様、妾が……」

と、三千代が震える声でお節を見上げる。

その二人をニヤツと笑っていた春宮が、

「若い方！」

と叫ぶと、三千代の襟に手をかけ、べりべりっと、男ものの長着を破り取り、細紐を抜きとる。まったくゆで玉子をむくような——

という形容にふさわしく、素っ裸にされてしまった三千代は激しくすすりなきながら、春宮と参議の手で、手首から高手小手、首繩、それに、無惨にも、股間に二筋の縄。

「い、いた……痛うございます」

きびしい縄目に、あられもなく腰をゆすり羞恥心も忘れたように叫ぶ。

「フッフッフ」

春宮は、絞り上げた縄目に指を這わせる。しっかりと喉をとじて春宮の肩にあごをのせるようにして、涙のいっばいたまった喉を、またたかせる三千代であった。

安女が、猛烈にたけり狂う。妻が、目の前



で、男たちのなすままになっているのだ。がその妾女もまた素裸であり、しかも、左弁のいうとおり、奇妙な縄目の効力を実証しているのだ。

「あ、あなた！ ゆ、ゆるして下さい」

「ウウッ！ ウ……ム……」

「三、三千代さーん……」

妾女の呻き、お節の叫びのなかで、男七双の秘伝縄が妾女の肛門に……。径一寸に近い縄の結び目である。縄をかけ終わった近衛がいやな顔をして手打水をつかいに出ていく。

つづいて女七双、三千代の舌が、つまみ出され、ぐるぐるとその尖端に三味線の糸がまかれる。

男八双、妾女の猿ぐつわをいったん外し、絶叫するひまも与えず、舌をつまみ出し、強い糸で巻きあげる。

「次は、女八双だな……両乳房か」

参議が、細い黒縄をもち出すと、両乳房の付根をひきしぼる。

「クエッ！……キヤッ！」

三千代の朱唇から絶叫があがる。

「強すぎるぞ、気絶させてはなるまい」

郡司の注意に、黒縄がゆるめられる。

「大学。男九双とは！」

左弁が、激しい口調で訊ねる。

左弁を始め黒鯨組の六人は、もう尋常の心理ではなかった。大学とても同じであった。

地獄……まさしくこれは地獄図絵であり、男の体臭と女の匂いと汗と、ほこりが、いり混った、この世のものとも思われない光景であった。その異様な雰囲気の中

「男九双とは、男の陽を縛り、女九双とは……女の陰を責める……」

呻くようにいい終わった大学は、がっくりと上半身を床に倒した。

「フッフッフ。男六双にして、起つとか、女九双にしてすすりなくとは、八代さまも、とんだ謎をのこされたものよな」

（八代さま……八代さまとは、八代將軍吉宗さまのことか……）

大学は、混乱した頭脳の中（八代さま八代さま……）と繰り返す。八代將軍吉宗様と我が八重垣流秘伝と何のかかわりがあるのであろう――。

「ともかくここまでできたのだ。試して見るがよい。女が九双ですすりなくかどうか」

ちょっと時間が必要のようだ、左弁は、

始めて床几によって、肩で大きく呼吸した。

（これであの謎の文句の一端がとけた。陰陽

相なかばすとは、男女が相なかばするところの意味に間違いない。しかし待てよ、相なかばす、相なかばすとは……これは、そのあとの黒赤縄十六方、三方より十二方に至る二十七町という、文句に関係があるに違いない。黒赤縄十六方とは、何か……）

考えつづける左弁の眼前では、笹川夫婦が春宮たちの手で、責めつづけられていた。

## △すすり泣く三千代▽

笹川妾女二十六才。五十石三人扶持とはいえ、れっきとした旗本である。それが、事もあるうに素っ裸にされ、男九双の縄目をうけて、これ以上の屈辱はない、姿をさらしている。それだけならまだよい。眼前、二尺のところ

で自分の妻が、翻られているのである。女八双という無惨な縄目を柔肌にくれた上に、にぎりこぶしほどもあるう縄の結び目をつくった男が、更に迫ろうとしているのである。

妻の三千代は、必死になって抵抗している風であった。

（なぜ、なぜ、もっと激しく抵抗しないのか 三千代！ 武士の妻だぞ。お前はなぜそのよ



うな恥辱を甘受する。死ね！ 恥かしめをうけるより死ぬがよい！」

声にはならぬ。娼女は心のなかで叫びつづける。しかし、男たちは、三千代の舌端を糸で縛った上に、その両端を頬に廻して、舌を噛まれるのを防いでいた。

「奥さん、どうだな。こうして旦那の前で責められるのも、おつなものだろう」

春宮が、三千代を後ろから羽交絞めにしながら、右乳房の下の小さなほくろを肩ごしにつまみあげる。

黒縄に絞めあげられている乳房は、いまにも乳液をほとばしらせるかと思われるようにはりきっていた。

「さあ、さあ。素直にしなよ。ホラ、旦那さんにも、よく見えるように……」



読者ギャラリー『思春の嵐』 室井亜砂路

春宮が、三千代の乳房が、娼女の胸に触れんばかりにちかづける。

「いや！ いや！ イヤ……」

と叫んだつもりだろうが、奇妙な音が、唇からとび出すにすぎなかった。

娼女は、妻の体臭を嗅ぐ。

（畜生！ 無道者！）

狂ったように身を悶えさせるが、縄目のとけないことは八重垣流捕縄術を修得している娼女自身が、知っていることである。参議と郡司が、三千代の足首をとらえる。

「それ、始めるぜ！」

正座していた三千代は、両足首を左右に引かれて、べったりと腰を床につけ、いぎたない坐りかたになった。男の責手を必死で防ごうとして上半身を起すのを、

「よいしょ！」

と、両足首をくるりと前に回して、すんなりした両足を「八」の字に引っぱる。

「ほらさ！」

と二人が調子を合わせて力をこめると、自然に両膝が立ち、三千代が、いちばん恐れている姿勢が、男たちの目にさらけ出される。

「フッフッフ……」

淫らな笑いを止めようともせず春宮は、夫



の妾女の見ている前で、三千代をいたぶり始める。

「アッ、アワワッ……アーン」

自分と夫以外、いや、嫁いでまだ二年、夫さえも知らないだろう女体の匂いが、三千代自身の鼻先で、ただよう。

「さて、ぼつぼつ……」

縄の結び目を右手に持った春宮は、のけぞった三千代の顔をのぞき込むように、のしかかりざま、女九双の縄掛けを始める。

「ムッ……ムウ……」

三千代の咽喉が、ごくんと鳴った。

手早く掛け終わった春宮は、更に別の縄でその上を押えるように結びつけると、最初の縄の両端を持ってたち上り、その一端を、郡司にわたす。両足首を放された三千代は、あわてて両膝を合わせる。

「ウ……ウ……ン……ウ、ウ……」

今度の悲鳴には、どことなく異質なひびきがあった。

「ほれほれ。しっかり耐えなよ」

春宮と郡司とが、縄尻をうごかす。そのたびに三千代の身体が引かれてゆれうごく。

ふと、三千代が喉を開く。その眸と、春宮の目が、ばったりと合った。

「ウ、ウ……ウ……イ、イ、イ……」

三千代は（いや、いや！）と叫びたかったのだろう。

「フッフッフ。まあ、百数える間だろうよ、この女がすすり泣きはじめるのは」

班田が、背後から三千代の輝くように美しい肩に手をかけると、前後左右にゆすり動かす。春宮と郡司の縄を持つ手が、それにつれて、鵜飼船の鵜をさばく鵜匠の手綱捌きのように蠢く。

「アウ、アウ……」

しみひとつない肩が上下にゆれ、脇腹が波打ち、形のよいへそが激しい凸凹を繰り返して七人の男と、夫の見守るなかで、三千代は、苦痛のみとはいえない呻きを洩らし始める。

「女九双にして、すすり泣く……か」

郡司が、いっそう手綱をしぼる。

「ウ、ウオッ……オウ……」

この責苦に耐えきれなくなったのか、恥も外聞も捨てきったかのように三千代が激しく呻き身悶えし始めたのである。

縛られたままの夫にとりすがり、顔をそらしていたお節までが、ちらっとふり向くほどの異常な叫喚であり、妾女は、もう両眼を閉じて、その声を聞くともなく聞いているだけ

であった。

「そうか！ わかったぞ！」  
突如、左弁がたち上った。

「甲南の近衛、石部の班田、それに、阿山の参議に、名張の春宮。四人は残れ！ 夜桜お蘭の二の舞いを踏むまいぞ。鑄銭、郡司、今すぐ出立する。続け！」

「どちらへ！」

「壁に耳あり！ フッフッフ、近衛、この四人、絶対に逃がすなよ」

いいのこした左弁は、二人を従えて深夜の奥羽街道を、つむじ風のように北に駆けて行く。

（あの謎の文句の最初、男女ありてとあるのは、たしかに日光。日光は男体山、女体山のことに違いない。男体山に、男の陽あり女体山に女の陰とよばれる谷がある。その陰陽合するところ……。百万両の秘宝の隠し場所をとく糸口……）

左弁は、日光へと飛ぶ。

ただ気にかかるのは、黒、赤、縄、十六方、三方より、十二方に至る、二十七町の文句であるが、これは、現場の地形を確かめてのこと——黒、鉄左弁は、やっと解けようとする謎に、胸を高鳴らせ一陣の魔風のように駆けていく。



## △君香嬲り▽

「さあ、煮るなと焼くなど、勝手におしよ。その代わり、この娘さんに指一本でも触れると承知しないよ」

紅い啖呵をきっているのはお千賀である。

素裸——糸もまとっていない。

「ハッハッハッ……お千賀。先程、あれだけいためつけられたのを忘れたか！」

辰五郎が、酒くさいいきを吐きかけながらいう。黒鯢組の乱入によって伊皿子の別邸をひき払い、南蛮屋源左衛門一味は、ここ根岸の別宅へ移っていたのである。

あと一步のところで八重垣大学たちを掠わってしまった南蛮屋や黒駒勝蔵たちは、なかばやけ気味で、お千賀、千春、望月秀之進、それに、新しく捕えた、落差しおとしの千次郎とその恋人の君香を責めたてているのである。

今、お千賀の部屋にいるのは千春と望月、それに勝蔵、辰五郎ら子分五、六人。

どうやら千次郎と君香は、どこか違った部屋で南蛮屋に拷問されているらしい。

「女岡っ引きらしく、スッ裸にされても威勢はいいが、なにせそのざまではなあ」

ナゲサイの馬吉、床板ゆかいたの上で、膝を必死で合わせ、はちきれそうな乳房を両手でおおっているお千賀の頬をつつく。

「この娘とお前さんとは何の関係もないじゃあねえか。それなのに、なぜ、この娘の身代わりになるというのだい」

ナンスケの熊七である。いつまでも見飽きないように、お千賀の裸身をなめるように眺め廻す。

お千賀は、千春の姉であった。姉といっても血のつながりはない。お千賀の父、八重垣大学の後添いであるお節の連れ子であった。一時は、父の再婚に反対して兄の千次郎ともども家出した挙句、勘当されて、江戸は浅草伝法院の朱房の重蔵の女房になっている身ではあったが、今、この危機に、父の心が少しはわかる気がして、どこへ連れ去られたかわからぬ父、大学の代りに、千春の身を守ってやろうと決心したのである。

その千春が、目の前にいる。

まっ白い稀頭の肌襦袢に、本紋綸子のこれまた純白の湯文字いちまいで、高手小手に縛られたまま震えている。そのそばで、許婚者の秀之進が、猿ぐつわをはめられ、顔を屈辱にゆがめて、格子戸にはりつけられていた。

「安心おしよ、千春さん。妾が、あんたの身体には指一本、触れさしやあしないから」

お千賀は、勝蔵に向かって

「さあ、さあ、始めなさいよ。なにをしてるんだい。どうせ、酒の肴に妾の身体を泣かせようというんだらう。さっさと、やったらどうなんだい」

勝蔵は、小鼻でせせら笑いながら、

「お前さんの躰は、堪能するほど眺めたんだぜ。この上、どんなお芝居を見せてくれるというんだい！」

「バカ！ そりゃあ、男たちの腕次第じゃあないのかい。女をこんなに恥かしい目に合わせて、指をくわえて見てるといのかい」

「フッフッフ……馬吉。困った姐さんだ。

どうやら男に飢えていなさる。存分に慰めてさしあげな。俺はちよっと隣の方を見てくるからな」

勝蔵が、たち上る。

「待ちなよ。親分さん。あたしの裸踊りを見たくはないのかえ」

「フッフッフ……そのうちにな、子分達に可愛がって貰いな。じゃあ、あばよ」

勝蔵が、でていく。

馬吉と熊七、寅松、それに南蛮屋の子分が



四人、どう料理してやろうかと、お千賀のまわりをとりかこむ。

一方――

隣の部屋では、南蛮屋や赤鯉丹波たちが、君香を罵っていた。

「千、千さんの生命を、たすけてあげて！」

代わりに妾が、妾が何でもいうことをきくからさ。ねえ、旦那……」

君香は必死であった。ここへ連れ込まれた瞬間、出てきたのが、深川で顔馴染みの新吉や弥之助であったこともおどろきであった。

南蛮屋の番頭をつとめている弥之助と、手代の新吉は、五度、六度となく君香を酒席によび、いいよったことも三度とくだらない。それを拒みつづけたのは、千次郎という男がいたなればのことである。その千次郎といっしよに、こともあろうに捕われの身となり、虫ずの走るほど毛嫌いしていた弥之助や新吉の前で、頭を、下げなければならぬのである。

そのうえ、当然のことだが、千次郎が、八重垣大学の嫡男であることも、新吉たちは知っていた。

南蛮屋たちが喜んだのは勿論である。

大学は奪われたがその息子が手中に入った

のである。勘当されているとはいえ、八重垣流女、九双の縄捌きを知っているに違いないと例によって君香を裸にひんむくと言って脅迫したところ、千次郎は、女九双が、女の陰を責めることだと白状した。が、

「黒赤縄十六方とは！」

という問いとなると、知らぬ存ぜぬのいっぽんやり――。仕方なく、千次郎の右腕をたたきると丹波が脅迫したとき、君香が、許して欲しい！ 代わりに妾がと訴えたのである。

勝蔵が入ってきたのは、丁度その時であった。

「するとなんですかい、君香姐さん。お前さん、あの男の片腕の代わりに、あっしらの命令は何でもきくと仰言るんですかい？」

弥之助は、深川は辰巳芸者にだけ許された君香の羽織姿を、じいっと眺める。

この紋紗のひとえ羽織を脱がせ、江戸紫の羽二重の着物をむしり取ったら、さぞかし日頃の鬱憤も晴れるだろうなあ――という顔付きである。

「どうにでもおしなさいよと何度、妾に言わせる気なのさ」

「何度でも言わせたいね。あれだけ振られた

んだからね」

新吉が、君香の金銀糸を織り込んだ羽織の紐に手をかけながら、

「言ってみな。妾は、今から千さんの代わりに皆様方の罵りものになりますと」

新吉は、さらに何事か君香の耳元で囁く。

君香の顔が、あくなる。

「そ、そんな、そんなことを……」

「言わなきゃあいんだぜ。何もこちらから頼んでいるわけじゃあなし。いやなら、千次郎の両腕をたたき斬るだけさ。さあ、勝蔵親分。ひとともにやらせて下せえ！」

ニヤツと笑ったアラトリの牛造が、千次郎

の右腕の付根に、脇差をあてがい、

「それっ！ たたき斬るぜ！」

本当に斬りかねない勢いである。

「待、待って、待ってよ」

千次郎のそばにかけようとする君香を、おっとっと！ と新吉がひきとめる。

「姐さん。早く言いな……」

君香は、決心をした。ここで自分が身代わりになる以外、千次郎の生命をたすける方法はない。身代わりになり、時をかせいでいるうちに、誰かが、君香は、ふと夢売の又平の顔を思いうかべる――あの人か、もしかする



と、さ組の加島屋兵助親分が、すくいに来てくれるかも知れない……。はかない望みではあるが百にひとつの希望がもてる。

君香は、唇をかみしめると、  
「南蛮屋さん、それに黒駒の親分さん。妾が身代わりになれば、千さんの身体には傷ひと

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

|     |     |            |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊  | 三五〇円(送20円) |
| 三月分 | 3冊  | 一〇五〇円(送共)  |
| 半年分 | 6冊  | 二一〇〇円(送共)  |
| 一年分 | 12冊 | 四二〇〇円(送共)  |

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れた方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添附致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切りの判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。」

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

つつけないと約束してくれますね」

必死の思いを瞳にこめて念を押す。

「よかろう、約束しよう」

南蛮屋も勝蔵も、真顔で答えたが、肚のなかでは、せせら笑っていた。その肚のなかかわからない君香ではなかったが、この場合、どうにも仕様のないこと――。

「親分さん。千さんをここからどこかへ移して頂戴。情夫がここにいたんじゃあ、やりにくいじゃあないの……ねえ」

「よかろう。男を隣に連れていきな」

狐六が、猿ぐつわの下で、狂ったように叫んでいる千次郎の縄尻をとると、部屋を出て行く。

「さあ、姐さん。これでお前さんのいう通りにしたぜ。今度はお前さんの番だ」

新吉が言う。君香は、下唇を血のにじむほど噛みしめていたが、遂に言った。

「妾は、千次郎の身代わりに……。これから皆様がたによって、裸にしてください、な、なぶっていただきます。どうか、御存分になさって下さいませ……」

新吉と弥之助がニタツと顔を見合わせる。

(つづく)

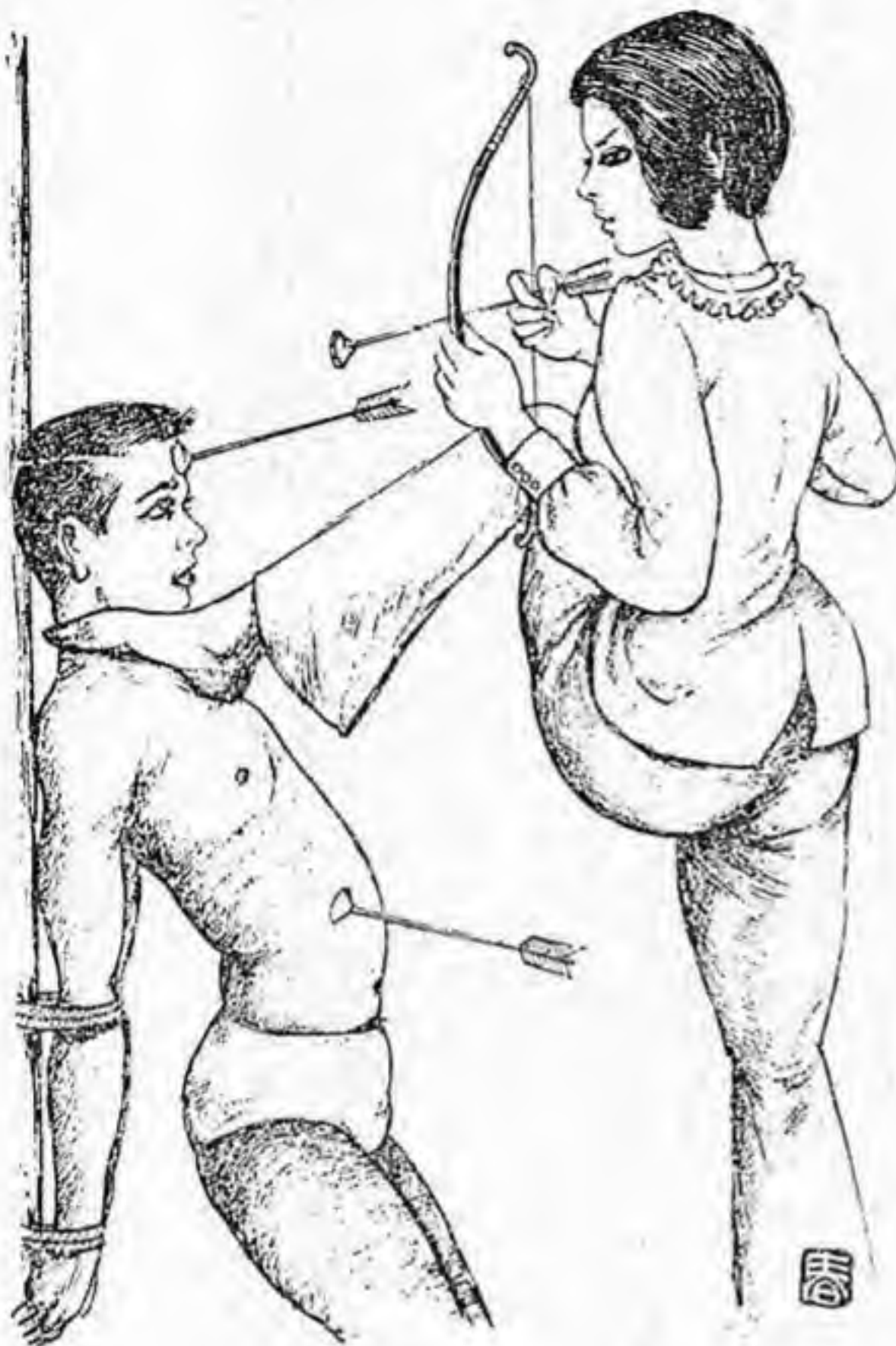


## ~~~~~連 載~~~~~ア ブ 紳 士 行 状 記~~~~~

仁科雅介の巻 (三)

## M 派 交 友 録

(11)



カット・春川ナミオ

## ~~~~~鬼 山 絢 策~~~~~

## 女郎蜘蛛の粘糸

仁科雅介は恋いこがれた美子をやつと妻にできたが、ふとした過失から美子の母親、多美子と関係するところを美子に見られてしまった。母親と二人で美子に詫びて、やつと家に戻ってきてもらったが、それからは美子は仁科を奴隷のように扱う。或る日、事務所から自宅へ仁科が帰ってみると、美子は男は引っぱりこんで情痴に耽っている。その男は、かつての仁科の恋仇の大場浩三で、やくざの浩三には恋人時代いつも美子を譲っていた。仁科にとって、最もいやな奴であった。美子は、ふてくされて「あなたは文句を言う資格がない」と、きめつける。ムシヤクシヤした仁科は、柳ガ瀬で芸妓と遊んで翌日、家に帰ってくると、美子は仁科が芸妓と遊んだことを知っていて「汚らしいから風呂へ入れ」と命ずる。

汚いのは、お互いさまだと思った仁科は、  
「じゃ、一緒に入ろう」

と言うと、

「妾は入ってきたから、いいのよ」

とにかく美子は、言葉のわりには御機嫌が



いい。ここでまた機嫌を損じてはと思って、言われるままに風呂に入った。

美子は、すでに寝巻に着替えて寝ていた。昼から夜を徹して七回戦のあとで、仁科は疲れていたが、美子を目の前にすると、新たな慾情が湧いた。それに仲直りの意味もあり御機嫌をとっておこうと、仁科は美子の胸もとに顔をうずめようとした。

眠っていると思った美子が突然ガバッとはね起きて、仁科を太腿の下におさえつけてしまった。

いつものことで、仁科は抵抗もせずに与えられた餌に、むしゃぶりつこうとした。

「この野良犬め、よその牝とつるんできやがって。うんとお仕置きしてやるからね」自分のことをたなにあげて、仁科だけを責める。そのコントラディクションが、かえって仁科を興奮させるのだった。

仁科は動きのとれぬように拘束され、女郎蜘蛛の粘糸に絡まれた、さなぎのようになった。だが仁科にとっては、それが恋する奴隷の贖罪のすがただと思った。

仁科は甘い、むせぶような女体の枷の中で殉教者のような苦難に堪える清純な精神と、どろどろのセックスに溺れきった痴者の姿と

が、混濁したまま、深い陶醉の境地に埋没していた。

その仁科の無我の境地と併行して、美子のサジスチックな慾情も焰をたかめて行った。そして、そこで放った美子の言葉は、目をつぶって酔いしびれていた仁科を、ハッとさせるショックを与えたのである。

「フッフ、妾がお風呂へ入ったか、入らないか、わかる？」

仁科は目をあけて美子を見上げた。

「ホラ、わかるかよ。よく味わって見な」苦しむ奴隷の頭に、更に鉄槌を加撃されたような衝撃だった。

美子は、ま上から仁科を見つめ、さらに、こみあげてくる泉を浴びせた。それは夫に対する、もっとも冒瀆的な凌辱であった。仁科にとっては、人間の言葉というものが、これほど強烈に肌を刺すものとは思ってもみなかったことだった。

「美子は俺と母親の多美子とのおかした過失に対して何十倍もの仕返しをしてやると言った。そして、いままでも数々の屈辱を強いてきたが、これがそのために仕組まれた計画のひとつだったのか」

「ホラ、わかったかい？ ホラッ、どうなの

さ。アッハハハ」

ひと声ひと声に浴びせかける仕返しのおしるしに、美子自身もオルガズムに似た凌辱の階段を、のぼりつめていた。

猛り狂う美子の顔の上に、仁科は嘲笑する大場浩三の幻影をみた。

### しばりと縛り

「でも、そのたとえようのない苦しみと嫉妬の中から、更に味わったことのない官能の刺激が、僕の背筋を突き抜けたんです」

仁科君は昂奮すると、頬の下にある百円硬貨ぐらいの黒い痣が赤紫色になってくる。彼は自分自身の言葉に、昂奮していた。当時、細君の美子さんから受けたショックが、よほど大きなものだったのであろう。

彼のMとしてのセックス神経を、一番刺激するのは嫉妬である。

めんめん六時間にわたる彼の告白を聞いているうちに、心理的な彼の傾向が理解できたのである。嫉妬は直接の対象となる異性よりも、もうひとつ距てたその蔭の同性に対して働くものであり、彼の場合、その男性を脳裡に描いて、女性から受ける屈辱、それが、よ



り一層の屈辱であるとしていのである。

それは、更に彼の語る言葉によって、ますます明らかにされて行った。

「僕と、美子の母親、多美子との場合は、全く過失なんです。酔って正体もなくなった僕を多美子が誘惑したんですから。でも客観的には僕が如何に弁解しても、それは不倫の烙印を免れないものでしょうけどね。美子の場合は全然、違っていて、かつて肉体関係のあった大場浩三と平気で関係しているんですからね。どうもこういうことは先にやった方が損をしますね。相手を殴る。殴ったことは暴力であり、罪悪であり、そのあとから相手が殴り返してきたことは、同じ暴力であってもそれは復讐であり、正義である。そんな感じですね」

三本とった酒も彼が殆ど一人で飲み、残りのビールに手をつけはじめた。

「ま、こういうことは、そんな理屈で考えたって、はじまらないことですよ。要は、その底にデンと腰を下ろしているセックスにあるんですから。所詮、僕にそんな失策がなくても何かの理由をつけられて、僕は美子に責められたでしょうね」

仁科雅介は昼間、事務所で仕事をしている時でも、美子に対する不安が大きくかぶさってきて頭を離れなかった。

それは相手が浩三だからだった。バーで知り合ったお客との、浮気心での関係なら大したことはないが、相手が浩三となると、元の恋人だっただけに、肉体だけでなく、美子のすべてを奪い去られるのではないかという不安があった。

美子が仁科を嫌いでないことは、仁科自身も知っている。閨房では、やれお仕置きだの復讐だのと言っているが、それは単なるプレイにすぎないことは、二人とも承知しているのだ。

だが美子は仁科以上に浩三が好きなのだ。

浩三に生活上の安定さがないから仁科と結婚したのだが、もし浩三の生活が安定すれば浩三のもとにはしる恐れがある。実際は生活が安定していなくても、口先ひとつでコロリとだますくらいは、浩三にとっては、たやすいことであり、美子はだまされる危険が多分にあるのだ。事務所で仕事をしている間に、家では美子と浩三が情痴の限りをつくしているのではないかと想像すると、居ても立ってもいられない気持ちだった。

と言って仁科自身が行なっては、この前のようなことになって、とても美子にも浩三にも太刀打ちができない。

そこで、一計をたてた。

仁科が扱っている商品の和紙は、製造元から受注先に直送することもあるが、商品を事務所に引き取ることもあった。最近それが殖えてきたので一部を自宅に廻すことにした。

それと、経理の福原が帳簿の一部を事務所に置いておかenない方がいいと前々から言っていた。事務所には金庫がないので完全な保管ができないし、他人に見られては、まずい書類などは、どこか別の所へ移した方がいいと言っていたので、それ等の帳簿や書類を自宅へ運ばせることにする。そうすれば毎日、帳簿を調べたり、書類を見るために、福原が自宅へ行くことになる。それで大場を遠ざけることができると思った。福原という男は五十才で、もう白髪まじりの男だから、美子に対する心配はない。

そうなれば自宅で大場と会うことはできなくなる。とすると外で会うかもしれないが、料理屋の娘だった美子は旅館業者にも顔を知られているし、へたなところへ入れば、すぐ噂が立つから、美子としても外で情事を行な



うのは、厄介だろうと踏んでのことだった。

福原には美子の行動をそれとなく監視するよう、そして結果を報告するように頼んで早速、実行に移した。

果して美子は機嫌が悪く、夕方、事務所に帰ってきた福原は「仕事を家にまで持ち込まなくてもいいだろう、と、文句を言われました」と報告した。

「今夜は相当、風当たりが強いだろう」

と仁科は覚悟して家に帰った。

美子の顔色を見た時は、思ったほどでもなく、いつもと変わらないように見えたが、夕食の時から態度が変わった。

「うまいことを考えたわね、あんた」

「何だい」

「あんた、あたしを縛ろうとしてるのね。あの荷物や帳簿が縄で、あの福原って爺いが錠前ってわけね」

「何を言ってるんだ。事務所に置き場がないから、しかたなく持ってきたんだよ。しばらくの間だから、我慢しておくれよ」

「フフ、何さ、あの福原って奴。いやな、爺い。仕事をしている振りして、ひょいに見えるよ、あたしの方をジーツと見てるのよ。いやらしい目つきでさ」

「そりゃ、君がきれいだからさ」

その夜、仁科が美子を求めた時から美子は荒れ出した。

「だめよっ、今夜は。何さ、ひとにあんなこととして、図々しい」

「違うよ。あれは事務所が狭いから、どうしようもなかったんだよ」

「フン、うまいこと言っでごまかそうたってちゃんと分かってるわよ」

拒む美子に、仁科は執拗に迫った。

「うるさいわねえ。あたしを縛ろうというなら、あんたも縛ってやる」

美子は簞笥の抽出しから帯締めを出してきて、仁科の両手を後手に縛った。

「何をするんだ。おい、よせよ」

とは言ったものの、縛られる気持ちはゾクゾクするほど、次の期待に胸がおどった。

「どう？ 縛られた気持ちは」

美子は足をあげて仁科の肩を蹴って、畳の上に蹴倒した。

「もっとも、あんたには分かんないわね。こうされるのが、うれしいんでしょう。ヘンタイなんだから。こういう風にされるのがいい気持ちなんですよ」

横倒しになった仁科の顔を、美子は足で踏

みつけた。

「あたしは普通の人間だからね、縛られるのなんか、まっぴらよ」

足に力を入れてグイグイと踏みにじる。

「ウツ、痛い。おい、やめてくれッ」

「痛いなら、この足をどけたらいいじゃないの。フフ、ホラ。でないと、もっと踏んでやるから」

苦悶する仁科の顔を見下ろし、快いうずき唇から白い歯を見せて美子は、なおも足に力を入れて踏みつけた。

「どう？ どうだい。苦しかったら自分の力で、このおみ足をどけたらいいだろう。でないと、顔を、踏み潰しちゃうよ。このガマ蛙め。あたしは、こうやってお前の肉体を縛って苦しめてやる。お前は、あたしを精神的に縛ろうとしている。だけど、あたしを縛ろうとしたって無駄だよ。あたしは必ず抜け出して見せるから」

美子は足をどかすと、仁科の首へ跨がり、両腿で今度は横から顔を挟んで締めつけた。

「あたしは、したいことは何でもして見せるよ。フフフ、お前はあたしのこの足の間から逃げ出すことはできないだろう。アハハハ」

仁科の頬の痣は、みるみる赤紫に変色して



きた。

「この汚らしい顔、サア、どかせられるものなら、どかしてごらん」

57キロの肉の重石がドッカーリと仁科を密閉し、喘げば喘ぐほど、メリこんできた。

「どう？ 苦しい？ 苦しければ降参しろ。でない、このまま息の根をとめちゃうぞ」

苦しみあえぐ仁科の顔を見下ろしながら、美子は執拗に、いつまでも責め続けた。

### 女体の蔭の悪魔

ひと頃は好調を誇っていた商売も、大資本の会社が乗り出してきて、コストを安くして仁科のような中小企業の得意先まで侵蝕してきた。

それに加えて仁科は、美子の方に関心の比重が傾きすぎて商売の方がおろそかになってきたから、目に見えて業績は落ちてきた。

そんな仁科の苦しみも知らずに美子は相変わらず、ぜいたくに浪費し、欲しいものは何でも自分で勝手に買ってきて、仁科に支払わせた。

見張り役の福原から「今日は、三時間ぐらい外出されました。買物だと言っていました

ね、事実いろんな包みを持って帰られました……」などという報告を聞くと、また大場と会っていたのではないかという疑心を拭うことができなかった。そして、その夜も「あたしはちっとも縛られてはいないのよ。したいことは、ちゃんとしているんだから」と言いながら、仁科を尻に敷いた。「ホラ、あんた。昼間あたしが何してきたか分かる？」

これは夫にとって耐えがたい屈辱だった。「分からないの？ 食らえども味わい知らずっていうこと知ってる？ あんたは鈍感だから、分からないのね」

大場との情事の味を亭主にも味あわせてやろうという美子の凌辱の、柔らかな太腿のひと締め、ひと締めは、仁科にとっては背骨がズキンズキンするような苦痛であった。

「アハハ、毎晩こうしてやる。あたしに恥をかかせたお礼を何十倍にもして返してやる。どうだ！ どうだっ！ これでもかっ！」

仁科が苦しめば苦しむほど、美子はサディスティックになって、吐く息も激しく、仁科を圧迫し、力が加わるのだった。

「ウフフフ、何て顔するのよ。あたしに、こうされるのがつらい？ いやなら、いつでも

別れてやるわよ。その代わり慰謝料をコッテリ取ってやるからね。アハハハ、その金が惜しいなら、こうしてあたしの奴隷になつていな。ケツの下敷きになつてろ。わかったか」この苦痛に堪えていれば、美子は僕のそばに居てくれる

美子と別れる気などは毛頭なかった。

「美子の命ずるままに、こらえていればいいのだ。所詮、大場とは単なる情事の相手だけにすぎない。我慢しろ、我慢しろ」

そう考えると、いつしか美子から責められる事自体が、甘美な陶醉に変わってきたのだ。

「この気持ち、分かるでしょう。鬼山先生なら理解してもらえますでしょう」

「わかりますよ。だけど、あなたの観念は、ちよっと理屈っぽいな。つまり、奥さんからの凌辱を堪えることが夫婦のきずなを結びつけるもとだと考えて我慢する。我慢しているうちに快いものになった。そういう風に理解せしめようと、あなたは思ってたやべっているのだが、必ずしもそうばかりじゃないでしょう。やむをえぬ事情のもとに、屈辱を堪えて我慢する、ということと、その屈辱を受けることが甘美なものに転化する、ということと



ろに、常識的には飛躍しすぎるものがある。所詮、これは全然、別ものじゃないですか。

我々M派だからこそ、何の矛盾もなく理解できたと思っているけど、常人には、ちょっと無理じゃないかな。もちろん、あなたにそういう観念がないわけじゃない。半分ぐらいはあるかもしれないが、それよりも何よりも、屈辱を受けること、そのこと自体に快感を感じず、この気持ち半分はあるでしょう。それ自体に理由はない。それがマゾヒズムというもんなんだから。そうじゃないですか。それとも、あなたは埋詰めに追いあげられた上でのマゾヒストなんですか」

「ハハハハ、先生にあっちゃんかわないな。そう言われると、そうかもしれないね。なにも理屈でおすことはないですね。でも僕の場合、そう考えたことは事実ですよ」

「そりゃ、そうでしょう。ところで、あなたの方の夫婦生活は、いつもそうした凌辱だけで終わるのですか。通常の夫婦のいとなみは、全然なかったのですか」

「イヤ、そんなことはありません。たまたまM的なところだけをお話したのですが——そうですね、僕が福原を家にやるようになった当座は、美子もほんとに怒っていたようで、

僕が誘っても、手きびしく、はねつけていました。しかし四、五日するうちに、ひと責め責めたあとで、普通の夫としての資格を与えてくれることもありました。そうかと言ってそれからいつもそうだというわけでもないのです。要するに美子の気分次第で、機嫌のいい時は、最初から責め抜きでノーマルな夫婦関係に入ること、あるのです。ただ僕の方が、いきなりそうすると、どうも具合がよくないんですね。ひと責め、責められたあとの方が調子がいい。それを美子も敏感に感じとって、やはり屈辱を与えてやらなければ、ハリキレないのだと思うようになりました」

「奥さんは復讐だの何だのと口実をつけているが、結局はサディスティックな興味からやっていったんでしょう」

「そうなんですよ。結婚する前から僕をからかうことに興味をもっていましたからね。僕ばかりじゃない。ほかの男友達にも、ずい分ひどいことをやっていたようです」

「ところで、これは小説じゃない。あなたの実生活にもとづいた事実談なんだから、実生活の点も聞いておかねばなりません。あなたがあなたの方の夫婦生活、セックスを抜きにした日常の生活は、どうだったんですか。円満だ

ったのですか」

「悪くはなかったと思います。今にして思えば、美子はまだ娘としての、あどけなさが残っていたんですね。主婦としての自覚とか一家の生活に対する自主性といったものに欠けていたように思えますね。セックスを抜きにすれば、極めて無邪気な娘々した女でしたよ。それが、ことセックスを加味した場面になると、急に大人になって、妖婦になるんです。よく言うでしょう、昼は良妻、夜は娼婦のような女が理想的な女房だと。美子は昼は娘、夜は淫蕩な悪女といった感じなんです。僕にはそれがまた魅力だったんですね」

仁科君にとっては、岩田美子という女性が

いまでも忘れられない女らしい。「とにかくセックスの方面にかけては敏感でしたね。僕が稀に、ほんとに数えるほどしかないんですが、よそで浮気してくると、すぐバレてしまうんです。やはり岐阜という町が狭いんですね。それだけに、美子が大場と外でデートするということは、容易でないことで、必ず噂が立つはずなんです。それを美子は、いかにも大場と会ってきたということをほめかして、僕を責めるんです。その方が僕に一層、恥辱を与えることであり、僕がそ



れをいつしか黙認するかたちになり、またその方が僕がエキサイトすることを知っていたからです。僕は美子の肉体が僕を責めつけてくる時、いつも大場の影をその後思い浮かべていました。

私は、この辺りの仁科君に対して興味をもった。現在なら、こうした三角型タイプのMというのも珍しくなくなったが、当時としては、非常に珍しく思えたのである。

私は彼と会った直後に『痴迷』という、三者関係の作品を本誌に発表した。これは多分に仁科君の性向から受けたものが強く働いている。

「僕は美子の後ろに、いつも大場という、僕にとっては悪魔のような男の存在を拭い去ることができなかったんですが、これは、あとになって分かったことなんですが、その頃、大場は、とくに東京へ舞い戻っていて岐阜には居なかったんです」

仁科君は残り少なくなったビールを一気に飲みほすと、

「それを美子は、いかにも大場と会っているように見せかけて、僕を責めていたんです。その方が、僕が喜ぶと思ったんでしょうか。と同時に美子自身も、そう空想して僕を責め

る方が、より快感を覚えたということなんでしょうね」

私は岩田美子なる女性に非常に興味を覚えた。

「その美子さんは、今どこに居るのですか」

私は時々こんな、話の結末から先にするような質問もした。

「東京に居るんでしょうね。岐阜には帰って来ないようです。母親の多美子に聞くと東京に居ると言っていました。そのうち多美子も店を畳んで、居なくなってしまうからね。それからは音信不通になってしまったんです」

仁科君は今でも美子に、未練は多分にあるようだ。あれだけひどいめにあっても、好きな女性はいつまでも忘れられないのだろう。

「さっき僕は、美子との夫婦仲は悪くないと言いましたね。それは例の荷物を家へ運び入れ、福原を監視につけるまでのことだったんです。福原は僕に詳細に留守中の家の様子を報告しましたが、それをはじめから一カ月ほどたってからです。何となく夫婦の間に溝ができたような気がし出したんです。もちろんセックス抜きの日常生活のことですよ。何か美子に秘密の影があるように見えてきたん

です。正直云って僕は、大場を憎み、恐れていたけど、美子が大場と関係することは仕方がない。だが、大場に美子を奪われることだけは極度に恐れていたんです。美子は、さも大場とデートしてきたようなことを言うけど長い間に、大場が一度も僕の前に姿を現わさぬということは、大場が岐阜に居ないのだということ。僕にも分かってきました。大場の性格からして、彼がもしこの町に居るのなら堂々と僕の前に現われて、どうかすれば僕の目の前で美子といちゃついて見せることくらい、平気な男なんですからね。普通、密通というのは夫にかくれて、知られないように関係するものでしょう。それが僕の場合は、僕と美子が夫婦になった。そして大場と再会した。その再会したのが密通の現場なんですからね。つまり密通の現場を亭主に知られたところからスタートしているわけです」

「なるほど、ちょっと変わったケースですが、でも婚前に三角関係があったんだから、ストリーとして、よくあることですね」

「でも姦通を容認する亭主なんて居ますか。居ないでしょう。普通の男なら、その場で別れてしまおうでしょう」

仁科君は自分の体験が世にも変わったものだ



と思ひこんでいる。私が平凡だと言ったのが気に入らないらしくムキになって抗弁しはじめた。だが世の中には妻の姦通を許している夫は意外に多いものである。そこを知らないのは仁科君が、まだ若いせいだと思った。

姦通を許す亭主は世の中に多く居るが、妻がここまで堂々としているのは珍しい。堂々としているどころか、姦通という事実を、夫婦のセックスの肴にしているところが、変わっているのである。これほどの屈辱を受けてそれに耐えている夫があるかどうかという点を仁科君が強調すれば、それはたしかに珍しいケースだと、私は同感しただろう。

## 破 局

「奥さんは、この頃、変ですね。昨日も外出したし、今日も少し酔っぱらって帰ってきましたよ。何かひどく御機嫌がよくてね。歌なんか唄いながら目の前で着替えをされたり、年よりをからかうようなハシャギ振りでしたよ。エヘヘヘ」

福原は、この頃、毎日、美子が外出していることを知らせてくる。仁科の顔がくもるのをジッと見つめて、たのしんでいるようなところも見える。

「しかし奥さんは、全くきれいですねえ。顔も綺麗だが、お身体も脚が長くて、肉づきがよくて、全くすばらしいお方ですねえ」

近頃の福原は、少し余計なことをしゃべりすぎるようになった。福原がもし、もう二十も若ければ、疑いの目を向けざるをえないようなことを平気で言っていた。

仁科は、近頃の福原が何となくいやらしく思えてきた。監視の役を誰か他の男に交えたかったが、経理を扱っているのは彼一人だし、自分のプライバシーを或る程度、打ち明けないければならぬから、他に適任の男も居ないので、「君は言われたことだけを報告してくれればいいんだ」と、注意する程度にとどめていた。

そして遂に、破局の日がやってきた。その日は仁科雅介にとって、全く人生最悪の日であった。

またその日は非常に多忙な日でもあった。或る製造元から百五十万で買いつけた和紙を担保にして、金融会社から七十万、借入れの契約があり、また東京の間屋から売り掛け金、三十五万を持って二時にやってくる。

一方、或る製造元から三百連の和紙の売り込みの話もあり、その見本を見て買いつけの契約をする日でもあった。

その日の前夜、美子は遂に外泊して、家に帰って来なかった。

ムシヤクシヤした気持ちで事務所へ朝早く出かけた。この頃は事務所の連中も怠けがちで、誰も来ていない。片腕と頼む営業の太田は東京へ出張中だった。イライラしていると、そこへ福原がやってきた。相談相手は彼しか居なかった。そこで福原と今日の手筈をきめた。

あれこれ打ち合わせた結果、東京の入金と借入金、この二つを福原が担当し、仁科は買いつけの方をやることにした。

借入れの方は会社側の調査に対する証明や手続きが面倒なので、その方は計理担当の福原の方がうまくやると思ったからだだったが、それが仁科の大きなミスとなった。

一方、昼頃やってきた製造元の連中と買いつけの交渉をした仁科は、僅かのところで値段の折合いがつかなかった。製造元の連中は飯でも食いながら、仁科を柳が瀬の料亭に招待して一ぱいやりながら、また値段の交渉をむし返しにでた。



料亭で酒を飲みながらも、仁科は借入金の方がうまく行ったかどうか気がかりだったから、金融会社の方へ時々電話して福原と連絡をとっていた。

四時頃になって福原から電話があり、借入金も、東京からの入金も無事に入手したむねを報告してきた。安心した仁科は、金をそっちへ持って行こうかと云う福原に、銀行も閉まってしまったし、ひとまず家へ持って行って書庫へしまっておくように指示した。間もなく自分も家へ帰るつもりだったからだ。

安心した仁科は、交渉の方もどうやら折合いがついたので、万事うまく行ったと思うと気が弛んで、すすめられるままに、だいぶ飲んだ。

だが家に置いてある金のことになったので、八時頃に柳が瀬の料亭を出て司町の家へ帰った。

家の玄関を見た時、何か異変の予感を感じた。

玄関の戸に手をかけてみると開かない。

仁科の悪い予感は急に濃厚になった。

裏口に廻ってみると、此处は開いた。

「美子」

声をかけながら部屋の中に入ったが、真っ

暗で何もわからない。勝手の電気をつけてみる。何事もない。だが部屋へ入ってみて、愕然とした。

テーブルの上には、茶碗や皿が食い散らかされたまま、乱雑にひっくり返っており、簞笥の抽出しが、半分引き出されたままになっている。

誰も居ない。

「美子、美子ッ」

寝室の方で、うめき声が聞こえた。

入って電気をつけて見ると、「アッ」と声をあげた。

一人の男が片手を簞笥の環に縛られ、片手を床柱に縛られて、両手をひろげたまま仰向けに転がっていた。顔にはパンティをかぶせられている。洋服でそれが福原だと、すぐ分かった。福原は仁科の声を聞いて

「ウー、ウー」

と、うめき声をあげている。だが仁科にとつて、それよりもびっくりしたことは、薄い鉄板の書庫の扉が開け放しになっていて書類が乱雑に散らばっているを見た時だった。

「やられたッ！」

金がなくなっているのが、ひと目で分かった。

仁科は目の前がクラクラとする衝撃を受けて、福原を助けることも忘れて、しばし開け放された書庫をボンヤリと眺めていた。

「ウー、ウー、ウー」

福原は口がきけないと見えて、喉の奥の方で変な声を立てている。

ようやく我に返って、福原を助けようとして、またびっくりした。

福原の顔にかぶせられたパンティはグショグショに濡れているのである。しかもよく見ると、そこら一面、畳も濡れていて、敷きっ放しにされた蒲団の端まで濡れていた。気がついてみると、臭気が鼻をついた。

どこから手をつけたらいいか迷った仁科は床柱に縛られた片手を解いた。だが福原は片手が自由になっても、起き上がろうともしなかった。かなり疲労しているようだ。

両手が自由になると、福原は自分でパンティをとった。その顔もグショグショに濡れていた。口の中からはみ出している手拭をひっぱり出した。その手拭もグショグショに濡れていた。

「どうしたんだ」

「た、たいへんです。奥さんが……」

「美子がどうした？」



「奥さんが、金を持って逃げた——」

福原は、よろけるように立ち上ると、台所へ行ってゲーゲーと何か吐いているようだった。

「やっぱり、そうか……」

仁科は蒲団の上に尻餅をつくように足を投げ出して坐った。もしや強盗にでも——と思った一縷の望みは無惨に打ち砕かれた。

福原は台所で口をゆすぎ汚された顔を洗って、洋服をビショビショに濡らしたまま戻ってきた。

福原の話によると、福原は借入金七十万と売上金三十五万の現金を持って四時半頃、家に来た。美子は茶の間で若い男と酒を飲んでた。福原は大場浩三の顔を知らなかったが福原の言う人相から、その男が大場であることを悟った。

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

ともかく持ってきた金を書庫にしまおうと挨拶もそこそこに、寝室に入って書庫を開けた時、美子と大場が入ってきて、金の顔を見ると、大場がいきなり殴りかかってきた。格闘となったが三十代の若者と五十の男では勝負にならないことは当然である。めちやくちやに殴られ、蹴られた上、美子と二人がかりで、両手をひろげたあの異様な形で縛られてしまったのだった。

美子は身の回りのものをトランクに詰め、金を奪って、大場と一緒に逃げたというのである。

「出がけに奥さんは、このお金は盗んで行くんじゃない。手切れ金として少ないが、まけておいてやる。それで持つて行くんだから、仁科のばか野郎が帰ってきたら、そう伝えろと言っていました」

「ずい分ひどいめにあったようだが、一体どんなこと、されたの」

「イヤ、どうもこうも、とても口にできないようなひどいめにありました」

福原は泣き出しそうな顔で、大場と美子のやったことについては語りたくないようだった。福原が言わなくても仁科には、およその想像はついた。

福原は警察へ届けようかと言ったが、仁科は、それを制した。

「君もひどいめにあったけど、ここはひとまず帰ってくれたまえ」

「そんなこといったって……これからどうします？ 会社は」

「今夜ゆっくり考える。とにかく僕を一人にしておいてくれ」

福原も仁科の心境を察したらしく、ビショ濡れのまま、臭気をプンプンさせて帰って行った。

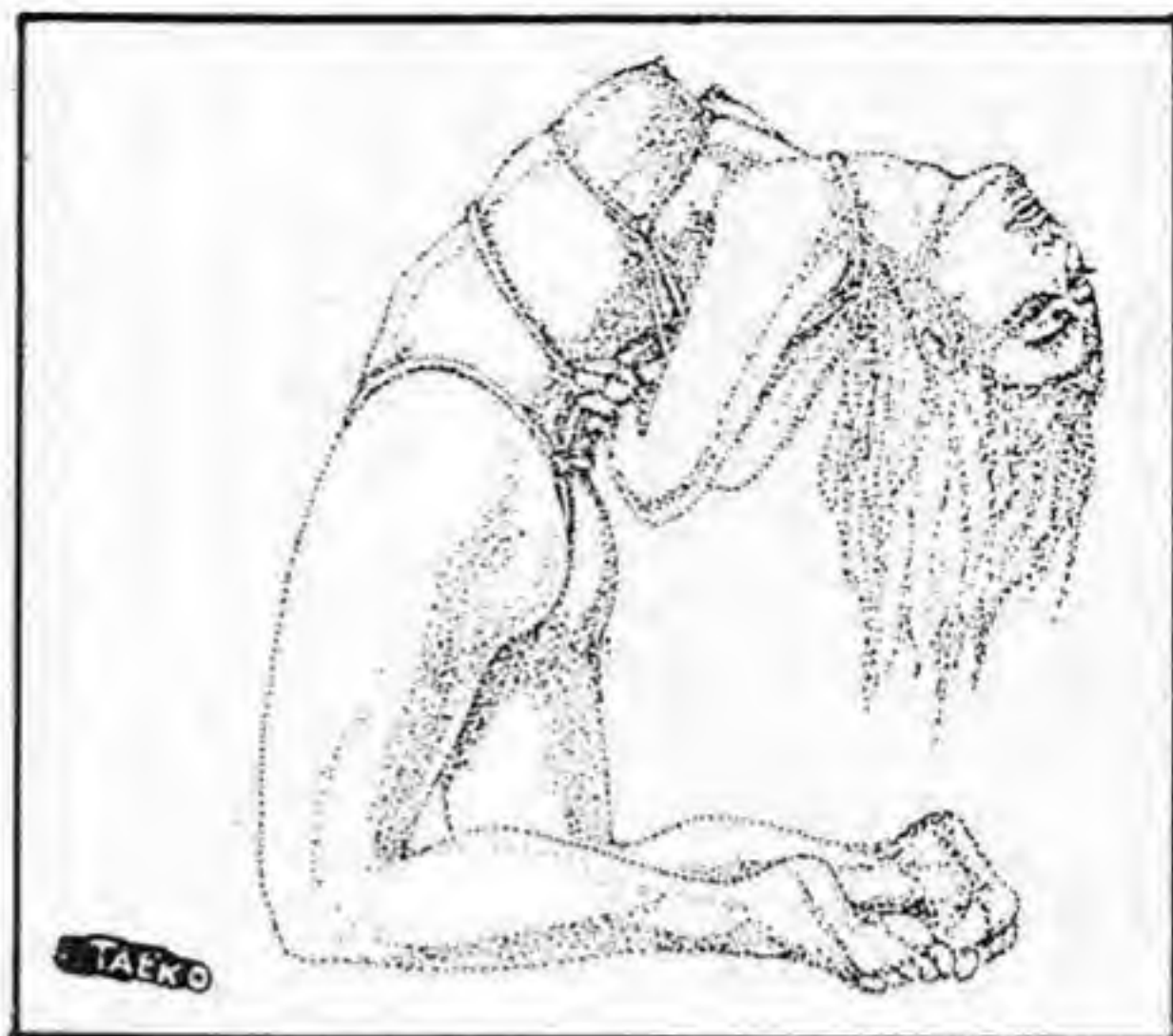
「あとで分かったんですがね、福原という奴は実はとんでもないドブ鼠だったんですよ。美子と大場が持つて行った金は、どうも三十五万円だけだったらしいんです。あとの七十万は福原が着服していたんですよ。いや、ひどいもんです」

仁科君は笑いながら、そう云ったが、いかにも口惜しさが忘れられず、自嘲をふくめた笑いだった。

「しかも、これは全く気づかなかったんですが、福原と美子は、私の留守に関係があったようなんです」

——（続く）——





創作

# 涙のラン・ウェイ

長谷田 亀 治

カット・川口たえこ

東京羽田空港を正午かっさりに飛び立ったDC8ジェット旅客機は午後三時半、両側から迫る山肌を縫うようにかすめて高度を下げて香港啓徳空港のランウェイに、あざやかに滑り込んできた。三カ月に亘る養成期間を、終え、東京―香港直航便のスチュワーデスとして初めて乗務した小林典子はストップ・ライオンにぴたりと停止した機がゲートに向かってゆるやかに旋回し始めているのに気付いたとき、体中から力が抜けていくのを感じた。

「どう？ やっぱ緊張したでしょう。わたしだって初めてのフライトのときは足が地に着かなかったようなのを覚えてるわ。でも、すぐなれるわよ」

二年先輩の中国人スチュワーデス趙恵美がいたわりのこもった目で典子を見つめながらやさしく声をかけてきた。恵美は飛行中もあがり気味の典子をかばって、乗客へのサービスなど、なにくれと気を配ってアドバイスしてくれた。

DC8には典子と恵美のほか、日本人の村上公子、アメリカ人のスーザン・エリクソンら計四人のスチュワーデスが乗務しているが

この二人が初乗務の典子に冷たい視線を向けた。まったく無関心の態度をとっていただけに、典子にとって恵美の親切は身にしみてうれしかった。それに香港に両親がいるという恵美は、典子の一人前になったのを祝って自宅に招待までしてくれているのだ。

すでに乗客たちはゲートを通り、ターミナルビルに、吸い込まれるように姿を消していた。空は抜けるように青く澄んでいるが、海から吹きつける風は、かなり強い。

「さあ、われわれも、そろそろいこうか」

機長の山口卓也にうながされた副操縦士の尾形信次や典子ら四人のスチュワーデスたち



は、ネービーブルーのユニフォームのミニのスカートが風にひるがえるのを気にしながらターミナル・ビルのバゲイジ・インスペクト（旅具検査所）へ向かった。

自由港のここ香港では、国際線の乗務員たちの旅具検査は、ほんの形式的なもので、フリーパスに近い。第一、係官とは顔なじみだし、なごやかな冗談のやりとりの間に終わってしまう。ここでも恵美は典子を係官に、いちいち紹介してくれた。

ターミナル・ビルの大太平洋航空の事務所には典子たちの乗ってきたDC8に乗って東京へ帰る六人の乗務員がすでに待機していた。整備や給油を行ない、午後六時に香港を出発するのである。典子らは、この夜は指定されたホテルで一泊し、翌日の六時の便に乗務することになっている。ただ典子は恵美といっしょに恵美の自宅に泊まるため、所長から許可をもらった。

恵美の自宅は香港島の北部、山を切り開いて作られた高級住宅地ビクトリアピークの中腹にあった。高い塀をめぐるし、芝生の庭を広くとった近代的な、見るからに豪壮な邸宅である。

しかし恵美に案内されて玄関のポーチをく

ぐった典子は、なにか背筋が寒くなるような漠然とした危機感に胸がしめつけられるような思いがした。身の危険を予知する処女の本能だったのかも知れない。そしてそれは、たちまち現実のものになった。

◇ ◇ ◇

応接室には三十五、六の顔に傷のある中国人がタカのような鋭い目で典子を見つめていた。その前に進んだ恵美は直立不動の姿勢をとって報告した。

『小林典子という二十一歳の日本娘です。わたしの後任として、ご指示どおり連れてまいりました』

男は黙ってアゴをしゃくり、恵美を応接室から去らした。典子は声を上げて逃げ出さなかった。だが男の鋭い視線に射すくめられると、まるで金縛りにあったように身動きできないのだ。

『ムスメさん。わたしの名前は張。あなたはわれわれの組織のワナにかかった。われわれの命令に従う以外、助かる道はない。わかったな』

抑揚のない、教科書を棒読みするような日本語が、いっそう典子の恐怖をかきたてた。

『われわれの組織は世界の各地へ純金や麻薬

を送っている。インターポール（国際刑事機構）やカスタム（税関）に目をつけられない安全確実な運搬人がほしい。その点、スチュワーデスは最適だ。税関はフリーパスに近いし、何度、往復しても、だれも不思議に思わない。あすから恵美に代わって香港―東京ルートに運搬人になってもらう』

張は一方的に宣言した。拒めば、おそらく言語に絶する拷問が加えられ、結局は組織の忠実な「伝書鳩」に仕立てられることは目に見えていた。しかし清純で潔癖な典子は、なれといわれても恐ろしい国際犯罪組織の末端分子の一人には、なりたくなかった。

『たとえ殺されても、あなたがたの組織には協力できません』

恐怖と興奮にふるえながらも典子は、はっきりと断わった。ところが、この答えを予期していた様に張の顔には薄笑いが浮かんだ。

『最初ほどの女もみんな、そういう。しかしわれわれの命令を忠実に守って、香港から世界の各地へ飛んでいる可愛い「伝書鳩」は五十数匹もいるのだ。われわれの秘密を知りながら命令を拒めば、どういふことになるか教えてやろう』

張は、ゆっくりと典子の恐怖を楽しむかの



ように話し出した。

そうした勇敢なスチュワードたちはウテルスにリングを入れる不妊手術を受けたうえ脊髄に特殊な注射をされて過去の記憶のいっさいを奪われ、白痴状態にされてしまう。そして組織の手で地元香港やシンガポール、クアラルンプール、バンコク、マカオなど東南アジア各地の売春窟に、売り渡されるのである。スチュワードスは若くて美しく、しかもプロポーションがすばらしいので、これら人肉市場での人気は圧倒的で、組織への注文は引きも切らないという。

売春窟に売られた彼女たちには、ぞっとするような陰惨な毎日が待っている。夜毎に数人から十人もの客が群がって彼女を食い荒し輝くような美貌も、なだらかなみごとな体の線も、みるみるうちに崩れていく。荒淫による疲労と睡眠不足で生ける屍のようになった彼女たちに、情けようしゃもなく強烈な覚醒剤と催淫剤の注射が連日打たれ、生命をしばらく尽すような残酷なセックスが強制される。わずか一年ばかりで例外なくボロクズのように衰え果てた彼女たちは、さらに下等な売春窟へ転々と売られていく。覚醒剤の中毒にかかり、恐ろしい性病にむしばまれながらも、

生きている限りは、客をとらなければならぬ地獄のような陰惨な毎日……。

説明をきいている典子は、あまりの恐ろしさに卒倒しそうになった。彼等の毒牙にかかり、何人の美しいスチュワードスが男の体液にまみれ、若い生命を地獄部屋のなかで散らしたことだろう。ここ数年の間に、ひんぴんと報ぜられた各国スチュワードスの失踪事件の謎が、いま始めて解けた気がした。

『話を聞いて気が変わったのじゃないかな。』

われわれの『伝書鳩』になれば週三回、香港——東京を往復する度に小さな品物を持っていくだけだ。一回につき、一万円の謝礼を払う。期間も二年で引退させてあげる。そのときは五百万円のボーナスをもらったうえで組織から手を引けるのだ。ただし自分の後継者を連れてこなければならぬ。恵美がお前を連れてきたように……』

張の話を聞いて典子にもようやく、すべての事情がわかった。二年間『伝書鳩』を務めた恵美は、自分の引退の道を作るため、なにも知らぬ新米スチュワードスの典子をワナにかけ、組織の手に渡したのである。

『本当に二年で許していただけますか？』

典子の声は涙にくぐもっていた。

『むろんだとも。われわれは約束は、どんなことがあっても守る。恵美がお前を連れてきたことが何よりの証拠だ』

『わたし……あなたの命令に従います』

典子は、がっくりと首を垂れ、大粒の涙を流しながら、ついに屈服したのである。

◇ ◇ ◇

典子はその場で全裸になるよう命じられ、半ば暴力で張に二度までも犯された。破瓜の出血を内腿にしたたらせ、泣きじゃくっている典子を残忍な目で見つめながら、張は手元のボタンを押し、三人の部下を呼んだ。

『早く連れていけ。この『伝書鳩』の乗る東京直航便の出発はあすの夕方の六時だ。営業所待機はその三時間前だから、少なくとも正午までにはブツを運べる体に鍛え上げろ』

三人の男たちにこづかれながら典子は、コンクリートの荒壁も荒々しい三坪ばかりの地下室に全裸のまま引き立てられた。

『あなたの方の荷物を運ぶことを承知したわたしを、いったいどうしようというのです。乱暴しないでください』

必死の思いをこめて哀願する典子を男たちは淫らな目で眺めながら

『荷物を運ぶだと……笑わせるな。バニティ



ケースや、ハンドバッグで運べる荷物とはわけがちがうんだ。組織の荷物はなあ、お前の体についている「うしろのポケット」で運ぶんだ。これほど安全な、隠し場所はないからな」

『そ、そんな恐ろしいこと……わたし、絶対見つからないように運ぶ自信があります。だから、そんなことはしないで……お願いです。許してください』

彼等のいう「うしろのポケット」の意味を悟った典子は、火のついたように泣き叫んだが、こういうサディスティックな仕事に生甲斐を見出している残忍な彼等を、いたずらに喜ばしただけに過ぎない。

典子は男の一人に、大きなコップにいっぱい入った下剤のヒマシ油を強制的に飲まされた。それから部屋の中央にでんと据えられた特殊な鞍馬に、またがるよう命じられた。あきらめ切った典子は素直に命令に従い、命じられるまま豊かな胸の隆起を冷たい鞍馬の背にびったりと押しつけた。男たちは、鞍馬の前足に典子の両手を、後足に両足を大きく大の字に開いて、それぞれ縛りつけ、長く伸ばした髪の毛を荒々しくつかむと、天井からたれ下っていたロープにからめ、ぐいぐいと引

き上げる。頭の皮を引きちぎられるような激痛から少しでも逃れるためには、いやでもアゴを突き出し、美しい顔を正面にさらしていなければならぬ。男の一人が鞍馬のハンドルを廻し始めると、鞍馬の後部がせり上り出し、それにつれて両足はますます大きく割られ、指をはじき返しそうな弾力のある、すばらしいヒップが、高々と持ち上げられた。つまり、女性としてはもっとも恥かしい極端なまでの、俯伏位の姿態を、とらされたのである。

『いつ見ても、この眺めだけは、あきがこないな。おや、どうしたい。腹がぐるぐる鳴ってるぜ』

典子は、さっき飲まされた下剤が効いてきて、襲ってくる便意と懸命に斗っていた。

『よしよし、もっとすばらしいことをしてやろう。もう少し辛抱するんだな』

天井から吊り下っているフックに大きなイリガートルが引っかけられ、五千CCもの石鹼水が満たされたうえ、ポンベから圧縮空気が注入されて、いちだんと圧力が高められた。そして嘴管をとりつけたゴム管が、典子の体内に圧縮空気によって奔流のようになつた冷たい石鹼水を、恐ろしい勢いで一気に送

りこみ始めた。みるみる典子の腹部は妊娠末期のような蛙腹にふくらんでいく。

『ウウッ、く、くるしい』

三分間は、どんなことがあっても持ちこたえろ、と厳しく命じられた典子は、美しい顔を蒼白に引きつらせ、ふくれ上った腹部への負担を少しでも軽くするため、水蜜桃のような胸の隆起を押しつぶすように荒々しく鞍馬にこすりつけながら、それですらなくとも高々とさらされているみごとなヒップを恥かしさも忘れて、いっそう高く持ち上げ、体中に脂汗を流して苦斗した。

両手、両足を鞍馬の前後四本の足に、それぞれ固定されているため、どんなにもがいても、ごくわずかししか体は持ち上らない。典子もがけばもがくほど、両手両足を縛した皮ひもはぐいぐいと皮膚に食い込み、無残な跡を作っていく。典子の様子を観察していた男たちが許可を与えたのは典子が失禁寸前のところだった。その点、にくらしいほどみごとなタイミングだ。水道の蛇口につながれたホースから水がほとぼしり、典子の汚辱の跡はきれいに流し去られた。

『すっただらう。だが、喜ぶのはまだ早い。これから、いよいよ本番だ。あしたの



昼までに、すばらしい道具で、そのお前の可愛いうしろのポケットにコーラのびんがすっぽり納まるようにしてやるからな』

男たちは気の遠くなるような恐ろしいことをしゃべりながら、まず一服とばかり、鞍馬に浅ましいポーズで固定されたままの典子をそのままにして、タバコを吸い始めた。

◇ ◇ ◇

そのころ、典子を密輸組織の手に渡し五百万円のボーナスを手にして自由の身になるはずだった恵美の上に、恐ろしい運命が見舞っていた。バンコクの売春窟へ売られていくことが張から告げられたのである。

『二年間もつきあってきたお前とこのまま別れるのは、なんとしてもさびしいし、心残いだ。ちょうどバンコクから『美しい中国娘のスチュワーデスをぜひ』という注文がきているので、お前に行ってもらうことにした。お前も、まんざらきらいな道でもなし、思いきり男が抱けるのだから、うれしいだろう』

『そんな……約、約束がちがいます。鬼、悪魔、けだもの！』

あまりのショックに半狂乱になった恵美は張につかみかかったが、たちまち殴り倒されかけつけてきた張の部下たちの手で全裸にむ

かれたうえ、厳しくうしろ手に縛り上げられ足首にも縄がかけられた。そして口には恵美がいままで身につけていたブラックのパンティが押し込まれ、さらに大きなバンテージ・テープがびったりとはられた。うめき声さえたてられなくなった恵美は、憎悪のこもったものすごい目で、男たちを見回すだけ。ごろりと床に転がされた。

世界各地にスチュワーデスを使った密輸組織を網の目のように張りめぐらせ、鉄の規律と身の毛もよだつリンチで脱落者を消し去る非情な彼等が、組織の内幕をかいま見た『伝書鳩』を約束の二年間がきたといってそのまま大空に放つような、甘い温情を示すはずはなかった。二年間という期間は、若く美しい『伝書鳩』たちのうしろのポケットの限界を示す数字だったのである。

『伝書鳩』たちが香港から運ばされる純金の円柱形延棒は直径五センチ、長さ十八センチ重さ二キロという人間の限界いっぱいを示す大きなものだ。ときには、それが長いゴム袋に密封された大量の麻薬になったり、一箇が数十万円もする腕時計の二ダース入り円柱ケースになったこともあった。そして、『伝書鳩』たちが香港へやってくるときは、これら

の品物の見返りとして、品物を受けとった国の最高額の紙幣の束がたくみに丸く巻き込まれ、ビニールで厳封されて、運ばさせられてくる。

このようにして二年の間に六百回近くも利用された『伝書鳩』たちのうしろのポケットは、約束の期限の近づくころには例外なく括約筋がすっかり弛緩して、脱肛状態となり、とくに純金の延棒を運ばされるときなど、二キロというその重さに耐えられず、脱落しそうになることすらあった。

組織が必要とするのは、ぴっちりしめる健康なポケットであり、大事な品物が脱落するような使い古された、しまりのないポケットは必要としない。二年間というのは多年の経験から割り出されたポケットの耐用年限であり、これに達した『伝書鳩』たちは、自らを恐ろしい生地獄である売春窟へ送る使者とも知らずに、忌むしい仕事から解放される喜びと、五百万円のボーナスという、ありもしない好餌を信じ込み、新しい犠牲者を探し出してくるのである。

『どうだ恵美。これでお前がバンコクに売られていく事情が飲み込めただろう。これを一石二鳥の妙計というんだ。それに、うしろ好



みのセックスが大流行だから、すっかり訓練済みのお前を見た客は大喜びをするだろうよ』

張は涙を流してバツタのように頭を下げ、けん命に哀れみを乞う美しい恵美を心地よげに見おろしながら毒突いた。許されないと知って両手、両足を縛られながらも死物狂いになってはね回る恵美は、たくましい男たちの手でたちまち押え込まれ、その脊髄には、過去の記憶の総てを喪失させ、白痴状態にしてしまう恐ろしい注射器の針がぶつりと突き立てられた。

◇ ◇ ◇

地下室では、いよいよ典子のポケット訓練が始まろうとしていた。鞍馬に固定され、極端なまでの俯伏位をとらされている典子に、男たちは超高圧浣腸を施した理由を説明していた。器具を使用して拡張にかかると猛烈な排便感が襲ってくる。正常な状態だと括約筋が働くが、器具によってまったく用をなさない。それに二十時間近くもかかって拡張を行なうため、まずヒマシ油によって胃の食物を腸へ送り出し、直腸、大腸はむろんのこと、小腸にまで大量の石鹼水を送り込む必要上、圧縮空気による超高圧の浣腸を実施する。文

字どおり体中に食物の残滓を一物も残さない完全無欠ともいえる訓練のための特殊浣腸なのだ。

髪を天井からのロープにからめられ、思い切り引きしぼられているため、ヒップを突き出した俯伏位でしかもアゴまで突き出すという浅ましい姿態の典子に、男の一人が近づきいきなり可愛い鼻腔に鼻鏡を差し込み、思い切り広げた。

『クッククウ』

哀れな声にならない声を出した、典子の涙にぬれた美しいバラ色のホホを、びたびたたきながら男は、いっばいに広げられた鼻腔にピンセットを使って脱脂綿をぎゅうぎゅう詰め込み始めた。

『心配するな。お前の苦しみを少しでも楽にしてやろうと、気を使っているんだ。鼻で呼吸すると括約筋がびくびく動いて、痛くってしょうがないんだ。いいか、始まったら口で“ハアー、ハアー”と、深呼吸をくり返すんだ。そうすりゃ幾分かは楽になる』

しゃべりながらも男は手ぎわよく、左右の鼻腔の奥の奥まで堅く脱脂綿を詰め込み、まったく鼻呼吸ができないように密栓してしまった。これで準備はまったく完了し、恐ろし

い一方的訓練がいよいよ始まるわけだ。男たちは壁にかけられた時計が五時を示しているのを確認すると

『あすの正午まで十九時間か。急ごうぜ』

というなり、思い切り突き出さされている典子の白い豊かなヒップをびしゃりとたたいて、さもうれしそうに大声で笑い合った。

◇ ◇ ◇

典子は呻きに呻いた。ひやりとした冷たい金属が触れたかと思うと、いきなりグワツととび上りたくなるような圧力を内側から感じたからであった。

肛門鏡が固定されたのである。器具を静かに回転させながら男の指が素早く動いて上下左右とまんべんなくワセリンがぬられる。

典子の体は緊張のためか、痛みのためか自然にブルブルと小刻みに痙攣している。やがて器具が除かれたらしく、苦痛がすっと消えた。

『きれいなもんじゃないか。こりゃ鍛え甲斐がある。がん張るんだぜ』

『お前、痔でなくて幸せだぜ。もし、痔なら“伝書鳩”にはなれっこない。この場から売春窟へ直行のところだ』

男たちは典子になぐさめとも、激励ともつ



かぬことばをかけながら第二段階の作業にとりかかった。それは使用しないときこそ、ぴたり閉じているが、ネジを操作して全開にすれば先端が十センチにも、広がる腔鏡だった。本来の目的は婦人科医が診察に使用するものだが、男たちは非道にもそれをこの訓練に用いるのである。

『こんどのは前のようなわけにはいかんぞ。しっかり覚悟をしておくんだな』

そのことばが終わらぬうちに、前のとは比較にならぬ大きな金属が、典子に襲いかかった。

『できるだけゆっくりネジを巻いてやれよ。焦ると傷つけて出血するぞ』

男たちは全部うしろに回り、一点に視線を集中しながら、ギリッ、ギリッ、とネジを巻き始めた。その瞬間、典子の口から

『アーッ。止めてえー。くるしい……』

という悲痛な絶叫がほとばしった。体中がまるでオコリにかかったように激しく痙攣しあまりの苦痛に思わず唇を歯でかみ破ったと見え、口元から鮮血がたらたらと流れた。

『なにをいってやがる。まだ序の口だ。ゆっくり深呼吸をやってみな』

『いっそ殺して』

恥も外聞もなく泣きわめきながらも、典子は少しでも苦痛から逃れようと「ハアーッ、ハアーッ」と深呼吸を始めた。それに合わせて、情ようしゃもなくネジが不気味な音をきしませながら巻き上げられていく。彼らにとっても大切な目的があるから、傷つけないように慎重であるし、絶えずワセリンを補給しているが、器具の先が開いていくのに従って典子の痛みはますます激しく、文字通り、はらわたをかきむしられるような悲鳴が地下室いっばいに響き渡った。

ネジが三分の二まで巻かれ、器具の先端が八センチばかり開いたところで凄惨をきわめた拡張作業は中止された。といってもそのままでの状態で固定されたのだから、激痛はいっこう和らげられない。

典子の顔は蒼白となり、窒息寸前の魚のようになせわしく口をパクパク動かすだけで、もはや声を立てる元気もなかった。全身は水をぶっかけたように汗と脂にまみれ、無残にも器具をのぞかせたままのヒップが呼吸しているかのように、ときどきビクンビクンとふるえた。

器具内部の様子を点検しながら男たちは、『これだけ広けりゃあ、こっちから入った風

が口から抜けていくぜ』

『あんな小さなものがこれだけ広がるんだ。人間の体っていうものは不思議なものだぜ』と手際のよい自分たちの仕事ぶりを自画自讃しながら張に結果を報告するため、地下室を出ていった。

◇ ◇ ◇

典子は哀れにも、そのままの状態で翌朝の八時まで放置された。水は与えられたが、固形食はいっさい与えられず、体力を持たせるため夜中にリンゲルの点滴を受けた。頭髪をからめて吊り上げていたロープもほどかれたが、鞍馬に俯伏位で縛りつけられたままだったから、ねむることなど思いもよらず、一晩中、激しい苦痛と闘い続けたのである。

『せめて局部麻酔を……』

と、典子は夜中に何度、嘆願したかしれない。しかし、男たちは頭から受けつけなかった。苦痛の極限を徹底的に味あわさなければ一人前の「伝書鳩」になれない——というのが組織のモットーであり、この非人間的な方法は、麻酔のような安易なやり方をとって、万一、ブツの運搬中に麻酔が切れ激しい痛みに耐えかねて思わぬ失敗を演じる危険を未然に防ぐのにどれほど役立ってきたかはかりし



れないものがあつた。

翌朝八時、典子はようやく悪魔のような苦痛から解放され、鞍馬からも降ろされてベッドに横たわって休養をとることを許された。しかし訓練は一分一秒の休みもなく続行され、こんどはベッドに仰臥した楽な姿勢で、運ばされる純金の延棒より一回り大きな金属製ブージーに耐える練習が、約三時間、続けられた。

これはしかし、あの強烈な苦痛の直後でもあつてか、典子にとっては比較的、苦痛も少なく、きわめてスムーズに終わった。赤くただれ、ヒリヒリ痛むアヌスに軟膏をすり込んだ男たちは

『ようし、これで、めでたく卒業というところだ。お前もいっしょに張兄貴のところへついてきな』

典子は再び最初に入った応接室へ連れていかれ、張から『伝書鳩』としての心得をいきかされた。

ブツを隠す直前には必ず下剤と高圧浣腸をかけて、体内をからにすること。

運搬中はどんなことがあっても水以外の固形物は、いっさい口にしないこと。

運ばない時でも絶えず軟膏をよくぬって手

入れすること。

——などが主なものであつたが、万一、組織を裏切るようなことがあれば、本人はむろん家族まで、もっとも残忍な方法で命を断つぞということがくり返し強調され、典子を怯えさせた。

食事のとれない典子のためにビタミン、葡萄糖などの栄養剤を多量に混入したリンゲルの点滴が再び行なわれ、約三時間、典子は泥のようにねむつた。

起こされたのは午後二時半。典子はベッドの上でヒップを高々と持ち上げた恥かしい俯伏位をとらされた。

張の手にはワセリンをぬった純金の延棒が不気味に光っていた。

体の奥底までしみ渡るような純金独得の冷たい感触と、ずしりとくる重量感。

背中を叩かれて立ち上った典子は体の重心がぐっと下ったように思えた。痛みはさほどないが、不愉快な異物感に典子の顔は思わすゆがんだ。

『最初は苦しいが、二、三回も運べばなれるそうだ。ブツは間違いなくさっきいきかせたところへ屈けるんだぞ、いいな。おまえも生きて家族の者とあいてえだろ』

◇ ◇ ◇

午後六時——典子の乗り組んだ香港発の東京直行便DC8ジェット旅客機は銀色に輝く巨体をふるわせながらのろのろと動き出し、ゲートから離陸地点に向かった。

空港には多くのスチュワーデスの美しい姿があつた。しかし、典子をワナにかけて恐ろしい組織の手に渡した同僚のスチュワーデス趙恵美はいない。営業所に退職届がだされていたのだ。恵美がバンコクの売春窟に売られてしまったことを知っているものは、ここには誰もいない。

『アテーション・プリーズ……』

マイクから流れる村上公子の明るい声が典子の耳にうつろに響く。典子の目からは自らの不幸を嘆く涙が、ほろりと落ちた。機は、すでに離陸態勢に入り、耳をつんざくような轟音を立てて、長いラン・ウェイを疾走していった。

このラン・ウェイには、悲しい『伝書鳩』にされた世界各国五十数人の若く美しいスチュワーデスや、売春窟に呻吟する多くの元スチュワーデスの真珠のような涙がこぼれているにちがいない。

——(おわり)——



被虐の旅シリーズ

仙人掌の夢

由利美千子

九州から帰って、暑い夏の日も過ぎていった。

葉山にすえられたお灸のあとは、小さく色が変わっていたが、ドレスでかくれるところだったから、伯母にみとめられることもなくすんだ。

私は風呂へ入る度に、その痕を一つ二つと数えてみる。

あの島原のホテルの小さな中庭で、石燈籠に縛られて、胸にもお腹にも、腿にも、もぐさの塊をのせられて、その煙の中であえいだ日が、なつかしく思い出された。

あんなに苦しかったのに、その苦しさが実感として体によみがえらないのは、どうしてだろう。

何故、あんなひどいことは、もう沢山だと思わないのだろうか。

私は葉山を恋しく思い、葉山の前にぐるぐる巻きの身をさらし、彼の手で動物のように扱われるのを望んでいる。

何故なのだろう。

葉山は、まだ私の最後の線をおかしていない。

朝のコーヒーを一緒にのむ間なのに、二人



は他人なのだ。

私の若い肉体が燃えるのに、彼はそれをしずめてくれない。

乳をいじり、舌を吸って、身動き出来ない私をいじめぬいて、ひとりで寝てしまう。

私はいつもいらいらし、そして、いじめられたと思う。

けれど、もし私の肉体が、単に男を求めるなら、若い男は沢山いるのだ。



それなのに、私はそれだけでは満たされない自分を知っている。

ある夜、寝苦しいままに、私は自分の足首をそろえて、自分で縛ってみた。

それから自分の胸へ縄をまわした。

乳の上も下も、ぐるぐると自分で細引をまきつけた。

両手にまわすと、そのまきつける作業が出来ないので、両手の自由はそのままにして、

ただ、胸と胴に細引をまきつけたのだ。

自分で自分の乳がゆがめられた形になっていくのに、みいった。

私はとうとうアブノーマルになってしまったのか――。

恐ろしいと思った。

しかし、それはひそやかな遊びと一緒だった。細引の間から奇妙な形にとび出している乳首を、自分の指でつまんだ。

女の体は、自分の手で乳首にふれても電流が走るような感じを受けるものなのだ。

しかし、私はまだ縄に束縛された実感がうすかった。何故なら私の手が自由だからだ。

私は口を使って、自分の手首を一つにくくってみた。

しかし、手の甲を上に向けて手首をくくっ

たので、私は自分の指を乳首へ近づけるのに苦勞した。二の腕でそれをこすることは出来るが、感じ方がもう一つ足りない。

手首をしっかりくくって、無理に自分で自分の乳首にふれることを強いられているように、私は努力した。何か鞭でたたてられている感じで、私はあれこれと縛った手首を動かしてみた。

そして私は、縛られた手首を前方に突き出して、ぐるっと内側へひっくりかえすと、わけなく指が自由になることに気がついた。

私は寝床へ仰向けに寝て、手首も足首も縛られ、胸にも縄のまわっている自分の姿を楽しみながら、両手で両方の乳首をいじった。

腕をあげているのでだるく痛かった。無理にまげている手首を縄がしめつけた。

けれど私の体の芯は、お鍋のお湯が小さなアブクをたてるようにブツブツと煮え、やがて大きなアブクになっていった。

私は指を乳房からはなし、少しずつさげていった。そしてそのアブクをもう一つ沸騰させ、お鍋からジュウツと煮こぼれさせ、やがてそのアブクが徐々に小さくなり、スーツと体中の力がぬけていくまで、手首を縛ったままの右手だけ動かしていた。

目をつぶっていると、そのまま眠りに引きこまれそうになった。

私はのろのろと、手首の結び目を歯でとき足首をとき、胸の細引をとき、夜着を引きあげて、はだかのおなかをおおった。もう寝巻を着るのも憶劫だった。

畳の上に放り出された縄が、蛇のようにとぐろを巻いていた。

○

そのあくる日だった。

葉山が伯母の店へ顔を出した。

私は、いそいそとヘネシーを注ぐ。

「あした、ここ休める？」

彼が口早にきいた。

「ええ、いつでも……」

どうせはつきり伯母に雇われているわけではない。ただ、伯母の店を手伝ってあげているだけだと私は思う。私に用事があれば手伝わなくてもいいのだ。伯母は小遣いをくれるが、月給ではないし、そんな沢山の額ではない。

「じゃあ、あしたの朝九時にロイヤルホテルのロビーにいる」

それで彼との短い会話は終わった。

(車でどこかへ行くつもりかしら)



私は思った。

大阪にホテルは多いが、ロイヤルのまわりが一番車を止めやすいのを私は知っていた。

(車だと、うしろのトランク一杯、何を入れていられるかわかったものではない)

それにしてもどこへ行くつもりか……。

私はただ、いそいそとロイヤルへ出かけて行くだけだ。

けれど、葉山が来てから二、三日、この店へこないというのはおかしいなと思っていたら、伊波が、偶然にもあらわれた。

(しめ、しめ……)

と思った。

伯母は伊波を、私の恋人のように疑っている。私は伊波につれられて和歌山県のアメリカ村に近い漁村の空家で、逆に伊波を虐待してしまった。それっきり伊波に会っていなかった。

(この間は失礼)

私は声に出さず、目で彼に云った。

葉山はその間にスツと出て行ってくれた。

「美ちゃん、お願いがあるんや」

伊波はビールのコップを手にもって、その琥珀色の液に視線を落としながら言った。

「ボクはこの間の晩のことが忘れられへんの

や。美ちゃんの欲しいもん、何でも買うつた。な、もう一度ボクにつきおうてえな」

「そんな……うち何するかわからへんよ」

私は大阪弁のトーンで話した。

大阪弁の方が、客の感情をあまり傷つけずやわらかく拒絶出来ることを知っていた。

「朝のコートヒー一緒にのまんかてええ。ボク……この間のようなプレーをしたいんや」

「プレー？」

あれをプレーというのかと私は思った。

伊波を椅子に縛りつけて、腰をおろし、私のお尻の下で虫けらのような呻き声をあげさせたのを「プレー」というのか――。

「あしたから二、三日若狭へ行くの、だから無理やわ」

「若狭のどこ？」

「高浜やわ」

「宿は何てうち？」

「知らへん、お友達とグループで行くよって……。けど、浜へ来たら会えるのと違う？」

「うん」

伊波は、それ以上、聞かなかった。けれど

私は伊波が高浜へ行くだろうと思った。

行かないにしても、二、三日は店へあらわれ

れない。そうすれば伯母は、伊波とどこかへ

行ったと思うだろう。

もし伊波が高浜へ行って、私に会えなかったと、あとになって言ったら、私はグループの都合で小浜から船で大島へ渡ったといえはすむ。

恋をすると嘘がうまくなる。

しかし、それは恋する人のために他の人につく嘘であって、恋人に嘘はつかない。

それなのに、ロイヤルホテルの前から、車を走り出させたとたんに葉山はいった。

「キミはボクに嘘をついている。今日は絶対に許さないよ」

と――。

私は、だまって葉山の顔を見た。

彼は私に横顔をみせたまま言う。

「ボクがわからないと思うのか？ キミは、

一昨日の晩、誰かに愛されている」

私は、はっとした。

一昨日の晩というのは私が自分で自分を愛してしまつた晩だった。

(どうしてわかるのだろうか？)

たしかに、私はスネに傷もつ身と同じだった。そんな小さな空気の動きを彼は敏感にかぎつけた。

「ほら、ごらん。おぼえがあるだろう」



「でも、それは……」

自分でしたのだとは、恥ずかしくていえないかった。

「まあ、いい、今夜こそいわせるよ」

彼は、それっきりだまって、車を運転していった。

○

車はナニワ筋を南へ走り、大国町から真直ぐ堺へ向かった。

その道は曾って伊波と通った道だ。

葉山はやっぱり伊波との間を疑って、わざとこの道をえらんだのかと思った。

和歌山を通り、日高川の近くで鮎を食べて小休止した。

（今夜はどうなるかわからない）

私は少しよけいに食物をおなかに入れておこうかと思うほどいじましかった。

いや、観念していたという方が当たっているだろう。

どこで泊るかしれない。けれど多分、今夜はいじめぬかれるにきまっている。

夕食さえ、満足に食べられるかどうかかわからない。

鮎の塩焼に鮎のてんぷら、そして鮎ずしまで食べている私の健啖ぶりを、彼は皮肉な微笑で見ていた。

笑で見ていた。

縄の衣裳を着ずに食べられるのは、この昼食ぐらいのものだ。

それにしても食事はおいしかった。

彼と二人のドライブのたのしさが私の食欲を刺激したのだ。

「道成寺へ行ってみるか？」

彼は日高川の西岸をのぼり、道成寺へ車を向けた。

安珍清姫の話や、歌舞伎の舞踊で有名な道成寺だけれど、境内はせまかった。

「女人は諸仏の母なり抱く勿れ夜叉の心」と書いた木札が門のわきにかけられていた。

意味深長の言葉である。

境内の木の高い所に蟬がむらがっていた。

近よると、蠅のようにとぶ。

高い木に一匹や二匹止まっている蟬を見たことはあるが、こんな低い細い木の幹に、ベッタリと蟬がとまっているのを見るのははじめてだった。

木をゆすると、木の肌が一枚ズルズルとむけるように、黒いかたまりとなって蟬がとんだ。

どの木も、どの木も、腫物のように木肌が黒く固まっていて、それがズルツとはがれる

ように蟬がとぶ。

私は曾って何かに書いてあった奴隷のリンチを思い出した。

姦通した女が全裸にされて、木に縛られて

いる。  
シーンとした静けさの中で、かすかな、かすかな音がしだす。

それはズルズルともスーッとともザーとも書きようのない音である。

やがて、女の縛られている傍の木の肌が下へずりおちるように見えたかと思うと、黒い带状のものが、木から女の方へ徐々にせまってくる。

それは蟻の大群なのだ。

やがて女の肌をその黒い帯は這い上っていく。幾条にも分かれて、女の足といわず手といわず、真黒にぬりつぶしていく。

女が悲鳴をあげなければ、そこに生き物がいるとは思えない。

女はのがれようと身もだえするが、かたく縛られた身はのがれようもない。

蟻の大群の中で、女はだんだんに声が細くなり、やがて無気味な静かさがやってくる。

私は、おびただしい蟬の群の中に縛られることを、ふと思った。



裸身に蟬がとまる感触はどんなだろう。

ふり払っても、ふり払っても蟬はべったりと体中にとりついてはなれないだろう。恰度この木の肌にとりついていてるように……。

私はこの腕が鳥肌たってきたのに気がついた。

真昼間の境内では、彼も縄をとり出せなかったが、私は想像だけで充分だった。

虫というのは何によらず、気持のいいものではない。

でも私は、彼にそれをいうのはよそうと思った。それは彼にいじめる手を一つ教えるようなものだ。

寺の門前には蟬を入れる虫籠を売っている店があった。

私はわざとそれを横目に見て、車へ帰ったのだ。

○

葉山は、伊波の別荘のような空家が和歌山県にあることを知らないようだった。

この方面へ向かったのは偶然の一致だったのだ。アメリカ村へ曲る道を通りすぎ、車は白浜へついた。

「宿へ行くにはまだすこし早い。植物園へ行くか」

彼は言った。

熱帯植物園に入ると、名も知らない熱帯の花が咲き乱れていた。

枝についた青いバナナも珍しかった。

しかし、二人の足をとめたのはサボテンの温室だった。

ここには五十万個のサボテンが集められているという。

こけしのような形のサボテンがニョキニョキとはえている前に、それよりも小さくて赤い、こけし形のサボテンが何百本も植えられている一隅があった。

それはまるで小さな小人が全身にトゲのある衣裳を着て整列しているようで、順に、小人の背が高くなり、うしろの方はこけしよりも大きく、鐘乳洞の石筍のような形で何本も天井へとびていた。

その一つ一つに細かい針がある。

こけしにトゲをはやした青い植物は奇妙な感じがした。

もし裸体でこの中へころがされたら……。

思っただけで私はそう毛立った。

日本にサボテンが入ってきたのは徳川時代のことだという。

一鉢の価いが何両という高価なものだった

のだろう。

だから、日本の拷問の道具にサボテンは使えようがなかったのだろうが、もしこんなサボテン山が日本のどこかにあったら、切支丹の処刑や拷問のいい道具にされたらと思うた。

徳川時代の刑具に似たサボテンもある。指でそっと針にさわってみた。

「あっ！」

と、思わず声をあげた程、それは鋭どかった。

とりわけ丸い形で、黄色い針が三稜もあるような種類は、針のさきへさわるより痛かった。

白い針が苔のようについているのは痛くなかった。

けれど、もしこのサボテンの温室に誰もいなくて、裸に縄をかけられて、素足でこの植えこみの中へ追い立てられたらどうなるだろう……。

小さなサボテンの群の上に、正座させられたらどうなるだろう……。

そんなことを私は考えながらめいていたが、私の考えることを彼が考えないはずはない。



鉢植えのサボテンをいくつか包ませている彼の姿に、私は不安と期待の入りまじったものが、胸一杯ひろがってくるのを感じた。

○

「一泳ぎしたいから、夕食はなるべく、おそくしてほしい」

宿の女中に彼がいったのは、夕食前にすることがあるからなのだろう。

日本間とベッドルームのついた部屋で、バスもトイレもついていた。

ベッドはすでにいつでも寝られるようになっていたから、ベッドルームをあけられる心

配もない。

ジャングル風呂という大浴場があると女中はすすめたが、私たちは部屋のバスで埃を洗い流した。

彼は浴衣に着かえたが、私はそれを許されなかった。

「ボクの愛玩動物だろう。動物に衣裳はいらないよ」

彼は冷たく云った。

「そのかわり、動物には動物にふさわしい衣裳があることを君は知ってるね」

私はだまっとうなずいた。

動物には言葉もないはずだった。

「さあ、キミの装身具だ、プチネックを飾ってあげよう」

彼は私の首にプチネックをはめた。長い鎖がついていた。

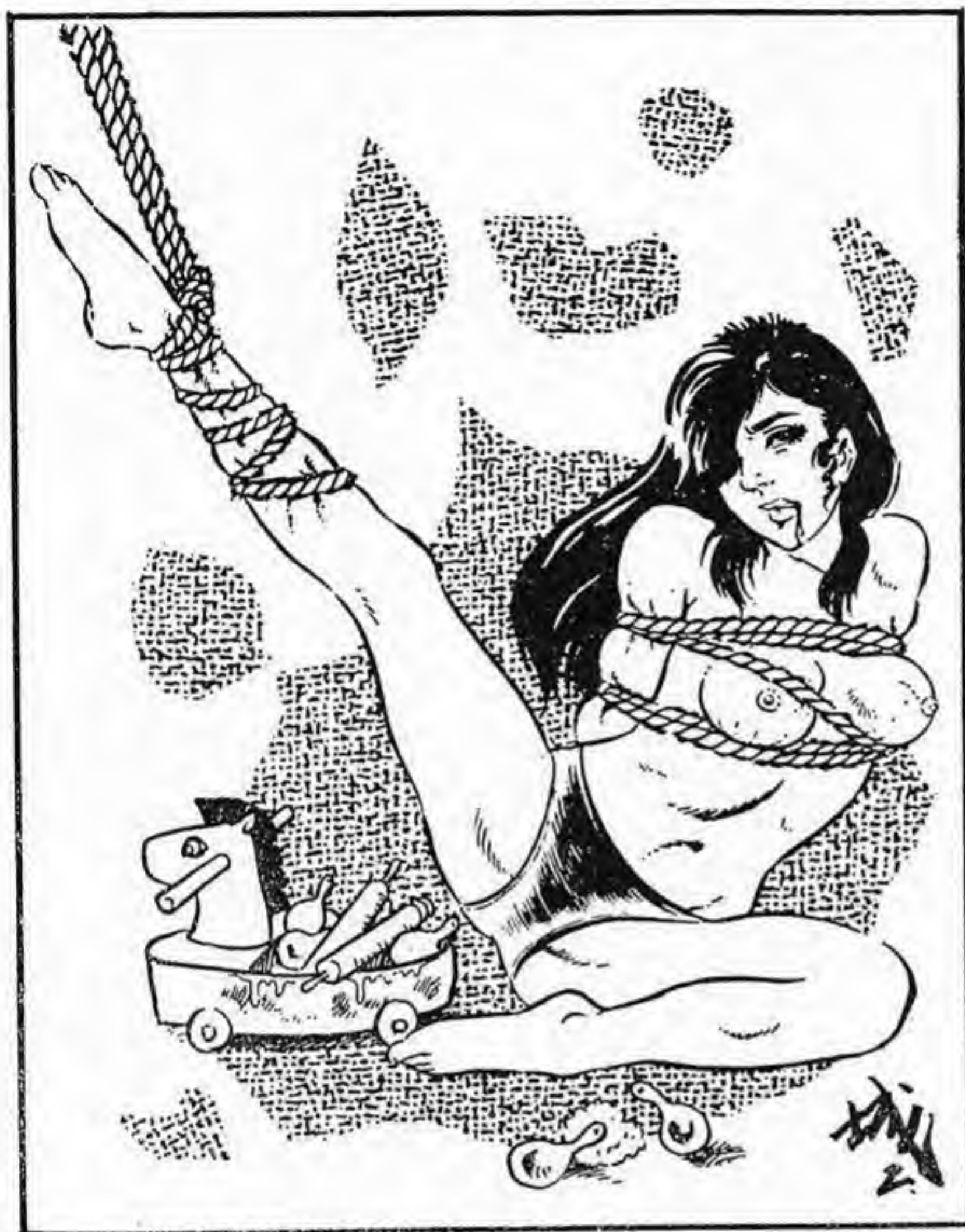
今年はプチネックがはやるという。

犬の首輪のような装身具を女の子が好むのは、ドレイになりたい女の子の内心の欲求なのだろうか――。

ブレスレットもアームレットも裸の腕に飾られたが、どれも長い鎖がついていた。

「さあ、そのふとんをこっちはこぶんだ」

彼は二つ並べたベッドの一つから、掛布団



読者ギャラリー 『恥辱の木馬』 豪城二



をとるように命じた。

私は鎖をジャラジャラいわせてそれを片方のベッドの上にのせた。

「敷布団もとるんだ」

彼はいう。

「お仕置場にふとんはいらない」

私は私の手で、自分の責められる場を作らされているのだ。

「ワラぶとんもとるんだ」

彼はベッドの一番下のワラぶとんまでとれというが、それは重く木わくにはまりこんでいてとれなかった。

「じゃあ、これを敷け」

彼はトランクの中からビニールの敷物を取り出した。宿屋のベッドを汚さないためなのだろうが、それは点々と、血のしみのようなものがついていていた。

（誰をこの上で責めたのだろう）

私の胸に嫉妬が走った。

そして又、そのシミは

（何をされるんだろう）

という恐れを感じさせた。

「早くしろ」

彼は言った。

私は裸で、首からも腕からも鎖を長くたら

した恰好で、ベッドの上にビニールの敷布を敷いた。

「さあ、その上へ寝るんだ」

彼は言った。

私が仰向けに寝ると、彼は私の手を上へあげさせ、ベッドの枕もとの飾り彫のある木のうしろで、両手の鎖を一つにくくった。私の両手は左右に開かれて固定された。

この腕にはめられたアームレットからたれていた鎖も頭の上の木枠にかけて固定され、勿論、首の鎖はいうまでもなかった。

私の上半身は動けなくなった。

彼は私の脚も左右に開いて、ベッドに固定した。ベッドは私の隣の台になった。

「もっと縛りたいか？」

彼は言った。

首も腕も、脚も固定されたとはいえ、胴には何もかかっていなかった。

「順に縛ってやるよ」

彼は皮肉に言いながら、無防備の私の体をなめるように見廻した。

私は乳首のさきが、かたくなってきた。

すると、彼は私の目の前へ、わざと見せびらかすように、サボテンの鉢をさし出してみた。

あの鋭い針をもった、王冠竜と名づけられている丸い玉もあった。

小さい西瓜ぐらいの大きさの金鯢というのもあった。

「それをどうするの？」

私は思わず言った。

「どうしようか？ 小さいのをキミの口の中へおしこんで、猿ぐつをはめてやろうかと思ふんだが……」

「いや！ そんなこと……」

いくら小さくても、トゲのある丸い玉を口の中へおしこまれて、猿ぐつをはめられるなんて……

「いや……いや……」

私は首を振った。

「ま、そうするとキミの音色がきこえなくてつまらないから、やめとこか」

彼がいうのに私は、ほっとした。

しかし、その音色は、すぐためされた。

金鯢の鋭い針で私の乳首が突かれたのだ。

「痛っ……」

私は息がつまった。

けれど、次の瞬間、片方の乳房にも針が突き通った。

「ああっ……」



私は痛さに体をよじった。

赤い糸のように血が流れるのが見えた。

「どこがいちばん痛い？ ここかい？ こっちかい？」

彼は容赦なく胸も、おなかも、サボテンの針でついた。足の裏まで突いた。

サボテンの温室でサボテンを買う客は多いだろう。しかし、みんな観賞用に買うのではないだろうか。

その小さな植物で、私は変わった音色をあげさせられているのだ。

「縄がないと淋しいだろう。縛ってやろう」  
彼は別の細い鎖をとり出すと、胸とベッドへまきつけたが、その胸の間へ平たい、おしやもじのような形のサボテンを、鉢からぬいておしこんだ。

「痛、痛……」

私はその針に少しでもふれる面を少なくするために息を吸って胸をへこました。長くは続かなかった。

胸を上下させると、針が肌にくいこんだ。「かんにんして……もうダメ……」

私はふだん注射されるのさえ恐がるのだ。注射針は一本なのに、サボテンの針は一本ではなかった。

「まだまだ序ノ口だよ」  
彼は平然としていた。

今度は、おなかの上に、小さい鉢を逆さにおいた。

「痛……」

といてみたものの、それは小さかったのか、我慢の出来る痛さだった。

「よし、しばらくそうしててもらおう。ボクはジャングル風呂というのを見てこよう。

何か面白いものがあるかもしれない」

彼はいうと、一番小さい鉢から丸いサボテンをとり、私の口の中へおしこんだ。

「ああ」

私は思いきり口をあけて、その針にさされまいとした。

しかし彼は私の口を無理にとじさせると、その上からタオルを巻きつけた。

「むう……」

私は、もう声も立てられなかった。

大きな息をすると、胸のサボテンが痛かった。彼は私の胸やおなかに、サボテンの鉢をさかさにして置き出した。

一つ、二つ、三つ……

「むう……」

私は、のどの奥であえいだ。私の白い裸体は鉢と針にいろどられた。この苦痛を、いつまでこらえろというのだろう。

ベッドルームの戸をしめると、彼は部屋の鍵を外からかけて出て行った。

(もうやめて……痛い……もうダメ……)

私は、おなかの中で叫びながら、夕闇の濃くなっていく天井をながめていた。

## 天星社刊

## △限定版グラビア写真集▽ 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

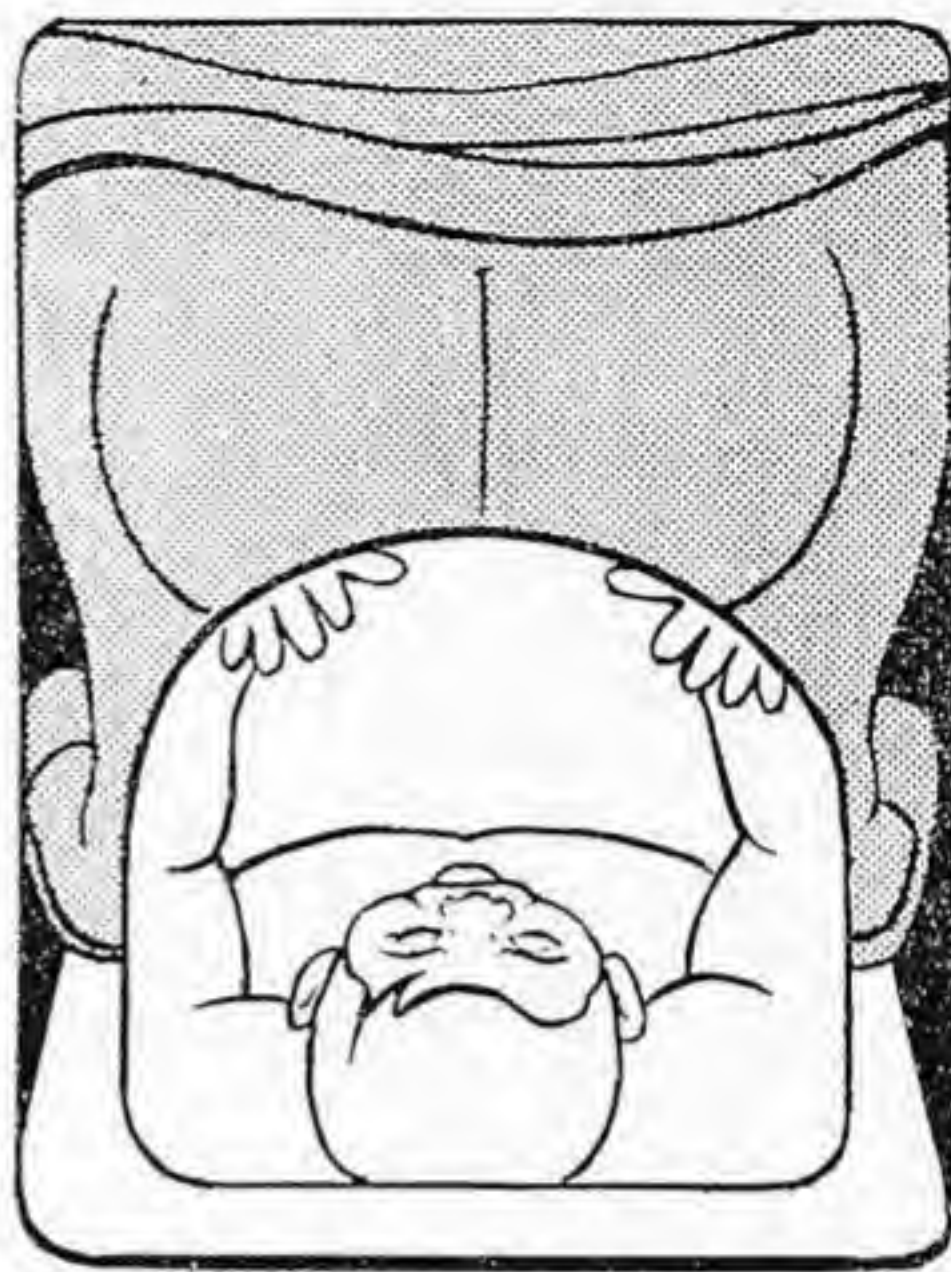
M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円(送共) 略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生体のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いします。



カット・岡 たかし



(1)

たっぷり時間をかけて、念いりに化粧をすませた千代は、いつもの習慣で、店へ出る前のトイレをしておこうと立ち上がった。

店では年中和服だから、着てしまったら、しゃがむのは不自由である。だから、要求はなくても一応はそうすることにきめている。フロからあがったばかりのローブだけのハダカだから、用をたすのにはそれがいちばん都合がよい。でも二階の居間にはトイレがなく、かといって、ハダカ同然のこんなすがたで下までおりるのはうまくない。

・・・耽美と醜悪の谷間・・・



浅羽 やすし

しかし、心配はいらない。

三尺の押し入れのフスマを開くと、ピカピカに磨きあげられた、洋風の便器が、ちゃんと納めてある。だから、バスローブもかなぐりすててこれにまたがればいいのである。

コックに雇ってある信吉が、デパートの蚤の市で見つけてきた、フランス製という陶製の便器は、口が広く、底が深く、どっしりとして安定感があり、彼女の一日ぶんをたっぷりのみこんでしまう。

「外人さんは、タンクが大きいから、出るものも大量だそうで。でも、大は小をかねますから、ママこれがいいでしょ」

信吉は、デパートから届けてきた便器を、

なでながら言い、おどけて、中へ首をさしこんだものである。

千代は、習慣的に、あくびをしながら、しゃがみこんだ。

しゃがんで見上げた、眼の高さに、ボードがある。戸棚には、いろいろの洋酒や、チーズや、缶詰が並んでいる。上段には、フランスパンのカゴもある。

もともとこの室は、彼女の居間兼寝室であり、茶の間でもあり、ときには、客間にもなる。

その客間に、おまるを据えて用をたすこと



を知っているのは、信吉だけであった。

「外国じゃ、みんなベッドの下に便器をおいて、用をすますんです。始末はボクがするから、ママは、えんりょしないで、ここでやってください」

信吉は、親切めかしてそういった。しかしそれが、親切でいったのではなく、そうするほうが、信吉のために好都合だからの提案だったことは、あとでわかったのだがそんなことはどうでもよいと思う。

こうして、はだかのまま、広々した風通しのよい居間で用をたすことは、思ったより気分がよく、いちいち階下のトイレへおりにくくればたら、べんりこの上ない。

「ママ、このごろ通じがいいようね。イチジク使わないもの」

きのう信吉が、ゴマをするように言ったのを思いだす。その通りだと思う。

階下の、せまく、暗い不潔なトイレを使っていたころは不快で、便秘の連続であった。出ないからイチジクの厄介になる。厄介になるから、それなしにはいられなくなる、といった悪じゅんかんの連続が、おまるにきりかえて以来、ピタリととまった。

通じのほうはもちろんだが、それ以外の放

尿のほうも、ぜんぶここですませてしまう。はじめはへんだったが、このごろではこの居間が、トイレに思えた。

用を終え、さばさばと立ちあがり、ボードの上段のフランスパンに手をやる。

痔を病む彼女には、トイレットペーパーは固く、キズをつけやすい。紙のかわりに、フランスパンのコップをたちきり、それを紙の代わりに、使うことをすすめたのは信吉である。

「ボク、前にUSハウスのボーイだった。ハウスのマダムがやはり痔で、紙の代わりに、ボクにフランスパンで拭かせたんです。水分の吸収はいいし、肌を痛めないんですって」

信吉に熱心にすすめられ、どうかしらと、うたぐりながらためしてみたら、案外具合がよく、痔の苦しみは遠のいた。

使用済みの、汚れたパンは、これも信吉の言うようにバスケットに入れておけば、掃除のついでに捨ててくれるらしい。でも、そんなことは、彼女に用のないことだから一々気にはしない。要は、そんなよごれたパンが、目の前から消えてくれればよいのである。

パンで、あらましの汚れを拭くと、浴室に入る。ここにはビデがあり、コックをひねれ

ば人肌加減のぬるま湯が噴きだす。これで、いいねいに、からだを温めるのも、痔の手当てには欠かせないことである。彼女は、じぶんの桜いろの肌を惚れ惚れと見入った。

## (2)

千代が店へおりるのは八時過ぎからと勝手にきめている。今夜は、月三回ときめてある会員制のパーティの当日なので、店は賑わっていた。パーティの晩だけは、終店をくりあげて、九時半には一般客を追いだす。

でもその前に、サービスの意味で、ほんの五、六秒だけ千代が衣装をかなぐりすて、ミロのビーナスさながらのポーズをみせることにしているので、客はけっこう満足して帰る。

パーティの会費は月十万円なので、とてもそれだけ出せない一般客は、せめて千代の全裸をかいまみられるだけがもうけものと、この変哲もなく、ただうまくて気分がよくて安いバー「木偶」へセッセと通うのだ。

信吉は、パーティの席をセットするために汗を流している。

四人用のテーブル四個をカベによせ、中央に高さ一メートルの台を据える。台は組み立



て式で、シングルベッドほどの広さ。やわらかな、厚手で真紅のカーペットが敷きつめてあるが、それをめくると下は厚さ五ミリの高圧ガラスである。ガラスは透明だから、その台の下へもぐりこめば、台の上の人間のさまざまな姿態を真下から眼の先でみつめることができるのである。

十時になると、入り口の扉は嚴重に閉ざされ、客は四個のテーブルの好みの位置に席をしめる。メンバーは十人前後であった。

「では、ごめん」

二十万円で一カ月、つまり三回有効の、例の台ガラスの下「カブリツキ」席を獲得したYという自動車整備工場主が、浴びせられるみんなのうらやましそうな視線に少々テレながら台の下に這いこむと、パーティがはじまるのである。

パーティといっても、目新しいものでもないでもない。

台の上に横たわった千代に、天井から強烈なスポットライトがあてられ、千代は、客である会員たちの視線などにおかまいなく、台の上に横になって、手を組んだり、立てひざしたり、気がむけば起きあがったり、まるで独り寝の女性がベッドで眠れない時みたいな

仕草をつづけるのである。

ラッキーな客は、千代から甘い息をかけられ

「ねえ、足が汚れちゃったのよ、拭いてえ」と甘えられて相好をくずす。

拭いてと甘えられてもタオルはない。

でも、誰かが考えたすえ思いついて、口をよせて求めに応じはじめてから、みんなそれをまねる。

はじめにえらばれた、ラッキーな二人の客は、千代の左右の足首から五本のゆびを受けもって、長い時間をかけて、丹念に拭いあげる。

千代は、それがサービスと心得て、適当に客を交代させ、清拭を強要する。

十人がかりのゼイタクな清拭で、パーティが終るころには、完全に足の美容ができてしまふほどであった。

そんな清掃プレイのさい中でも、トイレへ行きたくなると、千代は平気で、信吉にサインする。

二階から運んである便器を、台上に据えるのは信吉の役目ときめられている。

千代はのろのろと身をおこし、いつも二階でやるのとまったく同じ方法で、便器を使用

するのである。

客たちが固唾をのんで見守るうちに用が終ると、予め五千円を払って例のフランスパンを予約してあった客が、喜色をたたえて、あと始末の手をうやうやしく差し出す。

五千円は安くないが、用済みの汚れたパンは、そのままもらって帰れるので希望者が多く、ひと晩に三、四人の予約というありさまである。トイレが終り、信吉がそっと台上から水音のする便器を捧げおろすと、席のあちこちからため息が洩れる。

そのなかみにさえ、値がついているのであるが、売り上げはもちろんぜんぶ千代のものとなる。

信吉が便器を下げるとき、なにげなくガラスの下をのぞくと、そこに工場主の放心したような顔があった。

顔は、水平にガラスに押しつけられんばかり。なんのことはない、千代はこの工場主の顔面の真上で、平然と用をたしたことになるのである。

パーティがラストに近づくと、いよいよお目あての「ムチプレイ」である。

千代はそのままの恰好で、信吉が捧げるムチをしごき、テーブルからテーブルへ、客の



頭をまたぎながら忙しくかけ廻る。

テーブルの上から、客の顔めがけて振りおろされるムチは、まともに受ければひどく痛い。しかし、客は身じろぎもせず、千代のムチの雨の前にひれ伏す。

全身にびっしょり汗をかいだ千代がガラガラと眼を光らせ、銀の線になって走るムチをピュウピュウと右に左に振り廻すのは、さながら映画の立ち廻りをみるようであった。

しかも、店内の照明はぜんぶ消され、窓は厚手のカーテンに閉ざされて外光を完全にさえぎっているのだ、いつ、どこからムチが飛んでくるかはわからず、客たちは眼や耳を切られないように守るのがせい一杯。

しかし、勇気のある一人が、そっと眼を開いてテーブルの上に立つミロのビーナスを拝んだら、もういちど眼を廻すだろう。

いつのまにやらテーブルの上には、パンツすがたの信吉がウマのように這っており、千代はその背にまたがってムチを振っているのである。

台の下に這いこんだ、今夜の幸運の客が引きずりだされて、じかに床の上に這わされるころ、パーティはクライマックスに達するのである。

千代は、散々ムチを振り、合いの手にあふった強烈なウォッカに酔い痴れていた。

酔うと、よけいトイレが近くなる。つきあげるような下腹の痛みに、どうしてもなかのものを排出してしまわなければ納まりはつかないのだ。

信吉に命じて、つつ立ったままイチジクを注入させ、時がくると客の見守るなかで、床に伸びた工場主の面上に小気味よくぶちまける。

工場主は手荒く顔面を汚され、はじめはピクリと身動きしたが、それっきりでそのままの姿勢をくずさない。室いちめに異様な香気がただよい、全員、トイレにぶちこまれたような酔い痴れたきもちのうちに、夜はふけてゆく。

あわれなギセイ者というより、幸福者というべきか、まだ床に這ったままの工場主は、顔面にへばりつく異様なものを拭おうともせず、否それどころか、舌なめずりさえしながらイモムシのようにころがり廻り、うなりうめく。その痴態に、共感と羨望のまなざしを送りながら、定刻の十二時を告げる信吉にせきたてられて、会員たちは、名残りおしげに帰るのであった。

客の山中からすめられ、彼の演出にしたがって、月に三回、こうしてひそかに開かれる非公開の「SMパーティ」は人気をよび、会費は月十万円、そのかわり、会員は、パーティ以外の日には、水割りだけは何杯でもお代わり無料というサービスつきで、いつも欠員なしの状態であった。

というのは、非公開のことゆえ、メンバーはいちおう十五人以下におさえており、入会資格にもやかましい規則をこしらえた。

要は、千代が個人の資格で会員を集め、そのすばらしい姿体を惜しげもなく観賞させたり、トイレアクションをリアルにみせたり、ときには千代のそうした食慾の果てのものを分けるという、あくまで千代の美の讃美者のためのクラブ形式であり、信吉を小道具にかう女王シヨウであった。

都会では、こうしたSMパーティが個人宅やマンションを舞台に、くりひろげられている。その一つを、千代はオーナーしているのである。

### (3)

信吉は、十八の春に千代にひろわれた。

千代はそのとき二十四歳。彼女は浜松で生



まれ、十七のとき東京の新宿に流れついて、美人喫茶のウェイトレスを振りだしに、水商売にもまれもまれて、人の目をみはらせるような美ぼうのおんなに成長した。美ぼうのわりに性格は荒っぽく、男なんか、虫ケラとは思っていない。

ウェイトレスからミストルコまで。

四年間の荒かせぎで、銀行に五百万円の預金ができたと、うまいことに、歌舞伎町の路地うらにいまにも倒れそうなボロ小屋同然の、しかし二階建ての売家がでた。

土地は借地だが、つくるみで五百万円の言い値を四百万円に値切り、ここでいちおう経営者になったのである。

バーの看板はだしたけど、実は深夜の客をねらったおにぎり、サンドの軽食スナックみたいな手軽なものであった。しかし、これがうまく当たり、開店早々からすべり出しは上々であった。ボーイのつもりで雇った信吉はよく働き、ほかに雇い人をおかなくても店はやってゆけた。

軽食スナックを三年やって、これ以上は伸びそうもないこの店に見切りをつけ、高値で売って、こんどはすこしはましな店を手に入れた。階下が店、二階が千代の私室。私室と

いってもまっ赤なジュータンを敷きつめ、和風パースタイルにしたのが当たって、いまでは月の純益が三十万円。信吉を相手の、のん気な商売がつづいている。

信吉は、千代にひろわれたことを心から感謝している。

水のみ貧家の三男坊に生まれた彼は、中学校をでると待ってましたばかり、口べらしのためにあちらの本家こちらの分家と、農家の手伝いに、タライ廻しされる作男になった。なったというよりさせられたのだろう。村にいるかぎり、一生こうした重労働に身を粉にしなければならぬのが、三男坊、四男坊の宿命であった。

その宿命に気がついたとき、信吉は故郷を捨てる気になった。

故郷をとびだして、東京へやってきたのだが、ろくな就職口はなかった。

パチンコ店に入りびたって、玉稼ぎでやつとその日の食費を稼ぎ、夜は、西新宿の中央公園に特設された建て売りのプレハブ住宅の見本村にもぐりこんでネグラに代えた。

宿なしイヌみたいな、みじめな生活に疲れはてた信吉の前に、千代が偶然通りかかって足をとめたのは、まったくラッキーであった

といってよいだろう。

信吉にとって、だから、千代は神さまであった。神さまの命令なら、どんなきかないことでも素直に聞けるだろう。

生まれつき、千代はなぜかトイレが近く、一回の量は少量だが、ほとんど一時間おきにトイレにいきたくなる体質であった。

でも、土一升金一升の新宿では、土地を高度に活用するためトイレなどにスペースを割くのは無駄とされている。だから千代が、その回数が多い体質をカバーするために二階で用をたすようになったのは理由がないわけでもないと同時に、そのために人手が必要なのはやむをえないことかもしれない。

千代の胃腸の具合のよくないのは親ゆずりかもしれない。

一週間も便秘がつづいたと思うと、今度は四日連続の下痢という調子。

もうひとつ、ひどい冷え症のため、二十四歳にもなりながらちよくちよくおねしょまでやってしまう。それも少量で目がさめるのならまだよいとして、眠りのふかい彼女は、ドツと大量で夜具をびしょびしょにするのだから困ってしまう。酔うとかならずそれであった。月に二、三回、ビールをのみすぎると、



つい夜具をぬらすのである。

「病気だから仕方がないわ」

ふとんに世界地図を描いて、千代は平然としている。それどころか、

「信吉。病気のおねしょはどんなニオイがするか、嗅いでごらん」

と首根っこをつかまえて、まるでネコみたいにその世界地図にこすりつける。

でも、信吉はさからわない。

さからわないどころか喜んで、綿までグツグツの夜具に顔をよせ、においをハナ一杯吸いこむのだ。

でも、いやな臭いどころか、ぜいたくな香水よりも、さらにすばらしい香りみたいで、信吉は酔ったようになってしまった。

こどものおねしょなら、一回や二回は乾すだけでどうにかごまかしもできようが、いくら千代のでも夜具ぜんたいが異臭をおび始めるようになると、千代自身がまっさきに困ってしまった。

「ママ。こんなのどうかしら」

いつのまにやら、針をもつことをおぼえた信吉が、手づくりにした、おしめ。

手先の器用な彼が、細かく寸法をわりだして丹念につくりあげたそのおしめは、ためし

てみたらピタッとからだに合い、まるで吸いつくような感触であった。

でも、千代には、たったひとつ、わけのわからないことがある。

れいによって、その夜も客にすすめられるまま深酒をしてしまい、正体をなくし、手足の自由を失った状態で、信吉に二階の寝どころまで運ばれた。おしめをあててもらったのは言うまでもない。そして、二階から店のあと始末をしにおりようとする信吉に、

「ちょっと待って」  
と、声をかけた。

実はそのとき、千代はトイレにいきたかったのだ。けれど、おしめをあててもらったのだから、ここで、そのまま用をたし、もういちどあたらしいのと取りかえさせようと思っただけである。

このごろの信吉は、千代の顔色を読みとるのがうまかった。

掛けぶとんは掛けず、だらんと手足をのびし、放心したように半眼をひらき、そして、視線を一点に集め、深く息を吸ったり吐いたりするときは、おしめを濡らしているさい中と、信吉はちゃんと知っている。

だから、いま、

「ちょっと待って」

ととめられれば、あとはいちいち口でいわなくても千代の用事はわかるのだ。

「いいですよママ。代わりはしてあげます」  
信吉は、いそいそと言った。

なんとよく気のつくコだろう——なんて思いつながら、筋肉の緊張をゆるめるのは、快いことであった。

ぬくもりが、腰のほうまで回るのが小気味よく、千代はそのままのポーズで、思いきり下腹に力をいれた。自分ながらずいぶん量が多いと思うのは、今夜はビールを四本もあけたためだろう。

「もういいんですよ」

信吉は、めんどろがりもせず、もういちどていねいに、おしめを替えてくれた。

奇怪なことが、千代の眠気を払ったのは、その直後のことであった。

ぬれたおしめに、信吉が、そっと顔をうずめたところを、ねむったフリをしながら千代はぬすみみたのである。

やがて顔をあげた信吉は、千代のタヌキ寝の寝息をうかがいながら、室の片すみのカラの水盤にそのぬれたおしめの液体をしぼりだした。



力一杯しぼりだすと、水盤の上にチヨロチヨロとさわやかな音が流れ、かすかに香気がただよったみたいな気配がした。

なぜ、あんなきたないしぼり汁を集めたりするのだろう——。

心あたりはないでもない。

それは、西新宿中央公園の大噴水の前にあるベンチに、一文なしでパンのひとかけらのあてもなく、行き倒れみたいに伸びていた信吉を、小イヌを拾うくらいの、軽い心で連れ帰り、食事をふるまったあのときに、きめたことだった。

ボーイ兼、自分の身の回りの世話をさせる走り使いに、信吉が、適当だと思えたのである。

これから毎日、一つ屋根の下に起き伏しさせる以上、つまらない野心をもたせてはならないのだ。自分の前に出たら人間ではなくなり、一個の家具か家畜のようにさせなければならぬ。すくなくとも、自分より何クラスか下の動物だと思ひこませ、足下に屈伏するような従順な人間につくりかえておかねばならない。

千代はいままでも、客によっては、ムチで叩いてやったり、ロープで縛りあげて半日あ

まり押し入れにこころがしておくとき異常に熱をあげ、チップは多額に献上するし足しげく通う、熱心な常連を、三十人もつくりあげている。客の足をとめるためには、そのような乱暴なサービスが威力を発揮する。

ムチやロープでも、まだ満足できない客には、もう一つ方法がある——。

それは、トイレへ、お供させることであつた。客の目を尻目に、その眼前に平然と便器にまたがり、清冽な音をほとばしらせたり、ラッキーな客には、一日一回の便通のようすを拝ませると、コロリとまいる。

興がむいて、便器の上に客の手をのべせかまわず、それを濡らしてやったりすると、客の十人が十人、そんなことにトリコになるのだった。

だから尚更、信吉にそんなところをみせつけ、不潔と、残酷と、羞恥と、悪臭のルツボの中に、このおとこをたたきこんでやろうと思ひ立ったのである。

「もうひとつ、だいじな仕事をおしえるわ。よくおぼえるのよ」

信吉は、二リットルはたっぷり入る、透明なポリ袋を捧げて床に坐るように命ぜられたとき、千代からなにをされるのか、とまどつ

ていた。

しかし、そんなことだけで、とまどつてはいられない。

信吉の背後で、着ているものをぬぐ気配がしたと思ったら、いきなりあたま越しに、ジャーと、ときならぬ雨が降ってきてポリ袋をみたしはじめた。

千代が立ったままそんな音をたてているとわかって身動きができない。

そして、そんな目に合わされながら、ハラが立つどころか、却って崇高なものに全身を打たれるようなショックが走ったのである。

そのときから、信吉はドレイになった。

その翌朝また二階へ呼ばれた。あがつてみたら、千代は寝乱れた起きぬけの素顔でベッドに浅く腰をおろしていた。

前夜のようにまたポリ袋をもたされ、こんどは水音はさせない代わりに、ある重量を伴ったものが落下された。

そして、稀有の激しい香気とアムモニア臭に氣をうしないかけたら、ママは「終わったわ。トイレは下よ、おまえ、すてきて」

平然と言った。

その日から、この仕事はすべて信吉の受け



持ちと、ママは勝手にきめたらしい。

でもはじめのころは、なんとも不快な悪臭に嘔吐を催した。それが、そんな世話に奇妙な興味をおぼえたのはなぜだろうか。

それは、チャーミングな美貌のママが、自分にだけは、絶対に他人にはみせない筈のそんな妖しい秘め事を、おしげなくさらけだしてみせてくれることに、ある種の満足感を覚えたからだろうか。

ときには、そうして袋を手になさげさせられ、またあるときは、階下からもってこさせた特大ジョッキを、床にひざまずいて捧げるように命ぜられ、眼の先に、さわやかな水の音とかすかな、しかし快い刺激を伴った特有の香気をたっぷり嗅がされたときから、信吉の心のなかに、屈伏したイヌかブタのように命令に従うことの喜びが芽生えたのは否定できない事実であった。

いちどなどは、さすがの特大ジョッキが、一杯にあふれてしまい、カーペットを濡らしそうになった。ママは、

「なにボヤボヤしてるのよ。溢れさせてカーペットを濡らしたら承知しないよ」

と、はげしく責めた。

とっさの思いつきで、どうしようもなく、

それをおのれの腹の中にあけるしかないと判断したのは、上出来だった。

やっとの思いで、ジョッキを半分カラにしたのをみて、千代は満足げに、

「信吉も、やっとな本ものになったね」

とほめられた。うれしかった。それくらい千代は、信吉の食道や胃袋を道具のように使うことにぜんぜん抵抗を感じないようだし、信吉には、それがうれしいことであった。

道具といえば、こんなこともある――。

千代の通じは平常朝の十時前後である。

その日も例によって袋を捧げさせられ、下賜物をおがみながら懸命にうけとめているとき、袋の異状に気がついた。底のほうは何者かの手でザックリ切られていたのだ。

当然、なかみはカーペットに落下し、汚れたカーペットから悪臭が室いっぱい立ちこめた。

「信吉。あんた、どうしてあたしに抵抗したのかしら」

ママは、自分のものでカーペットを汚したことに激怒した。

袋にわざと穴をあけ、カーペットの上にころばして、恥をかかそうとしたのはおまえの考えたことでしょ、許せない。と、いきなり

顔をけりつけられ、引っくり返った全身に無数のムチの雨がたたきつけられ、あまりの痛さに気が遠くなる信吉の頭上から、いかり狂ったみたいに、

「許せない。殺してやる」

さらにはげしくムチが振りおろされた。常連客の一人の山中さんが、階下から物音におどろいてあがってこなかったら、あるいは信吉はなぐり殺されていたかもしれない。

でも、と信吉は息も絶え絶えに考える。

手落ちをやってしまったのだから、自分が殺されるのはやむをえないとしても、こんなことのために、万一ママが殺人罪にとわれたらかわいそうだ――。

そんな思いが、千代に通じたのだろうか。その興奮は、山中さんのとりなしもあってやっと落ちついたようであった。

「信ちゃんがわるいぜ。ママにさからったりして」

山中さんは、ごまをするようにいい、けっきょく、詫言状を一札書くことで一応許してもらえることになった。文章なんか書いたことのない信吉のために山中さんが書いてくれた手本は、つぎのようなすこしおかしい気のあるものだったが、信吉は許してもらいたい



一心で、たどたどしい文字でこれを写した。

.....

お　詫　び

ぼくは、不注意で、ママにめいわくを掛けましたことをお詫びします

お許しください　さようなら

信　吉

「さようなら」とはちょっとおかしいと思っただが、

「お詫び状というのは、むかしからそう書くことになっているんだよ」

という山中さんの一言には返すことばはなく、印をもたない信吉は、ママに打たれてできた左うでのキズから流れでる血を右手のおやユビに移し、拇印をおした。

「ほんとうなら許さないことだけど、せっかく山中さんが言ってくれるのだから」

千代はやっときげんを直し、詫び状を金庫におさめると、

「カーペットの汚れは、全部吸い取っておしまい！」

きびしい顔で命令し、

「山中さん、下でのもうよ」

晴ればれした表情で、足音もあらく、店へおりるのであった。

吸い取っておしまい！

このひとことは、まさしく信吉にとっては神の声であった。

それまで、フランスパンに拭いとった、うっすらしたていどのものは口にしているが、生まのものにたいして命ぜられたのはこれからはじめてである。

でも、命令には絶対服従しなければならぬ。

おそろおそろ、半ば乾きかけたカーペットの、そのかたまりに顔をよせたが、あまりにも異様なその感触についためらう。

そっと足音を忍ばせて再び二階へあがってきた千代が、足をあげて信吉の首すじをカーペットめがけて踏みつけなかったら、いくら千代の命令でも聞けなかったかもしれない。しかし、こうしたイヌのような恰好で、ついに信吉は口をあけ、眼をすえて、そのかたまりに立ち向かったのである。

(4)

千代は居間のとなりにすえた、公衆電話のボックスを思わせるポータブル浴槽のタブにいったいの湯をみたして、気持よさそうにつかっていた。

清冽な湯のなかに美しい色の手や足をつけ

て眺めるのは、千代にとってうれしいひとときである。この頃すこし肥えたようだけど、たっぷり肉がついた腰のあたりはまったく、じぶんのからだながら美しいと思う。

細く、しなやかな太腿から、ふくらはぎへのなだらかな線は、ときにはベージュに、ときには桜いろに輝き、シミひとつない。

客のなかには、このしなやかな下肢で首をしめられることに熱狂する者がいる。

千代にとっては、上肢も下肢も観賞用の商品であった。だから眺め入るのは、たのしみである。

今夜はまた十日に一回のパーティである。

パーティには、はだかが売りものだから手入れもよけい念入りになる。

客のなかには、なまじ洗ったりせず、汚れたままのほうが、トリクエストの声もあったが、やはりすべて清潔ムードのほうが、永続きするだろう。

例によってフロに入り、とちゅうで尿意を催すままに、浴室のすみのブザーに手をのばした。

浴室の片すみのカベの、ブザーのプッシュボタンのコードはそこから伸びて、階下の、



いまや開店準備に追われている信吉の耳もとに達していた。

信吉に用のあるときは、大小によらずこのボタンを押しさえすれば、忠実な番犬の表情でかけつけてくる。

信吉は、千代の命令とあればどんなことにも絶対に服従する。忠犬といった役目に喜々として従うのである。

だが、なぜか信吉は仲々あがってこない。いらだって、もういちど長々とブザーを鳴らしたら、

「なにか用ですか、ママ」

客の山中がドアのむこうから顔をだした。相手が信吉でないのは少々いやだったが、グズグズできないほど尿意が迫っていた。

「その押し入れから便器だして」

口ばやにいい、山中がなれない手つきでとりだした便器に、あわててまたがりながら、

「もういいわ、下へ行って」

と、いった。

「いいおりだ。ぼく、ママに、信ちゃんのこととで折り入って話があるんだ」

「話ならあとで下へ行ってきくわ。とにかく出ていってちょうだい」

うのは値打ちがさがる。軽く追い返し、これも好物の、ビデにからだをうつす。

ビデの湯は、圧力を一杯にすると、からだのシンまでしみこむようで、きもちがよかった。薬液まで共に噴きあげる最新方式のビデで、風呂とはまたちがった味がする。

いつもなら、ビデの噴水口あたりに信吉を待たせ、自分は何もしないでつつ立っていればよいのだけど、いまはそれができないのはざんねんであった。

信吉は、ビデの扱いがうまい。

さやささやと、さわやかな音をたてて噴き上げる湯で、からだのすみまで洗わせるのはきもちがよい。ときには自身の手を使うのが面倒で、信吉の手を使うときがある。いや手だけでなく、気がむけば彼の顔をスポンジ代わりに石けんをなすって、それで洗わせることがある。信吉を道具につかうのは、なんともいえないおもしろさがあった。だが、やはり、信吉がいなくては、ビデの快さが味わえない。

いら立って、もういちど長々とブザーを押すと、やっと、

「お呼びですか」

信吉が、あわててやってきた。

「なにしてたのよ」

思わず声が高くなる。

なにしてたのよと言われても、信吉には答えることはできない。信吉は、さっきブザーが鳴る前から山中につかまって、脅迫されていたのである。

返事をしようとしないうちに信吉の態度に、千代はカッとなった。

あいにく、千代はその日からブルーディに入っており、実はこんやのパーティーも本当なら延期したいところであった。だが、延期と言っても、客たちは絶対にOKはしないだろう。わけもなくハラが立つままに、命令をきくためにひざまずいていた信吉の顔を思いきり蹴ってしまった。

パツと、信吉の顔面に赤いものが散ったが信吉は、千代のそれ以上の怒りをおそれて従順な顔をあげた。

だまって、バスタオルをその顔面に放りだすと、信吉は待ち兼ねた表情で、タオルを手で千代のそばにすりより、濡れたからだを拭おうとした。

腰に両手をあてがい、両足を八の字に開いて、あと始末は信吉の手によだね、ついと手をのばしてタバコを一本くわえる。



カチツとライターを鳴らした信吉が、そのライターを頭上にかかげるのへ、無言で火をつけ、フーッとむらさきのけむりを吐く。

さきほど使用した便器は、信吉の手でフタがされ、目立たないように入り口のドアのかげに置かれてある。血を流させたのは少々ゆきすぎだったと反省した。

「もういいよ、下へおいき」

千代がそう言えば、信吉はいそいそとおまるを捧げるみたいに手に持って、階下へいくだろう。

そして、二三十分もすれば、便器は元通りキレイに洗われて、ちゃんと押し入れにもどってくるのが、きまりであった。

でも、ふしぎなことがある――。

二階はこうして千代の住居であり、信吉は同居人のかたちで、無許可で増築した三階の物置きに住まわせてあるのだが、階下は、バ―「木偶」という名のバ―。

そのバ―の経営者が千代なのだから、もちろん千代は、階下の構造はすみからすみまでよく知っている。

規定で、形だけのトイレはあるが、これは汽車式の一穴型で、内部であの大きな重い便器を洗うだけのスペースはない。

なのに、信吉ときたら手に持った便器をアツというまに、きれいに、それこそ磨き上げたみたいにしてくるのである。

「あんた。そのおまる、どこで洗うのよ？」  
いちど、たずねたことがある。だが信吉はわらって、

「ヒミツでさ。ママは、そんなシモジモのことは気にしないで、まかしといて」

答のかわりに、ニヤニヤ笑ってごまかしてしまふ。

けれど、そのナゾはやがてとけて、千代を呆れさせるのだ。

カウンターの内部に、ちいさな流しがありちゃんと水道もきいている。

客にだしたグラスを洗ったり、アイスウオリターの用意をしたり、つまり店のサービス用の水はいいここでもまかなわれるのだけれど、信吉はママの用ずみの便器を、ここで洗うのだ。洗うにはコツがある。早く洗おうとジャーッと水をだしたら、シブキといっしょになかみかとびだすだろう。

中が一杯になったら、そっとワキへあけるのがコツなのだ。

でもいくら注意しても、ときにはグラスや灰皿を漬けた洗いオケのなかに、なかみをこ

ぼすことだってあるだろう。

考えてみれば、この店の食器はすべてママの洗礼をうけたことになる。

「きたないことやっちゃだめじゃない」

ママは形式的にたしなめたが、自分がここを使うわけではなし、まして、きたないとはいうものの、自分のものならそれほどでもないと思ったのだろう、そんなことやめろとはいわなかった。

信吉は、もちろんへいきなのだ。

というのは、惚れこんでいるママのなら、どうしてもきたないと思えないどころか、ふと気がむいて例のママがペーパー代わりに使用してたっぷり汚したパンを、空腹をみたすためもあったが、半分は好奇心から口のなかに放りこんで舌にのせたとき、なにか戦慄に似たショックが全身をつらぬき、快い陶醉に酔い痴れた。

そんなひそやかな楽しみは、誰にもみられないかと思つたのは、信吉の不注意であつたかもしれない。

(5)

パーティの会員たちは、四六時中絶え間なく公然と千代の足もとに侍り、風呂からトイ



レまでご用を承る信吉の役目をひどくうらやんでいた。

一時、信吉の役目を会員たちと交替してほしいとの声まで出たくらいであったが、

「いいわよ。やってくれるなら。でも、あんなきたないもの口いっぱい詰めまされても反抗どころか、逃げようもしない仕事が、あなたたちにとまるかしら」

千代の遠まわしの言葉に、その話は立ち消えになった。

だが山中だけは、なおしつこくその役目をねらっていた。

千代にぞっこんまいていた彼は、その美しさにあこがれるあまり、彼女のすべてを独りじめしたいと、前からそう思っていたのである。

鉄鋼関係の業界紙記者というのは表むきの職業で、かげのビジネスは会社の秘密をあばいて脅迫し、スキャンダルをタネに金をおどしとるタカリ屋。景気のよいころは、月収五十万を越え、パーティの十数万の会費なんぞはなんの苦もなく払えたが、ある会社のおどしに失敗してあべこべにつきだされ、当局の手につかまることになり、以後収入の道は絶えた。

失業の身のおきどころもなく、なんとか強引に、千代のもとへころがりこむことを、この二十八にもなる男は考えたのである。

羽振りのよいころ、信吉にチップをつかませて、何回か、便器のなかのものを手にいれた。信吉が店の水道で便器を洗う寸前に、そっと他の器にとり、一回一万円のわりで、山中に売りわたしたのだ。

ただ小遣いはしさに、千代にないしょでやったことが、いまになって信吉の命とりになるうとは、夢にも思わなかったことである。

山中は巧妙に立ち廻り、信吉をおどかしては相変わずあこがれのものを取りあげ、会員のなかを泳ぎ廻っては、目の玉の飛び出るほどの高値でそれを売りつける。

会員たちは、山中が売り込みにくると、まるで宝石扱いであらそって買いたがるのがおもしろかった。

山中の心のなかには、ひとつのプランがある。千代に近づき、甘んじて彼女のマネジャーを引き受け、本格的なSMパーティを主宰したら、一と山あてられそうなのだ。

いまの会員を、十人から十倍の百人にもってゆくのはそう難かしいことではないように思え、そのプランは、日ごとに大きく、いま

スグにも実現可能の方向に成長してゆくのであった。

## (6)

「お前は、あたしを売ったね」

千代は、言葉もなく床に這いつくばる信吉のあたまに、ハイヒールのつまさきをのせながら、きめつけた。

そのかたわらには、さも証人ぶった山中がおもしろそうなニヤニヤ笑いをうかべて、うでを組んでいる。

「あんなに目をかけてやったのに、くやしいわ」

千代が半ば取りみだしているのは、信吉きって自分のからだの一部みたいに思っていた信吉に裏切られた気持で一杯だからである。

「もう、死んでもらうしかないわ。さいわいこのあいだ書かせた『詫び状』は、あのまま、遺書に通用するわ。山中さんはやっぱりあたまがいいわ。信公なんか死んだって誰ひとり泣くやつなんかいないだろう」

「そうですよ。ママを裏切ったやつは殺されるんだ。信公、あきらめたほうがいいね」

山中は、図にのってキメつける。

「いやだ、山中さんこそ死んだらいいんだ」



たまりかねて信吉はいい、思わずとりみだして、いきなり山中にとびかかった。

どうしても山中に、せめて恨みのアップーカットでも見舞ってやりたかった。便器のなかみをしつくせがんだのは、山中のほうではないか。それなのにママにバラし、こちらを不利におとしいれようとは卑劣なやりかただ。なによりも、こんなことでママの信用をおとすのはつらい。

だから、体当たりがこもるのは当然であつた。

「おまち」

千代は、とめようとしたが、ふと思いついてやめた。

パーティの全員には、千代に忠誠をつくさせる意味で、そろって一千万円の生命保険に入らせている。それが会員になる資格のひとつだった。

会員が万一死亡し、それが自殺でなく自然死であつたら、その保険金はまちがいなく正式の受取人である千代のものになる。

入会するとき、本人の意志で、加入するものであることを一筆させてあるから、これは遺族の側から異議が出されても、絶対に勝てる性質のものであつた。

山中も、入会したところは羽振りがよかったからちゃんと加入していた。

だから、信吉をへたにとめる必要はなさそうであつた。

乱酒がたたって、からだをこわしていた山中は、猛烈な信吉の体当たりを一発、食っただけで脳溢血症状をおこし、その場に白眼をむいて伸びていた。

自業自得ともいうべき死であつた。

千代は、とつぜんの山中の死にもおどろいた風もみせず、日頃の気丈夫さをそのままにこれもパーティの会員である、内科病院長の植松甚造医師を電話で呼び、山中の死亡診断書を書かせた。

別に、偽りの診断書をこしらえる必要もなく、正規の脳内出血による死であることは明白だった。身よりのない山中の遺体は、これも植松病院出入りの葬儀社にたのんで、形式的に密葬され、事は落着した。

## (7)

「サ、縁起直しにじゃんじゃんやろう」

千代は一人ではしゃいでいる。

きのう、山中にかけた生命保険金一千万円は小切手で届けられた。

こんやはパーティ日ではなかったが、急拠全会員に電話で召集をかけたなら、みな勇んで集まってきた。

「きょうだけは、あたしのを、のんでもたべてもいっさいタダよ」

千代は、はしゃぎきって便器をまたぎっぱなしで叫び、会員がどんなものを求めても、きもちよく聞き届けてやるつもりだった。

「では、わしもいただくかな」

植松医師がテレくさそうに、大きなサラを千代の便器の下にさし入れたので、ドツとわらい声が湧く。

「では、わしも」

製材工場主の竹川金重までが、あわててあとにつづく。この太った猪首の老人も、このあいだのように信吉にドンと一発体あたりをくわさせたら、あっさり脳溢血をおこしそうに思えた。

(あと始末は植松にさせりゃいいのだから)

そんなことを考えながら、千代は、最後のめぐみを施すつもりで、ほんの小ゆびの先ほどを盛りつけてやり、そのままのポーズをくずさないで、パンをもって足もとに侍る信吉にあと始末させるため、心もちからだを持ち上げるのであつた。

(終)





体 験 告 白

散歩道の拾い物

舟 山 和 夫

カット・水 野 一

私の住居は、眉山という標高三百メートルの山裾にある。すぐ近くに八幡神社があつて裏山に通じ、細い道を辿って約一キロで小さな小宮に繋がっている。ここの、まことに急傾斜の石段、百五十三段を降りると、山道に平行した舗装道路に出て、私の家の前に通じている。これを一周するのが私の習慣となつた散歩コースである。

三月始めのことであつたが、朝六時三十分には家を出るとき山冷えて寒かつた。いつものコースを逆行した私が、無意識のうちに数えながら石段を昇り、裏山の小道にさしかかったとたんに、カサコソと木の葉のこすれる音しかも異様な気配がする。あまり例のないことなので私は、はたと立ち止まり不審の眼を木立ちの間に投げた。と、赤い色彩が木の陰を走り抜け、横手の神社裏に隠れた。続いてまた一つ。アベックさんだったらしい。

「この寒いのに……」と私は安心と同時に同情し、半ばあつけにとられたものだが、木陰越しに、石段を駆け降りてゆく手を取り合つた男女の姿が見えると、ひとりでに微笑がこみ上げてきた。そして次には自然と、二人が居たと思える辺りに踏み込んでいた。露を含んだ草や葉が踏み敷かれた形跡は当然だが、その一隅の叢の陰にまぎれもない忘れものを発見して思わずニヤツとしてしまった。

私は手元の小枝で拾い上げてみた。ピンクと白のパンティ一枚ずつであつた。二枚穿くところをみると彼女は冷え症らしいのに、こんな寒い早朝にこんな所で……と余計な心配をしなら、横手のクヌギの木にひっかけたおいた。改めて眺めてみると、一枚のほうには「K」の縫いとりがあつた。

翌日から、散歩のたびに寄ってみたが少なくとも一週間ぐらいの間は私のかけたまま

ぶら下っていた。それがあつた日の夕方寄ってみると消えていた。私は何かとても大切なものを盗られたような気持になつた。あるいはあのアベックさんが再び此所へ来て、気付いて持つて帰つたのかも知れない。せめてそうであつてほしいと思つた。

そして、四月の半ば頃だつたと思うが、夕方の散歩道の小さな谷の橋にさしかかると、谷横の岩の上に何か置いてあるのが目についた。直感的にハハンと思つた私はグルリと岩の間を遠廻りして行ってみた。途中わざと咳払いしたり木の枝を音立てさせたりした。もしアベックさんがまだ居るなら、驚かしては悪いと思つたからである。しかし、この私の心遣いは不要だつた。人の気配はない。

岩の上に残されたものはパンティストッキングと白のフリル付パンティだつた。脱いでまるめたには違いないが、まだ汚れてはいな



い新品同様に思えるものだった。もしこれが汚れていたものだったら、自分でもわからないと思うが、とにかくその時、私は前回の氣持を思い出していた。あの二枚のパンティが消えていた時の口惜しさは、まだ心のどこかに残っていたらしい。

私は無意識で人気のない辺りを見廻し、手早くそのパンティを四つにたたんでズボンのポケットに押しこんだ。パンティストッキングのほうは小さくまるめて右手に握りしめると、胸の高鳴りを覚えながら散歩道へとって返した。時々おどかさされる山鳥の羽音が、その日は余計に身にしみた。

自然に足の運びが速くなり、突き出た岩山の細道を曲り切ったとたんにハッとなった。目の前の木立ちの間に人の姿が認められたのだ。しかもつい五、六米しか離れていない処に居るのだ。

半身以上は太い木の幹に隠れてはいるが、その幹に背をもたせかけているに違いない、女の方が立ったままで、少し屈むようにしている上半身の一部分がのぞけているのだったが肩から腕はむき出しのままだ。瞬間、私はハダカを連想した。知らぬ間に右手の、パンティストッキングを握りしめる力が加わった。

木の葉にさえぎられて定かではないが、女の顔が動いた感じがしたと思うと、のぞけていた肩口が幹の向こうにサッとひっこみ、生

い茂っている足元の草木がざわついた。チラッと男の頭が見えたようにも思ったが、ハッキリ見えた訳ではないから私の錯覚だったかもしれないが、とにかく彼女達は、私の出現に気付いたらしいことはたしかだ。とたんに私は、何かとんでもない悪いことでもしたような気になって走り出していった。

○

私はそろそろと叢をくぐった。ぐると回りこんだ所にカッコウの岩が突き出ている。よじ昇ってのぞいた私の眼前に何の邪魔物もなく、その二人の姿が晒け出されていたのだ。私は息をのむと同時に早鐘のような胸の動悸に襲われた。

若い女が、太い樫の幹に縛られているのだ。しかもパンティ一枚だけのハダカなのだ。いかにもフックラしていそうな柔肌に痛々しく喰いこんでいるロープは、無残に乳房をくぶり上げて、腕もろとも締め上げるように溝を造って縦横に走っていた。

その白く艶々しい柔肌の縄目を、男の手が廻るように責め立て始めた。きっちり幹に縛りつけられているように見えた女の上体が大きく波打つように悶え始める。

女の押し殺したような呻きが、くびられた乳房を責められ始めると急に高くなった。男はびっくりしたように手をひっこめた。するとどうだろう、のけぞるようにして振り立て

ていた女の顔がピタリと止まり、さも「どうしたの？」とでもいうように、パッチリ見開いた眸で男を見詰めたではないか。美しい顔立ちだった。こんな美女だったのかと私は見直す氣持で見惚れた。男が何かいったようであつた。女は肩をくねらすようにして微笑している。又、男が何かいった。女は激しく首を横に振っている。そして、それに対して何かいったらしい男に、ニッコリ笑いかけてコックリと頷いた。

再び男の責めが始まった。ロープにせかれた肌のクビレが、悶えにつれて微妙な変化を見せるさまが私の五体をしびれさせ、引きこむように夢中にさせた。

男の手が、女のパンティに掛かった。私はゴクリと咽の鳴るのが自分でわかった。パンティが少し下げられた様だ。女ののけぞった唇から小さな悲鳴が挙った様だった。男が女の顔を見上げて何かいい、更に又、パンティが下げられた。女が激しく声をたてた。男がずっと立ち上って女の髪を掴んだかと思うと女の可愛い唇に、何かを噛ませ始めた。タオルのような物に見えた。男が、突き放すように女の髪を放した時、女のふっくらした頬は細い革紐のようなものにくびられていた。

男のパンティ作業が再開されると、女は前にも増して激しく頭を振り立てたが、もう悲鳴といえる声は聞えず、かすかな呻きが伝っ



てきた。私にはそれがなんともいえぬなやましいものに思われた。私はわれを忘れて耳を澄まし眼を皿にして縄目にもだえる柔らかなうな肌の変化を追った。くねりにくねる両肩の動き。激しい息遣いを表わす縄目からせり出した乳房。深いロープの谷を見え隠れさせてあえぐ上腹部。私は、私の視線をさえぎるようにしている男の背中を、たたき殺してやりたいほど憎らしい想いで睨みつけた。

「もうちょっと横手へ回ってやってくれ！」

私は胸の裡で叫んだ。切実な思いだった。しかし、声は出さなかったはずだった。しかしまるで聞こえたかのように、男がパッと立ち上るや否や、クルッと私の方へ回れ右をした。私はゾーッととなった。男の顔がノッペラボウなのだ。しかもそれが、ぐっと腕を伸ばして私を指差しながら大音声でどなりつけてきた。「ヘンタイめッ！」

声と同時にパッと白い物が飛んできて、私の顔をまといつくように包みこんだ。女のパンティだと私の直感が悟った、と同時に、私はすがりついていた岩から滑り落ちた。

○

とび起きた私はビッシヨリと脂汗をかいていた。寝しなに巻きつけた例のパンティストッキングが、腰の辺りからパラリと膝に落ちかかり、握ったまま寝込んだらしいフリル付きパンティが、クシャクシャになって枕と並

んでいた。私は苦笑せざるを得なかったが、妻が私の部屋へ来る夜でなかったことを、ほんとによかったと思ったものだ。

その翌々日から、私は商用で九州に行き、二週間ほどの散歩道にご無沙汰した。

半月目に通る山道は旅の疲れをほぐしてくれるようで、少し時間が遅く薄暗くなりかかったのも気にならなかった。

また拾い物はないかという気持もあったのは事実であるが、何よりも通り慣れた山道の静けさは気持を落ち着かせてくれる。

私はお宮の石段の降り口まで来た時、習慣のコースを変更して、山道を引き返したい気になって降りかけた足をひっこめた。

ゆっくりと踵を返し、暮れかかった逆行コースをとり始めた時、お宮の堂の横手辺りに人の姿を認めたが、参詣人だろうと気にとめなかった。それが一人だったからだ。

私はくつろいだ気持で山道に入ったが、ふと背後に足音を聞いたように思った。立ち止まって振り返ってみたが曲りくねった細道は重なる木立ちで見透せなかった。足音も聞こえない。気のせいかと思ひ又しばらく歩いた時、今度は間違いなく足音が追ってくるのを聞いた。しかも小走りなのだ。私は振り向いて薄暗い細道をすかして見ようとしたり。そこへパッととび出すように追いついてきた人影があった。かと思うと「いじわるウ」という

鼻にかかった声と共に、いきなり私に抱きついてきたのである。女だ。プーンといい匂いに包まれた柔軟な手応えは悪いものではないのは当然であるが、心当たりのない私は、とまどった。

女は、私の胸に顔をすりつけたまま放れず「バカバカ、こんな待たせて……」と恨みがましく繰り返していた。

きっと彼氏を待っていたのだろう。ここで落ち合うとなると……あのどちらかのパンティの主？ 私はそう思いつくと急にその女の顔を見たくなくて、掛けていた女の両肩の掌に力をこめたが、ふと、頭をよぎるものがあった。夢に出た男のノッペラボウを思い出したのだ。この女の顔が……と、瞬間ゾーッとする気持だった。同じ夢に出てきたはずの、あの縛られた美女の顔が浮かんでこなかったのは何故だろう。

私は無意識に眼を閉じた。そして勇を鼓して女の肩を叩いていった。「人違いですよ」と……。はじけるように柔軟な感触が私から離れた。私は思いきって眼を開いた。まじまじと私を見詰める女の顔があった。私はホッとしたり。眼鼻はあった。しかし夢想の美女には程遠い普通の娘の顔だった。一瞬後、その顔が女の両手で覆われて背を向けたと思うとサッと細い道を駆け去って行った。

(おわり)



水田真紀子習作シリーズ

オフィス・ガール



須坂 旭・画

水田真紀子

「あたしの部屋、ここよ」  
 「二〇一号室か、いいアパートですね」  
 「ちょっと寄ってかない？」  
 「部屋まで送るって約束はたしたから、ぼく  
 帰ります。お休み」  
 「あら、お茶でもいれるわ」  
 「だって、女ひとりのところに……」  
 「こわいの？」  
 「こわかないさ。でも——」  
 「映画さそって、ごちそうになって、そのま  
 ま帰すの悪いわ」

「いいよ、気をつかわなくても」  
 「ねえ、ちょっと上ってよ。熱いコーヒーで  
 も入れるわ」  
 「そう？　じゃあ、コーヒーだけ頂かな」  
 「さあ、どうぞ。いま電気をつけるわ」  
 「わあ、やっぱり女の人の部屋って、きれい  
 だな」  
 「小さな部屋でしょ？」  
 「ううん。人形かざったり、花があったり、  
 なんとなくやわらかい感じがする」  
 「そうかしら……？」

「今、ぼくのいる独身寮なんか、殺風景なも  
 んですよ」  
 「入社以来ずっと、いまの寮にいるの？」  
 「ええ、まだ半年ですよ」  
 「もう半年にもなるかしら？」  
 「いま九月だから」  
 「そうね。高校でてから、すぐ入ってきたの  
 だから、そうなるわね。あの時、学生服で、  
 はじめて挨拶にみえたけど、もうすっかり、  
 背広が板についてるわね」  
 「からかわないで下さいよ。お姉さんにかか  
 っちゃかなわない」  
 「いやあね、また。お姉さんだなんて」  
 「だって、そうなんだもの」  
 「そりゃあなたの先輩に違いないわ。でも、  
 そう呼ばれるのはいや。美佐って呼んで」  
 「美佐子さんでしたね」  
 「でしたはないでしょう。フフフ」  
 「失礼して上衣ぬがしてもらいます」  
 「どうぞ。ゆっくりするといいわ。そのうち  
 コーヒーが沸くわ」  
 「灰皿ないですか？」  
 「灰皿？　困っちゃったわ。じゃあ、この鉢  
 にでも入れて……」  
 「いいの？　こんなきれいなものに？」  
 「ええ。灰皿、こんど買っとくわ」  
 「たばこ喫わないのに、ある筈ないよね。買  
 ったら無駄ですよ」



「ウイスキーならあるわ」

「エッ? 飲むの?」

「たまにね。それにお紅茶に入れると、おいしいから。召し上る?」

「ぼくも少しでいい」

「おつまみ、クラッカーしかないわ」

「ああ、いい香り……」

「そんなに上等じゃないのよ」

「いや、コーヒーの香り」

「あら、コーヒーのこと? ウイスキーは水割りにするの?」

「ストレートでいいですよ。口にふくんでみるだけ。あんまり飲めないんですよ」

「あたしも一しよにいただくわネ」

「じゃあ、乾杯!!」

「乾パイ……」

「のどに焼きつくようだ」

「もういっぱい、どう? 男の人がそうやってグラスをおおっていると、頼もしい感じがするわネ」

「酒飲む男が好きって意味?」

「だけど、酔っぱらいはイヤ」

「ぼくは、そんなに飲めない……」

「かけつけ三杯ってことがあるわ」

「ああ、いい風が入ってくるなあ。コーヒー

だけをいただく約束だったけど」

「だから沸かしてるわよ」

「お姉さんもグッとあけて……」

「あら、またお姉さんだナンテ」

「ごめん!」

「今日は素敵だったわネ」

「え?」

「映画よ」

「なんだ映画の話か?」

「面白かったわネ」

「あんな映画好きなの?」

「あたし、ハラハラしちゃった」

「そうかなあ」

「ホラ、お姫様がさらわれるところ」

「昔の物語りさ」

「もういっぱいがせて——」

「しかし、ずい分いじめられてたね」

「そうでしょ。あたし、あんなのを見ると、ジンとしてくるの」

「どうして?」

「しばらく、鞭でぶたれて——」

「可哀そうだから?」

「そうじゃないのよ」

「それよか、コーヒー入れてよ。もうパーコレーター沸騰してるよ」

「あら忘れてた」

「砂糖あんまりいれないで——」

「苦いのが好きなの?」

「コーヒーの香りが死んじゃうから」

「コーヒー通なのね」

「好きな方だから」

「これくらい? どう?」

「ああ、ちょうどいい。おいしいよ」

「よかったわあ」

「熱いコーヒーをのむと、ウイスキーがよけいにまわってくるようだ」

「ウイスキー、まだあるわ」

「もう、たくさん」

「ヴィテキントの『春の目ざめ』って知っているかしら?」

「ああ、たしか岩波文庫で読んだことある」

「あの中にも、男の子が、薬小屋の乾草の中で女の子を鞭うつところがあったわね」

「そうだなあ」

「あたし、あれを読んでから、たまらなかったことがあるの」

「どうして?」

「うまく説明できないけど。しばらく夢にまでみたわ」

「たしか、女の方からぶたれることを、求めたんじゃないかなあ」

「そうなの。よく知ってるわね。あの女の子の心理を……」

「どうしたの? そんなに真面目な顔して……」

「笑わない?」

「どうして? 笑うわけがある?」

「あたしのこと、好き?」

「えッ?」



「あたし、あなたが好きなの」

「……………」

「ほんとうに好きよ。でも、あなたは、この私を……………」

「どうしたんだい？ 急に？」

「いやッ。ひどいわ。あたしにばかり喋らせて。ね、どうなの？ あたしを好き？」

「そりゃあ……………」

「いえ、いいわ。好きでなくてもいいわ。だけど、今日だけでもいいから、あたしの願いきいて」

「どうしたの？ ホントニ……………」

「あたしね……………」

「…………急に興奮しちゃって」

「だいて」

「……………」

「ウイスキーのませて」

「悪いよ。そんなに飲んだら」

「ねえ、抱いて」

「うん、そりゃあ……………こうかい？」

「そのまま、きいてね」

「ぼくも酔ってきたのかな」

「あたしねえ。…………ほんとに笑わないでね」

「ぼくもお姉さんには好きっていいたいよ」

「いや、お姉さんッて。美佐ッて呼ぶの」

「美佐子さん」

「もっと抱いて。あたしって、いけない女かしら？ でも、どうしようもないのよ」

「何でも出来ることなら聞いてあげるけど」

「うれしいわ。思いきっていっちゃう」

「涙をふくんだよ」

「あたし、ときどき自分がたまらなくいじらしくなってくる時があるの。そんなとき自分で、手足をしばられて鞭打たれているような錯覚になって、のたうつことがあるのよ」

「自分でって？」

「手をうしろで縛られて、さんざん鞭でぶたれたり、ひどい目に合わされたりしているつもりで、部屋中ころげ回るときがあるわ」

「縛られて…………？」

「そのつもりで…………。ほんとうは自分で自分の手は縛れないわ。ホントウに縛られたいのよ。今日の映画のお姫様のように。この願いきいてもらえる？」

「じゃあ、ぼくが縛るの？」

「そう。縛ってほしいの。女の衣裳はいくらでも材料はあるわ。ひもや帯なんか。そのタンスの抽出しに入ってるのよ」

「でも、縛るなんて……………」

「あたし、いじめられたいのよ。縛られて、うんとひどい目に合わされたいのよ」

「どうしてだろうなあ」

「あなたには分らないのよ。女って受動的でしょ。いじめられて愛されたいって思うことは不思議じゃないわ」

「ほんとに、そうされたい？」

「映画でも、小説でも、縛られてひどい目に合わされてるのは、いつも女よ。そして、いじているのは男だわ」

「もう手をうしろへ回してるんだね」

「お芝居じゃないもの。もっと締めつけて」

「これくらい？」

「あら、もう力ないの？」

「だって、ひもが、こんなに腕に喰いこんでるよ」

「ほんとに思いきり締めつけてみて。かまわないから」

「よおし、泣いたって知らないよ」

「あッ、こたえるわ。とってま」

「ひもがちぎれるか、お姉さんのからだがちぎれるかだ。思いきり締めつけるよ」

「う、うッ。せつないわ、あッ」

「汗かいちゃった。どう？ これがせい一ぱいだ」

「ずい分、しめつけられたわね。苦しいわ」

「知らないよ」

「ううん。文句いってるんじゃないの。嬉しいのよ」

「女の人のからだって、やわらかいんだなあこんなにくびれてるんだもの……………」

「うれしいわ、とってま」

「これじゃ、今日のお姫様より、うんとみじめだよ」

「そうかしら？」



「痛そうだ。動かせないだろう」

「動かすどころじゃないわ。ジツとして、苦痛をこらえるのが精いっぱいだわ」

「息が苦しそうだね」

「でも、こんなにされたの、はじめてよ。うれしいわ」

「まるで荷物のようなだよ。ホラ、こうして肩をついただけで——」

「あッ」

「起き上れないでしょう？」

「ほんとにたまらないわ。こうなったら、もうどんなにされたって仕方ないわね」

「はじめな姿だなあ」

「この上、鞭でぶたれたり、痛い責め折檻をされるってことになるのね」

「……」

「そんなこと思うと、ジーンとしてくるわ」

「……」

「いつもは空想だけだけど、こうして、ほんとに縛られてみると余計しびれるわ」

「……」

「どうして、だまっちゃったの。じっと、みつめてばかりいて——」

「……」

「あたし、こうして縛られ、転がされているのよ。どんなにいじめられたって、もがけるだけだわ。空想が実現されてもよくってよ」

「お姉さん！」

「どうしたの？ みつめてばかりいて——」

「ぼく、さっきのウイスキーに酔っちゃったのかな」

「え？」

「最初のうち、そうでもなかったんだけど、こうやって自由を奪われて動けないお姉さんを見ているうち、つい……」

「どうしたの？ はっきりいうわ。もっといじめてくれていいのよ」

「ちがうんだ。縛られてもがいているお姉さんを見ているうち……」

「美佐ッて呼びつけて」

「美佐子さんの身体の動きが、とてもなやましくって、辛抱できない気持ちになってきちゃったんだ」

「どうしたいの？ あたしを？」

「可愛いなあ」

「え？」

「唇がほしいんだ。いいね」

「あッ。むうッ、ううう」

「うッ、おいしいや」

「いけない子ねえ、長いキッス」

「たまらないんだもの。裸をみせて」

「えっ？ 裸？」

「女の人、みたことないんだ」

「恥かしいわ」

「もう、どんなにされたって少しも抵抗できないよ」

「ほら、指でつついただけで、どうにでもなるのよ。鞭でぶってみたいと思わないの？」

「そうしてほしいのなら、裸にしてから、ぶってやるよ」

「まあ、ひどいことされるんだわ」

「いいだろ」

「だって恥かしいわ。そこまで考えてなかったのに。でもいいわ。仕方ないんだわ、恥かしい目に合わされて責められるのね」

「ブラジャー、どうしてとるの？」

「あ、胸をみられるのね」

「いうとおりになるんだよ」

「スリッパからはずすものよ」

「柔らかい。弾力があるんだなあ」

「恥かしいわ」

「スリッパぬがせるには、スカートを脱がせないくちや」

「はじめなお姫様」

「いいね」

「どうにでもして。とらわれの身ですもの。仕方ないわ」

「どこを外したらいいのかな」

「何も知らないのね。ウエストの横んとこのホックを外すのよ」

「簡単に外せたよ」

「はじめだわ、脱がされるって」

「だけど、これがなかなかぬけないんだ」

「むりにスリッパまでとるからよ」



「思いきり胸をくくっちゃったから」

「あ、痛いわ。身体ゆすっちゃ」

「仕方ないよ。もっときつく、しめつけて、なんていうから」

「スリッパまで脱がされるなんて、思ってなかったもの」

「破けちゃいそうだ」

「しらないわ。ひどい人」

「ひどいのはお姉さんだよ。こんなとこまでみせるんだもの」

「いけない？」

「ぼくだって、たまらないよ」

「とうとう脱がされちゃった」

「ブラジャーと、パンティだけになっちゃったよ」

「恥かしいわ、どうする気？」

「ウイスキー飲んでいい？」

「あんまり続けてのむと毒よ」

「だって飲まなきゃあ」

「両手が動かせないって、ほんとにせつないものだわ。胸までグルグル巻きにされて……」

「お姉さんの肌って、きれいだよ」

「そんなにみつめちゃいや」

「すべすべしてさ」

「あッ、さわっちゃいけないわ」

「いい手ざわりだな」

「いやっていても逃げられないわ」

「ブラジャー外すよ」

「……どうしても」

「……」

「縛られてるんだから……仕方ないわ。晒し物になってるんだものね」

「ぼくのするようにしかならない身だよ」

「しびれるようなこと、始めていったわね。こうして責められてるんだもの」

「これも、紐の間から引っぱりださなきゃあ外せないよ」

「とうとう、とられちゃったのね」

「上をむいて——」

「そんなにみないで——」

「お姉さんのお乳、こうして目の前で見られるとは思ってもみなかったなあ」

「う、うッ」

「どうしたの？」

「……」

「痛いの？」

「たまらないのよ。そんなにしっちゃ」

「えッ？ どうして？」

「乳首がかたくなってきたわ」

「あ、ほんと、……」

「こんなことで、いじめられるとは知らなかったわ」

「えッ？ いじめる？」

「そんなにいじっちゃたまらなくなるのよ」

「何故？」

「知らないの？」

「……」

「恥かしいわ、うッ、せつないのよ」

「そんな声だすとぼくも苦しくなっちゃう。あ、いけない」

「どうしたの？」

「困っちゃったなあ」

「えッ？」

「どうしたの、ズボン押えて？」

「恥かしいや、ぼく」

「だから、どうしたの？」

「うん、汚しちゃった」

「あらッ？」

「夢では時どき、こんな経験あるけど……」

「まあ！ じゃ」

「そうなんだ、お姉さん縛りつけて裸にしてあげてたら、たまになくなっちゃったんだ」

「ごめんなさいね」

「恥かしい」

「縛られて、転がされているんだから、どうもしてあげれないわ」

「そんなこと、いいよ」

「だってあたしのために、汚したんでしょ」

「……」

「ぬぎなさいよ」

「だって——」

「気持わるいでしょ。ぬぎなさいな」

「恥かしいよ」

「あら、私を裸にしておきながら、自分はい



やなの」

「……………」

「あたし、手伝ってあげられないわ」

「そりゃ自分で……………」

「まあ、ずい分、汚してるわ、みせて」

「恥かしいけど、ホラ」

「まあ、あたしのために、こんなになっちゃったのね」

「だって、仕方ないもの」

「そのまま立ってみて」

「えッ？」

「あたしも、よくみたいわ、始めてよ」

「いやだよ、そんなこと」

「女の身体を裸にしておきながら、意気地がないわ。ずるいわよ」

「そんなこと、いったって——」

「女の方がずっと恥かしいものよ。それに縛られてんのよ。どんなにされたって仕方ないのよ。それに——」

「いいよ。どうかい？」

「あッ、まあ」

「赤くなってるくせに」

「ちょっと待って。あたしは、あなたの奴隷みたいな身よ。あたしが奉仕するわ」

「え？」

「あたしの身体を起こして。そしてあなたはそのまま仰向けて横になってて」

「どうするのさ」

「もっと近くへ寄ってきて」

「あッいけない。汚れる」

「いいの。あたし、両手がつかえないから、こうしてあげるのよ」

「そんな……………」

「あたしをいじめてほしいの。もっと——」

「この上、どうするんだ」

「もっともっとと乱暴に扱って。もうくたくたになって、その上で奴隷にされて、今の続きをさせてほしいの」

「そう、仕方ないや、するよ。でも、どうすりゃ、いいのさ」

「こうやって裸にされて、縛られてんのよ。あなたなら、どうしたいと思う？」

「うーむ、困ったな」

「好きなようにしてえ」

「でもねえ」

「あら、女を縛ったら、どうしたい？ 今日、映画のように、鞭で思いきりぶったっていいのよ」

「でも、可哀想だから」

「じれったいわ。あなた、男でしょ」

「うん。じゃあ、するよ。どんなにしてもいいんだね」

「いいわ、ひどい目に合わせて——」

「よし、じゃあいいね」

「まあ、どんなにされるのかしら」

「パ、パンティ脱がすよ」

「え？ 全裸にされるの？」

「ほうら、赤くなっちゃった。強いこといったって恥かしいんだろ」

「それだけは恥かしいのに」

「でも、どうしてもいいって、いったじゃないか」

「そうね、男の人だったら、そうなのね」

「いいかい……………」

「恥かしいけど仕方ないわ。あたしも見せてもらったんだから。でも、あんまりひどいことしないでね——」

「ひどい目に合わせてったのは、誰？」

「まあ？」

「いやだっていっても抵抗できないじゃないか」

「そうだわ、こんなにされちゃ堪忍してっていう方が無理なようね」

「脱がせるよ」

「あッ……………」

「赤くなっちゃって、もう駄目だよ」

「ああ、せつないわ」

「やわらかい肌してるなあ。ひとりでに、すべり降りてくるようだ」

「あ、あ」

「ちよっと腰をうかせておくれよ」

「もうどうしようもないわ」

「ああ、すばらしいなあ」

「ひざまで脱がされたのね」



「若い女性の肌を、こうして目近かに見たのは、生まれて始めてだ」

「恥かしいわ」

「男と違ってスラリとしてて魅力的だなあ」

「恥かしいわ」

「こんもりとふくらんだスロープ」

「あさましい姿だわ」

「こんな素晴らしいものかなあ？」

「そんなに、みつめちゃあ」

「ああ、ああ、たまらないや」

「映画のお姫様よりひどいわ」

「うーん」

「あら、パンティ、みんなはずしちゃったのね？ あっひざを上げちゃいやッ」

「たまらないんだよ。もっと見せて」

「恥かしいわ、手は動かせないし」

「縛られてるから思いのままサ。まる裸にされた姿態って素敵だなあ。若いハチきれそうな身体を、こうして縛りつけて、ころがしてるのを見てると、ほんとうにじめたくなってくる」

「されるままになるより仕方ないわ」

「縛られてるところ痛くない？」

「手首は、もうしびれてるわ」

「胸も二の腕もくびれてるよ」

「思いつきしめつけられてるわ。だから、ほんとうにいい気持」

「いい気持？」

「身体がぎゅうっと引きしまって、とてもいい気持なの」

「よし。それじゃ、もっといい気持にさせてやる」

「どうするの？」

「帯ないかしら？」

「帯ならドアの横にかかっているわ」

「泣いたって知らないよ」

「あら、帯なんか持ち出して、どうするのよ？ ぶつの？」

「そうじゃないんだよ。こうして胸をしぼった中へ差し込んで——」

「きついわ。こんなにきつく締めつけられてるのに」

「帯の柄が通ったね。それで、こうして、ちよっとねじると」

「ああッ」

「どう？ もっと締まるだろう」

「うッ、苦しいわ」

「気持ちいいんじゃないの？ ほら」

「ああッ」

「ちよっと、ねじってるだけだよ」

「ううッ」

「ほら」

「ううッ」

「やわらかいから、まだまだくびれてゆくよね。ほら」

「うーッ」

「うーッ」

「うーッ」

「やわらかいから、まだまだくびれてゆくよね。ほら」

「うーッ」

「どう？ まだ？」

「ああッ、苦しいッ」

「いじめてほしいって言ってたね」

「ああッ、まだ締めるの？ うッ。乳房がくびれて息がとまりそう」

「思いきり、もがくといいよ」

「く、くるしい責めだわ。ああッ」

「汗ばんできたね。お姉さんの、こうして、もだえてる顔の表情って、素敵だなあ」

「ひどいことさせるのね」

「痛かったら、もう堪忍してやろうか？」

「そりゃ痛いわあ。こんなにしめつけられるんですもの。ううッ、でも、この緊縛感がたまらないの」

「やわらかい肌に、縄がものすごく喰いこんでる。ひもがちぎれないかな」

「ああッ」

「苦しそうだね」

「たまらないわ。あッ？ まだまだ締めつけられるの？」

「だって、お姉さんの身体、いくらでも締まってゆくんだもの」

「始めて縛られて、それも、うッ、こんなにうッ、きびしい緊縛感を味わうなんて、考えてもいなかったわ」

「そんなに身をくねらせて辛抱して、ほんとうに大丈夫かな？」

「うれしいわ。息がつまりそう」

「うーッ」

「うーッ」

「うーッ」

「うーッ」

「うーッ」

「うーッ」

「うーッ」

「うーッ」



「ほんとうに責められてるのなら、許してくれないよ。まだ」

「う、うッ。乳房が苦しい」

「とうとう降参した？」

「だって、こんなにくるぐる巻きにされてるんですもの」

「じゃあ、これくらいでやめよう」

「ああ、やっと帯を抜いてくれたのね。ずいぶん苦しかったわ」

「そうでなくとも、思いつき縛ってあったんだもの」

「ああ、何だか気が遠くなってゆくみたい」

「ああ駄目だよ、ぐったりしちゃ。もっと違う方法で責めてあげてもいいよ」

「今日は、どこまで責められるのかしら？」

「たえられないなら、もうほどこいてあげてもいいよ」

「あ、待って、もう少し、このまま縛られていたいわ」

「そう？　じゃあ、とにかく乳房を締めつけている部分をずらせてあげよう。あれ？　きつく括ったから、ずらすこともできない」

「あ、乳房をつかむの？」

「せめて縄目の間から、外してあげるよ。ああ、やわらかいなあ、女の肌って——」

「はずかしいわ。さわっちゃあ」

「こうして、ひっぱり出しとくといいいんじゃない？」

「ずいぶん楽になったわ」

「お姉さんの乳房、こうしてみるとずいぶん立派だな」

「いや、そんなにいいじっちゃ」

「この手ざわりがたまらない」

「乳房までがおもちゃにされるのね」

「やわらかくって、とてもいいもの」

「そんなにされると、いやん」

「ぼく、会社でもお姉さんの胸の所がふくらんでるの洋服の上から見ても素晴らしいなあと思ったこともあったけど、こうして素肌のまあいじられるなんて、夢にも思わなかった」

「縛られてちゃ仕方ないわ」

「やわらかくってこの弾力がたまらないや」

「ううッ。益々力をいれるのね」

「どうしたの？　苦しいの？」

「……」

「もだえてるじゃない？」

「あなたは知らないのね」

「何が？」

「何がって、女の乳房をそんなにするって、それは愛撫になるのよ」

「え？　乳房をいじることが？」

「この美佐をどうする気？」

「どうするって？」

「あなたは一体どうなのよ。ほら」

「うん、ぼくも何だかたまらない」

「縛られて自由を奪われて、こんな目に合わ

されてちゃ、どうなるの？」

「お、お姉さん、起きて——」

「起きてって、こんなに縛られてて、起きられっこないじゃないの」

「そうだな、坐らせてあげる」

「あら、正坐させるの？」

「今日のお姫さまも、こうして縛られて坐らされていたっけ」

「でも、あたしはまる裸にされてるんだわ」

「うしろから革の鞭でぶたれてたね」

「あたしも、これからぶたれるのかしら？」

「鞭がないからぶたない。その代わり……」

「その代わり？」

「キッスするよ」

「いいわ」

「むうッ」

「ム、ム、ム、ム」

「おいしい唇」

「もっと唾液を吸わせて——」

「む、う、う、う」

「今まで苦しい目に合わされたあと、こんなにされるとたまらなかったわ」

「どうしたら、いいんだろう。ぼく」

「もういじめないの？」

「もう可哀想」

「じゃあ、この縄ほどいて。私があなたを責めてあげるから——」



カメラ・ルポ

# 惑溺の周辺

塚

本

鉄

三

七月三日――。

あの梅雨空の一日、私は沖縄出身の肉体美人、座間明子の緊縛フォトを撮影することが出来て、ほっとした気持であった。

何といっても初対面であり、初めての緊縛というのであるから、あれで精一杯の努力であったとは考えるものの、時間の関係もあって十分に腕を揮う余地がなかったのが何か心残りに思えて仕方がなかった。

それで第二回目の緊縛では、彼女が秘かに望んでいるというA感覚への責めも含めて、一つ本格的な責写真を撮影したいものだとか回の機会を心待ちにしていたのであった。

いや、責写真の撮影ばかりでなく、沖縄女性の肉体の裡に秘むM性をとことんまで引きずり出して完膚なきまでに露呈させてやりたかった。出来ればプレイを超越して、彼女の肉体に惑溺したい気持が私のS心を異常なまでに駆りたてていた。次の明子の公休日こそ、どんなことがあ



知り合った頃の花坂道子



っても、私は彼女をとっちめてやる、と、そう固く決心していた。

ところが私の主宰している太陽アートセンタ―の上得意で、大量の型録やパンフレットの発注をしてくれているメーカーの社長から七月十日に電話があつて、夏休みに入ったら家族連れで香港・マカオ・台湾への海外旅行を企画しているので、一緒に行つて写真撮つてくれないかという依頼があつた。

カラーのスチール写真とカラーの8ミリを撮影してほしいというのが、依頼の主旨であつたが、正直のところ、香港・マカオ・台湾へは既に三回も行つていたので、余り気が進まなかつたのだが、大切なお得意先の頼みではあるし、それに先方が私が喜んで行くものだ、と、頭からきめてかかつていたので、つい断わるきっかけを失つてしまった。

余り日がないので慌しく旅券の申請をしてイエローカードは持つていたので種痘はいいとしても、二回に亘つてのコレラの注射に暑いさ中を走りまわつて、やっと旅券の受領をすませたのが、出発の二日前だつた。

シンガポール行のキャセイ航空の機上の人となつたのが七月の末の暑い日だつた。

暑い最中の真夏に、東南アジアへ行楽で行

く人は少ないからシートオフに当たるのだろうか、乗客は至つて少なかつた。

各々窓際に席をとつても、あとの席はガラガラあきという有様で私も後に近い右側の窓際に席をとつた。ふと前を見ると、若い女性が窓際に、一人で坐つてい

る。袖なし服からスベスベとした艶のある二の腕を出して英字新聞を読んでいる若い女性は果して何国人なのか、興味をもって顔をのぞき込んだところ、濃い色のサングラスが白い顔の表情をかくしている。

私が「隣へ坐らせて貰つても構いませんでしょうか」と言葉を掛けると「いいですよ、どうぞ」と彼女は愛想よく答えてくれた。

私が隣へ席を移すと、今まで読んでいた新聞を右脇へ置いて、私の問いかけを待つような態度で席をあけてくれた。

華奢なようで、それでいてしなやかな強靱



さを秘めた肢体をワンピースに包んだ彼女はマタハリのような女スパイか、或は女探偵かと、映画や小説だったら、謎めいた興味を抱くところだが、現実には良家の華僑のお嬢さんというあたりが順当なところだろう。

こんなお嬢さんと知り合いになれば、と持前の探求心がむくむくと頭を持ち上げた。

私が彼女に何処へ行かれるのですかと尋ねたところ、クアラルンプールへ帰るのだということであつた。昨年、私がシンガポールへ行く途中、マラヤ連邦の首都であるクアラルンプールへ立ち寄つたことがあると話すと、急に彼女は私に関心を示しはじめた。





シンガポールの英語  
学校を卒業したので、  
話すのも書くのも英語  
が一番得意であるが、  
母の母国語である日本  
語と福建出身の父の言  
葉である福建語は、日  
常の会話に不自由しな  
い程度、そして北京官  
話少々、商売用に使  
用するマライ語、これ  
が彼女に通用する言葉  
だが、家庭内での共通  
語は英語だそう。

私が馬來語で話しかけると、彼女は驚いて何処で習ったのかと聞いたので、東京だと答えると、けげんな表情で円らな瞳をまたたかせていた。

万国博覧物に来て日本語で話すことが出来たのは非常に嬉しかったので、これからは、もっと日本語を勉強したいのだが、書くのは大変むづかしいと言っていた。

物を考えるのは、やはり英語、そして、彼女の日本語や馬來語も英語の発想からきているようだ。例えば八仕方がないVさし当り、

中国語の没法子に当る馬來語の Apa boleh buai も英語の What can be done くらいにしているように――。

彼女がここが自分の家の住所だといって赤い表紙の手帖の一枚を破って、アドレスを書いてくれた。私が自分の名刺の裏に名前をローマ字に書き直しているとき、社長の家族に同行してきている女性秘書が、社長が私を呼んでいると伝えにきた。

伊丹空港を発するとき、8ミリもスナップ写真も撮ったのだが、台北に着いたら飛行機を降りてくる一行を8ミリで撮ってくれというのである。ということは私が一行より先に降りていなければならないのだ。と話している中に、禁煙とセーフティバンド着用のシグナルが出て、やがて機が大きく傾くと窓外の緑の大地が、ぐるぐると回りながら目の前に迫っていた。

台北の松山飛行場では私は忙しかった。

一わたり社長家族の写真撮影を終えて乗客の休憩所や土産物の売店まで行って見たが、彼女の姿はどこにも見えず、慌てて汗をかきかき座席に戻ってみると、既に彼女は席にあって私の帰りを待っている風だった。

香港の啓徳飛行場に着いた時、さようなら

何処へ行くのかと訊くので、香港だと言うと失望の色を顔に表わし、シンガポールまで行くのだったら、是非クアラルンプールで降りて欲しかったのだがと言った。父がゴム園の経営と雑貨の販売をしているので、自分はその手伝いをしているのだとも言った。

彼女の断片的な話を要約すると、父は中国人で母は日本人、彼女は長女で弟が二人あり、今度万国博覧物に団体で日本へ来たのだが、自分だけ仕事のことと急用が出来たので一人で国へ帰るとのことだった。



とお互いに言葉を交したただけで行き違う人の波の中で離れ離れになってしまった。

五泊六日にわたる海外旅行を終えて帰国したのは、八月四日の夕刻であった。

私は座間明子さんとの約束に依り、彼女へのプレゼントとしてホワイトゴールドの台に澄んだ深い翠をたたえた翡翠の指輪を香港で買い求めていた。

翌日、早速電話をしたところ、やはり予想した通り私の留守中に彼女は電話してくれたそうである。公休がとれるので第二回目の撮影に泊りがけで行ってもよいということ伝えようと思っていたのが私が不在だったのがっかりしたと繰り返し言っていた。

次の休みは二十日以後とのことなので、その時の再会を約して電話を切ったのだが、なんとなく心残りであった。というのは、十月号の原稿を出した時、第二回目の分も、今すぐにも撮影し、その記事も書くと言っておいたので、それが駄目になってしまったからである。

大体、私は原稿用紙にぶっつけで書くので下書きをして、それから清書するというような人から比べると原稿書きは早い方だと思っている。最近書いた原稿にしても殆ど一回分

を三時間か四時間位で書き上げている。だが書いている途中で来客とか電話があると苦手である。せいぜい、二分か三分の電話ぐらいと言う人があるかもしれないが、へんな電話が掛かってきたりするとなんかきりペンが停ってしまうことがあるからかなわない。

読者通信や読者からの便りを読んでいると辻村さんのカメラハントや私のカメラルポを何か大変羨ましいように書いている人がよくある。若い女の子を裸にして縛り、そのルポ記事を書いて原稿料を貰うのだから、こんな良い役回りはないと思うのも当然だが、これは思い過ごしであって、やっている本人にとっては大変な苦勞なのである。

私自身の経験からいえば、やはりよく気心の知れた相手と写真とか記事とかを度外視してプレイした時が一番楽しいし、また疲れることもないのだが、これは誌上に発表しないのだから、どんなに楽しかったかは、わかつ



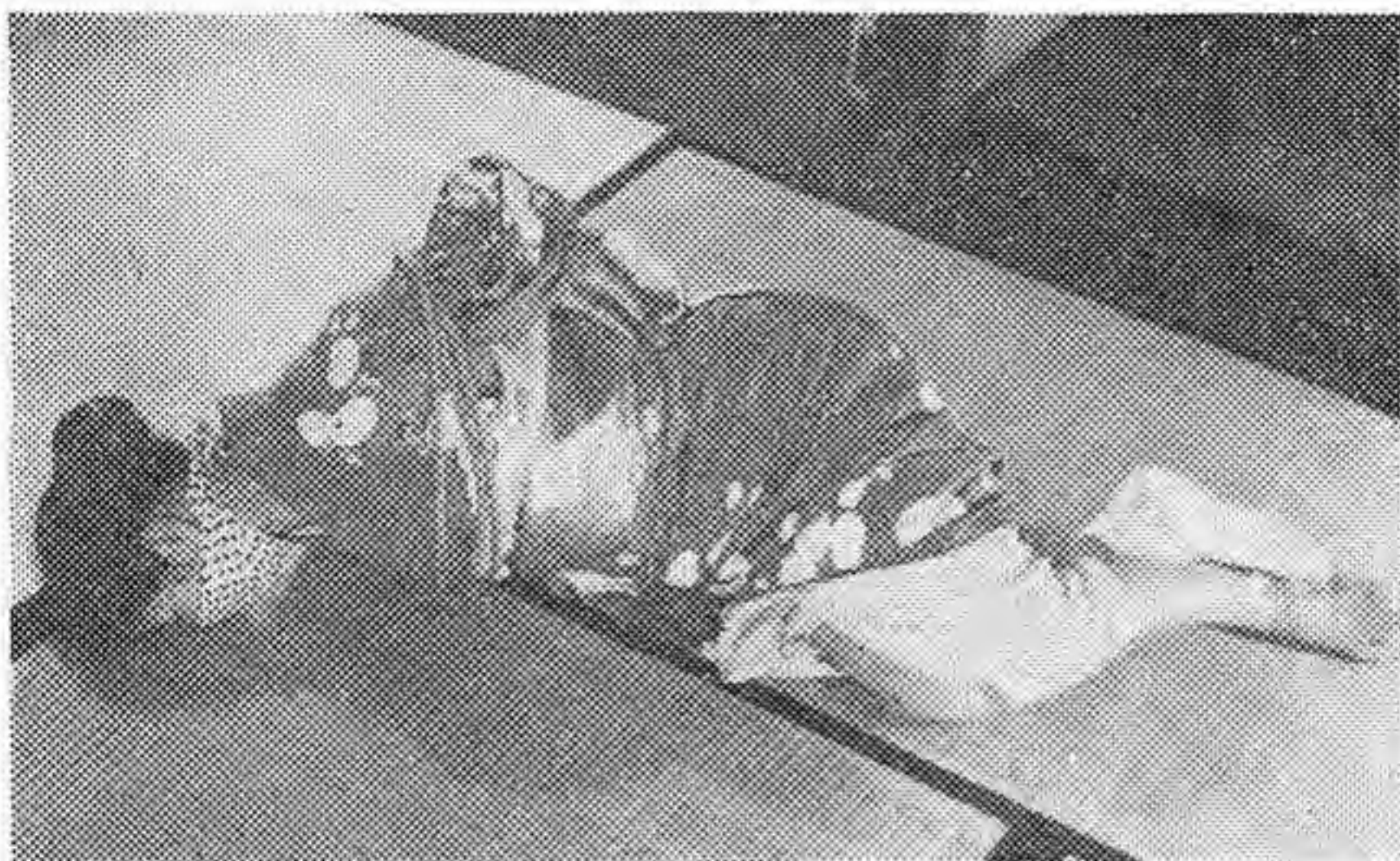
て貰えないのが残念である。

先日、私が新しく撮影した緊縛写真を或る読者の方に贈り『彼女はSMや縛りに何の関心もないのですが……』と但し書きをしたところ、「縛りに関心のない女性が、こんな風に縛られますか」と折り返し尋ねてきたことがあったが、或る意味では、関心のない方が容易に縛らせるということも云える。

座間明子さんのように、人縛りVに強い執着を持っていると、却って羞恥心が激しくて導入を或る程度うまくやらないと失敗するケースも起こる可能性がある。

以前、私は全然、縛りにも、SMにも関心も執着も持たない女性をモデルとしてグラビ





アに発表したことがある。

その当時、私は「緊縛モデルの素顔」という記事や「緊縛写真の撮影と実際」という色頁、それに巻頭のグラビア写真なんかを担当していて、かなり忙しかった。特にグラビア

頁は、毎号新しい女性の緊縛写真で飾らなければならないので厄介だった。

片手間のお遊びというわけにはいかない。或る程度美しくって迫力のある緊縛写真のグラビア印刷に適したネガを（グラビア印刷を綺麗に仕上げるのにはネガが必要だった）16頁分なり時には32頁分、嫌でも応でも作成しなければならぬのだ。

当然ネタ切れに近く、なってくる。

編集部からは矢の催促である。恋人やガールフレンドを動員してでも、グラビア頁を穴明きにするなというわけである。

その頃、私には特に大事にしていたガールフレンドがあった。むしろガールフレンドというより掌中の珠のようにしていたペットといった方がよいかもしれない。

第一、彼女は一緒に連れて歩いていると、すれ違う男性が思わず願うほど美しかった。如何にも、お嬢さんらしい可憐な美しさは、洋装や和装で私のカメラの前でポートレート多くの傑作を生み出していた。第二に彼女は母親との二人暮らしでありながら、亡くなった父が莫大な遺産を残していたので短大を卒業するなり、気尽な花嫁修業をしていてデイトの暇はいくらでもあった。BGとかOLで

あると、たまの日曜日か勤めが終った六時とかに待ち合わせすることになるのだが、何となく佻びしい気がする。

その点、日本舞踊だ、お花だ、お茶だ、時には洋裁の塾をのぞいたり、お料理の稽古をしたりという気尽な日常だから、ウィークデーに誘っても、すぐ応じることが出来るので頗る便利であった。

もっとも、日本舞踊は花柳流の名取だそうだから、暇つぶしのお嬢さん芸でなかったのかもしれないが、とにかく生活に余裕があるため着てくる洋服、和服にしても流行の尖端を行くものを巧みに着こなしているのので、今度はどうな服装で来るかと楽しみだった。

第三に、快活明朗な性格と豊富な話題で逢っていても少しも退屈しないことだ。読書するといっても週刊誌が中心のようだったが、芸能界の噂とか、若い女性の流行語、流行している歌なんかを上品な言葉で話してくれるので私はそういった知識を、ずいぶん彼女から仕入れたものである。

彼女には学校時代の友達、お稽古仲間の友達、それに悪友ともいえるべき遊び友達など、いろいろの沢山の友達があったようだが、ダンスホールや喫茶店で知り合った同性の友達



のことについて、相当きわどいセックスの話をする人があって、やはり近代的な女性だなあと思うところがあった。

だが、当然のことながら、彼女はSMとか縛りについては、皆目その知識はなかったしそういった世界があるということすら夢にも考えていなかったことだろう。

その彼女を、私は全裸の緊縛モデルに使ってやろうと思ったのだ。グラビア頁の構成で切羽詰っていた私は、後先考えずに、とにかく現実の苦境打開のために頼み込んでみようと思った。

経済的に困っていない彼女に、金を餌にすることは出来ない。しかし、奔放な彼女の性格からして、口説き方如何では、案外容易にOKするかもしれないという成算があった。

長い梅雨の間、一日だけ晴れ間があって、朝からよい天気だったので、私は郊外へ気晴しに遊びに行かないかと電話で誘った。

長雨にうんざりしていた彼女は早速、私の誘いに応じて出掛けてきた。

地図を持参しなかったので、私には未だにそこが何という地名で、又、その池が、何という名なのかわからないのだが、とにかく池田から一時間半ばかり走っただろうか。

咽喉がかわいたのでコーラでも飲もうかと立ち寄った茶店で、ふと、裏を見ると割に大きな、円形の池が水面を光らせた。岸辺に五、六隻のボートが停泊している。

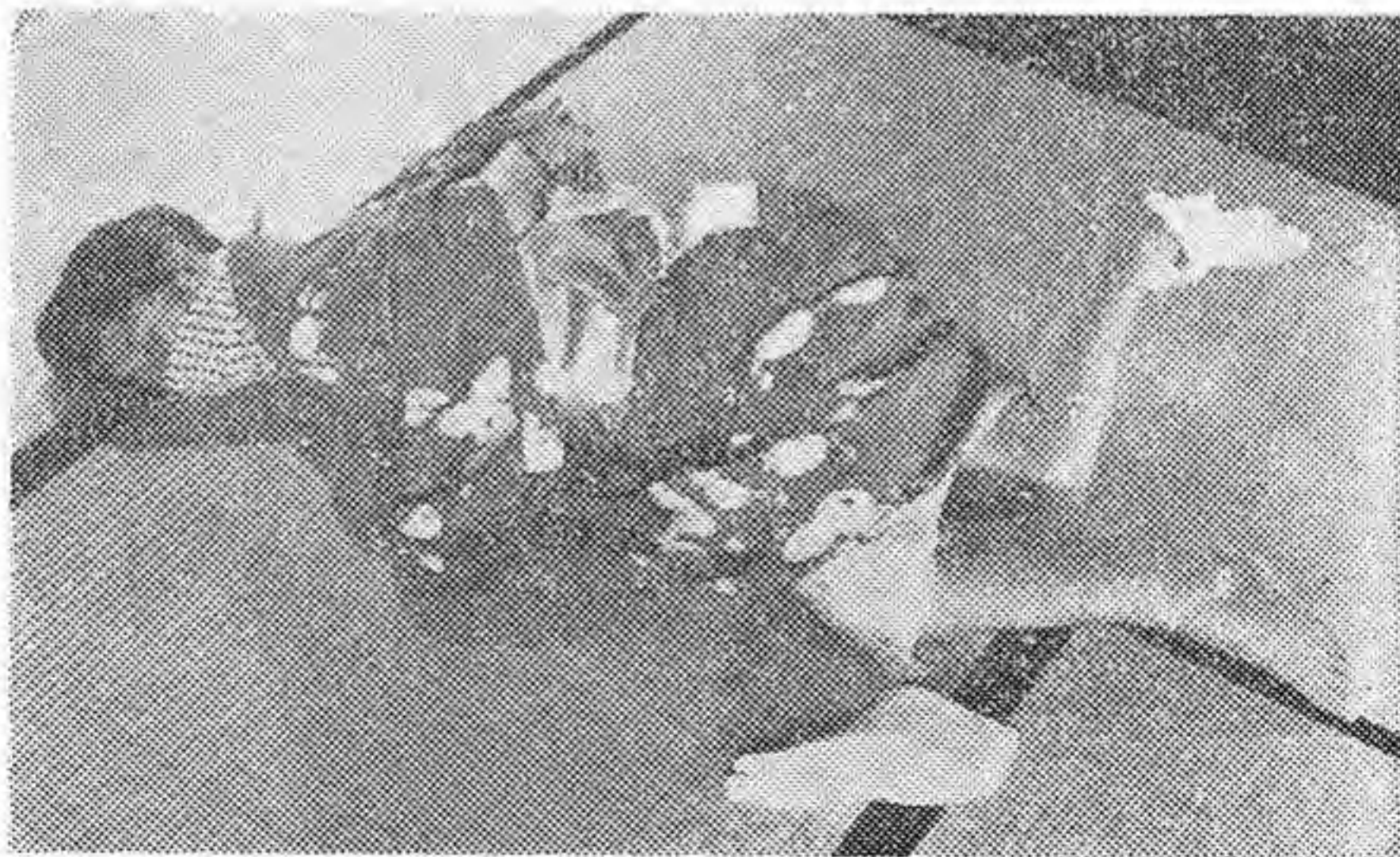
茶店の主人にボートを貸して貰えるのかと尋ねたところ、このところ、ずっと雨で誰も見えませんが、お乗りなさるなら、どうぞと言う。雨上りの緑が殊の外美しく、二、三十分でも漕いでみようかという軽い気持で二人してボートに乗った。

池の中程まで漕ぎだしてわかったのだが、その池は、茶店の個所から見えている円型のものだけではなく、ずっと奥まで続いているのである。漕いでも漕いでも、次々と池が現われてそれが限りなく続いている。

これは池ではなく、堰堤によって造られた人造湖だと気づいたのは、岸に沈んだ樹々が清澄な湖水の中から、水中の林となって目の前に迫ってきてからだ。

青空と岸の森や林の緑が映えて、紺青の水は何十米下まで見透せる程澄んでいた。

飲み干してしまいたいような清澄な水。スイスの高原の湖にでも遊んだようなくっきりと際立ったエキゾチックな眺望。あの板囲いのバラックのような茶店で想像していたのと



は、余りにもかけ離れた魅力的な風景に私は魅せられたように漕ぎまわった。

「こんな綺麗な水で泳いでみたいなあ」  
期せずして、二人の口から、こんな言葉が吐かれていた。しかし、水着はおろか、タオ





ル一枚持っているわけではない。

「だが、水着がないからなア」

そう私は独り言をいって呟いたが、

「へいっちゃらよ」

彼女はもう赤い紐のサンダルシューズを脱いでいた。ノーストッキングである。

若い女性の脱衣は早い。

私があッと思った時、彼女はフリルのついた白の下穿きをくるりと足から抜くと、すくと立ち上っていた。

全裸である。

伸びやかな肢体。

私は一瞬、あっけにとられた。

だが、次の瞬間、彼女はトモの方から身を躍らせて水中に飛び込んでいた。

巧みな潜水――。

と、二十米程先にぽっかりと頭が浮かんだかと思うと、鮮かなクロールで岸の方へ向かって泳いでゆく。

私もあわてて服を脱ぎにかかった。

泳ぐ＝水着

そういった固定観念を打ち破った彼女の突飛な行動に私の方があわててしまった。

靴を脱ぎ、靴下を脱ぐ。そしてズボン、次には上衣。それでも、まだズボン下にアンダーシャツが残っている。

冷たくないかなあと一抹の不安感を抱きながら飛び込んでしまったから、腕時計をはずしていなかったのに気がついた。

表面の水温は案外高いのだが、底に近づくに従って層をなして水温の変化があった。

私が水面に顔を出した時、彼女は岸边から

ターンをして、こちらへ向かってくるところだった。おだやかな湖面に二人の掻く波紋だけが美しい拋物線を描きだしている。

湖面の一点で邂逅した。

彼女はキャツキャツとはしゃいで、私に寄り添ってきた。

私は人魚を抱いているような気持だった。

ボートは静かに風に流されている。

青空が湖面を掩っていた。

そんなことがあってから、私は彼女に緊縛モデルになることを口説いても多分OKするのではないかという一種自信めいたものを抱きはじめていた。

「へいっちゃらよ」と叫んで湖水へ全裸で飛び込んで行った彼女。

「へいっちゃらよ」と言って果して簡単に縛らせてくれるだろうか。

先日、或る読者の方から、こんな依頼があった。『自分は結婚を前提として交際している一人の女性があるが、彼女はSMについての関心は少しもないので、一つ人縛りVが好きになるように飼育してくれないか』というのである。こちらを人縛りVの調教師かなんかのように思っているらしいのだが、若しそんな重宝な調教師がいるのなら、こちらの方



が調教を依頼したいくらいだ。

私は彼女に緊縛モデルになって貰おうと頼む機会を狙うようになってから、どうも素直に彼女と接することが出来なくなってきた。今まで彼女と逢っていて無駄話を交わしているのが楽しかったのが、口説いて縛り写真の撮影を納得させようと思い立ってから、急にそんな楽しさが失われてしまった。

殊に湖面での水泳以来、その可能性が増したという自信を持つと同時に、尚一層、今までのデートの楽しさがなくなってしまった。

私が彼女を緊縛モデルにしてしまったときは、彼女とのデートの楽しさを総て放棄してしまうときなのだろうか。

そんな心の葛藤とは別に、追い詰められた私は、結果はどうともあれ、彼女に緊縛モデルとして誌面に登場してくれることを納得して貰うよう、依頼せざるを得ない立場に陥っていた。

最初は洋服着用、着物着用で縛り写真を撮影させて欲しいと頼んだ。

「何だかわからないけど、貴方の頼みだからきいてあげてもいい」

ということとで気乗り薄であったが渋々承諾してくれた。

それが最初、洋装と着物だったものが、シ

ュミーズ姿、長襦袢姿となり、やがて、いつとはなしに全裸の緊縛にエスカレートしてしまい、一旦そうなってしまうと、それから後は全裸の緊縛が当たり前になってしまった。

私は彼女の本名を若干もじって、八坂道子Vという名前をつけてグラビア原稿にして編集部へ送った。

SMとか、縛りについて、何一つ予備知識のない若い女性が簡単にモデルになることを承諾したことについて疑問に思われる方も多いかと思う。

花坂道子に関しては、私が二年半程に亘って交際していて気心もお互いに知り合っていたから、八貴方の頼みならばVということと容易に納得してくれたものと思うが、これが初対面とかいうことになると事情は大変違ってきて、至極むづかしいと思う。

美貌のファッション・モデル春丘リルを緊縛モ

デルに口説いたときも初対面だったので非常に苦労した思い出があるが、そういった経験は数人に亘ってあるし、又、中には失敗したこともあるので、もし機会があれば、そうした話も書いてみたいと考えている。

花坂道子を全裸にして縛りだしてから、回を追うに従って次第に縄に対して彼女なりの反応を示すようになり、私は花坂道子の開眼ということの期待に胸を高鳴らせていたのだが、突然彼女から手紙がきた。『長らくお世話になりましたが、今度結婚することになりました。』





という書き出しから、今までの思い出話や結婚する相手のことについて便箋三枚ばかりに細い字で書かれてあった。

私には突然のように思えたが、彼女は早くから見合いもし、相手と交際もしていたようで、只私には黙っていたので知らなかっただけであつた。彼女は二十三才、まあ適齢期だったから結婚するのは当然だが手紙の文中へ相手の方はお金持ですが私と齡が少し離れていますと書かれていた一句には、いささか氣になった。

彼女は母と二人でコーポに住んでいて専用の電話があるのだが、私はなんとなく電話をするのがためらわれた。

彼女の母親というのは四十二才だそうだが彼女の話によると「母は私よりもずっと美人なの」とのことである時、私が電話したところ、出てきた人の声が彼女そっくりなので私は彼女だとばかり思って話していたのが、

「娘は今、留守なのですが……」  
と言われて、びっくりしたことが

ある。

「ああ、お母さんですか、失礼しました」

あわてて詫言したところ

「いいえ、娘がいつもお世話になりました」と挨拶されてかえって、こちらの方が恐縮した。

「母は美人だから十とおぐらい若く見えるわ。紹介するから会って見ない。貴方だったら一遍に好きになるわよ」

そう彼女に言われていたが、その機会はなかった。だから、今、もし彼女のコーポに電話して母親が電話口に出てきたら困ると思つたからだつた。

だが、花坂道子については後日譚がある。

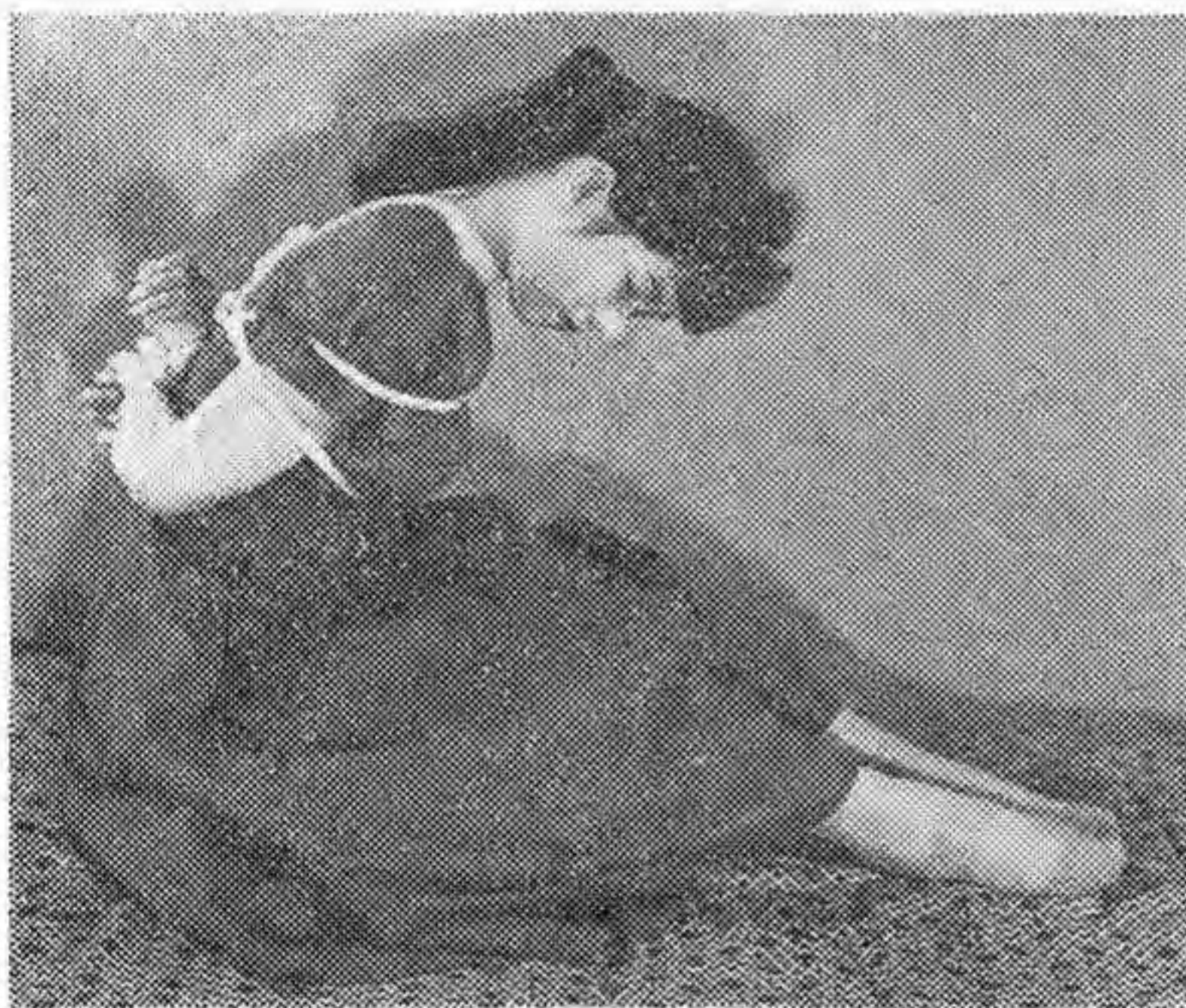
彼女からへ結婚するVという手紙を貰って約半年ばかり経った頃、彼女の友達という若い女性から私に電話があつた。とにかく逢いたいというので、私も彼女の消息が聞かれるかも知れないと思ひ指定された喫茶店に出向いた。

その女性は一度面識があつた。彼女と喫茶店で待合させたとき、その席にいて、一緒にコーヒを飲んで別れたことがあつた。

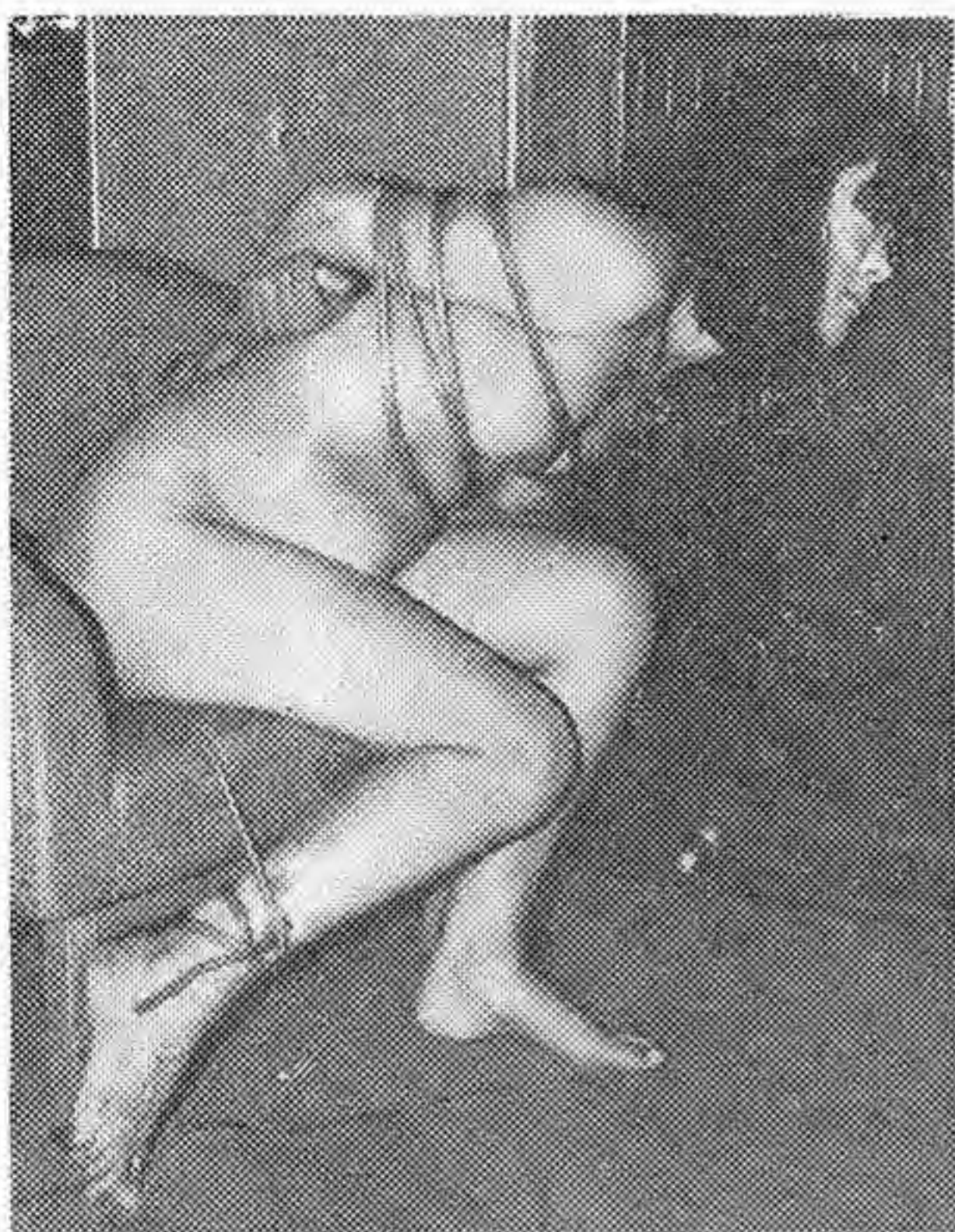
その女性はブルーバードに乗ってきていて私にいい所へ連れていってあげるから助手席に乗れと言う。

わけがわからぬまま、私はその女性の運転する車に乗せて貰つた。車は阪神国道を西進して夙川沿いに山手へ向かつた。途中二回ばかり車を停めて赤電話をかけていたが、私は別に氣にも止めなかつた。

芦屋の高級住宅街にさしかかつて、とある







広場に車を駐めた。鬱蒼と茂る庭樹の間に、瀟洒な洋館が見え、そのベランダに人影が動いていた。その女性がハンカチを振ると、向こうの人影は控え目に手を振った。

それは花坂道子の若妻の姿であった。

私は車から降りて、ベランダの方を見た。

距離があるので、とても声は届きそうにもないので、私は只黙って彼女を見ていた。

このような豪壮な邸宅に住んでいるのだから、花坂道子もきっと幸福な新婚生活を送っているだろうと私には想像されたが、何と

も奇妙なめぐり合いの果、私は再びその女性の車に乗せられて帰ってきた。

ここまで書いて、私は再び座間明子のことについて書いておかねばならない。

八月になって、私は座間明子と二回逢う機会を持った。

一回は私が香港から買い求めてきた翡翠の指輪を届けるため、さんちかタウンの喫茶店で彼女の出勤前のひととき、あわただしくコーヒーと一緒に飲んだだけで別れた。

二回目の時は、出来上った奇ク十月号をどうしても早く見たいというので直接彼女に手渡すため寮を訪れたのだった。

いずれも写真を撮影したりプレイをしたりするチャンスはなかったが、次に行なう緊縛写真撮影に対する布石だけは十分しておいたつもりである。もう私の行なうどんな苛酷な責めVに対して明子は易々諾々として応じることだろう。九月に入ったら、そうそうに日程に入る約束をして

いるので、その時は素晴らしい写真を撮影して十二月号誌上を飾りたいと思う。

私が女性の緊縛写真を手がけてから、座間明子で、もう何人目になるだろうか。数えたことはないが、相当な人数になることは確かである。

今年六月に来阪されたという編集部よりの連絡を貰いながら、どうしても断りきれない用件があったため、逢うことが出来なかった中河恵子なんかは、嘗ての梨花悠紀子と共に最も印象に残っている女性の一人である。梨花悠紀子については、未発表の写真もまだまだ沢山あるし彼女の被虐に開眼した慟哭の姿を目のあたりに見ているので、いずれ彼女の魅力を、私なりに書いてみたいと思っているが、今回はひとつ、中河恵子の想い出について書いてみよう。

妊娠七カ月かで万国博見学に来阪した中河恵子は、やはり行動派の人間である。僅かの時間をさいて妊婦の緊縛写真を撮影してもよいとわざわざ編集部まで連絡してくれた気持は本当に有難い気がする。

今年は私の都合でプレイすることが出来なかったが、昨年来阪したときは二日に亘って激しいプレイと写真撮影もしたし、主人なる



男性とのプレイの写真を新婚二月目ぐらいには撮影したこともあった。いずれも誌上に発表することを前提としたものでないので、ネガのまま保存しているが、これも機会があれば承諾を得て掲載したいものである。

中河恵子は本誌に連載している団鬼六作の『花と蛇』に感銘して本誌の旧号を買い漁りその結果、緊縛モデルになりたいと考え、編集部へ通信を寄越した女性である。

第一回目に出会ったとき、和服姿で車を運転してきた彼女、中河恵子は、縛りについて限らない憧憬を抱いてきたので、緊縛への導入はまことに容易ではあったが、それでも、第一回目の撮影では、気心が知れないのでなんとなくぎこちなく感じたものである。

それがもう、第二回、第三回となるに従って急激に昇進した結果、露出症気味の彼女の被虐性は最高にまで達して、四回目、五回目に至っては、爆発的な昂まりを見せたのである。

この間の詳細に関しては、筆のたつ彼女が自分自身の告白として、既に本誌上で発表しているの、私は爆発的に噴火した第五回目あたりの緊縛行を追体験してみよう。

その頃――。



中河恵子は愛車を駆ってハイウエーをぶっ飛ばしてくると、私が日中、時折り顔を出す太陽アートセンターの事務所へ電話してくるのだった。幸いにして私がおれば、直ちに待合わせ場所で合流して、京都、神戸、和歌山へと車を走らせたものである。

ハミイラ採りがミイラになるVという言葉がある。以前に関谷富佐子の緊縛フォトを撮影に行つて土砂降りの雨にあい、ホテルまで行きながら、とうとう写真を撮ることが出来ずプレイに惑溺してしまったことがあったが、

中河恵子の場合も、時によっては写真撮影のお膳立まではしたものの、カメラや三脚、ライトなどは只のアクセサリーか小道具になつてしまったことも再三あった。しかし、そんな場面をとくとくと文章に書いて発表したりすると、読者の懸念をかうばかりでなく、私自身も或る種の被害をこうむりかねないので、あくまでもプレイはプレイとして楽しむだけに止め、文章にすることは、つとめて遠慮してきた。

ところが、中河恵子から例の通り電話があつて、国道26号線を南下して羽衣近辺の新築のモーテルに入った時に、全く予想外のハプニングが起こったのだから驚きである。

翠の樹々に囲れた、このモーテルは、一軒一軒ガレージがついていて、その脇の玄関を入ると一階は洗面所、トイレ、脱衣室、それに浴室になっている。

カーペットを敷きつめてし字型に曲った階段を上った二階には、三十平方メートルの応接間があつて、椅子が四脚置かれてあつた。



隣りは寝室で豪華なダブルベッドが厚くカーテンに囲まれて鎮座ましましていた。

浴室が階下なので、わざわざ階段を降りてゆかねばならないのは不便だったが、ゆったりとスペースをとってあるので、写真を撮影するのに広々としてカメラの準備をするにしても至極快適だった。

彼女も入浴を済まし私も撮影の準備を一切整えて、さて、私が縄を片手に彼女に近寄ったときだった。

「あの、私、お願いがあるんだけど……」

鼻にかかった中河恵子の甘い声が、ちょっと恥らい気味に語りかけてきた。

一瞬、私はためらった。

第一回目の時、彼女は、私が出したモデル料を、「私はそんなの、いらないの」と強引に拒絶したのに甘えて、それ以来、一回も支払っていなかったのである。モデル料ばかりか、時にはレストランの支払いも彼女に持つて貰ったこともあった。

咄嗟に、私はその請求だと考えた。

胸算用で三十万円までなら支払おう。それ以上の請求だったら、交渉して負けてもらわなくちゃならないが――。

そう考えて、彼女の次の言葉を待った。

「私、開股縛りにして欲しいと思って。恥かしいお願いなんだけど……」

彼女は羞らいに身も消えんばかりの風情である。

そんなお願いだったら、大歓迎である。

私は既に準備してあったカメラを三脚に据えて椅子の前に立てたカメラの脇から左右に二灯、三〇〇ワットのフラットをいつでも点灯出来るように配置した。

全裸にした中河恵子の後手を嚴重に縛り上げた。これでは彼女の両手の自由は完全に奪われたわけである。

椅子に正面向いて腰掛けさせた上で、恵子の希望通り、両脚を左右に思いきり開かせて足首に縄を掛け椅子の肘に固定した。

正面に据えたカメラにエヤーレリーズをつけて、いつでもシャッターを切れるようにしておいてライトを点灯した。なにしろ、至近距離から三〇〇W二灯をつけたのだから、そ



の明るさといったら目も眩む程の強烈さだ。F22に絞っても10分の1のシャッターは多分切れるだろう。

私はカメラのファインダーを覗いて、おもむろにピントを合せた。

と、どうだろう。

ピントグラスの上に映じたアップの大輪の薔薇の花が、満開になったかと思うと、次の瞬間、固い蕾にと変化している。

蕾から満開へ、満開から蕾へ――。

私は思わず自分の眼を疑った。ファインダーから目を放した。

やはり、この変化が私の目の前で、全く華





視線が、その開花の一点に集中して、脱出することが出来ない状態が暫く続いた。

やがて、この満開から蕾へ、蕾から満開への薔薇の花にもいささか異変が訪れた。スコールが降りそそぎ、その雫をしとど滴しはじめた。

私の凝視の限界は、そこまでであった。

あとは、もう直接行動に移らざるを得ない状態に陥っていた。もう後へは絶対に引けぬ心情でもあった。

それでも、シャッターだけは、わななく手で、二度、三度と切った。が、只それだけであった。そのシャッター音は、薔薇の花の開閉運動を一層激しくするのに役立っただけである。その日の写真撮影は、それまでで完全に終わった。

それから後は、中河恵子の愉悦の涕泣をテープレコーダーに細大洩らさず収めることにあった。

それから数日後――。

私は同じ場所へ中河恵子を誘い、緊縛姿態を数十枚撮影した。

どうしたことか、この時に撮影したフィルムはネガのまま紙焼もされず保存されてあった。私はこの原稿を書くに当って、各一枚宛てに印画紙に焼付けてみた。その数十枚の写真を見て、何故この日に撮影した写真が、すべてネガのまま放置されていたのか不思議に思いつつも、ひたむきに中河恵子の類稀なM性に魅せられて溺れるようにプレイに熱中していた当時を想起して転た感慨の浅からざるものがある。

今、秘かに考えるのだが、中河恵子は私の切るシャッターは奇譚クラブの誌上に発表される――ということに対して、胸がわくわくするような戦慄を覚えていたことだと思う。一人でも多くのマニアの、S男性の目に、自分の全裸の緊縛姿態が晒らされることに、限らない愉悦を覚えていたのだろう。だから中河恵子の緊縛フォトが一枚でも多く誌上に発表されることを願っていたに違いない。

それにも拘らず、プレイにばかり走った私は、折角写した写真を筐底に納めてしまった誌上への発表を怠ったので内心不本意なことだったろう。

麗きわまりない展開を繰り返している。

皎々たるライトの点灯、カメラのレンズの集中が、中河恵子の心情に、如何なる影響を与えたのであろうか。

私は、今の今まで、こんな見事な開花を見たことがなかった。

私はシャッターを切るのも忘れて、只呆然と眺めているだけだった。

開花は、やがて次の展開へと移行する。

私は身動きもせず、この見事な開花運動を驚異の眼を瞪って凝視し続けていた。

只、ひたすら凝視した。



夫婦相撲……

## 妻の挑戦

文と絵 椿 寿郎



図

「お帰りなさい」

夜勤あけの私を、妻のお艶がいそいそと迎えてくれる。いくら仮眠はとれるといっても夜通し勤務の警備員という仕事は神経が疲れる。その疲れが、見慣れたお艶の丸い顔が笑って迎えてくれるだけで幾分か消えるような気になるのだから有難い。

ホッとした気持で朝食を済ますと、読むつもり新聞を顔にかぶせて寝こんでしまうのがいつものことになっている。

今朝もそうである。二時間ばかりもぐっすり寝て、よい気分になって洗面所で顔を洗っているとお艶がにこにこしながら寄ってきて、何もいわずに私の手を取り、自分の腹の辺りに持ってゆく。

「どうした？」

「フフフ、当ててちょうだい」

私にはピンときたが、わざと考えるフリをして、着物の上からさぐる真似をしてやる。

「わかった。禪だな」

「ごめいとう」

そういうなり、お艶は着物の裾を腰巻ぐるみ、パツと割ってみせ

た。太く白い太腿と、真赤な禪が顔を出した。私は思わずニヤツとしてしまう。

「やるか、一丁」

「六畳に土俵をこしらえといたわ」

わが家の土俵は蒲団である。

「おまえも相撲が好きになったもんだな」

「面白いんだもの。もっといろんなテ、教えてほしいわ」

「俺も好きだが、テは我流だ。柔道なら少しは正式に習ったが……」

「我流でもいいわよ、勝てさえすれば」

「おまえも強くなったからな」

まったく、この頃のお艶は強くなった。いや、相撲が上手になったというのだろうか。曲りなりにも私の教えた取り口に加えて、娘時代に野良仕事で鍛えた足腰のネバリはバカに出来ない。私が会社にいる間、一人で禪を締めて相撲の練習をしているのではないかとも思うほどである。

六畳の中央に敷かれた蒲団土俵の横で、私は、これも手廻しよく用意されてあった晒木綿の禪を締めこんだ。お艶はすでに赤禪一本の姿で待ちかまえている。

「もう相当に強いんだから手加減はいらないだろう。ようし、思いきりひっくり返してやるからな」

私は蒲団土俵の横手に、控え力士よろしくあぐらを組み、向い側に同じように坐りこん



だお艶の白い体を見詰めながらそう思った。

「ヒガシイ千葉の海、ニイシイ秋田川」

控え力士のお艶、いや秋田川が、あぐらをかいて坐ったまま呼び出し役を兼ね、よっこらしょと立ち上る。まことに便利である。

苦笑をぐっと噛みこらして、わざとむつかしい顔付をした私も立ち上る。サガリはないので前垂れの端をちよいとつまんで土俵に上る。宿敵お艶と向い合い、チリを切って手を拍ち、その手を左右に拡げて上げる。横綱になった気持であるから、こせこせしてはいけない。水を使い、塩を撒く仕草も悠然と、土俵中央に寄っての四股も堂々と踏む。

見ると、敵も四股踏み最中だったが、いつの間に練習したのか、両足が一直線になるほど高々と脚が上がる。敵ながらあっぱれである。私の多少驚いたのが顔に出たとみえ、お艶はいかにも得意そうにニコリと笑い、次に脚を開いて腰を落して見せ始めた。尻が土俵に着くほど深く下がる。コイツメと思った私は、同じようにやってみたが筋がつっぱってとても駄目だ。残念ながら、体のやわらかさではとても敵わない。

「よし来いッ。三番勝負だぜ、絶対に容赦はせんぞ。今日は勝たさんからナ」

「あらそう？ それあたしのいうことよ」

「なに、生意気な」

向い合って腰を落し両手を着くと、ほんと

に斗志が湧き上ってくる気持である。上眼づかいに敵を睨んでやると、お艶も負けじと白眼の多い蛇のような眼で睨み返してきた。

それでも私は受けて立つつもりだから、お艶の突っかけてくるのを待っていた。ところがどうしたものか、お艶のヤツはなかなか立たないのだ。女心でアレコレと作戦に迷うておるらしい。蛇の眼がキョロリと動いたかと思うと、また、じいっと睨みつけてくる。

「そりゃッ」

私はじれったくなつて、声だけでけしかけてやった。とたんにお艶の下唇がピクピクと動いたかと思うと、「ヤッ」という気合と同時に突っかかってきた。

もちろん私も立って受けた。仲々強い突っぱりである。私は一瞬タジタジとなった。

「こんちくしょう、白蛇なんか負けてたまるかッ」我が身にハッパをかけた私は、グイグイ突っぱり返してやった。掌に柔らかな手応えはあるが、仲々どっしりとした反撥力が返ってくる。強い腰である。私は力をこめて突きたてた。さすがにお艶のヤツもズルズルと退がり始めた。もう一押しだ、と私がチラッと思った時、お艶の上半体がぐっと縮んだように、殆んど同時に頭が下ってパッと組みついてきた。私はとっさに体を右に開いて突っこんでくる頭をハタイタつもりだったが、開ききれなかったらしくて、お艶のヤツはしが

みつくように私の襟を掴んでいた。

双差しになられてしまったのである。

私はあわてて、上からお艶の両腕をカンヌキに絞ってやった。振り廻してやろうと思っていたのだが、どっこい、この白蛇は仲々思うようにはならなかった。そのうえ、逆にその頭が私の顎を押し上げてきて、グイグイと吊り上げようとしてきたのだ。私は一生懸命こらえた。お艶のあのデンとした大きな腹に乗せられたらおしまいである。

「生意気なことを……」と私は足の爪先に力を入れてそり返りながら、お艶の首を巻きこんでウッチャリに出た。とたんに、私の必死で耐えている足にお艶の足がカラミ付いた。

反動で二人は同時に倒れこんだ。

私はそのまましばらくひっくり返っていたが、お艶はすぐ上体だけは起こしていた。

「い、いまのは、あ、あいこネ」

ハアハア息を切らしながら判定する。呼び出しをやったり、行司をやったり忙しいヤツである。薄い朱に色づいて、うっすらと汗に光る大きな乳房が、激しい息遣いに波打っているのが見事であった。

二番目は、私の虚を突こうとでもするように、お艶はろくろく手もおろさずにブチかましをかけてきた。私は思わず二、三步下がったが、左右の突張りを連発して体勢のたて直し



をし、そのまま突きたてて攻勢に転じた。

胸の上を狙っているつもりだが、お艶の動きで乳房に当たる度に「キャッ」と悲鳴が挙がる。私はかまわず突張りて攻めてやった。お艶は、どうせ苦しまざれだろうが私の突き出した手を掴んで脇にかいこみ、片手カンヌキの形をとった。こしやくなことをするヤツである。私はすぐ寄って禪をとった。カンヌキが外れると同時に私の首がお艶の腕に巻かれてしまった。大乳房に圧迫されて、息苦しい。私は必死で吊ろうとしたが、お艶は得たりと首を巻いた腕に力を加え、更に体重を預けて押し潰そうとし始めてきた。

私は息苦しさと共に不利の体勢を覚えて、夢中で渾身の下手投げを打った。グラリとカラミ付いていた白蛇が傾き、私を掴んだままどっと転倒した。夢中とはいえ、私の下手投



情

げが決ったのである。

「お、おれの、勝、だ、ぜ」

「さん、ねん、だ、わ」

お艶は仰向けに倒れたままである。そして私もまた、彼女と同様にしばらくは起き上がれなかったのである。

ようやく息が整い起き上った私の背後で、「あらッ」という声が出た。振り向くとお艶がクルッと後向きになるところだった。「どうした？」と私が訊くと、チラリと振り向いたただけでさかんに禪を締め直しに掛かっていた。あの乱戦だ、乱れるのも無理はないわい、と私はニヤリとして自分のを見ると、私のもまた、禪の役目は果していなかったのである。

「さあ、決勝戦だ」

私は締め直した禪のミツを叩きながら、少々疲れた自分をはげますつもりでいった。お艶は無言で、すでに土俵中央で蹲居しているが、あまりくたびれた顔付きではない。

亭主の面目にかけても負けられぬ、と思つて、私は悠然と向い合つたが、蹲めた足がピクピク引きつるようだし、首や、脇の辺りが

重苦しい感じであつた。

手をおろした。

「ヨウッ！」という掛け声と一緒に、丸くなた白蛇が突進してきた。ドスツとブチ当た重量感は相当なもので、私は踏み耐えるのがやっとのことであつた。「グソッ」と思つたとたん、お艶は下から咽喉輪にかけてグングン押してくる。思わぬ速攻にとまどいながら、反り身になって辛じて咽喉輪は外したのだが、次の瞬間、無意識で突き返しながらお艶の頬をハリとばしていた。

「アッ」とお艶は叫んだ。だがすぐ「ちくしやう」と、もっと強い声が挙げたかと思うと口をとがらし、噛みしめた白い歯をのぞかせた凄惨な形相がぐっと迫り、柔らかな重量の塊りが私の胸にぶつかったと思うと同時に、私の足が払われていた。しまったと思つた時には、もうずってんどうと私はひっくり返っていたのである。

「グエッ」という情けない呻きが私の口から出た。私が倒れた上にお艶がモロに体重をかけて落ちてきたからである。私は潰されるかと思つた。お艶はいつの間にか掴んだ私の髪の毛を放さず、「参ったか、参ったか」と口走っている。

そのお艶の物凄く形相を、私は可愛いヤツと思つて眺めていた。

(おわり)







くった。

後手にきびしく縛り上げられた静子夫人が鬼源と千代に縄尻をとられて、その優美な裸身を押し立てられて来る。

「懐かしい人に面会させてやるぜ。一寸、檻の中を見てみな」

川田にそう云われて、ぼんやりと牢舎の中に眼を向けた静子夫人は、ハッと、何か云おうとしたが、みじめな自分の姿を恥じ入ったように、哀しげに顔をそむけてしまふのだった。

牢舎の中の珠江夫人も、それが静子夫人である事に気づくと、驚愕し、これもすぐには声が出ない。

「どうしたい。昔から親しく交際していた間柄なんだろう。何もそう遠慮し合う事はないじゃないか」

川田と鬼源は顔を見合わせて、さも面白そうに笑い合った。

「久しぶりのご対面でつもる話もある事だろうし、しばらくこの中へ一緒に入れておいてやろうよ」

千代が川田に云った。

「そうだな」

と川田は静子夫人の縄を解くと鉄格子の南

京錠を外した。

「さ、お入り」

千代は静子夫人の柔軟な肩に手をかけて、ためらうのを構わず牢舎の中へ押しこんだのである。

一糸まとわぬ美しい二人の人妻は、狭い牢舎の中で身を縮め合い、頭を深く垂れてすすり泣く。

「一時間の休息をあげるわ。昔話がすめば、レスビアンプレイについての細かい打合わせもしておくことね」

千代はクスクス笑いながら鉄格子の中の二人の美女に語りかける。

「女盛りの奥様二人のために、特製のすばらしい道具を用意してやるからな。楽しみにしていな」

と鬼源も浴びせかけ、川田や千代達と一緒に地下の階段を、大声で笑い合いながら上って行くのだった。

「——折原の奥様、あなたまで、あなたまでがこんな目に合うなんて」

静子夫人は、そっと顔を上げると、涙に濡れた気弱な視線を珠江夫人に向けて唇を震わせるのだ。

珠江夫人は両手で顔を覆い、かすかに肩を

慄わせていたが、

「どうしてこんなひどい仕打ちを受けねばならないのか、私、わかりません。こんな、こんな畜生にも劣るようなむごい目に……あ、どうして」

珠江夫人は口惜しげに齒を噛み鳴らし、耐えられなくなったように、わっと号泣するのだった。

「遠山家の奥様、一体、どうしてこんな恐ろしいところへ——」

「——どう説明していいか静子もわからないの。ただ、わかっているのは、もう静子は陽の当たる場所へは出られない女に転落してしまつたという事です」

「私だって、もう主人の前に出られる身体じゃないのよ、静子奥様」

珠江夫人は、美しい象牙色の乳房を両手で隠しながら、静子夫人の方へ哀しげな瞳を向けた。

「それよりも、私、お嬢様のことが気がかりで——今頃、お一人でどんなにお心細いことか。ああ、気が狂いそうだわ」

珠江夫人がうめくように云うと、静子夫人は頬をわなわな慄わせて、

「——許して、許して、折原の奥様。私が、



この私がこの連中におどかされて、さきほどお嬢様を……」

静子夫人は、激しくすすり上げながら、千代や森田に脅迫されて浴室に立籠った千原美沙江を説得し、悪魔の手に渡した事を告白するのだ。

「——静子は、もう身も心も腐り切った女になっちゃったのです」

と、ハラハラ涙を流していた静子夫人は、ふと顔を上げると次に、しんと凍りついたような冷たい表情になって、眼前の鉄格子をじっと見つめるのだ。

「——でも、もういくらあがいても駄目なのです。私達はこの地獄から逃れる方法はないのですわ。ああするより仕方がなかったのです」

一片の布も許されぬ牢舎の中の美しい二人の人妻は、自分達の暗い運命を歎き悲しみながら、それでも地獄の中でめぐり逢えた事にわずかな安らぎを覚えるのだ。

もう何カ月も世間から隔離されている静子夫人は、折原珠江の口から夫の遠山隆義の病院での日常など聞かされ、懐しさとすまなさに胸がしめつけられ、白い頬に大粒の涙を流すのである。

静子夫人と珠江夫人は、同じ千原流生花の後援者という立場から月に何度かは顔を合わせ、親しい間柄でもあったのである。

地下の階段を何人かが降りて来る足音に、二人の人妻は、ハッと現実に戻り、口をつぐみ、全身を硬化する。

千代が鬼源、川田、吉沢の三人を家臣のようにつれ、鉄格子の前まで来ると金齒を見せてニーと笑った。

「如何が、奥様方。プレイの細かい相談はまとまりまして」

静子夫人と珠江夫人は、世にも悲しげな顔をチラと千代の方に向け、すぐに眼を伏せてしまった。

脂の乗り切った二人の美しい人妻に肉の演技を強要し、身も心もそれに溺れさせるというのが千代の着想であった。

「お前さん達のために特別製の道具を作ったぜ」

鬼源は、布にくるんだものを鉄格子の間からぞかせて、

「アフリカでとれる薬草の芯をキリキリ巻きつけ、特殊な油で何日も煮こんで作り上げたという珍品なんだ。アフリカ土人の女達が愛用してるという代物で、すごく高価なものな

んだぜ」

鬼源は黄色い歯を見せて楽しそうにそう云ってから、

「この次、開く事になっているショーでは、お前さん方のレズプレイを一つの呼びものにしたいと社長もおっしゃってるんだ。何しろ奥様方は、熟れ切った女盛り、十八、十九の小娘が演じるような生っちょろいもんじゃ客が承知しねえからな。とことんまでしゃぶり合うような、すさまじいのをやってもらわねえと困るぜ」

それじゃ、早速、稽古にとりかかろうじゃないか、と鬼源は、鉄の扉の南京錠を外しにかかった。

「待、待って、待って下さい」

鬼源と川田が扉を開けて、出て来な、とどなると珠江夫人は悲痛な表情になって尻ごみするのだ。

「何をうろたえているんだ」

「おっしゃる事がわかりませんわ。何をしろというのです」

珠江夫人は、迫って来る恐怖に上気しながら昂ぶった声音を出す。

「とぼけるんじゃない。こんな道具まで見せられてカマトトぶるのもいい加減にしろ」



と、鬼源は激しい声を出し、巻きついてい  
る布を剥いで中身を珠江夫人の眼前に突き出  
した。

「まあ、凄いわねえ」

千代は鬼源の手にあるものを見て吹き出し  
た。

真ん中に竹刀の鐔のようなものはめこん  
であるそれは、黒光りした巨大なものであつ  
た。

「やがて、この奥様方は、ニグロともコンピ  
を組むわけですからね。これ位のもので馴れ  
させておく必要があるんですよ」

鬼源は千代に云い、「早く出て来るんだ」  
と再び、牢舎の中に大声をかける。

静子夫人と珠江夫人は、片手で二つの乳房  
を押さえ、片手で前を隠し、小さく腰をかか  
めて牢舎から出て来た。

暗い、もの哀しげな瞳をしばたかせ、おろ  
おろした表情を見せる二人の夫人を、鬼源は  
楽しそうに見つめながら、

「二人とも両手をうしろへ回しな」

と冷ややかに云って、川田と一緒に麻縄を  
手にした。

「ぐずぐずするねえ」

と川田と吉沢は、夫人の背後へ回ると乳房

を抱く両手を強引に背後へねじ曲げ、キリキ  
リと縄をかけ始める。

千代は含み笑いしながら、きびしく縛り上  
げられていく二人の夫人に云った。

「奥様達は、昔から仲がともおよろしかつ  
たじゃありませんか。ですから、ぴったり息  
の合ったレズのコンビになれない筈はないと  
思いますわ」

両夫人の乳房の上下は麻縄で固く緊め上げ  
られ、完全な後手縛りにされてしまったのを  
見ると、千代は懐から煙草を取り出して、  
「じゃ、お二人共、お疲れだろうけれど、シ  
ョーの日も近づいているので、早速、お稽古  
に入って頂くわ。いいですわね」

その前に一服、如何が、と千代は煙草を二  
人の夫人の口元へ近づける。

静子夫人も珠江夫人も、憂愁を帯びた美し  
い表情でぼんやり一点を見つめながら、静か  
に首を振った。

「あら、お二人とも煙草はお吸いにならなか  
ったつけ。これは失礼」

千代は煙草を引っこめて川田の方へ眼くば  
せした。

「さ、歩きな」

川田と吉沢は両夫人の縄尻をとって、その

乳色の柔らかい背を押した。

「今日から奥様達は、当分の間、このお稽古  
のため、鬼源さんのお部屋に寝泊りして頂く  
わ」

千代は、静かに歩き始めた両夫人の優雅な  
横顔を見て云った。

冷たい石の階段を川田と吉沢に縄尻をとら  
れた両夫人の美しい双臀が、かすかに揺れな  
がら登って行く。

二階の鬼源の部屋は、すでに両夫人を迎え  
入れるための準備がととのっていた。

壁にそって立つ二本の丸木の柱。そして、  
部屋の中央には、薄い夜具が敷かれ、二つ枕  
が配置してある。

恐怖のためか、硬化した表情で、綺麗な睫  
毛も動かさず、ここまで足を運んで来た二人  
の夫人であったが、柱の下に置かれた洗面器  
や夜具の周囲に散らばっているゴム球やガラ  
ス器具など、そして、天井から垂れ下がって  
いる鎖を見た途端、その得体の知れない無気  
味さに珠江夫人は総気立ったように身をすく  
ませ、この屈辱の経験を持つ静子夫人は、さ  
も悲しげに眼を閉ざすのであった。

「――折原の奥様、今、ここで御自分が人間  
であるという気持を捨てなければ、この屈辱



を耐え抜く事は出来ませんわ。覚悟なさって下さいまし」

静子夫人は、大粒の涙を白い頬に流しながら、珠江夫人の恐怖におののく心を包もうとする。

川田と吉沢は、両夫人の背を押して部屋の中へ押しこむと、千代に命じられて二つの柱に夫人の背をそれぞれ押しつけ、縄でがっちりとなぎ止めるのだった。

「まず、調教に入る前、打合せておく事があるからな」

鬼源は隅から一升瓶を持ち出して来て、コップに並々とつぐと、立縛りにされた二人の夫人の前にあぐらをかいて坐った。

「へへへ、俺も色々な女に芸を仕込んで来たが、御大家の若奥様二人にレスビアンの指導をする事になるとは思わなかったな」

鬼源は、柱につながれた二人の夫人の乳色に輝く美肌と柔らかい盛り上りを見くらべるようにしながら嬉しそうに口元を歪めるのだった。

「静子夫人の方はもうベテランの域に近づいてるから、心配はねえと思うんだが、新入りの珠江夫人の方が、まだこっちとして不安だからな。静子夫人の方が、先輩らしく珠江夫

人をうまくリードしてやらなきゃならねえ。わかったな」

鬼源はそう云って、先程の道具を手に持った。

「これは、通称クロンボという道具で、日本の女にや無理だといわれているもんだ。でか過ぎるだけじゃなく薬草の汁が滲み出てくるとニグロの女でも有頂天になってわけのわからねえ事をわめき散らすそうだからな。だがおめえ達はプロなんだから、こんなので楽しみ合うようにならなきゃ駄目だ」

などと云って笑うのだ。

怖しさと自分のみじめさに珠江夫人は緊縛された裸身を振るようにして声をひそめて泣き始めた。

「ね、鬼源さん」

千代が鬼源のコップに一升瓶の酒を注いでやりながら云った。

「折原夫人の方は、まだ、この道のスターというのがどんな事をしてお客の御気嫌をとるものか、それがまだはつきりおわかりにならないと思うわ。一度、静子夫人にこの場で実演して頂いたらどうかしら」

成程、と川田がうなずいた。

「少し見本を見せてやった方がいい。ショー

のスターは、どんな風にして客をモリモリ悦ばせていくか、そのコツがわからねえと調教だけ受けても何にもならねえからな」

川田は、静子夫人の縄尻を柱から解いて、夜具の方へ引き立てて行く。

静子夫人は、夜具の上に乗ると縄尻を鎖につなぎ止められ、珠江夫人の方を向いてすつと立つのだった。

しばらくは静かに瞑目したままの静子夫人だったが、珠江の眼に浅ましい自分の演技を見せるという事は、もうこの奈落の底へ落ちてしまった彼女に対しては自分の運命をあきらめさせるために必要な事に思われる。

そう決心すると、夫人はそっと眼を開き、深みを湛えた静かな表情になって、小さくすり上げる珠江夫人に対して口を開くのだった。

「折原の奥様、これから静子が、どのように汚れ切った女になったか、その証拠をお見せ致しますわ。この世界で生きていく道はただ一つ、ここにいる人々のいうとおりになり、なぐさみものにされる事を生甲斐とするより道はないのです」

さて、何を演じて頂きましたようかね、と川田達は静子夫人の白々と冴えた美しい容貌と



艶やかな肌の色、柔らかくむっちり緊まった腰部や大腿に眼を注ぎながら、楽しそうに云った。

「簡単なものでいいじゃない。卵の一つや二つ割らせてみればどうなの」

と、千代が川田に云った。

「おい、先輩が見本を示して下さるというのに顔をそむける奴があるか」

珠江夫人が顔を伏せているのに気づいた吉沢は口をとがらせて珠江夫人の耳を引っ張るのだ。

泣き濡れた珠江夫人の視線と毒っぽい光をこめた静子夫人の視線とが合致する。

「御覧になって。そして笑って下さいまし。」

静子はこんな淫らな女になったのですわ」

静子夫人が、か細いハスキーな声でそう云

# 四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しませんでした。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早めには是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。  
略号『花』 定価五〇〇円

った時、鬼源が隅の冷蔵庫の中から卵を二つ三つ皿に載せて戻って来た。

「いいか。周囲にぎっしり客が埋まったつもりになって演じるんだ」

その時、千代は、ドアの隙間から誰かが中をのぞきこんでいるのに気がついて、

「誰なの」

いきなり内からドアを開けると、そこに身をかがめていたのは弁護士伊沢であった。

「なんだ、伊沢先生じゃないの」

千代は笑い出す。

伊沢は、先程から、見え隠れしながら、ずっと静子夫人のあとばかりをついて来ていたのだ。

「何時になったら僕と二人きりになれるのかと何だか落着かなくてね」

伊沢は照れ臭そうに笑うのだった。

「ごめんなさいね、先生。何しろ、静子夫人はうちのドル箱スターでしょう。それにショーの開催日も近づいてるので、何かと忙しいのですよ」

千代は片頬を歪めて笑いながら伊沢を中へ招き入れる。

二・三米の間隔を置いて対峙している美しい二人の女を見た伊沢はこれからまた何が始ま

るのかと興味深げな顔つきになるのだった。

「そうそう。伊沢先生は始めてでしたわね。」

ここにおいで。の美しい奥様は、静子夫人のかつての親友で、折原珠江さん、元は医学博士夫人なのよ」

柱を背に一糸まとわぬ麗身をキリキリ縛りつけられている珠江夫人を千代は指さして伊沢に云った。

静子夫人とは対照的に華奢でしなしなした雪白の肉体——腰から大腿にかけても、どこかほっそりして、それが一つの性的魅力になっている珠江夫人の全裸像を伊沢は吸いつけられるように見つめるのだった。

「如何が、こういう柳腰の美人というののもいものでしょう、先生。この医学博士夫人も今日から静子夫人同様、性の奴隷として、この屋敷内で生活する事になったのです。静子夫人同様、御最前にお願ひしますわ」

と千代は楽しそうに云って、これから女奴隷の演技というものを、静子夫人が、珠江夫人に対して教える意味で見本を示すのだと、話すのだった。

「それじゃ、鬼源さん」と千代は眼で合図する。鬼源はうなずいて、川田と一緒に静子夫人の左右に立った。

(未完)



創作

光  
り  
煌  
く  
鞭

—△その1▽—

宇 光

仙

## 第一景 捕 獲

わしが客間のドアを開いたとたん、青年は肘掛け椅子から腰を上げた。そして起立をして胸を張り、わしに対して親愛に満ち溢れた会釈をした。その礼儀正しさにわしは十分に満足した。

青年の目は輝くばかりの明るい息吹きに燃えている。油っ気が少なく、一見したところ無造作な長い髪は、その実この上なく手入れがなされていることを、わしは見えてとった。青年の髪からは、よくブラッシングした後自然さをかもし出すために計画的に乱した跡

がありありと伺うことができる。常日頃にわしは、いわゆる青年と呼ばれるにふさわしい年代の者と対する時に、まずもって、その身だしなみがひどく気になる。人はそんなことでその人の内面に食い込むことはとてもできないというかも知れない。しかしわしはそのことに固守する。それは、わしの哲学でもある。わしはわしに對する者が、わしの気質なり性向をことごとく理解した上で、わしの前に現われることを希望する。わしはこの短い人生の歩みを不快なことで浪費したくないのである。まして六十の坂を越えたわしにとって、そのことは絶対に譲れないことである。

その点、この青年は欠点一つない。音楽・文学・科学等々に深い知識を持ち、そのことが些細な仕草一つ、些細な言葉の端にも窺うことができる。

青年はまず天候のことに触れた。そして日本人は天候と密接な関わりを持っていることを述べた。いわゆる、

『雨降れば雨に泣き、風吹けば風に泣く』  
ということらしいのである。

わしは青年の朱色の唇の動きを見つめることが好きである。それは十七・八歳の少女の唇にも似て、挑発的積極的な魅力に満ちている。ましてそこからとめどのない情熱とロマンスに富んだ言葉が生まれることを知っているわしは、その動き一つ一つに天と地を自由に駆けめぐる生気に溢れた感情をひしひしと全



カット ユミヒコ・N



身に痛いまで感じる。その理由でわしのよう  
な年寄りまでが、奮い立たずにいられない希  
望の幻映をかもし出してくれるのである。

「ところで、君の調教日誌を読ましてもらっ  
た。君は期待以上に仲々のロマンテストで、  
しかも非凡な才能に恵まれている」

と、わしは話題を本道に導き入れた。

「日誌によれば館のセレモニーは助手の鞭の  
一打ちに始まったということになっている。  
実に素晴らしい儀式だ。君のみではなく、わし  
さえも、その鞭の一打ちを『実においしい』  
一打ちと思う。そしてわしは、主なるわしに  
その一打ちを与えられなかったことについて  
君に対して遺憾の意を表すると同時に、君と  
同様にその一打ちを『生涯悔み、同時に記憶  
する』ことができそうな気がしてならない。  
とにかく上々の滑り出しだ」

「ありがたいお言葉でございます」

青年の目が怪しい光をはち出した。わし  
はその光をかき集めた。

「日誌によれば、これまでに三匹の女畜生と  
一匹の男畜生を調教したことになっている」  
かき集めた光はどうしたとか、わしを裏  
切り、青年の目の中に戻り出した。

「さようございます」

青年はわしを窺っていた。わしは心の内を  
見破られないように声を低めた。

「さらに新しい畜生が加わろうとしている」

「御前、御意です」

「しかしわしはここで一つの忠告を、君に申  
し渡しておこう」

わしの声は火を帯び、その炎は青年の頬を  
かすめたはずである。

「君の調教のペースはひどく速い。わしは君  
がこの仕事に慣れ切ることが心配である。こ  
んなことは、君にくどくどというまでもない  
ことと思うが、物事は万事において新鮮でな  
くはならないのだ。たとえ対象物が新鮮で  
なくても、新鮮と思わなくてはならない。そ  
のためには君、どうしたらいいかね」

わしは青年に尋ねた。しかし青年は眉一つ  
動かそうとはしなかった。

「結局は、深く漁りすぎてはいかんのだよ。

えっ、君、そうだろう」

わしは一人で問い、答えた恰好になってし  
まった。青年はその時になって僅かばかりの  
笑みを口元に浮かべた。青年は明らかにわし  
の意見を突っぱねる腹づもりでいると、わし  
は見てとった。

「腹八分目に押さえることが必要なんだよ。

これはわしの体験からいうことであるから、  
そう間違ってはおらんはずだ」

わしはすくみ、そう強気にいいきってはみ  
たものの、心の内ではとても青年を屈服させ  
ることができそうもないという苛立ちと、御  
前という名への汚点とを芽生えさせていた。

「新しい快楽を考え、生み出しても、すぐに  
実行してはいかんのだよ」

わしは語尾を強めた。

「旧式の方式によって調教を重ねつつ、新し  
い快楽の実行に至る道程をできるだけ長びか  
せることが大切なんだよ。君、考えてもみた  
まえ。人間は食欲の味を覚えると仲々忘れら  
れんのだよ。もし新しい快楽を追求すること  
のみによってしか満足できない身体なり心にな  
ったら、それこそ悲劇だよ。新しい快楽な  
んか無限にあるわけがない。無限に開拓しよ  
うとするなら、人肉を食うとか殺人魔になる  
しか道はないわけだ。だが、そのようなこと  
はいかんのだよ。この世に生み出た命をむし  
ばんではならんのだ。そのような物騒な社会  
には快楽の追求する余地などないのだ。まさ  
に恐怖からの遁走そのものだ。そうは思わん  
かね、君」

わしはとにかく形よくいい切った。すると



青年はそのことを待っていたかのように、  
「御前、それは御前としては少しばかり悲観的な先き走りではございませんか」

と真向からわしに刃向いを始めた。

この青年はおよそわしの意見を聞き入れたことがないのだ。しかしわしに思うに、

「御前、御意です」

などという尻軽く口軽い者たちは、油断ならない奴と心にとめる必要がある。奴らは平気で偽る術を心得ているらしく、嘘にも下心のある心をわしに見せはしない。だからいかに奴らが愛想よい時であっても奴らが後ろ手に鎌を持っていないという保証はないのである。そのことから、奴らと相對する時程に心の鎮まらないことは外になく、それゆえにわしは過度の緊張に神経をすりへらさなくてはならないのである。

今頃わしは、わしを快樂にかり立てたものは、そのような煩わしさにあったのではないかと思うようになっていく。わしは過去において前後の見境を失ってまで快樂を追い求めたのは、もっとも単なる氣安めにすぎないかも知れないが、次のような論理によると記憶している。

『少なくとも快樂の世界は生まれたまま、天

からさずけられたままの姿が礼儀ゆえに、日頃は曇ってよく見通すことができない相手の心の中が、手に取るように明確になるはずであるし、またそうならなければいけない』

ところが実際はどうであらうか。ある者はそのことを利用してわしを恐喝しようとし、ある者はわしに妻の座を求め、ある者はわしを破廉恥漢呼ばわりした。わしが鞭を手にしたのは、そのような困惑し切った低迷の内にあった。そういえばそのようなわしの心境によく類似した情景が調教日誌にあった。

○

演技者は男畜生の全裸を嘲り笑った。すると男畜生は身震いしながら一步さらに一步と後退した。その男畜生の足に鞭が触れた。男畜生は演技者を見つめたまま、それを拾い上げた。演技者は男畜生をけしかけた。

「やれるもんなら、やってみて」

「どうせ、おできにならないでしょう」

「大変なカラ元氣ね。長生きなさるわ」

男畜生は鞭を右手に握りなおし、床を打ちつけた。演技者はさらにけしかけた。男畜生はそのことに怒り、と同時に鞭を打ちつけるということに大いに乗り氣にもなっていた。

○

わしが鞭を打ちつけたのは演技者へではなく偽りに対してである。ところが不思議なところもあるものだ。鞭を打ちつければ打ちつける程に偽りはいよいよ偽りの上塗りを始めるのである。それはドロ沼にも似ている。足がとられてしまいそうになる。何度、何百度、何千度、何万度と繰り返されたことだろう。

「御前、御意です」

薄汚れ、手垢がつき、カビが生え、腐りかけたむなし言葉。それでもわしは鞭を振り上げた。わしは依然として『鞭を打ちつけるということに対して大いに乗り氣』になっていると叫んだ。何の効めもない色褪せた粉薬を服用しながら、これで死神を払いのけることができると信じるようなわびしさに目をつむり、わしは鞭を偽りの急所へ正確にヒットさせた。それでも繰り返されるのである。

「御前、御意です」

青年の眼差しは、革命にとりつかれたアナキストよりも純粹にわしを見つめ出す。わしは心の中が見すまされているという錯覚につつかれて、途惑い出した。しかしわしは、この途惑いが好きである。その中においてはわしは自由なのだ。少し顔をあからめさえすれば、今までの主義主張を一片の反古とする



ことさえもできるのだ。

「悲観的な先き走りとは」

わしは声を落ち着けて青年に尋ねた。

「御前は人間の妄想力・想像力に対しては鞭打たれていらっしゃらないようです」

と、青年はその思うところをわしに伝え始めた。

「妄想力、想像力が、いかに貪欲なまでに助長するかを、ご存じでいらっしゃらないようです。少しの手さえ加えるなら、うねうねととぐろを巻く蛇より薄気味悪く、偏平で細長く、尾端腹面をくねらせ人畜の血を吸う蛭より執拗に、吹き上げる火口の噴煙よりさまざまな形相で、御前を追い込め苦しめることになるのです」

「口で言葉にすること程易いことはない。君にどれ程の才能があったにしても、それに限りがないとは信じられんことだ」

わしは反撃した。

それには正当な理由がある。物事において万事限りがないなどと信じていること程、危険なことではないのである。そのような過信がこの世を、偽りのものに作りかえているのである。手にしている物事においてよい結果を生み出すと、すぐに新しい物事にとりかかる

のだ。己れの弱さを少しとして知ることがない。己れを知ることなくしていやに張りきるそのことが実にいかんだ」

人間は弱く、その知能は貧しい。そう決まっているものであり、そのことをふまえた上で物事に取り組まなければいけない。若く思慮不足の者はとかく理想にうなされやすい。しかしいつまでも若くはないのである。いつまでも夢のようなことをいって済まされはしないのである。

「御前、それは非常に頑ななお考え、と私には受けとれます」

青年は意外この上ないというように、肩をすくめるような表情になった。

「御前、古き時代ほどに、神がこの世にのさばっておれたことを、思い出起こし下さい。

風の一吹き、雨の一降り、月の満ち欠け、潮の満干、日の出、日の入り、旱魃、災害、雷雨、暴風雨。どれとても古き時代に生き抜いた人間にとっては神がかり的な事象であったのです。ところが人間は、妄想力、想像力に富み、神に対する謀反児であったがゆえに、次々にそれらが数学的な法則に乗り、きわめて細かな点についてまで割り切れることを見抜いてしまったのです。そしてついには『神

なんぞ、どこにもいはしねえ』とまで口走ることになったのでございます。御前が信仰をお持ちか否か、私には知るよしもありませんが、今日、神が一頃ほどに肩をいからして街を濶歩できなくなった事実を否定なさることはありませんまい。そのことに私は自信を持っています。とすれば、神をこんなにも苦境に立たしたのは何か？ その際には何はさておき人間の妄想力、想像力をあげなくてはなりません。それらが豊かで、かつ冒険心のある若者がその青春を投げ打った結果が、『神なんぞ、どこにもいはしねえ』と口走らしたのです。地球は平ではなく丸いのであります」

わしは青年の言葉に、わしが今指摘してあげたことが全く理解されていないのに気づいた。青年は己れの言葉に酔っている。自慰的でありさえする。

「神が追いつめられたということをやわしは認めよう。しかしその神に、とどめを刺すことは不可能なんだよ。それがなにゆえか。簡単なことなんじゃよ。君流にいうなら妄想力、想像力に限りがあるからなんだ。YとXという曲線は、最初の内なら僅かなX座標の変化でY座標は飛躍的に増加するが、その少し後には袋小路に入るんだよ。誰でも考えつ



く刺激というもんは、すぐに刺激でもなんでもなくなってしまうものなのさ。さらに新しい刺激を得るためには、とてつもない妄想力想像力が必要であるという寸法になる。そのとてつもないことに、人間がついて行けはしないんだよ」

わしは強気の上に強気に主張したものの、青年の唇の笑みに無関心ではいられなくなった。その笑みは決してわしに同調してのものではないことは明らかである。青年はわしをねじ伏せようと手ぐすねをひいているのだ。わしはそのことを悟られまいと、不機嫌というか、しかめっ面というか、とにかく落ち着き払い、鷹揚さをかもし出しながら、笑みにはとんと惑わされまいぞと意志表示をした。

「御前。御前と私とはこの件についてはどうい響を並べることができない主張を持ち合っただけです。その理由によってこれ以上意見をかわす必要がなさそうです」

青年は姿勢を崩した。

「わしもそのように思う」

わしはすかさずに答えた。その時、青年はふいに、

「でも、御前」

と声を昂揚させた。わしは多少うろたえた

かも知れない。

「何だね」

「御前は勝負事がお好きでいらっしやいましたね」

意外な質問である。

「その通りである」

「勝負事をなさっている時の御前の目は、秋の空よりも澄み切り、お年が二十か三十、お若く感じられます。」

「それはお世辞にせよ嬉しいことだ」

「御前の身のこなしは獲物を狙う鷹の動きにも似ていて、お側に近づくことにためらわずにいられません」

「それは偽りのまぎれ込む余地のない世界にあるゆえである」

わしは青年が手加減し始めているらしいということを肌を感じつつ答え続けた。ところが実際のところ青年は少しも手をゆるめていなかった。その効果を強めるための、一瞬の休息であったのである。

青年はいつぞやわしに、音楽家たちが一度は力んで作る交響曲の終楽章には、かならずといってよい程に急テンポの全奏によるコーダがあるが、そのコーダの直前には決まって暖やかな息抜きがあると教えてくれたもので

ある。そのことを確かめてみたところ、間違いがなかった。ベートーヴェンの曲がその典型であって、タイトルの附いている『英雄』『運命』『田園』『合唱』を聞いてみるとすぐにわかることである。

とかくこの世はまやかしが幅をきかすようにできている。ところが、そのまやかしが新しい刺激につらなっているのである。皮肉なことである。例えばジェット・コースタにしる、乗客は相当の速度で疾走していると思いい信じ込んでいるが、コースタを遠くから注意深く観察している者ならすぐに理解できることであるが、コースタはただか時速四十キロなのである。それなのにコースタに少しだけの高低の変化をつけるだけで、乗客は悲鳴を上げる程の速度感を味合うことになるのである。

「御前、私と勝負事をいたしませんか」

と青年はいった。

「わしと？」

「さようです」

青年の答えは、わしの耳に歯切れよく響いた。

「何をかける」

わしは尋ねた。



「何を賭けましたら一番、お気に召されますか」

青年はわしに挑戦する気であった。しかもその勝負に確かな手ごたえと自信を持っているらしかった。

「それはわからん」

わしはきっぱりと答えた。

「こんなことでは、いかがでございましょうか」

青年はわしを正面に見た。

「それは興味深い」

わしは、つい口を滑らしたようである。頬が上気し始めた。このままでは、場が保てないことをわしは自覚した。

「しかし、ごく些細なことですので、御前のお気に召すかどうか心配です」

青年はわしをじらすことをもくろんでいるらしかった。じらしも手の内らしかった。わしは答えなかった。口を堅く閉ざし封じた。わしは御前である。青年ごときと軽々しく口をきいてはならんのだ。

## 第二景 疾 走

全くせつがちである。というのは青年はわしを車に導き入れ直ちに館へと向かい出した

のである。勝負をかように急ぐことは、一体いかなる企みゆえか判断しかねた。いわゆる速攻に出ることか。あるいはわしを感情的に不安定な状態に追い込むことによって、少しでも有利な場をかためようとしているのか。

「御前。御前はお車に強うございますか」

と青年は空々しくも勝負と全く関係のないことでわしを悩まし出した。煩わしいことこの上ない。しかしここで苛立ってはいかんのである。見えすいた手である。

「強い」

とわしは答えた。

「それはありがたいことでございます」

と青年はヘッド・ライトに浮き出る路上の向こうを見つめたままいった。

メータに狂いが無い限り、車の速度をわしは正確に読み取ることができているはずであった。というのはわしは助手席にいたのである。メータはかなりの速度を指している。事実、路上と周囲の景色は素早く変わるのである。わしは運転技術を見わけける規準をわきまえていないゆえに、青年の腕がどれ程か知るよしもないが、全くの素人特有の無責任な目で観察する限り、荒く粗雑である。

車はセンター・ラインをオーバーすること

を繰り返し、危うく対向車と衝突しそうになったことがしばしばあった。それにもかかわらず青年はぬけぬけという。

「御前、今夜のドライブはとてもスムーズでございます。御前、このようなことはとても珍しいことでございます」

サドチックな言葉である。何を生意気な。

「それはよかった」

わしは動じることなく答えた。

「ありがたいお言葉でございます。御前」

と青年は馬鹿真面目にいった。

わしは本当のところかなり苛立っていた。

青年の仕草、言葉の一つ一つが偽りに満ち出したからである。わしは何度、

「賭けはやめる。車を帰せ」

と叫ぼうと思ったことか。しかしその都度わしはぐっと耐えた。そのようにしなければいけない理由など、どこにもないにもかかわらず耐えた。

どうしてであろうか。生意気なロマンストが全力を以って考え、生み出す情景がいかなるものか、好奇心でも持ったためか。それとも、

「御前に御前の若き日々に匹敵する活力を蘇らさしてみせます」



という青年の賭けが青年の思惑通りになることを期待してのゆえか。

とすれば、わしは敗北と引き替えに、一時の快楽にむせびたいのか。それ程までに、わしは快楽に飢えているのか。浅ましいことといわなければならないだろう。いや、浅ましいのだ。

確かにわしは目新しい刺激に飢えている。わしはこの際そのことを素直に認めよう。わしのここ数年の生活、それは慎ましいことの上なく、快楽とはいささかの関わりも持たず、社会事業につくし、『善人』と書き込まれたスーツを着込んで、今日はA市、明日はB市へ飛び、金をばらまき『善人』という名を昨日から今日、今日から明日へとつなぐのである。

それでいてわしが快楽をすっかり忘れていたかという、それがそうではない。忘れようと努めるがゆえに社会事業に打ち込んだものの、糸はからまり、ほどけなくなるのである。わしが青年に館を貸し与えたのも、いつかはこのように、わしの身体に活力を蘇らさしてくれる手筈を整えてくれるであろうことを、見込んでのことであった。だが、わしはそのことを正直に青年に伝える勇氣を持たな

かった。

とはいえ、わしは必ず賭けに勝つことになる。わしのかすかな期待は、医学的に不可能なことなのである。アドルフ・ヒットラーは第二次大戦においてソビエト戦線が苦境に陥った時、軍事的に不可能なことゆえに前線の撤退を進言する將軍に耳をかさずに、「それを氣力で保て」と押し通したそうである。ヒットラー流にいうなら、わしは、『医学的に不可能なことを氣力で回復するのだ』ということになる。

しかしヒットラーは負けた。ヒットラーがいかにも力めども氣力だけではどうしようもないのである。氣力による神だのみは無意味である。

青年の言葉を借りるなら、『神なんぞ、どこにもいはしねえ』となる。

ところが世の中には色んな考え方があり、『神はいる』と信ずる者もいる。彼らによれば、神は沈黙を続けることによって、その存在価値を高める、きわめて得な職業らしい。彼らは神が沈黙すればする程その価値は確かなものとなるというのである。

『神はいる』としよう。それならば神はわしの身体の衰えを知っていなければならない。

萎えたわしの事実を見たことがなければならぬ。そのことに何かを感じなければならぬ。そして目を閉じ、沈黙しなければならない。

わしの妻は、わしが萎えた身体を横たえた夜から、わしが神々しく見えるといったものである。沈黙する神には欲望はないのか。神は自殺することもなく死すこともないがゆえに、一切、泣くことも喜ぶこともないのか。その理由でもって、わしの衰えを見ても何も感ぜず、わしが『善人』と書き込まれたスーツを着込んで動き回ることに、関心があるというのか。

やはりわしには、神がいようといまいと重大なことではない。沈黙だけを続ける神に関心を払う余裕はないのである。神に関わることで、今日をいかに生きるか、明日をいかに生きるかを考える方が先なのである。

「御前」

と、ふいに青年が話しかけてきた。

「フランク・A・ホフマン教授によれば、スラッグ・フィルムに登場するキラクターの組み合わせは次の通りになっています。男女一名ずつが50%以上。男女三名以上が30%以上。フィルムのどこかでレスビアン的な行動をと



ることを含むものが19%以上。完全なレスビアン行動が6%。フィルムのどこかでホモセクシュアルな行動をとることを含むものが、4%以上。女と犬ものが2%以上。完全なホモセクシュアルな行動が1%以上」

わしは、スタッグ・フィルムという響きを聞いただけで頭が重くなった。

「それがどうしたのかね」

わしは不機嫌にそっけなく尋ねた。そもそもわしはスタッグ・フィルムと聞けばすぐに暴力団を連想してしまい、本来清潔である性的行動が、非常に暗く不潔なものと化して行くことを防ぐことのできない性分である。

「はい、御前。時の闇を少しでも明るくするための眩きにすぎません」

と青年は、少しとして表情から笑みを失うことなくいった。

「そのような事柄が、いかにして時の闇の明りとなることができるのかね」

とわしは尋ねた。

「はい、御前。私はつい先程、自分が啞になった錯覚を覚えたのです。それで、自分が啞でないことを確かめたかったのです。それだけです」

青年は答えた。

「時の闇か」

わしは呟いた。

いや会話をさらに続けることを期待してのことかも知れない。時の闇は沈黙でもある。沈黙は神の沈黙にもつらならないとは限らないのである。そんなわしの心の中を読み取ったかのように、

「御前は闇がお好きでいらっしゃいますか」

と青年は尋ねてきた。

「好きではない」

とわしは答えた。

「これは驚きました、御前」

「どうしてかね」

「私は御前のように、ものの道理をわきまえた方は、闇とか沈黙をこよなく好かれるものと、心得ておったのでございます」

「わしは、気の小さな弱い者かも知れん」

「これは大変な弱言です」

「弱言ではない。それは事実であるのだ」

「事実とおっしゃられますか」

「そうだ」

わしは語調を強めた。

と、同時に、どうしたとか、わしは鞭を手にしたくなり出した。わしはうまく鞭をしならせ、空を切り、的にヒットさせることが

できるような気がする。鞭の感触をわしは思い出そうと努めた。色でいうなら赤である。炎でもある。刃でもある。的はわしから逃れようと四つん這いの恰好で揺れ動く。しかしわしの狙いは正確であるのだ。

「かつて御前が、サドチックな立場に立たれたのは、弱い己れを強い己れであるといひきかすためであったのでございますか」

「弱いも強いもありはしない。わしは快楽に貪欲になり、そのことを満たすために鞭を手にしたのである」

「鞭の一打ちによって満たされましたか」

青年の口調は事務的であった。

「満たされたのなら、かように衰えはしなかったはずである」

「はい、御前。大変に失礼な質問をいたしました」

なめているなとわしは思った。しかしわしは、今はそれでもよいと思った。わしはそれらの不快さを耐え切ることによって、萎えが萎えでなくなるなら、それでもかまわないと思ったのである。

「館がこんなにも遠いところにあるとは、不思議な気分である」

わしは一人呟いた。



「御前、それは御前が久しくしてあそばされるために違いありません」

と青年も一人呟いた。

「いかに久しいといえども、子供の成長を見るのとは異なる。それはそこにとどまり、退化をせぬかわりに進歩もしていないのだ。それが館である」

対向車のヘッド・ライトが弾丸のように近づき、わしは衝突の危険を感じ、身体をすくませた。しかし青年は、その危険を難なく脱した。

「ごもっともでございます、御前」

と青年は、更にアクセルを一杯に踏みながらいった。

「しかし人間にはしばしば見落としというところがございます。その見落としした事柄が意外な曲者でございます。私は御前にその点をお見せすることになります」

わしは返事をしなかった。いささか、これから先のことがごくありふれたことになるらしいという予想ができ、そのことはわしを失望させた。わしは無為な時間を費やすことになるらしい。かくも煩った後に、空虚な気分

にさせられては迷惑もよいところである。大体においてマキシムだ、ミニだ、ミディ

だなどという小手先のまやかしで、快楽は喚起できはしない。わしは久しく鞭を手にしていないがゆえに、もし青年によって鞭を渡されるなら、それが刺激的な事態になるであろうことに疑いはない。だがわしの記憶は、光より素早く過去を飛行し、電子計算機より正確かつ精度よく、『コレハ アタラシイ シゲキ デハ アリマセン』と叩き出すのだ。

「御前は『人肉を食うとか殺人魔になる』ことは、お望みではいらっしやらないようですので、ごく慎ましやかに行なわさせていただきます」

青年は一方的にいった。

「慎ましいことだ」

とわしも一方的に答えた。

青年は片手運転をした。そして遊ぶ片手でカセット・テープを操作した。クラシック音楽が流れ出した。わしはその音楽がモーツァルトの音楽であることを、響きの流れをパターン認識することによって見抜いた。

「慎ましい音楽だ」

とわしはいった。

「はい御前。モーツァルトの『クラリネット五重奏曲』でございます。さらに詳細に述べますなら『イ長調、K（ケツヘル）五八一』

となります」

と青年は、ふたたび運転に専念しながら、いった。

「慎ましいことだ」

とわしはいった。

「慎ましいといえば、私は御前の奥方様を想い起こします。真に慎ましい奥方様でございます」

と少し間をおいた後に、青年は不敵にいい切った。

「そのことが、どうして君にわかるのかね」

わしは不快さに耐え切れず尋ねた。

「奥方様は今が三十歳。身も心も最も慎ましやかでいらっしやいます」

わしは、青年に妻を紹介したことはなかった。妻のことに關して青年はかなりの知識を持っていて、そのことをわしに対して誇っているらしかった。青年は正面からではわしを興奮させることができないとみてとって、背後から揺さぶろうという魂胆であるらしい。それならばそれでもよい。

「君の指摘する通りである。わしの妻は今が三十歳である。身も心も最も慎ましやかな時である」

とわしは答えた。



「私は勝手ながら奥方様に対して、お慰めの言葉と心を捧げさせていただいております。真に光栄に存じます」

わしは腹の中が煮えくりかえるような気分を押し殺ろした。

「言葉と心をね」

とわしは呟いた。

「さようでございます、御前」

と青年はわしにあてこするよういった。

「いつからかね」

とわしは尋ねた。

「いつでございましたか、私は正確に想い出すことができません。それほどまで、私と奥方様の過去の時は、甘くとろけているのでご

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御了承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

ざいます」

と青年は芝居がかった口調でいつてきた。何と小癪な若造であろうか。

「それはよかった」

とわしは苛立ちを押さえた。

「これは、御前。御前にお喜びいただければなら、この上ない幸せに存じます」

と青年はいった。

「それはよかった」

とわしはさらに答えた。

「ありがとうございます、御前」

青年はヘッド・ライトの向こうを見つめたまま会釈した。

わしに思い当たるところがあった。そのことによって、青年の言葉に信憑性が生じ出した。そもそも、わしが青年に出会うことになったのは、妻が某誌の某記事をわしに紹介したことに始まるのだ。

仕組んでいたのかも知れない。わしを偽っていたのかも知れない。

『あの雌豚めが、よくも』

と、わしは心の中で呟いた。いや、吐き捨てた。

わしは非常なる気鬱な気質である。わしはすべてに君臨しなければならず、すべてはわ

しの思い通りに運ばなくてはならない。駒はわしの指示によって動作するのであり、わしの指示なしには、たとえもののはずみにせよ、動いてはいかのである。

「あの雌豚めが、よくも」

とわしはふたたび吐き捨てた。

「御前、何か、おっしゃられましたか」

と青年が尋ねてきた。

わしは、青年の車に同乗していることを忘れかかる程の憎しみに、歯ざしりしている己れに気づいた。

「いや、何もいわん」

とわしは強くいった。

「私には、『あの雌豚めが、よくも』と聞こえました」

と青年は一本調子にいった。

わしは身体を震わしてしまった。

「そんなことを、いった覚えなどない」

青年はわしの声の大きさに驚きもしないで不敵な笑みを益々助長させていた。そして数分後に、

「快適な疾走ですな。素晴らしい」と呟いた。

「御前と私の賭けは、この疾走の向こうの、未来という時の闇の中に、慎ましやかにあるのです」

— (未完) —





カット・岡 たかし

懸賞入選

男

の

市

場

曾 務 巖 矢

(一)

おれはいま、六年前、集団就職でやって来たこの東京におさらばして、故郷の九州に帰ろうとしている。

この六年間、おれを散々に痛めつけ、おれの青春をすりへらし、おれを笑い者にした、この東京。だが、この東京におれはもう爪のアカほども未練はない。

ただ、あいつにもう一度逢えたら……とは思ふ。しかし、所詮あいつはおれとは別の世界に住む人間なんだ。

何もかも忘れて九州に帰って行こう。おれ

は、総ての想念を絶ち切る様に、発車間際の列車の座席で眼をつむった。が、その思いとは裏はらに、この四カ月ばかりの間の出来ごとが走馬灯の絵のように浮かんでくる。

おれがあいつに初めて会ったのは、今から四カ月ほど前の、そう、梅雨あけの強い陽ざしが街にあふれた、ある日曜の午後だった。

その日、工場が休みで、遊びに行く女友達も、これといった友人も無いおれは、朝から午後の五時頃まで、ブツ続けでパチンコをはじめていた。と、不意に、

「どう、出ますか？」

横から声をかける奴がある。見ると、リュウとした背広を着こんだ、如何にも札幌の中で暮らしているといった顔の、四十年輩の男だった。

「出ねえよ」

おれは無愛想に答え、玉をはじき続けた。すると、そいつはいきなりおれの手に千円札を握らせ、

「ツイてない時は君、ひと休みするものだ。どうかね、その辺でお茶でもものまないか、気分が変わるとツキが戻るよ」

おれは何と答えて良いか分からず相変わらず玉をはじき続けた。が、間もなく受皿の中



は空になった。

「さ、来たまえ」

おれは黙って椅子を降り、その男についてパチンコ店を出ると、近くの喫茶店に入ったが、十五分ばかり経ってその店を出た時、おれのあらかたの経歴は、聞き上手な彼の話術で見事にはき出されていた。

彼は気さくで如才がなく、何でも気がねなく話せるおじさん——愚かにもおれはそう思ったんだ。

喫茶店を出たおれ達は、近くの横町に停めてある彼の車で、どこかに夕飯を喰いに行こうという事になった。

車は国産だったが大型の高級車で、おれなどは乗ったこともないものだった。

彼は運転席に入るとおれを隣りに坐らせ、直ぐには発車させずに、ゆっくりと煙草を啜えりとライターを鳴らした。

「君は煙草を喫まないんだって？」

「ええ、おれ、何度も稽古したけど、どうもむせちゃって」

「ふむ。根が真面目なんだね」

そして、ふーっと煙をはき、

「君は、さい前、前の工場で好きな女の子がいたが相手は君のことをテンで問題にもしな

かった、と云ったね」

「ええ。おれがこんな顔だから……」

「はっはっ、君がぶ男だからって？ その女の子がどんなカワイコちゃんか知らんが、男を見る眼がないにも程がある」

「……」

「それから、君自身も自分をてんでぶ男だと思っているらしいが、とんでもない。君は凄い男前だよ。尤も君の魅力を充分に理解するのは、若い子では無理かな。そう、中年のしかも男を存分に漁りつくした女——そういう女だな、君の良さが分かるのは——」

おれはこんな事を云われたのは初めてだ。

半信半疑で見つめるおれに、

「それから君は、こうして見たところ、稀にみる良い駄だ」

と、彼はその瞬間、おれの駄をなめ廻す様な眼付をした。

おれの体格が好いのは親ゆずりだ。しかしこの逞しい体も、この六年間の東京の生活では、少しも得には、ならなかった。どの職場でも、重量物運搬の役に廻されるのがオチだったんだ。

「ところで君、君はその素晴らしい駄と顔で金を稼ぐ気はないかね」

彼は何気なく、ついにその本性を見せたのだったが、世間知らずだったおれはまだ気付かなかった。

「おれの駄と顔で金を？」

「そう。ちょっとしたマンションで暮らすのに不足しない程度の金をね。ま、少く見ても月に三十万——」

「えっ、月に三十万？」

おれは大きく息を吸い

「ま、まさか、悪い事をするんでは……」

「悪いこと？ はっはっ、その反対で大いに楽しくて好いことをするのさ」

彼はおかしように笑ったが、

「やる気はあるんだね？ 勿論、悪いことなんかやりやせんさ。但し、これからちょっとしたテストをして、それに君がパスしたら話だがね」

「テスト？ 何のテストですか？」

彼はニヤリとすると、それには答えず車から降りて行った。

## (二)

車から降りた彼は、近くの赤電話でどこかに電話を入れていたようだったが、戻ってくるなり車をスタートさせた。



それから五分位走ると、大きなマンションらしい建物の前で車を止め、女を一人乗せると、車は又もや走り出したが、無言で後部座席に坐ったその若い女を見て驚いた。世の中にはこんな美しい人もいるのか、と、おれは思った。

それ程その女は美しく見えた。やや小柄ですんなりとした肢体を、淡いブルーのミニワンプイスでつつみ、栗色に染めた長い髪が、肩の辺で波うっている。

年は二十二か三というところだろう。微かな香水の匂いが、助手席のおれの鼻を撫るように流れてくる。

おれはバックミラーで、彼女の姿をそれとなく盗み見ながら、ズボンが突っ張るのをどう仕ようもなかった。

そんな状態で、車は三十分も走り続けただろうか、おれの知らない街中を突っ走り、やがて樹木の多い高級住宅街へ入ったかと思うと、ブロック塀をめぐるした広い邸の中に車は音もなく滑り込み、大きなガレージの中にピタッと停まった。

彼がドアを開けたので、おれも続いて降りようとすると、

「君はここで待っていたまえ」

そう云い、彼はさっさと車から降りて行ったが、ガレージを出る時、ブラインドをスルスルと閉めて行ってしまった。

急に暗くなった車内で、おれは後部座席の方を振り向いた。と、丁度、煙草を咥えようとする彼女と眼が合い、はとなった。

おれと眼が合った時、暗い中で、彼女は確かに婉然と笑ったんだ。

おれは少しあわてて、フロントガラスの方を向いた。

その背後でカチッとライターが鳴り、さわやかな女の声が出た。

「ねえ、ドアを開けてくれない？」

「ドアを？」

「そう、ドアを開けて頂戴」

その容姿にふさわしい、さわやかで甘ったるい声である。

おれは急いで車から出ると、後部のドアを開けた。が、彼女は起とうともせず、細い指に煙草を挟んだまま、美しい眸でじっとおれを見つめている。

(変な女だ)

とおれは思った。すると、

「ねえ、どうなさったの？ 早くおはいりなさいな」

と、益々変なことを云う。

「え？ 降りられるんじゃないんですか？」

「降りる？ あたしが？ いやぁね、あなた本当にどうなさったの？」

彼女は煙草をもみ消すと、

「あなた、わたしが相手ではお嫌なのね」

と、少し機嫌の悪い声で云うんだ。おれは大いにヘドモドしながら、

「あんたが嫌だなんて……」

「じゃ、早くいらっしゃったら？」

「でも……もう直ぐあの人が来ますよ」

おれは、やっと答えた。

「あの人が？」

彼女は張りのある眸を暗い中でふと瞬き、  
「わたしが合図するまで、彼は来ないわ。でも変ねえ。わたし、話はもうちゃんといっているものと思っていたけど、そうじゃありませんの？」

「話って……何のことですか？」

「いやだわ。テストに決まってるでしょう」

「テスト？」

おれはその時、彼女の奇妙な言動の意味を理解した。

そうか。テストとはこれだったのか。

この女におれをテストさせるため、彼はガ



レージのブラインドを閉め、二人を残して行ったのだ。

おれは遠慮がちに車に入り、端の方に腰かけた。と、彼女はくすつと笑い、

「もっとこちらにいらっしゃったら……」

そう云いながらおれの手を取ったかと思うと、不意に首に腕をまわしてきて、次の瞬間

おれの唇は彼女の唇で塞がれていた。

垢じんだボロシャツの胸で、おれの心臓が早鐘のように鳴り出した。

正直に云おう。

おれは今年の正月に成人式を済ませたが、この年まで、女とキスした経験がない。が、それは、おれが女が嫌いだからでは決してない。おれは何時でも女に餓えていた。女が欲しかった。だが、田舎出で要領が悪く、ぼそっとしたおれに、女は一人も寄り付かなかったし、好きな女の子がいても、その意中を打ち明ける勇氣もなかった。おれには女友達というものが、これまで一人もなかったんだ。しかし、このおれも一度だけ女と寝たことがある。

十八の時、その頃、住み込んでいた小さな工場の寄宿部屋で、ある日曜の夕方、同僚が残らず外出したあと、少し風邪気味だったお

れは蒲団を敷いて寝ていたが、何かの気配にふと眼をさますと、何時の間にか隣に女がもぐり込んでいたが、それは、普段からおれに滅法と好意を見せる、賄方の女中だった。

びっくりしたおれは、思わず起き上がろうとしたが、五体の方がおれの云うことを諸かなかった。

結局その時おれは、彼女が望むことを無我夢中でやった訳だが、三十を一つか二つ越した位の、亭主に死別したというその女中は云ったもんだ。

「あんたって、若い癖に凄いわねえ。あたし男の人と色々と遊んだけど、あんたみたいに続く人って、初めてだわ」

だが、おれ達が寝たのはそれっ切りだ。その直後おれが工場をしくじってやめたんだ。——そのおれが、こんな美人とキスをしている!!

おれは半ば呆然とした気持で、女のなすがままになりながら、二年前の寄宿部屋でのことを思い出していた。

ところが、ふと気付くと、あの時と同じことが起きようとしていたんだ。

三分後、素っ裸のおれは、座席の上に寝かされ、彼女の攻撃を受けていた。

ああ、この世の中にはこんなにも素晴らしき別世界があったのか。おれは彼女の攻撃に呻き、のた打ち、あえいだ。

そして、遥かな絶壁から転下してゆくような、目くらみに似た自失の中で、彼女の呻きを聞いた。

「なんて素適な人!!」

攻撃疲れか、永いことぐったりとなっていた彼女は、ようやくごそりと体を動かして云った。

「やっぱり、ボスの眼に狂いはないわ。あなた合格よ。いいえ、あなたみたいな人、あたし初めて……」

「ボス? ボスって何のことですか?」

そのボスなる彼が戻って来たのは、十分ばかり後である。

おれ達は再び車で街に出たが、とある街角で車を止め、彼はおれに十万円をくると、服を新調して身なりをととのえ、明日の午後七時きっかり、今日出合ったパチンコ店の表で待っているように、と囁くと、そのまま車は走り去った。

### (三)

その翌日の夕方、背広は勿論下着類まで新



調したおれが、ぱりツとした姿で約束の場所で待っていると、見覚えのある大型車がすーっと寄って来て停まった。

ドアが開き、黒の蝶ネクタイ姿の彼が、素早くおれの全身を見廻し、満足そうにうなずいた。

「さ、乗りたまえ」

おれが乗るとすぐ発車し、二十分ばかり走って停まったのは大きな建物の裏側だった。

車から降りると、やけに暗い路上から建物に入ったが、建物の中も薄暗かった。通路の両側に木箱やダンボール箱が積まれ、どうやら大きな倉庫らしい。

おれ達は無言で、荷物昇降用に使うらしいエレベーターで三階に上がった。此所にも荷物がぎっしりだが、事務所らしい部屋の前まで来た時、丁度出て来た若い男が、

「あ、ボス」

と、彼に云った。

「もうそろそろ始まりますぜ。今夜も盛会でさあ」

そして、じろりとおれに流し目をくれたがその時おれは、のっぴきならぬ場所についてやって来たことを、改めて悟ったんだ。

十分後、このおれも含めて十二人の男達が

色とりどりのガウンをまとった姿で、明るいスポットライトを浴びたステージ——と云っても、木箱を平らに並べて毛布を敷きつめただけだが、その上に順にあがると、ライトに向かって横に並んだ。

ライトは高く積んだ荷物の上で操作しているらしい。が、明るいのはステージの上だけだ。周囲の電灯はすべて消され、まっ暗だ。ステージ正面には、かなりの人間がいる筈だったが、勿論見えない。

その時、ライトの色が赤から緑に変わった。おれ達十二人は一せいにガウンを脱いだ。すると、暗黒の中にぽっかりと浮いた緑の光の輪の中に、見事な十二の男の裸像が立ち並んだ。

おれ達は、ガウンの下は素裸だったんだ。それが合図だったらしく、暗い正面の辺りで、微かなざわめきが起きた。

セリが始まったんだ。

ステージに並ぶ裸体の男達の中から、これからの一夜を共にする相手として、好みの男を選ぶ、肉体のセリ市が始まったんだ。

(おれにも買手がつくだろうか?)

おれは何となく気恥かしいのをこらえながら、他の男達の様子をうかがい、あっと思っ

た。

ボスと呼ばれる男に選り抜かれた者達だけに、いずれも見事な体躯の持主ばかりだが、ゆっくりとステージを廻りながら、まるでファッションモデルのステージのように、時おり得意のポーズを取りながら、緑の光の輪の中で、肉体の輪舞をくり広げている。

中でも、まるでギリシャ彫刻のような隆々とした胸一面に、渦まく濃い胸毛をもった奴など、これ見よがしにのし歩いている。

その時、ステージの端に置いた文字つきのランプが点いた。

見ると七番だ。

胸毛の男が投げ出してあったガウンを拾い得意顔でステージから降りて行く。

おれ達は前もって自分の番号を知らされていた。このランプは、セリ値が決まり、商談が成立したことを知らせる合図なんだ。

やがて次々とステージから消える男達。

おれの番号のランプが点いた時、ステージには他には一人しか残っていなかった。

ステージから降りると、事務所で手早く服を着かえ、待ち構えた若い男に案内され、懐中電灯の光で裏口まで出たおれは、暗い路上に停まった車に乗せられ車は直ぐにスタート



した。

車を運転しているのは、高価なドレスに真珠のネックレスをした、白豚のような毛唐の女だった。

#### (四)

肉体の市場は三日に一度位の割でひらかれた。が、その都度場所が変わり、ステージに並ぶ男の顔ぶれも大半は入れ替っていたのかから察すると、かなりの数の男達を、いくつものステージで巧みにさばいていたのだろう。

おれはとくに工場をやめ、友人の下宿からちよいとしたアパートに移ったが、ステージの開かれる日は、昼頃電話で連絡がある。おれはその夕方、約束の場所で待つだけだ。迎える車がやって来ると、おれをその夜のステージに運んでくれ、前回のおれの取り分を渡される。

日が経つにつれ、おれはこの仕事に馴れてゆき、ステージで自身を誇示する余裕も出てきたし、買い主を喜ばすことにも、練達していった。

もともとおれの体は、稀にみる超持続型らしく、一度おれを買った女は、おれのステージに殺到し、お蔭でおれのセリ値は急速には

ね上がり、一月もしないうちに、おれはギリシャ彫刻の胸毛男とナンバーワンを争う売れっ子になった。

買い主は様々だった。

金の有り余った様な白豚女から、オールドミスのOLらしい女。暇を持てあました毛唐の女やホステス。だが、セリ市の客は女だけではなかった。金に不自由しないホモの男にとって、この肉体市場は又とない穴場だったに違いない。

腹の突き出た年輩の男達や、有名な芸能人や、外人の男も市場にやって来たし、金持ちの息子らしい学生姿の若者まで、おれ達の体を求めに集まって来た。

だが、どんな美しい女に買われた時も、どんな美男子の相手をする時でも、おれの喉には必ず一つの女の顔が浮かんた。

最初の日、テストと称しておれを攻撃した女の顔だ。

あれ以来、おれは彼女に会っていない。が日が経つにつれ、彼女に対するおれの思慕の情は、益々つのるばかりだった。

もう一度彼女に会いたい。会って、あの時の再現をされてみたい。そう思い続けるうちに、夢にまで彼女のことを見る様になった。

しかし、その望みも叶えられぬまま、三カ月ほどが経ってしまった。

そしてある晩、珍しく個人邸宅の応接間でステージの開かれた晩だったが、例によって、商談成立の合図のランプで、素っ裸のおれがガウンを持ち、暗い廊下を通過して、支度部屋に当てられた部屋に急いでいると、横の暗隅から不意におれの手を取る奴がいる。

何ごとかと闇をすかして良く見ると、意外にもそれは、夢にまで見た彼女の顔だった。

「あ！ あんたは……」

「しッ」

彼女はおれの言葉を制すると、傍の部屋におれを引っ張りこんだ。

真っ暗なその部屋に入ると、ドアを閉めるのももどかしく、おれと彼女はどちらからともなく抱き合った。

「逢いたかったわ！」

狂った様なキスのあとで、彼女が囁く。

「おれもだ。おれもこの三カ月間、あんたの事を思わぬ日はなかった」

「うれしい！ あたし、あなたの事がどうしても忘れず、こっそりとやって来たの。でも、とうとう逢えたのね」

「うん。何だか夢みたいだ」



その部屋は家具類をしまふ部屋らしく、少しずつ闇に馴れてくる眼に、ごてごて積み重ねた箱や椅子が眼について来たが、よく見ると、入口に大きなソファが置いてある。

おれ達は抱き合ったまま、埃っぽいソファの上に倒れこんだ。

「愛しているわ」

「おれもだ」

「あたし、あなたを夢にまで見たわ」

「おれもだ。本当だぜ」

「うれしい！」

おれ達は又もや激しく唇を求め合った。

と、片手をおれの首に巻きつけたまま、彼女はあの日のテスト状況を再現しようとし始めた。おれの忘れ難いあの状況をだ。

その時、ゆっくりとドアが開き、黒い影が入って来たんだ。そいつは手にした懐中電灯で、おれ達の姿を、ぱっと照らした。

「あっ」

おれ達は急いで離れたが、微かに電灯の光が反射するその顔は、蝶ネクタイ姿のボスだったんだ。

「ふっふっ。お楽しみの処を邪魔して気の毒だったな」

暗い中で、彼女の体がガタガタ震えている

のを知った時、おれも不意に恐怖を感じ乍らガウンを拾った。

「おう、朱実」

相変わらず電灯を突きつけたまま、ボスがねっちりとした声で云った。

「お前がこの頃、あちこちのステージの周りをうろついているのを、おれが知らんとも思っていたのか。ところが、お前の目的がこの田舎っぺだったとはな」

「……」

「ふっふっ。お前ともあろう者が、こんな田舎っぺに参っていたとはな。ふん、だがタデ喰う虫も何とかで、惚れたのなら仕方があるまい。その代わり、覚悟は出来ているな？ このおれを裏切った奴がどうなるか、お前は百も承知の筈だからな」

彼女——朱実は何も云わず、その体の震えが更に激しくなるのを感じ、おれの身内に悪寒が走った。

（そうか、彼女はボスの女だったのか）

鈍感にもおれは、その時になってようやくその事に思い当り齒がガチガチ鳴り出した。

おれはこの三カ月の間に、ボスが初めておれと会った時、おれに見せた微笑や気さくな態度なんかとんだ仮面で、実は冷酷無情な男

だという事を知った。特におれ達のグループ員は、客との直接取引は禁じられているが、それを犯した者へのリンチは苛酷を極め、それはボスの手により行なわれるのを、おれは一度見たことがあるんだ。

そのボスの女となると、女もおれもこのまま済まされる訳がない。

「ボ、ボス……」

おれは思わず云った。

「朱実さんをここへ誘ったのはおれです。朱実さんに罪はない。許して上げて下さい」

「けっ、貴様」

はき捨てる様にボスは云った。

「色男ぶってこの田舎っぺめ、それで朱実をかばった積りか。ふん。朱実が貴様を引っ張りこむのを、おれはこの眼で見たんだ」

「しかし——」

「黙れ、このデクの棒」

次の瞬間、ボスの靴先がおれの胸板で続けざまに鳴り、おれは無慙にひっくり返った。

「やめてッ」

朱実が悲鳴をあげ、ボスに取りすがろうとしたが、邪険にそれを振り払うと、ボスは手さぐりで部屋の電灯のスイッチをさぐり、パチッと点けた。



おれはやっと起き直り、明るい電灯の下で憎悪の眼で睨むボスを見上げた。と、ボスはいきなり朱実の髪を握んで引き倒し、彼女のドレスに手をかけると、一気にピリッと引き裂き、強引にひっぱいだ。

「あッ、ゆ、ゆるしてッ」

朱実が恐怖の眼でのがれようとしたが、ボスは無言でのしかかると、明るい電灯の下にさらされた朱実の裸から、パンティを一気に引きむしると、彼女の体を片腕で抱きあげたかと思うと、いきなりおれの眼の前に突きつけるようにしたんだ。

「あッ」

あの時の、おれの愕き。なんと、信じられないことだが、朱実は、まぎれもない「男」だったんだ。

「どうした？ 色男」

ボスは残忍そうに笑うと、おれの胸板をもう一度、蹴った。

「貴様、こいつを女と置いていたらしいな。」

無理もねえ。それを知っているのはおれだけだ。こいつは誰と寝ても、決して男だとは気づかれないテクニクを身につけている。それにこの美しい面だ。貴様が、たぶらかされていたのは当たり前だ。が、所詮は、こいつは

野郎だぜ。どうした？ がっかりしたか？」

おれは物も云えず、ごくツと唾をのんだ。

（朱実が男だった！ そんな！）

ソファに投げ出され、手で顔を掩っている彼女の、いや、彼のすなりした背中を見つめながら、おれは夢を見る気持だった。

あの美しい顔。あの柔らかな肢体。それにあの、さわやかな甘い声の朱実が、男だったとは――。

その時、廊下を小走りな足音が通りかかり電灯の点いているのに気づいたのか、ドアが開けられて顔を突き出したのは若い男だ。

「あ、ボス。こんな所に居たんですか。ブツが一人居ないと云って、お客がごねているんですが……あ、野郎、こんな所に――」

「待て」

とボスがそれをさえぎった。

「そのお客には、適当なブツを急いであてがうんだ。それから今夜、ショーをやる。大至急に手配をしろ」

「今夜、ショーを？」

若い男はボスの顔とおれの顔と、そして朱実をちらと見較べたが、にやりとすると部屋から出て行った。

# (五)

天板には豪華なシャンデリヤが輝き、真紅のカーペットが敷き詰められたかなり広い洋間に、おれ達が放りこまれてから一時間ばかり経った。

おれも朱実も素っ裸で、両手を後ろ手に縛られていた。

カーペットに尻をおろし、両足を投げ出したおれは、おれの体にもたれかかり、甘い声で囁く朱実の言葉を、正直なところ耳に入れたはいなかった。

（これから一体何が始められるのか？ ショーとは何のことだろう？）

「ねえ、聞いてよ。聞いているの？」

「聞いているさ」

おれは、ぼそりと答える。

「あたしのこと、怒っているわね。ごめんなさい。でも瞞す積りではなかったのよ。あたし、自分のこと女だと思いたいの。いいえ、女としてあなたとお付き合いたいの、そう思っていただけなの。ね、許して！」

「分かったよ。腹なんか立ててはいないさ」

「本当？」

「本当とも」



「うれしい！」

朱実の後手に縛られたままで、おれの胸にもたれかかり、おれの唇を求める。その波うつ髪が乱れた美しい顔は、どう見ても女だった。

おれは急激にふくれ上がる欲情に、置かれた身の上のことも忘れ果てていた。

狂ったような朱実の唇に、おれは直ぐに忘我の境に入った。しかし、めったな事では昇天しないだけの自信が、おれにはある。おれ達は縛られたままで、もつれ合った。

と、不意に、

「待った」

そう叫んで入って来たのはボスだった。

手に八ミリカメラを持った彼は、いきなりおれを蹴とばし、

「おう、二匹の牡犬め、とうとうやって呉れたな。お蔭でたっぷり撮らせて貰ったぜ。だが、おっとどっこい。そこでダウンされては都合が悪い。なにしろ今夜のショーの主役だからな、貴様たちは」

そう云い、ドアの方に何か合図をすると、ドヤドヤと数人の女が入って来たが、おれはそれを見て、あっと思った。

その女どもは裸形だった。色とりどりのビ

キニをつけただけの、女の体臭をむんむんさせたそいつらは、どういう訳か顔半分を黒いマスクで隠している。

「これはようこそ淑女の皆さま」

ボスが氣どった声で女どもを迎える。

「さあさあ淑女の皆さま、今夜のお相手は飛び切り上等の牡犬二匹。焼いて喰おうが煮て喰おうが、それは皆様のお好み次第。時間はたっぷりとございます。では、今夜のショーを存分にお楽しみ下さいますよう——」

半ば道化た声で云うと、ボスは部屋から出て行った。

おれと朱実は一カーペットの上に半身を起し、六人の女どもを見上げた。と、女どもは手に手に鞭や綱などを持ったまま、おれ達二人を取り囲む。

不意に鞭が唸った。朱実の正面にいた赤いビキニの女が、朱実の顔に鞭をくれたんだ。

「ヒーッ」

朱実が悲鳴を上げて引っくり返るのを、楽しそうに、そいつは舌なめずりしながら眺めていたが、こんどはおれの方を向いた。

体が抜けるように白く、素晴らしい休をした大柄な女だ。顔の造りも整っていそうだがマスクに隠されて見えない。

おれは体を固くした。次の瞬間に鞭が鳴った。おれは激痛に耐えながら、片足で彼女の足を払おうとした。が、素早く彼女は跳び退くと、続けざまに鞭を飛ばせてくる。

他の女どもが、面白そうに嬌声を上げた。

「まあ、このシェパードはちよいと骨がありそうね」

「それに顔もイカスじゃない」

「顔が？　こんなのは二束三文よ。でもさ、

体のほうは仲々立派だわあ」

「ほンと。早くこのシェパードを苛め抜いてみたいわあ」

ガヤガヤと騒ぐ女どもを、赤いビキニが制止した。

「無駄なお喋りをしていないで、二つのグループに分かれるのよ」

「じゃ、あたしは断然このシェパードだわ」

「あたしは向こうの髪の長いテリヤよ」

「あたしは遅いのが好き」

「あら、テリヤも遅いところ、あるわよ」  
一しきり騒いでいたが、どうやらグループ

が決まり、三人の女が朱実を引っ立てて行く  
と、後には赤いビキニの女と、小柄な女二人  
が残った。

おれは観念して、三人を見上げた。



二人の女は大したことはないが、赤いビキニの女の体は、見れば見る程素晴らしい。ポインも、はち切れるばかりだし、まぶしい位だ。

おれは思わず眼を外らした。すると、  
「あら、このシェパード、犬の癖に好色そうな眼付きをしたわ」

「生意気よ。じゃ、こうしてやるのよ」

云うが否や、二人がかりでおれの両足首を掴み、ぱっと別れた。股裂きだ。おれは思わず呻ったが、まるでプロレスそのままのやり方で二度三度と、股裂きを繰り返すと、こんどは両足首を別々の綱で縛り、二本の綱を天板にある二つの鉤に通し、おれを逆さに吊り下げるんだ。

頭が床とすれすれに、両足を六十度を開いた恰好で、おれを逆づりにしたかと思うと、黄色のビキニの女がおれの両脇の下に足を掛け、両手でおれの両足首を握ると、ブランコのように漕ぎ始めるんだ。そして、女の体に乗せたおれの体が大きく反復運動を始めた時、  
「さあ、始めるわよッ」

赤いビキニの女が叫んだ。

足首の縛り目の激痛に歯を喰いしぼりながら、おれの額から油汗がしたたり落ちた。

黄色いビキニが、おれから飛び離れた、と思った時、赤いビキニが鞭を振るのがチラと見えた。

「あッ、ううッ」

あの時の苦痛！ 鞭はおれの急所を正確に打った。しかも当たった鞭の先端は、そのままきりッと巻き付き、結んだように離れなくなったのだ。

と、ぴーンと張った鞭を、赤いビキニがぐいと引いた。おれは又もや悲鳴を上げた。鞭の力はすべて一点にかかっている。それをぐいぐい引きながら、人間ブランコを止めようというんだ。

おれは、ふっと気が遠くなった。

気がついた時、おれは逆吊りからおろされて、反対側のドアを通り、隣室に連ばれるところだった。ドアを通る前にちらと見ると、向こうの方で朱実が、棒か何かで盛んに責められ続けざまに呻き声を上げていた。

連れこまれたのは浴室だった。おれをタイルの床に放り出すと、女どもはキャアキャア云いながら、おれに浴槽の水をぶちかける。

おれは完全に正気づいた。

すると、こん度は水責めだ。

そのやり方と来たら、残酷なんてもものじゃない。

ない。間違いだ。そう、この牝犬どもはサデイストなんかではない、間違いだ。とおれは思った。

三人がかりで浴槽にかかえこみ、窒息寸前まで頭を水中に押しこむかと思うと、こんどめったやたら鞭責めだ。続いて簀の子責めに逆吊り、ありとあらゆる悪魔のような攻撃に、おれは又もや失神した。

そして、ふと我に返った時、おれはタイルの上に寝かされ、三人はおれに背を向けて尻をおろして煙草を喫っている。おれが正気づくのを待つ間、一寸一服というところなんだろう。

おれは細眼を開け、女どもの様子をうかがった。

## (六)

その時おれはふと、おれの両手を縛っていた細紐が外されている事に気が付いた。

おれが仲々正気づかないので、後手を解いて楽な姿勢にさせ、水でもぶっ掛けたのだらうか。

すぐ近くに鞭と綱が放り出されてあるのを目にした時、おれは大きく息を吸うと、不意に起き上がってそれを掴んだ。



「あっ」

女どもが愕いて起ち上がる。が、今度はこっちの番だ。おれは女どもを鞭でぶっ倒し、一人ずつ素早く後手に縛ると、ビキニを引っ千切って猿ぐつわを噛まし、タイルの上に転がした。

（さて、この牝犬共をどうしてくれよう？）

おれは煮えたぎる思いで女どもを見おろしたが、先ずそのマスクを引っぱがした。

赤いビキニが予期に反してブスクレで、黄いビキニが案外と美人だったが、そんな事はどうでもよい。どうせこいつらはホステスかマダムか、一夜の遊びに万と名のつく金を平気で使える女達だ。今夜のショーに何万、或は何十万の金を払ったか知らないが、責めとはどんなものか思い知らせてやる。

（先ず存分になぐさんでやるか？）

だが、こんな氣違いの牝犬どもを抱く氣はない。おれは辺りを見廻し、隅にある小さな台の上に、女どもの煙草と一緒にライターが有るのを眼にすると、そいつを手を取った。

おれはライターを点けると、赤いビキニの女の髪を引っ掴んでやった。

女の体が狂った様に暴れ出した。が、おれは片足で踏みつけると、きな臭い煙を嗅ぎな

がら作業を続けた。

おれは残る二人の女も順次踏みつけ、遠慮容赦なく同じようにしてやって、再びライターの炎を赤いビキニの顔に近づけた。

苦痛にゆがんだ女の顔が、急に恐怖に色どられたが、まだまだお楽しみはこれからだ。

おれはもう一人の女を引き起こし、体を曲げて横にならせると、もう一度赤いビキニの顔にライターを突きつけ、

「おい、こいつのケツを舐めるんだ」

女の眼の中に恐怖と怒りの色が浮かんだ。

おれは女の背中に炎を押し当てた。そのとたん、女が体をのけぞらせ、隣の女の尻に喰らいついた。

「ようし、そうだ。いいと云うまで舐めるんだ。上の方もな」

ライターの火で体を焼かれぬため、女は犬のように従順になっていた。

おれは女を交代させながら、余計に腹が立ってきた。こんな奴どもに買われて氣嫌をとっていたんだ。おれは……

「この、牝犬ども。徹底的にやってやるからナッ」

だがその時、隣室の方から聞こえた悲鳴に、はっとなり、おれはライターを持ったまま、

浴室を飛び出した。

「あっ」

洋室に飛びこんだおれが見たものは、朱実の哀れな姿だった。女たちは、ことであろうに、朱実がおれに対して一番隠したがったものを綱でしばり、その綱を天板の鉤に通して体を吊り上げようとする氣違いじみた行為だった。

おれは駆け寄ると女どもを張り倒し、ビキニを引っばいで猿ぐつわを噛ますと、朱実の綱を解き、女どもの片足ずつを一つにして縛ると、天板に吊り下げた。

「おい、朱実、しっかりしろッ」

朱実はやっと薄眼を開けたが、その姿は二眼と見られぬものだった。

あの美しかった顔も、すんなりと柔らかな肢体も、そこにはなかった。あるのは肉屋の店先にぶら下がった、あのみにくい肉の塊りと、何ら変わるところはなかった。

鞭のあとと血ぶくれと、そして紫色に変わった全身の縄痕を見た時、おれは逆上した。胸の中が煮えくり返る想いで、片足吊りの女どもに近づくと、ところかまわずライターの火を押しつけ続けた。

その時、ボタンとドアが開き、ボスが又も



や入って来たんだ。

おれは鞭を振り上げた。が次の瞬間、にぶい銃声がして、おれはその場に転倒した。

ボスは煙が微かにのこるピストルをまだおれに向けながら、

「おう、田舎っぺ、やるじゃないかよ」

おれは撃たれた太股のあたりを右手で固く握んだまま、無言でボスを見上げた。じわじわと噴き出てくる血の温もりが掌に感じられる。が、弾はどうやら貫通したらしい。

「おいボス。折角のショーとやらがメチャクチャで気の毒だったな」

おれはボスに対して初めて横柄な口を利いた。が、ボスは軽くそれをいなした。

「どう致しまして。ショーは成功だよ。おれは客に対してただ牡犬を提供するだけだ。しかも、そのショーの全景をブルーフィルムに撮影する。こたえられねえ商売さ。例えショーの途中で牡犬が吠えようが噛みつこうが、

# 旧号お手持の方へお願い

本誌の旧号八昭和三十九年度以前の発刊分Vを高価に譲り受けたく思います。整理の意志をお持ちの方は是非編集部まで一報下さい。折返し返信致します。

こっちの知ったことか。いや、ハプニングが起きればそれだけフィルムが面白くなる。今日のやつなんか、さしずめアカデミー賞ものだぜ。はっはっはっ」

ボスはおれの云うことなど齒牙にもかけず朱実の体をつ、蹴とばした。

「ふん。美貌のゲイボーイもザマあねえな」

おれは密かにボスとの間隔を目測した。

「ボス。おれ達をどうする積りだ？」

「さあて、どうしたもんかな」

ボスは鼻先で嘲笑うと、

「おれはおれを裏切った奴や、グループの掟を犯した奴は、徹底的に痛めつける方針だ。が、殺しやしねえから安心しな。しかしだ、もうこれでリンチは終わったなんて考えちゃいけねえぜ。貴様達に弱音をあげて貰うのはこれからだ」

そう云いながらボスは、又もや朱実を蹴とばそうとした。今だ。おれは右足をはね上げると力一杯に足ばらいを喰わせた。予想以上にうまく決まり、ボスがドスンと横転した。

次の瞬間、ピストルはおれの手に移っていったんだ。

おれは銃口をボスの太股に押しつけると、無造作に引金をひいた。

にぶい音だが、手応えは充分だ。

ボスの体が激しくのけぞった。だが、それと同時におれも弓なりにぶっ倒れた。

どこかの覗き穴から室内を見ていた若い奴が、形勢の逆転に慌てて、おれを撃ったんだろつ。

おれはそのまま気を失った。

——ふっと意識を取り戻した時、おれは取りこわし中のビルの工事現場の床に、ボロ服を着せられて寝かされていた。

傷は太股と肩だ。おれは這うようにしてビルの外に出たが、夜の舗道の端で又もや気を失ったんだ。次に意識が戻ったのは、病院のベッドの上だった。

それからいろんな事があった。が、結局、少しばかり貯めていた金も、病院の費用でパァになり、おれは今、東京におさらばしようとしている。だが、これで好いのだとおれは思う。おれは東京には向かない人間なんだ。ましてや肉体のステージに向く男ではない。九州に帰って農業に精出そう。

世の若者たちよ。若しも君達の前に、ある日突然、にこやかな紳士が現われても、自分がステージに向く男性だなどとは信じないように。



## 懸賞応募作品

## 六 人 目 の 女

戸 塚 一 鬼

目を覚めた時は既に十時だった。プレイの疲労は汗のようにまだ沈澱していた。

「今、何時頃なの」

和恵も目を覚めたようだ。自分の豊かな二の腕についた縄のあとを指先で撫でている。

和恵は私が囲った五人目の女である。まだ二十八歳だが、数年前未亡人となっていたのを、ある「つて」で知り合ったのである。

その和恵とも一カ月振りのプレイだった。

昨晚はそのためもあって、夜更けまで、縄目の愛技に感溺したのである。部屋の片隅にとぐるを巻いている縄束や奇妙な玩具、それに彼女の縄のあとを刻印された柔肌、そういったものは宴のあとの乱れた食膳のように私を倦怠に陥れた。

「今度は何時いらっしゃるの？」

「うん、また暫くは来られないな。これから関西方面へ行かなければならないんだ」

「まあ、またなの。そんなにいつも放っておいて、私が浮気をしてもいいの」

「少しくらいならな」

「まあ、いやねえ」

私がこのところ和恵の所を長く空けるのはこの四十過ぎの肉体の衰えのせいだけではない。横浜に和恵の同性愛の恋人が居るのを知っているからである。

和恵を囲うときに調べさせたのだが、和恵は結婚する前から、美千子というその女との関係はあったらしく、中学校の教師で、団地に一人住まいの彼女と、和恵は私の世話を受けている今でも逢っているのだ。

だが、その美千子の隣部屋を私が借りてい



を き み 谷 東 ・ カット

て、精巧なりモートコントロールテレビカメラと盗聴器で彼女達の痴態を観察しているなどと言う事は、夢にも知らないだろう。

和恵は彼女との時も縄を使ったプレイをしているのを知った私は、わざと和恵を放っておいて、彼女達のSMレスビアニズムを愉しんでいるのである。

○

私は慎重に隠しカメラを操作する。美千子はもう帰って来ていた。彼女は今風呂を沸かしているらしいが、風呂場まではカメラが届かない。カメラは食堂らしい洋間に設置して



あった。

美千子は和恵と同じ二十八歳である。彼女達は大学の時、知り合ったらしい。中肉中背の和恵に比べてやや大柄のグラマーで、整った美しい顔立ちだが、どこかきつい感じがあつた。それはうしろで束ねた髪型のせいなのか教師という雰囲気のためなのだろうか。ともかく彼女は専ら男役である。

彼女の部屋のチャイムが鳴った。美千子の下着姿がカメラを横切る。和恵が来たようだった。

「いらっしやい。今日は旦那様の方は？」

「大杉はまた一と月程、空けるそうよ」

「そう、じゃあまずお風呂ね」

「フッフ、早速ねえ」

二人は衣服を脱ぐ。彼女達はそれもレズのプレイの一つなのか、お互いに一枚一枚、脱がせつこをして、風呂場の方へ行った。

二人がまたカメラに入るまでいかに長かった。ようやく画面に現われたのを見ると、和恵はもう全裸で縛り上げられていた。後手の厳しい菱縄縛りだ。色白の体がところどころ赤くなっているのは既にかなり責められたらしい。

「さあ、お言い。いつもあの男とどんな事をしているか、すっかり白状なさい」

美千子は黒のビキニを着て、手には一メートルくらいの竹のものをさしの様な物を持って

いる。二人共、頬を紅潮させて肌は艶を持て光っていた。

美千子は和恵の縄尻を持って床に突き倒すと、和恵の髪を驚掴みにして体中を竹べらで打ち始めた。かなり強い打ち方らしく、胸、尻、太股などにたちまち赤いあとがいくつも出来る。だが和恵の呻き声は悲鳴というよりはむしろ悦楽の表現に違いなかった。

「ああ、許して下さい」

「お言い」

「大杉は私のことを吊るし責めにしたり、浣腸責めにしたりします」

「それから？……」

「海老責め、くすぐり責め、うしろ責め」

「お前はそんな事をされて、いつも豚のようにヒイヒイ喜んでるのね」

「はい」

「なにが一番辛いと言ってごらん」

「やはり、浣腸ですわ……」

「そう、じゃそれにしようね」

「ああ、許して……」

二人は、すっかり芝居がかった、口調である。和恵はそう言いながらも浣腸を望んでいるのがある。和恵は私との時もいやに浣腸責めを好むのだった。私はレスビアニズムの妖しい雰囲気の中で、美千子の和恵とはまた違った、新鮮な魅力にひかれていた。均整の取れたひき締まった体、豊かに張

ったヒップ、体に密着した黒いビキニがいいアクセントになっている。マゾヒストばかりを見つづけて来た私には、彼女のそのちよつとサディスティックなムードが薬味のように刺激的だった。

美千子は太いガラス器を取り出す。三〇Cくらいのリンダーだが、和恵に地べたにはいつくばったような屈辱的な姿勢をとらせ、注入すると、そのまま引き立ててゆく。風呂場で始末するのだろうか。再び出て来た二人は、濡れたままであった。一方は厳しく縛り上げられているが、今は二人共全裸だった。美千子は手にバイブレーターを持っている。

華麗な情景が展開され始めるにつれて、私はむしろ呆然となって、ただ白い肉塊が蠢くのを、ぼんやり見つめているだけだった。

○ 次の日、彼女達は連れ立って出掛けてしまった。どこかで気分を変えて、SMレズの秘技を繰り広げるのではないだろうか。

私は何とかして美千子と交渉を持ちたいと思った。サディスチンを縛る。その倒錯の上にも倒錯した考えが、私をいつになく興奮させた。美千子のすべすべした体に縄をかけることを思うと、たまらないほどの蠱惑を覚えた。だが、接近する手は幾つも有るかもしれないが、レスビアンでサディストの彼女が、私の欲求を聞いてくれる可能性はまず無いだ



ろうと思うと余計に恋情をかきたてられた。

翌日も私は部屋に潜んで居た。私は暴力で女性を責める事は好まないが、その暴力を使つてでも美千子を縛ってみたい思ひだった。

隣の美千子の部屋へはベランダから行けないこともないのである。だが、実際には侵入して無理矢理に縛るなどということは私には出来ないう。それでも私は、何故か去り難かつたのである。

美千子は日暮れてから帰宅した。そしてその晩、彼女は意外なことを始め出したのである。私は自分の目を疑った。

しかし、画面の美千子は脱ぎ捨てた下着を小さく丸めて口中に押し込むと、手ぬぐいで厳しくくくった。さらに足首、膝の上を細紐で縛り、両手も首と連結し始めた。自縛なのだ。

数分後には美千子は完全な緊縛体となつて転がっていた。彼女は今、私の夢想した通りのあられもない姿なのだ。

美千子はそのまま床の上で身をくねらせ始めた。豊かな乳房が床に押し付けられグラマラスな体に縄がくい込んで見え隠れする。

私は遂に耐えきれず、ベランダ伝いに彼女の部屋に入ろうとした。此処は二階だから、落ちて大した怪我はするまいが、人に見付かつたような場合には相当苦しい事になるだろう。だが深夜の暗さが私を思いきらせた。

幸いにも、彼女の部屋のベランダのガラス戸には鍵は鎖していなかった。冷たい夜気に私は一瞬冷静を取り戻してためらつたが、強い誘惑には勝てず、遂に部屋に踏み込んだ。

画面で見たとおりの恰好だった。全裸の美千子は縄に締め上げられて俯伏せになつて居た。ガラス戸の開いた音を聞きつけたのだらう、身を堅くしていたのが、私を認めたとなんに激しく身をくねらせ始めた。縄目のくい込んだ豊満なヒップが私の気持をそそる。全身は羞恥で紅く染まつて、小さく猿轡からググツという呻きが洩れた。

私は縄尻を掴んで美千子の体を引き起こした。私の手がくびられた肌に触れると美千子はビクツと反応した。もう私の理性はどこかへふき飛んでいた。肉のしまった体は縄目を深く喰ひこませながらのたうった。

美千子の両手は背中できつく括り合わされて汗ばんでいる。綺麗にマニキュアした指を握りしめたその手は美しかった。私はその滑らかな指の一本一本を口に含んだ。

さらに私は美千子を立たせると、背後から首すじ、背中、豊満な尻、太股、ふくらはぎに至るまで、汗と体臭を嘗め取るようにしてやった。美千子は鼻腔を拡げて耐えていたがもはや抵抗も拒否もせず、縛られたままの体をもたせかけてくるのだった。

縄をといてやっても暫くの間、美千子はぐったりして居た。

「済まなかつたな」

「……あなた大杉さんね」

「そうだよ。どうして知っているんだい」

「和恵と一緒にいるところを見たことがあるの。でも、どうしてここへ……」

私は隣部屋の秘密を白状した。

私達は急速に打ちとけた。彼女が意外と好意的に私を迎え入れる態度を見せたからである。私は彼女に浣腸してみたくなった。ちょっと高慢で冷たい感じの美千子に、女性にとって最も屈辱的な責めを味あわせてみたくなつたのである。

私は美千子を再び後手に縛り上げると、足と首とを連結して海老縛りにした。

「さあ、浣腸してやろう。浣腸器はどこだ」

「え。いや、浣腸だけはやめてちょうだい」

「なんだ、和恵には平気でしているくせに」

「私はいつも和恵を責めてから、自分が今どんな恥かしい恰好をしているか、よくわかるんです。ですから余計……」

「しかし一方では、その恥かしさが嬉しいんじゃないのかい」

「ええ、そうね……。それに私が嫌でも、こんなに裸で縛られていては何をされてもあなたの思うままですわね。それじゃあイチジク浣腸くらいで許していただけません。それな



らあの薬箱の中にあります」

私はそこに有った二個を一度に使った。彼女が身悶えしながら激しく反応した。

「ああ、いや、縄をほどこいて、もう駄目」

私の好む素晴らしい絵図だが、此処でやられても困ると思ったから、手早く足と首を連結した縄だけをほどこいてやったが、後手はそのまま、部屋の扉を開けて外へ追い出してしまった。美千子は全裸で後手に縛られたままどこかの隅にしゃがんで用を足さねばならぬのである。それを考えただけで私の嗜虐感には止めどなく舞い上った。

暫くして彼女が、微かな声で「開けて下さい」と呼んだ。

○

「ひどいわ、あんな恥かしい事って……」

「自分が責められる気持はどうだい」

「まあまあね」

「しかし、君にマゾの気があるとはねえ」

「ええ、でも和恵さんが私に責められて喜んでいるのを見ると、羨ましくなることもあるにはあったのよ」

「それはそうだろうな。しかし君みたいな気の強い人を責めるのは非常に面白いよ」

「まあ、私はそんなに気が強くなんかありませんわ。学校では可愛い先生の一人に数えられていくんですけど」

「そうかい。そんな先生がこんな痴態をさら

していると思ったら生徒達は驚くだろうね」

「意地悪な事おっしゃるのね」

「君を生徒達の前で責めてみたいよ」

「まあ……。でも、とっても刺激的な考えですわね。そうだね、今度一度、私の学校でプレイしてみませんか？ きっと面白いわ」

「え、そりゃあ。でも平気なのかい」

「私が宿直の時なら大丈夫ですわ。用務員の人を帰してしまえば、私一人なのよ」

「そりゃあ面白い。ぜひやってみよう」

「和恵と二人で、責めていただけますか？」

「いいとも」

○

美千子の宿直の日は、それから二週間ばかり後だった。私と美千子は、和恵には全然秘密にして計画を立てたのだった。美千子が和恵を縛って車で連れて来ると言う。

私がそこに着いた時は既に宵闇迫る頃で、生徒達は皆な帰ってしまった広い校内には人影も無く森閑としていた。

「和恵はどうしたい」

「あの車のトランクの中よ」

「ふん、君もひどい事をするね」

「和恵が可哀そう？」

「ああ」

「それじゃあ、そのお返しに、今夜は私を思いきり責めてちょうだい」

美千子は自分で、スカートとスリップを脱

ぎ始めた。薄暗い教室の中で裸身が真っ白く浮かぶ。私はやにわに「四つんばいになれ」と命じると、美千子の豊かな臀部を縄束で打ちすえた。

パシッ

うっ、うっ

パシッ

うっ、うっ

うっ、うっ

床に両手をついて、犬のような屈辱的な姿勢でこの折檻を耐えている美千子は早くも欲望が熟して来たらしい。

「猿のお尻みたいになったぜ」

私は掌で一つピシヤリとたたいて言った。

「いやですわ、早く縛って下さい。私、縛られないで責められるのっていやです」

「どうして」

「どうしてって……。いじわるね」

私は美千子のなめらかな両手を後に回して縛ると、そのまま乳房の上下を締めつけ胴にも幾巻かして、さらに余った縄尻を後から前へ脚の間を通して引き締めた。

脱ぎ捨てたパンティを口中に押し込んできつく猿轡を嵌めてから、私は美千子をトイレへ連れて行った。全裸で黒いハイヒールだけを履いた姿がエロチックである。

私は美千子をトイレの個室に入れて、足もくくり合わせて身動き出来ないように鉄パイプに立ち縛りにすると、扉をしめてから和恵



を連れに行った。和恵と美千子をここで対面させるのである。美千子は、今までいつも責めしいたげていた和恵に、初めて自分のあさましい姿を見られるのだ。

車のトランクの中に、和恵は体を二つに折り畳まれて押し込められていた。後手にぎりぎり縛り上げられて、猿轡も嵌められている。彼女はぐったりしていたが、私を認める。猿轡の上で大きい眼をいっぱいに見開くのがわかった。ほつれ毛が、白い頬に艶めかしい。

私は物も言わずに和恵を引き立てた。

全裸で後手に緊縛された女同士が、お互いの姿を見て何を感じたか。和恵は一目、美千子の緊縛体を見ると、猿轡の奥で叫ぶような呻き声を立てて身悶えした。美千子は頬をうっすらと紅く染めて眼を伏せていた。

私は二人を向かい合わせにして別のロープでしっかりくり合わせる、縄で打ちすえながら廊下を引き廻した。彼女達はよちよちと、よろけながら歩こうとするが後手のまま合わされた二つの体は、うまく歩ける筈はない。転ぶと私は容赦なく縄尻を擱んで邪慥に引っぱり起こす。

この引き廻しで、彼女達も数分前のショックから、再び責めの興奮の中へ傾いて行ったようだった。今は二人共、息を喘がせて、顔は真赤になっていた。

私は二人を校舎とは別棟になっている板張りの剣道場の方へ引き立てた。剣道場には高い梁が何本も通っていて吊り責めには絶好の場所である。また此处で責められる事は美千子の希望でもあった。美千子はこの道場の梁を見るたびにそこに吊るされる自分を想像していたというが、確かにこうした道場特有の汗臭い殺伐な雰囲気は、被虐者は被虐の、私のような嗜虐者は嗜虐の幻想を浮かばせるようだった。

私は女二人を敷板に転がして暫く喘がせておいて、美千子が用意しておいた責め道具の準備を始めた。

私は滑車を使って二人をくり合わせたまま鎖に連結して吊り上げた。土木工事に使うような本格的な滑車だから少し時間はかかるが、僅かずつ確実に女体は吊り上げられて行く。再び呻き声が高まる。私は道場に沢山立て掛けてある竹刀の一本を取って絡み合ってぶら下がった女体をいたぶった。軽く打っただけでも女体はくるくる廻って揺れる。

二人共頬を真赤に上気させて、肌は汗でキラキラ光っている。ひととき責めて降ろした時、美千子の方が参っていたようだった。

少し休んだ後、私は美千子を海老縛りにして転がしておいて今度は和恵だけを吊り上げた。両足を別々に縛ると左右に引っ張り、暫くは竹刀で体中を打ったり、つついたりし

て責めてやったが、やがて私の方が辛抱しきれなくなって、責めたてていた和恵に奉仕する形になってしまった。

○

「ああ、苦しかったわ」

「でも、最高のプレイだったろう」

「いやねえ、あなたいつ頃から私達の事を知っていたの。私、美千子さんが縛られているのを見た時は本当にびっくりしたわ」

「最初からなんですって。私達の事はみんな隠しカメラで見られていたのよ」

「まあ」

「和恵、美千子はね、いつも自縛遊びしているくせに、知らん顔をしてお前を責めていたんだ。だから俺がちょっとお仕置をしてやったのさ。お前も俺に隠れて美千子と浮気なんかしていたんだから、今日の責めはその罰として当然の事じゃあないかい」

「はい、済みませんでした」

「ははは、ところで和恵、お前も美千子にはひどく責められてばかりいて、少しは恨みもあるんじゃないのかい。どうだ、仕返しにお前が美千子を責めてみないか」

「えッ、でも……」

「美千子はどうだい」

「私はいいわよ」

和恵が今度は美千子を縛り上げた。横から口を出して、私が縛り方を指導する。



「もつときつく絞り上げろ、そうそう」

「和恵さん、遠慮なんかしないで」

「でも、責めるといってもわからないわ」

「そうだな、よし、美千子連れて来い」

私はそういつて先に校庭へ出た。

主客転倒して、今は後手に縛られた美千子を和恵が引き立てている。和恵は初めて人を責めるといふことに興味を覚えたらしい素振りだった。

校庭の片隅には、お定まりの運動用の鉄棒があった。私は美千子をこの鉄棒を使った木馬責めにしてやろうと思ったのである。

「ああ、そんな、ひどいわ。それだけ……」

「うるさい、和恵、猿轡を咬ますんだ」

「ちょっと可哀そうね」

美千子は、昨日までの自分の奴隷に自由に扱われて、ふっくらした頬に、ぎりぎり猿轡をくい込まされてしまっている。

声を奪われた美千子を鉄棒にまたがらせ、和恵と私と二人がかりの責めが始まった。縄で打ったり、足を、引っばったりして揺さぶる。

美千子は猿轡上で眼をいっぱいに見開いて呻いている。太ももは苦痛に痙攣していた。美千子の太柄な肉体がぐねり、胸やヒップがプリプリ震えるのが夜目にも艶めかしく、私をゾクゾクさせた。

私は興に乗るままに一旦美千子を降ろすと

浣腸器を取って来て、和恵の手で注入させたのである。和恵も自分がいつもされているので、さしてためらわなかった。美千子はさすがに少し抵抗したが、後手に縛られて完全に自由を奪われた身では、和恵の意のままである。

再び鉄棒にのせると、前より一層彼女の呻き声が高くなった。浣腸責めと木馬責めの二つの責めを同時に受けて、美千子は後手に縛り上げられた体を身も世もないように悶えさせていた。

私は美千子の呻き声があまり高くなったので、少し心配したが、すぐに耐えきれない限界が来たようであった。和恵は美千子の様子から、自分のその時のことを想起したのか、上気した様子で眺めていた。

数日後、美千子が私の家へやって来た。黒いミニのワンピースを着て、それが白い肌を一層冴えさせていた。ノースリーブの伸びやかな腕が美しかった。

「私、来月結婚致します」

「えッ。それはまた突然だねえ。……前から決まっていたの？」

「ええ。それで今日は、その御挨拶に……」  
「そうかい。それは……ともかく、おめでとう。それじゃあこの間のことは、名残りのアバンチュールだったというわけなんだなあ」

「それもありますけど……実は、私が責めていただいたのは、和恵に私の恥ずかしい姿を見せて同性愛の関係を断つためでした。私はもう同性の人とプレイするのは飽きましたわ。あなたが隣の部屋にいらして私達のことを覗いていたことは、前から気付いていました。それであなたに責められる姿を見れば、和恵も私を諦めるだろうと思って、あなたを誘うためにわざと自分を縛りましたの」

「それじゃあ君は、マゾじゃあなかったの」  
「ええ、確かにあの時は、とっても嫌でしたわ。でも、今は……。最初はただ耐えていただけでしたが、肌にくい込む緊縛感が次第に快いものに思われてきて……。同性愛を断つつもりが、今度は被虐のほうに取りつかれそうで心配です。でも、もうきつと縄とは、お別れでしょうね、少し淋しい気もしますけれど……」

私は今も時々、人妻となった美千子とプレイを行なっている。美千子は被虐の欲求をもっぱら私とのプレイで満たしているようだ。しかし、美千子の家庭の幸せを思えば、彼女が私の六番目の女になるようなことにならないようにと、私は祈らざるを得ない。



体 験 的 小 説

盛<sup>せい</sup>夏<sup>か</sup>の詩<sup>うた</sup>

雉 子 田 美 夫

朝九時、どこか遠い所で海鳴りのような音が轟きはじめるとともに、本当の曇りかと思われる程の厚い朝雲の雲が解けはじめ、瞬く間に、盛夏のきらきらとした白い光りの空が一ぱいに展げていくのである。

慢性の強度の神経症として、二十年余りも精神病院の生活を送っている千原群造にも、この季節、きらきらとどこまでもどこまでも焼けつき焦げついた自分の思考、ままたらぬ憂鬱な思考と云うものに、一種の諦感めいた安らぎ、希望の断片を恰も神の恵みのごとく

もたらすのも、この盛夏の、人々を閉じ込めてしまったような一刻なのであった。

一、アメリカン・MASU

大阪湾にほど近い安治川河口のその中クラスの造船所では、いましも炎天の下にリベットの音も高く、三千トン級の輸送船が建造されつつあった。

群造ら学徒は、その作業の配置の関係で屢々アメリカ軍の捕虜と同じ作業場で仕事をしていた。当時、ヒョロヒョロのアメリカ軍と宣伝

されていたが、仲々に筋骨隆々たる者が多くまた物想いに耽るようなその眼付きは、鬼畜米英と云う日本軍のうたい文句と聊か釣合いのとれぬものがあつたのである。

殆ど屋外での半裸の作業、運搬、鉄くずの選別などであるが、物かげに一服する時に、その捕虜達と一緒にすることがあつた。

つい先達って、列をつくって街を歩いていく捕虜を眺め、『おかわいそうに』と、言つた婦人のことが、大々的に新聞に取沙汰されて、戦争遂行上好ましからざる言葉として、



カット・室井亜砂路



表現を尽して悪く書かれ、その婦人はその時その現場においても捕虜の誘導員達に殴られたそうであるが、そんなこともあって学徒達の捕虜との会話は固く禁じられていた。

しかし乍ら、はじめは敵意を持っていた学徒らも、一緒に作業をし乍ら片言の英語を喋ったり、また、それが通じて大きな表情で返事などされると嬉しく、時には学徒の手に余る仕事などやってくれる者も居る。群造なども、一度、独りで鉄屑を積んだトロッコを押している時、下を向いてフーフー云って押しているトロッコが、急にニョキッと大きな毛むくじらの腕が現われて軽くなった。

その遅い腕に較べて、虚弱な群造の腕はなんとも貧弱でやさしかった。

「サンキュー」

蚊の鳴くような声で群造が言うと、何とかかとか、ウエルボーイ、と言ってその捕虜は、これも赤毛に被われた胸をはずませて、群造の顔を覗き込むようにニヤッと笑うのであった。

群造にはその頃から既に神経症の徴候が現われていた。それに神経衰弱が重なって、いつとはなしに一つのことを気になり、思考がはっきりせずに物事を積極的に行う意欲が湧

かなかった。そしてその不明瞭な思考の果てに、夢とも希望ともつかない将来のことなどを想っているのであった。

当時、日本は東南アジアから南方諸島を手中に納め、躍進日本の名の下に、南方派遣軍属だとかの募集が行われていた。

ジャワのマンゴ売り、バタビヤの夜は更けて、等々、南方の風物とロマンを取り入れた歌謡曲も数多く、その気分そのまま憧れて夢想するのであった。

夕刻、一日の勤勞を了えて倉庫の陰に腰を降ろして千原群造は茫漠とそのようなことを考えていた。あと定刻まで小一時間ばかりの刻を隠れているのに、此処は殆ど人が来ることもなく具合が良かった。海からの風が時になだれる如くに吹いてきた。群造は木箱の上に転がった。

うとうとと、したかしなないか、人の気配がして膝の上の方に掌が置かれた。

「ナントカ、カントカ、ボーイ」

その掌の主は、やや高い声調を圧えるようにして言った。群造は驚いて、飛び上るようにして起上った。

俄に人が現れ、それが米軍の捕虜である。しかも、膝の上に置かれた手は、何と次第に

上にあがってきて、太腿をぐいぐいと圧えるのであった。そればかりではない、起き上ろうとする群造を、その大きな逞しい腕で押し倒して、赤毛も表わな隆々たる胸元を、群造のこれも半裸の肌に寄せるようにして、ニヤニヤと笑っているのであった。

「プッシュ、プッシュ」

後で考えてみて、それがその際の意味のある英語であることを知った。

危害を加えるわけではないらしいが、群造の頭は錯乱し、必死に逃れんとした。プッシュ、プッシュの頃から、こともあろうにバンドが緩められ、彼の手は腹から次第にズボンに忍び込みつつあったのだ。

この捕虜は先日トロッコを押してくれた男だ。外人の顔は皆、似たり寄ったりでよく判からないが、慥かにその青く沈んだ眼付きに記憶があった。年輩も、寧ろ中年、と云った眼の色に思えるのであった。

兎に角、人に見付かったら、殊に教官などに見付ければ大変なことである。敵国の捕虜に、押えつけられるなど、恥辱もいいところだ。しかも漸くにして自分の褻われている意味が判りはじめたのである。

幸い、人は滅多に來ない倉庫裏の、しかも



がらくたが置いてある奥の凹んだ処なので、転がってしまえば、仮令、人が通っても見えないことは見えないのであるが、群造の不安は去らなかった。だが、その力強い右手は躊躇なく進攻してくる。

群造は必死に抵抗したが、そんなことにはおかまいなしに今度は大きな唇が近づいて、声を挙げている、群造の口を封じたのであった。バターくさい匂いと、ヌラヌラとした奇態な唇の感覚。群造は暴れようとしたが、彼の力では、はね返せないことが、自分でも判かった。

うろたえた自分の気持ちの中で、群造は過去の二三の記憶の断片が、閃く如く頭に浮かび上った。

「おい、お前のほった、まるで女みたいやのお」

「お前の唇、中から桜んぼがのぞいとるようやぜ」

その様に言っ、にやにや笑い乍ら近付いて来る上級生が幾人か居た。

「おい、お前、MASUかけたことあるか、あるやろう」

「いいや、知らん」

群造が恥かしそうに首を横に振ると、

「うそつけ、そんなことあらへんやろう。毎日やりよるんとちがうか。未だやったら教えてやろうか……」

などと云われたこともあった。

事実、うかつにも群造は中学の三年になってもMASUの何たるかを知らなかった。同級生などの意味ありげに使うこの言葉は知っていたが、それは唯、自身を弄ぶことの意味である位に思っていたのである。弄んでどうなるか、と云った結末を未だ知らなかったのである。

今、群造はアメリカ兵の危害とは思えぬ暴力に敗けそうになり、これは大変いけないことであると強く思った。それは憎しみではなく、単にいけないことであると思ひ、懸命に身を捻るのであった。しかしその時、突然どういうわけか、どうでもいいような、甘ったれた感じが走り、現実とは異った世界が展けた如く奇態な感覚に襲われたのであった。

ふと自分をとり戻した時、アメリカ兵は群造の手を握り、自分のズボンに導き入れんとしていた。群造は、はっ、と吾れに返り、油断していたらしいアメリカ兵をつきとばし、後をも見ずに、その場を逃げ去ったのであった。

この事件？ は、日が経つにつれて群造に奇妙な懐しみを覚えさせたのであった。かのアメリカ兵のにやにやとした笑い顔が頭を離れず、なぜ、あの時、彼が望むようにしてやらなかったのだろうか、と悔悟の気持ちさえ湧き上ってくるのであった。それから、作業中の工場内でそのアメリカ兵をひそかに探したのであるが、作業場が違うのか見当らなかった。

ある晩、あの時の、アメリカ兵に押えられている場面を想像しながら、いつものように彼のことを懐かしんでいた群造は突然、「あっ」と声を挙げてとび起きた。

あの時の感覚が、実感として蘇ってきたからであった。

「あ、あ」

思わず甘い声が口から洩れた。

彼は全てを理解した。日頃、友達らが云っている全ゆる言葉の意味を……。

云ってみれば遅い目覚めであったが、奇しくもそれがアメリカ兵によってなされたことに特殊な感情がついて廻った。当時、日本軍によって鬼畜と教えられたところのアメリカ兵に……。群造は無理にでも怒るべきだと思つた。しかし群造はどうしても捕虜が憎めな



い。

そればかりでなく、何かと云えば人の欠点を探しまわったり、やたらに威圧したりする日本の軍人、そして、それに追従をする人達に、逆に、親しみが持てない感情が昂まってきたのだ。

これではいけない、いけないと思い乍ら、ちぐはぐな気持ちは次第に逃避的になり、戦争などのない静かな山寺のような処で暮したい。例え貧しくても苦しくても、軍隊のない処で暮したいと思う気持ちで一杯になったのであった。いずれ自分もあの限りなく恐ろしい軍隊生活に入らねばならず、アメリカ軍と闘わねばならぬことに関し、真剣に考えなければいけないことが沢山あるように思えるのであった。

そして辛うじて、南方各地の唄だとか記事を読むことに、日本に対する憧れの片鱗を持ち保っていると云うべきであった。

## 一、若き日の制裁

昭和十八年は重苦しい空気の中に暮れた。

それはガダルカナルの転進後、敗色濃い戦況を何とかカムフラージュする軍部の態度そのものでもあったが、また日常生活にもじわじ

わと窮屈さを加えた統制生活であった。

それが昭和十九年になると、ぼつぼつその膿が明らかに始まった。従来は軍役報仕の名の下に一週間、十日、と期限を切って行なわれていた軍需工場への報仕も、遂にサイパン島陥落と前後して、労務動員令によって学業を中絶して正式に各工場に配置されることとなった。

学徒らはどちらかと云えば喜ぶ者が多かった。学校に通っていても軍事教練だとか、農家の手伝い、軍役報仕などが次から次へと重なり、いつ上級生だとか教官のビンタが飛んで来るか判らない生活よりも、一層のこと、工場で働くだけに専念出来る方がすっぱりとしていたからである。

その頃、群造らの担任の教師が替わった。

小柄ではあったがズングリとして陰険な眼付きの四十年輩の男で、曾って下士官であったと云うことである。それだけでなく当時軍隊式のビンタの流行<sup>はや</sup>った時代で、数学の教師も、英語の教師も、皆、軍隊教官に習ってビンタの味を覚えただくらいであるから、元、陸軍の下士官と聞いてクラス一同は、聊か敬意を表していたのである。

一度、机を故意に破壊したとのことで、ク

ラスの中の一人が皆の眼前で、この金木と云う教師に殴られた。

教師は、小さな体を振り廻すようにして、  
「ガボツ、ガボツ」

と、その折は拳で殴ったのであったが、一同は、今までにこれほど気合の入った鉄拳を見たことがなく、益々敬意を表したが、その拳を見舞われた被害者は二、三日、口の中が傷ついて腫れ上り、飯も碌々喰えなかったと云うことである。

「俺のビンタが炸裂すると顔が割れるぞ。ほべたの肉が飛んでしまうぞお」

自らそのように云う言葉も、満更、嘘ばかりとは思われないのである。その肉の飛んでしまいうような有難いやつを、群造はあることから頂戴することとなったのである。

群造らの働くこととなった工場は、幸いにも重工業ではなく、二流程度の製薬会社であった。しかしその製薬会社特製の胃腸薬は、かなり軍隊の必需品として有名で、支那、満州あたりまで広まっていた。その原料を粉碎して調合したり、薬の小粒を造る人手が不足していた。

それは以前に働いたことのある浜辺の造船所のような赫々とした暑さではなく、謂わば



潜水艦の中のような、息のつまるような蒸し暑さの機械室であった。屋根の低い薄暗い中を、ごうごうと人声も聴けない程の音を立てて製丸機が幾台も廻っている。群造は機械の間を廻って原料の調合したものを入れたり、出てきた小粒のある程度たまった取り板を乾燥室に運んだりする。

乾燥室は三階に在った。風通しよく造られてあり、女工たちのちよつとしたサボリ場所となっていた。だだっ広い中に幾筋もの木の枠が置かれ、そこに取り板を挿し込んで乾燥するわけであるが、隅の方に踞んでおれば人目に付かない。すぐそこを城東線（今の環状線）が、がちゃんがちゃんと、いかにも暑そうな音を立てて懸命に走っている。

群造は蒸し風呂の暑さから暫く解放されて隅の方の板の間に腰を降ろした。東大阪の生駒の山まで見透しの涼しさである。そして更に午さがりの睡い時間である。ついうとうととしてしまい、そしてはっと眼を醒した時、群造はふと一つ向こうの乾燥棚の陰に人の気配を感じた。初めから居たのか、それとも群造がうとうととしている間にサボりに来たのか、透すようにして棚の隙間から覗くと一人の女工さんが、汗のため耐えられなくなった

のか、もんぺいをずらせて太腿もあらわに、パンツ一枚の姿で跼んでいるのであった。

三階であるので下から人目にはつかないのだが、やはり遠慮してか、恰度おしっこをするような恰好で、半ばこちらに向いているのであった。

群造は思わず出そうになった声を押えた。そしてその女工が、学徒らの間で横綱のおねえちゃん、と呼ばれるちよつとした人気者であることを知ったのであった。

横綱のおねえちゃんは、色白のぼっちゃりとした綺麗な肌をしていて、学徒らには極めて親切であった。年齢の差があるので却って話がし易く、学徒らも彼女に親切にされるのを誇りとしていた。横綱のおねえに何々もろうた、程度ならまだ可愛いらしいが、ボタンを付けてもらった、二人で工場のどこどこで会って、エッヘヘ……など自慢顔にいいふらす者も居た。

群造に対しても、通りすがりに覗き込むようにしてニッコリと笑うのであるが、自分の気持に反して群造は、いつも思わずぶいと横を向いてしまうのである。

その横綱が、それこそ大きなお餅のような

お臀から太腿をむき出しているのを見て、群造の胸は異常に躍り、こわいものでも見た思いで這うようにしてその場を逃れんとした。しかし、横綱がその気配に気付いて、乾燥棚を迂回して来る方が早かった。

「ちよつと坊や、あんた何を見てたのお」

詰問する調子であったが眼は笑っていた。

そしてもんぺいの紐を結びながらその柔らかない軀で押すようにして群造が元に居た位置まで来て、

「少し涼みましようよ、そしてお話しましう」

と甘ったれた声で言ったのである。

群造は顔を赤らめて震えた。横綱も薄い作業衣を着ているだけであるから、体ごとで押されると、直接に肌に触れるような気持ちである。

二人は並んで再び腰を降ろした。

「ねえ、あんた可愛い顔してるねえ、いつも黙って何を考えてるの」

「……」

横綱は群造の頬を指先でつついた。男女の学生同志が単なる話をしていただけでも、こっぴどく制裁を受けるその時代である。群造は好奇心と緊張のため、思わず全身が硬直す



るのを覚えるのであった。

その群造の手を握り、横綱は自分の胸元の辺りに導いて行った。

「坊や、女は初めてね。初めてと云っても、この意味わかるかしら？」

横綱は独り愉しそうに云って、

「女のこのところ触ったことある？　ねえ」と群造の手を、ぷりんと上に向かって張っている乳房に触れさすのであった。

群造は、全く女に触れるのは初めてであった。それもこともあろうに乳房などに触れるなどとは予想さえもしなかった。拒否するような、それでいて触りたいような手の動きを横綱は喉の奥で笑っていたが、俄にこともあろうに群造に対して、戦時にあるまじき行為に及び出したのである。

「あっ……」

「逃げなくていいんよ、皆も一緒のこととして

——『花決定版』送料についての訂正——

団鬼六作「花と蛇」決定版は発売以来送料五十円でお送り致しておりましたが今後「二百円」に訂正しなければならなくなりました。御申込みの節には、定価千円に送料二百円をお添え下さいますように、よろしくお願い致します。

るんだから」

横綱の動きは急に激しく、息を荒くして群造に迫るのであった。

その時、前方の乾燥棚の陰から、いとも冷酷な眼差しが現れた。金木教師であった。教師は黙って蛇のような眼付きで暫く二人を見詰めていた。二人は姿勢を直して立上ったが教師は、とてもそのまま其処を立ち去ることを許さない眼付きであった。

「ついて来い」

二人はしおしおと、教師の部屋に引かれていった。教師は工場の二階に一室を貰って優遇されていた。

教師はさっと窓のカーテンを引いた。それは恰も次に起こる残酷な制裁を予告する如くであった。

教師は連絡用の電話器をとり、小さな声で何か言っていたが、やがて、外国の漫画に出て来る妖婆の如きおばさんが入って来た。監督の印の、袖に緑の線の入った白衣を着ていたが、暑いので腕を捲り上げていた。

教師と女工監督、群造と横綱、の二人同志は暫く沈黙のまま相對した。

「あんた、また年下の学生にちょっかい出したのね」

ヒステリックな監督のキンキン声が飛ぶと同時に、

「ペタッ」

とその手が飛んで、横綱の餅のような頬が鳴った。横綱は可憐にも項を震わせて俯向いている。

「貴様あ、動員学徒の分際で、年上の女なんかと、あんなところで何をしとった。……ええ、云うてみい」

金木教師の口調は、途中より妙に優しくなった。群造にはその優しさが逆になんとも云えず怖ろしかった。

「ええ、云うてみ……どうやねん。オイッ、云えるようにしたるかあ」

教師の声は俄に大きくなった。自らの声で興奮したようなその陰險な顔が近づいたと思うと同時に、

「バシッ」

群造の横面に、自分でも小気味の好いようなピンタが飛んだ。今まで皆から、女のようにだ、可愛らしい、と云われた頬が、無慙にも破れるような音がして、群造は二、三步よろめいた。

「いや、この娘が悪いんですよ。いつものことなんですから」



「いや、いや、決戦下の学徒がこのようなことでは……」

云い乍ら、バシッ、バシッ、と往復ビンタが炸裂し、群造は、お、お、お、と泣声のような声を洩らし、涙がこみ上げて来るのをどうしようもなかった。

「なんだ、これしきのことと泣いてるのか、これからだ。首の骨の折れそうなやつを、一発行こうか。ほったの肉のつぶれそうなやつをこうか……」

「せんせ、この娘にも一ぱつやって頂戴よ。わたしのなんか、こたえへんわ」

監督が云った。

「しかし、女を叩くわけには……」

「構わないですよ、せんせ。こんな娘、云ったってききませんからね。顔をやるのが、まづかったら、お臂でもびしびし叩いてやって頂戴よ」

「うむ」

教師は一瞬、複雑な顔色になった。ちらつとその目が、ゆったりとした横綱の臀部に走った。それは充分に魅力がある、と云った目の色であった。が、教師は断を下すように云った。

「よし、対抗ビンタだ。お互いに自分の罪を

清算するのには、それがよい。向かい合って反省ビンタだ」

教師は、群造と横綱を向かい合わせ、「お互いに交代で顔を叩き合うのだ。力が入ってなかったらおれが代りに叩いてやる、頭は駄目だ。お互いに頬の柔らかさそうな所を平手で力一ぱい叩け。よしはじめ。千原、お前からはじめろ」

「ペタッ」

俯向き加減にだぶついている横綱の頬が鳴り、トロリ、として柔らかい感覚が群造の掌に残った。

「さあっ」

監督に急かされて横綱の手が、既に先程のビンタでかっかっか熱くなっている群造の頬を撫でた。

「そんなことでは駄目だ。なんぼ女でも、もうちいっと力を出しな。やりなおし」

「バシッ」

やっと音らしい音が出た。が、むっちりとした横綱の手の感覚は、先程のビンタで痺れたようになっていた群造の頬には、痛みとは別に一種の快感めいた悦びが走ったのであった。

群造は愛情を込めて横綱を叩いた。既に涙

のためにしっとり潤った頬の手触りは、群造を悩ましくさせた。そして、ちらりちらりとこちらを見る彼女の憎めしそうな眸と共に激しく打ってくるその痛みは、既に甘い甘い恍惚感に変わりつつあったのだ。

「よし。いつまでも撫ぜ合いたいやろけど、こんなこととして遊んでいても仕方ない、もう止めい。おい、千原、お前、裸になれ。パンツ一枚になれ云うてるのや」

命じられるままに群造はシャツを脱ぎ、ゆっくりとズボン脱ぎはじめた。

「早くせんか」

早くせい、と云われても、先程の横綱との叩き合いで早く出来ない理由が生じていたのであった。

群造は勇を鼓してズボンを降ろした。教師よりもむしろ横綱を意識して、ピーンと脳髓まで突き上る羞かしさが彼を襲った。

しかし、教師は恰もそれを予期していたものの如く、爪の先で力一ぱい、その異状なパンツを弾いた。

あ、あ、

余りの痛さに群造は又しても涙をぼろぼろと流すのであった。

金木教師は群造の裸を、先ず舐め廻すよう



にじろじろと眺めた。そして今度は胸の辺りに触れてみたり、臀の肉を摘んでみたり、していたが、

「女みたいな体つきじゃのお。もっと鍛えな  
いかな。この重大な決戦下の青年がこんなこ

とでどうするか」

そう云って後へ回ったかと思うと突然、とんでもない折檻をしかけたのであった。

あ、あつ、

背後のことでもあり、油断していたので、



MASAKO M.

読者ギャラリー 『即席運搬車』 宮城昌子

群造は教師の指を防げなかったのである。

「不動の姿勢とは、ケツの穴を引き締めることだあ」

群造は教師の指が汚れはしなかったろうかと気になった。

横では監督が黒板の鞭を取って、妖婆が猛り狂ったように、

「この娘わいな、この娘わいな」

と叫び乍ら、ピシッピシッと、壁に向かつて泣き伏している横綱の白く大きな臀を、情け容赦なく打っていた。

後でクラスの誰かが、教師は横綱が好きだから、お前が激しい制裁を受けたのだぞ、と知ったかぶりに云われたが、ふと二十数年過ぎた今日になって、群造は、横綱よりもむしろ自分が好きなのではなかったろうか、と思ったりする。その両方かも知れないとも思うこともある。

いずれにしても、米軍捕虜より受けた懐かしい暴行にしても、教師のとんでもない制裁にしても、決して後味の悪いものでなく、寧ろ甘い感傷として忘れられないのである。だから群造は盛夏が好きなのである。

(おわり)





## SMの花盛りに想う

久米田 暁

この頃は鴉の鳴かない日はあっても、週刊誌や月刊雑誌にSM記事の載らない日はないくらい、今やSM花盛りである。それに風俗雑誌を標榜してSM記事売り物にした雑誌も増えてきた。

嘗て奇譚クラブに連載したことのある『家畜人ヤプー』が単行本として発行されたときのマスコミの取り上げ方は、まさに狂気という外はなく、私達SMマニアにとっては、何を今更という感が深かったのであるが、それにしてもピンク映画は勿論のこと、テレビにまで放映されるに至っては、今昔の感にたえないものがある。

こんな風潮は喜ぶべきか悲しむべきかと云えば、SMファンとしては、やはり喜ぶべき現象だと思ふ。しかし、一面、秘かにマニア

だけが愉しんでいた聖域を土足で踏みにじられるような、複雑な気持ちがないでもない。

嘗て十何年か以前にもSMブームが到来したことがあって、奇譚クラブの他に、風俗クラブだとか風俗草紙だとか十数種のSM雑誌が簇出したことがあった。中には一冊出ただけで廃刊になった極端なものもあったが、殆ど一年足らずで消えてなくなってしまう。

ひどい物は二番煎じ三番煎じもいいところで、恰好だけは真似ても内容は空虚きわまりないお粗末さで、私のような根っからのSM好きでも嘔吐が出そうになったのだから、長続きしないのも無理からぬことだろう。

奇譚クラブのように終始一貫二十数年にわたって真面目に発行さ

れているということは、私達ファンにとっては驚異に値することである。近頃創刊されたSM雑誌も徒らにSMブームに便乗して一年や二年そこらで廃刊することなく、少なくとも十年、二十年と続けて貰いたいものだと思う。

近頃出た『週刊文春』の9月7日号を見たら、『花と蛇』は奇譚クラブにもう八年も連載していると書いてあったが、私の記憶に残っているものでも、十年近く奇譚クラブに連載されている小説や記事は二、三に止まらないと思う。

やっと最近になって、奇譚クラブの存在がマスコミに認められてきた証左であると思うが、これもSMブームにあやかっただけの現象であるかもしれない。いずれにしても奇クのエッセイとして同慶にたえないが、別の意味では、ファンとして、そっとしておいて欲しいという気持ちも強い。自分が二十年前に発見した鉱脈を、便乗者の手で、無茶苦茶に荒されてしまいはしないかという恐れがしないでもない。

願わくば、SM花盛りのブームの時でも、他が顧みなくなった低調の時でも、奇譚クラブだけはマイペースを守って、いついつまで

も続刊してほしいということだ。その意味で私は奇譚クラブがSMブームに乗って急膨張して欲しくはない。既に二、三創刊されたSM雑誌もあることだし、週刊誌や月刊誌も毎月のようにSM記事がないことには時代遅れのように血走った目つきで漁っているからそれらに任せておいて欲しい。

ここで第二、第三の黄金時代を築くことよりも、私は奇譚クラブの永続の方をより願いたい。ブームの後には必ず低調な時代が訪れるものであるが、その時こそ、奇譚クラブの本領を発揮して、より充実した内容の雑誌を発行して欲しいものである。

「石の上にも三年」という言葉があるが、何事でも続けてゆくということは非常な困難が伴うものである。ましてや雑誌の発行ということとは編集面に於いても経済面に於いても容易ならぬものがあることと思う。ましてや『SMV』という特殊な分野に狙いをつけているだけに、並々ならぬ覚悟と努力が必要だったことだろうと思う。

好漢、奇譚クラブよ。徒らにSMブームに奢ることなく、一層の精進と自戒に依って吾々ファンの絶大な期待に応えて呉れ。



## △夫婦プレイ報告▽

## カラーで妻を写す

東京ET生

9月号の奇クサロン欄に載せて頂いた拙文『夫婦生活に於けるSM願望と期待』を目にしたときの昂奮は、今でも忘れられません。

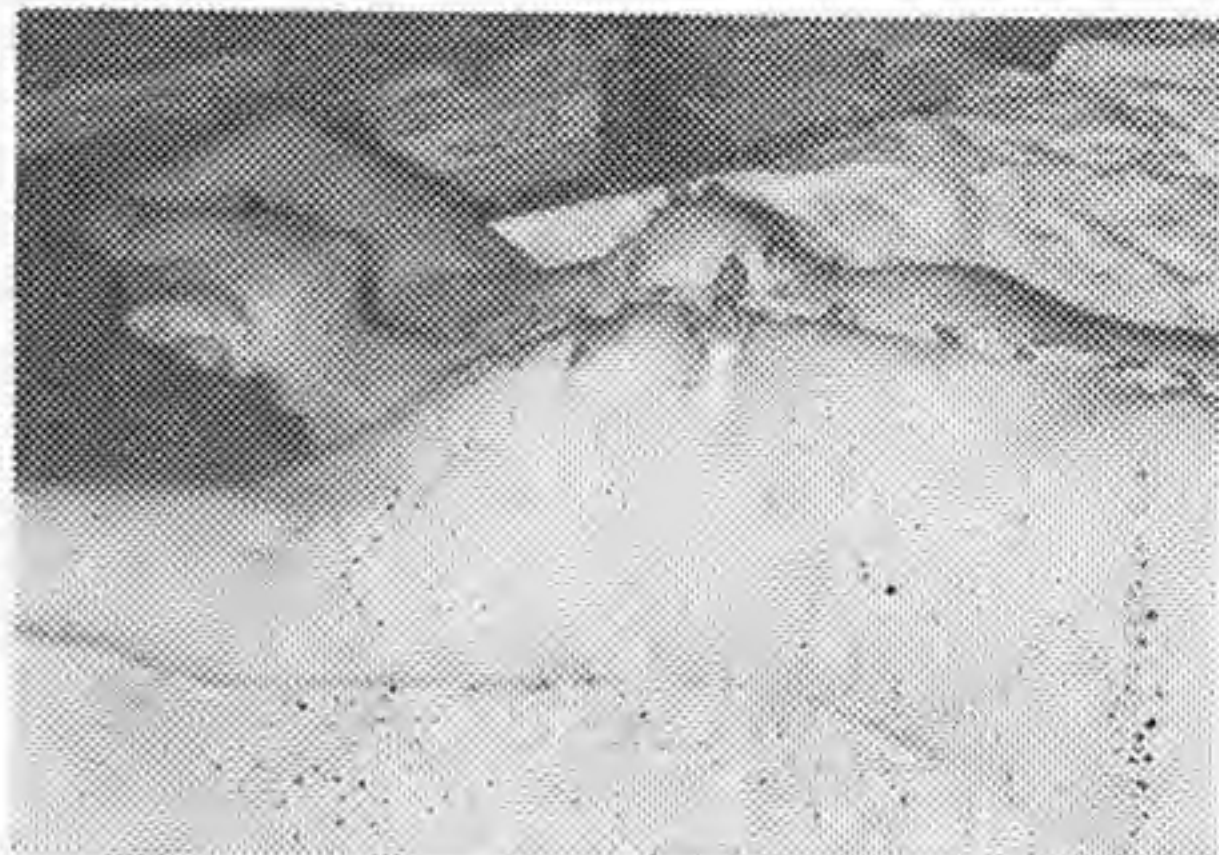
其の夜、妻に見せた処、流石に自分の緊縛フォトを初めて誌上で見たせいか、上気した面持で何度も読み返して居ました。

久し振りに新鮮な刺激を覚え、早速ポラロイドカメラで妻の緊縛姿態を撮影しましたのが同封の二枚の写真です。それにつけても自分の撮影技術の拙劣さには、われ



乍らとはとあきれます。

近頃はプレイを兼ねて、誰方かにプレイフォトの撮影をして頂けないかと思う事があります。夫婦二人だけでは撮影の変化を求めても限りがあります。8ミリカメラでの複数プレイの撮影等も望ましく思っております。同好の方とお互いに信頼しあった交際が出来れば、こんなに楽しい事はないだろうと、そんな方の出現を待ち望んで居ります。が、いかがなものでしょう。



## 女房よユルセ

## 銀座 狐 広島一騎

子供の夏休みとかけてオヤジの浮気心と解く。ここでは、チョンガーになれる……「あまりウマクねえかな」と思わず呟いて、しなだれかかっている軟体の夜美女に聞きとがめられた。「なんのことなの?」といいながら、ビールの泡を唇に押しつけてくる。

「いや、女房に逃げられてる間にキミのような美女をクドキしたいと思ってるんだが……」

「どうしてウマクないの?」

「キミが美人すぎるから……」

「うまいわねえ、でも嬉しいわ。」

クドイで頂戴、サア、クドイで」

「じゃあクドこう」

「ハイいらっしやい、そら早く」

まるで強要である。やはりプロはプロだけのことはあるワイ、と

感心。なかなか手強いとみた。

「あたしねえ、すっごいお部屋で寝てみたいわ」

「すっごいお部屋はいいが、寝るだけならつまらないんだよ」

「アラ、寝る違いよ。もちろん、男と女が一緒だもん……」

「だけなら駄目なんだ」

「ほかにほだれも居ないのよ」

「あつたりまえのハナシさ」

「じゃあ、どういう……?」

「キミね、SMって聞いたことあるだろ。SMプレイって……」

「アッ、そうなの」

夜美女は、じつと顔を見直して

きた。心当たりはあるらしい。

「わかったかい。そうなんだ」

「そうは見えないけどねえ」

「そんな客も知ってるだろう?」

「そりゃあるけど……、じゃあ、あんたどっちなの? SかMか」

「アブノーマル中のノーマルだ」

「じゃあ、Sね」

この彼女、なかなか話せる。しかも、抱きつく腕に力をこめてきたのだ。ワクワクする。

「十一時半に、角のおすし屋さんで待っててよ。いい?」

その「いい?」につられてチツ

プをハズミ、柔らかい頬と唇に

い気になっていたのだが……。

すし屋がカンバンを告げる時刻

になっても待ち人遂に現われず。

砂を噛む想いとはあのことか。頭

の中で、本性を現わした狐が大口

開けて笑ってやがる。あの夜は、

しみじみ女房を恋しく思った。



我が主観の美学 (五) ロマン派生

5 プレイについて

プレイも結局は、女のマゾヒスティックな美しさを生み出すためのものなので、女の表情、声、及びその肢体がその目的に最もふさわしい反応を示してくれないと困るのである。女が示す反応はセクシャルなエクスタシーの一種ではあるが、ノーマルなそれとは多少は異なり、もう少し屈折し抑圧されたかげりのあるエクスタシーである。したがってプレイが前戯として利用されるのも悪くはないが、SMが深化するとその度合につれてノーマルな性行為とはへだたりが大きくなり、プレイそのものがエクスタシーを呼び起こすこともあり得よう。

しかしSMがあまり深化してしまふと、次第に個人的特性が強くなりすぎて、マニア間の共感性がなくなってしまう場合もある。又、本格的なSMは血をみたり反社会的になる怖れがあるようだ。多くの人はそこまではついて行けないのが当然である。

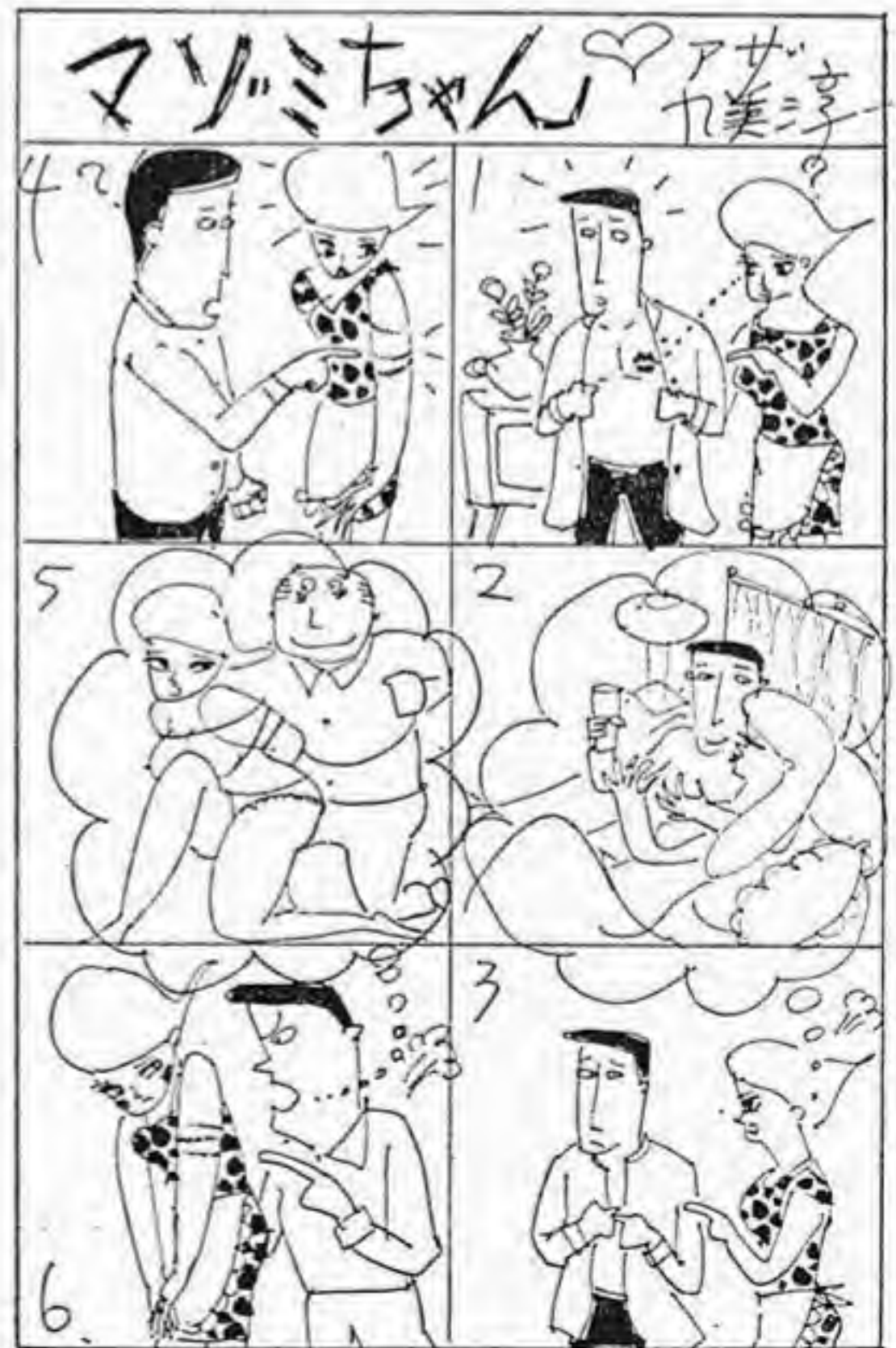
私のSMの深度も、しょせんは

ロマン派程度と自覚しているのでプレイの主流は自然と羞恥責めということになる。6 ムードなど

縛りの美学には、背景とかシチュエーション等も含めたムードが大切であると思う。私としてはどんな良い素材を使い、道具やプレイを工夫しても、ムードが盛り上がらなければ仏作って魂入れずということになるのだ。

その意味から、マゾ女と責め手との間には、ある程度の相互信頼感と共に幾分かの不安感があるのが望ましく思う。その点、夫婦プレイは信頼感ばかりで不安感を伴わない点がやや不満で、マンネリズムとともにムードの盛り上がり

を阻害する怖れがあるようだ。SとMの双方に多少の芝居気がある方が楽しいのはいうまでもない。あまりにも余裕がないギリギリの感情では苦しくなる。お互いにそれがあくまでもプレイであるという非現実性というか、仮空性というか、そういったものを感じつつ演劇的誇張がある方がよ



いだろう。そういう意味で時代劇のシチュエーションが好まれるわけであろう。

はりつけ、火焙り、木馬責め、そろばん責め等は時代劇の中でこそ最も美しさを発揮する。しかし昔の本当のはりつけがそんなに美しかったとは思えない。やはりこ

しらえものの美なのだと思う。いわば芝居の美なのである。そういう意味で、映画の中の責められ役の女優は、何十万という人に自分の美しさを見せるチャンスを与えられた幸運な女といわねばならな

い。しかも大勢の前でのたうち、もだえる姿をさらして見せることができる、いわば、マゾ女のエリートとも云える。こう云ったプロフェッショナルには計算された演技があるが、アマチュアのマゾ女の中には先天的に自然な演技の出来る才能のある人も居るようだ。

SMのシチュエーションの中で女を責めるレスボスのムードも楽しい。これは一つにはSMが必ずしも正常な性行為には結びつかないものだから、そこから離れてSMを純化させることと、もう一方



## 女体緊縛

と

## 羞恥責

名古屋S生

初めてお便りします。

私は25才の男性で奇クを最初に見たのは2年程以前ですが、それ以来、時々購入して拝見しております。

特に辻村氏や塚本氏の

カメラルポを拝見するのが最大の楽しみです。店頭で奇クを手にとつてパラパラと頁を繰ってみて十数葉の写真があるのを見た時は思わず胸がドキドキします。ただ素晴らしい写真が白い帯でカットされていたりするのは、止むを得ない事ではありますが残念で仕方ありません。

それと紙質のために、せっかくの写真が不鮮明なのも気になります。これも奇クの主旨から止むを得ないのでしょうか。いずれにしましても両氏のこれからの作品に大いに期待します。

私はどちらかと言いますと、鞭打ちなどより羞恥責が好きです。

名古屋S生



特に股間縛りとか猿轡にひかれます。全裸の女性を後ろ手に縛り上げ、彼女の着けていた下着を口の中に押しこんで、その上から手拭か縄で厳重に猿轡をかませ、様々な羞恥責を加える……など考え出しますと時のたつのも忘れます。

最近、写真の焼付をやりだしましたので、一度は素晴らしい女性とプレイして、カメラに収めたいと思っておりますが、とても叶えられそうにありません。しかし、はかない望みながら、どなたか理解ある女性の出現を願っているものです。同封の絵はヒマな時に書きためたものですが、編集部諸兄の御高評をいただければ幸いです。

では可愛いマゾ女を、自分以外の男が責めるのは許せないが、女が責めるのならば許せるといった独占欲とも絡み合っているらしい。どうしてレスビアンSMショーが上演されないのか不思議である。屋外のプレーも関心はあるが、実際にはなかなかやりにくいし、若し出来たとしても、あまりに美しく雄大な自然のもとでは、健康

## 渡部好美夫人を想う

国

川 東

渡部好美夫人が目を見はる程の美人で、どう見ても好美様の言うところの(六月号「短信往来」)

三十四才の身体ではなく、二十五才か二十六才程度の身体の線でした。特に白いパンティ着用のまま縛られて上向きに横たわった身体つきは、私好みで咽喉が鳴り、弱りました。

私ごとの体験談で恐縮ですが、妻以外の若い女性の白いパンティをまだ温味の抜けない間に嗅ぎ舐め吸った経験があります。その女性が少ないお腹の長い、お臍まで縦長の女性で、良い意味での胸長だったため、細目の身体つきのお腹の長い女性を見ると、あのふくいくとした甘酸っぱい匂いと味が想

的な美しさに圧倒され、SM特有の屈折した暗いエロチシズムは出にくいように思う。時代劇ならいざ知らず現代のシチュエーションとしてはSMに不向きではなからうか。現代ではどうしてもホテルの豪華な一室とか、地下室、廃工場、古寺などがSMのムードにマッチするように思えてならないのである。(終)

いだされて矢も楯もたまらない癖がついてしまっている私には罪なフォトでした。

胸長の女性は下腹部が鮮烈に強調されフェチマニアにはこたえられませんが、夫婦交換は大願なれど週刊誌が騒ぐほど容易ならざることを承知なので、そこまで無理をしなくとも、お互いの妻をパンティ一枚で立位開脚させ、相互に相手の妻女の足下に跪いて、香ぐわしいパンティの香気を嗅ぎあいたいと思います。

私をして、以上の如き空想をさせる程、好美夫人の緊縛フォトは悦虐味に溢れ、SMの被虐の祭壇にも代える女身そのものでありました。





— 第七十七回 —

辻 村 隆

このところ、夫婦プレイの花盛りである。渡部光雄、好美夫妻について、先日、三浦敬一、純子夫妻のハントをものし、近々、渡部好美と川路叢子のWプレイの一泊旅行も実現しそうである。一昔前なら相当の決断力がないと実現不可能だったことが、近頃ではごく軽い気持で行なえるようになったのも、現代のアウト・セックス時代を反映しているようである。とはいふものの、前月号に書いた様に、去る者は日々に疎しの譬えで万国博を機会に、夫婦同好者一堂に会し、華やかなページェントを繰り広げる予定が、想念ばかり先走って、いざとなると仲々そううまくはゆかないものである。かつて、生首や刑罰フォトの特異なジ

ヤンルで、昭和四十一年頃一時期をエポックした新宮明夫、洋子夫妻が、八月下旬、三泊四日で予定通り来訪された。内心、大いに期待し、胸を弾ませていたのは私だけ、新宮夫妻は一向にSMプレイには関心を示さない。外出好きでどちらかというと華美を好み、社交的な夫人は、万国博で上阪したのを機会に、いろいろと見聞をひろめ、盛り場を歩き、デパート廻りをし、あわよくば夜の繁華の巷を逍遙して、踊りの一つもした様子であった。

って歩き、男二人は装身具店の表で手持無沙汰にボンヤリと佇んで待っていた。

十一時半、やっと家に辿りついたが、汽車の長旅と、夜の京都の散策ですっかり疲れが出たのか、夫人はぐったりとして元気がなく、新宮氏にカメラをかけてみたが、さあというばかりで、さっぱり煮え切らない。明日もあることと、その夜は諦めておとなしく寝たが、翌日は万国博巡り。五十万近い入場者の中で、揉まれに揉まれて、私までクタクタになり、帰りつく

と、ぐったりしてその気も起こらず、洋子夫人はタタミに意地も張りもなくゴロ寝してしまふ始末。

最後の夜があると期待していたら朝からデパート廻りに出掛け、夜の九時頃迄、帰ってこず、戻るとサッサと風呂に入って、お先にと

いって、離れに引き籠ってしまつた。三泊四日、いろいろと心を砕いたのが、全部空廻りしてしまつて、徒らに気を使い、無駄な時間を使っただけの結果に終わってしまった。帰りかけ、新宮氏は流石に気の毒な表情になったが、プレイのことに關しては、一言も触れなかった。何のことはない、万博の為の宿泊に利用されたに過ぎな

かった。すっかりプレイの熱もさめ、もう二年以上も奇クを読んでいない彼は、所詮、縁なき衆生に過ぎなかつたのである。カメラ・ハント回顧のアテが見事に外れ、してやられた感に、立去ったあと空虚な苦笑が浮かぶのを禁じ得なかつた。それに、岐阜の水野弘夫妻も、万博の殺人的混雑に辟易してとうとう諦めたのか、上阪しないという便りがあつた。今はカッカとしている夫婦プレイの同好者も、何年か先には、新宮氏のようになるのではなからうかと思うと独り、相も交わらずウツツを抜かしている私自身がピエロに思えてくるのである。

十月号のサロン欄で、今井博氏が私のカメラ・ハントに対し、種々適切な苦言を呈しておられるが、その仰有ることは、すべて私自身が常に逢着している問題である。

真にM性の女性との、苛責なきプレイに終始出来る場合と、モデル女性として希望してこられ、M性は包含しながらも、謝礼を或る程度、期待している場合と、報酬が目的で、渋々私のカメラに納まっている場合とがある。





イメージ画『かたつむり』小川茂正

今井氏のいうように、お座なりの緊縛フォトは後者の場合で、谷山久美子、関谷富佐子のような女性には前者に属している。左近麻里子、佐々木真弓などはその中間に位しているが、唯、今井氏始め、カメラ・ハントを読んで下さる方に御諒承いただきたいのは、何しろ昭和三十九年十一月号以来、現在に到るまで、私の体調の悪い時以外は、殆どが毎号かかさず異なった女性、或いは同一女性の再ハントを誌上に掲載するのは、正直

行苦行なのである。それだけにハントの中にも玉石混淆も亦、己むを得ない場合がしばしばあることは、私自身が一番よく知っていることである。一篇を書き上げるのにやっとの思いでもする様な、気の乗らぬ時もあるかと思えば、幾らでも書き続けたいような女性の場合もある。しかしそれは、その女性のM性の有無には関係がないのであって、いかにM性が強く凡ゆる責め、強烈なプレイにたえ得る女性でも、も一つ好きになれぬ人もおれば、さしたるM性がなくても、すぐく好感の持てる女性などには、元来がフェミニストの

私、もうそれ以上、数々の嗜虐行為が出来なくて、楽しい雰囲気にはのりとりひたってしまう時も、しばしばである。

一口にSMのプレイといっても人、ひとによってそれぞれの個性があつて、好みも違い、その嗜虐被虐の度合いも又異なるのは当然である。Aの人にはアピールしてもBの人には興味がなかったり、Cの人は喜んでDの人は好まぬかも知れない。リアル感を出す為に、露出フォトに斜線を入れても或る人はそれを歓迎し、或る人は醜く、それまでにする必要がないから、もっと美しく且、覆って撮れと仰有る。多数の読者の、一人一人の希望を全部みたまは、同一趣味の、同一嗜好の人の集まりでもない限り、所詮は無理である。今井氏に限らず、読者諸賢の御意見はホドホドに聞いておかないと、カメラ・ハントは遂には迷いに迷った挙句、中止せざるを得ないのでなかろうか。

× × ×

読者の不満の一つとして、モデル希望女性や、夫婦プレイの同好者を、何故、辻村隆ばかりに紹介するのか――。我々にも、その恩恵を与えよというのが圧倒的に多

いらしい。

過去、編集部でも、そうした方の熱意に負けて、遂に連絡の労をとったこともあるし、私も亦、同好者の執拗な懇望に根負けして、カメラ・ハント女性を紹介したことがある。しかし、その大半は失望が還ってくる。自己本位の方が多く、一旦、女性を掌中に納めると、もうウンともスンともいってこないばかりか、女性の性向を楯にとつて、不幸に陥れ、果てはタライ廻しにしたり、まるで自分の情婦か、黒い慾望をみたす目的のみに走り勝ちである。マゾヒスティック・アニマルの谷山久美子さんも、半分は彼女の責任にもよるが現在進行中の、長田実との仲がどうも気掛かりで、プレイを逸脱して、正真の女奴隷にしようというような動きが見え、当の長田実が私を谷山久美子を紹介して以来、パタッと音沙汰が絶えている。プレイはプレイとして割切らないと家庭を破壊し、一途に爛れた悦虐の生活に走った場合、そのゴールはカラストロフが待ち構えているに違いないのだが、熱病のような二人には、今更諫言したとて、聞く耳も持たないだろう。己れの心と行動によくよく責任をもってプ



レイのルールを履行してほしいものである。紹介後にそれがカタストロフに終わった場合、喜んで貰える筈が恨まれるとなると、いつかいったように、それなら最初から恨まれるタネを蒔かない方がマシである。ウカツに紹介出来ないぞという気持は、この頃一層強くなりつつある。

昭和四十四年五月号に掲載したハント、ハレンチ・イン・トーキョウ「乱倫の生態」の滑川幾代さんから電話をいただき、是非会って欲しいというので、会合場所も咄嗟には浮かばぬ、千日前のアシベ劇場前で待合わせをする。独りと思っただけ、豈はからんや、彼も一緒に、これも又御多聞に洩れず、万国博上阪の際の、夜のひとときのつれづれに、私を思い出しての出会いであった。関西は精しくないというので、道頓堀

## 縄の長さ

早 木 夢 二

九月号の読者通信を読んで、奇クを手にするたびに、今月はどんな縛りがあるかしら、なかでも菱縄はあるだろうか？と、いつもながら胸をワクワクさせる。

九月号のカメラ・ハントでは、オースドックスな菱縄縛りのフォトがあって、七月号の「菱紋様」のフォトといい、何かしらついて

界限を歩き、法善寺境内の料理屋で一杯飲み交わしたあと、谷町附近のアベックホテル街へ三人で出掛ける。夜のことでとて恰好がつかずもう一人連れの女性がくるからと誤魔化して一間に入る。くつろぐ間も惜しげに、二人は激しいプレイに耽溺し始めたのであった。幾代さんの失神は十数度に及び、感受性の強さは抜群で、一寸したおサワリがもうエクスタシーを呼んで、顔面蒼白となって失神し、ホテルを出る十一時半頃までに、延べ十数回に亘る失神は、川上宗薫氏に見せたい図柄である。

取急いで来たので、うっかりストロボを忘れ、縄は数条準備してきたものの、この暗さではとるすべもなく、私もプレイの一員として、彼と入れ代り、立ち代り、ひたすらに幾代さんの恍惚と陶酔の失神を助長する役目を果たすだけであった。ホテルの名を冠した××



『正邪いずれの刃?』神戸・狂四郎

チャンネルと呼ばれるテレビのチャンネルには、ピンク映画が溜息と共に流れ、Wベッドの中心は、ボタンを押すと、加減よく上下に振動して、注文すれば、パイプや肥後ずいきもすぐに売ってくれるという、至れり尽せりのムードである。

暗い部屋で、シャッタースピードを落として数枚撮ったものの、激しく悦虐にうごめく幾代さんの痴態は、ものの見事にぶれて、全部、予想通りピンボケである。彼は船乗りをやめて、横浜の海運業に勤め、幾代さんと同棲して

いるが、彼女の激しさに少々辟易しているらしい口吻であった。プレイの度毎に、少なくとも数回多い時は二十数回も失神されては男も堪まるまい。彼女の淫慾が強いのか、そうした女に飼育した男が悪いのか、私には判断もしかねるが、彼の目前で私にかじりつき近いうちに独りで出てくるから、思いきり虐めてネと、喘ぎ喘ぎ囁くのを聞いても、彼は平然としてたっぷり可愛がってやって下さいというばかりである。やはり「乱倫の生態」は、今も生きているらしい。



いるような喜びを感じた。

読者通信で、或る方が菱縄のかけ方、縄の長さはどれぐらいがよいか等、訊かれていたのを読んでいつもいい気持ちで菱縄のことを、あれこれと書きなぐっている私なのに、さて縄の長さはどれぐらいあるだろうか、ついぞ考えてもみなかったウカツさに、我ながら驚いたことだった。

早速、この頃、使っているやつを計ってみたら五米ちよつとあった。一本では上半身の菱縄、後手縛りをする一杯で、股間をやつと回すことができる程度である。

私は、ひとりで楽しむときは、

縄は一本だけ使って、後手縛りは出来ないから、その分を股間に使っているが、慶子とのプレイの時は、どちらが縛られるにしても、二本たっぷり使って、上半身と下半身、前と後にそれぞれ菱形を作つて、股間にも十分、回すことにしている。

縄の長さを計って改めて気づいたのだが、こうしてみると、五米あるいは十米もの長さの縄を、一ぱいに纏っている訳になる。

私は随分長い間、緊縛プレイをしているが、今までかつて一度もフォトをとったことがない。とき

にはカメラを持ち出して、菱縄股間縛りの慶子の全裸を覗いてみることはあるが、あくまで座興であつて、本当に撮ろうという気持はないのである。一枚ぐらい記念にあつても良さそうだし、時々私たちの、そうしたフォトを奇巧に送って、誌上に掲載してもらいたいと思わないでもないが、ここまですで二人で、ひっそりと営みつづけてきたものを、たった一枚のフォトで他人さまの目の前にさらすことが、何か折角いくしんできたものを、一ぺんにぶちこわしてしまふような気がして、どうにももう一步、踏み切れない気持ちでいるのだ。

フォトがなければ、お前たちのプレイは何の証拠もないではないかと言われれば、その通りであるが、もともと見せるために始めたプレイでもないし、私たち二人がしっかりと確かめ合っているさうな機会は無いだろうと思うし、私たちが死んでしまえば、それで雲散霧消する運命にあるのだから、なお一層、今の今を、縄に托した生の喜びを味わい続けて行きたいと念ずる気持ちを強く深めるだけである。

## 夢は夜ひらく

丸出駄目夫

奇巧読者の皆様、今日は。奇巧を通して色々な事が勉強になります。そして多くの方々と夢の中でお逢い出来る楽しさ。最近では朝の眼ざめが悪くなってしまうたようです。いつも夢の中に出てくる先輩方を「圭子の夢は夜ひらく」で詩ってみました。

△1▽

赤いシルクの長襦袢

白く輝やく太腿も

どのように責めても楽しいの

夢は夜ひらく (山本五郎様)

△2▽

十五、十六、十七分

私のお腹の限界よ

早く行かせて、おトイレに

夢は夜ひらく (広田玲子様)

△3▽

先月佐々木で今むら子

来月好美か弥栄さんか

ハントははかなく過ぎてゆく

夢は夜ひらく (辻村隆様)

△4▽

SとMとの黒い花

プレイとコイタス別ですと

手練手管で友を呼ぶ

夢は夜ひらく (伊藤圭子様)

△5▽

前を見られる恥かしさ

うしろ向いても同じこと

ムチを打ってよ、この肌に

夢は夜ひらく (関谷富佐子様)

△6▽

一から十まで惚れました

男に未練はあるけれど

忘れられない責めばかり

夢は夜ひらく (由利美千子様)



『仄か美』堀 真彦



## 愛妻をモデルに……

渡

部 光 雄



ます。夫婦プレイのそれは、セックスへの序曲だと申せましょう。

私達もまた同じで、プレイの中で妻が燃え上がった時、セックスに移ります。それがたえプレイを始めて少ししか、時が経っていなくても。男と女の本能が最高に昂まった時、全てを忘れて一つになる。これが夫婦プレイの楽しみだと私は思っております。

無理矢理妻をねじ伏せ、縄を打

阪東太郎さん。七月号の「奇クサロン」で貴方の投稿を拝見しました。私は四月号に「私はどうしてこんな女に」を告白しました渡部好美の夫です。

貴方の文面を拝見して少々びっくりしました。十年もの愛読者でありながら、あのフォトが始めていや、奥さんを縛られたのが始めてとのこと。よく今日までお一人で我慢されたと思います。

私の経験から憶測させて戴けるなら、貴殿ご夫婦はセックスがきつと満足にいつているのだと思



つといったプレイは余り好みません。私の場合、結婚前よりかなり悪質な糖尿病があり、少しでも油断しますと、情けない話ですが直立不能になってしまいます。それで、ついつい強烈な刺激を求めて妻を縛り、いろいろに責めるようになりました。

初めの頃は、妻も余り積極的ではありませんでしたが、プレイを重ねるうち、いつしか責められる苦しみの中にセックスの喜びを知った時、自ら縛られることを望み責めを求める女に変わりました。

阪東さんも、今、奥様に関心がないからと無理に縛り上げたりせずに、ゆっくり時間をかけ、あせらず飼育してゆかれれば、きっと

## 編集部だより

○十月号は、はからずも夫婦プレイ特集の様な恰好になってしまいました。本誌ならではの企画として反響も至極好評でした。既に誌上に登場された方は勿論のこと、新しい同好者の夫婦の方の投稿を大いに期待しています。

○先月号で本誌の旧号を求めたいという広告を出しましたところ早速予想外の通信を頂き有難うございました。その他、感想、批評、アイデア等についても親しく編集部宛お寄せ下さり、大いに感謝しつつ参考にさせて頂いています。努めてお返事を出すように心がけ且つ薄謝を呈上させて頂くようにしたいと考えております。

○通信や原稿には事情の許すかぎり住所氏名をお書き下されれば幸いです。誌上に掲載しました分の住所に照会などがありません故その点御安心下さい。勿論匿名でお寄せ下さるのも歓迎いたします。

○嘗て本誌に連載しました「家畜人ヤプー」が単行本となって人気化し、現在連載中の「花と蛇」も



奥様の心の奥に潜むM的素質が貴方の愛情によって長い夢から、ゆさぶり起こされることでしよう。

それに、女はいろいろ責めているうち、この責めは好きとか、これは絶対にいやとか申します。好美もずいぶん飼育しましたが、ムチ責めだけは、どうしても受け付けません。ですが、針で肛門の周りや乳房を刺すことを好みます。

貴方もいろいろと試みられて、奥様の一番お喜びになる責めから一つ一つレパートリーを広げてゆ

## カメハン萬歳

### アダムスキ

僕の好きなもの。それは心の底から綺麗だなアと感じさせられるものです。若さのせいかもしれないが、しつぽりといったような情緒的な含みの多いようなものよりも、スカッとさわやかなといった、明るい美しさに、とって魅せられます。

そういった意味あいから辻村氏のハSMカメラ・ハントVに心からひかれます。

それは隠微ではなくて底抜けに明るく、見ていて本当に楽しいな美しいなと感じさせる陽気さから

かれてはと思います。

私達夫婦も好美にモデル志望をさせて以来、愛する妻が私の目の前で他人の手で縛られ、さまざまに恥かしめを受け付けパイプの洗礼まで受けています。今、私達夫婦は生まれて始めての経験に胸をふくらませていきます。

いずれ誌上に好美の恥かしい姿が登場することと思いますが、その節はよろしく御批判下さい。

発していると思います。愛読者の中には近頃のSMカメラ・ハントはすべてに於いてマンネリなどという意見も聞かれますが、僕に云わせれば、それは全くナンセンスだと云わざるをえない。

僕から見れば、辻村氏のハントは常に活気に満ちており、その文章は絶えず軽快なリズムで、ファンタジックスな世界に我々を導いてくれます。

文章ばかりか写真も、ありきたりの写真の域を脱して生きているのではないか。ピチピチと動いてい



るではないか。

こうした素晴らしい現実を前にしている今、我々は謙虚な気持ちで、SMの美に没入するのが、ファンとしての第一歩ではないかと、考えています。

伊藤圭子ちゃん、秋山夫人、幼い若奥様奈加子さん、ミキちゃんマキちゃん等、すべてが明るくて美しいSMの姿ではありませんか。辻村氏の一方的なものではなく、すべてが自然一体となっていて僕には好きだ。

辻村先生、今後ますます頑張ってください。

我等の偉大なる指導者、辻村隆先生萬歳！ ムム、デキル。

週刊誌なんかで取上げられて喧伝されています。奇譚クラブに連載されたものなら読者受けするだろうと見直されつつあるのは、喜ぶべきことか悲しむべきことか、果してどちらでしょうか。

○好評のカメラ・ハントでは辻村隆氏は暑さにもめげず益々快調に進撃しておられますし、カメラルポの塚本鉄三氏も意欲を新たに頑張る気配を見せています。只、山本一章氏はスタミナ不足と材料切れでカメラもペンも動かないようです。腕に自信をお持ちの方は、遠慮なく名乗りを挙げて下さい。

○編集部では読者の皆様と共に新人の登場を心から期待しています。放しております。これはと思うものは大胆に取り上げてゆきます。

「家畜人ヤプー」が最初投稿された時沼正三氏が「こんな文章は万が一にも掲載されるとは思いませんが……」と言ってこられたのを勇敢に発表していったのです。

○本誌は取次店の努力によって毎号微増を続けておりますが、この種風俗雑誌の潜在的固定読者層はそう厚くないと思いますので暴走を避けて地道な安全運転を堅持してゆきたいと思っております。



## フンドシの効用

間 和 志 締 男

下帯は六尺ともいい、二米近い細幅の晒し布にすぎないが、昔から、水泳の時に締めこんでいると溺れた時に引き上げやすいとか、長くたらしておけば蟻に襲われなとかいわれています。

それらはともかくとしても、人間の下腹は全身の保温に敏感な作用を及ぼすもので、これは、股火鉢や、すそ風が効果的なことをみても間違いのないことでしょう。従って、熱伝導率が空気の二十四倍も大きい水中に入る場合、下腹を幾重にもおおうフンドシは、まことに理に適っているといえましょう。マニアたる私としては、と

くに締め上げれば暖く、ゆるめればたちまち風通しのよくなるこのフンドシほど、便利な下着はないと思っています。

更に健康保持にも大きな力があると考えられます。最近車に乗る人に胃腸病が増えているそうですが、下帯(フンドシ)は下腹を前下から後上方に、だきかかえるように締め上げる関係上、胃腸の下垂を防ぐ役目を果し得ると思いますし、下腹を締め上げると全身の力が増し、握力、跳力に非常に影響して、力仕事やスポーツには最適のようです。昔の武士が、常に重い刀を差して歩いたのも、この下帯のおかげではなかったかとも思います。



現在市販されている越中フンドシについて、『松平越中守が儉約のために六尺を半分にしたものとか、細



『あと一押』 妙花山人

川越中守が武具をつける際にフンドシの結び目がじゃまになるので考案したとか、大阪の越中という遊女が客の入浴のために作ったとかいわれているが、これは六尺に有利点ほどの効果はない」と、某大学教授が新聞に書いておられました。

……と、ここまで書いて思い出しスクラップ・ファイルを、ひっぱり出してみると、「あった」ありました。以上のことは、四十四年八月十六日付の中日新聞に、名古屋大学の六鹿鶴雄氏が書かれたものだったのです。

当時、たしかに共感を覚えたものでしたが、私がフンドシマニアとして感じていたことを先生が喝

破されたのか、先生の書かれたものを読んでいた私が自分の感覚としてこうして書いてしまったのか我ながら判然としません。しかしどうも、切り抜きを読み返してみると、先生の書かれたものをいつの間にか自分のものに錯覚していたように思わざるを得ません。つまり全文、うけうりといっているのです。

たった一年の間に読んだもの自分の感じとったものとの区別が怪しくなるのはマッタクどうかしているのですが、それほど先生の名文？ にわが意を得た思いだったのだからと、独り苦笑してフンドシを撫でてしまいました。先生よ、お許し下さい。



## 女斗ファンの弁

雄松比良彦

視覚化のチャンス、ゼロ?の女相撲、女斗美マニアとしては、昨今のロープ・ブームはまことにうらやましいことですが、陽の目をみることの少ない私共のジャンルは作画が唯一の具体的表現方法といえます。



かつての奇クには、劇画?が載っていました。この絵物語の主人公が、輝を締めた、可愛い少女(百合子)の冒険であったことが懐しくも嬉しかったのですが、女斗美ファンは特に視覚化されたものを大へん珍重すると思います。

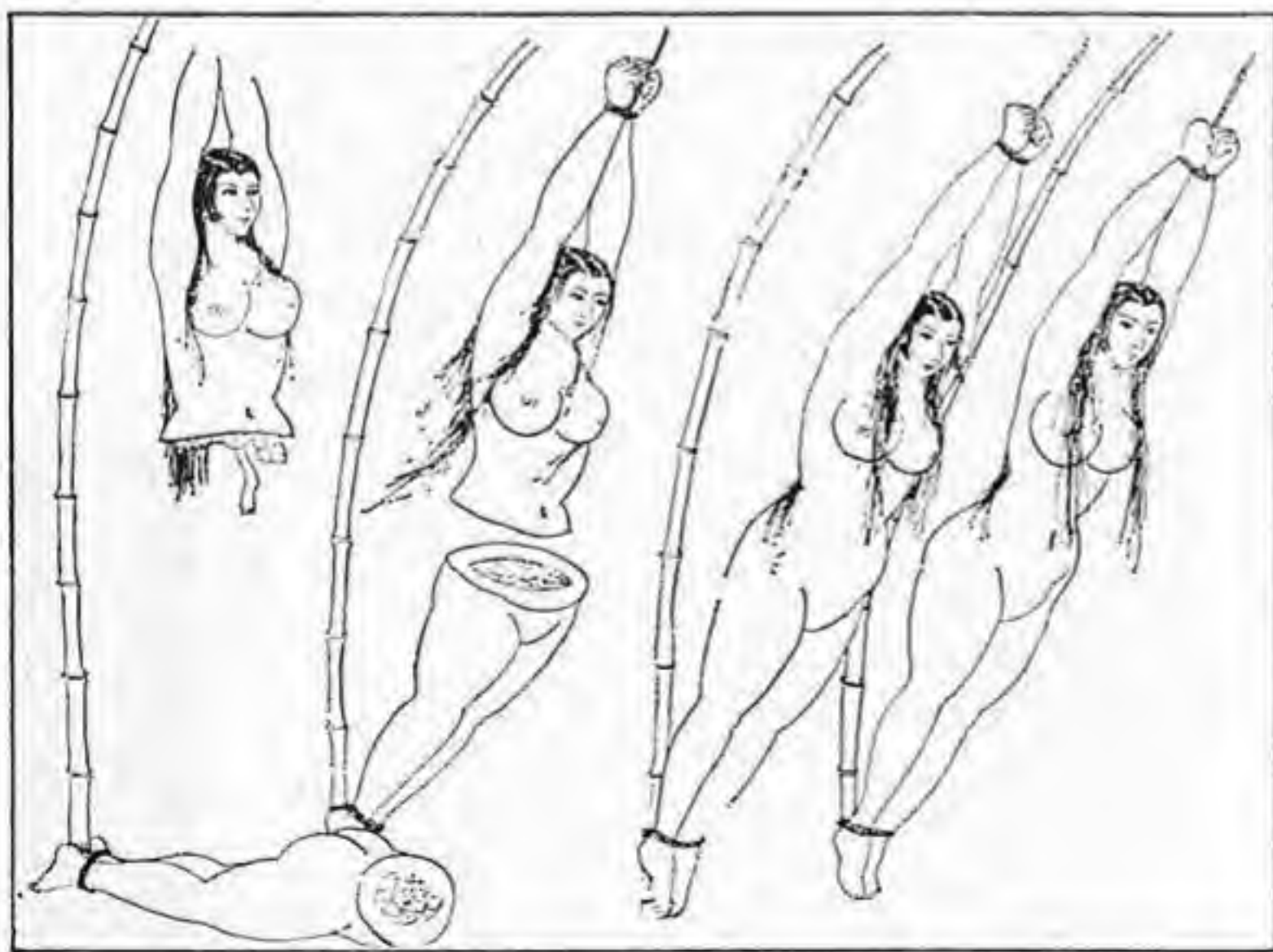
絵心のない私などが、女斗美画を描こうと思いたったのも、まったくそのセイなのです。今少し、絵が上達したら描き溜めたのを自費出版してやろうか、どこかの雑誌に載せてくれるかな等と患ったりしています。書店の本棚に女斗物が見当たらないのが癪のタネですから。

## 公園に拾う

青井松造

公園にベンチがある、当り前。ベンチに人が腰掛けて憩っている。その目的だから当り前。アベックが並んで腰掛け、肩を寄せている。

ほほえましい……までは当り前。男の手の置かれた場所が変った。女のミニスカートトの生地のないところへ……。でも恋人同志なら、まずは当り前……か? 女の手が、男の手に重なった。女の体がよじれて男の膝に倒れかけた。男女の手が少し争った。女の腿がピクッと少し持ち上る。



撫ぜられたか抓られたか? 若い二人だもの当り前? 女が男の手を押しのけようとした。男が押し返す。女の肩がくねって払い落そうとする。男がいきなりその女の手を背中に捻じ上げる。女はおとなしくなった。痛いから当り前? 去りもせず見詰める私も、公園だから当り前。

美少女無惨画秘帖 『竹藪の怪』 桐原紫門



## 夫婦交換プレイの提唱

文と絵……松井

寛(鳥取)

夫婦の絆がすっかりしていたならば、それ(夫婦交換プレイ)によつて夫婦の愛情は益々濃やかになり、夫婦別れた人々がいないという辻村氏の言葉(第七十四回サロンの楽我記)も私にはうなずける。私の知っている交換プレイ体験者で今尚同プレイ継続中の夫婦から同じような内容の意見を聞いているところから、私もその主旨は十分に理解できる。

「夫の浮気というより、それを妻にも認め夫婦相和して堂々と相互理解のもとに……云々……」

男たるもの、結婚式のその日より他の女性に関心を持つといった程の者、結婚生活も五年、十年と経た頃には浮気の虫も頭をもたげてくる。これが俗に云われる倦怠期である。それでも夫は何とか、これを持ち切らねばと新たな刺激を求めてSMに走る。

夫の夢は次から次へと拡がるのに反して妻の方は容易に理解を示してくれない。妻の低調にやりきれなくなつて浮気する。

結果は家庭争議。こんな見苦しい結末となる前に、妻は「私は貴

方だけでよいのです」という言葉を考え直してみても如何だろう。

いかに男女同権の時代だからと云つて、妻だけの、夫だけの権利でなく、夫婦としての考え方も大切であると思う。男性と女性を同

一視出来ないのが夫婦であろう。只これだけは云える。いつまでも新鮮で素晴らしい夫婦でありたいと願うならば、二人がガッチリ、スクラムを組んで良い結果が出ているものには取組んでゆきたい。そこには素晴らしい世界が展開される筈だ。再び辻村氏の言葉を続けてみたい。



「私が過去に同好者として出合った夫婦プレイの方々にはSMに理解のある夫婦のWプレイを望んでおられ、その実現は過去十指で足りぬくらい知っている。そこにはいろいろの条件もあるが、夫婦間のSMプレイのゆきつく処相互理解のもとに交換プレイを望む風潮は急速に蔓延していること

## 短信往来

辻村隆様へ

仏山逸富より

最近のハント記事に時々辻村さんの病気のことが書かれていますが大変淋しく思います。文も書けず、SMプレイも出来ない名もない奇クファン、カメラハントファンが多数いることを思つて、健康には気をつけて下さい。8月号の『サロンの楽我記』に書かれたように、奇クだけの辻村氏として、楽しいカメラハントをいつまでも続けて下さるよう、お願いいたします。モデルも渡部好美さんはじめ、多数あるそうですが、今後共私達ファンを失望させないよう、大いに頑張ってください。

東京ET様へ

横浜・鈴木容より

小生は東京へ勤務する二十九才の独身の会社員です。九月号の貴方の素晴らしいプランを見てペンをとりました。

貴方のそれは、小生の時々夢想する内容だからです。先日も見つけた『新アニマル』の映画の貴婦



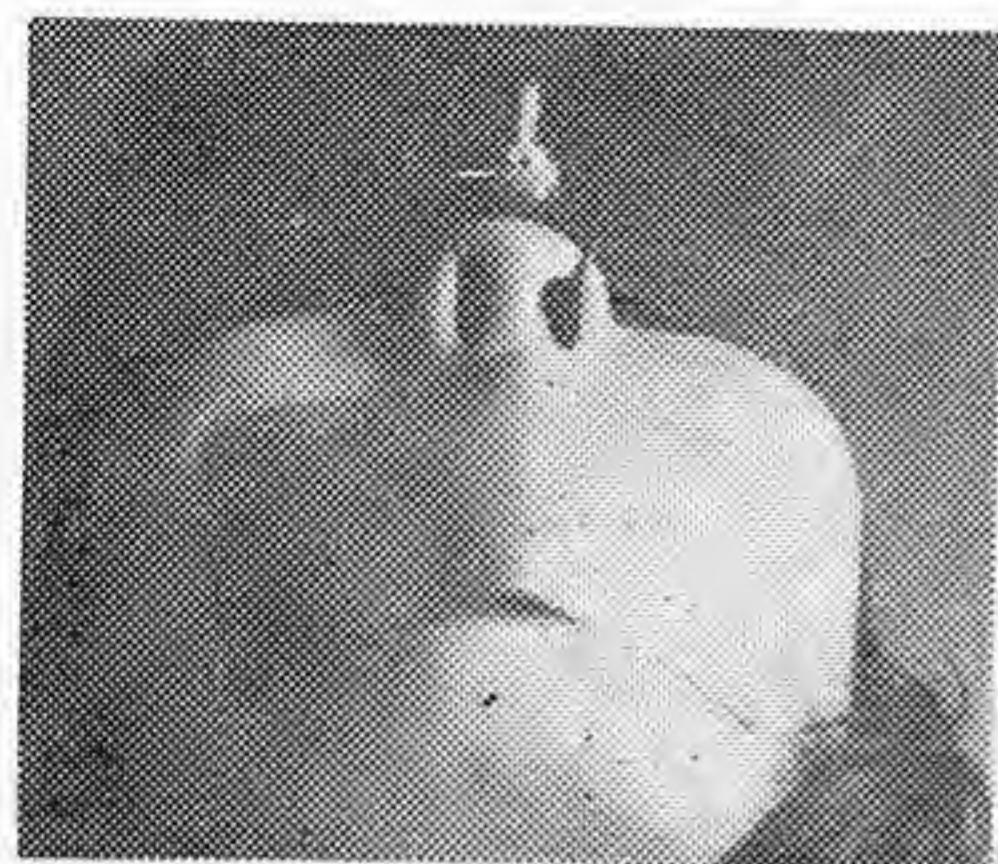
は事実である……(後略)」

そして、これ等のプレイを通じて夫婦生活に新鮮さを取り戻せるとするならば、実現への道を歩みたいものである。山口県萩市の田尻さんの投稿に依りて九月号で同様の意見をお持ちの大牟田市野村忠さ

## 鼻責め、願望、東京 Y Y

小生、今年の五月号に「心理的羞恥責め」屋外プレイで皆様のお仲間入りさせていただきました東京 Y Y です。

その後、私もせっせとプレイに精を出していますが、最近どうもプレイのプロセスがマンネリ化し



んの投稿、そして田尻さんの呼びかけに依りてではないが、大阪府池田市の武田勝子さんの投稿文。

以上三組の御夫婦と他に投稿されていない同好の愛読者の方達に私の拙い絵だがプレゼントする。

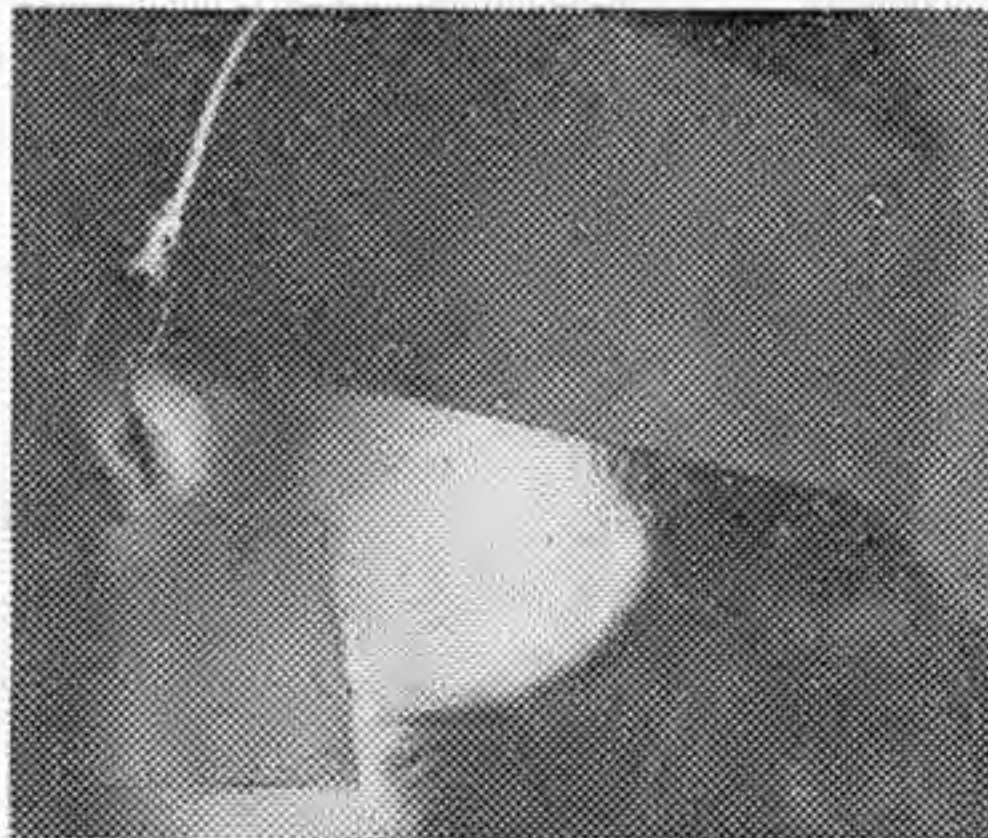
同好者だからといって、全部が

まして……はつきり申しますと、行きづまってしまったのです。

小生、前より鼻責めに、とても興味をもっていたのですが、このさい、このマンネリを打ちやぶるためにも、思いきった手を打ちたいのです。とか何とか言いながらこれもそのことを実行するためのこじつけた理由に過ぎないかも知れません。

そのこととは、女房の鼻に穴をあけたいのです。私もずい分、いろいろ考えたのですが、あまり良い考えも浮かびませんので、古くは増田みゆきさん、また、最近では「被虐鼻」の大橋美代子さん等々その道のベテランもおられますので、ぜひこのさい、私にその方法をお知らせ願いたいのです。女房も、ぜひ鼻のしように穴をあけたいと申します。一番早い方法と

全部安心出来る方達ばかりとはいえないだろう。時にはトラブルも聞く。結局奇クとしても、この辺の考慮からか回送の便をしていない。誠に残念だが、より素晴らしい奇クとするためにも、読者の質の改善に努力したいものである。



しては、街の整形美容院で手術をするのが良いでしょうが、はたしてそのようなことをしてくれるかどうか、また女房も一人で行くのは、はづかしいと申します。女房は現在二十三才、ファッション・モデルの経験もあり、小生が申しますのもおかしいのですがスタイルも申し分ありません。

人のように、ホットに貴方の美しい奥様を責めてみたいのです。それから貴方自身も……。

申し遅れましたが、私の責めの好みは貴方と同じように、ソフトに、心理的感覚的に羞恥を感じるものを望むものです。従って強度のぶったたきを好む S ではありません。貴方と二人でプランを立てプレイをしてみたく思います。

以前、奇ク of モデルにも応募しようとしたこともありますが、何かの手ちがいで行きませんでした。

そんな訳なのでもし良い方法などお教えいただけたら女房の最近のフォトなどお送りしたいと思えます。このページご覧になられた現に鼻のしように穴をあけられている方、同志が一人ふえるとお考えになって、ぜひ方法など教えて下さい。

皮の超ミニスカートの黒のナイロン・ストッキングにハイヒールまたは皮のロングブーツで、鼻の穴にピカピカ光るリングを通し、上からガーゼのマスクをかけ、新宿の街や電車の中を歩いてみたいものと、いつも女房と話し合っているのです。



# あるマジメなたわごと……須 渾 朔

## 心理的 S M 世界

ろくに本の精読もせず、不勉強な私がこういうことを書こうと思うのだから、とっても生意気で、とっても面白い……!

「ゲバ」だなんていう言葉が、もう日常茶飯事的になっちまったみたいだが、この語の聞き始めはそう昔のことじゃない。世の推移の何と迅速めまぐるしきことよ。

だけど、「残酷趣味流行」だなんて、やたらと言われ始めてからは随分経っているみたい。当然、夥しい「S M」または「S M 的」作品が登場した。型通り、縛って縛って縛りまくってオシマイ……なんていう作品群や、産業スパイに S M 趣味をからませた量産的人気作品の群れ。

私は、正面きって『S M であるぞよ』だなんていってない作品のほうに、はるかに S M 味をたんのう出来る人間といえる(まっとうな奇クファンでございといえるかどうかは、どうだってかまやしめえよ)のだが、例えば乱歩の『孤島の鬼』の——畸形児を製造させるために、秀才児を養子にして医学校に入れる——だなんていうグ

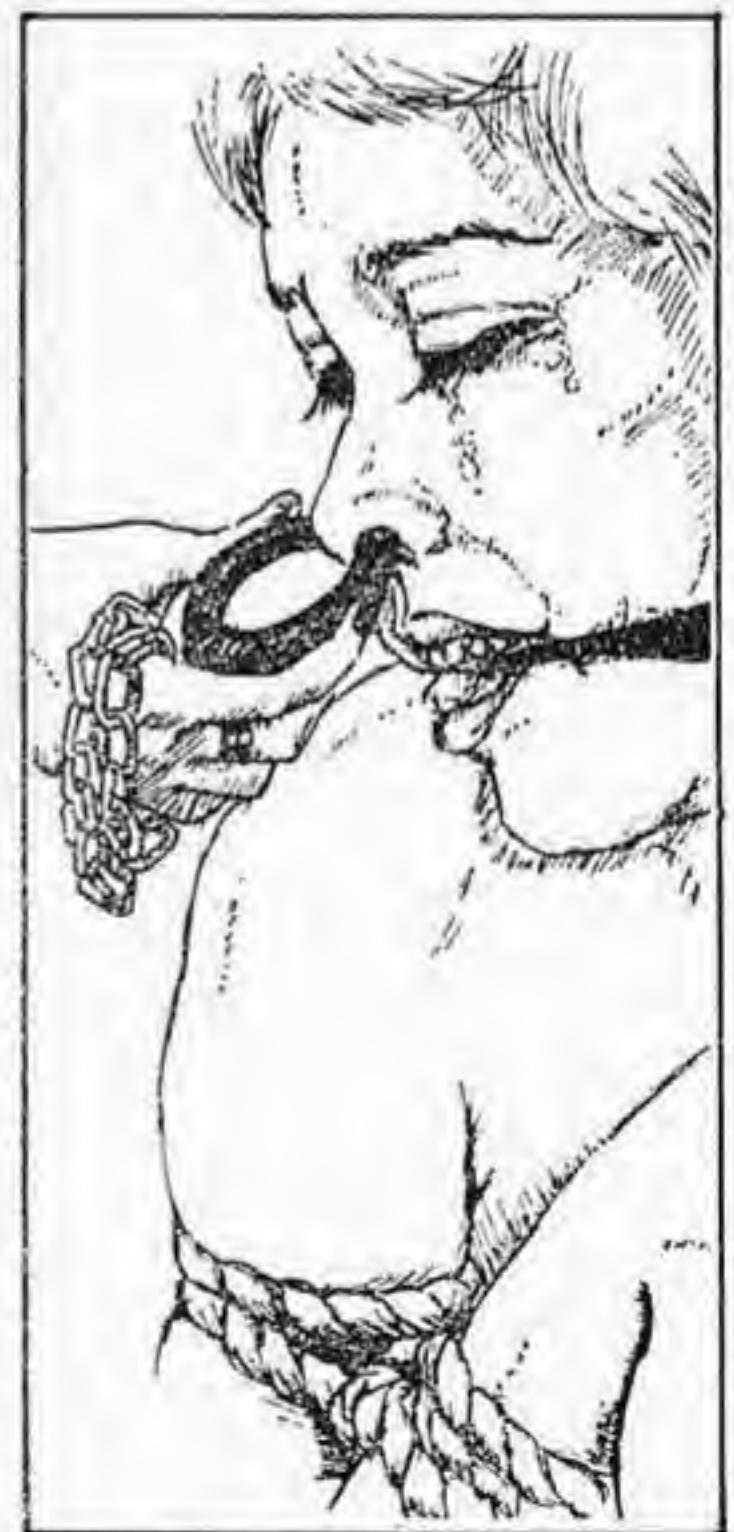
ロ故の一つの笑いや、谷崎の『本牧もの』の「逆転趣味」に強く惹かれる。

昨今「ブラック・ユーモア」とかいふ語が静かに流行中らしいと知った。そういえば、週刊誌にもチョコチョコ書いてあったのを見たり、「ブラック・ユーモア入門書」(どうして入門しなくっちゃあならんのか、よくわからんが)なんて本もあったが、私は、何のことなのか詳らかに知る由もないくせに、この語には何となく少なからぬ魅力を感じ得ない。

ブラック・パワー。黒ミサ。なんて当世風? の「黒」がくっついていてる上に、何かしら S M 的な何かを内蔵しているみたいに見える。てきて仕方がないからだと思う。

ハヤカワ・ミステリーのブラック・ユーモア特集というのを読んだみて、こりゃあ S M ファンにもいけるじゃんか? と思った。

……『サドの場合は、エロも残酷もあまりにも誇張されるので、現実感を失い、グロに転じ、それが笑いを呼ぶのである』……「ハイエナが笑う」——伊藤守男▽



『屈辱』 志羽利也

……『サドはその「ソドム百二十日」で、思いのままなる物質的關係に於いて配列された登場人物たちの、無記名化をおこなった。人間の個性は抹殺されて——』……矢野浩三郎▽

とか、『食人』『去勢』『スカトロジスト』なんて活字が、『サド侯しゃく』の名前と共にフンダンに出てくる。作品群も、海外篇はヘンに S M 的で魅力を覚え、ウレシクなっちゃった。

「なまはんかな S M 知識で、流行だからといってやたらに S M じみたものを混入しただけの小説なんぞはいい加減にしろといいたい」なんていわれるところの、エリート意識? 横溢の「高級ハイブラウなる趣味人」がオーソドックスな読者であろうと思われる我が奇

ク誌なのだから、単に物理的 S M 作品ばかりでなく、こうした心理的 S M の世界にメスを加えるような記事も、たまには出現してくれたらと願うもので、何年か以前に千草忠夫氏が、文壇高名作家の S M のケの有無を少しばかり類別なさったのが印象に残っているのだが、谷崎の悪魔派時代の S 的作品と同じように、イマジネーションの豊饒さから、いつの間にか S M 的世界に陶醉してしまうというような作品を求めるのは無理なことだろうか。

つけ加えると、こうした世界では、おそらくサド侯爵閣下におかれてもそうだろうと私見するが、ヘテロだろうと、ホモだろうと、獣姦であろうとその区別は大して重要ではないのでは? と思われるてならないのである。



## 私の採点

岡田康彦

## 『残酷色情絵図』武田有生

ある日本画家が、モデル女を責め上げて無残絵を書くおはなし。

タイトルバックに、シュミーズ

を腰まで下げられて両手を縛られ縄尻を引き廻されながら割竹でシバかれたり、裸で前手錠を掛けら



『どうしてやろうか』

宇都宮 広

れて鞭打たれたりする女が出てきた。

映画のシーンでは、鴨居に吊り上げられた女が、割竹で打たれたりこじ上げられたりする場面が仲々の迫力だった。刺青シーンが再々現れたが、やはり見せ場の一つなのだろう。(七〇点)

## 『白い乳房の戦慄』

団鬼六・小川鉄也の顔合せ。遂に夢のコンビ成る！と期待に胸震わせ駆け込んだが、見終ってガックリした映画。

縛りは最後のほうでチョッピリと申し訳みたいに辰巳典子が後ろ手で裸電球で責められるだけ。出演メンバーもピンク映画界最高と思われ、団先生の企画製作というのに、たんなるセックスものとは、ただけなさい。大プロデュース・団鬼六氏としては、興業的に冒險を避けられたのだから、と首をひねらされたものであった。(六〇点)

## 『甘いうずき』橘 明

ファーストシーンから、ネグリジェ姿の美也かはるが鎖で前手縛りで引き廻され、鞭で打たれながらネグリジェを引き裂かれるのに氣をよくしていると、続いてタイトルバックに鎖、鞭、犬の首環等が映って、ニヤニヤさせられたまではよかったが、あとに続くショックシーン無し。(七〇点)

## 『みな殺しの誤算』木俣堯喬

これもまた、巻頭で全裸女が開股縛りにされているシーンが出てきただけのガックリ映画で、他には注目場面、無し。(六〇点)

## 『肉体の歓喜』太田隆康

谷ナオミの主演もの。私は彼女を、辰巳典子、二条朱美と並んでピンク三大女優と思っているが、この映画での谷ナオミは最後のほうで縛られてくれた。

組織(ピンク映画では売春、麻薬と決まっているのが組織)から逃げ出そうとして捕えられ、パンティ一枚の後ろ手縛りにされた谷ナオミを、祝真理が責めつける。乳房をワシ掴みにされたり、耳や髪を引き廻されて、洋服ブラシでくすぐり責めにされて悶える、彼女は仲々魅力的。(七〇点)

## 『女の武器で勝負しろ』

向井寛の明治もので、女が土蔵に檻禁され、ヤクザに拷問されるのだが、全裸で大の字に立ち縛りにされ、鞭打ちや脇り責めにされるシーンがよかった。(六〇点)

## 『乳房解禁』小川欽也

二条朱美、美矢かはる、里見孝二等の小川映画おなじみの出演者だが、二条朱美がシュミーズ一枚で立て掛けた梯子に、後ろ手で縛りつけられ、シュミーズを引き裂かれて棒で乳房を責められるシーンが仲々よかった。この二条朱美という女優さんの責められ演技は不思議な魅力があり、私はいつもゾクゾクさせられる。(八〇点)

## 『女の異常変質』小川欽也

マゾ女(二条朱美)が催すSMパーティを中心とした映画で、責めシーンは二回出て来た。

しかし、若い男をマンションに連れこんだ二条朱美が、パンティ一枚になってその男に鞭打たせるシーンは、縛りがないのでものたりなかった。本命は秘密パーティの場面で、椅子のような台に全裸後ろ手で縛り上げられた若い女が周囲にローソクを立てられて蛇責めにされるのだが、時間的にも長く、見応えがあった。(七〇点)



「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)  
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)  
3 襲う影に慄く (佐々木真弓)  
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)  
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)  
6 縛られて困るわ (金原奈加子)  
7 私を襲わないで (左近麻里子)  
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)  
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)  
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)  
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)  
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)  
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)  
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)  
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)  
17 何故私を縛るの (金原奈加子)  
18 感泣する胸縛り (ローズ秋山)  
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)  
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)  
21 足指はく字に (佐々木真弓)  
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)  
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)  
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)  
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)  
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)  
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)  
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)  
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)  
30 出臍を晒す縛り (佐々木真弓)  
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)  
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)  
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)  
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)  
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)  
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)  
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)  
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)  
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)  
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)  
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)  
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)  
44 私は縛りが好き (金原奈加子)  
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)  
46 麗身を横たえて (左近麻里子)  
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)  
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)  
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)  
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)  
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)  
52 突き出した尻 (中河 恵子)  
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)  
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)  
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)  
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)  
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)  
58 脇られる緊縛女 (長井葉津子)  
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)  
60 もう虐めないで (金原奈加子)  
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)  
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)  
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)  
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)  
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)  
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)  
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)  
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)  
70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)  
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)  
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)  
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)  
74 捧げられる女体 (中河 恵子)  
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)  
76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)  
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)  
78 開股の股間縛り (大島 照代)  
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)  
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)  
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)  
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)  
83 肌に喰い込む縄 (長井葉津子)  
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)  
85 投げ出された裸 (金原奈加子)  
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)  
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)  
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)  
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)  
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)  
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)  
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)  
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)  
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)  
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)  
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)  
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)  
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)  
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)  
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)



# 「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組 百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-19)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号 天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴しい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
 龜甲股間縛り晒 (山原 清子)  
 悦虐に悲泣する (関谷富佐子)  
 全身縛りを吊る (大塚 啓子)  
 白肌輝く股間責 (山原 清子)  
 ゴム衣縛りの極 (木村 洋子)  
 弄ばれる全裸縛 (長井葉津子)  
 縄に苦しむ長身 (川越美佐子)  
 狂う女体の表情 (ローズ秋山)  
 八の字の開股縛 (左近麻里子)  
 後手は高く縛る (佐々木真弓)  
 鞭打条痕の臀部 (関谷富佐子)

37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12  
 妊婦仰臥猿轡責 (中河 恵子)  
 股間縛の縄掛け (ローズ秋山)  
 猿轡の開股縛り (木村 洋子)  
 片足吊りの狂態 (大塚 啓子)  
 脚吊りで責める (ローズ秋山)  
 脚吊りの熱演 (ローズ秋山)  
 均斉のとれた体 (佐々木真弓)  
 柔肌に喰込む縄 (長井葉津子)  
 緊縛のホステス (佐々木真弓)  
 洋子をいじめて (木村 洋子)  
 変型高手小手縛 (川越美佐子)  
 湯責めにあう女 (山原 清子)  
 鉄砲逆海老縛り (関谷富佐子)  
 ムチ責めの果て (安井喜久子)  
 真白の柔肌責め (左近麻里子)  
 遅ましき臀部晒 (ローズ秋山)  
 鞭は女体に炸裂 (ローズ秋山)  
 後手縛を見せる (川越美佐子)  
 龜甲縛りの正面 (左近麻里子)  
 前面を晒す裸像 (長井葉津子)  
 憂愁の佳人縛り (左近麻里子)  
 縛の全裸を見て (金原奈加子)  
 美貌の妊婦緊縛 (中河 恵子)  
 縛りの好きな顔 (一宮百合子)  
 妊婦の太鼓腹縛 (中河 恵子)  
 開股強烈羞恥責 (木村 洋子)

68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38  
 豊満な臀部晒し (佐々木真弓)  
 全裸をもがく女 (ローズ秋山)  
 輝く全裸の悶え (関谷富佐子)  
 裸身を晒す表情 (金原奈加子)  
 宙吊りにもがく (木村 洋子)  
 股間縛を羞らう (金原奈加子)  
 皮紐の柔肌責め (中河 恵子)  
 卓上の人身御供 (左近麻里子)  
 伸びやかな素足 (一宮百合子)  
 悶える全身縛り (一宮百合子)  
 恐怖の滑車吊り (大塚 啓子)  
 海老縛りに泣く (関谷富佐子)  
 高手小手の裸女 (左近麻里子)  
 髪吊りの操り責 (ローズ秋山)  
 浴槽と荒縄の責 (山原 清子)  
 刺がされた布片 (金原奈加子)  
 炸裂する革ムチ (安井喜久子)  
 麗わしの妊婦縛 (中河 恵子)  
 後手の嚴重縛り (左近麻里子)  
 黒髪をいたぶる (ローズ秋山)  
 全裸高手小手縛 (長井葉津子)  
 猿轡の妊婦縛り (中河 恵子)  
 緊縛に頬赤らむ (一宮百合子)  
 パンティを剥く (大塚 啓子)  
 黒縋ゴム衣縛り (木村 洋子)  
 全裸の股間縛り (山原 清子)  
 黒髪をいたぶる (大塚 啓子)  
 責め抜いた挙句 (安井喜久子)  
 椅子開股羞恥責 (左近麻里子)  
 縛られた洋裁生 (長井葉津子)  
 二つ重ねの裸女 (佐々木真弓)

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69  
 悦虐に泣く美女 (安井喜久子)  
 尻立て股間縛り (木村 洋子)  
 白肌に喰込む縄 (大塚 啓子)  
 開股縛りに羞う (左近麻里子)  
 正面全裸柱晒し (長井葉津子)  
 強烈縛りに喘ぐ (山原 清子)  
 S男がいたぶる (佐々木真弓)  
 若々しき緊縛美 (佐々木真弓)  
 滑車吊りの裸女 (大塚 啓子)  
 後手に縛上げる (ローズ秋山)  
 ドレイ洋子の姿 (木村 洋子)  
 股裂きで責める (ローズ秋山)  
 荒縄縛りの刺青 (山原 清子)  
 鑑賞用全裸緊縛 (川越美佐子)  
 尻挙げ海老縛り (安井喜久子)  
 柱に繋がれた女 (長井葉津子)  
 美しき全裸肢体 (佐々木真弓)  
 首縄縛りの裸女 (佐々木真弓)  
 両手大の字吊り (関谷富佐子)  
 白肌にむごき縄 (左近麻里子)  
 敵しい縄目の肌 (金原奈加子)  
 あどけなき表情 (金原奈加子)  
 豆絞りの猿轡縛 (川越美佐子)  
 両手吊りで晒す (金原奈加子)  
 鞭で責める女体 (ローズ秋山)  
 悶える緊縛全裸 (金原奈加子)  
 美しき緊縛立像 (関谷富佐子)  
 逆エビで責める (ローズ秋山)  
 逆手吊りの鞭打 (関谷富佐子)  
 縄のブラジャー (左近麻里子)  
 媚を撒く縛り女 (佐々木真弓)  
 乳房強調縛猿轡 (左近麻里子)



## 〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組  
略号 (むら)

足挙げ開股責め

大手札三枚一組  
略号 (あけ)

猪 吊り三態

梨花悠紀子  
略号 (いの)

責め衣縛り

大手札三枚一組  
略号 (せめ)

強 烈エビ責め

大手札三枚一組  
略号 (ねむ)

後手首の高縛り

玉田美佐子  
略号 (ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組  
略号 (ねと)

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組  
略号 (てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組  
略号 (てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組  
略号 (てほ)

強 烈エビ責め

松本アサ子  
略号 (まと)

吊り打ち

大手札三枚一組  
略号 (やり)

股間縛り法悦境

大手札三枚一組  
略号 (ぬこ)

踊り子緊縛

大手札三枚一組  
略号 (りこ)

月経帯のまま縛り

遠藤百合子  
略号 (ゆす)

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組  
略号 (ほく)

髪を引き回される夫人

関谷富佐子  
略号 (ほむ)

膨満正面縛り

長野 良子  
略号 (へな)

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子  
略号 (いな)

強 烈エビ縛り

関谷富佐子  
略号 (もい)

乳房責めの苦悶

関谷富佐子  
略号 (もろ)

全裸ムチ打ち

関谷富佐子  
略号 (もた)

強 打に泣く裸身

関谷富佐子  
略号 (むち)

裸身の晒し

大手札三枚一組  
略号 (わあ)

全裸股間縛

関谷富佐子  
略号 (せら)

双胸の強調縛り

長野 良子  
略号 (そう)

動感海老責地獄

一塚 啓子  
略号 (とう)

色禪の開股縛り

長野 良子  
略号 (いふ)

鼻責めのアップ

大手札三枚一組  
略号 (はす)

乳房しばり

長野 良子  
略号 (うは)

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組  
略号 (うい)

木馬責三態

大手札三枚一組  
略号 (もく)

椅子責めの果て

大手札二枚一組  
略号 (いす)

檻に入れられた女

山原 清子  
略号 (もの)

浴室の全裸刺青

山原 清子  
略号 (よな)

鼻いじめ三態

山原 清子  
略号 (はね)

鼻責め万華鏡

山原 鈴木  
略号 (はた)

碧玉裸身緊縛

刑部 典子  
略号 (のん)

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組  
略号 (きす)

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組  
略号 (きせ)

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組  
略号 (きそ)

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組  
略号 (きて)

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組  
略号 (きと)

鼻責め悦楽

大手札二枚一組  
略号 (きな)

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組  
略号 (なの)

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組  
略号 (なむ)

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子  
略号 (ゆり)



## ☆浣腸関連資料の部☆

## 只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かみ)

## 強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かく)

## 百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かな)

## 浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かむ)

## 女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (れち)

## 強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
絹川 文代 略号 (きか)

## イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (いるり)

## 太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かふ)

## 自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

## 浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
絹川 文代 略号 (ほの)

## エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るい)

## イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るは)

## 女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ほは)

## 進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ほい)

## 浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (へき)

## 便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (へか)

## 浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
山原 清子 略号 (かる)

## 浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一三〇〇円)  
山原 清子 略号 (かへ)

## 浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一二〇〇円)  
山原 清子 略号 (かに)

## イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けか)

## オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けひ)

## イルリガートル

大手札十枚一組 略号 (一五〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かも)

## オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けま)

## 浣腸後カバー装置

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けさ)

## 浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (のけ)

## 高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むい)

## 浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むは)

## 施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むろ)

## 浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

## 自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

## 浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちり)

## 浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちら)

## 浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かね)

## グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かて)

## シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かた)

## イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かち)

## アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かの)

## 浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (うも)

## 浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (うわ)

## 浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬる)

## 施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬか)

## 挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るて)

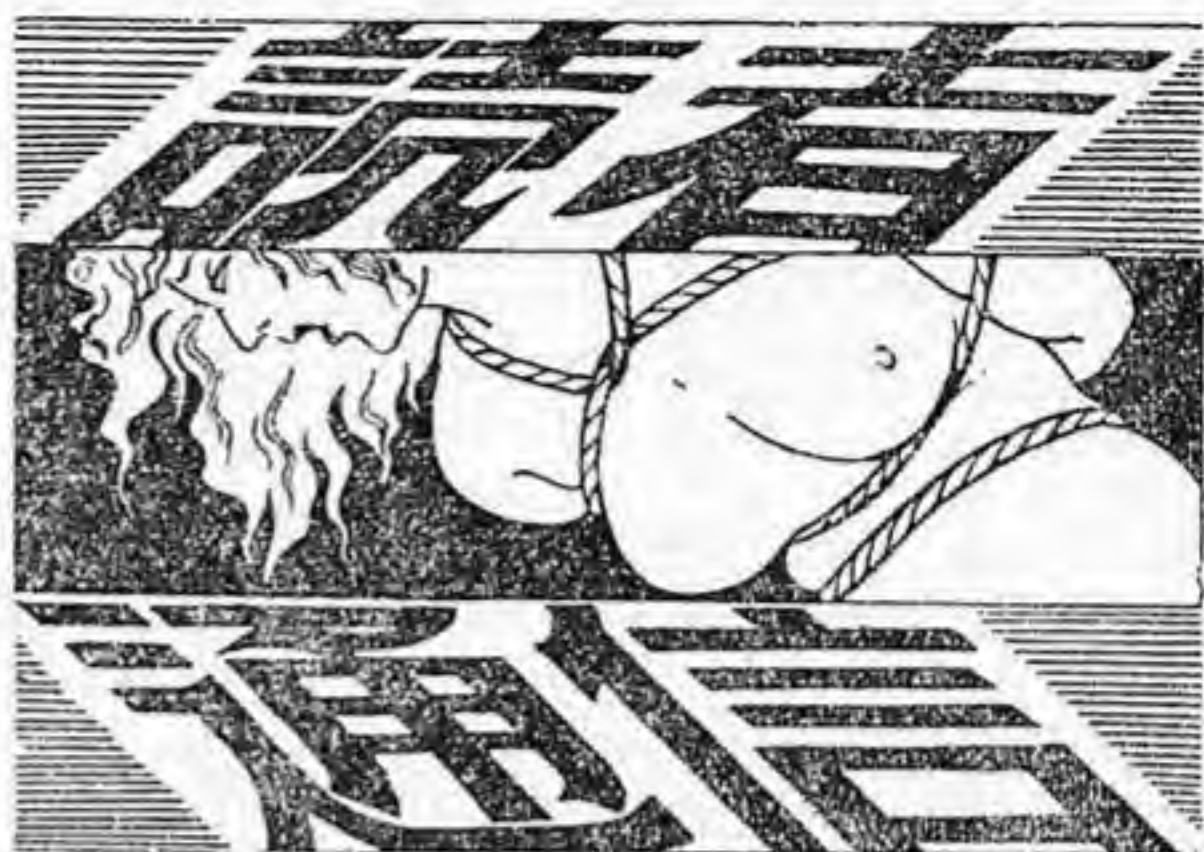
## 襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るち)

## 女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ると)





編集室の皆様、お元気ですか。初めてお便り致しますが小生は二十五才の船員士官であります。退屈な船内生活が貴誌によって、どんなに潤いのある生活になっているか、感謝しております。奇クを読みはじめて、もうかれこれ五年になります。我が家の書斎の本箱にはきちんと納めております。長い航海に出ていると買えない時が随分とありました。その時は残念で残念で、神戸や横浜の古本屋をよく探し歩いたものです。そのため

寄港地の名所旧蹟は知らなくても古本屋の位置だけはよく判っている様な次第です。小生は幼い頃から、女性のアヌスに異常なばかりの関心があります。小学校の頃、近所の女の子を集めて、よくお医者ごっこをやったものです。現在週に一回ぐらい、妻にイチジク浣腸を買いにやらせて、小生が浣腸を施します。時々妻に自分で浣腸をやらせて、その排泄状態を鏡に映させて、見させてやります。その時のイメージ画を描いてみました。題して「排泄観賞」皆様に発表出来るものかどうかわかりませんが同封しておきます。

(大阪市・木下明)

小生が本誌を愛読し始めてもう大分長くなりますが、自分では軽いSだと思っております。別段プレイをしてみたいとは考えませんが、若いM型の女性と文通して羞恥心をくすぐってやりたいという希望は持っています。以前は本誌を買ったたびにワクワクしていましたが最近は大分馴れたのか、そういう事も少なくなりました。「花と蛇」とか「大噴火」なんか毎号期待しているのですが、最初の頃の様な感激性は薄れたようです。

十月号では久方ぶりに塚本鉄三氏のカメラルポ「沖縄美人の責め記録」で本を持つ手がわなくなような感激を味わいました。これがグラビヤ写真だったらなあと思わず溜息が出ました。これは第一回目ですが、どうか引続いて、第二回第三回とルポを書いて下さい。待っております。

(岡山県津山市・林茂一)

私は昭和三十八年頃からの奇クファンです。そして大塚啓子さんの大ファンです。大塚さんの縛られた時の顔、美しい鼻、唇、そしてグラマーな体、全くしびれます。大塚さんの縛られフォトは、殆どスクラップして大切に保存してあります。私の宝物のように。今度、高手小手縛りのカラープリントを手にして、子供のように手を叩いて喜んでいきます。どうか、大塚啓子さんのことも誌上に載せて下さるよう、お願いします。

(静岡市・石川信一)

私が初めて本誌を手にしたのはもう十余年前になります。最近はSMブームとかで週刊誌を賑わしています。地味というか、本誌のSM小説は初期の頃に比べて迫

力に乏しい様に思います。一度、以前の作品を収録して『S特集』や『M特集』を再度、企画して欲しいと思います。かつてグラビヤ頁があった頃、毎号お目にかかっていた春日ルミさんや絹川文代さんの過去を願っての座談会とか回顧談のようなものも載せてはいかがでしょうか。SMに興味を持つ私の夢は普通のM派女性ではなくサジスチン、女王様と称する、男性に君臨し奴隷としてM派の男性を虐める女性を徹底的に屈伏させてみたいと想うことです。本誌を愛読されているSMに興味をお持ちの女性の方と真摯な態度で文通を願いたいと思います。

(東大阪市・大寺只雄)

今年の夏は暑くてうんざりしましたが編集部の皆さん、お元気ですか。待望の十月号、受取りました。黄色を主体とした清楚な表紙は、とても気に入りました。今月号は夫婦プレイの記事が多く、これも今日的な風俗の一断面だと興味深く読ませて貰いました。それと、今月号で出色なのは、塚本鉄三氏の「沖縄美人の責め記録」でした。いつものことながら、この人の文章は平易でリアルな書きぶ



りなので読んでいて、自分もその場にいるように錯覚されるくらいいきいきと描いているので本当に楽しく読ませて貰いました。この前の白人女性シーラー・ケニーさんといい、今月号の沖縄女性の座間明子さんといい、異色あるタレントをうまく書きこなしでいられるものと感心しております。今後共誌上で活躍されることを祈ります。

（千葉市・菅井潔）

○ お恥しいことですが、私は浣腸に非常な興味を持っております。浣腸という二字を見ただけでパツと赤くなり胸がドキドキします。別に幼時の頃に浣腸をされたという記憶はないのですが、思春期の頃頃から、他人から浣腸されたいという気持ちが強く起こって自分でも困るくらいでした。自分で浣腸するということには特に関心は強

〓 御送金についてのお願い〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替等の方法もあります。ご利用下さる方も、便宜上「切手代用」にてお願ひ致しますが、必ず一割増に

くないのですが、空想の中で強制的に浣腸されるということに痺れるようなエキサイトを感じます。二十二才になる未婚の事務員である私が、こんなことを考えるなんて不自然に思え、時には自己嫌悪さえ感ずるのですが、どうしようもありません。ふと、書店で御誌を見つければ、やっと一冊だけ買って帰って宝物のようにくりかえし読みふけていますが、時々起ってくる浣腸への気持は押さえることが出来ません。私を黒皮張りのベッド（病院にあるような）に仰向けに寝かして、数人の男女の医者や看護婦が私を浣腸の実験に使用するといった場面が私の最も好きな空想です。私のお尻の下には枕が置かれ、両足を高々と開いたまま、いろいろな薬液が注入され、その効果を調べるのです。体温、脈搏、呼吸なども調べられ、浣腸や排尿排便の模様まで、8ミリやカメラに収められるのです。でも実際にはとてもそんなことは出来っこないので、いつも私一人の空想に終ってしまうのです。それで私は、私の空想の手助けになる浣腸に関する記事を読むのが好きです。こんな若い女性って、他にいらっしゃるでしょうか。

（大阪・小塚守子）

○

私は去る昭和二十六年頃より日本に於けるユニークな存在である貴誌を知り日頃私がひそかに懐いているS的趣味に叶ったものとして毎号入手して愛読しています。毎月新刊を手にして真先に開くのが最近斯界の知名人として映画やテレビに活躍しておいでになる辻村氏の「カメラハント」です。創作物と異なりリアルに描写された麗文と写真の数々は私の好みを十分に満足させてくれます。ともすればマンネリ化に陥り易い文章を常に目新しく現すため、並々ならぬ御苦労を続けておいでの様子が偲ばれ心から敬意を表す次第です。然し辻村氏も二人の令嬢を嫁がせられる程のご老齡（失礼）からかモデル嬢の吊上げには大変な御苦労をされている模様で真にお気の毒に堪えません。通常重量物を吊上げるためには一組の滑車とロープを使用すれば重量が二分の一に減ずることは良く知られております。このようなことは辻村氏も十分御承知のことと思いますが、かく申すのも私も種々の責めの中に逆さ吊りに一番興味を感じているからです。カメラハントによれば

辻村氏は取材に当りコルトをご使用の様に伺います。滑車やロープ一組なら充分トランクに収納して何処にでも持参が可能な筈です。

（東京・田守憲一）

○

御誌たのしみに読ませていただいております。十月号を拝見しましたところ、塚本さんのペンで、「沖縄美人の責め記録」という記事を読みまして、私も勇気をだして誌上に載せていただけないかと思ひ、お便りをしました。大阪からは少し遠方なので、どうかとは思いますが、私は今、単身で旅行できない境遇ですので、若しおいで下されるのでしたらぜひお願いしたいと思ひます。年令は座間明子さんよりは三つほど上です。二年程前までは東京に住んでおりましたが、今は故郷の宮崎へ帰っております。東京に居りました時、或る男性に飼育されましたので、責めや縛りについては少しぐらいでしたら辛抱できる自信があります。塚本さんが九州まで出張されてカメラレポートとして書いて下されば有難ですが、もしお忙しくてダメでしたら、他に読者の方でも結構ですから、記事にして誌上に発表して下されば幸いです。外泊は



出来ませんが昼でしたら四、五時  
間でしたら外出できます。近郊の  
ご案内もいたします。車でおいで  
になれたら、面白いカメラルポの  
記事が書けると思います。景色も  
よろしいですから。

(延岡市・豊田慶子)

○

十月号では「夫婦プレイ」の文  
章がたくさん出ていて本当に嬉し  
く思いました。私も大分以前から  
夫婦プレイを楽しんでおります。  
カメラがないので写真はとってい  
ませんが、ノーパンティの妻に股  
間縛りをさせてよく外出したりし  
ます。プレイのおかげで夫婦仲は  
きわめてよく、まだ一度も喧嘩し  
たことはありません。夏は二人で  
旅行し屋外プレイを楽しみます。  
一度、蚊の大軍におそわれてひ  
どい目にあつたことがあります。  
結婚して二年目ですが、新婚間も  
なく縛りプレイを開始しましたの  
で、妻も、今では責めにもよく馴  
れて従順についてくるばかりでな  
く、二人っきりの旅行を心待ちし  
ているようです。奇巧も二人で仲  
よく読みますが、私より妻の方が  
本で読んでエキサイトするよう  
です。私達はまだ若いので交換プレ  
イなんかは考えておりませんが、

先輩の同好の方で御指導下さる方  
がありましたら、お願いしたいと  
思います。家業は菓子舗なので、  
時間的には自由で経済的にも余裕  
があります。私は二十六才、妻は  
二十二才です。写真をとることの  
出来る方だったら尚よいのですが  
そのうち私もカメラを買って妻の  
緊縛写真を奇巧に送ろうと思つて  
います。

(東京・村田芳夫)

○

浜口里子様、読者通信で貴女のお便りを拝読し書いておられる文章のすべてが私の性向にぴったりでペンを取らずにはいられませんでした。先ず教師という立場にありながら、生徒の前で一糸まとわぬ姿で教材にされたいご希望、この一言だけで私は息がつまりそうな興奮を覚えました。次に衆人環視の中での強制的に採尿されるなど……云々のご希望に、排尿並に便所でのプレイに異常なほどの興味を抱いている私はどの様な難関を突破しても貴女とお友達になりたいと願うものです。

(兵庫県・加古川収)

○

出門順殿、貴方のイメージ画はいつも楽しませて頂いておりますが、九月号の「芳香」は特に妖美

安井・中川・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しう

髪吊りで強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八した

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しち

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しつ

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八して

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しと

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しや

痛打にもかく美女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しゆ

あぐら縛りの羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 略号 八しよ

片脚挙げで晒す裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とは

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とに

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とほ

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とへ

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とち

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とり

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とぬ

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とる

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とか

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とま

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とみ

浣腸責めの美態開陳

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とめ

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とも



でSMの極致を感じました。後手に縛られて肩先を地面に押しつけられ、ボクサー種の巨犬に美しい頬を舐められていた美女の姿は「花と蛇」のヒロイン静子夫人の未来画の如く感じとったのは、小生だけではなかったと思います。やがて襲い来るに違いない巨犬を予期して、静子夫人の心を無視するかのよう激しく甘酸っぱい芳香を放つのが匂うが如きイメージ画でした。千代達が「いやーあね」と笑い興ずる中央で、遂に静子夫人が珍技を披露する様を想像し、小生は新しい感激をおぼえました。これから先も、このような甘美な筆を揮われることをおねがいする次第です。

(神戸市・乃美対造)

○ 佐野みさ子様。横浜におられるそうですが、よろしかったらそちらへ出向きます。縛られる感じをある程度、身を以って体験されておられるなら、未開のすばらしい実技をさせていただきます。プレイバシーを守り、肌に跡が残らない縛り方法でやりたいと考えております。私は年令三十六才、中肉中背の良い男です。貴女とプレイをしようと心にきめております。

責めと申しましても種々雑多で、痛くなく跡の残らない責めと、その反対とがあります。時が経つとゆっくりと締まってくるゴム責めたとえばバタフライをつけた責めなど、考えただけで身体が熱くなります。またパイプ責め、洗濯挟み責め、肛門を柔らかくする気持ちよい責めなど、すべて跡が残ります。ではプレイをやりましょう。

(野沢 浩)

○ 曾根葉子様、文通でお友達を探しとのことですね。遅くなりましたが、お便りさせていただきました。私は未だ初心者の段階で、多少は知識がありますが、プレイの経験はありません。それで貴女との文通により、SMの知識を、より以上に身につけたいと思っています。次第です。私は、どちらかというとS傾向にあり、羞恥責めに興味を抱いております。たとえば股間縛り浣腸等です。「花と蛇」は毎回かかさず読んでいます。貴女との文通、心より望んでいます。またプレイなさっている御夫婦の方等で、アシスタントにでも使ってやろうという方がいらっしゃれば御一報下さい。若輩者ですが、どうかよろしくお願い致します。

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆめ

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆえ

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆひ

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆあ

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆも

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆに

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆほ

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆみ

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆろ

全裸縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆへ

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八ゆわ

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八ゆよ

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八ゆぬ

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八ゆる

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よれ

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よそ

全裸高小手の麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よの

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よや

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よい

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よふ

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よえ

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よぬ

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よあ

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よた



(三重・若僧)

女斗美マニヤの皆様、今日は。奮斗士好太さんの「花の女斗美たち」が終わってしまい、物足りなく思っていました。九月号には椿さんの画と文章、高島さんの通信があつて喜びました。高島大井子というのは、例の今昔物語に出てくる湖北の大力女で、相撲人佐伯某をトレーニングしてやった、というものです。資料の御収集大変参考になりました。落語「蚊帳相撲」だったかに夫婦で取組むのがあります。落語にもあるところを見ると女房と一丁で相撲をとりたいた男は大分、居るのですかね。椿さんは良い奥さんを持たれて羨ましいことです。せいぜい相撲で夫婦和合の程を。愚妻はカトンボのようで話になりません。椿さんの画は数年前、拝見したように、なつかしく思いました。また、お願いします。さて、女斗、女陣資料ですが、このごろフンドシとかクラパンとか称して、ヘンな布ぎれを水着にしていますが、男女ともやめてほしいものです。こういうのは週刊誌などに出ていますが、むしろマイナスのように思います。また、わたしの好みで

は越中もダメですね。禪は尻が丸出しになるからिकासののではないのですか。いかに細くとも、しっかりと締めてあることが大切ですね。フンドシをはくなどというコトバが出来たのも残念です。資料を集めるのは大変でしょうが、今後ともこの道の方々、よろしくおねがいします。

(大阪ミナミ・好角生)

始めてお便りいたします。私は浣腸に非常に興味がある、男性です。使用するのはイチジクの30Gです。それより大きいものは、なんだか恐ろしくて、まだ行なったことがありません。私が浣腸を実施するときは、身も心も女性になり切って行ないます。下着はピキニのパンティをはき、ガーターベルトでストッキングを吊り、ブラジャーは皮の赤いものです。以上のように完全に女になりきると、私の空想の中に、もう一人、本物の女性が現われます。彼女は、いやがる私を無理に寝かし、イチジクを注入してゴムのオムツカバーを私にはかせます。やがて私は激しい便意に襲われ、浣腸ファンならよくご存知の、あの甘い恍惚がおとずれます。私の空想は、とど

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌を炸裂する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剝玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はひ▽



まるところを知らず続くのです。  
(東京・おむつ愛好生)

○ 奇ク愛読者の皆さん。お元気で  
すか。最近号でS女性からの呼び  
かけ、また誌上への作品の発表が  
ないのは、われわれM派にとって  
非常に淋しいことです。若さに溢  
れる元気一ぱいのS女性の方、ど  
しどし呼びかけの通信をお送り下  
さい。また実感に満ちた告白文を  
誌上に発表して下さい。弱々しい  
M男を、いやむしろ屈強な男を腕  
力でやつつけ、圧倒するような勇  
ましい女性の出現を心からお待ち  
しています。小生は、たくましい  
グラマー女性に征服され、顔をそ  
の巨大なおヒップの下に敷かれ、  
息も絶え絶えに押しつぶされ、い  
やというほどその臭気にむせび、  
はげしい小水を顔一面に浴びせら  
れ、あと始末をチリ紙の代わりに  
舌でさせられ、さんざんしごかれ  
ることを夢んでいます。

(馬疎生)

○ 浜口里子様。貴女のおたよりを  
拝見しました。探し求めていた青  
い鳥を見つけ出したといった心境  
です。私は先月号でお便りしまし  
た二十一才の既婚者です。私が常

々あこがれているのは、数人でプ  
レーすることです。何故なら、S  
Mというのは、ただ縛る、打つ、  
責めればよいといったものではな  
いと思うのです。責める側にも責  
められる側にも「これこれこうい  
った理由で責めるのだ」といった  
ストーリーが必要だと思います。  
もちろん、その内容は世間の人か  
ら見れば他愛のない非現実的なも  
のでよいのですが、たとえば王様  
と奴隷、主人と召使いなどです。  
そういったストーリーによる展開  
がなければ、SMプレーの楽しみ  
は半減してしまうと思います。が、  
夫婦二人だけのプレーではストー  
リーの種がつきてしまうのです。  
数人でのプレーとなると、アイデ  
アも各人、色々と湧くでしょうし  
その展開も、ずっと広がると思っ  
たのです。私が貴女にお便りをさせ  
ていただく気になったのは、実は  
貴女と同じ職業だからなのです。  
プレーを展開してゆく内容にして  
も、また実際に責めたりする行為  
にしても、その程度や限度といっ  
たものは当事者達の良識によらな  
ければならないところが多いと思  
うのです。それらの条件がうまく  
マッチすると思うのです。私は本  
当に信頼できる友人を二人、持っ

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号△はわ▽  
中河 恵子

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふ▽  
中河 恵子

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほ▽  
中河 恵子

悦庵に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあ▽  
中河 恵子

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はう▽  
中河 恵子

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさ▽  
中河 恵子

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめ▽  
中河 恵子

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はし▽  
中河 恵子

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はも▽  
中河 恵子

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむ▽  
関谷富佐子

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめ▽  
関谷富佐子

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はも▽  
関谷富佐子

ムチ打ちの陶醉境

大手札三枚一組 略号△はさ▽  
関谷富佐子

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号△はし▽  
大島 照代

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はす▽  
大島 照代

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせ▽  
大島 照代

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆ▽  
大島 照代

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はた▽  
大島 照代

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はち▽  
大島 照代

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつ▽  
大島 照代

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△はて▽  
大島 照代

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はと▽  
大島 照代



ています。私を含めて三人の男性の中で、じっくり責められたいと御思いになりませんか。

(神奈川・相模太郎)

○ ぼくは美しい女を神様と思うほどの女体崇拜者で且、マゾヒストである。評判SM小説「花と蛇」の愛読者でもあるわけだが、ぼくの性格上、文夫に最大の関心を持ち、いいかえれば文夫になりかわりたい欲望で一杯である。今までに文夫が顔の上に桂子の豊かな臀部を、どっかりと乗せられたシーンがあったが、これは、こたえられない気持だった。また、ズベ公たちによってたかって文夫がいびられた挙句、美津子の柔らかな手で生ジュースをしぼり出されるに至っては、体の芯まで痺れた。桂子が人間的感情を失い、文夫を愛することによって、地獄を快樂の修羅場化しようとするように変身すると同時に、美津子を思う文夫の嫉妬からS女性的心境を持ち始めたのは、ぼくの大きな喜びであり、やる気充分の桂子に新分野を想像して大いに期待している。

(姫路・恋川一郎)

○ 十月号、拝見致しました。カメ

ラハント「悦虐の甘き戯れ」の中で渡部好美さんが辻村氏に責められた乳首におけるクリップ責めを早速、妻にも行なってみました。始めての責め故、大変、痛がっておりました。おかげで私達はまた一つの責めを、加えることができました。塚本氏の「沖縄美人の責め記録」の座間明子さんは、最高の緊縛美人です。あのポリウムを縛られた塚本氏が羨ましいかぎりです。百ページと百一ページの二枚の写真は、座間さんの美しい身体を余すところなく見せてくれました。私は乳房を中心にした縛りが好きです。どうか座間さんを緊縛するときは、乳房責めにして下さることをお願いします。私達夫婦プレイのつたない写真を二カ月間も続けて掲載していただき誠にありがとうございます。これからはプレイの模様を随時、お送りいたします。サロンに載せていただいてからは、妻のプレイに対する協力は大変なものです。縛りも強く、逆吊りなども行なうことができました。私達夫婦とともにプレイを楽しんでいただけのM女性の方がもしおられましたら、お知らせ下さい。佐野みさ子さんなどは私たち夫婦の求めているM女性

最新撮影総天然色  
カラー・プリント写真

|                                             |                                             |                                            |                                               |                                            |                                             |                                             |                                             |                                            |                                              |                                               |
|---------------------------------------------|---------------------------------------------|--------------------------------------------|-----------------------------------------------|--------------------------------------------|---------------------------------------------|---------------------------------------------|---------------------------------------------|--------------------------------------------|----------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| 両手吊りに悶える女<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>大塚 啓子 略号八てき | 後手裸身柱縛り<br>大手札四枚一組 略号一二〇〇円<br>大塚 啓子 略号八てか   | 縄目にあえぐ裸女<br>大手札四枚一組 略号一二〇〇円<br>大塚 啓子 略号八てく | 豊麗な裸身をくびる縄目<br>大手札四枚一組 略号一二〇〇円<br>大塚 啓子 略号八てこ | 後手高手小手縛り<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>大塚 啓子 略号八てま | 長襦袢の緊縛色模様<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>東浦ひかる 略号八てみ | 緋の腰巻緊縛色模様<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>東浦ひかる 略号八てむ | 猿ぐつわに呻く女<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>東浦ひかる 略号八てめ  | 柱宙吊り強烈縛り<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>東浦ひかる 略号八ても | ポリウムを縛りあげる<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>東浦ひかる 略号八てん | 縄に苦悶する裸女を狙う<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>東浦ひかる 略号八てる |
| 縄に悶える緊縛色模様<br>大手札二枚一組 略号八〇〇円<br>東浦・大塚 略号八うて | 真紅の腰巻着用縛り<br>大手札四枚一組 略号一二〇〇円<br>大塚 啓子 略号八うこ | 華麗なる緊縛裸身<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>一宮百合子 略号八るむ | みだらな開股縛り<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>一宮百合子 略号八るの    | 責めに疲れた諦観<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>一宮百合子 略号八るお | 真紅の腰巻姿で緊縛<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>一宮百合子 略号八るま | 羞らいの真正面縛り<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>一宮百合子 略号八るけ | 若肌に喰い込む縄目<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>一宮百合子 略号八るふ | 高手小手後手縛り<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>一宮百合子 略号八るや | 股間縛りの開股姿態<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>中河 恵子 略号八れよ  | 羞らいの股間縛り<br>大手札三枚一組 略号一〇〇〇円<br>中河 恵子 略号八れに    |



だと思っています。一度お会いしたいとねがっています。

(東京・阪東太郎)

○

十月号サロンがSM夫婦の写真で埋められ、美体妻の成熟美に飾られたことを喜ぶ。今後、サロン欄がSM亭主の妻女公開コーナーとして、よりマニヤを楽しませることを希望して止まぬ。さすがに己が妻女を裸にし発表なさるだけあって、どの裸身も羨ましい限りの美しさであったが、紀川様の脐を中心とした丸味、三浦様の尻から太腿へかけての調和、兵庫様のはにかみ、和歌山K様の妻女の乳房の美しさ、阪東様の双臀の素晴らしさ、と、どれも甲乙つけ難い美しさ見事さであった。サロンの一角に、いっそのこと夫婦プレイコナを新設して艶を競われては如何。百花爛漫の中に阪東太郎様のカメラアングルが秀でていたが、奥様方には股縄が必須条件で、特にポーズに創意工夫の上、締め上げられた緊縛感を阪東様の如く上手に演出しなければならぬ。夫婦故に許されるSMの極致を、あるときは和式トイレに、またあるときは台所や浴室で撮影して、私たちを羨ませていただきたい。

(神戸市・清水好児)

○

初めてお便りします。先日、横浜に商用で行った帰り、十数年前に通った本屋を思い出して寄って見ました。すると以前、置いてあったところに、きちんと本誌が並んでいました。懐しく思いながら早速、買い求めました。私は戦争末期、予備学生で入隊しまして、責められもしましたが、責める方も相当やりまして、いつの間にか興味を持つようになり、現在では自分はSだと思っています。しかし、その性質を明確に導き出してくれたのが本誌だったのです。それから外国生活を何回か過ごし、ようやく自分で仕事をする事となりました。私は特にA責めに興味を持っていました。これからは時々投稿させていただきますから、よろしく願います。

(神奈川・永岡生)

○

日本中のM子さん、このS男とプレイしましょう。欲張りのようですが、それだけSMについて興味があるのです。私は、年令的に申しまして、まだまだ若すぎます。だから経験的にも乏しいですが若さでカバーしたいと思いま

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号天星社宛へ願います。



す。私は女性を神様の様に思っています。あの美しい肢体。ああ思っただけで崇拜したい気持ち一杯です。それでは、Mではないかとおっしゃるかもしれませんが、ちよっと違います。余りにも美しいだけに、いじめ抜いてみたいと思うのです。この気持ち、わかっていただけないでしょうか。とにかく若いだけに、このような願望を抑さえる術を知りません。私の好みとしては、身体にキズをつけて責めるよりも、精神的羞恥により女性に敗北感を味あわせることにあります。女性が死にたいような羞恥におののき、体中を真赤にして恥かしがる、この羞恥美こそ私の願望です。たとえば浣腸責め、強制排尿、排便、その他、いろいろなポーズをとらせませす。思っただけで恥かしくなります。いろいろ考えれば他にも沢山あります。私は佐野みさ子さんとか、関悦子さんのような方が、もっとも理想的な女性であると思っています。

(岩手県・大原鈍男)

久し振りにお便り致します。宇能鴻一郎の作品に「巨女渴望」という短篇小説がありますが、奇クを二十年近く愛読している私にも

「強女渴望」の傾向があり、十年程前から三度ばかり読者通信で呼び掛けましたが、何の反応もなく現在に至っております。長い間の願望もむなしく、早や四十才になりました私は未だ独身で、一六四センチ、五二キロの瘦身では、男性として自慢出来る腕力も体力もなく、女性上位時代といわれる昨今、当然、私にふさわしい伴侶が既にあっても良いと思うのですが……。最近ではマスコミを通じ武芸に励む女性の紹介も数多く、大体が美容を兼ね精神修養や護身術を目的としています。中には夫婦喧嘩をしても負けないためになどと、勇敢な発言をする女性もおります。もし、これらの女性の手の内も知らずに、男性が腕力を振るったところで、逆にねじ伏せられたり組み敷かれたりの散々な目に会い、男性にとっては屈辱の上もなく、女性にとっては痛快そのものでしょう。さて、こんなことを想像しては楽しみを求めています。現実には体験出来ればどんなに素適なことだろうと、心待ちに致しております。どうかこんな私に興味をお持ちの女性の方、是非お便り下さい。私を圧倒するような大柄な女性、そして小柄でも私

編集部特写緊縛女体資料

|             |         |       |      |
|-------------|---------|-------|------|
| 逆さ吊りの臨月妊婦   | 大手札三枚一組 | 略号△さめ | 五〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さめ | 五〇〇円 |
| 両手吊りの臨月妊婦   | 大手札三枚一組 | 略号△さめ | 五〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さめ | 五〇〇円 |
| 若妻初妊娠の哀歎    | 大手札三枚一組 | 略号△さめ | 五〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さめ | 五〇〇円 |
| 妊婦の全裸縛り全身   | 大手札三枚一組 | 略号△さい | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さい | 四〇〇円 |
| 妊婦腹の緊縛側面    | 大手札三枚一組 | 略号△さい | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さい | 四〇〇円 |
| 強烈縛り妊婦責め    | 大手札三枚一組 | 略号△さみ | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さみ | 四〇〇円 |
| 若妻の緊縛妊孕美    | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 膨満の妊婦乳房責め   | 大手札三枚一組 | 略号△さま | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さま | 四〇〇円 |
| 臨月腹の全裸晒し    | 大手札三枚一組 | 略号△さむ | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さむ | 四〇〇円 |
| 躍動する妊婦の裸像   | 大手札三枚一組 | 略号△さち | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さち | 四〇〇円 |
| 妊娠という異常美の女体 | 大手札三枚一組 | 略号△さほ | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さほ | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さへ | 四〇〇円 |
| 見てほしい臨月腹    | 大手札三枚一組 | 略号△さと | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△さと | 四〇〇円 |
| 妊婦全裸の全身肢体   | 大手札三枚一組 | 略号△ささ | 四〇〇円 |
| 金原奈加子       | 大手札三枚一組 | 略号△ささ | 四〇〇円 |
| 全裸正面の縄掛け    | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 小池美喜        | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 柔肌の高手小手縛り   | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 小池美喜        | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 後手首を縛られた少女  | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 小池美喜        | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 飼育された美少女縛り  | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 小池美喜        | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 縛られた美女二人    | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 小池美喜        | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 全裸の美女を連縛する  | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 小池・松山二嬢     | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 小池・松山二嬢     | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 白肌に喰い込む縄目   | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 松山真樹子       | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 一糸まとわぬ柔肌縛り  | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 松山真樹子       | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 開陳した華麗縛り肢体  | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 松山真樹子       | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 縄に喘ぐ諦観の相    | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |
| 松山真樹子       | 大手札三枚一組 | 略号△さる | 四〇〇円 |



のような男性なんか問題でないと  
自信をお持ちの強力な女性の出現  
を切にお待ち申し上げ、一日も早  
く騎手満男と改名出来ることを念  
願致しております。では最後にな  
りました、私と同じ女性上位願  
望族? の右京の田代俊夫様、鳥  
取の見上伏男様の今後のご活躍を  
期待致しております。

(京都・騎手待男)

静子夫人より皆様へという私の  
原稿をご採用頂き有難とうござい  
ました。結婚式を真近かに控え、  
千々に乱れた私の心が書かせた妄  
想ではございますが、これが私の  
本当の気持ちかも知れません。操と  
か云う美名のもとに、たった一人  
の男性に、一生を奉仕する人間と  
いう動物、何か自然に抗っている  
気がしてなりません。社会秩序の  
意味から誕生した思考なら、妊娠  
を意のままに調節回避可能の現代  
には所詮不必要な操であり、夫婦  
プレー交換SMプレーは許されて  
しかるべきでは、ないのでしょ  
うか。一世紀未来には路上で愛を感  
じた初対面の男女がまるでお手洗  
に出向くが如く手を取りあってプ  
レーの場に消えるように交わるに  
違いないと、私は空想しております。

す。私の婚約者はSM気皆無の考  
えようによつては純真無垢なたよ  
りない男性ですが私なりに適当に  
私は夫以外の方とSMプレーを実  
行したいと結婚前から考えており  
ます。事の善悪は別として私は悔  
のない一生を望んでいます。

(神戸市・小杉千恵)

久し振りに通信の仲間入り致し  
ます。私は殆ど奇く創刊頃からの  
ファンでS傾向の者です。同好の  
方々に、呼び掛けいたします。特  
にM女性の方々が誌上を賑わして  
居る折から、知り合いになれたら  
と思います。横浜の佐野さん、九  
月号の谷山さん、東京の前田さん  
如何ですか、連絡を、御待ちしま  
す。また同好の方々、色々と御話  
をしたいものと思ひます。通信を  
見ますと関西方面の人が多い様で  
関東以北が、淋しい様です。昨今  
一般に一時以上SM関係の雑誌  
誌が出廻って居り玉石混淆の状態  
の様ですが、これと云うのはない  
様です。そう云う意味で真の同好  
の方々始めM女性の人々と広く知  
り合いたいものです。待つて居り  
ます。

(仙台・千葉種彦)

一カ月という月日の長さに本当

SとMの甘い一瞬

大手札三枚一組 略号△とさ▽  
松山・小池二嬢 略号△とさ▽

縄に通う愛情の焰

大手札三枚一組 略号△とけ▽  
マキとミキ 略号△とけ▽

相愛の極致を描く二女

大手札三枚一組 略号△とな▽  
マキとミキ 略号△とな▽

鞭に狂う悦虐表情

大手札三枚一組 略号△らて▽  
関谷富佐子 略号△らて▽

鞭打ちにうねる肢体

大手札三枚一組 略号△らあ▽  
関谷富佐子 略号△らあ▽

足吊りの被虐肢体

大手札三枚一組 略号△らえ▽  
関谷富佐子 略号△らえ▽

美しきマゾの境地

大手札三枚一組 略号△らせ▽  
関谷富佐子 略号△らせ▽

裸後手柔肌縛り

大手札三枚一組 略号△こよ▽  
佐々木真弓 略号△こよ▽

乳房強烈膨隆責め

大手札三枚一組 略号△こわ▽  
佐々木真弓 略号△こわ▽

海老責めに苦悶する

大手札三枚一組 略号△こお▽  
佐々木真弓 略号△こお▽

全裸の緊縛全身晒し

大手札三枚一組 略号△こる▽  
佐々木真弓 略号△こる▽

煙草責めに喘ぐ女

大手札三枚一組 略号△こぬ▽  
佐々木真弓 略号△こぬ▽

抱擁する美女二人

大手札三枚一組 略号△とや▽  
ミキとマキ 略号△とや▽

柔肌と柔肌のレス狂態

大手札三枚一組 略号△とよ▽  
ミキとマキ 略号△とよ▽

緊縛麗姿に映えるライト

大手札三枚一組 略号△こほ▽  
佐々木真弓 略号△こほ▽

臀部強調後手縛り

大手札三枚一組 略号△こる▽  
佐々木真弓 略号△こる▽

羞恥に悶える全裸緊縛

大手札三枚一組 略号△こに▽  
佐々木真弓 略号△こに▽

ホステスの緊縛姿態

大手札三枚一組 略号△こち▽  
佐々木真弓 略号△こち▽

二つ折りで責める女体

大手札三枚一組 略号△こへ▽  
佐々木真弓 略号△こへ▽

脈打つ全裸の臨月腹

大手札三枚一組 略号△こふ▽  
中河恵子 略号△こふ▽

臨月腹の革紐股間縛り

大手札三枚一組 略号△こや▽  
中河恵子 略号△こや▽

猿轡の臨月妊婦腹縛り

大手札三枚一組 略号△この▽  
中河恵子 略号△この▽

卓上の股間縛り狂態

大手札三枚一組 略号△こそ▽  
長井葉津子 略号△こそ▽

羞恥の足挙げ責め

大手札三枚一組 略号△これ▽  
長井葉津子 略号△これ▽



## 次号(十二月号)は十月二十五日に発売いたします

にもどかしさを覚えます。読者通信以外に同好の士と語り合う事が出来ないのが残念です。何とか機会を作り妻をモデルにして複数プレイをと思っても連絡の取り様がないのは口惜しい事です。私の妻は軽い鞭打ちを伴う羞恥責にM性の喜びを感じている様ですが此の頃では複数プレイに夢をかけている様です。私達は九月号にも書いた様に中年になろうとしている夫婦ですが、三人プレイ、交換プレイと華やかな夢を求めています。

(大牟田・野村忠、麻子)

二年程前からSM雑誌を読んでいました。「こんな本を読んでいる人がいるのだろうか?」もしかしたら、この世の中で僕一人じゃないだろうかと?という気持ちにかられて悩み考えては、「もう絶対にこんな本なんか読まないぞ」と意志を固めたが、いつも失敗し三カ月前、やっと決心がついたと思ったのですが、この本を手にしたらその決心ははかなくもいっぺんに吹きとんでしまいました。この本にひかれたのは何も創作によ

るものではなく、カメラハントや読者通信であると思われれます。以前は自分一人だけが異常であるという観念があったため反省?しました。今は「僕と同じ趣味の人達がいる」というだけで、何となく心が安まりました。僕は軽いSでプレイの経験は全然なし。時々行ないたいという欲求は起こりますがその反面、不安が頭をかすめます。好きな責めは羞恥心をくすぐるものだったから、何でも好きです。だから書いて読むこと(文通)によって羞恥を、くすぐります。それで、僕は十分だと考えます。プレイを行なうんだとするともっと人間的に親密になる必要があると思います。生意気かもしれませんが、いとも簡単に「プレイしよう」を見かけますが、僕にはこれが理解出来ません。僕はどちらかというと気の小さい男ですが、どなたか気にさわったら申し訳ありません。今後、告白体験手記などを多く載せて下さい。読者がどれくらいいるかも知りませんが、ほとんどの人はカメラハントや体

験談などを読みたいために、本誌を買うのだと思います。僕自身が決心を変えたのは、前記のように「自分と同じクセの人達が多勢いるのだ」という安心感からです。悪くいえば妥協してしまっただけですけど、だからより多くの悩んでいる人達に、自分だけじゃないんだ、ということを知らせてあげたい。もちろん本誌を読まなければ知らないわけですけど。

(名古屋市・曾我生)

十月号の「八重垣流秘聞」は素晴らしい。ぼくは、いつも風流極道軒氏の小説を楽しみにしている風流ファンだが、近頃、特に筆の冴えがうかがえ、大いに期待している。正邪葛藤絵巻の末、邪に翻られる正者の背徳の甘さを、サド、マゾ的に最上の快楽耽溺の姿で見事に描き抜く、風流氏の手腕は秀逸である。若妻が夫の前で屈辱羞恥責めを受け、遂に曝す敗北の姿態を好む、彼独得の被虐への追求欲が、まるで彼自身が自己の欲情と願望をたたきつけ燃焼させているかのよう、文脈を生々しく脈打たせている。白く豊かな尻ぶーんと匂う若妻の肌、ふるいつきたい色っぱさの見事な肢体、初

々しいもぎたての水蜜桃。三千代お千賀、千春、そして黒駒の勝蔵親分をはじめとする縄の達人狐六寅松、馬吉、熊七、牛造、辰五郎と、名を聞けば性もわかりそうな奴輩が七人。まして辰五郎はヨツカマリ(強姦常習者)の名人。役者は揃った。次号が待ち遠しい。三人三様のたらい廻しを存分に表現し、内面的心理を描写の上、新しい美を、被虐と責めの中に見出して欲しいと願っている。これを描ききれるのは風流氏をおいて他にないと、ぼくは信じている。

(神戸・阿部肇)

浜口里子様へ、一筆申し上げます。小生は、まだ本誌の愛読者として日が浅いのですが、里子様の文を拝見してペンをとりました。私は多少、S傾向はありますが、手荒なことは好みません。小生は貴女とのプレイを想像してみました。先ず貴女とお会いして、お互いの経験を話し合います。それからプレイにうつります。五・六センチの太い嘴管のついた道具でエネマをします。ゆっくりと時間をかけて少し宛、注入します。しみるような感じが、やがて便意となつて感じられましょう。百五十C



Cぐらいの液を、ゆっくり入れますので相当、時間がかかります。注入され終わった後でも貴女はホッとすることはなく、また違った感じがするでしょう。貴女は強い便意に苦しみ、身もだえしながらトイレを要求しましょう。小生は貴女が逃げ出さないように、しっかりと押さえつけて、生理的要求と戦う貴女の姿を観察させていただきました。五十分ぐらいは我慢していただいて、やっと貴女を解放すると、貴女はトイレへ直進し、しやがむひまもなく放出するでしょう。その姿を見られた貴女は女性

として、あるいは職業的プライドを傷つけられることでしょう。

(横浜・佐藤)

お手紙をするのが、とっても恥かしくて躊躇いたしてしまいましたのですけれど、近頃奇クに私どもオムツマニヤのための記事がなくなり、淋しさに耐え切れずにお便りいたしました。私の亡くなった主人が新婚の頃、嫌がる私を口説いて教え込んだのがオムツの味です。でもオムツプレイは、やはり独りプレイでは楽しいものではございませぬ。幸いママさんと呼ば

れる職業を生かして私はK子という二十才の可愛い娘と親密になることができ、二人でオムツプレイを心から楽しんでいきます。オムツをあてがわれたり、あてがったりやり合うのは、とっても楽しく、濡れたオムツをとりかえる際の、プンと甘く匂う新鮮な香りは、夢幻境にさまよう様な心地になります。昔の奇クには、しばしばオムツをあてられていた女学生の絵などがあって、感激させられました。近頃は全然、見かけられなくなりました。現在、私たちの使用しているオムツカバー

が古くなって破れてきましたので新しいのを探しているのですが生ゴム製のが見当たらず困っております。アメゴムで体にぴったりと喰いつくようなオムツカバーを売っているお店があれば教えていただけませんか。それから、どなたか信頼のおける方にオムツについてのコーチをお願いできませんでしょうか。きっとオムツに興味をお持ちの方もたくさんいらっしゃると思うのですが、皆さんは毎日をどうお過ごしなのでしょう。

(兵庫県・金原町子)

# 本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少なものとありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送申し上げます。

|          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 昭和41年7月号 | 昭和40年8月号 | 昭和40年9月号 | 昭和40年10月号 | 昭和40年11月号 | 昭和40年12月号 | 昭和41年1月号 | 昭和41年2月号 | 昭和41年3月号 | 昭和41年4月号 | 昭和41年5月号 | 昭和41年6月号 | 昭和41年7月号 |
| (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円)  | (送共三二〇円)  | (送共三二〇円)  | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) |

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |  |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--|
| 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 | 昭和 |  |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|--|

|          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |          |          |          |           |           |           |          |        |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|--------|
| 昭和44年3月号 | 昭和44年4月号 | 昭和44年5月号 | 昭和44年6月号 | 昭和44年7月号 | 昭和44年8月号 | 昭和44年9月号 | 昭和44年10月号 | 昭和44年11月号 | 昭和44年12月号 | 昭和45年1月号 | 昭和45年2月号 | 昭和45年3月号 | 昭和45年4月号 | 昭和45年5月号 | 昭和45年6月号 | 昭和45年7月号 | 昭和45年8月号 | 昭和45年9月号 | 昭和45年10月号 | 昭和45年11月号 | 昭和45年12月号 | 昭和46年1月号 | 昭和46年2月号 | 昭和46年3月号 | 昭和46年4月号 | 昭和46年5月号 | 昭和46年6月号 | 昭和46年7月号 | 昭和46年8月号 | 昭和46年9月号 | 昭和46年10月号 | 昭和46年11月号 | 昭和46年12月号 | 昭和47年1月号 | 昭和47年2月号 | 昭和47年3月号 | 昭和47年4月号 | 昭和47年5月号 | 昭和47年6月号 | 昭和47年7月号 | 昭和47年8月号 | 昭和47年9月号 | 昭和47年10月号 | 昭和47年11月号 | 昭和47年12月号 | 昭和48年1月号 | 昭和48年2月号 | 昭和48年3月号 | 昭和48年4月号 | 昭和48年5月号 | 昭和48年6月号 | 昭和48年7月号 | 昭和48年8月号 | 昭和48年9月号 | 昭和48年10月号 | 昭和48年11月号 | 昭和48年12月号 | 昭和49年1月号 | 昭和49年2月号 | 昭和49年3月号 | 昭和49年4月号 | 昭和49年5月号 | 昭和49年6月号 | 昭和49年7月号 | 昭和49年8月号 | 昭和49年9月号 | 昭和49年10月号 | 昭和49年11月号 | 昭和49年12月号 | 昭和50年1月号 | 昭和50年2月号 | 昭和50年3月号 | 昭和50年4月号 | 昭和50年5月号 | 昭和50年6月号 | 昭和50年7月号 | 昭和50年8月号 | 昭和50年9月号 | 昭和50年10月号 | 昭和50年11月号 | 昭和50年12月号 | 昭和51年1月号 | 昭和51年2月号 | 昭和51年3月号 | 昭和51年4月号 | 昭和51年5月号 | 昭和51年6月号 | 昭和51年7月号 | 昭和51年8月号 | 昭和51年9月号 | 昭和51年10月号 | 昭和51年11月号 | 昭和51年12月号 | 昭和52年1月号 | 昭和52年2月号 | 昭和52年3月号 | 昭和52年4月号 | 昭和52年5月号 | 昭和52年6月号 | 昭和52年7月号 | 昭和52年8月号 | 昭和52年9月号 | 昭和52年10月号 | 昭和52年11月号 | 昭和52年12月号 | 昭和53年1月号 | 昭和53年2月号 | 昭和53年3月号 | 昭和53年4月号 | 昭和53年5月号 | 昭和53年6月号 | 昭和53年7月号 | 昭和53年8月号 | 昭和53年9月号 | 昭和53年10月号 | 昭和53年11月号 | 昭和53年12月号 | 昭和54年1月号 | 昭和54年2月号 | 昭和54年3月号 | 昭和54年4月号 | 昭和54年5月号 | 昭和54年6月号 | 昭和54年7月号 | 昭和54年8月号 | 昭和54年9月号 | 昭和54年10月号 | 昭和54年11月号 | 昭和54年12月号 | 昭和55年1月号 | 昭和55年2月号 | 昭和55年3月号 | 昭和55年4月号 | 昭和55年5月号 | 昭和55年6月号 | 昭和55年7月号 | 昭和55年8月号 | 昭和55年9月号 | 昭和55年10月号 | 昭和55年11月号 | 昭和55年12月号 | 昭和56年1月号 | 昭和56年2月号 | 昭和56年3月号 | 昭和56年4月号 | 昭和56年5月号 | 昭和56年6月号 | 昭和56年7月号 | 昭和56年8月号 | 昭和56年9月号 | 昭和56年10月号 | 昭和56年11月号 | 昭和56年12月号 | 昭和57年1月号 | 昭和57年2月号 | 昭和57年3月号 | 昭和57年4月号 | 昭和57年5月号 | 昭和57年6月号 | 昭和57年7月号 | 昭和57年8月号 | 昭和57年9月号 | 昭和57年10月号 | 昭和57年11月号 | 昭和57年12月号 | 昭和58年1月号 | 昭和58年2月号 | 昭和58年3月号 | 昭和58年4月号 | 昭和58年5月号 | 昭和58年6月号 | 昭和58年7月号 | 昭和58年8月号 | 昭和58年9月号 | 昭和58年10月号 | 昭和58年11月号 | 昭和58年12月号 | 昭和59年1月号 | 昭和59年2月号 | 昭和59年3月号 | 昭和59年4月号 | 昭和59年5月号 | 昭和59年6月号 | 昭和59年7月号 | 昭和59年8月号 | 昭和59年9月号 | 昭和59年10月号 | 昭和59年11月号 | 昭和59年12月号 | 昭和60年1月号 | 昭和60年2月号 | 昭和60年3月号 | 昭和60年4月号 | 昭和60年5月号 | 昭和60年6月号 | 昭和60年7月号 | 昭和60年8月号 | 昭和60年9月号 | 昭和60年10月号 | 昭和60年11月号 | 昭和60年12月号 | 昭和61年1月号 | 昭和61年2月号 | 昭和61年3月号 | 昭和61年4月号 | 昭和61年5月号 | 昭和61年6月号 | 昭和61年7月号 | 昭和61年8月号 | 昭和61年9月号 | 昭和61年10月号 | 昭和61年11月号 | 昭和61年12月号 | 昭和62年1月号 | 昭和62年2月号 | 昭和62年3月号 | 昭和62年4月号 | 昭和62年5月号 | 昭和62年6月号 | 昭和62年7月号 | 昭和62年8月号 | 昭和62年9月号 | 昭和62年10月号 | 昭和62年11月号 | 昭和62年12月号 | 昭和63年1月号 | 昭和63年2月号 | 昭和63年3月号 | 昭和63年4月号 | 昭和63年5月号 | 昭和63年6月号 | 昭和63年7月号 | 昭和63年8月号 | 昭和63年9月号 | 昭和63年10月号 | 昭和63年11月号 | 昭和63年12月号 | 昭和64年1月号 | 昭和64年2月号 | 昭和64年3月号 | 昭和64年4月号 | 昭和64年5月号 | 昭和64年6月号 | 昭和64年7月号 | 昭和64年8月号 | 昭和64年9月号 | 昭和64年10月号 | 昭和64年11月号 | 昭和64年12月号 | 昭和65年1月号 | 昭和65年2月号 | 昭和65年3月号 | 昭和65年4月号 | 昭和65年5月号 | 昭和65年6月号 | 昭和65年7月号 | 昭和65年8月号 | 昭和65年9月号 | 昭和65年10月号 | 昭和65年11月号 | 昭和65年12月号 | 昭和66年1月号 | 昭和66年2 |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|--------|



# 編集後記

○塚本鉄三氏のレンズを通して、碧眼の妖艶美を鑑賞させて貰える機会をもたせてくれたり、華麗なる宴を肚つもりしていられたらしい辻村隆氏に、案外の肩すかしを味あわせ一幕を生み出した万国博も、わやわやとカシマシイ裡にあと数日で「サヨウナラ、サヨウナラ……」というところらしいです。なにかと話題もあつたようですが、子供のお供をした筆者には、いわれているところの「残酷博」が実感を以て領けたものでした。

○選ばれた美女揃いのエキスポ・フラワー達が、さぞ疲れるであろうに微笑を忘れず、同じ説明を繰り返すロボット化はビジネスとして珍らしくないとしても、入場料を支払った

## 懸賞原稿募集

### 体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられ、た事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

### 創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

同年輩の娘さん達が、敗戦時の外地居留民の收容所行よろしく老若男女に混って、ガードマンに監視される恰好の行列で炎天下の数時間、妄想をかきたてられたものです。

○ゴッタ返すパピリオン内部、特に押し合いへし合いせざるを得ない月の石の前で、米人ホステスに話しかけたいばかりに頑張り、ケースが光ってクロクロ見えもしない小さな塊りをさも感じ入ったように見上げる男に、ギョウギウウ押しつけられて揉みくちゃにされ、それでも目的を果したように明るく笑い合っていた娘さんを見て、その心情にMを連想したのは意識過剰というものでしょうか。いずれにしても、EXPO'70はサディステックであつたと思いますが、どうでしょう。

発表作品に限ります。これはとて思ふ作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万元返贈呈。

### 感想、論評、批判

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

### 映画、雑誌、通信

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

☆ 本誌御購読の葉 ☆

予約に限り  
一月分(1冊)三五〇円△送20円△  
三月分(3冊)一〇五〇円△送共△  
半年分(6冊)二一〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円  
十一月号 (第二十四巻第十二号)  
昭和四十五年十一月二十日 印刷  
昭和四十五年十一月一日 発行

郵便番号558  
大阪府住吉郵便局私書函第四十一号  
発行所 暁出版株式会社  
編集人 杉原 虹児  
発行人 吉田 稔  
印刷人 北村 俊夫  
△振替口座大阪四二七八三番△  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四十二年四月二一日)  
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆  
○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうような充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しており、下す関係上、十八才未満の方には絶対販売下さないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。